

---

# 誰も知らない御伽話

walter

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

誰も知らない御伽話

### 【Nコード】

N5285I

### 【作者名】

Walter

### 【あらすじ】

舞台は御伽の世界。

この世界は人間と人間以外の「魔」が住んでいた。（おもに鬼など）そんな魔を退治して人を助けることが目標のお人よしの退魔師、坂田金太郎はある日旅に出る。その旅で出会ったのは超がつくほど現実主義の鬼の少年（背にコンプレックスあり）愚民とか普通に言っちゃわがままな月のお姫様（死にません）顔と性格が一致しない海の底の少年漁師（年齢40歳、見た目10歳）

そして話の成り行きで向かうのは、鬼ヶ島に住んでる規格外の桃太郎！

そんな愉快でファンタジーな御伽話！

桃太郎を倒した後もまだ継続中です。

## 序章：始まり

ここは御伽の国。人間と人間以外の〈魔〉が住んでいる世界。

この世界には人間と、〈魔〉が争いを続けていました。

しかし12年前、桃太郎と呼ばれる一人の子どもの手によって、この世界の魔の象徴といわる〈鬼〉が倒されました。

さて天敵がいなくなった人間はどうなったのでしょうか？

人間はこの世界の自然から与えられる〈魔力〉と、人間の知恵が生み出した新たな力〈科学〉を組み合わせ〈魔道科学〉といわれる力を生み出しました。魔道科学は人間に文化と、栄華と、そして時には貧困をもたらしました。

その貧困が人々を争いに導き、今度は人間同士で争うようになるとは下手なジョークにもならない、皮肉なものでした。

所変わって、ここは人里離れた山奥。ここには人々を守るために存在しているある退魔師の一族がいました。その名は坂田さかた一族。雷を扱うことに長けているこの一族から、今日、一人前と認められ旅立つ少年がいました。

「それでは行つてきます、姉さん……」

その少年の名前は坂田金太郎さかたぎんたろう。坂田直系の次男坊である彼の容姿は金色に輝く髪と空のように深い碧色の両眼。

この国人間のほとんどは黒髪である。

そんな普通の人間とは一風変わった彼の容姿は人を引き付ける何かがあった。そんな彼、金太郎は本日めでたく18歳の誕生日を迎え、その若さで免許皆伝、すなわち一人前と認められたのである。

「いつてらっしゃい……金ちゃん。気をつけてね」

金太郎の目の前に立っている黒髪の美しい女性は金太郎の姉、蓮華れんげである。

思えば母親のいない金太郎にとって、蓮華は本当に母親のような存在だった。父親や兄の訓練の後、あまりの厳しさに泣いてしまった幼いころの金太郎を抱きしめてくれたのは、この姉だった。今までこの人のおかげで生きて来れた、と言っても過言ではない。そんな姉とお別れになると、何か熱いものが内からこみ上げてきた。

「ああ、それと……これはお父様から送られてきたの」「親父から？」

蓮華から渡されたくそれくを覆っている布を取ると、一つの槍斧があった。刃の部分にはなにやら魔力によって刻まれた文字が彫っており、一目でくそれくは手の込んだものと分かった。金太郎はその姿を見て、ただただ感嘆とするしかなかった。

「すごい……」

「その武器の名はく紫電く。あなた専用で作られた武器です」

「俺専用に？ これを、親父から……？」

今日旅立つというのに、父は見送りに来てくれなかった。それは当然、父は坂田家の主だから。それはわかっていたので悲しみは少しあるものの納得していた。納得しようとしていた。

厳格で厳しい父親。金太郎は父のことは少し苦手だった。

だけでも今日、この武器を受け取ってそんな気持ちは払拭された。父はちゃんと自分を見ていてくれたのだ。その証拠に魔力に書かれた魔道文字の中に紛れて、こんな言葉が

「好きに暴れまわってこい」……と。

「親父……」

金太郎は父親なりの愛に触れて少し泣きそうになるが、こらえた。ここで泣いては一人前の名が廢る。金太郎はかぶっていた帽子を深く被りなおした。

「では、改めて行ってまいります！」

「いつてらっしゃい！」

金太郎は紫電を背中に負って、まず町に向かっていった。

またまた所変わって、ここは鬼の山。鬼の山とはかつて鬼ヶ島で栄華を極めていた鬼たちが、桃太郎の手によつて、追い出され流れ着いた新たな鬼の住み家である。先ほどの坂田の山とはうつつ変つて、鬱蒼と木は生い茂り、人の気配もなく気味悪いほど静まり返っていた。

その山の頂上で生き残った鬼たちが集まっていた。

「1、2、たくさん……長老、多分全員集まりましたよ！」

「たくさんって……まあ良い。この集会にも来れないようなやつに

この仕事は任せれんからの。栄鬼えいき、マイクとつてくれ」

「はっ、ここに」

「よし、あー、あー、皆聞こえるかの？」

集まった鬼の数、100以上。そのそれぞれが人間とは比べ物にならない程の魔力を保有しており、この数で攻めれば、おそらく小さな国なら一晩でおちるだろう。

しかし、今の鬼の敵は国ではなく、それよりはるかに小さく、それでいて規格外に強いたった一人の人間であった。

マイクを握った一人の鬼の老人が前に立ち、静かに話し始めた。

「今日皆に集まってもらったのは他でもない。我ら鬼の行く末のことじゃ。」

「長老、このままではだめなんですか？」

「うむ、幽鬼ゆうき。お主はここ最近、どれだけの数の鬼が死んだと思う？」

「えっ！？た、たくさん？」

「そうじゃ、沢山じゃ。多くの鬼たちが人間の手によって殺されておる。人間は我々からしてみれば塵同然。しかし塵も積もれば山となる。一対多数に攻撃を仕掛けられ、今月の死者数は過去最大。これは由々しき事態なのじゃ！」

皆、長老の方をしつかり見て、話を聞いている。長老は一息呼吸を吐いてからしゃべり始めた。

「死亡者の8割が力のない子供。このままでは我ら鬼の一族は後継者不足で壊滅されてしまっだろう」

「そんな……それでは、我らはどうすれば!？」

「うむ、我ら長達も被害を最小限に抑えるために最善を務めてきた。しかしそれも時間の問題。このままでは確実に滅ぶだろう！そこ

でじゃ、お主ら若い者の力を借りたい！」

あたりにざわめきが走る。誰もが嫌な予感がして、さらにその予感  
は見事的中した。

「誰か鬼ヶ島へ行き、桃太郎を倒して我々の桃源郷を取り戻してく  
れないか!？」

今まで誰もが長老のほうを見ていたのに、今では誰も見ていない。  
自分は関係ない、誰かがやってくれる、と言わんばかりに……  
ここで長老は頭を下げる。

「頼む! この通りじゃ! あそこさえ取り戻せばあとは何とか  
なる! 頼む、皆!！」

一瞬の静寂、それは、まるで永遠のようだった。長老 名を  
鬼珠きしゆという は落胆し、絶望さえ感じた。

これがかつて最強と呼ばれた鬼の様なまのか?

誇りある鬼の姿はどこへ消えた?

こんな様を見たら酒しゆ? や茨木いばはどう思っおもつのだろうか?

鬼珠はかつての友人を思い出しながら、絶望に打ちひしがれている  
と、群衆の中から一筋の希望の光が舞い込んだ。

「ハイ。私がやります!」

「む!?! どこじゃ、その者は!?! 立ってその姿を見せよ!?!」



一人、手をあげた少年は立ってみせる。しかし鬼珠の目にはその姿は映らなかった。

「ん？ どこじゃ？ 儂には見えぬぞ」

「ここです！ ここ！！ 目の前にいます！！」

灯台もと暗し。意外にも手を挙げたその少年は鬼珠の目の前にいた。鬼の平均身長は2メートル。対してその少年はせいぜい1.5メートルくらいしかない。もしくはそれ以下かもしれない。鬼珠はその姿を見ると顔に驚愕の表情を浮かべた。

「お、お主は！」

その少年は年齢15歳くらい。他の鬼たちと同じように金色の2本の角を生やしている。しかしその少年の眼は他の赤色とは違い、紫色。髪の色は黒で男にしては長い髪を一本に結んでいた。

「その役、長老の弟子、鬼丸童子おにまるごうじが果たしましょう」

この二人の少年、坂田金太郎と鬼丸童子は一見何も関わりのないさそうなのだが世界とは不思議なもの。彼らはすぐに出会い、彼らの物語は交錯します。

これはそんな彼らの旅の御伽話です。それでは、始まり、始まり……。

## 序章：始まり（後書き）

初めまして。waiterです。

今日から小説を書くことと思い立った新人です。初心者です。

なので小説を書くなんてことは全くしてきてないので、表現が甘いところや、誤字脱字は大量にあると思います。そういうところがありませんでしたら遠慮なく感想をください。

……でもあんまり強く言われるとガラスのハートなので、潰れてしまつかもしれません（笑）

更新は週1を目指したいと思います。しかし自分は学生の身。おそらくペースを守れないときがあると思いますが、そこはご容赦してください。

どうかして完結させたいので、アドバイスをドンドンください。よろしく願います。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

## 第一章・第一話：退魔師、坂田金太郎

「はあ……はあ……」

1人の金髪の少年が森の中を走っている。彼の名前は坂田金太郎<sup>さかたきんたろう</sup>。魔を退治する退魔師の家系に生まれた彼は本日めでたく18歳の誕生日を迎え、異例の若さで免許皆伝、つまり一人前と認められたのである。

そして一人前の退魔師と認められると一人で世界を旅をする、という坂田家の古い習慣にのっとり金太郎も旅することになった。しかし……

「ほぐら、少年、楽に殺してあげるから待ちなさい！」

「誰が待つかあああ！」

金太郎は何故か追いかけていた。刃物を持った物騒な女に。彼は一旦物陰に身をひそめ、状況を理解しようとする。

（くそっ！　なんで俺が追われなくちゃならないんだ？　俺は何にもやっっちゃいないぞ。ていうか、あいつらは誰だよ？　なんかいきなり、死んで、とか言われるとか意味わかんねえよ！　俺が追われる理由……確か朝は町で……何したっけ？）

金太郎は町の朝市に来て、食料を確保していた。一通り買い終えた

ところで、声をかけられた。

「あの……ちょっといいですか？」

「はい。何でしょう？」

金太郎は振り返り、声のした方を見る。20歳ぐらいの女性が立っていた。

「あの……あなた坂田金太郎さんですよ？」

「はい。そうですけど……」

なぜ自分の名前を知っているだろうか？金太郎は疑問に思うが、そのまま女性の話に耳を傾ける。

「よかった。間違っていたらどうしようかな、と思っていたんですよ」

「それで俺に何か用ですか？」

「ええ……あなたにしか頼めなくて……」

女性の顔がほのかに紅潮している。金太郎はその顔を見て、思春期特有ともいえる妄想を抱くが、次にはそんなこと忘れていた。

「死んでください」

「えっ!？」

金太郎は何かを感じ、とつさにその場から離れる。その瞬間金太郎のもといいた場所に刃物が振り下ろされた。

「逃げないで下さいよ。楽に死なせてあげますから。」

「に、逃げるおおおおお!」

金太郎は女性に背を向け全速力で逃げる。

「まっつて」

女性は追いかけてくる。片手にナイフを持ちながら。このまま金太郎はいつの間にか森の中に入り、そして現在にいたる……。

(……何回考えても意味わかんね〜！)

「み〜つけた！」

「っ!?!?」

金太郎が考え込んでいると、敵に見つかってしまった。金太郎は上を向いた時にはもう敵の武器は振り上げられており、必死に避けようとする。

「ちっ」

「あら〜、よけられちゃった。面倒くさいんだから避けないでよ、まったく……」

「ちよつと待て！ 何で俺を殺そうとするんだよ？ 俺が何かやっただか？」

彼女は首を横に振る。

「じゃあなんで……」

「だって坂田家の直系が旅をするんだよ。こんなにいい賞金首はなかなかないよ。というかこの仕事を逃したら、賞金稼ぎの名前がすたるね！」

考えられない話ではなかった。退魔師は魔を退治するだけでなく、要人の護衛、一般人の救助、時には政府から暗殺の依頼が来ることもある。特に暗殺などは恨みを買うことが多く、それだけ退魔師に賞金をかけられる時がある。それが直系ならなおさら。金太郎自身は依頼を受けたわけではないが、父や兄への復讐、というのも考えられる。

金太郎は首筋に汗を垂らしながら、賞金稼ぎに問う。

「じゃああなたの名前を教えてくださいよ！」

「私の名前？ 私の名前は……」

賞金稼ぎはにたりと笑い、彼女の武器であろう片手剣を構える。

「今から死ぬ人間に教える必要があるの？」

殺し屋は一気に踏み込み、低い体勢で剣を構え、突っ込んでくる。金太郎は一瞬反応が遅れたが、紙一重でそれをかわす。退魔師として訓練してなければ死んでいただろう。金太郎は顔をしかめ、殺し屋は笑う。

「だから、避けないでよ。そんなに苦しんで死にたいの？」

「死にたかねえよ！ くそっ、逃げれると思っただけど無理そうだな……戦うしかないか。」

そうやって金太郎が取り出したのは、2メートルはありそうな槍の柄の両端に斧の刃がついた、いわゆる槍斧ハルバードと呼ばれるものだった。その大きさに殺し屋もさすがに驚きは隠せない。

「ほお、すごく大きいね。で、それを君は使えるのかな？」

「退魔師なめんじゃねえよ！ 行くぞ、紫電」

金太郎は自分の武器、紫電に魔力を込め始める。今日、旅の餞別として貰ったこの紫電。彼専用で作られたそれは、初めて使うのにも関わらず彼の手にしつかりとあっていた。

加えて父親が書いたであろうこの魔導文字のおかげで、重力半減、威力倍増、攻撃範囲増大、e t c …… 彼には坂田家の加護があるのも同然だった。

金太郎が魔力をため終えると、一気に賞金稼ぎに向かって駆け出す。彼の初手は、大きく振りかぶった縦の一閃。賞金稼ぎは、まだまだ甘い、とにやりと笑った。

斧という武器は攻撃範囲、威力は剣とは比べモノにならない。しかしその分隙ができるため、斧使いは中距離から攻撃を仕掛けるのが定石。それなのにこの小僧は愚かにも接近戦を、なおかつ大振りしてきたものだ。これでは攻撃をかわしてカウンターしてください、と言ってるようなもの。

殺し屋は横へと軽くかわし、カウンターを仕掛けようとした。が……

「うおおおおおおお！」

「……！？」

何回攻撃したところで隙など生まれない。むしろこちらの攻撃が読まれ、だんだんと追い詰められている。賞金稼ぎの頭では対処しきれなかった。

実際、金太郎は特別なことをしているわけではない。彼の有り余る魔力と筋力が、斧での接近戦を可能にし、剣並みに素早く振っているだけなのだ。

流石、といったところだろうか、退魔師直系の血は伊達ではない。

ガキンッ！！！！

遂に金太郎は敵の片手剣を弾いた。今度こそ全力で紫電を振りかぶる。

「これで最後だっ！」

「くっ……」

金太郎は自分の魔力を開放する。金太郎の魔力の属性は雷。魔術師以外の人間は魔力回路を一色しか持たないために、一色しか魔術を使えない。しかし今の金太郎にとってそれで十分。この18年間をかけて大成した雷の魔術は、魔術師にも匹敵する。紫電の刃の部分が金色に染まっていく。

「喰らえ！ 雷鳴怒涛！！」

金太郎が大きく振りかぶり一気に振り下ろす。これで勝負がついた……はずだった。

「何……！？」

突如、金太郎の前に魔法陣が現れる。それが光りだしたかと思うと、炎が現れ金太郎に襲いかかる。

「あちいいいいいい！」

魔術による炎は通常の炎の温度のおよそ数倍。金太郎は紫電で身をかばうが、その熱がさらに金太郎に襲い掛かる。紫電がなければ死んでいただろう。

それでも無傷と言うわけにはいかない。紫電を持っていた右手は焼かれ、その余波は右足にも及ぶ。動かそうとすれば、激痛が金太郎



を駆け巡った。

「魔法陣……仲間がいやがったのかよ！」

「ふう、助かったわ。ゼン」

「ふっ……お前にしてはひどくやられたじゃないか、コウ」

金太郎の目の前に、先ほどゼンと呼ばれたもう一人の仲間の魔術師であろう男が現れる。

魔法。自然から得られる＜魔力＞を人間が手にし、人間の想像力と知識によって完成された攻撃方法である。

まず自分の魔力を開放、そのあと術式を想像してから、魔力によって現実に創造する魔法は一見簡単に見えるが、実は天賦の才と厳しい訓練によって得られるものであり、それゆえ魔術師は退魔師に比べて数は少ないが圧倒的な魔法攻撃が特徴である。

その魔法をモロに喰らってしまった金太郎はとてでもないが動くことはできなかった。

コウと呼ばれた片手剣を持っている賞金稼ぎが金太郎の首筋に剣をあてる。

「やっと死ぬことができるね」

「ゲームオーバーだな」

「くそっ……」

金太郎はどうにかして動こうとするが、炎の魔道をモロに喰らってしまったので動く力はもう残されていなかった。

「じゃあ……バイバイ。」

剣が下されるまさにその時に、殺し屋の腕が何かに打ち抜かれる。

「な、何？ いったいどこから？」  
「ここからですよ。殺し屋さん」

金太郎と殺し屋の間に割って入ってきたのは、一人の少年。少年にしては長い髪を一本にまとめている。そして金太郎と比べてかなり……小さい。

「人間というのはこんなに醜いものか？ 己の欲望のために同族を殺す……くくっ、何とも恐ろしいことですね」

彼の持っている二つの紫色の強い意志をもった眼は金太郎に強く印象付けた。しかしそれ以上にもっと印象的なものがあつた。

「金色の角……だと」

「何故鬼がこんなところに……」

「何故？ それはおかしな質問です。もともと山というのは魔の住処。それを犯したのはあなた達人間でしょう」

彼の頭部には鬼の象徴である2本の金色の角が輝いていた。それは何故か金太郎の目に焼き付いて離れない。

「本来、私はこういうことはしないのですが……特別にあなたを助けて差し上げましょう、金髪」

「き、金髪!？」

「鬼の末裔、鬼丸童子。ここに参上しました」

これが金太郎と鬼丸が出会った瞬間であつた。

## 第一章・第二話：鬼の末裔、鬼丸童子

鬼丸がその少年を見たのは偶然だった。

「ふう。やっと人の里につきましたか……思ったより遠かったですね」

鬼丸は鬼ノ山で宿敵・桃太郎を倒すべく遙かなたの鬼ヶ島への旅をしている。その道中でこの町に訪れたのである。

鬼丸は休憩がてら、木の上から人間の町という物を見下ろすことにした。

見下ろすこと数分、一人のおばあさんが歩いてきた。おばあさんは大きな荷物を抱えておりとても辛そうだ。

しかし行きかう者たちは、その光景に気づかないものや気づいても無視する人間ばかりであった。

「これだから人間というものは……。同族のご老体が困っていても無視か。醜いものだな……」

鬼丸ははつきり言って人間というものが嫌いだった。大嫌いだった。人間ほど自分勝手な生き物はいない、そう鬼丸は思っている。自分の欲のためにこの世界の自然の均衡を壊す、汚す、潰す……。鬼ヶ島が桃太郎の手によって落ちたのがその証拠。こちらが何もやっつけないのに関わらず、自分のために攻撃してきた。

そして今度は自分の同族まで殺そうとしている。ここまで醜い種族はかつて存在しただろうか……。

鬼丸がもう去ろうとしたその時、一人の少年の声がした。

「あつと！ おばあちゃん。大丈夫ですか？ 俺が運びますよ」  
「ああ……坊や。すまないねえ……」

一人の少年が先ほどの老人を助けたのだ、笑いながら。

その少年はこのあたりでは見かけない金髪碧眼。鬼丸より少し年上だろうか、大人びて見えるもののまだ顔に幼さが残っている。……  
肝心の身長はかなり違った。

「ほう……」

鬼丸はその少年に興味を持った。

なんてことはない、ただの少年にだ。確かにこの少年がやったことは褒められるべきこと。しかしこのぐらいのことをする人間は世の中にはたくさんいるだろう。しかし鬼丸は何故かその少年に興味を持った。

何故だろう、鬼丸はそんな奇妙な感覚を感じながら、とりあえずその少年を追ってみることにした。

少年は旅人なのだろうか、たくさん食料を買っている。そういえば自分はお金持っていなかったな、と思いながら見ていると女性が少年に話しかけてきた。

……どうやらその少年の名前は坂田金太郎、というらしい。何故女性少年の名前を知っているのだろう、と思いつつ見ていると、いきなり女は片手剣を持って金太郎に襲いかかった。

流石の鬼丸も身を乗り出した。そして少年と片手剣の女の恐ろしい鬼ごっこが始まったのを見ると、鬼丸も急いでそれを追いかけた。何やら不気味な男が術を唱えているのを視界の端に捉えながら。

鬼丸が追いついた時には既に勝負は喫していた。どうやら先程の怪しげな男が魔法を使っただけらしい。

まあ、あの若さで魔術師が来るまで自分より格上の相手と戦えたのは上出来という方が。

……さて、どうするべきか、鬼丸は自分の頭の中で議論していた。

このままここにいても何も無い。あるのは盗賊と思われる奴らに見つかり、自分も追われる危険だけだ。万が一、追いかけても逃げ切る自信はあるのだが。

ただここに突っ立っているのはよろしくない。ならば二つに一つ、あの少年を助けるかどうか。まず一つ、あの少年と自分は何も接点はない。赤の他人だ。知りもしない人間を助ける必要があるだろうか。それにあれば人間、自分が最も嫌う人間なのだ。何より面倒事は御免だ。

鬼丸は木の上で腕を組み考えた末、結論を出した。

「助ける、か……」

鬼丸はそう呟いた後、あいさつ代わりにそこらに落ちている石を投げつけ自分もそれに続くように飛び降りた。

決して合理的ではないと鬼丸自身も分かっている。あの少年を助けるようにするならば2人を相手にしなければならぬし、助けたとしても鬼丸には何の利益もない。

でも鬼丸は何となくあの少年を助けたと思った。そう、何となくだ。何となくご老人を助ける人間の少年もいるのだから、何となくその少年を助ける鬼の少年もいてもいいではないか、鬼丸はそう思いながら戦いの場に降り立った。

「鬼……」

「何故、鬼がこんな場所に……」

「その外野、うるさいですよ。そして、その金髪、いい加減立ちなさい！」

金太郎の頭は目の前の状況についていけてなかった。とどめを刺されそうになったら、突然何か落ちてきて、そしてそれが鬼で。で、開口一言目で俺を助けてくれる、らしい。ようやく整理がついて金太郎は目の前の鬼に言うべきことが分かった。

「誰が金髪じゃ、ボケ！俺には親から頂いた坂田金太郎っていう立派な名前があるんじゃない！」

「……そこですか？もつと言うべきことがあるんじゃないですか？」

金太郎はやはりまだ状況がつかめていないらしい。そしてようやくハツと気づいた表情になる。

「て言うか、お前誰だよ！？」

「ようやくそこですか……私の名前は鬼丸童子。先ほど言った通り、そして見た通り鬼です。」

「鬼……」

鬼という種族は今や古参の退魔師でも見かけたものは少ないである。その鬼が金太郎の目の前にいるのだ。恐怖云々より関心の方が

湧いてしまっ。

「何で俺を助けてくれるんだ？ 俺、何かしたか？」

「……何となくです」

今まではっきりとしていた鬼丸の口調が急にぼそぼそとした声になる。

「ん？」

「だから何となくです！ 本来ならばこんなことしないのですが特別ですよ」

「キイイエEEEEEEEE！」

『！？』

今まで沈黙を保っていた盗賊のうちの一人、ゼンが襲い掛かってくる。女とは思えないすさまじい形相だ。

「とりあえず二人とも死ぬ、でOK？」

「はあ？ NOに決まっているでしょ。馬鹿ですか、あなた」

鬼丸は片手で剣を受け止める。当然と言えば、当然。彼は鬼なのだ。退魔の術がかけられていない武器では彼の皮膚を傷つけることもできないし貫くこともできない。

引いても押ししてもびくともしない剣にゼンは苛立ちを隠せない。

「で、どうするんですか？ 助けてほしいんですか、ほしくないんですか？ どっち！？」

鬼丸は剣をつかんだまま金太郎の方を向く。あまりの異様さに、そして何故か早口になっている鬼丸に金太郎は圧倒されてしまっ。

「えっ……じゃあ、助けてほしいです」  
「よし！」

鬼丸は金太郎の了承を得ると、剣を取られて身動きができないゼンの横腹に蹴りをいれる。ゼンが苦悶の表情を浮かべ、膝をつくとその膝を払い相手を倒す。そして倒れているところに思いっきり足を振り上げ蹴飛ばす。ゼンはまるでサッカーボールのように飛んで行き、そこらにあつた岩でようやく止まった。見ればぐったりとしていて白目をむいている。

「うわ……」

あまりに見事で、そして敵とはいえども同情してしまうような蹴りであつた。

「さて、敵はあと一人いましたね。どこですか？」

そんなことお構いなしのような表情の鬼丸はあと一人のコウと呼ばれた魔術師の方を探す。するといつの間にかコウの前には先ほどと同じ魔法陣が浮かんでいた。

「……我が左手に宿りし力は炎……」

「おい！ どうすんだよ。またあいつ、式を用意しているぞ！」

「大丈夫です。こちらにも飛び道具くらいあります。」

そう言つて鬼が懐から取り出したのは、一丁の拳銃。それも最近開発された、対魔用の“デザートイーグル”と呼ばれるものだった。鬼丸はそれを構え、3発放つ。それは全て準備中の式に命中するが当たっただけだった。



「……その炎は全てを焼き尽くす……」  
「うん……やはり無理ですか。ならば魔力を使いましょう。」  
「何!?!」

鬼が再びデザートイーグルを構えると、デザートイーグルを中心に魔力が集まっていく。それは誰でもわかるほどはつきりしたもので次第に膨大なものへと変わっていく。

魔力の充電が済んだところで鬼は再び3回、引き金を引く。今度は実弾ではなく、魔力を帯びた金色の銃弾が放たれた。

一発目、先ほどの実弾の時とは違いたしかに手ごたえが感じられる。

二発目、命中した時にほんのわずかだが式にひびが入った。

三発目、式はもう完成し光り始めているが、その前に弾が当たり・

・

「焼き尽くせ、焦熱!」

パリン!

「ば、馬鹿な!?!」

ついに魔法陣を打ち抜いたのであった。

「ふふっ、これで勝負はつきましたね。式を作るには時間がかかる。デザートイーグルはいつでも使える。今なら見逃しますから早く逃げてください。」

「……」

勝負は完全についたように思われた。

「す、すげえ……」



「あつ、やばつ……」  
「死ね、鬼の小僧！！」  
「らいでん雷電」  
「っ！」

白色の雷撃が鬼丸に直撃した。

## 第一章・第三話：旅立ち

「喰らえ、雷電！」

「っ！」

青白い稲妻が鬼丸に直撃する。

かなりの至近距離で撃たれたのだ。鬼丸の皮膚は見るも無残な様になっっており、焼けただれている。

金太郎はすぐさま駆け寄る。

「鬼……お、おい！ 大丈夫か!？」

「うっさいですね……私には鬼丸童子っていう名前があるんです。鬼っていう名前じゃありません」

鬼丸はそう強がって見せる。が、実際には防いだことによつて腕が焼け、その余波で鬼丸の本体もあちこちに火傷を負っていた。コレが魔術の力かと思うと、金太郎は血の気が引いた。

もちろん、そんなことを構うことなく魔術師は次の式を準備し始めていた。

「我が左手に宿りし力は雷……」

「その雷は全てを薙ぎ払う……」

「くっ……これはチエックメイトかもしれませぬ……」

「鬼……丸……」

魔術師の左手は光に満たされた。もう先ほどと同じ雷を放つばかりである。

「くっはっはっは！ おしかったな、小僧ども！」

「うっさいですね。私はこれでも15歳ですよ。もう大人なんです」  
「フフフ……その減らず口も二度と聞けなくしてやる。薙ぎ払え、  
雷電……！」

鬼丸の視界が青白い稲妻で覆われる。と同時に黒い影がよぎる。

「あ、あなた、何故？」

金太郎だった。鬼は驚いて金太郎に問いかける。鬼丸が先ほどよりもっと首をかしげていると金太郎が答える。

「……俺だってなあ、俺だってなあ！ 人を助ける退魔師なんだよ  
……！」

どうして走り出したのかは金太郎自身でもわからない。相手が弱っている今の状態なら走り出して逃げれば助かるだろう。それにこの鬼を助ける義理はない。  
でもそれは金太郎自身が許さなかった。

（自分だけ助かろうとしようとする？ 俺は退魔師だ。困っているやつがいるならそいつを助ける。目の前のことに集中しろ！）  
「電磁制御……！」

金太郎が左手を前にかざすと、魔法陣の魔力が金太郎の手に吸い取られていく。

「な、何！？ 魔法陣が崩れていく……だと……！？」

金太郎の魔力は雷。そしてこの魔法陣の雷系の魔法だったために、

金太郎の魔力を使って自分の制御下に置いたのだ。次第に魔法陣の力はなくなり、ついには崩壊してしまった。鬼が金太郎にひとつ、問いかける。

「あなたひとつ言っておきますが……私は人ではなく鬼ですよ。」

「今はそんなこと関係ねえ！！ 目の前にいる奴を助ける！！ 俺が今決めた自分の信条だ！！」

「……」

鬼丸は顔をしかめる。極めて非論理的で合理的ではない、この行動は鬼丸がもつとも嫌いとするものであった。だが彼の顔には自分の気持ちに反して、喜びの表情があった。

「フルチャージ！ 雷鳴……」

「ま、待て！ 殺さないで……」

金太郎は左手に溜まっていた魔力を、紫電に込めると金色に輝きだす。

魔道師は命乞いをするが、それで止まる金太郎ではない。

「怒涛

！」

「ぐ、ぐわあああああああ！」

紫電から金色の刃が放たれ、魔道師の体を吹っ飛ばす。

金太郎自身手加減はしたはずなので、たぶん生きているだろう。…

…うん。多分……

金太郎が相手のことを心配していると、鬼が寄ってきた。

「助けたつもりが助けられてしまいましたね。ありがとうございます。す。」

「いや、こつちこそありがとな。お前のおかげでなにやりたいかはつきりしたわ。」

「へえ〜……………」

鬼丸の顔はどことなくうれしそうだ。

「もう日も沈みます。そろそろ私は行きます。では……………」

「待ってくれ！」

「む？ 何ですか。」

「お、俺を、なか、仲間にしてくれ！」

金太郎は勇気を振り絞り、言った。彼はこの戦いで鬼丸について行けばきつと何か得るものがある。そう思ったのだ。対する鬼丸は驚き開いた口もふさがらない様子だ。

「……………あなた、私の旅の目的知っているのですか？」

「いや全然。でもお前について行きたいん……………」

「……………私はこれから桃太郎退治に行くのですよ。」

「……………へっ!？」

日も沈みきつた夜の森で、空しく金太郎のマヌケな声が響いた。

桃太郎の生い立ちについてはこんな話が伝わっている。

昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは不況の煽りを受けて町に出稼ぎに、おばあさんは家計を助けるために町にパートに出かけました。

おじいさんは職安に行つて初心者歓迎、高収入の仕事を希望しましたが、当然そんな仕事もなくしょんぼりと帰っていると子供たちが桃の木の下でけんかしているのを見つけました。

けんか、と言つても1人の子供が他を圧倒し、フルボッコにしているだけでした。おじいさんは、これはいけない、と思い

「これこれ、弱いものいじめはいけないぞ。」

と、子供に近づいていくと、子供は何を思ったか、ためらいもなく殴つてきました。

ぱしっ！

おじいさんは難なくこれを受け止めた。

「……良い拳だ……餓鬼、名をなんと云う？」

「……」

「名がないのか？ ……では、わしがつけてやろう。おまえの名はこれより桃太郎！ 今日からわしの子じゃ！」

「……桃太郎？」

こうして“桃太郎”と名づけられた子供はおじいさんとおばあさんの子供になり、おじいさんの教育（修行とも言つ）とおばあさんの愛（強烈ビンタともという）を受けながらすくすくと育ちました。その後、紆余曲折を経て14歳となった桃太郎は、当時、「最凶」とよばれる「鬼」を倒すために鬼が島に向かいました。

「犬」「猿」「雉」と共に鬼を倒した桃太郎は、鬼が島を占領し、人々からは「英雄」と呼ばれるようになりました、とさ……



「まさかあの桃太郎退治に出かけることになるとは……」

「で、どうしますか？ 行くんですか？ 行かないんですか？」

鬼丸があきれた様子でこちらを見てくる。目的の確認、勢いだけの行動、すべてが鬼丸にとってありえなかった。それでもこの男が仲間になってくれたことは鬼丸にとって……

「行くに決まっているだろ！ 言ってしまった以上どこにでもお前について行くからな！ 男に二言はねえ！」

「それでは行きましようか、キンタ。」

「おう！」

とても嬉しくありがたいことだったに違いないであろう。

「……ってキンタって何だ？」

「あなたのあだ名です。き・ん・た・ろ・うは長いですからその省略です」

「勝手に決めんなよ！」

こうして金太郎と鬼丸の旅が始まるのであった。

## 第一章・第四話：そうだ！依頼を受けよう！

「キンタ、あなたお金持っていますか？」  
「あん？」

ある日の昼下がり、退魔師、坂田金太郎と鬼、鬼丸童子は鬼ヶ島の道中のある町を訪れていた。二人が桃太郎退治に出かけたのを決意したのは数日前、二人はだいぶお互いのことを知るようになっていた。

そして二人は丁度昼飯中。金太郎はパスタを、鬼丸はお茶を飲んでいた。

「ですからお金持っていますか？」

「ああ、たしか親父から貰っていた金はまだあつたは……ず……」

金太郎は懐を探すがそれらしきものは見つからない。途端に金太郎の顔が青ざめていく。

「な、ない……」

「ふむ、困りましたね。実は私も持ち合わせてないんですよ」

「えっ……じゃあどうすんだよ！俺達捕まっちゃうぞ！」

「……」

鬼丸が腕を組み何かを考えたかと思うと、突然立ち上がった。

「ああ！ あの人、食い逃げだ！」

「えっ！？」

鬼丸はわざとらしく声を上げ、指をさした。その指す方向には誰も

いないが、客の目を引き付けるには十分であった。

「今のうちに逃げますよ、キンタ！」

「おお！……って俺らが食い逃げじゃん！！」

「今はそんなこと言っていれますか？ 走りますよ」

「ちよつと待て！ 俺がそんなことできるか！ お前には罪悪感というものがないのか？」

「ないです、私、鬼ですから」

「んな理由が許されるか！？ ……って、だから逃げようとするなつて！」

「まあまあ、御二人さん」

金太郎が鬼丸を引き留めようと、ギャーギャー騒いでいると中年でビール腹……もとい体格の良い男性が話しかけてきた。

「後は店の奥で聞くから、ついてきてくれるかな？」

「ちっ……」

金太郎は鬼丸の舌打ちを無視して、着いて行った。

数十分後、無事(?) 帰してもらえた鬼丸と金太郎はある所に向かっていた。

「つたく……あなたのせいでとんだ借金を負いましたよ！ あのま  
ま逃げ切れたはずなのに……」

「警察に引き渡されなかつただけでも幸運と思えよ……」

結局あの後、金太郎と鬼丸は店の奥で店長に謝罪、それと請求書をもらい返してもらえた。本来は警察に引き渡しても良いのだが、二人ともまだ若いこと、それと鬼丸に代わって猛烈に謝罪する金太郎に免じて許してもらえた。

尚、当然のように鬼丸は今回のことを反省すらしていない。

「だいたいあの店長も“出世払い”ということで許してくれればいいのに……いまいち融通が利きませんね」

「どこの世界に出世する見込みのない奴に“出世払い”で許す奴がいるんだよ……。つたく、早くこの町の通商ギルドを探そうぜ」

さて、この世界にはたくさん国がある。

この御伽の国だけではなく、童話の国、不思議の国など、大小含めてたくさん国が存在している。

もちろん国家間で貿易をしており、この世界の経済システムが動き出した当初は順調であった。

しかし次第に国家が増えるにつれて、貿易数は激増。もはや国だけでは管理しきれなくなり初期の経済システムは破たん寸前まで追い込まれてしまった。

そこでその仲立ち役として当時のお偉いさんが作ったのがギルド。

国家の貿易を管理するだけではなく、この世界のありとあらゆる企業を取りまとめる存在として作られた。

ギルドによって商業は民間まで行き届いており、現在では人の労働力も取引している。所謂賞金稼ぎ。ギルドは依頼人と契約者の仲立ちをしスムーズに、依頼、受諾、そして報酬の受け渡しを行っている。

今、二人がギルドに向かっているのは賞金稼ぎのためである。基本的に依頼は誰でも受けることができる。

「ここが通商ギルドですか……」  
「でか……」

この町の通商ギルドの建物は大きく二人の前にそびえたっていた。鬼丸は迷わずに、金太郎は少し気合いを入れて入って行った。

「いらっしやい。依頼を受けたいのかい？」

建物に入ってまず一言目がそれ。建物の内部は人がいるせいか思ったより小さく感じる。酒場のような雰囲気、壁には大量の紙が貼ってあった。どうやら未処理の依頼らしい。

「どんな依頼がご希望かい？」

「ええ、1日で終わることができ、高報酬、なおかつ楽な仕事を希望しているのですが」

「そんな仕事あるわけないだろ……」

鬼丸の無理難題を聞いた瞬間、店員の目が一瞬輝いたように見えた。

「あるよ。楽で高報酬。さすがに1日では終わらないけどね」

「ほら、あるって……ってあんのかよ!？」

男性が机の中から一枚の紙を取り出し、鬼丸たちに見せる。

「何々……、最近、村に狼男が頻繁に出現するので倒してほしい。報酬は100万円……100万円!？」

この国の通貨の単位は円である。あまりの大金にキンタは驚きの声を上げる。

「ずいぶん大金ですね……で、依頼人の名前は？」

「ええっと……周っていう村のヨウタ、って書いてある。」

「ふむ、ではこの依頼にしますか」

「そうだな。おっさん、俺らこの依頼受けるぜ！」

「わかったよ。じゃあ向こう側に連絡しとくから、君たちは行ってもいいよ」

「おっしゃ！ 行くぞ、鬼丸！」

「ちよっと！ 少しは待ってくださいよ」

キンタが走り出し、鬼丸がそれを追いかける。こんなに人がいる中、走ればぶつかるのは必至。

案の定、鬼丸は入口付近で背の高い、白髪の男性にぶつかってしまった。

「ああ、すみません……」

「……別に構わない……」

白髪の男はそう言って、先ほど鬼丸たちがいた受付に向かった。鬼丸はしばらく、その男を見ていたが、キンタに呼ばれて急いで向かった。

「おい、松永さん。あんた、また新人をいじめただろ」

バーで酒を飲んでいた男が先ほどの受付の店員に声をかける。気軽に話しかけているところを見るとどうやら常連らしい。

「ん？ 何の事だい？」

「とぼけんじゃないよ。狼男の駆除って……どんだけ大変な仕事をまかせるんだい？」

受付は笑って答えた。

「はっはっは！ あんな生意気を言う新人には痛い目にあってもらわないといけないからね！ まあ、誰しも通る道さ」

実はこの受付 名を松永という かなりのやり手でこのギルドの

受付で、初めてギルドに来て依頼を受けようとする若者に無理難題の依頼を吹っ掛けることで有名で“初見殺し”というよく分からない二つ名まである。

当然、鬼丸たちはそんなこと知るはずもない。

「まあ、彼らならこの依頼でもできるんじゃないかな？」

「おや、どうしてそう思うんだい？ 松永さん」

客が顔を真っ赤にしながら聞く。

「ん、何となくダネ。強いて言うなら勘かな？」

「すまない……」

いつの間にか客が来ていたようだ。余程話に夢中になっていたのだろうか、まったく気配に気がつかなかった。

「やあ、依頼をうけたいのかい？」

「いや、依頼を願いたい……」

白髪の男はそう言って受付の椅子に座った。受付の男性はいつものことのように、依頼の申込用の紙を取り出した。

「それで、どんな依頼だい？」

「……先ほど居た少年たちを……殺してほしい」

「ふん、別にいいけどね……。ではココに依頼願いを。あんた名前は？」

「犬」

鬼丸たちの知らないところで、物語は静かに動き始めていた……

「キンタ、この依頼、本物でしょうか？」

「ああ？ どういうことだよ？」

二人で周の村に向かっていく途中、鬼丸がこんなことを口にした。前を進んでいたキンタが振り返る。

「狼男は魔の中でも中位の強さを誇るものです。決してゴブリンやスライムのみみたいに一撃で倒せるような雑魚ではない。それが何体も街に下りてくるとなると、それはギルドの賞金稼ぎではなく退魔師に依頼するべきだ……。それに100万という報酬も気になりません。こんな田舎にそんな大金が出せると思えますか？」

キンタは周りを見る。町にいたような人の活気さはなく、とても静かだ。そういえば、さっきから人に会ってない気がする……



「……ま、なんとかなるだろ！ とりあえず行こうぜ！」  
「そんな無計画な……」

キンタと鬼丸は再び歩き出した。

「ふう〜……やっと着いたな〜」

町を出てから数時間、鬼丸とキンタはようやく周の村にたどりついた。もう太陽は高く上っており日が照っていた。

「取りあえず依頼人に会いましょう。とつとつこの依頼を終わらせて、長閑に向かいますよ」

「そうだな。おつ、第一村人発見」

二人はこの村人らしきおばさんを見つけ駆け寄った。

「すみませ〜ん」

「ん？ あんたら、外から来たのかい？」

「ええ、まあ……」

「こんな田舎までよく来たね。いや〜、よく来たね。疲れているだろうから私の家に来なさい。おつ、あんた等よく見たらなかなか男前じゃないか。いや〜こんな“イケメン”が家に来てくれるなんて、私どうしましょう。あははは。いや〜、でもね、私の息子もあんたらくらいの“イケメン”だったのよ。ほほほ。今じゃあ、長閑の方に上京しちまって3年も会ってないけどあの子ならやっていけるだ

ろつよ。ああ、それとね……」

おばさんの話が止まらなくなってしまった。鬼丸とキンタは思わず顔が引きつる。

「……どうにかしてくださいよ、キンタ」

「ええ！？ 俺が！？ お前がどうにかしろよ」

「私は人間との会話に慣れていません。人間は人間同士、話し合ってくださいよ」

「ちっ、しょうがないな……あの、すみません。俺ら聞きたいことがあるんですよ。聞いていますか？ もしも〜し!？」

「それで、あそこのタイ焼きが……ああ、ごめんなさいね。つい自分の話にはいちゃって……それで何の用だったかしら？」

「この村に“ヨウタ”っていう人いますか？」

その瞬間、今まで笑顔だったおばさんの表情が無くなった。まるでその人物を軽蔑するような、そんな目だった。

突然の変化にキンタは戸惑いの表情を浮かべる。

「あんたら、ヨウタになんか用かい？」

「えっ……俺らその人から依頼受けてるんですけど……」

「依頼だって？ 本当にあの子はどうしようもないね。自分の嘘に他人を巻き込むなんて……」

『嘘!?!』

鬼丸たちが受けた最初の依頼はどうにも楽に終わりそうも無かった。

第一章・第五話：嘘の依頼？ …… 勘弁してくださいよ

「で、結局どうなったんだっけ？」

「あの女性の話を聞くとところによると、ヨウタという男は毎朝、狼男が出たと村中に大声で伝えるそうです。最初の方はみんな信じていたのですが、最近になってくるとみんな信じなくなってきて、嘘吐き、と呼ばれるようになったそうですよ」

「ふ〜ん……」

鬼丸とキンタは無事依頼人のヨウタという男がいる周の村に着くことができた。しかし村人の話を聞くと、そのヨウタは嘘をついており、狼男など存在しないという。疑問を浮かべながらもまずはその依頼人にあつてみよう、ということになった。

「しかし、何で嘘なんかつくんだろ？」

「人間なんてそんなものじゃないんですか？ 自分のため、享樂のため、そんな馬鹿馬鹿しい理由で嘘を平気でつくじゃないですか」

「……随分と棘がある言い方だな」

「まあ、鬼ですし……着きました。これが依頼人の家です」

鬼丸たちはいつの間にか依頼人の家に着いたようだ。キンタは一度深呼吸をして、その家のドアをノックする。

コン、コン

「はい」

がちや。返事と共にドアが開かれると、そこには10歳くらいの少年が立っていた。この国の人間特有の黒髪、大きく開かれた茶色の目が何とも愛らしかった。

「子供ガキですか……」  
「あの……どちら様ですか？」

少年は明らかに警戒しているようだ。キンタはなるべく怖がらせないように、笑顔に、自分ができる最高の愛想笑いで対応する。

「この家にヨウタっていう人、いるかな？」

「ヨウタは僕だけ……」

「えっ……こんなガキが？」

「ちよつと黙ってる、鬼丸……だったら、ヨウタ君。この依頼出したのは君かい？」

キンタがギルドの受付から貰った依頼書を見せる。するととたんに少年の顔が笑顔になっていった。

「オジサンたちが狼退治してくれるの!？」

「私がオジサン!？」

「……鬼丸、お前……だからちよつと家に入らせてもらっていいかな？」

「うん!」

少年は本当にうれしそうにうなずくと、家の中に入って行った。キンタがついていこうとすると、鬼丸がそれを止める。

「キンタ、この依頼はだめです。帰りましょう」

「はあ!？ 何言ってるんだ!？」

「いいですか。私は報酬がもらえるなら、依頼人が嘘つきでも構わないと思っていました。しかし相手は子供です。報酬は100万どころか一銭も貰えないかもしれませぬよ」

鬼丸のいうことは尤もであった。ギルド依頼人の中には精神が異常な者もいる。特に殺し屋を雇う者は、ならず者が総じて多い。その中にはとんでもない嘘つきがいても不思議ではないだろう。

しかし報酬が貰えないとなると話は別だ。それは重大な契約違反であり、裁判にかけられることもある。もちろん面倒くさいので、そんなことはしないが、報酬が貰えないとなると鬼丸にとっては死活問題だった。

しかし、金太郎は……

「それでも十分だ！」

「はあ？」

その常識をあつさり覆すような発言をした。

「報酬が貰えないなんて誰も言っていないだろ。誰がそんなこと決めた？ 俺はあの子はちゃんと報酬をくれると思うぜ。それにお前には悪いが、もし報酬をくれなくても俺は満足だ。あの子が困っているところを助けられたんだからな。俺はそれで十分だ！」

鬼丸は呆然として、キンタを見ていた。なぜか後ろには後光が差している気がする。鬼丸は思わずため息をついてしまった。

「……あなたは絶対将来損しますよ……」

「よく言われる。さあ行こうぜ！」

キンタは意気揚々に、鬼丸はこれからの将来を考え、もう一度溜息をつきながら、人選間違えたかな、とか思いつつヨウタの家に入って行った。

ヨウタの家は思ったより広く、物もそこまで多くなく閑散としていた。ヨウタはキッチンに立って、小さい自分の身長をフルに使って必死にお茶を入れようとしていた。

「何故ヨウタを見た後に、私を見るのですか、キンタ？」

「イエ、ベツニ……君の親はどこにいるんだい？ ヨウタ君」

「お母さんとお父さんはいないよ……」

「……？」

「お父さんはね、この町を守るハンターだったんだけどね、狼男に殺されてしまったの。お母さんも、ある日水を汲みに行っていたら、狼男にたべられちゃったんだって」

「……そうか……悪いことを」その話は本当ですか？ 少年「……つておい！」

キンタがヨウタに謝ろうと思っていた時、鬼丸が言葉をかぶせる。キンタが突っ込むが、鬼丸は関係ない、と言わんばかりにキンタを無視する。

「もう一度聞きます。その話は本当ですか？」

「う、うん。僕は嘘をつかないよ……」

「……まあ、最初から疑ってかかってもしかありませんか……座ってください。依頼の話をしましょう」

これじゃあどつちがこの家の主人かわからん、とキンタは言いたかったが、ぐっとこらえることにした。

ヨウタがお茶を入れることができ、3人はリビングの席についた。まず鬼丸がしゃべり始めた。

「では自己紹介しましょう。私の名前は鬼丸童子。旅人です。」

「俺の名前は坂田金太郎。今回君の依頼を受けることになった。よろしくね」

「僕の名前はヨウタ。よろしく、お願いします」

「では早速ですが、報酬のことなのですが……」

「そっからかい！　まずは狼男について聞くべきだろ！？」

「冗談です。では狼男について知っていることを全て話してください」

「う、うん。ええつとねえ……」

ヨウタが話す狼男の話をまとめると、以下のようになった。

ヨウタが毎朝6時に水を汲みに行くと、森の中で何かが動いたようだった。ヨウタは気になりそれを追っていくと、2、3人、人が集まっていた。その人たちは全員灰色の髪をしていた。ここまでは普通の人間なのだが彼らの頭部には、犬の耳のような物があり、なんと後ろには尻尾まである。

ヨウタは彼らが狼男であることを直感して逃げようとするが、小枝を踏みつけてしまった。狼男の一人がそれに気づき、獣のような金色の目でヨウタのいた方向を見た。

ヨウタは恐怖で失禁してしまいそうだったが、なんとか逃げ出して村中に知らせて回ったという……

「……それが一週間前に起こったことだよ。それから毎朝そこにいた狼男の中の1人は見かけるんだけど、誰も信じてくれなくて……」

鬼丸とキンタは黙ってその話を聞いていた。しかし同じ反応をとっていても、鬼丸とキンタは違うことを考えていた。

「俺は信じるよ」

「っ！　ほんと！？　お兄ちゃん」

「キンタはお兄ちゃん、私はおじちゃんですか……」

「ちょっと黙ってるや……俺は君を信じるよ。信じられなきゃ、何も始まんないもん。明日の朝、俺達もついて行くよ。そこで狼男を退治してやる!」

「ありがとう! お兄ちゃん!」

ヨウタが初めて年相応の笑顔を見せる。しかし依然として鬼丸の表情は、何かを考えているようだった。

「鬼丸も行くよな!」

「あつ……ええ、まあ……」

「よし、じゃあ明日終わらせよう。ヨウタ、この村にどっか泊まれる所あるか? 俺らこの村に来たばっかだから分からのよ。」

「じゃあ僕の家泊まっていてよ。僕以外に誰もいないし」

「ほんとか? ありがとうな」

「うん。僕布団用意してくるね!」

パタパタと音を立てながらヨウタは部屋から出て行った。こころなしかともうれしそうに見えた。

キンタは隣の鬼丸に話しかける。

「……まだあの子の事、疑っているのか?」

「半分です」

「はあ?」

「ですから半分です。あの子の話が信じられるのは」

「……どうということだよ? あの子は狼男を見てないって思っているのか?」

鬼丸はカップに注がれたお茶に一回口をつけるとそれをテーブルに置いた。そのあとキンタの方に向いた。



「まず、あの子が狼男を見たということは事実です。灰色の髪、狼のような耳と尻尾、すべては狼男の特徴をとらえています。よってこの話は白」

「でも狼男と言えば、そんな風に考えないか？ 俺だってそうやって説明するぞ」

「はあ……あなたはどちらの味方なのですか？」

鬼丸が人差し指をキンタの顔の目の前で立てる。

「確証はもう一つあります。その狼男たちが全員金色の目をしていたということです。彼らは“灰狼”と“黒狼”という二つの種族があります。共通するのは金色の目を持っていることです。満月のような金色の目、純粋な金色の目を持っているのは彼らだけです。でもそれを知っていたとしたら？ 知っていなくても図書館とかで調べれば、わかることじゃないのか？」

「ではお聞きします。キンタ、退魔師であるあなたはこのことを知っていましたか？」

「あ……」

金太郎の口から間抜けな声が漏れだした。

退魔師は魔に関するプロである。まだまだ未熟だとは言え、キンタも退魔師の一族のひとり。キンタですら知らないことをあの10歳足らずの少年が知っているはずがない。

調べようにも、この村には図書館すらない。それらから鬼丸は“推測”したのだ。

「なるほどな……じゃああと半分はなんだよ？」

「彼の両親のことです」

「？」

「あの子の両親が死んだというのなら間違いない“実害”が出てい

ます。なのに何故みんな信じないのでしょ？そこだけが確証がなく、信じることができない」

「確かにな……最近は何も被害の報告がなかった。退魔師っていうのはどんなに小さな被害でも一応報告が入るようになってるんだけどな」

鬼丸たちが頭を抱えていると、ヨウタが部屋に入ってきた。

「お兄ちゃん達。蒲団が用意できたよ！」

「ま、明日狼男を倒してしまえば、すべてが終わるんですけどね」

「そうだな。あゝ……なんか腹減った。今何時だ？」

あんなに日が高く上っていたのに、いつの間にか日は傾き始めていた。あまりの時間が早くてたつのでキンタは驚いてしまった。

「よし、ヨウタ。今日は俺が飯を作ってやんぜ！」

「ほんと？ おにいちゃん？」

「へえ……あなた料理なんかできるんですか？ 似合わないですね」

「ほっとけ！」

「お兄ちゃん。僕も手伝うよ！」

キンタとヨウタはともにキッチンに立ち、仲良く料理を作り始めた。その様子はさながら兄弟のようにも見えとても微笑ましかった。鬼丸は一人になってしまったりビングで、あるお話を思い出していた。

ある村に何人かの人が仲良く住んでいました。

ある時、その村に狼が人に紛れ込んでしまいました。

さあ、大変だ。毎朝一人、また一人と食い殺されてしまう。

人間は考えた。「毎日一人ずつみんなで選んだ狼と思う人間を殺してしまおう。」

人間は紛れ込んでいる狼を殺すことはできるのか？

それとも狼が生き残り、全員食べられてしまうのか？

結末は……

「……忘れてしまいました」

そんなことを呟きながら鬼丸は窓を見た。

「まあ結末はどっちでもいいですけどね」

今日の月は半分に欠けていた。

第一章・第六話：四面楚歌ってどういう状況なんですね……

朝、ヨウタがいつも水を汲みに来る井戸に鬼丸とキンタは来ていた。まだ朝早いので日は完全に上っておらず、月がまだ西の空にうつすら残っていた。

「半月……」

「何やってんだ、鬼丸。早く行くぞ！」

鬼丸は若干の不安を残しながら、ヨウタについて行った。

「ここか？ ヨウタ」

「うん……もうちょっとで出てくるよ……」

ヨウタの指定した場所についたキンタと鬼丸。3人が物陰に身を隠すと、獣の咆哮が聞こえてきた。

「来た……」

森の奥から現れたそれは、狼のような耳、しっぽ、満月のような金色の目、灰色の髪……誰もが想像しそうな狼男の風貌をしていた。それが2人……

キンタは奇襲をかけようと、紫電を取り出したところで鬼丸がポツリと声を漏らした。

「狼男は群れで行動するのです……」

「はあ？」

「最も一般的な狼男は灰狼。一匹狼は黒狼です。黒狼は単体の能力は長けていますが、仲間を作りません。対する灰狼は個体値の低さ

を補うために群れで狩りをするんです」

「……何が言いたいんだ？」

「灰狼の狩りは単純明快。少数が敵の注意をひきつけ、残りが後ろから襲う……」

「ぐるるるるる……」

「ん？ ヨウタ、腹でも壊したか？」

ヨウタは首を思いっきり横に振る。どちらかというところの獣の唸り声のような音は、後ろから聞こえている気がする。

キンタは嫌な予感がしてゆっくりと後ろを向く。するとそこには……狼男が立っていました、とさ……

「……があああああああ！」

『ぎゃあああああ！ 出たあああああ！』

「ちっ……二人とも、走りますよ！」

鬼丸の声と同時に3人は一気に駆け出す。逃げ切れるかと思えたが目の前にまた狼男が現れる。鬼丸が言ったとおり待ち伏せされていたらしい。

「キンタ、ここは立ち止まらずに一気に強行突破しましょう！」

「わ、分かったぜ！」

キンタが走りながら紫電を取り出しそれを狼男に振り下ろす。しかし狼男は俊敏な動きでそれをかわし、隙間を縫ってキンタに詰め寄り爪で攻撃してくる。

「くそっ！ こいつら、早いぞ！」

「狼男の特徴は魔力による身体強化。魔導の類は一切使えませんが、その分爪や牙での攻撃はかなり強力です。キンタ、いったん離れて

「ください！」  
「分かった！」

キンタが狼男を押し返し飛び退くと、その後ろにはデザートイーグルを構えた鬼丸が現れた。デザートイーグルに自分の魔力を満たしそれを一気に解き放つ。

「死になさい」  
「グルツ！？」

狼男は突然現れた鬼丸の姿に驚くが、すぐに切り替えし体を半回転して、鬼丸の銃弾をかわす。金色の弾丸は何か当たることなく、唯唯むなしく飛んでいく。

「おい、どうすんだ？ 当たらねえぞ！」  
「大丈夫です。計画通りです」

クイ

鬼丸が左手の人差し指を動かすと、今まで狼男の後ろに向かっていた弾丸が軌道を180度変え狼男に向かう。狼男も流石にこれには対応できないのか、気づいた時にはもう遅く、左腕に被弾してしまふ。

「！！！」

狼男が声のならない悲鳴を上げると同時に鬼丸はヨウタを抱えて走りだす。鬼丸の顔には余裕の表情はなく、キンタにいたっては間抜けな顔が丸出しである。

「どうして戦わないんだよ！？ お前ならあれぐらい倒せるだろ？」

「確かにそうですね、今のあなたは戦えますか？ そんな間拔けな表情を浮かべていながら？ 絶対に無理です。それにこんなガキンチヨを抱えて戦えるほど私は強くありません」

「くっ……」

「とにかく今は逃げてください！」

『グルワアアアアアアア！』

「ぎゃあああああああ！！」

「ふう、何とか逃げ切れましたね……」

「た、助かった……おい、ヨウタ。大丈夫かあ？」

「う、うん……何とか……」

狼男に追いかけること30分。命からがら逃げることでできた3人は近くの木陰で休んでいた。出発した時は日が昇り始めたばかりだったのが今では完全に昇り切り、あんなにも高く昇っている。朝の陽ざしによってより強い疲労感をキントは感じたが、なんとか体を起き上がらせ立ち上がる。

「よし！ 今から村の人に抗議するぞ！ 俺らが見た、っていえば流石にみんなも信じるだろ！」

「よくそんな元気がありますね……」

先ほどまでの疲労感を感じさせないほどのやる気を見せるキント。対して鬼丸は一層疲労感を感じているようだった。ヨウタにいたってはそこらへんに転がっている。

……返事がない、ただの屍のようだ。

「まだ、僕は、死んでないよ……」

「そんなに簡単にいきますかね？ それだったら彼はここまで苦勞しなくとも済んだのではないですか？」

「やってみなくちゃ分かんないだろ！ 俺、この村の村長のところに行ってくる！」

「あつ！ 村長！」

「嘘！？」

キンタが振り返るとそこにはたくさんの人々がそこに立っていた。皆、明らかに友好的ではない目をしており、中には農具を持って威嚇する者までいた。その集団の先頭に立つ人間、おそらく村長であろう、が一步前に出てキンタの前に立ちふさがった。

「お主がヨウタに雇われたという退魔師か？ 悪いことは言わん、早くその坊から縁を切るのじゃ」

「何だよ！？ 俺はこの目でちゃんと狼男を見たんだぞ！ 何でてめえらは信じないんだよ？」

「お主のようなよそ者の言葉など信じぬわ。それにその坊はうそつき少年。誰が信じるものか！」

「で、でもこいつの親さんは狼男に殺されたっていうんだろ？ 実害まで出ているのにどうして……」

村長は大きいため息をつく。キンタのことはもう諦めたように。ため息によって沈みきった顔をもう一度上げ、キンタの顔を見据える。

「それも嘘なのじゃよ。旅人……」

「なっ！？」

「その子の両親は病によって死んだ。それからじゃよ、その子が嘘をつき始めたのは。おそらく親がいない寂しさを紛らわすためにか



まっつてほしかつたんじゃろつて。初めの方はよかつた。単なる子供の遊びだからな。しかしわしらにも限度というものがある。単なる嘘とはいえども……」

「嘘じゃない!」

「ヨウタ……」

「嘘じゃない……お父さんとお母さんは本当に殺されたんだ!」

今まで村長の話を黙って聞いていたヨウタが声を荒げる。今まで我慢してきた感情が爆発したせい、彼の目にはうっすらと涙が浮かんでいる。しかしそんなヨウタの様子に対して、村長の様子はひどく冷静だった。

「ふう……とにかくこの村には狼男などいない。そう村の者たちで決めたのだ。ここは争いも喧嘩もない田舎町。もしこの町に争い事が来たのならば、それはあなたのせいですぞ。旅人。」

「何、だと? もういつペン言ってみろや」

「じゃからお主のせいで争い事が起きるのじゃ。頼むからこの町から出て行ってくれんかの?」

人間という生き物は影響されやすい生き物。他人が言った言葉が自分にとって都合のいいものならすぐ便乗する。

その法則どおりに周りに村人からポツリ、ポツリと声が出始めた。

「そつだよ。出てけよ……お前」

「はあ?」

「お前みたいなお人好しがいるから嘘つきが出てくるんだろ! だつたら出で行けよ、おまえ」

「そつだ! 俺たちの村は俺たちが守るんだ。お前みたいな退魔師は必要ない!」



## 第一章・第七話：面白味のかけらのない真相

金太郎とヨウタは家路についていた。

結局あの場を収めたのはほかでもない村長であった。敵に塩を送るというが、あの老人から送られた塩はどうも悔しくてたまらなかった。

「くそっ……………」

「まあまあ。そんなに落ち込まずに気楽にいきましょうよ」

「…………お前、今までどこに行つてたんだよ？」

あの騒動の中、いつの間にかいなくなっていた鬼丸が金太郎の隣に姿を現した。

それも、さも当たり前のように、いつも通りの無表情だった。

「ずっといましたよ。木の陰に」

「ちよっ！…………まあ、お前にとってみれば狼男を倒して報酬を受け取るだけだもんな……………」

「その通りです。それと私は明日から森に行きません」

『えっ！？』

金太郎とヨウタが信じられないような顔で鬼丸の顔を見る。いつも通りの無表情だ。

「おまえっ！？……………いったいどうしてだよ？」

「だってこれから狼男は出ませんもん」

多分ね、と鬼丸は付け加える。軽々しく述べられたその内容は金太郎を驚愕させるには十分であった。

あり得ない、金太郎はまずそう思った。常識的に考えてここ一週間続けて出たものが、明日突然でてこなくなるだろうか。あり得ない、重ね重ね金太郎はそう思った。

しかしこの鬼には何か考えがあるかも知れない。というより考えなければこの鬼は動かないだろう。鬼丸は考えて動くタイプ、金太郎は動いてから考えるタイプだ。

「だから、明日からは行くなら二人で森に行ってください。私にはやることがあるので」

「……お前、何でそんなこと分かるんだ？」

うーん、鬼丸はそう唸らせながらいかにも考えているようなポーズをとる。

金太郎にはいまだにこの鬼のことはよくわからない。自分より小さなこの鬼の頭の中でどんなことを考えているのか、どんな結論が出ているのか、見当すらつかない。しかし……

「なんとなく、です」

「そうか……だったら！」

金太郎は鬼丸を指差す。

「俺はなんとなくまた狼男が出る気がするぜ！」

「ならば賭けましょう。この一週間で狼男が出るかでないかを。賭けに勝ったほうが負けたほうに一つ、命令できる。これでいいですね？」

「おう、絶対に負けねえからな！」

相手のことが分からないからといって逃げるわけにはいかない。むしろ本当の勝負では分からないほうが多い。これも退魔師の修行の内。

金太郎は鬼丸に勝つことを決意した。

こうして

鬼丸と金太郎の別行動が始まった。

一日目。

昨日はあんなにも空は晴れ渡っていたのに今日は朝から雨。

昨日はあんなにも意気込んでいたのにこの雨が金太郎を憂鬱にさせる。

「金太郎おにいちゃん……」

おっと、ヨウタが不安そうな目で金太郎を見ている。クライアントを危険な目にあわせる、不安にさせる、そのようにさせないようにするのが契約したものの務め。金太郎はその不安を払拭するために笑顔で返事した。

「安心しろ、ヨウタ。今日は俺が見に行つて水も汲んできてやる。

お前が風邪ひいたら大変だからな」

「……うん」

「それじゃ行つてくるぜ！」

金太郎は雨をなるべく避けながら飛び出して行つた。

一日目の成果……狼男の出現はなし。よって成果はなし。金太郎が風邪をひきました。

二日目。

昨日の雨にうたれ、見事に風邪をひいてしまった金太郎。ヨウタはそれを必死に看病している。

「ぶへつくしよおおおん!!」

「大丈夫? おにいちゃん」

「あははは、馬鹿ですね〜! キンタは」

「じやかましいわ! それが病人に対する言葉かよ!？」

ヨウタの隣には昨日はいなかった鬼丸が立っている。笑いながら。

……それにしても指をさして笑うことはないと思うが。

「まあ、良かったじゃないですか」

「あん？」

「金太郎が馬鹿じゃないことが証明されて。ほら、よく言うじゃないですか、“バカは風邪をひかない”と」

「てめえ、今さっき俺のことバカって言っただろっがああ!」

二日目の成果……金太郎の風邪が治りました。見舞いに来てくれた鬼丸が入れたお茶はかなりうまい、ということが分かりました。

三日目。

「ふう、今日はいい天気だな! 張り切って行こうぜ!」

「お兄ちゃん、風邪は大丈夫なの?」

「おう！ もうすっかり良くなったぜ！ ありがとな、ヨウタ」

金太郎が頭をなでてやるとヨウタは心底うれしそうな表情をする。親を失い、村人から軽蔑されても、やはりただの10歳の子供。笑顔が一番似合っている。

「よし、じゃあ行こうか！」

「うん！」

金太郎たちがいつもの水汲み場についた。鬱蒼と茂った木々たちが光を遮り、未だに夜が続いているような、そんな錯覚さえ起こす。その森の中、金太郎たちはじっと待つことにした。狼男が現れること信じて……

一時間後……

「出てこないね……」

「……」

おかしい、こないだ森に入った時はこのぐらいの時間になればもうとっくに出でてきてもいいころ。むしろこの前の時なら狼男に襲われ必死に逃げだしていたころだ。

「どうしようか？ お兄ちゃん……」

「……俺はもうちょっと見てるからヨウタはもう行きな。そろそろ朝飯作るころだろ。先帰ってもいいぞ」

「うん……」

金太郎はヨウタの後ろ姿を見届けると、また木の陰に身をひそめた。

今頃鬼丸は何をしているのか、ふとそう思ったが見当もつかないの  
でやめた。

今集中すべきは目の前のこと。金太郎は自分の顔をたたくと待つこ  
とに集中した。

そしてそのまま2、3時間過ぎ……

「だあああああ！　なんで出てこないんだあああああああ  
！！」

「びくっ！！」

……ついに金太郎は発狂した。金太郎のためにおにぎりを持ってき  
たヨウタも突然の発狂に驚いている。

「なんでだよおおおお！　何で狼男が出てこないんだよおお  
おおお！？」

「落ち着いて！！　金太郎お兄ちゃん！！」

普段おとなしい人ほど怒ると怖い、というがこの狂った恐ろしさは  
鬼のようだった。

……しかし残念ながら金太郎の知っている鬼はこんな怖さではウン  
ともスンとも言わないだろう。

「はあ……はあ……何であいつの言ったとおりになるんだよ……あ  
いつは予言者かよ？」

金太郎は何時間かぶりに体を動かした。ずっと座ってたせいで体は  
固まり、歩くと、どう考えても健康上よろしくない音がする。

「いてて……ん？　何だ、これ？」



金太郎が先日狼男を見つけたところで何かを発見し、拾い上げる。

「やかん？ ……」

金色の球体に取っ手、注ぎ口があるそれはまさしくやかん。手で土を払うと比較的まだ新しいものだわかる。あたりをよく見渡してみればそこらへんにゴミが落ちている。

「ヨウタ、この森にはだれも入っていないんだよな？」

「うん。基本的にだれも入らないけど……」

「じゃあ、いつたい誰が……」

とりあえず金太郎たちは今日のところは帰ることにした。

「ふむ……まあ、こんなところですかね……」

金太郎たちと離れた鬼丸は村に出ていた。金太郎から借りた帽子をかぶり、爪も隠しているので鬼だとはばれてはいない。

「改めてみると本当に小さな村ですね……だからヨウタの話が嘘といわれるのかも知れませんが……」

人間は数が多ければ多いほど、意見がまとまりにくい。自分の欲、良く言えば信念がその数だけあるからだ。大きな国家で反乱が多いのはそのせいかもしれない。

しかし、小さな村だったらどうだろうか。大きい共同体よりまとまりがあるのは言うまでもない。まとまりがある分、その団結を崩すのは難しい。ヨウタの話が嘘だと思われてしまったら最後、その嘘つきという団結を崩すのは容易なことではない。

「ふう……まずは適当に話を聞いてみますかね……」

容易ではないと言っても不可能ではない。とりあえず鬼丸はこの事件の真相を知ろうとした。

「すみません……」

「ああ？ 何だ、あんた。見かけねえ顔だな。旅人さんかい？」

「ええ、まあ……少しお尋ねしたいことがあるのですが」

この村で鬼丸の顔を知っているのは3人。金太郎とヨウタと最初に会ったおばちゃん。村人たちに囲まれた時は金太郎に集中が集まり自分の顔は覚えられてはいない。

そしてこの田舎の町、基本的に人当たりが良い人々なので話を聞くだけなら造作もないことであつた。

「この村には嘘つき少年がいると聞いたのですが、その子について何か知っていることは？」

途端に村人の顔が歪む。さっきまで笑顔で対応してくれたことが嘘のようだった。ヨウタを本気で嫌っているのは確からしい。

「知ってるもないも、あいつの法螺に騙されて狼男を探しに行こうとしたのは俺たち大人だよ。まったく……あいつの親の顔を見てみたいね」

「探しに行こうとした？ 実際にはいつてないのですか？」

「ああ、長老がそう言ったからな。“調べても無駄だ”ってな」

「なるほど……ところであの子の親がお亡くなりになられたことは知っていましたか？」

「いや……実は俺らもそれをつい最近長老から聞いたんだ……親さん、病だつてな。あの子に親がいたらきつと良い子に育つただろうに」

「ええ……確かに……おっと、もう時間だ。ご協力ありがとうございました」

「おう、良い旅を」

鬼丸は手をふり、村人と別れる。今の会話で得られた情報はほんのわずか。しかしその僅かな情報が鬼丸の推測を確信に変えていくことになっていった。

「ま、次は別の人に聞いてみますかね」

鬼丸の別行動はまだまだ続くことになりそうだった。

「だ……今日もいなかった……」

「お疲れ様ですね。キンタ」

「……今日は家にいたんだな、鬼丸」

金太郎が鬼丸から差し出されたコップの水を一気に飲む。

金太郎はこの一週間毎日森に行つて監視していた。だが、見つかったのは、あのやかんのみ、狼男のおの字も見つからなかった。

ヨウタのことを信じるとは言ったもののここまで出てこないと言わ

にがつくり来てしまう。

「まあまあ、そんなに落ち込まずに。賭けに勝ったからといって、そんなに無理難題を出すほど私も鬼ではありませんよ」

「お前、鬼じゃねえか……」

金太郎が立ち上がり、椅子に座る。隣のキッチンからはいいにおいがする。

今日はカレーらしい。

一生懸命料理を作ってくれているヨウタの姿を想像すると、自然と笑顔になってしまう。

金太郎がなごんでいると、鬼丸の口が開いた。

「キンタ、この事件の終わりは近いですよ。もうすぐ……いや、明日にはこの事件は終結を迎えるでしょう」

「……なあ、何でお前はそんなこと分かるんだ？狼男が出てこないことも分かってたし……お前、未来予知でも出来るの？」

「まさか……私は魔法なんて使えませんし、占いにも興味すら湧きません。ただ原因と結果の法則を知っているだけですよ」

「原因と結果？」

「ええ、この世の中の事象は全てに原因があります。たとえば、何故キンタがここにいるのか？それは自分の修行のため、または人助けをしたいから、ですよね？」

「ああ……」

「こんな風に全ての事象には原因があります。この世界にその例外は存在しない、と私は思っています。今回の場合は“何故狼男が発見されないのか”です。」

「“ヨウタが嘘つきと疑われる”じゃなくて？」

「ええ……ところでキンタ、私は狼男の種類について貴方に話したことがありますよね」

キンタは自分の頭の中から必要な情報を引き出そうとする。  
そういえば、狼男に襲われた時にそんな話を聞いた覚えがする……。

「ええつと……黒狼と灰狼、だったか？」

「その通り。今回の事件の犯人は灰狼。灰狼は群れをなし、行動します。それは金太郎も知っていますでしょう」

「それがこの事件とどういう関係が？」

「……今回の事件の真相は“灰狼の群れが人間の町に入り込み、長老を裏で操っている”と私は考えます」

『っ!?!』

鬼丸の口から衝撃の一言が放たれる。調理を終え、こちらに来たばかりのヨウタの顔は驚嘆の一色だった。

「どうしてそんなこと分かるの？」

「ヨウタ……貴方は“親は死んだ”と言っていましたよね……実はそのことはこの村誰一人として知っていなかったのですよ」

「なっ!?!? あいつら、そのこと知らないで嘘つき呼ばわりしたのかよ!?!?」

「親のことについて彼らが知ったのは最近……しかし、そのことを事前に知っていた人間が一人だけいる」

金太郎の頭にはクエスチョンマークが浮かぶ。しかしヨウタは何かに気づいたようにぼつりと呟いた。

「村長……」

「何!?!?」

「正解です。あの夜、親につて語ったのは村長ただ一人。これはおかしい。何故誰も知らないはずの情報を村長だけが知っているのか。

今回の事件、村長がキーパーソンです。」

「じゃあ村長が犯人なんじゃ……」

「……さあ？」

「さあ？」 お前にも分んないの？」

金太郎が身を乗り出す。鬼丸はそれをうつとつしそつに手で退けた。

「そんなこと知るわけないじゃないですか。でも……人間に擬態できる魔なんてそうそういません。灰狼ごときにそんな芸当できるわけありませんし……どっちにしろ村長に問い詰めればわかることです」

「そこ結構重要な所じゃないのか？」

「……あゝあ、今日は疲れました。私はもう寝ます。金太郎たちも今日は早く寝てくださいね」

「ああ……分かった、ぜ」

鬼丸は足早に部屋から去っていき、ヨウタから借りている自分の部屋へとはいつて行った。

パタン

扉が閉まるとあたりに静寂が訪れた。

「ねえ、お兄ちゃん……」

「な、何だ？ ヨウタ」

「鬼丸さんって何者？」

「……自分しか信じない面倒くさがり屋、かな」

## 第一章・第八話：事件解決！〜金太郎の場合〜

夜、皆が寝静まった頃

夜はまさに“魔”の活動時間であり、魔にとってみれば昼のようなものである。

そして遙か彼方の上空に見えるのは一点の曇りもない月である。

太陽は人に知をもたらし、月は魔に力を与えた

この言葉通りに魔にとって月は力を与えてくれる重要な存在であり、満月の時にはめつたに動かない最上位の魔でさえ、人の里に姿を見せるといわれている。

そしてそれは狼男も例外ではなかった……

「ぐるるる……時は満ちたか……」

ここは人がめつたに入らない森の奥。ここに三人の人間……いや、狼男がいた。

彼らは灰狼。狼男の種の中では最も下位に存在する者たち。彼らは今までたくさんの上位の魔に媚びへつらい生きてきた。食料といえば彼らの残飯程度であった。

しかしそんなことはもう関係ない。今宵、人間の村を襲いようやくまともな餌にありつけるのだから。

「まさかこんなにも簡単に作戦が決行できるとはな……」

「それも全てあの方とあの餓鬼のお陰……人間にも少しは感謝しないとな」

ぎゃはっはっは！

あたりに狼男の下種な笑い声が響きわたる。もはやこの作戦を、邪魔をするものはいない。後は人間たちを欲のままに食い殺すだけ……

…のはずだった。

「待て！」

「っ！？ 誰だ！？」

狼男たちがあたりを探す。この作戦はだれにもばれてないはず。なのに何故？

狼男の内の1人が東の方に金色の物体を発見する。

それはこの暗い、暗い森の中でもはっきりと分かるものだった。

「退魔師……」

「退魔師が何故こんなところに？」

「ぎやははは！ 早く喰わせる！」

「退魔師・坂田金太郎、参上した！ 俺が来たからには覚悟しろよ！ 犬っころ共！」

狼男の前に現れたのは坂田金太郎。到底人間では扱いきれないような槍斧を背負っている男だった。

「何故ここがばれた？ 人間には分かるはずもないのに……」

「こつちにもお前らと同じようなのがいんだよ！ ……っしかし、よくこつて分かるよな、鬼丸の奴。やっぱりあいつ、未来でも見えてんじやないか……」

金太郎は今日の昼のことを思い出した。



「キンタ、今日が決戦ですよ！」  
「……はっ？」

鬼丸は部屋を開けた瞬間、そう言い放った。金太郎は何の事だか分からず、間抜け面をさらしている。

「今日、狼男が町に来るんですよ」

「へえ……って何で!？」

「それについて説明しますから、とりあえず座ってください。あっ、ヨウタもここに」

「うん」

金太郎はテーブルにあった食べかけの昼食を片づける。まだ全部食べてなかったんだが、と突っ込みたかったが多分無視されるだろうからやめた。

鬼丸、金太郎、ヨウタが座ると鬼丸が口を開いた。

「では今日の作戦ですが……」

「ちよつと待て！ お前、説明するとかいつときながらしようとしねえじゃねいか！ 何で今日、狼男が来るか説明しろ！」

「はあ……細かいことを気にする人は将来ハゲますよ。ただでさえ、金色に染めて髪が傷んでいるというのに……」

「染めてねえ！これは天然だ!!」

鬼丸は一度大きく息を吐き、金太郎たちのほうを改めて向きしゃべり始めた。

「今日狼男が来るであろう理由、それは二つあります。一つは時間です。キンタ、狼男はどれくらい餌を食べなくても生きられると思いますか？」

「ええつと……一日？」

「狼男は人間以下ですか？ ……ヨウタはどう思います？」

「うん……一週間くらい？」

「そうです、一週間。これが彼らに与えられた餌なしで生きれる時間です。キンタ、この一週間狼男を見かけたことは？」

「ない」

「ということは、彼らはこの一週間何も口にしていないことになる。彼らの主食は魔力を多く含んだ肉……つまり人肉です。一週間という時間が過ぎた今、彼らはどうしても餌を食べなくてはいけなくなるのです」

「なるほど……」

「で、鬼丸さん、二つ目の理由は？」

鬼丸は空を仰ぎ、天を指した。そこにはヨウタの家の天井しか存在しない。

「天井？」

「屋根裏？」

鬼丸は首を横に振った。

「月です」

「月？」

「……太陽は人に力をもたらし、月は魔に力を与えた、という言葉を知りませんか？ ……ああ、貴方達に聞いても無駄でしたね……とにかく、月というのは魔力の塊のようなものです。その恩恵は人間も受けることができますが、魔力によってできた魔物の力を持に増加させます。だから人間は昼活動し、魔は夜活動するんです。狼男たちは月によって自分たちの足りない力を補おうとしている、というのが私の考えです」

「でも月は毎日見ることが出来るだろ？ 何で明日ってわかるんだ？」

「……キンタは私たちが来た日の月の形を覚えていますか？」

「いや、全然」

「私たちがここに来た日、その夜は半月でした。これでは月の力を半分しか借りれない。では半月から一週間たった今日の月は何でしょう？」

「あっ！ 満月か」

「ここまで言えばもうわかるでしょう。狼男は月の力を借りようとしている。多分これであっているでしょう」

「で、作戦はどうすんだ？」

金太郎がこれからのことを問う。すると鬼丸は笑って答えてみせた。

「特にありません」

「……はあ？」

あたりに一瞬の静寂が漂う。

狼男討伐にあたってここが一番重要な問題なのではないだろうか？

金太郎はますます意味が分からなくなった。

「今回は作戦などない。人数、地形、そして満月のバックアップを受けた彼らに作戦など意味はありません。先日、奇襲をかけた時、こちらが圧倒的に有利にもかかわらず私たちは敗走しました。奇襲をかけようとしても無駄でしょう」

「じゃ、じゃあ俺たち勝ち目ないじゃねえか！？ どうすんだ、鬼丸！？」

「そこで貴方の出番ですよ。キンタ」

金太郎は鬼丸の言葉にさらに首をかしげる。

「今宵の満月は魔に力を与えます。それは人に備わっている魔力も例外ではない。体内に魔力を多く備えているあなたなら、その恩恵は十分あずかれる。灰狼は群れで行動するのはうつつとうしいですが、一匹の能力は低い。万全の貴方だったら倒せるはずですよ」

「マジでか!？」

「ええ。というわけでキンタ、明日は頼みますよ」

「おう、任せとけ! …… っってお前は？」

「……」

「っておい!？ 笑顔で逃げんな!！」

結局、その時は鬼丸には逃げられてしまった。

しかし、今金太郎がやるべきことは変わらない。それは目の前にいる、ヨウタを傷つけた魔を倒すこと。

金太郎が紫電を構えると、不意に狼男のうちの一人が笑い出した。

「ギャハツハツハ!！ そうか、人間にはお見通しだったのか？

そうか、そうか……でもちようどよかつたぜ、アンタ!！」

狼男の言っている意味が分からない。金太郎は首をかしげてしまう。最近分らない事ばかりで、首が歪みそうだ……

「アンタが来てくれたお陰で、メインディッシュの前の前菜があるんだからよ」

狼男は体制を低くする。

「クロス……」

狼男全員が飛び出し、金太郎との戦いが始まった

「はあ……はあ……くっそ、鬼丸の嘘つき」

戦いが始まり、30分ほどが経過した。すでに金太郎は肩で息をしており、対して狼男達の方は余裕の笑みすら浮かべている。

「おらおら!!」

「そんなノロい動きじゃ俺らを倒せねえぜ!!」

「ギャハハハ! コロス、クロス!!」

「畜生があああ!!」

金太郎が紫電を思いつき横に薙ぎ払う。金太郎の一閃は退魔の雷力が備わっている。金太郎本来の怪力も相まって一発、一発が必殺の一撃となっている。

それを狼男は身をかがめ、紙一重でかわしてみせる。

金太郎は追撃を試みるのだが……

「隙あり」

「ギャハハハハハ!!」

「くっ……」

他の二匹に一瞬の隙を突かれ、痛手を負う。こんなことがもう30

分も続いていて未だに有効な策は思いついてはいない。  
幸い、深手は負ってはいないが、このままでは負けることは明らかであった。

狼男達の作戦は単純明快。一匹が正面から敵の動きを翻弄し、残りが死角から攻撃する。金太郎自身もそれが分かかっており、何とかこの状況を打破しようとするのだが、体が思うように動いてくれない。

なぜならば金太郎の闘い方は一対一を前提としているからである。彼のいままでの訓練は人を相手とした“試合”。今彼がやっているのは魔を相手とした“殺し合い”なのだ。

いくら才能があろうが、いくら模擬戦で努力しようが、埋められない“経験”という差がそこにあった。

「はあ……はあ……どうすりゃいいんだよ？ 鬼丸……」

いつもは楽に持てるはずの紫電が今日は重たく感じられる。  
いつもは弱音を吐かないのに今日ばかりは弱音を吐いてしまう。  
どんどんと、ネガティブな方向に感情が流れていく。ついには鬼丸に助けを呼ぶほどになっていく。

（助けてくれ……鬼丸……）

「はあ？これぐらい自分で何とかしてくださいよ、キンタ」

「……ん？」

想像していた言葉と違う言葉が金太郎の頭の中に響く。

（いや、想像の中だけでも助けを呼ばせてくれよ……）

「そんなことして何か意味があるんですか？ にしても  
キントは実は弱かったんですね。これからは“ヨワタ”とでもい  
いましょうか？」

「……」

……想像の中でも厳しい、というより性格の悪い鬼丸の一言に思わ  
ず絶句してしまう。

金太郎の中の何かが切れた。

「……が……じゃ」

3匹の中で一番狂ったような狼男が金太郎に襲いかかる。

「ギャハハハ！！ いただきます！！」

狼男が金太郎の腕を噛み千切ろうとしたその時……

「誰が“ヨワタ”じゃああああ！？ ボケエエエエエ！！」  
「！？」

金太郎の魔力が一気に放出される。それは狂った狼男を正気にさせ  
るほど。

そして放出されたと思えば、紫電に一気に収束していく。

「雷鳴……怒涛おおおお！！」

紫電を地面にたたきつける。あたりが雷に覆われ、狂っていた狼男  
はおろか、死角にいた二匹も動きが止まる。  
その隙を金太郎が逃すはずもなかった。

「そこかあああああああ！！」

金太郎は目の前の狼男に回し蹴りを入れる。

メキヤ！

金太郎の蹴りが腹に食い込むと吹っ飛び、岩に当りようやく止まった。

「ぎゃは……は……」

そのまま白目をむいて気絶してしまった。

「おらあああ！！ 後、二匹、かかってこいやあああ！！」

「おい……」

「ああ、分かった……」

狼男達は自分たちだけの合図をすると、二手に分かれた。ちょうど二人を結ぶ直線にキンタが中央にいる形になる。

「おらおら！！」

「これならどつちから来るかわかんねえだろ！！」

「二手に分かれたか」

（ん？待てよ、こつちが動かなくても俺が相手の攻撃に合わせて飛ばば、あいつら自爆するんじゃない……）

「言っとくがなあ」

「俺らの自爆を待とうとしているなら無駄だぜ。俺らもそこまでアホじゃねえ！！」

狼男に予測されるほど自分は単純だったのか、と自己嫌悪をに陥る金太郎。

しかしまずいことになった。一体は倒しても、未だに二対一。金太



郎の不利な状況は変わらない。  
先程の戦術ももう通用しないだろう。

「おらおらー！」

「ゲへへへ……！」

狼男は高速で金太郎のまわりに円を描くように移動する。  
一匹が金太郎の隙をついて飛びかかる。と、その時……

「後ろだ！ お兄ちゃんー！」

「っ！！ おらああああー！！」

どこからか声が聞こえ金太郎はその声に従うままに紫電を振り下ろす。そこには今にも飛びかかろうとしている狼男の姿が。金太郎は力を一層込めた。

狼男は寸でのところかわすが、こちらの奇襲が失敗したことのショックは大きかった。

「ちっ！ ……誰だ！？」

「この声はヨウタ？」

「うん、僕が敵の攻撃を教えるからお兄ちゃんは集中して。……今度は前から来るよ！」

「よっしやああああー！！」

どこからともなくヨウタの音がする。姿は見えないがヨウタは必ずそこにいる。

狼男を倒すには声だけでも十分。金太郎はさらに気合を入れた。

「くっ……どこだ！？ ガキを探せー！！」

「待て！ お前らの相手は俺だぜ！ さあ、二回戦を始めようぜ」

「……………くっ！」

狼男は再び高速で移動し始める。しかし先程よりも驚異的ではなかった。

なぜなら自分にはヨウタがいるのだから。

「お兄ちゃん、左だ！」

「おう！」

「今度は右から来るよ！」

「任せろ！」

「う、上だ、上に気をつけて！」

「おらああああ！！！」

ヨウタの声に合わせて、見事に狼男の攻撃を防いでいる。通常、人間が狼男の動きを見切る可能性は限りなく0に近いが、何故かヨウタはそれをこなしていた。

「くっそ……………」

「もらったあああああ！！！」

「ギヤアアアアア！！！」

思わず、動きを止めた狼男が金太郎の拳の餌食となる。魔力をまとったその拳は狼男でも倒すのに十分であった。これで一対一、否、二対一となった。

「……………何故だ……………何故、その餓鬼は俺たちの動きが見える？ 人間は目で追うのがやっとのはずなのに……………」

「ヨウタは毎日お前らのことを見ていたからな。お前らの癖ぐらい分かるんじゃないの？」

「……………仮にそうだとしてもだ。何故貴様はその言葉にすぐ反応でき

る？ 人間の反応には僅かな遅れがある。何故その遅れが貴様にはないのだ」

「そりゃ、俺はヨウタのことを信じているからだぜ！！」

「そんな……そんな滅茶苦茶な理由が通用するかああ！！」

狼男が一直線に金太郎に向ってくる。しかしどんなに早くても直線的な動きには反応できる。

金太郎が目をつぶると、金色の魔力が紫電に巻きついていく。

「今日は大サービスだ。感謝しろよ、犬っころ！ 雷鳴……」

ついに紫電が光り輝きだす。

「怒涛おおおおおおお！！」

「グギャアアアアアアアアア！」

金色の波導が狼男を飲み込んでゆく。

それが過ぎ去ったあとに残るは、抉れた土と木々と三匹の気絶した狼男。

……狙いは外したので死んではないだろう。

「まあ……後はここらの退魔師に任せますか」

「金太郎お兄ちゃん！」

「おお！ ヨウタ、さっきはありがとな。お前のお陰で倒せたぜ」

「うっん、金太郎お兄ちゃんならきつと倒せたよ。それに、こっちこそ僕の言葉を信じてくれてありがとう」

「ヨウタ……」

東の空に太陽が昇る。

ヨウタの顔が朝日に照らされ、笑顔が見える。今まで見た中で最高

の笑顔であった。

ふと、気がつくくと大人たちの声が聞こえる。おそらく金太郎の雷を見て、きたのであろう。

金太郎はふと、真剣な顔に戻る。

「ここは他の奴らに任せとけばいいとして……問題は鬼丸だ。あいつは町に用があるって言った。あいつが無駄な行動をとると思えない。……きつと何かあるんだ……行くぞ、ヨウタ！」

「うん！」

## 第一章・第九話：事件解決！〜鬼丸の場合〜

「おい、狼男が出たって本当か？」

「ああ、村長から聞いた。今から急遽、討伐隊を組んで山に行くそうだ」

「何人集まった？」

「分らん。が、ほとんどの男どもは行くことになるだろうな。おい、俺らも行くぞ」

その瞬間、男たちの後ろで爆音が響き、雷が落ちる。金太郎が紫電を地面にぶつけた音であるう、しかしまだそんなことは誰一人として知らないのです、一層男たちの焦りを積もらせることとなった。

「や、やべえじゃねえか？」

「俺たちも急ぐぞ！」

「ああ……」

この会話の二時間後、村の男、合計50人による討伐隊が生まれ山に駆け出すこととなる。しかし事件はその前に終結を迎えていたなど誰も予想できなかった。唯一人を除いて……

「くっくっく……まさかここまで事がうまく運ぶとはな」

「これも全てあなたのお陰ですぞ、村長……」

「くっく……」

村長の家、通常は綺麗に片付いているはずなのだがこの二人、いや、二匹の狼男が来てからは一変した。

掃除する間など与えられず、家の中はさながら廃墟のようである。この二匹の狼男、もちろん金太郎が倒した狼男とは別物であり、しかも容姿、言動から判断しても格は上のように思われる。

「しかし奴らも考えたものだ。まさか餓鬼一人を利用して、人間の心を利用するとは……もう少し報酬をやってもいいかもしれん」  
「討伐に行った男たちの肉で充分だろ。まっ、生きていればの話だな」

「……」

村長は何もできず、ただ笑う狼男を見るだけだった。

「おいおい、そんな目で見るな、村長さん。あんただけは朝になったら助けてやるよ。もっとも、アンタの魔力はまずそうだから喰う気にならんからな」

再び、狼男はゲラゲラ笑い出す。

魔が喰らうのは正確に言えば人間の“肉”ではない。人間に備わっている“魔力”である。魔は自然の魔力によつてできた存在。魔にとつての腹がすく、とは自分の魔力が減ってきた、ということを指すのである。

また人間には魔力の差というのが存在する。魔術師、退魔師は例外として一般的には男より女、大人より子供の方が上質である、と魔の中では考えられている。

これからこの二匹は“不味い”男の肉の処理をあの手三匹に任せ、自分たちは何も抵抗できない“美味しい”女子供の肉を喰うはずであった。

コンコン

「っ!？」

不意にドアのノック音に驚く。しかし何一つ恐れるものはない。あの妙な金髪の餓鬼はいないし、男たちはいない。女子供が来ればそのまま喰おう、そう考えた。

「こんな時間に何用だ？」

「どくも。宅配便です」

「……入ってこい」

狼男たちは目で合図し、入ってきた瞬間に襲う準備をした。男の声だったがまだ成熟しきってない子供の声。オードブルには最適と考えた。

ガチャリ

「死ねエエエエエ」

「

次の瞬間に狼男の目に入ってきたのは、自分よりかなり小さな子供のような姿。そして旅人が身につけるような帽子。さらにそれに収まりきらない、男にしては長い髪。

最後はどう考えてもその体には似合わない黒い砲身。

「棺桶二つお届けに参りました、ってね」

バンッ!

乾いた音が部屋に響く。

するとドサリ、と一匹の狼男の体が床に転がる。それは口から脳髓に一つの穴が見事に開いていた。

何も分からないまま死んだのであろう、その顔は獲物を喰らうこと

で期待に満ちた顔であった。  
しかし結果はこの様。狼男の脳髓やら血肉が辺りに飛び散り、見るも無残なものであった。  
もう一匹の狼男が叫びだす。

「き、貴様ああああ！ 何しやがったあああああ！？」

「何って……唯害虫を一匹駆除しただけですが」

「俺の兄弟を害虫だとおおお！？ふざけるなよ、餓鬼  
！！」

「うるさい」

バンッ！

乾いた銃声が再び、部屋に響く。

見れば、今度は狼男の胸に風穴があいている。それは覗き込めば向こう側が見えるくらいに見事に開いているものだった。

「が……は……」

「あなたの兄弟がどうなろうと私は知りません。この世界は弱肉強食。弱い者は奪われるのみ。それは、魔である貴方が一番よく知っているでしょう」

「そんな……後、一步……だったの……に」

「そうですね。貴方の夢はもう少しかったです。しかし果たせない夢は塵同然。今まで“お疲れ様”でした」

「グフオ……」

もう一匹の狼男も後ろに倒れこんでいく。血を吐きながら。苦渋に満ちた顔を浮かべながら。村を騒がした二匹の狼男はこんなにあっけなく終わったのであった。

鬼丸はその様子を少し見やると、すぐに村長の方に向かった。

「大丈夫でしたか、村長。お怪我は？」



「ああ……大丈夫だ。ところで君は？」

「私の名前は鬼丸童子。旅人です」

「旅人が何故このような所へ？」

「……今回の事件、私の知人が大きく関わっておりまして、その手助けにと参上した次第でございます」

「その知人とは？」

「1人はこの村のヨウタという少年。もう一人は坂田金太郎という青年です」

「ああ、なるほど……」

その二人には見覚えがあった。どちらとも村長自身が傷つけた人物である。

「そこでお願ひがあります。一つは嘘つきと言われたヨウタの保護。もう一つはキンタ……いえ、金太郎の旅の補助をお願いしたい」

鬼丸の要求は要するに“自分がヨウタを傷つけた責任は自分で取れ。後、報酬を払え”というものだった。

普段なら無理な相談だが、相手は仮にも村を救った人。無下にするわけもいかなかった。

「……善処しよう」

「ありがとうございます。さあ、このような場所をいったん出ましよう。直に夜も明ける。そうすれば、近くの退魔師でも来てくれるでしょう」

「ああ」

鬼丸は村長に背を向け、外に出ようとする。鬼丸が一步を踏み出したその瞬間……

「シネ……」

黒い影が鬼丸に襲いかかった。

「ほう……あの一撃をかわしたか。やはり相当できるようだな」  
「貴方、一体何者？」

鬼丸に襲いかかった黒い影。後少し反応が遅れていたらその鋭利な爪で体を引き裂かれていただろう。間一髪で身をひねり、その攻撃をかわすことができた。

しかし鬼丸さえも予想できなかった。まさか村長が襲いかかってくるなんて。

「フッフ……おらああああ!!」  
「っ!？」

村長が叫びながら腕をふるう。すると鬼丸の小さい体はいとも簡単に吹っ飛ぶ。家の壁を突き破り、尚その勢いはとどまること知らず、家から数十メートル離れたところでようやくやくとまった。

「いたた……なんという怪力」  
「フッフ……」

家にあいた大きな穴から村長が出てくる。その身のこなしは老人とは思えなかった。

鬼丸は立ち上がり、村長のほうを見る。

「……人間、ではありませんね。貴方、いったい何者ですか？」  
「何者、か。いいだろう。冥途の土産に教えてやろう。……ふん、  
グラアアアアアア！」

村長が、人間が出すとは思えない声で叫ぶと、老人の貧弱な体は筋肉で盛り上がり、鬼丸と同じくらいの身長は二メートルを越さんばかりと伸びる。

頭部には犬のような耳ができ、鼻も犬のようになる。すでに死滅していた頭皮には髪、というより毛が伸び村長の体を覆う。

その姿はまさしく狼男。しかし今まで金太郎や鬼丸が見てきた狼男とは決定的に違うところがあった。

「銀色……ああ、そういえば狼男にはもう一種類存在したんですね。“銀狼”という種族が」

今までの灰狼と違いその毛の色は銀色。その毛色は灰狼よりも月によく映える。

鬼丸が忘れるのも無理はない。この種族は圧倒的に個体数が少ないもの、灰狼が長い年月を経て、進化した“銀狼”という種族であるから。

当然、長い時間生きている分魔力、身体能力ともに灰狼とは桁が違う。灰狼にはできなかった人間への擬態というのも、ようやく納得できた。

「なるほど……この事件の真犯人は貴方だったんですか」

「その通り。わしがあいつらを騙してこの事件を起こさせたのじゃよ。あいつら、まんまと騙されよって。本当に、簡単じゃったよ！」  
「すべて計画通り、ということですか……」

「ああ、まあ、お主らが現れなければもっとうまくいったんじゃが

……この際そんなことは関係ない。全て喰らってやるわ！！ フハッハッハッハ！！」

「出来ると思っっているんですか？」

「ああん？」

村長が高笑いしていたところに鬼丸の横槍が入る。気分よく笑っていたところを邪魔されただけに、思わず眉に皺がよるが、同時にひとつの疑問が頭の中をよぎる。

「お主、いったい何者じゃ？ 先ほどの魔に関する知識、退魔の武器……普通の人間ではないな。お主、退魔師か？」

「私が退魔師？ ……私は退魔師などではありませんよ。むしろそれに反するものです」

「？」

鬼丸が意味ありげに笑う。はったりか、真実か、それ以前に退魔師に反対する存在？村長の頭の上にクエスツションマークが浮かぶ。

「貴方は魔にも階級があることはご存知ですか？」

「もちろん。そんなこと常識じゃ」

長い間生きてきた村長が知らないわけがなかった。それより、何故そんな質問を、という疑問がさらに浮かんだ。

魔に階級をつけ始めたのは、人間だった。魔の純粋な力、危険度、知力、全てを考慮してランク付けを始めた。それが長い間様々な人間によって考えられ、今ではトランプにたとえられている。

最弱が2、最強がK。種族別に分けられたそれは、一つランクが違っただけで力も跳ね上がる。つまり8の灰狼と9のゴーレムが戦ったら、ほとんどの確率でゴーレムが勝つのだ。

それ故、人間には危険度の目安として捉えられている。

「灰狼は8。ゴブリンは2。銀狼は……」くらいでしょうか？と、まあ、銀狼はなかなか強い地位にいます。退魔師でも数人がかりでやっと討伐できるくらいでしょう」

「何が言いたい？ いい加減はつきりしろ！」

痺れを切らした村長は大声で怒鳴る。鬼丸は少しにやけ、再び口を開いた。

「そんな」の銀狼でも、QでもKでも敵わない存在いるのですよ。  
“エース”という存在がね」

鬼丸は金太郎から借りた帽子を脱ぎ捨てる。途端、村長の顔が青く染まり、信じられないような顔になる。

「な……何故、何故こんなところに……“鬼”がいるんだ!？」

鬼丸の頭部にあるもの。魔でも人間でも、誰しもが知っている金色の角。この国の恐怖の象徴。魔の階級の中でKを超えたエースとして存在する最強の種族の一角。  
確かに鬼は村長の目の前に存在した。

「何故、そんなに驚くのですか？ 銀狼がここにいるなら、鬼もここにいてかまわないでしょう」

「お、鬼は桃太郎とか言う人間に、討伐されたはず……」

「その桃太郎を退治する途中なのですよ。まあ、今はこの旅で知り合った人間の手伝いをしていますけどね」

「う、嘘だろ？」

「と、いうわけで運が悪かったと思って諦めて殺されてください。  
銀狼さん」

鬼が自分を殺そうとしている。それは同時に死を意味すること。先ほどもいったとおりランクがひとつ上がるだけで、力も跳ね上がる。』とエースが戦えば結果は一目瞭然だった。この場合、狙われた者がとるべき手段は二つ。一つは少ない可能性に賭けて、全力で逃げるか、あるいは……

「畜生があああああ!!」

この狼男のように決死の思いで襲い掛かるかのどちらかである。

「フフフ……」

鬼丸は笑いながら、懐のデザートイーグルを取り出す。その様子を見て銀狼は少しの希望を見出した。

(やった! あの退魔の武器程度ならわしの皮膚は貫けん。それどころかかわすことも可能だ。一気に近づいて奴の体を引き裂いてやる。いくら鬼でも無傷ではなかるう……)

「言っておきますが、私の武器をあまり舐めないほうがいいですよ」「!?!?!」

考えを読んだようなタイミングで鬼丸はそう言い放つ。銀狼は驚くがもう自分の体は止まらない。鬼丸が銃口を向ける。

「このデザートイーグルは私の魔力の器……つまりこれは私の魔力を銃弾として撃つ、媒介に過ぎないのです。魔力の銃弾なら貴方の皮膚でも貫くことは可能です」

「っ!?!?!」

「さらに私は自分の魔力を自由に变成させることが出来ます。銀色には銀色を……退魔の力を持つ銀ならば貴方でも簡単に殺すことが出来ます」

「馬鹿な……そんな魔術師のような真似、出来るわけが……」  
「出来るものは仕方ないのです。楽に逝かせてあげますよ」

デザートイーグルが次第に銀色の光を帯びるようになる。鬼丸の話は本当だった。銀狼の僅かな希望も、今消えた。

「我が变成する力は退魔の銀……穿て」

バンツ！

本日二度目の銃声は確かに銀狼の心臓を貫き、一瞬で死を与えた。声も出す間もなく、それは地面に倒れこんだ。

鬼丸は東の空を見た。うつすらと光が見え始めていた。

「朝か……」

もうすぐ魔に支配される夜も終わる。鬼丸はそう呟くと遠くから聞きなれた声が聞こえてきた。

第一章・第十話：事件解決！～ヨウタの場合～

「おい、鬼丸。大丈夫か!？」

「おはようございます、キンタ。どうやら狼男を無事に倒せたんですね」

「おう!」

鬼丸が聞きなれた声とは金太郎とヨウタの声であった。ともに大きな怪我は見られない、ということは現れた狼男を撃退してきたのであろう。

「もうすぐ近くの退魔師がきてくれるはずだ。で、犯人は？」

「ええ、無事倒すことが出来ました。それと村長も」

「村長も狼男だったの？」

ヨウタが驚愕の声を上げる。金太郎はというと、開いた口がふさがらず、何かを言いたげな様子だった。

「あのやろつ……散々俺に言っておきながら、自分が黒幕だったのかよ! 今度あつたら一発殴ってやる!」

「……」

今度、という言葉はもちろん本気ではないのだが、本気だとしても会うことはない。なぜなら鬼丸が殺してしまったから。

しかし当の鬼丸は敢えて黙っていた。というか、この金太郎の様子を見ると、しゃべれなかった。

ふと、金太郎の表情が何かに気づいたような表情になり、身をかがめた。



「ヨウタ、これでようやくお前の疑いが晴れたな……」  
「……うん、ありがとう。金太郎お兄ちゃん、鬼丸さん」

朝になり、金太郎が捕らえた狼男が発見され、さらに退魔師が銀狼の変わり果てた姿を見つければ、その時ようやく疑いが晴れるのである。

金太郎が安堵の表情を浮かべていると、鬼丸が口を挟む。

「……しかし、そう簡単にいくでしょうか？」

「何でだよ？ 狼男がいるって分かれればヨウタのことは信じてもらえるだろ！？ 何もかも解決するじゃねえか！」

「そう簡単に信じてもらえるでしょうか？ 今まで自分たちが嘘つき、と言っていた人間の事をすぐに信じるほど人間は器用なものでしょうか？ おそらく、しばらくの間は、偏見と自分たちの罪悪観に満ちた目を向けられるでしょう」

「そんな……」

鬼丸は腕を組み、金太郎は唇をかみ締める。余程、理不尽な人間の性が悔しいのだろう。そんなことはない、と否定したかったが人間の性は人間である金太郎はよく知っており、納得するしかなかった。金太郎は再びヨウタの方に向く。

「ヨウタ、俺たちと一緒に旅に出よう」

「えっ!？」

「……」

金太郎がそう言い放つと、ヨウタは驚き、鬼丸は黙り込んだ。

「こんなところにおいてもヨウタが傷つくだけだ。それより、俺たちと一緒にここを出て旅に出よう！ ここにいるよりもっとたくさん

の物が見れるし、嫌なものも見なくてすむ。俺たちならきつとつま  
く出来るさ！ なつ、ヨウタ！」  
「……………」

確かに金太郎の言うことも、もつともだった。ここにいても何もメ  
リットはない。ならばここを出てしまおう。そういう誘いだった。  
その誘いに対するヨウタの答えは

ヨウタは首を横に振った。

「ヨウタ……………」

「ありがとう、金太郎お兄ちゃん。僕、すぐくうれいよ。でもね、  
僕はここを離れるわけにはいかないの……………」

「どうしてだ？ ヨウタ」

「僕はお父さんとお母さんが残してくれたあの家を守っていかなき  
やいけない。誰も入らなくなった森も管理もしなくちゃいけない」  
「……………」

「それにね、ここで旅に出ることは“逃げ”になると思うんだ」

「逃げ？」

金太郎は思わず聞き返す。ヨウタはそれに小さく笑って答えた。

「うん、せつかくみんなに信じてもらうきつかけをお兄ちゃんたち  
に作ってもらったんだ。ここでお兄ちゃんたちに付いていったら、  
僕はお兄ちゃんに頼りっぱなしだ。だから僕はここに残るよ。何年  
かかっても、何十年かかってもみんなに信じてもらうように僕、が  
んばるよ！」

「ヨウタ……………うん、お前なら出来るよ！ きつと！」

「お兄ちゃん、短い間だったけど楽しかったよ。お兄ちゃんのこと、  
絶対忘れない！」

「俺も忘れないよ！ ヨウタ！」

金太郎とヨウタが抱き合う。日も完全に昇りきった。二人の人生でここまで綺麗な朝日はなかっただろう。自然と涙が二人の頬をつたった。

しばらく時間がたち、金太郎が立ち上がった。

「俺たち、そろそろ行くから……」

「うん……がんばってね」

「さよならは言わないぜ。またな！」

「またね！ お兄ちゃん！」

金太郎は朝日の方に向かい歩き出し、鬼丸もそれについていく。ヨウタはそれを見えなくなるまで見ていた。

「ふう……臭かったですね」

「なっ……う、うるせえよ！ どこが臭かったって言うんだよ!？」

「全部ですよ。何が“さよならは言わないぜ”ですか？ 思い出すだけで虫唾が走ります」

「そ、そこまで言うことないだろ！ いいじゃないかよ、無事事件が解決して!」

「どこが無事ですか？ 貴方、報酬をもらうの忘れてたでしょうが

「!」

「あっ……」

金太郎は思わず声を漏らす。察するに本当に忘れていたようだ。

「い、いいじゃないかよ！ だったらお前は子供から金を巻き上げるつもりだったのかよ!?」  
「もちろん！ それが資本主義の原理ですから！」  
「鬼か!？」  
「鬼です」

いつもの馬鹿なくだりをやっていると、鬼丸がため息を漏らした。

「まあ、いいです。貴方はお人よしでどうしようもなく甘い人と分かっていましたから」

「すごい言われようだな……」

「こんなこともあるうかと、準備しておいてよかったです」

鬼丸が懐から何かを取り出す。それはなんと……札束だった。ちゃんと数えなくてもかなりの大金であることは一目瞭然であった。あまりの大金に金太郎は開いた口がふさがらなかった。

「お前、どこでそんな金を……まさか、盗みを？」

「人聞きの悪いことを……」

「じゃあ、詐欺？」

「貴方はいつたい私を何だと思っっているんですか？」

「じゃあ、恐喝」

「いい加減にしないと殴りますよ！ これは村長からもらったものですよ」

「……へえ〜」

いつの間に、と金太郎は思った。

「すごいな、いつの間に? ……」

「まあ、断れない状況で頼んだんですけどね」

「やっぱり脅しじゃねえか!？」

「うるさい! 方法についてとやかく言われる筋合いはないです。とにかくこれだけあれば旅には困らないでしょう。約束取り付けといてよかったです。さあ、金太郎、行きましようか」

鬼丸は歩き出した。金太郎は止まり、その後ろ姿を見ていた。

確かにヨウタから報酬をもらうことは、はばかられる。しかし貰わなければ自分たちが困る。金太郎は何とかなるだろうと安易に思っていた。

しかし鬼丸は違う。これからのことをしっかりと考えている。少し厳しすぎるときもあるが。

全てのことで甘いお人よしな自分。

何もかもに厳しい現実主義の鬼丸。

「む? どうしたんですか? キンタ、早く行きますよ」

こう考えると、全く正反対の位置にいる自分たち。しかしこれはこれだけで……

「まあ、ちょうどいいのかね」

「はあ?」

「いや、何にもだ……行こうぜ、鬼丸!」

「ええ」

彼らは再び歩き出す。金太郎と鬼丸の旅はまだまだ続くのでありました。



第一章・第十話：事件解決！〜ヨウタの場合〜（後書き）

突然ですが作者のw a l t e rです。

このお話は年内に終わらせなかったので二日連続で更新してしまいました。これが年内最後の更新になると思います。

なんとこの小説のPVが千人を超えました。驚きです。見てくださった皆さん、本当にありがとうございます。来年もこの調子でがんばりたい……と言いたいところですが、実は作者は来年受験生です。出来る限りの更新はしたいですが、もしかしたら途中で休載、と言う処置もとるかも知れません。すみません。

出来る限りの更新はいたしますので、来年もよろしくお願いします。

それでは皆さん、よいお年を……

第一章・第十一話：鬼丸って……（前書き）

あけましておめでとうござります。



第一章・第十一話：鬼丸って……

「鬼丸、そろそろ飯にしようぜ！」

「そうですね、ここらで休みましようか」

金太郎は空を見上げる。もう日は高く昇っており、腹の具合も考え  
ると、昼飯を食べるのにちょうどいい時間だと分かる。

金太郎は場所を確保し、鬼丸は手際よく食事を準備していく。二人  
での旅もだいぶ慣れてきたようだった。

「それでは、いただきますましようか」

「いただきます！す！」

手を合わせ、元気よく金太郎が挨拶すると、旅人にしては豪華すぎ  
る飯にがつき始めた。白いご飯、パン、肉を固めた携帯食……全  
て店で買った物だが量が尋常じゃないほど多い。

何故こんなにも多いかというと、それもこれも鬼丸のおかげである。  
先日、依頼を受けた周の村で村長 　　実は狼男だったのだが

に（断れない状況で）お願いして資金を援助してもらっ  
たのだ。

それがなければ、今頃金太郎は一文無しであっただろう。

「うーん……やっぱり鬼丸のお陰だな。ありがとな！」

金太郎は改めて感謝の意を表した。

「いきなりなんですか？ おだてても銃弾しか出ませんよ」

「……」

鬼丸は冗談のつもりなのだろうが、冗談にしては怖すぎる。  
金太郎は黙って食べ始めた。

あらかた飯を食べ終えたところで、金太郎がこんなことを言い始めた。

「鬼丸の武器つてさ、デザートイーグルだよな？」

「そうですね。それが何か？」

これですか、と言って鬼丸は懐からデザートイーグルを取り出す。黒光りするそれはいつ見ても鬼丸に似つかわしくない。

「退魔用に開発された武器を何で魔のお前が持っているんだ？ そんなに頼らなくても鬼だったら純粹な力で戦えるだろうに……」  
「まあ、色々ありましたね。私が六歳の時、ある人がくれたのですよ。『自分の身は自分で守れ』、つてね」  
「六歳……」

六歳の子供にデザートイーグルを渡す大人……やはりこの鬼は常軌を逸しているな、と金太郎は思った。

「それからずっと使い続けて、今に至ります。今では合理的にあらゆる敵を殺せる、という点で使い続けています」  
「ははは……」

金太郎の口から苦笑いが漏れる。

「とういわけなんです、聞きたいことは他にあるのでしよう。言ってください」

「あはっはっは！ やっぱ、ばれたか。いや、俺の武器って、槍斧じゃん。どう考えても接近戦しか出来ないわけよ。それで飛び道具ってのはどんな感じなのかな、って思ったわけよ」

「ふん……」

「実は俺の兄貴も拳銃使っていてさ。兄貴が使えるんだったら、俺にも才能あるのかな、って思って。ほら、遺伝ってあるじゃん。

遺伝って。だから

「

「使ってみたいんですね？」

金太郎は至ってまじめに頷く。鬼丸は若干大げさにため息をついた。

「いいですよ。どうぞ」

「まじで！？ ありがとな！」

金太郎は子供がおもちやを貰うように、はしやぎながら受け取った。鬼丸はその様子を見て静かに笑う。

「へえ……拳銃ってこうなってるんだな。昔、兄貴の銃を勝手に触っていたら、殺されそうになって三日三晩、山の中を鬼ごっこしたのが懐かしいぜ！」

「貴方の家系も大概異常ですね……」

「なあ、これ撃っていいか!？」

「いいですよ、ただあっちの山に向かって撃ってくださいね」

鬼丸は遙か彼方にある山を指さす。あそこならば、人に当たることはまずないだろう。

「任せる！え〜……っと、ここをまず引いて、銃口を向けて、そしてトリガを引く！」

バンツ！

「のわっ！？」

金太郎が放った銃弾は狙い通り、山の方に向かって消えていく。しかしそれと同時にデザートイーグルの反動で金太郎は後ろに倒れこんでしまった。

鬼丸はその光景を見て大声で笑い始めた。

「あはっはっはっは！ 相変わらず馬鹿ですね〜！」

「うっせー！ ……いたた、お前いつもこんな衝撃に耐えてんの？」

「このデザートイーグルは色々と改造してありますね。たいていの魔を一発で葬り去るために、威力を限界まで高めてあるんですよ。その分反動が強いもんですから、慣れてない人はこうなるんですよ。私は単に慣れているだけです、と鬼丸は付け加える。

「さて、もう気は済みましたか？」

「ああ、ありがとな……って、あれ？」

「どうしました？」

「デザートイーグルは……って、あっ！」

鬼丸は金太郎が向いている方を見る。そこには近くにあった小川に浸かっているデザートイーグルがあった。おそらく反動で転んだ時、金太郎の手から離れ飛んでいったのであろう。

鬼丸はデザートイーグルを発見するとすぐさま取りに行く。

「……………」

（やっべー！ 怒られる）

金太郎は、鬼丸は怒っていると思った。鬼丸の怒る様を想像して顔が青ざめていくのを感じた。

盗賊であったり、魔であったり、旅には危険はつきもの。そんな状況で自分の命を守ってくれる武器というものは非常に重要なものだ。それを無下に扱われたり、傷をつけられたりしたら、誰しも怒るに違いない。金太郎自身も紫電をそんな風に扱われたら烈火の如く怒るだろう。

今は金太郎に背を向けていて表情は分からない。だが振り向いた瞬間、罵声が飛んでくるのは確かだろう、と金太郎は思った。そして運命の時、鬼丸がこちらに振り向いた。

(……来る！)

「今度からは気を付けてくださいね、キンタ」

「えっ!？」

予想外の言葉に金太郎は間拔けな声を漏らしてしまった。

「何ですか、その表情は？ にらめっこはやる気にはなりませんよ」

「いや、あの……怒らないの？」

「何で？」

「だってデザートイーグル水に落としちゃって……」

「故意ではないでしょう」

鬼丸は訳が分からない、と言わんばかりに首をかしげている。

「あつ、そう、ですか。取り敢えず、悪かったな……」

「構いませんよ。さあ、腹も膨れましたし、行きましようか」

「ああ……」

鬼丸は荷物を片づけ始め、金太郎も遅れながらも手伝い始める。その後は何事もなく旅を続けていった。それが昨日の昼過ぎの出来事であった。

「  
つていう出来事があつただけど」  
「その出来事が何か問題でもありましたか？」

夕方、日は西に沈みかけており、西の空は赤く染まっている。最近日が沈むのが日に日に遅くなり、もう夏が近づいていることを教えてくれる。

現在、二人がいるのは名もなき村の宿。ちょうど泊る所を探すときに発見したので、今日はここで休もう、ということになった。  
一服ついたそこで金太郎は先程のことを言い始めたのである。

「お前つてさ、怒ることはないの？」  
「はあ？」

金太郎の質問に鬼丸は思わず聞き返した。

「  
どういうことですか？」  
「だって、お前と一緒に旅してきて、結構な時間が経つけどお前の怒った顔は見たことないんだよ。昨日のことだって、普通の奴なら怒っても構わないぐらいの出来事だぞ！ 何で怒らないの？」  
「怒ってほしいんですか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけどね……ただ、もしかしたら

遠慮されているのかな、って……」

ふーん、そう言って鬼丸は顎に手をあてる。

この旅を通じて金太郎について一つ分かったことがある。どこかに女々しい部分があるということだ。いつも人に気を遣い、周りのことを知りたがり心配し、たまには周りを気にせず自分のことを考える、と言いかけたこともある。

というより今言いたい。

ただそれがこの人間のいいところに一つ。少なくとも鬼丸はそう思った。

「別に遠慮なんかしてませんよ」

「ほんとうか!？」

「ええ、本当です。多分私が怒らないと思われるのは、怒る観点が人間と違うからじゃないでしょうか。私にも怒りたい時もありますよ」

「ああ、なるほど……だから小さいって言われると

」

バンッ!

「何が言いたいんですか？」

「イエエ、ナンニモ……」

前には笑っているのだが口が笑ってない鬼丸、振り向けば金太郎の後ろの壁には穴があいている。

いつの間にとりだしたんだろう、ここ宿なのにいいのかな、と思うことは多々あれど、今後背については語ることをやめよう、というのは真っ先に思った。

鬼丸がデザートイーグルを再び懐に戻す。

「まあ、よつするに種族の違いです。人間は怒るが鬼は怒らない点もある。逆も然りです。だから金太郎が悩む必要なんてないんですよ」

「ふうん、じゃあさ」

まだ知りたがるか、鬼丸が呆れ半分でため息をつこうとした、その時

辺りに怒声が鳴り響いた。

「な、何だ！？ いったい！？」

「……盗賊かな。まだハツキリとは分かりませんが、こんな辺境の村で騒ぎが起こるとなると、祭りか異常事態。とにかく最悪のことを考え、敵に備えましょう」

「おう！」

「敵のことも今の状況も分からない……となれば、無闇に動くのは危険。金太郎、あまり外には出ないほうが」

「今、助けに行くぜ！」

「……って何でそこで外に出るんですか！？ 少しは人の話を聞いてくださいよ！！」

金太郎は宿の窓を開け、飛び降りる。ここは二階である。魔力で強化されている足とは言っても無鉄砲にもほどがある。

鬼丸はため息をつきながら、階段を使って一階に下りていった。

「おい、どうしたんだよ、この有様は？」

金太郎は無事地上に降りると、あたりはすでに荒らされたあとであった。しかし、この時間の短さ、地面の残った馬の足跡、さほど荒らされていない店の様子などを見るに略奪、というよりは単に馬を使って踏み荒らした感じである。



金太郎はそこらへんに座り込んでいた村人に話を聞くことにした。

「何があつた？ 盗賊か？」

「は、はい……最近、この辺りを荒らしている“ブラックガード”という奴らが……」

「何その微妙にかっこいい名前!？」

「……そいつらがさっき突然現れまして、村を踏み荒らして行つたんです……」

「なるほど、でも何故突然に？」

盗賊の行動に理由を聞くのは無駄だとは思つが、金太郎は一応聞いてみる。

「はい……何やら奴らは相当頭にきてた様子で……“やられた分はやり返す!それが俺たちのモットーだ!”と叫んでいました」

「やられた分はやり返す? 何かやったのか、お前ら？」

村人は首を横にふる。

「うーん……どこか話が合わんな……」

「どちらにしても、明日までに金と食料を差し出さなければ、この村を本当に略奪すると……ああ、旅人様、貴方様は見た限り若く御強そうだ。ここで会つたのも何かの縁と思い、どうかこの村を」

ここで鬼丸が嫌な予感を感じ、ようやく降りてくる。鬼丸はこの光景を見た瞬間止めとつとする。

「お救いください。お願いします」

「ちょっと待った、キンタ！こんな願い、聞く必要は  
「オツケー！ 任せろ！ 俺たちが絶対解決してやる！」

……止められなかった。鬼丸は自分の無力さと面倒くささに頭を抱える。

反対に村人たちは大いに喜び、老人は手を合わせ拝み、若者は手を取り合って踊っている。何故か金太郎もその輪の中に入っている。その光景を見て鬼丸はさらに頭を抱えた。

「キンタ……怒るほどのことではありませんが、貴方のお陰で最近頭痛がひどくなったことを貴方は知っているでしょうか」

鬼丸の嘆きは金太郎の耳には届かなかった。

## 第一章・第十二話：情報屋にして刺客、その名は雉

夜、今宵の月は三日月。月から得られる魔力は少なく、さらには雲までかかっている。あまり魔術師が戦うのには適していない夜であるろう。

そんな夜に二人……正確には人間と鬼が盗賊“ブラックガード”に殴りこみに行こうとしているのであった。

「……」

「鬼丸、そんなにへそを曲げないでくれよ……」

鬼丸と金太郎が泊まった村から歩いて数十分のところ、ブラックガード達がいるらしい山に向かっている。

鬼丸が先に歩いているので金太郎には鬼丸の表情は分からない。しかし、先ほどから反応がないのを見ると鬼丸は怒っているのだろうか。

だとしたら、面倒くさい……いや、気難しい奴だな、と金太郎は思った。

金太郎が話しかけるのをあきらめ歩き出すと、今まで黙っていた鬼丸が話し出した。

「……別に怒っているわけではありません……」

「えっ？ 何て言った？」

「怒っているわけではありませんと言いました。今は作戦を立てただけです。私が黙っているから怒っているとは考えないでください」

「ホントか？」

「ただ貴方は私の旅の目的を忘れすぎている。貴方の旅の目標は“修行”ですが私の旅の目標はあくまで“桃太郎を倒す”なんですよ」  
「あつ……………」

金太郎はすっかり忘れていた。自分のことに気を取られ、鬼丸のことは気にしていなかった。

自分のことしか考えられないなんて最悪ではないか…………。

金太郎は急に申し訳ない気持ちになった。

「ごめん……………」

「…………分かってもらえれば結構です。今回のことは、最初ですから大目に見ましよう」

鬼丸がそう言うと金太郎の顔がぱつと明るくなった。

「ホントか、鬼丸？　ありがとな！」

「とにかく、今回はこの馬鹿な連中を片付けることが先です。人に迷惑をかける愚かな連中…………キンタ、こないだみたいに遠慮はいりませんよ」

「あ、ああ……………」

こないだのこととは狼男のことを指しているのだろう。結局、金太郎は狼男を一匹も殺さなかった。

いや、殺せなかった。

人はもちろん魔でさえも金太郎には殺す勇氣はないのだ。今まで金太郎が殺した人間は一人。遠い、遠い過去のこと…………

「…………えっ!?　ど、どうしたんですか!？」

「…………えっ!?　ど、どうした、鬼丸?」

「どうしたってそれは私のセリフです。急にボーっとしてどうしました？」

「ああ……昔のことを思い出していて……」

「……何があつたかは聞きません。面倒くさいから自分のことは自分で解決してください。今は目の前のことに集中してください。作戦を言いますよ」

「ああ、分かった……」

金太郎は力なくも頷く。

「敵は山の頂上にこもっている。地の利は完全に向こうにあります。多くの人間がいれば山を囲んで、兵糧攻めでも出来るんですけどね」

「惨いこと考えるものだな……」

「おまけに敵のこともよく分からない。ここで私が提案する一つの策は……」

「……なんだ？」

鬼丸は一指し指を立て、金太郎の注目を集める。

「一点集中、つまり強行突破です！」

「……はあ！？」

金太郎はあまりの単純さに驚きの声を上げる。

「それだけ？」

「それだけです」

「それで大丈夫なのか？」

「十分です。敵は大勢とは言えども烏合の衆。人の輪はこちらにあります。それに無闇二手に分かれても効果は薄い。二手で攻めても、後二つの方向で逃げられてしまう……ならば、いっそのこと二人で

攻めて敵が逃げる前に

鬼丸は右手を前に突き出し、そして

「叩き潰す！」

握りつぶすポーズをとる。金太郎は納得したように頷いた。

「なるほどな……それなら俺でも分かるぜ！」

「どうも金太郎はおつむが弱そうですね」

「んだと、ゴラア！」

金太郎は鬼丸の言葉に一気に喧嘩腰になる。鬼丸はというと、腕を組み薄ら笑いを浮かべている。

「そういうオメエは頭でつかちじゃねえか！」

「考えることを放棄した人間はサル同然ですよ、キンタ」

「サルだ、と……？ テメエ……」

「おつ！ あんなどころに餓鬼が二人いるな！」

「身包み剥ぎ取って、どっかに売っちまうか！？ ギャツハツハツハ！」

金太郎と鬼丸が言い争っているところに、見張りらしき二人の盗賊が現れた。しかし当の本人たちはまったくそのことに気づかない。

「大体、貴方は修行と言いなながらも全然修行になっていません。私と会わなかったら、いったいどうするつもりだったんですか？」

「うつ……その時は、その時だ！」

「ほれ、見たことか！」

「うるせえ！ オメエだって……」



「……あれっ!?!?　ここ、どこだ?」

金太郎は気が付くと奇妙な空間にいた。確か自分は鬼丸と共に盗賊の山を歩いていたはずだ。それが今はどうだろう。真っ白な空間、山的な要素はまったくくない。

金太郎が辺りを見渡すと、人影がこちらに向かってるのが見えた。

「ん?」

「あっはっはっはっはっは!」

こちらに向かってくる人影は何がそんなに面白いのか、とても愉快そうに笑っている。年は金太郎よりも上、だいたい22歳ぐらい。黒い髪、黒い目、ここまでは典型的なこの国の人間である。しかし、ある一点を見るとこの人間がただの人間ではないことが分かる。

誰だって背中に黒い翼がある人間がいたら、ただの人間ではないことが分かるだろう。

「あっはっはっはっは!　君にとっては初めましてになるかな?

坂田金太郎君」

「何で俺の名前を?　ってか、あんた、誰だ?　天狗?」

金太郎は紫電を手に取る。ふと金太郎に以前、襲ってきた殺し屋の姿が浮かんだ。あの時は何の抵抗もなく襲われた、しかし今回は違う。どこから襲われても向かい討てるように、身構えた。



「あつはは！ そんなに身構えなくても、ナイフで襲ったりしないよ〜」

「っ！ 何で、そのことを？」

金太郎の表情が一気に険しくなる。この男は間違いなく自分が殺し屋に襲われたことを知っている。しかも凶器まで。

この愉快そうに笑っているこの男はいつたいどこまで知っているか、金太郎には検討もつかなかった。

「あつは！ 自己紹介をしようか。僕は見たとおり天狗、名前は“雉”といっておこうかな？」

「“記事”？ 新聞の人？」

「……豪快なボケをどうもありがとう、金太郎君。でも残念ながらそのボケは今いらないんだよ、あつは！」

「生地、木地……雉？ で、あんたなんで俺のことを？」

「ふふ……の事をずっと見てきたからね」

「えっ、何そのストーリーカー？」

「ストーリーじゃないよ！ ……坂田金太郎、現在18歳。退魔師の名門、坂田直系の次男坊。魔術の属性は雷。生まれ持ったその雷の魔術と父親からもらった槍斧、紫電で戦う。家族構成は父、兄、姉と自分を含めて4人。母親こそいないが姉に甘やかされて育った、か……典型的な次男像だね」

「んなつ！」

「ちなみに最後におねしよをしたのは12歳だつて。ぶっ！」

「わー！ わー！ そ、そのことを言うんじゃないよ！」

金太郎は必死に声でごまかそうとする。が、この場には金太郎とこのことを明らかに知っている雉と名乗っている男のみ。残念ながらごまかすことなど何もなかったのである。

「な、何でそんなことまで知っているんだよ？ やっぱリストーカー……」  
「あつはつは！ だからストーカーじゃないって！ 僕は情報屋。友達から頼まれたから君の事を調べてたの。分かった！？」  
「天狗の情報屋……」

天狗という種族は本来、好奇心の強い種族である。だからこの男のように情報屋になるというのも珍しくない。  
しかし、情報屋が敵の目の前に現れていいものなのか？ 金太郎はそう疑問に思った。

「まったく……これは想像以上だったね。記録に想像以上の“バカ”  
って追加しておかなきゃ」

「バカって言うな！ で、情報屋が俺に何のようだ！？」

金太郎は馬鹿にされたこともあってか少し怒りながら一番聞きかたつたことを問う。

しかし、その答えを聞いた瞬間、金太郎の表情は一変することになる。

「決まってんじゃない。君を殺しにきたの」

「……はっ？」

「だから君を殺しにきたの。分かった？」

「……な、何で？」

金太郎は何がなんだか分からないような表情をする。当然であろう、いきなり目の前の人間から殺害宣言をされたのだから。  
しかし殺害宣言をした当の本人は至極当たり前前のことを言ったような表情をしている。

「ん、僕の友達に頼まれたかな？ 僕の友達の興味は君じゃなくて君の友達……え、つと、そう、鬼丸君だ！ 鬼丸君とどうしても戦いたいらしくてね。それを邪魔する奴は全員殺せって言われてるんだよ。ここまでOK!？」

「お、お前は友達から頼まれたから、人を殺すのか!？」  
「うん」

金太郎は雉の言葉に絶句する。

雉はというと何かをあきらめたように一回、ため息を吐いた。

「はあ………だったら君は退魔の依頼をされても殺さないというのかい?」

「……俺は、殺しは、しない……」

「ああ、そうか。君はこれまで一人しか殺してないもんね。確か名前は」

「やめろ!」

金太郎はこれまで叫んだことのない、懇願する様な、悲痛の叫びをあげる。

「やめてくれ……頼むからその名前はだけは、やめろ……」

「……どちらにせよ、君はここで殺される運命なんだよ。殺される運命を背負ったものをするべき行動は二つに一つ。一つはそのまま殺されること。もう一つは」

雉は自分の懐から一枚の符を取り出す。風の魔力を纏った符。その力は全てを切り刻むもの。風の魔力は天狗の得意魔法だ。

「生きるために戦うこと」

「……やってやる！ テメエを倒して早く鬼丸の所に行くんだ!」

「あゝ……その鬼丸君も死んじやうかも知れないね」  
「えっ!?!」

「キンタ〜、キンタ〜! ……ったく、一体どこに行ってしまったんでしようね?」

金太郎が奇妙な空間に迷いこんでいるとき、鬼丸はその金太郎を探していた。

前見たときは確かに自分の後ろにいたはずなのに、途端に消えてしまった。

その時一瞬微妙な魔力を感じたが、無視してしまったことは間違いだったろうか、と鬼丸は少し後悔した。だが……

「でもキンタならどうにかなるでしょ!」

……鬼丸はそう割り切ってここまでできてしまった。

「しかし、困りましたね。キンタがいないと私の負担が増えるじゃないですか……おゝい、キンタ〜!」

その時、物陰がガサッと音を立てる。

鬼丸は金太郎かと期待したが、違う。金太郎の魔力はこんな下種なものではない。

鬼丸の予想通り、物陰から現れたのは金太郎ではなく、下種な格好をした3人の盗賊であった。

鬼丸の口からため息が漏れる。

「はあく、盗賊を倒すためにキンタを探していたのに、その盗賊に見つかってしまつては意味ないでしょう……全部キンタのせいですよ、まつたく！」

「へへ……あんたはこの状況をどうするつもりなんだい？」

「三対一じゃ、鬼のあんたも分が悪いだろ」

「おや？ 何でそのことを！？」

鬼丸の表情に驚きの色が見て取れる。鬼であることは金太郎以外誰にも言つてないはずだ。

何故知つているかと問いたかつたが、盗賊に聞くだけ無駄だろうと諦めた。

鬼丸は角を隠すための帽子を脱ぎ捨てると、当然のように言い放つた。

「じゃあ、貴方たちを倒しますか」

「ほう、敵が三人でも余裕と？」

「ええ、もちろん。だつて……」

鬼丸が姿勢を低く、三人の左端にいる盗賊に突つ込んでいく。

急いで武器をとろうとするが、もう遅い。鬼丸がボディにヒザを入れると、蛙がひしゃげた様な声を発して吹っ飛ぶ。

「ぐえっ！」

「こつやつて……」

鬼丸は跳躍し、空中に舞う。

吹っ飛んでいる盗賊の上に来ると、盗賊の頭をつかみ、そのままの

姿勢で地面に叩きつけた。

叩きつけた時に血が辺りに飛び散るが、鬼丸はそれを無視して立ち上がる。

「一人ずつ潰していけばいいんですから」

「なるほど、流石鬼つて所か……」

「ふふ、ですから早く諦めてください」

「へへ……盗賊は諦めが悪いところが長所なんだぜ！　おい、野郎共！　出てきやがれ！」

「……」

鬼丸は辺りの気配が変わったことに気が付いた。

5人、6人……そんな程度の話ではない。数十単位の人間がこの場に集まっている。

その数計43人。盗賊のボスらしき人間は余裕の表情を浮かべている。

「へへ……これだけの人間がいれば、鬼でも倒せるよな！？」

「……いいでしょう。相手して差し上げます」

鬼丸は懐からいつものデザートイーグルを取り出すと、銃口を盗賊たちに向ける。

「鬼と戦ったことを後悔させてあげます。さあ、来なさい」

「野郎共！　やっちまえ！」

『おおおおおおお！！』

盗賊の怒声を合図に鬼丸の戦いも始まった。



第一章・第十三話：雉と決着！そして……

真つ白な空間、ここは作られた結界の中。

この空間に佇む人間は一人、この結界を作り出した張本人、天狗の血を引く男、雉。

そして……

「がはっ……」

金太郎はその雉の前でヒザをつくのであった。

「なんだ。全然弱いじゃん。もっと強いかと思ったのにな」

「くそっ……」

「そんなんじゃない、旅している意味はないんじゃない？もしかしたら君は鬼丸君の“お荷物”なのかな？」

貴方の旅の目標は“修行”ですが私の旅の目標はあくまで“桃太郎を倒す”なんですよ

一番言われたくないことを雉に指摘され、金太郎の顔が悔しさと怒りで顔が歪む。

雉はそれを見て、さらに愉快そうに笑う。

「いいね……いいよ、その顔！僕、人がそういう表情をしているところを見るの一番好きなんだ！ほら、人間の醜い部分が見えるからさあ！あっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！！」

「ちっ！ごちゃごちゃと……うるせえんだよおおお！！」

金太郎が叫びながら雉に突っ込む。



しかし風を操れる者にとって、冷静さが欠いた者の突撃は好都合。雉の口がニヤリと笑い、風を纏った符を取り出した。

「風よ……切り刻んでちょうだい」

雉が戦いにそぐわない口調で符の力を解放すると、その符から五つの風の刃が放たれる。

風の刃の恐ろしいところは視認できないところである。普通の刃なら視認しかわすことも出来ようが、風の刃は自分の魔力の感覚だけでかわすしかない。

そのせいで金太郎の体には多くの切り傷が付いていた。

それでも金太郎は自分の感覚を極限まで研ぎ澄まして、それを避けようとする。

「……はっ！」

体を翻し、迫り来る刃を避ける。

しかし全て避けたと思ったその瞬間、一つの刃が金太郎の腕をかする。

「くっ！……やっぱりは全部は避けねえか……」

「休んでる暇はないよお！それ、吹き飛んじやえ〜！」

今度雉が放ったのは風の弾丸。風の刃よりは殺傷力はないが、当たれば内臓へのダメージは大きい。もちろん、この攻撃には常人には見えない。

こうした多彩な攻撃方法も風の特徴である。

金太郎が風刃を全力で避けたので体勢が崩れる。そこに風の弾丸が

迫り、避けようと思った瞬間、金太郎の体に直撃する。

「がっ……は！」

金太郎の体が九の字に折れる。肺の中の空気が全て押し出された感じがする。あまりの苦しさに思わず再びヒザをついた。

金太郎の体の外面は風刃で傷つき、内面は弾丸による圧力でボロボロになっていた。

その上、鬼丸の安否が気になり焦りが生じ、精神的にも追い込まれていた。

早くこの結界を抜け出して、鬼丸と合流したかったが……

「どうしたの？早くこの結界を抜け出したいんじゃないの？早く“中心”を見つけないといけないんじゃない！？」

「くっ……！」

金太郎はこの結界を破るために必要な結界の中心が見つけれなかった。

金太郎はこの結界を見たことがあった。旅好きな兄が結界に興味を持ったときに、自分も少し勉強したのだ。

そこで学んだことの中にこの結界、簡易結界を見たことがある。だから四方を結界の符で囲んだだけのこの結界は四つの魔力が集まるある一点、すなわち中心と呼ばれるところをつけば簡単に壊れることを金太郎はもちろん知っていた。

しかしどれだけ探しても中心は見つからない。そういう点も金太郎の焦りを助長させる結果になっていた。

「くそっ！中心は見つかんねえし、攻撃は当たらねえし……  
・いったいどうすりゃいいんだよ！？」

「君はいつも分からないんだね」。狼男の時も、君は鬼丸君に頼ろうとしてたもんね。一人じゃ何も出来ないのかな？」

「うるせええええ！俺だってやれば出来るわあああああ！！」

金太郎が魔力を一気に放出し、辺りに電撃が走る。狼男の事件の時にやった電撃、かわす隙もなかった。

しかしそれは初見だった話。狼男の事件ももちろん見ていた雉にとって、その攻撃は単調そのもの。

雉は大きなため息を吐き、金太郎の耳に届かないほど小さく一言咳いた。

「………風塵」

直後、金太郎の電撃が轟音をあげ、土ぼこりが辺りに立ち込める。

雉の姿を見えないところを見るとやったか、金太郎の顔に達成感が満ちた。

だが………

「そんな達成感に満ちたところに悪いけど、僕はまだ生きてるからね〜！」

「なっ！？………どうして………」

いつの間にか雉が金太郎の後ろに立っている。

「風塵の符、これは対象者を限界まで速くする符。これを使えば君の攻撃なんてお茶の子さいさいさ！」

「糞があああああ！！」

金太郎が叫びながら紫電を振るう。それはさつき放出した金太郎の魔力を纏った雷の刃になっていた。しかしそれを雉は軽くかわしてみせた。

「あつはつは！その程度じゃ僕を倒せないよ！」

「てめえ！いい加減に　　ん？」

金太郎はもう一度魔力を充足させようとすると、ある一点に気が付いた。

今、紫電は雷の魔力によって金色に光り輝いている。よって光源は自分。あらゆる方向に光が発せられている。

だから雉の後ろには黒い影があるはず。しかしそこには……………

「影がない？……………」

金太郎は一度距離をとり、息を落ち着けようとする。

（ちょっと待てよ……………なんであいつには影がないんだ？あいつは今、宙を浮いている。だけどそれは影のあるのとないの関係ないはずだ……………）

「ほぐれ！そろそろ決着つけちゃうよ！鎌鼬！」

「くっ……………」

再び雉が風の刃を作り出し、撃ちだす。金太郎は体が切り刻まれながらも、考えることを続行する。

（影がない物はもはやこの世に実態がない幽霊。幽霊なら俺は攻撃することも出来ないまま、終わる。だけでももう一つ可能性がある。

それは………)

「うおおおおお!!」

「おや?気づいたのかな………」

金太郎は叫びながら雉に突っ込む。当然雉は攻撃の手をやめない。むしる風の弾幕をより激しくしている、が、金太郎は紫電を振りかぶって走る。

まるで痛みなど感じていないように。

「はあああああ!!」

「君も学習しない人だね。僕は君より速く動けるんだよ。風塵!」

雉が再び高速で動き始め、一瞬にして金太郎の視界から消える。所詮は人間、人間が風を見切れるはずはない。雉は勝利を確信した。雉が高速移動を終えたところで 金太郎と目が合った。

「っ!」

「オメエこそ学習能力がねえんだよ!喰らいやがれえええええええ!!」

金太郎は思いつきり雉に向かって紫電を振り下ろす。

雉は驚いた表情をしながら、紫電が当たった瞬間霧のように四散した。それと同時に今まで白かった風景にヒビが入り、ついには雉の結界は崩壊した。

「やっぱりあいつ自身が結界の中心だったのか………」

金太郎がそう呟くと、次の瞬間には山に戻っていることに気が付いた。

見渡すばかりの木、木、木……そして目には雉がいた。

「やあ！金太郎君！お疲れ様だね〜！」

「……雉……」

「まさか君が結界から出てくるとは思わなかったよ。そのままのたれ死ぬかと思っていたのにね〜。あつはつはつは！」

「……そうだな。俺も分からなかったよ。まさかテメエが“幻”を使っているとはな！」

金太郎が一指し指で雉を指す。その様子に雉は愉快そうに笑う。

「あつはつはつは！どうして分かったんだい？」

「テメエには影がなかった。影がないのは幽霊か、もしくは実体のない幻だけだ。幽霊だったら俺は何もできねえ、だけど幻だったら俺でも何とかなる。幻は一度斬つちまえば消えちまうからな！」

「……影がないのは他にもいるんだけどね」

「あれ？そうだったっけ……」

雉の指摘に金太郎が首をかしげる。雉がため息を吐くと、金太郎は無性に恥ずかしくなった。

「と、とにかくお前は幻だった。それに風の魔法、あれも幻覚だろ！風の魔法に見せかけて、実は痛覚を与える魔法。その証拠に俺の体には痛みはあるが、傷は一つも付いてないからな！」

「ほう……じゃあ、最後の質問。何で風塵を使ったとき、僕の位置が分かったの？」

金太郎は雉の質問に堂々と答えた。

「“勘”だ！」

「ふ……ふはっは！あっはっはっはっは！」  
「ん？何でそこで笑うの？」

突然笑い出した雉。金太郎は首をかしげる。  
雉は笑いながら金太郎の質問に答えた。

「いや、思ったより君は優秀だなあ、と違ってね。いいね、金太郎君、“合格”だよ！」

「……いやいやいや、だから何の合格？」

「僕のお友達と戦うことの試験」

「……はあ？最初から思っていたけどお前のお友達ってだれだよ？」

雉は再び笑う。しかし、その笑いは今までの愉快そうな笑いとは違う。何か子供が悪戯を仕掛けているような含み笑い。金太郎はその様子に、首をかしげるところかどこか恐怖さえ感じた。

「……早く鬼丸君を迎えに行つたほうがいいんじゃない？」

あの子も今頃大変なことになっているだろうから……」

「あっ！鬼丸の事、すっかり忘れてた！」

「だったら早く行つたほうがいいよ！僕もそろそろ帰るからさ！それじゃあ、バイバイ！」

「ああ……って待たんかい！どこに敵を目の前にして逃がす奴がいるんじゃない！」  
「君」

「アホかあああ！俺だってそこまで甘くはないわあああ！」

「でもボロボロな君の体で僕を捕まえられるかな？」

「……」

痛いところを突かれた……傷こそついてはいないが、金太郎

の体は痛覚を無理やり刺激され、体中が文字通りボロボロである。今鬼ごっこをすれば確実に逃げられるだろう。

「無理でしょ！それじゃあ、またね〜！」

「またね〜」って？」

「桃太郎にも君の事言っておくからね〜！」

そういつて雉はあつという間に金太郎の目の前からいなくなる。まるで嵐のような奴だった、と、金太郎は呆然とした。しかしそれ以上に気になること言葉を雉は残していった。

「ももたろう？……………桃太郎って鬼丸が倒す敵……………雉  
つてもしかして……………」

金太郎がやつと気づいたところで、爆音が辺りに響き渡った。

「な、何だ！？まさか鬼丸に何かあつたのか？急がなきゃ！」

襲ってくる敵は一人……………

「うおりゃああああ！！！」

後ろから剣を持って襲ってくる敵。振り向き際に敵の顔を掴み、地面に……………

叩きつける。

辺りに血が飛び散るが、今はそんなこと気にしてはいられない。尤も、普通のと看でも気にしないが。



次は二人。空中から襲い掛かってくる。

「はああああああ!!」

「きええええええ!!」

デザートイーグルを使って一人を撃ち殺し、力が抜け切ったその屍に横蹴りを放つ。もう一人は仲間の屍に押しつぶされ、気を失う。

今度は8人が自分を囲んでいる。

「我が変成する力は風。その力は全てを切り刻む……吹き飛ばす!!」

自分の中心から突如として風が巻き上がり、その風は小さな竜巻になり、敵を巻き込む。嵐のような竜巻が晴れると、そこには一人を残して誰もいなくなった。

その竜巻の中心に残っている人物、鬼丸が倒した人間の数はすでに40人にのぼっていた。

「もう諦めたらどうですか?もう貴方達も残り僅かでしょう」

「へっへっへ……残り僅かだって?」

ボスが合図をすると、木陰からまだまだ手下が現れる。鬼丸はそれを見ると、眉をひそめた。

「……おかしいですね。貴方達をいくら倒しても減っている気配がない。むしろ増えている気が……」

「おらあああ!!野郎共、やっちまえ!」

「……ちっ」

鬼丸が小さく舌打ちをすると、デザートイーグルを手に再び敵に突っ込んでいく。金太郎とは違う全て計算どおりの無駄のない動き。

しかしその表情には明らかに疲労の色が見えていた。

「ひゃっはあああああ！」

「っ！いつの間そこに！？」

木陰から新たに現れた敵の奇襲に鬼丸は反応できなかった。デザートイーグルを向けようにも、間に合わない……

ザシュッ

「ぐっ……」

初めて鬼丸の体に傷がつく。それは浅いものだったが人間に斬られたのは初めて、鬼丸のプライドを傷つけるには十分であった。

「この人間風情がつ！」

鬼丸の爪によってその人間は横に引き裂かれる。しかし一人殺したところで状況は変わりはない。殺せど殺せど人数は減りそうもなかった。

「おいおい、40人程度でかすり傷かよ！？これじゃあ、後100人来たらどうなるか分かんねえな！」

「100……人？バカな……どこにそんな人数が！？」

鬼丸が驚愕の表情をする。その様を見てボスは笑い出す。

「後から来るんだよ、残り100人が。それだけじゃねえ、日が昇れば他の盗賊団もやってくる。オメエも終わりだな！ハッハッハッハ！」

「どこにそんな財源があるんですか？私を殺しても何の得にもならないと思うんですけど……」

「それがそうでもねえんだよ！」

「？」

ボスの言葉に鬼丸の頭には疑問しか浮かばない

「実はオメエを殺してほしって言う依頼があっただよ！」

「っ!?!……いったい誰がそんなことを……」

「さあな？だけどその報酬はバカでさえもんだから、こいつらに払う報酬ぐらにはあるわけだ！それに加えてオメエの首をどつかの退魔師に引き渡せば、また多額の報酬がもらえる。ずばり、大儲けだってことだ！ハッハッハッハ！」

「下衆が……」

鬼丸が軽蔑のまなざしで睨みつける。その様子を見てボスが鬼丸にとって衝撃的な一言を口にする。

「へっへ……にしても鬼って言うのもたいしたことねえな」

「……はっ!?!」

「だってそうだろ。魔の中でも最上位の鬼だから念には念を入れて他の盗賊団にも依頼したんだぜ。それがどうよ？俺らだけでも倒せそうじゃない？なあ、野郎共！」

「……」

盗賊達は下衆な笑い声を上げている。鬼丸は俯いていて表情は分からない。

しかし鬼丸に纏わりついている空気の雰囲気微妙に変わってきている。どす黒い殺気……しかし当然のように盗賊達はそれに気づかない。

「それに鬼は桃太郎に倒されちまってから山に引き籠もっているって言うじゃねえか。そんな臆病な奴らが人里におりてきても無駄無駄。早く山に帰っちまえよ！」

「……………けるなよ」  
「ああ？」

鬼丸がぼつりと小さく呟く。しかしボスの耳にはそれは届かない。少し風が出てきた。木々は揺れ、不気味な音を立てている。盗賊共はようやくその変化に気づいたが、もう遅かった。

「ふざけるなああああああ！！！！」

鬼丸の怒りがついに頂点に達した。

**第一章・第十四話：鬼丸、激怒！（前書き）**

ちよつと調子に乗って一日二回更新です。

## 第一章・第十四話：鬼丸、激怒！

「なななな何だこりゃあああ!？」

「うわあああああ! 助けてくれえええええ!！」

「・・・・・・・・」

盗賊共は各々違う反応を取っている。

ある者は、目の前の存在が信じられず目を見開いたり。

ある者は、大声で助けを呼んだり。

またある者は気を失い、失神している。

どれにせよ、目の前の存在に恐怖しているのには違いない。

まあ、どんな人間でも“竜”<sup>ドラゴン</sup>という存在が目の前にいたら畏怖するのは間違いないが。

「な、何で・・・・・・・・こんなところにドラゴンが・・・・・・・・」

盗賊団ブラックガードのボス、キエルドオーは目の前の存在を未だに信じられずにいた。彼は今までたくさんの悪行を重ねてきた。強奪、殺し、暴力・・・・生きるためなら何でもやってきた。彼が今まで盗賊団のボスとしてやってこられたのは、生きるためなら何でもやる実行力と危険を感知する勘が優れていたからだろう。

その勘が自分に訴えかけている。“早く逃げろ”。“あれは抗つてはいけない存在だ”と。

しかし逃げようとしても体が言うことを聞いてくれない。恐怖で体が支配されている。キエルドオーは目の前の恐怖を作り出したであろう小さな鬼を見やった。

「どうした、人間共・・・・・・・・さっきまでの威勢はどうした? それと

もこのドラゴンが怖いのか？」

「ひっ……」

鬼丸が見下すような目でこちらを見ている。しかし今はそんなことはかまっていられない。こっちとしては生きるか死ぬかの瀬戸際だ。

ドラゴンとはこの世界では二面性を持つ神だと考えられている。この国、御伽の国では水を司り人々に恵みと癒しを与える存在だといわれている。

対して西の方にある不思議の国では火を司り、人々に破壊と恐怖を与える神、というよりは悪魔の化身といわれているらしい。

どちらにせよ、決して人間では召喚できるものではなく、それは鬼であつても然りだ。

その不可能をこの鬼は見事にやってのけてしまった。

黒いドラゴンは自らの力を誇示するように咆哮した。

『ガアアアアアアアア！！』

「ひっ！……」

「早く……逃げなきゃ……」

「そつだ……逃げろおおおお！」

一人が逃げ出す、それは軍の士気に大きくかわること。恐怖は人々に伝染し、それは敗北を生み出す。特に今回はならず者も集まりの烏合の衆。

何より大切なのは自分の命であつた。

「うわあああああ！！」

「にげるおおおおお！」

「おい、お前ら！逃げるんじゃないやねえ！金はいらねえのか！？」

「愚かなものだな、人間とは」  
「！」

腕を組み、ドラゴンの前に立っていた鬼丸が口を開く。

「貴様ら人間を繋ぐものは結局、金か……その繋がりも恐怖によつて消え失せてしまった……その程度の人間共が、鬼を愚弄しようなど片腹痛い！我ら鬼は貴様ら人間とは違う！我々は血と誇りによつて結ばれ、その結束は破られることはない！」

「ふ、ふざけるなよ！オメエがどうやってそのドラゴンを召喚したかは知らねえが、数はこっちの方が上だ！夜が明ければ、そのドラゴンを倒せるくらいの間人は集まるんだよ！」

「……まったく、無知というのも甚だしいな……人間がドラゴンを討伐しようとするなら、国を動かしてもまだ分からないというのに……それに貴様は一つ勘違いしている。このドラゴンは“幻”だぞ」

「……はっ!？」

キエルドゥーは間の抜けた声を上げる。

鬼丸が術式を詠唱すると、目の前にいたドラゴンは霧のように消えてしまった……

先ほどまであった威圧が嘘のように消えてしまった。

「うそ……だろ？」

「貴様らは現と虚の境界も分からないのか？まったく……さて、卑しき盗賊よ、私は今腸が煮えくり返っている……」

鬼丸がヒザをついて絶望しているキエルドゥーの元に歩き出す。

ゆっくりと、しかし確実に……まるでその様は死神のようだった。



デザートイーグルの銃口を盗賊の頭に向ける。

「貴様は我が鬼一族を愚弄し、あるうことか私を殺そうとした。その罪は重いぞ、人間……」

「う……たすけ……て……」

「助けて？それはおかしい。私を殺そうとした時点で殺される覚悟は出来ていたはずだ。物を殺すということはそういうことだ……」

鬼丸の瞳は冷え切っている。まるで汚いものを見るように。金太郎と話しているときの表情とは大違いであった。

「それじゃあ、死ね……」

鬼丸が引き金を引こうとしたその瞬間……

「待った！鬼丸！」

「っ！……キンタ？」

鬼丸が何かから目が覚めたように声のした方向を向く。そこには汗をかき、息を乱しながら立っている金太郎の姿があった。

「キンタ！貴方、今までどこに」

「殺しちゃだめだ！」

「……何故ですか？」

金太郎が必死に鬼丸を止めようとする。

鬼丸は怪訝そうな眼差しを金太郎に向ける。

「何故殺しはいけないのですか？こんな下衆な人間、殺してしまっ

てもかまわな

「だめだ！」

「……まさか貴方は退魔師のくせに殺しは怖いと思ってないでしょうね。この世界、殺さなければ殺されることもある。貴方のその偽善が貴方を殺すこともあるんですよ！」

「そんなことない！殺しなんてなくても」

「ひいひいひい！！！」

「っ！逃げるな！貴様！」

「鬼丸！」

キエルドゥーが金太郎と鬼丸の隙を見て逃げ出す。当然鬼丸は撃ち殺そうとするが、それも金太郎の手によって阻まれる。

「キンタ！貴方がいい加減に……」

鬼丸が文句を言おうと金太郎のほうを振り向く。

しかしその文句は金太郎の表情を見ると宙に消えてしまった。

目に涙をためている人間に追い討ちを喰らわすほど鬼丸も鬼ではなかった。

「キンタ……」

「頼む……殺さないでくれ！どんな人間でも、どんなに汚いものでも殺しちゃいけないんだ！頼む……たのむよ……」

私を殺すの？金太郎ちゃん？

「貴方、過去に何か……」

鬼丸は金太郎の顔から目線をそらし、手を振り払う。

依然として金太郎の目には涙がたまっている。それでいて懇願するような表情をしているのだから困ったものだ。

鬼丸はついに根負けした。

「……………いいでしょう。今回は、殺しはしません。それに貴方があったかは聞きません」

「鬼丸……………」

「ただし今回だけです。次会ったら確実に殺します。貴方が何しようと思わず。それでいいですね、キンタ」

その瞬間、金太郎の顔がぱっと明るくなる。その変わりようは何だ？と鬼丸は思ったがグツと堪えた。

金太郎が鬼丸の手を取る。

「ありがとな！鬼丸！」

「……………と、とにかくこれで依頼は終了です。さっさと鬼ヶ島に向かいますよ！」

「えっ！？村に戻らなくていいの？」

「あんな村に報酬なんて最初から期待してません。いるだけ無駄です！」

「ひっでえ言われよう……………」

「さあ！早く行きますよ！キンタ！」

「って、待ってくれよ！鬼丸、早いよ！」

金太郎はもう先に進んでいる鬼丸を慌てて追いかける。鬼ヶ島への道のりは残り半分。途中、寄り道もするが鬼丸と金太郎の旅は順調に進んでいるのであります……………

数刻後、ある場所にて

「く、くそ……あのガキどもめ……次あつたら、ただじゃあお  
かねえ！」

ブラックガードのボスの男、いやだった男、キエルドゥーは鬼丸と  
金太郎が出発した時にはもう山をおりて、もう一つのアジトに向か  
っていた。

彼は命からがら逃げれてものの、他の盗賊団への報酬、雇った傭兵  
への報酬、自分の取り分を報酬に頼っていたため、失敗した今、彼  
の元に残っているのは借金だけである。

これはもはや依頼云々は関係なく奴らを殺さなければ、気が済まな  
かった。

「貴殿に次はあるのか？」

「何？ひっ！……」

キエルドゥーは後ろから声をかけられ振り向く。と、そこには惨状  
が広がっていた。

彼の目の前に広がっていたのは赤、赤、赤……先に逃げたはずの  
子分たちの血。

その光景の中心に立っていたのは、白い日本刀を両手にもった白髪  
に黒い目の男であった。黒と赤の世界に白がたたずんでいた。

白色には何故か赤色が混じってない。

「あ、あんたがやったのか？俺たち、仲間じゃねえのかよ？」

この男は自分たちに依頼したはずの男。キエルドゥーは何故この男  
が自分の子分を殺したのか、意味が分からなかった。

「貴殿等が仲間？……笑わせる……我が主が利用しただけなの

に……」

「あ、主？あ、あんたいつたい何者だよ！？」

男は白色に問いかける。すると白色は鼻で笑った。なぜかそれは男に対する嘲笑ではなく、自分に対する自嘲的な笑いに見えた。

「私か？私は……“犬”だ」

「はっ？」

「私は桃太郎様の犬……ただそれだけ……さて、喋り過ぎたな。そろそろお別れの時間だ……」

「ま、待て！桃太郎って事はまさかあんた……やめろ！俺はまだ死にたくない……」

その瞬間、白い一閃が放たれ、頭領の体が真つ二つになる。あまりに早すぎて目では捉えきれず、その刀身に返り血がつくこともなかった。

彼の感情の感じられない目が空を見る。

「………役立たず共め」

「ありやりやく！？こらまた酷い有様だね〜！」

「………雉か」

犬と言った男が振り返るといつの間にか雉がそこに立っていた。しかしそこまで犬は驚いてないらしく普通に会話を始める。

「そちらはどうだった？」

「うん、まあまあだね。鬼の少年は上々、問題ないよ。ああ、あと一人追加ね。坂田金太郎って言う金髪の少年」

「………それは、強いのか？」

犬が問いかける。すると雉は愉快そうに笑って答えた。

「うん、強いよ!」

「そうか…….ならばいい。私はもう帰るが、貴殿はどうする?」

「うん…….僕も帰りたけれど、“猿”のことが心配だからな。猿のところに行くてくるよ」

「そうか…….ならば頼むぞ」

「うん!任せてよ!」

犬と雉はそれぞれの向かうべきところに向かった。

そして、黒と赤の世界からは誰もいなくなった……

第一章・第十五話：ヒロイン登場の予感……

「キンタ……ここはいつたいどこなのですか？」

「えくと……竹林？」

「ええ、それは分かります。で、ここはどこなのです？」

「……」

鬼丸たちが今いるのは、竹林。竹がうつそうと茂り、夜空を見れば満月が覗いている。しかしそれ以外見ることは出来ず、とても不気味である。

「ま、迷った……」

キンタの嘆きがむなしくも辺りに消えていった。

数時間前

鬼丸と金太郎は盗賊たちを無事退けた後も、変わらず鬼ヶ島に向かっていてた。

その盗賊を討伐したときに、金太郎の過去や、鬼丸の怒りのツボが見え隠れしたが二人は大して気にせず旅を続けているようだった。おまけに桃太郎の手下、“雉”が金太郎の前に現れた。しかし鬼丸曰く……

「たとえば、桃太郎の手下が出てこようと関係ありません。私の目的は“鬼ヶ島の奪回”ですから結局鬼ヶ島に行かなければならないというわけです。それを邪魔するなら誰であろうと叩き潰すだけです」

らしい……

だから金太郎と鬼丸は鬼ヶ島に向けて、道を歩く。歩く。歩く……

「……つて、長すぎだろうが！」

「たしかに……ちょっと休憩しましょうか」

金太郎が道に対する不満を爆発させる。鬼丸はその様子を見て休憩を提案する。

鬼丸と金太郎は木陰に腰を下ろし、鞆から水を取り出した。

「いったいいつまで続くんだよ、この道……鬼丸、地図貸してくれ。地図！」

「パス」

金太郎が鬼丸から地図を受け取る。しかし地図がよくわからないように、地図を逆さまにしたり、時には自分の顔を逆さまにしたりしている。

「ん？この地図よく分かんねえぞ!？」

「自分の顔を逆さまにして分かるわけないでしょうが……  
そうですね……この地図の縮尺は50000分の1。そして第一目標の港町“長関”にたどりつくこの道の直線距離は目測で……  
……40cm。よって実際の距離は20kmということになりま  
す」

「20km……まあ妥当か？」

「しかし実際はもっと長くなるでしょうね……」

「何だよ？」

「あれです」



鬼丸が山を指差す。

「あれはこの国でも指折りの高山です。あそこを越えるにはそれなりの準備と時間が必要。だから商人たちはこの山を迂回して長関に行くそうですよ」

「確かに、でかいな・・・」

「おまけにあの山に生えている植物は主に竹。成長の早い竹ばかりあるせいで昼でも日光がほとんど差さない。竹ばかりで方向感覚を失い、時間も次第に分からなくなる。そのせいであの山は“迷いの竹林”と呼ばれているらしいです」

「迷いの竹林・・・」

「というわけで、あの山に行くことは得策とはいえないでしょう。さあ、早く行きましようか」

鬼丸が立ち上がり、また長い、長い道を歩んでいこうとする。

しかし金太郎はまだ座っており、こう呟いた。

「・・・もしかしたらあの山突破できるんじゃないかね？」

「はい!？」

「退魔師の俺と鬼の俺が森で迷うことはないってことだよ!もしかしたら一日で長関にたどり着けるかもしれないぞ!」

「それはそうかも知れませんが、やめたほうがいいと思いますよ。

山道より平坦な長い道の方が楽ですし・・・ほら、急がば回れ”っていうでしょ」

「“虎穴入らずんば虎子を得ず”とも言うぜ!ほら、行こうぜ!」

「ええっ!？ちよつと待つてくださいよ!」

そして2人は山の中に消えていった。この後2人の行方を知るものは誰もいなかった・・・

「で、現在に至ると……。キンタ、どうする気ですか？」

見事に迷いの竹林で迷ってしまった鬼丸と金太郎。ここがどこかも分からないし、今が夜、ということぐらいしか分からない。迷いの竹林という名は伊達ではなかった。  
金太郎が鬼丸の問いに答えた。

「あゝあ、どうしよつか？まあ、その辺歩いていれば、降りられるだろ。」

「……………」

楽天的なキンタに鬼丸は言葉を失う。突如鬼丸の周りの空気が変わる。しかしそれに金太郎は気づかない。

「……………キンタ、どうする気ですか？」

「えっ？だから適当に……………」

「そういうことではありません。どうやって責任取るか、ということですよ。」

「いや、それは……………」

やっと金太郎がその変化に気づいた。現在の鬼丸の顔は確かに笑っている。笑っているのだが、目は笑ってない。それに加えてやたらと回りの空気が冷たく、痛い……………」

「キンタ、射殺にする？絞殺にする？それともじ・さ・つ？」

「ひっ……………だ、誰か、助けて〜!!!」

鬼丸がデザートイーグルを取り出し、金太郎の命がまさに風前の灯になったとき、急に竹林が明るくなる。まるで昼の太陽のような、その光は尋常ではなく鬼丸は不審な表情を浮かべる。

「何ですか？この光は」

「も、もしかしたら人かもしれねえぜ。俺、見に行ってくるわ。」

「……逃げたな……」

後ろの方で舌打ちが聞こえたのを、金太郎は聞かないことにした。

「で、何かありましたか？キンタ」

光が強いほうに向かっていったキンタにようやく追いついた。金太郎は何故か固まっている。

「あれ見ても、鬼丸。」

「ん？」

金太郎が指した方向に目を凝らすとそこには異様な光景が広がっていた……

「造まる、出てきなさい。」

まず目に付くのは、空飛ぶ牛車であった。黄金で装飾されており目がチカチカする。その周りには人が立っており、何故か空を飛ん

でいる。

その先頭に立つ人はおそらくこの中でリーダーなのであろう、服が周りの人と比べてより派手だ。

その人が目の前の屋敷に命令すると一人のおじいさんが出てきた。金の時計、金ぴかのアクセサリー、豪華な服・・・おじいさんもりーダーに負けず劣らず、金ぴかであった。

おじいさんは酒にでも酔っているんだろか？ふらふら出てきて地面にひれ伏してしまった。

リーダーは続ける。

「愚かな者よ。少しばかりの善行をお前がしたのを見て、お前の助け、と思つてかぐや様を預けたのに、最近はお金によつてお前は変わってしまった・・・かぐや様はただ罪滅ぼしのため、少し地上にいただけだ。お前が嘆こうとも関係ない。早くかぐや様を返したまえ。」

おじいさんは答える。

「かぐやを今まで育てたのは、このオレですよ。それをいまさら、返せ、なんて話の都合良すぎるんじゃないっすかね、マジで？」

「・・・・・・・・おじいさんのしゃべり方はどう考えてもその歳に似つかわしくないものだった。

リーダーは汚いものを見るような目でおじいさんを見る。

「黙れ、愚か者。かぐや様はどこにいらっしやる？答えなければ、この屋敷を吹き飛ばすぞ！」

「かぐやならもうここにはいねえよ。」

「はっ!？」

リーダーが素っ頓狂な声を上げ、驚きの表情を見せる。

「かぐやはもうここにはいねえよ。あの子はもつと外の世界を見るべきだ。今頃、もうこの竹林を抜けたんじゃない？」

「っ！皆の者、かぐや様を探せ！」

「はっはっは！！天人もざまあないな」

空飛ぶ人は八方に飛んでいき、牛車は月に帰っていった。対するおじいさんは満面の笑みを浮かべていた。  
あたりはまた真っ暗になった・・・

「今のは・・・かぐや姫ですか？」

「まあ・・・そうだなあ・・・あのおじいさんは竹取の翁で、あれが天人だろうな」

「・・・・・・・・見なかつた事にしますか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そうだな・・・・・・・・早くこの山を降りるか・・・・・・・・」

鬼丸たちは山道を歩き出した。

鬼丸達が歩き出して半刻・・・鬼丸のどこからともなく取り出した懐中電灯により今の所は順調に進んでいる。

また脅し取ったものじゃねえだろうな、と金太郎は思ったが、今はこれが頼りなので文句は言えない。

「いや、にしても歴史的な瞬間に立ち会っちゃったな、俺たち」  
「そうですね・・・にしてもかぐや姫はどこに行ってしまったのでしょうか？物語通りならあのまま月に帰るはずですが・・・」  
「さあな、おじいさんの言う通り外の世界にいたら、案外ばったり会っちゃったりするかも・・・っのわ！」

キンタが喋っているところに、誰かがぶつかってきた。全速力でぶつかってきたらしくキンタは吹っ飛ばされてしまった。

ぶつかってきた人は長く黒い髪によって顔が隠れてしまっているために顔も表情も分からない。しかし髪の長さと言って少女であろう。

少女は全速力で、しかも走りづらい着物で走ってきたため息が上がっており、とても辛そうだ。何とかして喋ろうとしている。

「はあ・・・はあ・・・どうか、私を、お助けください。はあ・・・追われているんです。」

少女が走ってきた方向を見ると、3人の男が追いかけてきた。よく見ると先ほどの天人だ。

「おう！よく分かんが任せろ！」

「ええ、・・・私は面倒くさいからキンタに全部任せて・・・」

金太郎は快く受け入れるが、鬼丸は凄く面倒くさそうな顔をしている。少女が隠れていた顔を上げ、鬼丸の顔を見つめる。

「何でもいいから、助けてください！」

「・・・はい」

少女はまだ幼さは残っているが、美少女といっても過言ではない。艶のある黒い髪、整った眉に陶磁器を思わせる白い肌……。しかしその何より印象的であったのは、彼女の強い意思を持った黒い目であった。鬼丸をまつすぐに自分を射抜いた目に鬼丸は逆らえなかった。

「キンタやりますよ」

「分かったぜ！」

キンタは起き上がり紫電を、鬼丸はデザートイーグルを構える。天人の1人が話します。

「さあ、地上の人よ。その方を差し出したまえ。抵抗しなければ何もしない。」

「残念ですが、今この少女と私の間に“助ける”という約束をしてしまいましたねえ……。約束を守るのが私のモットーですので、どうぞお引取りください」

「そうなの！？……。まあ、何があつたかはしらねえけど、女の子を追いかけるなんて最悪だな。しかもこんな小さい子を……。あれ、こういうのなんて言うんだっけ？」

「“ロリコン”ですよ、キンタ。」

「き、貴様ら……。もう容赦はせん。覚悟しろ！！！」

こめかみに青筋を立てた天人を筆頭に、計3人の天人が襲い掛かってきた。

「行くぜ！鬼丸！」

「そついえば金太郎といっしょに戦うのは初めてですね」

「そう……。だっ たっ け？」

「ええ。派手に暴れてやりましょう！」  
「おう！」

金太郎と鬼丸の初の共闘が幕を開けた。



## 第一章・第十六話：天人って鬱陶しい！

迷いの竹林。それは御伽の国一番の難所。そこに迷い込んだものは数知れず、魔ですらここは避けるという。そんな迷いの竹林で、今鬼と人間のコンビと天人の対決が始まるうとしていた。

「キンタ、前衛を頼みますよ！」

「援護頼むぜ！鬼丸」

鬼丸は後方でデザートイーグルを構え、金太郎は紫電を持ち三人の天人に突っ込んでいく。

相手の天人は三人。天人とは浄土の人、つまりもう死んでいて幽霊とほぼ変わらない存在。その天人が直接攻撃してくるわけがない。使うとしたら……魔法だ。

「我に宿りし力は炎……」

「我に宿りし力は氷……」

天人二人が詠唱を開始する。属性はそれぞれ炎と氷。二つとももつともポピュラーな属性のうちに入るが、威力は申し分ない。当たれば退魔師とは言えただでは済まない。しかし金太郎はかまわず突撃する。

「焼き尽くせ！熱波！」

「碎け散れ！氷砕！」

「退魔師なめてんじゃねえぞおおおお！」

二つの攻撃、炎の熱風と氷の礫が飛んでくると、金太郎は自分の魔

力を解放する。するとその魔力は雷に変わり、熱風から金太郎を守り、礫を全てはじき落とした。

天人二人の表情が驚きの色に変わる。どうやら退魔師の能力を全ては知らないようだ。

退魔師の利点はここにある。退魔師の基本は接近戦。自分の魔力によって強化した体と武器によって魔と戦う。しかしそれだけではない。金太郎のように自分の魔力を放出、操ることによって単一の魔力属性しか扱うことしか出来ないが、魔法を扱うことが出来る。しかも詠唱なしでだ。

この力のお陰で金太郎は魔術師にもかまわず突撃できるのだ。

「喰らいやがれ！」

「甘いわ！」

金太郎は上段横一線に紫電を振るう、しかし、それは天人には当たらず空を斬る。

天人は好期が来たことでのにやけるが、金太郎も敵に反撃のチャンスを見すみすあげるほど、そんなバカではない。

金太郎は紫電を地面に突き刺し、それを踏み台にして、飛び上がる。

「頼むぜ！鬼丸！」

「何！？」

「了解です」

金太郎の真後ろにいたのはデザートイーグルを構えた鬼丸。天人に標準を合わせ、金色の弾丸を放つ。

ズガンッ！

着弾すると同時に、すさまじい音を立て、土ぼこりがあがる。

「お、おい。いつもよりちょっと強くないか？」

「おかしいですね．．．．いつもと同じはずなのに。どうも今日は力が入ってしまいます」

「へ．．．．．」

「それより金太郎、敵はまだまだ元気なようですよ」

土ぼこりがはれ、金太郎が空を見上げると人影が宙に浮いている。

「そういえば天人は空を飛べるんでしたね」

「おお！すげえな！俺も空を飛んでみてえ！」

「貴様ら．．．．．おい、アレをやるぞ！」

金太郎が戦いの最中とは思えない感嘆の声を上げていると、天人が仲間に合図を送る。

すると、辺りの魔力が二人の天人の回りに集まっていく。二人がやるうとしてるのは、合体魔術。二人以上の魔術師が互いの魔力をあわせ、一人の時より強大な魔術を放つ。極めて強力だが、二人の息が合わなければ放つことはおろか、自分たちの魔力が暴走して使用者が危険にさらされる。だから現在、これを扱える者たちは少ない。

だから金太郎は当然、鬼丸さえもこれは初めて見るものだった。

「へえ．．．．これが合体魔術ですか。興味深いですね．．．．」

「　　って、結構やばいんじゃないか！？あんな馬鹿でかい魔術喰らったらただじゃすまねえぞ！」

『我々に宿りし力は雷．．．．．その力は全てを消し去る．．．．』

もうすでに詠唱は始まっているというのに鬼丸は常にマイペース、

というより自分のことしか考えていない。金太郎はあせり始めるが、鬼丸は笑って答えた。

「大丈夫です、キンタ。アレは雷の魔術。どんな強大な魔術でも雷だったら貴方がいれば何とかあります」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ!？」

「その雷光は神の怒りの如く、また王の再臨を祝う光なり・・・・・・・・」

鬼丸の言葉を聞いて金太郎の顔が固まる。しかし詠唱はとまらない。金太郎は鬼丸に問いかける。

「それって・・・・・・・・俺があ魔術を受けきれっていうことか？」

「それ以外に何か？」

「何でじゃあああああああ!!????」

『響け!轟け!雷帝、降臨!!』

「へっ・・・・・・・・」

天人たちの上空に集まった黒色の雷の雲、それはまるでこの地上を支配する王の威厳を示すかのよう。

雷の色が黒いのは、ありとあらゆる魔力を吸収しているため。その強大な力が金太郎に直撃したのだ。叫び声も上げる間もなく、金太郎は光に包まれた。

「ふっ・・・・・・・・」

「これで終わりだろう・・・・・・・・」

天人たちは共に勝利を確信した顔をしている。

と、その瞬間・・・・・・・・

ズドン！

「！」

「！」

「………きましたね」

ものすごい爆音が鳴り響く。今度は鬼丸が勝利を確信した表情になる。

天人たちは煙の中から現れる人物を見て驚愕する。

「ふ……マジでどうなるかと思ったぜ。死ぬかと思った……」

「な、何故貴様は生きているのだ!？」

「あの雷撃の中で………何故!？」

「金太郎は雷の属性………もしかしたら雷の攻撃を喰らえば、充電できるかな、と思ったんですが………本当に出来ましたね。凄いですね、キンタ」

「………ってお前確信がなかったのかよ!？もし死んだらどうするつもりだったんだよ!？」

「まあ………その時はその時かな、って………」

「………おい!」

「それよりもキンタ、何か体に異常はありませんか？」

「ん?………そういえば、体中がビリビリするぜ………」

金太郎がそう言った瞬間、体中から青白い稲妻が走る。鬼丸は感心するような目で金太郎を見た。

「充電だけでなく変換も出来るとは………本当に退魔師の体と  
いうのは本当に便利ですね」

「? 何のことだよ?」



ロリコン呼ばわりの天人のこめかみには青筋が浮かび上がっている。その形相は先ほどの二人組みとは比べ物にならない。

「いまさらそんな怖い表情されてもね……………」

「貴様らは天人というものを甘く見すぎている……………我に宿りし力は増……………自然の摂理を壊す力……………増えよ、複製！」

「……………！」

「な、何だこりや……………」

天人の魔術、それは上級の魔術師しか使えないといわれている複製（copy）。その名の通り、対象のものを増やす魔術である。魔術師には多量の魔力はもちろん、対象のものの構造を理解する知識も必要となるこの魔術をこの天人はやってのけてしまった。

先ほどのとは格が違うことが分かり、金太郎はもちろん、流石の鬼丸の表情も曇る。

詠唱が終わると天人の持っていた直剣が増えて、増えて、増えて……………無性生殖を行うアメーバのように増え続け、その数は数え切れないほど、金太郎と鬼丸の視界を埋め尽くすには十分な量であった。

直剣が鬼丸と金太郎の周りを囲み、そして……………

「……………放て」

天人がそう言い放つと剣が金太郎たちに襲い掛かる。

「やばっ！」

「……………」

ズドドドドドドドドッ！

すさまじい数の剣が襲い掛かり辺りに砂埃が立ち込める。天人は盛大に笑い始めた。

「ふ……ふはっ！ふはっはっはっは！どうだ！見たか、地上の卑しき鬼どもよ！これが貴様らと私の差なのだ！まさに雲泥の差！私を侮辱したことを後悔するがいい！誰がロリコンだ！？誰がペドだ！？大人が小さい子を好きになって何が悪い！？ふっはっはっはっは！」

「……鬼丸もそこまで言うてはいないのだが、どうやら事実だったらしい。  
しかし今彼を笑う者はいなかった。

「ふふふ……所詮は下等な卑しき鬼と人間の子供……  
私には勝てんのだよ」

ズガガガガガガッ！

「……へっ！？」

砂埃から突如として大量の弾幕が現れる。幸い(?)天人には当たらなかったが何が起こったのか分からず、開いた口がふさがらない。

「な、なにが!？」

「……誰が卑しき鬼だと……」

「何、だと……」

「誰が卑しき鬼が聞いているんですよ！このロリコンの変態の野郎が！」

「ひっ……」



砂埃から出てきた人物、それはまさに鬼のような表情をした鬼丸。デザートイーグルを片手に迫る姿はまさに死神の如く、今の鬼丸を見れば地獄の閻魔でさえもはだして逃げ出すだろう。天人はただ恐怖するしかなかった。

「誰が卑しき鬼と？誰が下等生物と？ふざけるなよ、この天人風情が！貴様らこそつまらないプライドに縋りつく愚かな者だ！消えてなくなれ、このロリコン！」

鬼丸は左手をデザートイーグルに添え、標準をあわせる。

「我が変成する力は増、放てえええええええ！」

ズガガガガガガガガガッ！

「くっ……うおっ！……ぎゃあああああ！」

鬼丸が放った弾は、増の魔術によって増殖し弾幕となって天人に襲い掛かる。宙を舞い、身を翻して必死にかわそうとはするが、それも無駄な努力。一発が足に命中すると、翼を失った鳥のように地面に落ちていく。

「ぐはっ……」

地面に叩きつけられ、もはや勝つ術はない天人に鬼丸は近づいていく。

「感謝しなさい。ついこないだまでだったら私は貴方を殺していましたが、金太郎との約束がありますからね。半殺しで済ませといてあげますよ」

「くそっ……そのお方を返せ……」

「あの少女が何者かは知らない……ですが、貴方に渡すより

はよく扱いますのでご安心を。それでは、さようなら」

鬼丸は手を振り、そこから立ち去る。後に残ったのはボロボロな天人3人と剣やら銃やらで抉り取られた地面や木々のみ。森はまた静けさを取り戻した。

「やあ、金太郎。お疲れ様です」  
「ういゝす」

鬼丸が向かった先にいたのは気を背に横になっている金太郎。鬼丸の挨拶に手を上げて答えた。  
鬼丸が隣に腰を下ろすと金太郎がこう呟いた。

「またオメエの一人勝ちか……」  
「はい？」

「いや……狼男の時も、盗賊の時でもそうだったが、いつも助けられている気がしてさ……今回こそは一緒に戦うから、俺も活躍したかったが、この様じゃあな……」

金太郎はしゃべりながら苦笑する。

金太郎の服装は勝負に負けた天人にも劣らないほどボロボロであった。金太郎が魔術を喰らったこともあるが、基本的に攻撃をかわすことに関しては鬼丸の方がうまい。金太郎はより多く攻撃を喰らってしまうため、戦闘後はいつも服がボロボロになってしまうのだ。

情けない、金太郎がそう思っていると、鬼丸が笑ってしゃべり始めた

「金太郎、今回は私と貴方の勝利ですよ。決して私一人の勝利では

ありませんよ」

「……でも、ボスっぽいロリコン野郎を倒したのはオメエだし、雷術を防ぐ方法を考えてくれたのもオメエじゃん。俺は何もやってねえよ……」

「キンタ、貴方は凄いことをやってくれました。まさか貴方に結界が作れるとは驚きましたよ」

「……」

ロリコン天人が作った剣の弾幕、鬼丸さえ一発喰らうことを覚悟していたあの弾幕を無傷で防げたのは、金太郎が咄嗟の勢いで作った結界のお陰であった。幼いころの訓練、雉との戦闘で学んだ記憶を頼りに作った簡易結界のお陰で、鬼丸はすぐに反撃に転じることが出来たのである。

鬼丸は続ける。

「あの結界があつたからこそ私は無傷なのです。それに貴方がいたお陰で無駄な血を流さずに勝てました。無血の勝利ですよ、キンタ」

「……無血の、勝利？」

「そう。それは私一人では出来なかつたこと……キンタ、自分を反省する前に互いの健闘を称えましょうよ、ほら」

鬼丸は金太郎に手を向ける。それはハイタッチの合図であつた。

「鬼丸……そうだな、くよくよしても何も無いもんない！ありがとな、鬼丸！」

「どういたしまして！」

パンツ！

小気味良い音を辺りに響かせて、鬼丸と金太郎はハイタッチをする。

互いの顔を見ると、互いに笑いあった。

「へへっ！さっきのは俺らしくなかったな……」

「ふふっ……そうですよ、金太郎の女々しい顔なんて見たくないんですから。ああ、励ますの面倒くさかった」

「オイ、テメエ！」

「さあ、キンタ、行きましようか」

「無視かい！？……つてどこに？」

「あんまり女子を待たせるものではありませんよ」

「……あっ！すっかり忘れてた」

鬼丸と金太郎は少女の元へ向かったのであった。

第一章・第十七話：かくや姫つてもっとお淑やかな人だと思ってたんだ（前書き

今日は節分です。

鬼は外、福は内……

鬼丸君には投げないくださいね（笑）

第一章・第十七話：かぐや姫つてもつとお淑やかな人だと思つてたんだ

「あつ！先ほどの……………」

二人が向かった先、待っていたのは先ほど助けを求めてきた少女。鬼丸の姿を見つけると声をかけてきた。

「大丈夫でしたか？どこかお怪我は？」

「……………えっ！？お前、誰？」

金太郎はいつもと違う鬼丸の口調に驚き、動揺する。しかし少女と鬼丸は眼中にないように話を続ける。

「ええ、おかげで助かりましたわ。天人を退けてしまっなんて、お二人ともお強いんですね。」

「まあ、鬼と退魔師だからな……………」

「それは良かった……………もう安心してください。ロリコン変態野郎は私たちが退けましたから」

「それは……………ありがとうございます……………あつ！名前を申していませんでしたね。私の名前は“四方院しほういんかぐや”です」

「そうか。俺の名前は……………って“かぐや”？」  
「ええ」

……………時間が止まった。主に金太郎の周りの。しばらくしてようやく動き出した金太郎が聞き返す。

「かぐやって……………あのかぐや姫？」

「はい。気軽に“姫様”と呼んでください」

「全然気軽に呼べませんね……………」

「　　つてかぐや姫がこんなところにいるのかよ!? さつさと月に帰れよ!」

「なっ!? 私に向かつてなんて口の聞き方を! 無礼者!」

「　　ひでぶっ!」

かぐやの蹴りが金太郎の腹に入る。少女とは思えない威力、金太郎は何とか踏みとどまったが、変な叫び声を上げてしまった。

「恥を知りなさい、地上の民よ!」

「・・・オメエ、やりやがったな! 覚悟しろよ!」

「私を仲間にしてください!」

「テメツ! 無視すんじゃねえ!」

「まあまあ、キンタ。事情ぐらい聞きましようよ。・・・何故我々の仲間などに?」

鬼丸が金太郎をなだめると、かぐやは事情を話し始めた。

「・・・私は天人が来るからおじいさんに逃がしてもらいましたが、私も天人。地上にはどこに行くとこころはありません。どこに行こうか迷っているうちに追っ手の天人に見つかってしまいました。そんな時助けてくれたのはあなた方。まさにあなた方は救世主。今や私が頼れるのはあなた達だけなんです」

「かぐや・・・」

「　　つていうより第一、敵に追われた美少女を助けたら、その人はヒロイン的扱いを受けて仲間になるっていう旅の常識に則るべきではないんですか? それを無視しようとするなんて、しかもこんな美少女を、あなたは主人公以前に男としてどうかしていますよ! というわけで私を仲間にしなさい!」

「・・・お前な」

・・・はて、最近の女は自分のことを美少女と形容するのだろうか？  
確かにかぐやは、美少女といっても過言ではない容姿をしている。  
艶のある長い黒髪、強い意思を持った黒い瞳、etc...  
しかしもうちよっと謙虚になれないのだから、と金太郎は思った。  
女というのは恐ろしい。  
しかしもつと恐ろしいことが目の前で起こった。

「はい、喜んで！」

「　　って鬼丸！？オメエは何言ってるんだ！？おい、目を  
覚ませー！」

「・・・はっ！？」

「はっ！じゃねえよ！何今気が付きました、って言う顔をしてんだ  
よ！・・・おい、鬼丸、何かオメエおかしいぞ。何かあったの  
か？」

「いえ・・・特に何も無いとは思っていますが・・・ただ、  
あの少女に見つめられるとどうにも断れなくて・・・どうした  
んでしょうか、私？」

「お前、それって・・・」

一目ぼれじゃ・・・

金太郎にはそう思えた、だが鬼丸は自覚をしてないようだ。鬼丸自  
身、自分の身に何が起こっているかわかってないらしい。

しかし時期が来ればいずれ気づくだろう、金太郎は敢て口に出さな  
いことにした。

「と、とにかく今回のお前はおかしい。今のお前じゃ、正確な判断  
は出来ないから俺に任せておけ」

「そう、ですね・・・木偶の坊の金太郎でも、今の私よりは役  
立つでしょう」

「オイ、テメエー！」





「キンタ、よく考えてみてください．．．．．」  
「ん？」

「この竹林を越えれば、“長閑”にたどり着きます。そのためなら何でもいい。利用できるものは利用しましょう」

「だけどな．．．．．こんな世間知らずの」

「大丈夫です。長閑にさえたどり着けばこっちのもん。後はあなたの好きなようにしていいですから」

「でもな．．．．．それはそれで」

「キンタ、私の言っていることは正しいんです。いいから私を信じてください！」

「．．．．．お前、目が．．．．．」

金太郎の言葉という言葉を遮る鬼丸の目をのぞきこめば、そこには狂喜が渦巻いていた。

その狂喜は、餌を目の前にした狼男よりも、はたまた快樂殺人者でも敵わないような凄まじい狂喜だったので、金太郎は二の句が継げなかった。

そこで鬼丸が金太郎にとどめをさす。

「それに．．．．．こんなことを招いたあなたにとっても都合がいいでしょう。」

「うつ．．．．．分かったよ。」

責任追及され落ち込んだ表情を見せるキンタに対して、かぐやは心底うれしそうな表情を見せる。

「さあ、かぐや姫鬼が島奪還のために尽力すると誓いなさい。」

「誓います！」

「いいのかな．．．．．？」

「いいんです。さて、改めて自己紹介を。私の名前は鬼丸童子。見たように種族は鬼です。よろしくお願ひします。そしてこれが・・・」

「坂田金太郎だ。退魔師の卵だ。よろしく」

「よろしくお願ひしますね、鬼丸さん。キンタさん」

「・・・」

「・・・なにはともあれ、かぐや姫が仲間になった。歓喜している二人に対して、金太郎は複雑な表情を浮かべていた。

「鬼丸がかぐや姫を仲間にしたそのころ、地上に残った天人たちは一旦集合していた。」

「どうだ？ 姫さまは見つかったか？」

「だめです。見つかりません」

「愚か者！ 月読つきよみ様にどうお詫び申し上げるのだ！？」

「すみません・・・ですがもうすぐ日が上がります。搜索は困難かと・・・」

「五月蠅い！ いいか、我々は何としても姫様を連れ戻さなければならん！ 壹班は北、貳班は西、参班は南、他は東を探せ！」

『はっ！』

集まった天人たちが四方に飛んでいく。指示を出した（ロリコンと噂のあの）天人は息を吐いた。

「まったく・・・役立たずどもめ・・・」

「おお！そのあんちゃん、あの中で一番強そうじゃないかい？」  
「っ！誰だ！？」

天人は後ろを振り返る。さっきまでは自分以外いなかったはずの場所に茶髪の男が立っていた。その男の手には真っ赤な棒が握られていた。

天人はすぐに自分の武器を手取る。

「そんなに焦る必要はないで〜」

「黙れ！誰だ、貴様は！？」

天人が青筋を立てながら男に問いかける。男は笑いながらそれに答えた。

「ん〜……わいの名前は……猿、ちゅうんやけど」

鬼丸たちに更なる波乱が訪れようとしていた

第一章・第十八話：赤、それは如意棒の色（前書き）

やっとテスト終わったあああああ！！

## 第一章・第十八話：赤、それは如意棒の色

「鬼丸さんはどうしてこんな旅をしているんですか？」

「実はですね、我らが故郷、鬼ヶ島を取り戻すために私は旅をしているんですよ。キンタは自分の修行のため。互いの成長の旅になっているんですよ！」

「へえ、すごいんですね」

「ていうか、そんなに簡単に、しかも嘘を加えて言っているのかよ……」

かぐやが仲間になって半刻。今のところは天人の襲撃もなく、次の目的地“長閑”に向かう御一行。すっかりかぐやは溶け込んでしまっただよう。

「ところで、かぐやはなんで地上にいるんだ？月のお姫様だろ？」

金太郎は竹取の翁と天人のやり取りを見て、一番聞きかかったことを問った。するとかぐやは驚愕の一言を漏らした。

「家出です！」

『はっ?!家出?』

「そうですね。月の姫様って言うのも楽じゃないんですよ。それに、もう飽きちゃったんです。ですからわざと、宝物盗んで地上に来たんです。いや、月に比べて地上はいいですね、すばらしいところですよ」

「そんなことで貴族や御門様を惑わすなよ……」

「というか、飽きたって……なんというおてんば姫様。しかしそこがまた……」

「お前……」

キンタと鬼丸のツツコミを華麗にスルーするかぐや。実際この国のトップである“御門”一族まで動かしているのだが、かぐやはそんなことはお構いなした。

というより、いったいお前はとうなった！？と金太郎は声高々に叫びたかった。

「だって“永遠”の中では何もかも無意味ですから……」

「えっ……?」

「さあ、もうすぐつきますよ。もうすぐ長関が見えますよ」

ふと、かぐやが眩きを漏らす。鬼丸が聞き返そうとするが、鬼丸が振り返ったときにはおてんば姫様に戻っていた。

「つきました！ここから長関が見えますよ!!」

そこは山の頂上……

「うわゝホントだ、長関つてでけえなゝ……つて誰が頂上に連れて来いって言った?!?!」

「だって、鬼丸さんたちがいたところ、長関の方向の正反対だったんですよ。だから、ここにくるしか仕方ないじゃないですか!」

「はあゝ……まったくキンタはしょうがないですねゝ……」

「俺のせい!?」

「た、助け……て……」

「!?!」

3人の会話を遮ったのは、竹やぶから出てきた天人であった。しかしかぐやを捕まえようとする気はない。なぜなら彼はもうすでにボ

口ポロで、豪華絢爛な服は見る影もない。  
天人には“血”という概念はないが、もしあったのならば出血多量  
ですでに死んでいただろう。

「ロリコン!？」

「何故このようなことに?・・・」

「そんなことより何か声が聞こえますか？」

うきや・・・うきやきや・・・

こんな状況までこの天人を追い込んだ犯人の声が竹やぶから聞こえ  
てくる。

「うきやきやきやきや!雑魚には興味ないで〜!」

突如竹やぶから赤い棒が飛び出し、天人の体を貫いた。ゆっくりと  
倒れていく天人、その光景を見て3人は驚愕の表情を見せる。

「かぐや!下がってください!」

「わいはそんな姫様には興味ないで。わいが興味あるのは・・・お  
前や、鬼っ子!」

そういつて出てきたのは、茶髪に赤を基調にした服を着ている男、  
切れ目で鋭い目はどこか野性味を感じさせる。

その目はとにかく絶対的な自信にあふれていた。

そしてその右手には先ほど天人を貫いたと思われる赤い棒が握られ  
ていた。

鬼丸とキンタがかぐやの前に立ち、態勢を整える。

「おまえ、誰だ!」

「はあ、名前聞くときはまず自分から、って言う常識知らんのか、



坊主?・・・まあ、ええわ。わいの名前は“猿”や。覚えとき!ゆとり共!」

「“去る”?」

「違います、“猿”です“猿”・・・と言うことは、あなた桃太郎の仲間ですね。」

鬼丸はツッコミと同時にすぐ推測を立てる。その推測を聞いて猿は、にやっと笑う。

「大正解や、鬼つ子!その金ぴか坊主よりも頭ええなあ。でもな頭だけではあの桃太郎には敵わんで!強くないと意味ないしな」

「てか、誰が金ぴか小僧じゃ!?」

「鬼つ子って何ですか?・・・まあ、いいでしょう。向かって来た者は叩き潰す!これが私たちの鉄則です。さあ、キンタ、行きますよ!」

「応!」

互いに武器を構えると、突如あたりの空気が変わる。まさに一触即発。双方動かず相手が動くのを待っていた。

「きゃっ!」

かぐやが何かにつまずいたようだ。その声を合図に、鬼丸たちの始める桃太郎の戦いが始まった。

「行きますよ、キンタ!」

「勝つぞ、オラア!」

「かっかっかっかっかっか!勝負やで!」

「私がデザートイーグルで援護しますので、キンタは前衛を頼みま  
す！かぐやはかくれていてください！」

「任せろ！」

「わいは坊主に興味はないで〜！」

金太郎の初手は逆袈裟切り。斧を扱う金太郎にとって、それが最も  
出しやすい手であった。

金太郎と猿が互いに突っ込んでいき、武器がぶつかりあうかと思っ  
た瞬間、猿の姿がキンタの目の前から消える。

「な、何！？消えた！？」

「森で猿と戦おうとするのがいけないんや！ほれ！」

「………また消えたか」

猿は鬼丸の前に現れる。鬼丸は爪を振るうが、避けられまた見失っ  
てしまった。

森には猿が移動する際に発せられる空気を切る音だけが聞こえる。  
ということとは、それだけ速く猿は動いているということだ。しかも  
三次元的に。

鬼丸はまったくと言っていいほど、猿の居場所が特定できなかった。

「鬼丸！あぶない！」

「っ！？」

「うきゃきゃきゃきゃ………」

………いつの間にか後ろを取られていた。金太郎が叫び、かつ  
それを紫電によって防いでくれていなければ必中、しかも致命傷に

なっていただろう。

鬼丸が冷や汗を流しているのに、猿は感嘆の声を漏らした。

「坊主、なかなかやるな……今の一撃を防がれるとは思ってらへんかったで！」

「そりゃ、どうも……」

「雉のゆうとつたことはほんまやな。でもな……こういうのはどうや！」

猿が紫電を押し返し、金太郎と距離をとる。猿は突きの構えを取り、そして……

「伸びろ！如意棒！」

「伸びたあああ！？」

猿の赤い棒、如意棒というらしい武器、がキンタの方へ勢い良く伸び、金太郎に迫る。恐ろしいスピード、それはまるで弾丸のようだった。

紫電では到底間に合わない。そう判断し金太郎は身を翻し、紙一重でそれを避けるが、すぐ如意棒は猿の手に戻っていき、追撃がくる。

「もう一発やで！」

「キンタ！」

鬼丸が3発、デザートイーグルの弾丸を放ち如意棒の軌道をそらす。逆に言えば、如意棒一突きでデザートイーグル三発に相当するのだから、長期戦になればこちらが不利になるのは誰が見ても明らかであった。

鬼丸は普段は絶対見せない苦しい表情を見せる。

「戻りい。如意棒」

猿がそういうと如意棒は猿の手に戻っていく。鬼丸は聞き覚えのある言葉に反応する。

「如意棒？・・・確かそれはどこそその王族の武器だったはずじゃ・・・」

「よく知つとんなく、鬼つ子。これがわいの武器、如意棒！伸縮自在のこの武器をあんさんらは見切れるかな！？」

「伸縮自在つて・・・それつてかわせない・・・」

突然だが、戦いにおいて最も重要なことは何であろうか。

威力？

速さ？

否、戦いにおいて最も重要なことは攻撃が“当たる”ことだ。どんな強い攻撃も、どんな速い攻撃も当たらなければ意味はない。だから確実に当たる攻撃は強いのだ。

そういう意味では伸縮自在の如意棒は強い武器であるし、鬼丸と金太郎もその恐怖は存分に分かっていた。そしてその如意棒を扱う猿も強いということになる。

猿は如意棒が自分の手に戻ったことを確認して、猿は竹の闇に下がる。真つ暗闇の竹やぶ・・・そこから猿の声が聞こえる。

「うきやきや、あんさんらはわい相手に良くやるで。流石は鬼つて所か？金びか坊主も良くやつとるで」

「完全に上から目線だな・・・」

「確かに・・・しかし私たちのほうが負けていることは事実ですか・・・」

「畜生が！」

「ほな、第二ステージに行こか？ちゅーわけで、頭のいいお前ならこれをどうするかな？」

突如、竹やぶの闇から如意棒の突きが後ろの方から飛び出して来る。鬼丸はそれを間一髪で避け、反撃を試みるが、今度は左から如意棒が来る。

「今度は左！？どこにいやがんだ、あいつ！？」

「ちつ……」

「うきゃきゃきゃ、どうするんや、鬼つ子？金ぴか？」

鬼丸は思わず舌打ちをしてしまう。

今度は前から、次は右から、その次はまた前から……四方八方竹やぶから飛んでくる如意棒に対して、鬼丸たちは猿を捉えることは出来なかった。

「どうすんだ、鬼丸！？このままじゃ、ハア、圧倒的に不利だぞ！」

「……どうすれば……」

鬼丸の嘆きは、如意棒の音にかき消されるだけであった。

「う、う……姫様、どうかお逃げに……」

鬼丸と金太郎が苦戦を強いられているところ、かぐやは猿によって、倒された天人の様子を見ていた。

腹には風穴が開き、如意棒によって叩きつけられた痣は目を思わず背けたくなる程であった。もはやこの天人の運命は……無であらう。

天人は浄土の人。幽霊とは異なる、生も死もない存在。もしも彼が幽霊なら除霊でもされれば地獄にでもいけるだろう。対して人の逝く先は無。天人が死んだら何も残りはいない。

そんな状況にも関わらず、この天人は自分のことを心配してくれる。月から逃げ、裏切った自分を。

「貴方はよくやってくれました。どんな時でも私に仕えてくれて、とても優秀で……まあ、性癖に関していえばとても褒められるようなことではありませんが、私は感謝しています。有難う……」

「う、うう……姫、様……」

「今はゆっくりと眠りなさい。眼を覚ましたときには、貴方は……新しい世界にいるでしょう……」

「姫……様……」

天人はゆっくりと目を閉じ、白い光に包まれる。すうっと、その光が消えると、そこにはもう何もなかった。かぐやの目には煌くものが見えたが、すぐに拭い去った。

「さて……」

かぐやは立ち上がる。月に喧嘩を売ったあの不届き物に天罰を与えるために……

かぐやの手には一本の枝が握られている。それは様々な7種の宝石がついていた。

「少しだけ力を借りますよ……“蓬萊の玉の枝”」



## 第一章・第十九話：First Drive set up!

右、赤い閃光が顔を掠める。

今の攻撃は見えなかった。当たらなかったのは僥倖、金太郎は当たらなかったことに感謝しながらも、冷や汗が頬を伝った。

後ろ、鬼丸の死角からの魔弾の触手。

本来なら見えることのない攻撃を鬼丸はかろうじてかわす。単なる直感、鬼丸は偶然かわせたことを良しとは思えなかった。

「くっ……」  
「……」

桃太郎、第二の刺客、猿の攻撃が始まってしばらくたっているが、鬼丸と金太郎はいまだに有効策を掴めていなかった。

猿の攻撃はまだ続いていた。むしろ激しさを増している。猿の武器、如意棒は伸縮自在の棒、猿は如意棒とこの竹林の地形を利用して、金太郎と鬼丸の視覚外から攻撃を仕掛けていた。四方八方飛んでくるそれは一発一発がまさに必殺の一撃。木々は壊れ、地面はえぐりとられている。もちろん反撃する機会など与えられず、ただ避けるしか選択肢がなかった。

鬼丸とキンタは背を互いに預けながら、必死に如意棒を防いでいた。

「鬼丸！？そつちは大丈夫か!？」

「ええ、何とか。こつちは……キンタ、前!」



金太郎が振り向く、すると目の前には如意棒の魔の手が迫っていた。

「えっ……………」

「くそっ……………」

鬼丸が金太郎を突き飛ばし、如意棒から金太郎をかばう。お陰で金太郎は事なきを得た。が、その代償は大きく鬼丸の左腕には大きな風穴が……………」

「ぐっ……………」

「鬼丸！」

状況は思わしくない。左腕からは血があふれ出し、地面に滴り落ちる。鬼丸は精神的だけでなく肉体的にも追い込まれることとなった。左腕とは鬼丸の利き腕、このまま時間がたてばデザートイーグルさえ扱えなくなる。あまり時間はかけてはいられない。しかし、猿の姿は見据えることは出来ない。

鬼丸は大きく息を吐き出し、金太郎に言った。

「キンタ、私は負けるのは嫌いです……………」

「はっ!？」

この場にそぐわない内容に金太郎は思わず聞き返した。

「私は負けるのは嫌い……………」しかし、こいつはどんなにがんばっても私一人では勝てないでしょう。でも今や私は一人ではない。だからキンタ……………」私に力を貸してくれませんか？」

「そんなの……………」当たり前だろ！」

金太郎と鬼丸は立ち上がる。確固たる意志を持って。鬼丸と金太郎の表情にもはや苦しみはなかった。

「キンタ、左腕がやられている以上、時間はありません。一発でケリをつけますよ！」

「分かった！俺が奴の攻撃から守るから、頼むぜ。鬼丸！」

「ええ！分かりました。それにしても私たち……………」

「ん？」

「さつきはくさかったですね……………背筋がゾワってしまいましたよ」

「それは言わない約束だぜ！」

金太郎と鬼丸はいつものやり取りをしてから各自、自分の役割を果たす。

金太郎は両手を合わせ、詠唱を始める。

「我に宿りし力は雷……………」

金太郎の足元に金色の魔方陣が描かれる。それは結界の魔法。全方位を囲む結界ならば、猿の攻撃も防ぐことは出来る。

しかし天人のときは偶発的に出来たもの、いささか金太郎は結界の修練が足りなかった。

「その力は我らを守る盾となる結界……………」

それでもやらなければならない。やらなければ自分たちが負けるのだ。金太郎は全神経を使い、集中する。

魔方陣がより強く光出し、金太郎は詠唱を叫んだ。

「電磁結界、First Drive set up……………Cr

eat e!

「な、何やと!？」

「おお………」

金太郎と鬼丸の周りに雷の結界が張られる。それは如意棒をはじき、鬼丸に時間を与えるのに十分なものであった。

鬼丸は感嘆しながら、自分のなすべきことを遂行する。

「これなら十分……後は任せてください、キンタ！」

「おう!頼むぜ、鬼丸！」

「……我が変成する力は滅<sup>めつ</sup>……全てを壊し、殺し、滅ぼし、犯し、消し、呪い、万物から忌み嫌われる力………」

鬼丸も変成の詠唱を開始する。鬼丸の意識が深い、深い闇へと墮ちていき、鬼丸はその闇の中で一人、ポツンと立っているような感覚に襲われる。

その空間の中の気配は二つ。一つは自分の側に立っていて守ってくれる者、もう一つは自分の周りを高速で飛び回っている。

その気配がするのは………左だ!

「滅せ、滅せ、全てを滅せ!貫け、シルバーバレット！」

ズドン!

デザートイーグルが通常時では考えられない音を轟かせると、これまたいつもと違う銀色の弾が発射される。銀色の弾丸は鬼丸の狙い通りにまっすぐ進み、そして………

「っ!………のわっ!」

如意棒を持って攻撃態勢に入っていた猿に当たった。突然の不意討ちに猿は如意棒で防ごうとする。

ガキンッ!

弾丸に当たった瞬間、如意棒がはじけた。如意棒が宙を舞い、鬼丸の後ろに落ちる。

鬼丸は猿にデザートイーグルを向けた。

「さあ、武器がないあなたの負けです。猿!」

猿が竹林の闇から両手を挙げて出てくる。

「おうおう、まさかあの攻撃が防がれるとはな……それに驚いたで、坊主。あんさん結界もはれるんやな……感心するわ……」

「まあな……」

金太郎は結界を解き、ようやく一息つく。と、同時に力が抜け地面にひざを突く。

「キンタ!?!」

「……大丈夫。ちょっとふらついて……緊張がなくなっただけかな?」

「……もう大丈夫です。私たちの勝ち、ですから」

「まさかあんさんら、もう勝負がついた、と思ったらへんやろうな。」

「何?」

猿はケラケラ笑い出す。

「何言っただけやがる?! もう勝負はついただろ?」

「これだからあんさんらは子供なんや！ほら、こついつ言葉あるや  
る。」試合に勝って勝負に負ける」ってな！」

「……それ微妙に意味取り違えてないか？」

鬼丸はあたりを見渡す。まだ奴の切り札が隠されている。鬼丸の目  
に地面に転がっている如意棒が留まった。

「……まさか!？」

「もう遅い！伸びろ、如意棒!！」

刹那、如意棒が独りでに鬼丸の方に向き、鬼丸に向かって突きがは  
なたれる。

鬼丸は避けようとするが、もう遅い。

キンタが庇おうとするが、間に合わない。

鬼丸の周りの時間が遅く感じられ、死を覚悟したとき少女の音が響  
く。

「月光・望月!」

「!?!」

如意棒は突如出現した光の壁に阻まれ、力を失ったのか、そのまま  
地面に落ちていく。

誰もが予想できない展開、特に猿はその光景に驚愕し開いた口がふ  
さがらなかった。

先ほど銃を突きつけられていたときでも、余裕の表情を見せていた  
彼からは考えられない表情だった。

「これなんだ？光の壁、って言うよりは球体に包まれているって感  
じだぞ。」

「こんな魔法は見たことありませんね・・・」

「当たり前です。私の宝具は唯一つなんですから。」

「かぐや!?!」

「ふふふ・・・」

鬼丸と金太郎が見上げると、月をバックにかぐやが宙に浮いていた。そして月のお姫様は不敵な笑みを浮かべながら、舞い降りた。

第一章・第十九話：First Drive set up！（後書き）

ついに記念すべき20話到達！

今後とも誰も知らない御伽話をよろしくお願いします！

第一章・第二十話：月光・七夜！そして長閑へ……………

かぐやが地上に舞い降りたとき一番速く正気に戻ったのは、一番驚いていた猿であった。猿はかぐやに問う。

「あ、あんさん、何やった？」

「ふふふつ、驚きましたか？これは私の宝具の一つ“蓬萊の玉の枝”です。さあ、戻って、月光・帰化」

かぐやがそう言うと、鬼丸たち包んでいた光の壁がなくなり、光が蓬萊の玉に戻っていく。

「おお……………なんだかすげえぞ！」

「流石です、かぐや。美しい……………」

「お前な……………」

「ふふん」

鬼丸が再び惚けると金太郎は冷たい視線で鬼丸を見る。

そんなやり取りを無視して、かぐやがどこか誇らしげに余裕の笑みを浮かべ、蓬萊の玉の枝を猿に向ける。

「私は珍しく怒っているんですよ。自分の部下の天人を殺されて、さらにはそれを雑魚だと……………寝言は寝てから言って欲しいものです。貴方ごときが我ら天人を侮辱することなんてありません。まして劣っていることなど絶対に……………私がそれを教えてあげます！」

「嬢ちゃん。年上には気使うべきやで……………」

「私はあなたよりも遥かに年上です。それに……………私のことは“姫様”とお呼びなさい！月光・七夜！！」



蓬莱の玉の枝の宝石の部分が光り、かぐやの周りに七つの光の玉が浮かぶ。それぞれが七つの色に光り、猿を囲むと猿に向かって光が放たれる。

「なっ・・・ちっ！」

猿が驚異的な身体能力で飛び、体を捻ってぎりぎりのところでかわし、とつさに落ちている如意棒をとる。

「なめんなよ、嬢ちゃん！伸びろ、如意棒！！！」

勢い良く放たれる如意棒。かぐやは冷静にそれを見ている。

「おい、かぐや！どうする気だ！このままじゃ当たっちゃうぞ。」

「ちよっと黙ってください・・・月光・望月！」

蓬莱の玉が再び光り、光の玉が集まり光の球体がかぐやたちが包む。

「な、何やと？」

「さあ、どうしてくれましょう？あなた程度では変幻自在の月に勝てない・・・さっさとおとなしく殺されてください、この愚民が！」

「ふん！なめとんやないで！それに・・・あんさんは良くても鬼っ子は限界らしいしな！」

猿がそう言い放ち、かぐやが後ろを振り向くとそこには今にも倒れそうな鬼丸の姿。鬼丸の足元には血が溜まり、顔色は真っ青になっている。

「おい、鬼丸、大丈夫か？」

「ええ、ちよつと……血が止まってないことをすっかり忘れていました……ちよ、ちよつとやばいかも……」

「早く止血しないと！」

「……」

鬼丸が苦しそうな表情を見せると、かぐやは再び蓬萊の玉の枝を取り出し、それを振るう。

「……お猿さん。勝負はまた今度にしましょうか。月光・新月」

周りの金色の球体が黒く染まっていく。かぐやは薄く笑い、猿がようやく状況を理解すると凄まじい形相で叫びだす。

「おい、待てや！逃げる気か？」

「“逃げるが勝ち”って言葉もあるんですよ、お猿さん」

望月がだんだん黒に染まっていく。猿は追いかけてよつとするが止めることは出来ず、完全に黒に染まったときには、誰もいなくなった。

「ち、ちくしょうがつー！！」

「あはははは、まんまと逃げられてやんの。ばっかでー！あははは」

いつの間にか猿の後ろには1人の男が立っていた。男は黒い髪と黒い目、そして黒い大きな翼の猿より若い男、いつぞや金太郎を襲った雉であった。

「“雉”……ぶち殺すぞー！！」

「おお、こわい、こわい。まったく、八つ当たりはやめてよ、鬱陶

しい……」

「あさんだってあの金ぴか坊主に負けとるやる！悔しくないんか！？」

「ないね。だって僕専門じゃないし」

雉がきつぱり言つと、猿は鼻を鳴らして、不機嫌さをあらわにした。そんな猿をなだめるかのような口調で雉は言う。

「それよりさ、こんなところで突っ立っていて良いの？早く鬼ヶ島に戻らないと“犬”に手柄取られちゃうよ」

「わかつとるわ！ったく……情報屋のくせにうるさいんや、お前は。」

「あはは、僕はお節介なんだよ。さあ早く、戻ろつよ。」

猿はうつとうしそうな顔を向けながら、竹やぶに消えていった。雉もそれに続き、闇に消えていく。辺りには虫にざわめきしか残らなかった……

ふわふわ、ふわふわ

夜、街の外の人目のつかないところに突如として黒い球体が現れる。それはふらふらと辺りを飛び回り、何かは検討もつかない。

「ちよつとかぐや、この中狭いんだけど！」

「ちよつと位我慢してくださいよ。これぐらい我慢できないとは、退魔師の名が廃りますね……」

「んだとゴラア！」

「ちよつと、かぐやもキンタもあんまり動かないで……あんま

り動くと……いたつ、傷が……」

……中からは声も聞こえてくる。本当に何がなんだか分からない。もしここに他の誰かがいれば大騒ぎになっていただろう。正体不明の黒い球体はしばらく辺りを漂った後……地面に落ちた。

ドスン

「いたつ、壁に頭ぶつけた！」

「もうちょっと静かに降りられませんか？」

「それでも気をつけたほうなんですけどね。まあいいや、月光・帰化」

帰化、という言葉霊がかけられると黒い球体はその形を保ちきれず、崩壊を始める。中から現れたのは二人の男と、一人の女……坂田金太郎、鬼丸童子、そして四方院かぐやの三人であった。

「ふう、やっと出れた」

そういつて腕で顔を拭いたのは坂田金太郎。急に狭いところに入られて、ようやく出られた事で開放感にあふれた顔をしている。

かぐやは別段驚くこともないのでいつもどおり、優雅に。そして鬼丸の顔は……真っ青に染まっていた。

「ああ……血が……」

「ああ、ごめん……つてか早く治療しないと！お前の顔真っ青になってんぞ！」

如意棒で貫かれた鬼丸の左腕は血で赤く染まっていた。染まるどこ

るかもはや血の色しか見えない。人間であればとつとつに出血多量で死んでいたところだろう。鬼である鬼丸だから大丈夫なのだ。

しかしそれでも危険なことにはかわりはしない。このまま放っておけば鬼丸は死んでしまうだろう。

だが最近やつと結界の魔術が使えるようになった金太郎が、治療の魔術など知るはずもない。何も出来ないでおろおろしている金太郎にかぐやはあきれたような眼差しを向ける。

「まったく、使えない人ですね。それでも私のお供の1人なんですか！？この役立たず！」

「ひどい言われよう……。ってか、いつからお前のお供になったんだよ！それにそんなに言うなら鬼丸の傷、治してみやがれ！」

「まあ、そんなにあわてずに。月の姫に出来ないことはないんですよ。……月光・癒華<sup>ゆか</sup>」

かぐやがそう言って手をかざすと、かぐやの手が光り、鬼丸の傷がみるみる治っていく。鬼丸よりも驚愕の表情を見せるキンタを見て、かぐやはどこか誇らしげに笑っている。

「ふふん。どうです？鬼丸さん、金太郎」

「……。別に、凄いななんて思っ  
てねえからな！」

「……。すごいですね。その武器の名は？」

比較的素直に関心している鬼丸と素直ではない金太郎。そしてかぐやは鬼丸の質問に答える。

「当然です。見るたびに姿かたちが変わる月の様に、あらゆる姿に変わるこの武器、月光<sup>げっこう</sup>は私専用  
に作らせた、言わば宝具です。月の力の集大成のこの武器をなめてはいけませんよ」

「……ですつて。キンタ」  
「な、なめてなんかねえよ……」

かぐやは月光の説明に一息つかせると、唐突にこんな事を言い出した。

「ところで、お2人とも、やっとつきましたね。」

「へっ？どこに？」

「何ボケているんですか？ここは“長閑”ですよ。」

『はっ?!』

鬼丸と金太郎はあたりを見渡し看板を見つけた。

ようこそっ！全ての物がそろつ町、長閑へ！

「……」

「嘘だっ!!!」

「嘘じゃないですよ。ほら、早く宿を探しましょうよ。私もう眠いんです。」

確かにあたりはかなり暗い。夜明けの前は最も暗い、というが今はそのくらいであろうか。竹林で迷い、天人と戦い、そして猿との激闘……この時間は妥当であろう。そして一晩中おきていて、もう眠いのも頷けた。

かぐやに言われるがままに鬼丸たちは長閑に入っていく。

そこでふと、鬼丸の頭に疑問が浮かんだ。

「おや？キンタ。いつの間にリーダー変わったのでしょうか？」

「……十中八九、いや、100%お前のせいだと思うがな……」

「・・・」

「？」

「何話してるんですか？早く行きますよ！」

何がなんだか分からない表情をしている鬼丸を放っておいて、金太郎も門をくぐって長関に入った。

とにかく鬼丸と金太郎は鬼ヶ島にもっとも近い町、長関にたどり着くことが出来たのであった。

## 第一章・第二十一話：どうやって鬼ヶ島に行くんだよ！？

長閑。御伽の国屈指の貿易都市であるこの町は、人口約1200万人。世界的に見てもこの都市ほど高い生活水準を保っている都市はなく、世界の三大都市に数えられる。海に面しており、世界のあらゆる都市と貿易を行なっているため、先の看板にあったとおり“全ての物がそろろう”といっても過言ではない。また最近では観光にも力を入れており……

「この情報は、今は要らないですね……」

「ん？パンフレット読んでたのか？」

鬼丸はさつき道で拾ったこの町のパンフレットの情報をまとめるのをやめた。この都市で一番重要なことは、鬼が島に一番近いことで、今重要なのはどうかやって鬼が島に行くかだ。もしかしたら連絡船の一つでもないかと思ってパンフレットを見たが無駄足だったようだ。

「何か書いてあったか？」

「ええ……鬼ヶ島に向かう手段がないということが」

「ふん……ってそれってかなりやばくないか!？」

鬼丸の前を歩いていた金太郎が驚いた表情をして振り向く。

「いえ……これは逆にチャンスでもあります」

「えっ？何で？」

「それは」

「鬼ヶ島に向かう手段がない……ということは、逆に言えば桃太郎たちもこちらに来る手段がないということ。そして援軍はない。だから敵は最大でも桃太郎、猿、犬、雉の4人だけ……とい



うことですね、鬼丸さん！」

「ええ……流石かぐやです！」

「お前ら……」

鬼丸の言葉を遮って説明したかぐや、そしてそれを良しとしてしま  
う鬼丸に思わずあきれた表情になってしまう。

彼女の名前は四方院かぐや、取物語で有名なあのかぐや姫であり、  
迷いの竹林で新たな仲間になった少女。月光”という変幻自在の武  
器を扱い、そして昨夜勝手に宿の最高クラスに予約し、一気に金太  
郎らの資産を破産させかけたわがままガールである。

そんな金太郎にとって悪魔の（金銭的な意味で）一夜を過ごし、今  
は朝。早速一行は鬼ヶ島に向かっていて途中であった。

金太郎は鬼丸の隣にいるかぐやに問いかける。

「ていうかさ、こんなに簡単に来ること出来るんだったら、歩く必  
要なかったじゃん！」

「“月光”を使うのは結構疲れるんですよ。あの時は緊急でしたし、  
仕方なく、です。というか姫様とお呼びなさい！」

「……」

「……この様さまである。思わずため息ためいきをついてしまう。

しかもそれを鬼丸は見逃しているのだから性質たが悪い。恋は盲目、  
とは言うが、金太郎は辟易へきえきしてしまう。

これ以上付き合っているは何かが壊れる気がする、金太郎はそう思  
い先に進む。

しかし二人の会話も気になってしまい、耳を傾ける。

「それにしてもかぐやの武器は凄いですね。どれほどの威力があるんですか？」

「そうですね．．．破壊力、というものは期待は出来ませんが、対多数人数においては強力です。この町の間人くらいなら全滅させることぐらいならできるでしょう」

「それは凄い！この一件が片付いたら世界征服でも目指しますか？」

「それはいいですね！」

「はははははははは．．．．．」

「うふふふふふふ．．．．．」

「いったいどんな会話しているんだよ？．．．．．」

このまま二人で会話をさせたら、さらに大変なものが壊れる気がする。

金太郎は二人の会話を遮るためにわざと大きな声で鬼丸に問いかける。

「鬼丸！これからどうするつもりなんだ！？」

「そうですね．．．．公共の渡航手段がないと分かれば、自力で探すほかありません。幸いここは漁港もある。もしかしたら船乗りの一人や二人見つかるかも知れません」

「よし、さっさと行こう。今すぐ行こう。なっ！鬼丸！」

「．．．．．なんだか今日のキンタはいつも違いますね。何か悪いものでも食べましたか？」

「拾い食いでましたんじゃないですか？怪しげなたこ焼きとか、お好み焼きとか．．．．．」

「んなもん食うかっていうの．．．．．」

そして意外と庶民的だな、月のお姫様は、と思いつながら金太郎と二人は港に向かった。

「ところでキンタ、長関の漁獲量が世界一位であるという話はご存知ですか？」

「？いや、全然知らなかった」

海岸に向かう途中鬼丸が不意にこんな話を切り出した。

鬼丸曰く……

長関はもともとただの港町。暖流と寒流の潮目にあたるため、様々な種類の魚が取れるのだ。

その町が貿易港として認められたのはちょうど十年前。とある貿易企業がここに本社が出来たのが始まりである。今では御伽の国のみならず、世界で最も有名な都市のひとつとなっている、とのこと。

金太郎はどこでそんなことを調べたんだろう、と思いつつ聞いていた。

「で、つまるところ何だ？」

「つまりは……そんな大きな港町ならこの海を渡らせてくれる人はこの中に一人ぐらいいるでしょう、という話です」

鬼丸たちがついた漁港、そこには漁を終え、取れた漁獲類を水揚げしている漁師、それを早速調理している者、店を構え新鮮なものを商売している者、そしてそれを買って求める人々……

三人の眼前には溢れんばかりの人で埋め尽くされていた。

「すげえ・・・・・・・・・・」  
「うわあ・・・・・・・・・・」

金太郎は感嘆の声を漏らし、かぐやはどこか嫌そうな顔をする。

別段珍しい話ではない。普通の人ならば圧倒的な規模に驚き、人ごみを嫌う人ならば辟易する。それくらい港町は人で賑わい、規模の大きいものであった。

もちろん前者は金太郎、後者はかぐやである。

「この中ならば海を越えてくれる人は一人くらいいるでしょう」

「一人どころか万人でもいそうだけどな・・・・・・・・」

「とにかく、この中で手当たり次第に聞きまわって、私たちの運んでくれる人を探しましょう」

「よし！」

「はい！」

「では行きますよ！」

一行は人の波を漕いで進んでいった。

30分後

「む、無理だあああああ！」

金太郎は人に押し流され、いつの間にか路地裏にいた。

本当に一瞬の出来事であった。人ごみに入った瞬間、鬼丸とかぐやとはぐれ、何とかして情報を聞こうにも、客と間違えられ断るのに苦労し、どこかの店が安売りしているとその方向に押し流される。そしてその中で揉みくちにされ、命からがら逃げてきてやっと現

在に至る……

路地裏に座り込んだ金太郎は精魂果てた顔つきになっていた。

「おばちゃん怖えよ……」

「キンタ、そんなところで座り込んでどうしました？」

金太郎は声がした方向を見ると、そこには何事もなかったかのような表情の鬼丸が立っていた。

「……どうしてお前、大丈夫なの？」

「だって、路地裏で聞き込みしていましたから。表通りで聞ける情報なんて安売りぐらいなもんですよ」

「確かに聞こえてたわ、安売りの情報……」

鬼丸の言葉を聞いて金太郎の顔にますます疲労の二文字が浮かび上がる。

「キンタ、大丈夫ですか？」

珍しく鬼丸の口から心配の声がかかる。

「大丈夫じゃないかも知れない……」

「そんな言葉言えるなら大丈夫ですね。実はこの先に漁師の共同生活所があると聞きました、そこならば一人は見つけられるでしょう。さっさと行きますよ、キンタ」

「……やっぱお前、鬼だわ……」

「鬼ですけど何か？」

金太郎は重い腰を上げ、鬼丸の後についていった。

「ここがそうか？鬼丸」  
「おそらく……」

歩いて数十分、金太郎と鬼丸は漁師の共同生活所というところに来ていた。変哲もないただのアパート……。そこで自分の服を洗っている若い男に話しかけた。

「あの……ちよつといいですか？……」  
「ん？何だ、お前ら？」

若い男は警戒のまなざしでこちらを見ている。なるべく丁寧な口調で金太郎はしゃべって、警戒を解こうとする。

「申し遅れました。旅をしている坂田と申す者です。一つ頼みごとがあつてきたのですが……」  
「私たちを鬼ヶ島に連れて行ってください！」  
「モロ直球！？」

金太郎の努力もお構いなしに放った鬼丸の言葉で水の泡。青年は不審者を見るような目つきになっている。

「親方！何か、あの島に連れて行けつて言う金髪と“チビ”が来てますよー！」  
「この野郎……私のことをチビと言いましたね。ぶっ殺し申し上げる！」

「落ち着いて、鬼丸！」

鬼丸を羽交い絞めにして押さえつけていると、部屋から金太郎よりも一回り大きい男が現れた。金太郎でさえちよつと見上げなければならぬ。

おそらく彼が親方なのだろう。

「お前ら、名前は？」

「あつ……自分の名は坂田金太郎。そしてこつちが

「

「鬼丸童子。あなたは？」

「健たけしと呼んでくれ。で、あんたら鬼ヶ島に行きたいって言ってたな？」

「ええ」

「悪いことは言わねえ。あそこには行かないほうが身のためだぜ」

「何故？」

何故、そう問われると言葉に詰まってしまふ。この餓鬼達は常識というものを知らないのだろうか？

「お前らな……あそこには桃太郎って奴がいることぐらい知らねえのか？桃太郎を倒そうと腕利きが何度もあそこに行こうとしたが、誰も帰ってきた奴はいねえんだぞ」

かつて桃太郎が鬼ヶ島を制圧したとき、桃太郎を倒そうと多くの退魔師や魔術師がこの海をわたった。

在る者は自分の腕を試すため。

在る者は鬼ヶ島に残された財宝を狙うため。

また在る者は桃太郎という人物を調べるため。

多くの人間が渡ったが、生還者はゼロ。

それ以後鬼ヶ島に渡るものはいなくなり、長閑では無茶なことをすることを“鬼ヶ島に渡る”といわれるほど、この話は有名となった。

だから当然、鬼丸たちを止めようとした。だが………

「だから？」

「はっ！？」

鬼丸は当然のよう聞き返した。

「だからって、お前……要するにあそこに行く奴は死ぬってことだぞ。お前は死にたいのか！？」

「全然」

「ならなんで！？」

「……別に私たちは死ぬ気はありませんし、殺される気もありません。ただ私たちはあそこに行って、桃太郎を倒さないといけないですよ。一族のためだね」

「俺はただの付き添いだけだな」

「やる、やらないの話じゃない。やるしかないんですよ。それを邪魔するものは叩き潰すだけです」

鬼丸は健を見上げる。鬼丸の方がはるかに小さいのはずなのに、何故か大きく見える。威圧感、鬼丸には確かにそれがあった。そして健はそれに屈するしか選択肢はなかった。

「……分かった」



「じゃあ、あなたが  
「ただし問題がある」

鬼丸と金太郎が歓喜すると、健がそれを遮る。

「な、何が問題なんだ？」

「・・・・・・・・俺たち、鬼ヶ島に渡れねんだ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・なんだって

！？」

鬼ヶ島直前にきて鬼丸と金太郎は大きな壁、もとい波が立ちはだか  
った。

第一章・第二十二話：ウラシマを探せ！

「……俺たち、鬼ヶ島に渡れねえんだ……」  
『……なんだって！？』

鬼丸と金太郎の叫び声が辺りに木霊する。うるさそうに耳をふさいでいる健に金太郎は突っかった。

「おい、何で漁師が鬼ヶ島に行けねえんだよ！？すぐ目の前じゃねえか！」

「んなこと言われてもな……」  
「何が問題なんですか？」

鬼丸が問いかける。と、健は言いづらそうにしぶしぶ答えた。

「……ここと鬼ヶ島の間には、“竜神様”がいるんだよ」

「“竜神様”？」

「竜神様っていうのは水を司る神様さ。水って言うのは、俺たちに欠かせないものだが、時には災害を引き起こす……。それと同じさ。竜神様がいるお陰で、ここらへんには特殊な海流が巻き起こって魚が集まって、俺ら漁師は助かっているんだが、その海流のせいで鬼ヶ島に行こうとすると波に押し流されるんだ。だから俺らは行けねえんだよ」

「なんてはた迷惑な神様だ……」

「……ならどうやって桃太郎や他の人は鬼ヶ島にいったんですか？神様相手じゃ、太刀打ちできないですよね」

「ああ……。別にいけないわけじゃないんだ。海流を読んで船を操れば……。ただそんなことが出来る奴はほとんどいねえ」

「そんな……」

健の話聞き、鬼丸は半分絶望していると健の弟子が口を開いた。

「ウラシマさんなら行けるんじゃないっすか？」

「ウラシマさん”？誰です？」

健の顔が半分引きつる。

「ウラシマさんはここらへんに住んでる船乗りっすよ。船乗ることだけは凄く上手くて、それこそ親方よりも……」

「雲泥の差？」

「そうそう、雲泥の　　いてっ！」

「　　バカか、オメエは！さっさと片付けしろ！」

「は……い……」

思いつきり殴られ、弟子が頭をさすっていると、対する鬼丸たちは喜びに満ちた表情をしている。それこそ踊りだしそうなくらい。

先ほどまでとのギャップに健はちょっと引いた。いや、だいぶ。

「健さん。それではその人に会えば鬼ヶ島につれてってもらえるんですね！」

「ああ、まあ……」

「やったな、鬼丸！」

「はい、キンタ！早速行きましょう！」

「おう！」

「ちよつと待て！お前ら……。ああ、行っちゃった……。ウラシマさん、変人だから大丈夫かな？……」

健の呟きが鬼丸たちの耳に届くことはなかった。

「で、私たち出てきてしまったわけですが……」

「そうだな、鬼丸」

「重要な情報を聞いて来たわけですが……」

「聞いたな、鬼丸」

ここは浜辺。鬼丸と金太郎は我を忘れて走り出し、ここまでダッシュで来てしまった。

今では二人とも何故か明後日の方を見ている。

「そもそもウラシマさんがどこにいるのかさえ聞いてませんでしたね……」

「なんてバカなんだ、俺たち……」

見事なまでのorz。

砂がヒザと手に食い込んで余計痛かった……

「畜生……ここまで無駄足かよ。おい、鬼丸、もう一回戻るか？」

「いや、待ってください……私たちには先にやる必要があります」

「？ そんなのあったっけ？」

金太郎は首をかしげる。鬼丸は至ってまじめな顔で答えた。

「はい。まずはかぐやを探さないと……」  
「それが最優先かよ!？」

海の方を見やれば、小さいながらも鬼ヶ島が見える。そんな目標を目の前にして何故そんな悠長なことが言えるのか、金太郎にはそれが理解できなかつた。

「かぐやは曲がりなりに私たちの同士であることには変わりありません。同士は仲間。あなたは仲間を放っておけますか？」

「そりゃ、出来んが……」

「ですからかぐやと合流しないと。今頃一人で寂しくて泣いているかもしれないよ」

「あの姫様が?ありえんだろ」

金太郎と鬼丸はとりあえずわがまま姫様を探すこととなった。

思いの外、かぐやはすぐに見つかった。というのも鬼丸たちのすぐ後ろにいたからだ。

「鬼丸さん。そこで何やっているんですか？」

「かぐや!」

「って何一人でくつろいでるんじゃない!」

かぐやが今いるところ、それは海のすぐ側に隣接する甘味屋であった。かぐやは外に設置された椅子で海を見ながら、菓子を食べていた。

かぐやの隣には大量の皿が積み重ねられている。

「……………まさかオメエ、これ全部一人で食べたのか？」

「それ以外何か？」

「……………甘いものは別腹、というものなのだろうか？それにし  
たって食べ過ぎであろう。」

「ちなみにキンタ、別腹というのは好物を目にした時、脳が胃に消  
化を促進させて満腹の胃にスペースを空けることを言うらしいです  
よ。生物は専門じゃないですから詳しく説明は出来ませんけどね」

「んなウンチクいらんわ！ちよつと勉強になつたわ！ありがとう！」

「どういたしまして！」

「……………で、何か分かつたんですか？」

「ええ、まあ……………」

鬼丸はこれまで分かつたこと、特にウラシマという人物についてし  
やべつた。

「……………というわけで、私たちはウラシマという人物を探さな  
くてはいけなくなりました」

「へえ、モグモグ、なるほど」

「で、かぐや、ウラシマという人物を知りませんか？すぐ近くの山  
に住んでいたならば、噂の一つくらい聞いたことありそうな……………  
……………」

「聞いたこと、モグモグ、ありませんね」

「そう、ですか……………ならば早く探さないと……………」

「モグモグ、そうですね、モグモグ」

「……………ってドンだけ食うんだよ、オメエは！？」

鬼丸が喋っている間でもかぐやは食べるのをやめない。むしろ食べるペースは速くなっている。皿の山も二つに増えている。

「皿の山、崩れそうじゃねえか……」

「だってこのお店のケーキ、すっごくおいしいんですよ！あっ！マスター、おかわり！」

「まだ食うのかよ!？」

金太郎は咎める、というよりは呆れた表情になっている。

「はあ……どうするんだ？この支払い……」

「大丈夫ですよ。お金ならたくさんあります」

そういつてどこからともなく金の竹を取り出すかぐや。

「……まあ、いいんじゃないですか、キンタ。金の問題はない、腹ごしらえもすんだ……怒ることはありませんよ」

「鬼丸……だけどな、お前だって」

「ただし！」

金太郎の言葉を鬼丸が遮る。金太郎はこんな真剣な表情を久しぶりに見た。

「時間、という問題があります。私たちがこのように過ごしている間も、我が同胞は危険にさらされています」

「鬼丸……」

「私が何故旅をしているか、私が何故桃太郎を倒さねばならぬか、目的を見失ったわけではありません。よもやこの状況で女にうつつを抜かすことなど決して！」

鬼丸が力説している中、退屈そうに頬杖をついていたかぐやが口を開く。

「本当は？」

「結構していました」

「お〜に〜ま〜る!？」

「じよ、冗談ですよ、キンタ。そんな怖い顔をしないでください」

金太郎の形相に鬼丸は顔を引きつらせる。金太郎の表情はそれこそ鬼のよう。

鬼丸は気を取り直して、再びしゃべりだす。

「……………キンタはこんな私のことを心配してくれていたようですが、大丈夫です。私は目的を見失うほど愚かな男ではありません。かぐや……………関係のないあなたを巻き込んで申し訳ないが、こればかりは譲れません……………協力、してくれませんか？」

「……………まあ、そこまで言われたならケーキを食べている場合じゃないですね」

「本当だよ……………」

「任せてください、鬼丸さん。人探しならこのマジカル 姫様、かぐやちゃんの得意技ですよ！」

かぐやは着物の袖から、蓬萊の玉の枝を取り出し、そして……………

「月光・七夜！」

かぐやの周りに七つの人魂のような光が飛びまわり、太陽の下に存在するはずなのに、それらは確かに紛れることなく光り、幻想的な雰囲気さえ醸し出している。



そしてかぐやが合図をすると八方に飛び散った。

「こんなところで武器なんか取り出してどうしたんですか？」

「七夜にはですね、“目”があるんですよ」

「“目”？」

「ええ、実際にはありませんけどね……七夜は現在、長閑のあらゆるところを飛び回っています。その七夜から見える風景が私に直接伝わってきます。この町にいる限り、ウラシマという人物はすぐ見つかりますよ」

「何でもありか？月のお姫様は」

「それに頭が痛くなりそうな能力ですね……。そういえばかぐやはウラシマ、という人物をみたことあるんですか？」

「……まあ、それっぽい人物を探しますよ」

「こりゃ期待できねえな……」

鬼丸と金太郎は腰を椅子に落ち着ける。せつかく甘味屋に来たのだから何か注文しようとしたその時……

「見つかりました、それっぽい人が！」

「はやっ！」

「元より星の数ほどいる人間の中、それっぽくても重要な手がかりです。かぐや、その人物は今どこに!？」

「それはですね……」

かぐやが指で示す。

「あの浜辺に……」

『つて、ちか!?!』



第一章・第二十三話：信用できませんね、色々な意味で……

「で、かぐや、それっぽい人とはどこにいるんですか？」

現在、鬼丸たちがいるのは浜辺。海の方を見やれば、鬼ヶ島がはっきりと見える場所である。

そしてかぐやはここにウラシマっぽい人物がいると言った。遮るものはない長く続く浜辺、それっぽい人間がいればすぐに分かりそうなものなのだが……

「誰もいねえな……」

「おかしいですね。もう行っちゃったんでしょうか？」

浜辺には人っ子一人、見当たらなかった。かぐやは首をかしげている。

「かぐや、あなたが見たウラシマというのはどういう人物だったのですか？」

「ええつと……確か麦藁帽子をかぶっていて、ランニングシャツを着ていて、ズボンは短パンでした」

「まるで虫取り少年だな……そんな人間いるわけが……ない？」

かぐやの言葉を否定しようとした時、金太郎はチラッと見てしまった。

かぐやがいつていた通り、ランニングシャツに短パン、青い頭に麦藁帽子をかぶった男の姿を。

しかしその男の姿を見ても、金太郎の疑念は消えなかった。

「子供？……」  
「あつ！いた！」

そう、その男の風貌はまるで子供。かぐやが放った言葉からも、彼女が見たウラシマというのは彼のことにらしい。

しかし勝手に腕の立つ、熟練の船乗りの風貌を想像していた金太郎にとって、ギャップは激しかった。

「アレがウラシマ？……」

「どこをどうやって見れば、ウラシマって分かるんだ？」

「分かりますよ。何となく、雰囲気は滲み出ている。とにかく話しかけてみましょうよ！」

「ああ……」

今はとにかく、かぐやの言葉に従うほかなかった。

「あ、あの、君、ちょっといいかな？」

「……誰？お兄ちゃん達？」

金太郎は現在、釣りにいそしんでいる少年に話しかけた。少年は警戒の目で金太郎を見ている。

声も少年らしい変声期も来ていない高いもの、どうも普通の少年にしか見えなかった。

「四方院かぐやです」

「鬼丸童子……」

「俺の名前は金太郎っていうんだ。君の名前は？」

「・・・・・・・・知らない人には自分の名前言っちゃだめだって言われているんだ。だから・・・・・・・・あつ！来た！」

少年の釣竿がピクツと動いた。かなりの大物らしく、少年の体ごと引つ張られ今にも釣竿は折れそうだ。

「お兄ちゃん、代わって！」

「えっ！？おお、分かった」

金太郎が竿を受け取る。と、気を抜いて瞬間持っていかれそうになっってしまう。

少し、ムツとする。

「海洋生物が・・・・・・・・陸上生物なめてるんじゃないやねえぞおおおお！」

金太郎は凄まじい力でリールを一気に巻き、引き上げると、その瞬間、金太郎達は信じられないものを見た。

「でかつ・・・・・・・・」

「こんな深海魚、いましたっけ？」

金太郎の釣り上げた生物、それは提燈アンコウっぽいもの。何故確信が持てないかというと、如何せんでかすぎる。空中に舞い上がったそれは金太郎の視界を覆いつくすには十分な大きさ。

金太郎はその光景に呆然として、動けなかった。

そしてそれは重力法則に従って、落下する。

「すごい、大きい！」

「　　って逃げろおおおお！！！」

「なんで退魔師の貴方が逃げるんですか？・・・逃げられるまでもない。一発で終わらせませす」

鬼丸はデザートイーグルを取り出すと、巨大魚に標準を向ける。そして・・・

「吹っ飛べええええ！！！」

鬼丸が使った力は“圧力”。圧力の銃弾が当たった瞬間、巨大魚の体が丸の字に折れ、重力に逆らい再び中を舞う。そして再び自分が元いた場所に、凄まじい音を立て戻っていく。

ザッパアアアン

「おお！すっげ〜な！！！」

「まったく貴方という人は・・・かぐや、少年、大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫ですよ。・・・って言うより少年、貴方は何をしているのですか？」

「うわ〜ん！お姉ちゃん、怖かったよ〜！！！」

ウラシマらしき少年はかぐやに抱きついている。かぐやの身長は少年より高く少年が抱きつくと、少年の手はかぐやのお尻にちょうど当たる。

しかも妙な手つきを加えて。

「う〜ん、柔らかい・・・姉ちゃん、ええケツしとんな〜・・・

「この、ゲスがああああ！！！」

かぐやが少年を引き剥がし、動きづらい着物を着ているのに関わらず華麗な後ろ回し蹴りを放ち、そして見事にそれは少年の頭に当たる。

少年は傍から見れば重さを感じられないように吹っ飛んだ。

「恥を知りなさい、この変態！」

「ちよつとは落ち着け、かぐや。死んでないか、アレ!？」

ガシユンツ!

「えっ!？.....」

「あの糞餓鬼.....どうしてくれましょう?銃殺?撲殺?それとも絞殺?.....ふ、ふはっ、はっはっはっは!」

「おい、鬼丸、落ち着け!お前、口調が変になってんぞ!」

かぐやはセクハラを受け怒り、鬼丸は狂気にかられている。金太郎以外誰も蹴られた少年を心配しようとしなない。未だに笑っている鬼丸は放っておいて、金太郎は少年を助けに向かった。

「おい、少年、大丈夫か?」

「いたた.....これは効くね.....あつ、でも何か新しい世界が見えそうな.....」

「お、お前、声がおっさんになってんぞ!」

「あつ、やべ.....」

少年は手を口に当て、本当にやばそうな表情をする。しかしそれはどこか演技臭く感じられるもので、金太郎は不審に思った。

「お前、どうなってんだ!？」

「ふふふ.....体は子供、頭脳は子供、その名も名」

「やめろおおおお！版權的に危ないから！」

「ええ〜・・・いいじゃん、いいじゃん」

「だめなもんはだめだ！お前、いったい何者だよ！？」

少年の口が微妙に歪む。

「坂田金太郎君、改めて自己紹介をしよう。僕の名前は浦島竜胆<sup>うらしまりんどう</sup>。ピチピチの39歳さ！」

「おっさんじゃねえか！何処がピチピチなんだよ！？」

「なっ！？39歳と言えば働き盛りの時じゃないか！ほら、肌もこんなにピチピチ！」

「それは餓鬼の体だからだろ！・・・じゃあ、何だ？お前はそんな歳で、その体なのか？」

「うん、十歳で成長期終わっちゃった！」

「・・・果たして成長期とはこんなにも極端なものであったらどうか？」

金太郎は目の前で平然としている、少年の姿をしているおっさんに啞然とした。

金太郎が呆然としている間に、落ち着きを取り戻した鬼丸とかぐやもやってきた。

「キンタ、結局この糞餓鬼がウラシマだったんですか？」

「糞餓鬼って・・・そうだよ、こいつがウラシマらしい」

「鬼丸さん、これ、殺してもいいですか？」

「もちろんいいですよ！」

「　　って、おい！やめろ！」

「あつ、でもかぐやちゃんなら殺されてもいいかも・・・」

「お前も早まるなああああ！」



金太郎は殺そうとしているかぐや、殺されるのを良しとしているウラシマ、双方を止める。鬼ヶ島に行く前に仲間同士の流血事件など起こされてはたまらない。

金太郎は何故か当事者の二人よりも息が乱れていた。

「で、君たちは僕に何の用だい？」

「ああ……鬼丸」

「ええ……実は私達、とある事情で鬼ヶ島に行かねばならぬのです。だから」

「何で？」

「……実は、私“鬼”なんです」

「知ってるよ」

「へっ!?!……」

予想外の答えが返ってきて、いつもからは想像も出来ない間抜けな声が口から漏れる。

鬼の容姿は人間とは変わりはない。唯一の特徴である角も帽子で隠してある。なのにどうやってウラシマは鬼ということに気づいたのであるのか？

「もしかしてそれで隠しているつもりなの？」

「……何故、分かったのですか？」

「“何故”？当たり前じゃないか。鬼って言うのはね、人間とは違う魔力を持っているし、それに魔力保有量も格段に大きい。ちよつと力のある魔術師なら気づくと思うけどな」

「……ということは貴方も魔術師？」

「およ？なかなか鋭いじゃないか。そうだね、僕は魔術師。それも超一流の竜宮城直属のね」

『竜宮城？』

かぐやと金太郎は疑問を口にそろえる。

「竜宮城ってあの豪勢な食事と平目のダンスが見れる竜宮城？」

「うん、そうだよ」

「竜宮城ってあの乙姫様がいるあそこか？」

「うん、そうだよ！」

金太郎とかぐやに問われる度にウラシマの顔は得意満面になっていく。そして二人は鬼丸の方に振り返って一言。

『いざ、竜宮城へ！』

「アホですか？ちつとも話が進まないじゃないですか！」

いい加減鬼丸が怒った。金太郎だけでなくかぐやまでもシュンっとなっている。ただ一人それに動じていない者がいた。

ウラシマであった。

「ふ〜ん……で、鬼丸君は鬼ヶ島に取り戻すために僕に連れて行って欲しいと、そう言いたいんだね？」

「分かっているのなら早く連れて行ってください！」

ウラシマは鬼丸に怒鳴られても動揺する様子はない。いつもニコニコ、いや、ニヤニヤしている。

長く生きているだけの貴祿か、はたまた人格がそうなのか、どちらにせよ鬼丸にとって扱いづらかった。

「別にいいんだけどね〜、それぐらい。でもめんどくさいな〜。何かあったら連れて行ってもいいんだけど」

「……………何が欲しいんですか？」

要するにウラシマは見返りを要求している、ということだった。

「ん〜……………とりあえず金が欲しいな〜。1億くらい」

「一億!?!」

「……………軽く私たちの全財産、越えましたね」

ウラシマは依然とニヤニヤしている。しかし……………

「ありますよ、一億くらい」

「ひょっ!?!」

ウラシマが振り返る。と、その目に映った光景は、一面の金色。太陽によって反射する光がまぶしい。

ウラシマの間抜けな顔が照らし出されていた。

「へっ!?!こ、この金どっから?」

「私のポケットマネーです。たぶんこれぐらいで、一億はあるですよ」

「いや……………ポケットマネーってレベルじゃねえぞ……………  
……………というか、オメエの服のどこにポケットがあるんだよ?」

「乙女は秘密を持って美しくなるのですよ……………  
「流石です、かぐや。というわけで、お金は用意できましたよ。ウラシマ君」

「……………」

ウラシマはニコニコしながらも、全体的に苦しそうな顔をしている。そしてたった今思いついたように、声を張り上げる。

「そうそう！僕の欲しいものは別にあつたんだよ！僕の本当に欲しいものは“竜の首の玉”なんだ！」

「“竜の首の玉”？何それ？」

「……この町の水の神、竜神様などの首についているといわれる宝玉です。数多の人間が挑みましたが、失敗……。まず神という存在が危ういのには、その神を怒らせるような真似をさせるなど、余程私たちを諦めさせたいようですね……」

「んな無茶苦茶な……」

「と、とにかく宝玉持つてこない限り、連れて行かないから！」

ウラシマは大きさに手を動かし、その後そっぽを向く。

鬼丸は思わず表情を歪める。一筋縄ではいかないとは思っていたが、ここまでとは……。いつそのこと脅してでも鬼ヶ島に行こう、と思っていたそのとき。

「ああ、ありました、竜の首の玉」

「ひょえっ!？」

かぐやが袖から取り出したもの、それは深い青色をした玉であった。その色は中心にいくほど暗くなっていき、見たものは引き込まれるような感覚に襲われる。

ウラシマはそれを見た瞬間、固まった。

「そそそそそそれを、どこで!？」

「昔、どこかでもらったんですよ。今まではすっかり忘れていました。多分本物だと思うんですけど、どうですか？」

「た、確かに本物……。本物だけでもらいもんつて言うレベルのものじゃ……」

「いりませんよ、そんなガラクタ。それより早く鬼ヶ島に行ってみ

たいです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ウラシマは開いた口が塞がらない。今度は鬼丸たちがニヤニヤする番だった。

「ウラシマ、これで鬼ヶ島に連れてってもらえますよね」

「うえ・・・・・・・・」

「まさか逃げることなんてないよな」

「ひっ・・・・・・・・」

前門の鬼丸、後門の金太郎。普通の子供ならば泣き出してしまいそうな迫力だ。現にウラシマは自称39歳のくせに泣き出してしまいそうだった。

「さあ、私たちが鬼ヶ島連れて行きなさい！」

「ひっ・・・・・・・・た、助けて、亀吉くん！！！！！」

「へっ！！！！！！！！」

金太郎が海の方を振り返ると、そこには先ほどの巨大魚に負けられないほどのかさの亀の姿が。

「ガ ラアアアアアア！！！！！！！！」

「新手！？」

巨大亀は突然現れ、高速でウラシマをさらうとそのまま町の方へ進んでいく。

「何だ！？あのガメ ！？」

「待ちなさい、ウラシマ！」

「へっへっん。僕はね、社長から誰も鬼ヶ島に連れて行くな、って言われているんだよ！悔しかったら僕を捕まえてみろ！」

町に踏みかかる瞬間、亀は大きくジャンプ。すると亀の体が小さくなる。そのまま町に消えていく。

一瞬三人は呆然としていたが、すぐに我に帰る。

「探しますよ！キンタ、かぐや！」

「鬼ごっこの始まりか!？」

「ちよっどいいんじゃないですか？鬼が鬼役をやるのですから」

今、ここ長閑を舞台とする鬼ヶ島が始まった。

第一章・第二十二話：信用できませんね、色々な意味で……（後書き）

皆さんはガ　ラって分かりますか？

僕はゴ　ラと共に好きでした（笑）

第一章・第二十四話：鬼ごっこで追いかけられる人はなんと言うのでしょうか

「月光・七夜！」

「本当に便利な武器ですね……。見つかるのも時間の問題ですか」

「ウラシマも可哀想だな……」

長閑中央広場、ここに金太郎たち三人が集まっていた。中央広場にはたくさんな人が集まっており、通常ならここを含めた都市全体から一人の子供を見つけることは至難の業である。

しかし金太郎たちにはかぐやがいる。かぐやの武器、月光を用いれば見つけることは簡単である。そうであったはずなのだが……

「見つからない？……」

「ええ、商店街の大通りから現在無職の山田さん（38歳）の家の隅々まで見ましたが、ウラシマは見つかりませんよ」

「他人のプライバシーを覗いたことは置いといて、ウラシマは魔術師だったな。かくれんぼは得意かもな……」

「とにかく隠れられると面倒です。かぐや、もう一回お願いします」「しょうがないですね……」

かぐやは再び手を広げ、精神を集中させる。

かぐやが取り込んでいる間、鬼丸はウラシマと話して気になる言葉を思い出した。

「竜宮城……」



「ん？竜宮城がどうしたって？」

金太郎が聞き返し、鬼丸は比較的まじめな顔でそれに答えた。

「いえ……ただウラシマは竜宮城直属の魔術師と言っていたことが気になって……」

「竜宮城直属、ね。何かおいしいものでも出してくれるのかね？」

「キンタ、竜宮城は夢の国のようなものではありませんよ」「えっ!？」

金太郎はサンタクロースの正体をばらされたような、衝撃を受けた顔になった。

「竜宮城。それはここ、長閑のどこかに本社を置く世界規模の貿易会社の略称です。ただの漁港だった長閑がここまで貿易都市として発達できたのは、それこそ竜宮城のお陰です。そんな大企業が抱え込んでいる魔術師となれば、もしかしたらウラシマはかなり有名な魔術師かも知れないと思ひまして……」

「ちよ、ちよつと待ってくれよ！じゃあ乙姫様って何だ!？」

「乙姫とは現在の竜宮城代表取締役につけられた名前です。決して姫様などではありません」

「そんな……」

金太郎はガツクリとヒザをつく。そんな金太郎をよそに、かぐやが口を開いた。

「見つけました!」

「本当ですか!？」

「ええ、ここから東の方に……。どんなに有名でも所詮は

地上だけの話。月には到底敵いませんよ！」

「よし、かぐや、キンタ行きますよ！」

「おお！……」

鬼丸とかぐやは意気揚々に、金太郎は少々意気消沈して、かぐやの指した方向に向かった。

「ふう……。ここまでこれば追ってはこないだろう。いつも悪いね。亀吉君」

「いやいや、いつものことです。ウラシマさんの部下になったときからこういうことは覚悟していましたよ」

「はっはっは！僕も良い部下に恵まれたな」

長関東に位置する路地裏。巨大亀に助けられたウラシマは難を逃れ一息ついていた。亀吉、と呼ばれた巨大亀も今では人並みのサイズになっており、二足歩行が出来る単なる亀になっている。

……二足歩行が出来る亀が普通かどうかは分からないが。

「この巨大な都市、長関。その中から僕を見つけることなんか出来るもんか！はっはっは！」

「見つけた！」

「へっ！？」

どこからともなくかぐやの声がある。ウラシマの表情には明らかに動揺の色が浮き出しており、周りをきょろきょろしている。

「どこ!?! ねえ、どこ!?!」

「どこですよ!」

「上!?!」

ウラシマは上を見上げる。と、そこには黒い影があった。

「何アレ?.....」

「お〜ち〜る〜!」

「相変わらずこの落ちる感覚だけは馴染めませんね.....」  
「慣れると楽しいものですよ、鬼丸さん」

ウラシマの目の前に三人の人間。一人は退魔師にも関わらず着地が上手く出来ず地面に落ち、もう一人は音もなく見事に着地する。

そして最後の一人は着地したと同時に、何かのポーズを取って一言。

「マジカル 美少女、かぐやちゃん! ただいま参上!」

「.....」

ウラシマはしばらく固まっていたが、ハッと我に帰る。

「逃げるおおおおお!」

「あつ! 逃げた.....」

「キンタ、そんなところで寝ていないで追いますよ!」

「お、おう.....」

金太郎は飛び起きて、すぐさま追いかける。

相手は子供の体で、こちらはほぼ大人。しかも相手の中身はオッサン。すぐに追いつくのも必然であった。

「ひい.....ひい.....。こんなところで捕まってたまるか

「風塵！」  
「っ!？」

ウラシマが符を取り出すと、突如として風が巻き上がりウラシマを押し出す。

以前雉が使った風の魔法、対象者を高速で移動できるようになるこの魔法の効果は絶大で、一瞬のうちに金太郎との距離を離れた。

「はっはっは！僕が魔術師であることを忘れたのかい、君たちは！  
？爪が甘いんだよ！」

「そうか……。魔術師は退魔師と違って色々な魔術を使えるのでしたね。すっかり忘れていましたよ」

「忘れていたじゃ済まないんだよ！それじゃ、ばいちゃー！」

「……。キンタ、お願いします！」

鬼丸に言われる前に詠唱を始めていた金太郎は、鬼丸の言葉にすぐに反応できた。そして最後の詠唱を唱える。

「電磁結界、First Drive Set Up……  
create！」

「のわっ!？何じゃこりゃ!？」

ウラシマの目の前に光の壁が突如として現れる。金太郎の雷の結界、円形に囲んだそれを見て、思わずウラシマは顔を引きつらせた。

「マジで?……」

「さあ、これで逃げられませんよ、ウラシマ。もう諦めて私たちを連れて行きなさい！」

「くっ……。亀吉くん、助けてよー！」

「はーいー！」

『上!?!』

今度は金太郎たちが見上げる番。上空から野太い声が聞こえたと思うと、巨大な足が金太郎の結界を踏み潰した。

巨大な足の指先にはウラシマが掴まって、結界から這い出てきた。

「流石だね、亀吉君。君がいると本当に助かるよ!」

「……………このまま飛びます。掴まってください、ウラシマさん!」

「うん、分かった!……………それじゃ、皆さん、ばいばい!」

ウラシマは優雅に手を振り、亀は再び跳躍する。

ウラシマならまだしも相手がこんなにも巨大では手が出せない、金太郎たちはその様子を黙ってみるしかなかった。

「くっそ!また逃げられた!」

「かぐや、追いかけますよ!奴が飛んだのは西。我々の来た方向を逆戻りすれば良いです」

「分かりました。目標は巨大。すぐ見つけれますよ!」

しかしそんなかぐやの言葉とは裏腹に、見つけては亀によって邪魔をされ、見つけては亀によって邪魔をされ……………。

このやり取りを六回繰り返しているうちに、西の海に日が沈ずみはじめていた

「鬼丸、さすがにこの鬼ごっこ、ハードすぎないか？」

「確かに……。一日中走りっぱなしで、膝がガクガク。……かぐや、生きてますか？」

「な、何とか……。」

日がすでに沈みかけ、町が橙色に染まりかけている。

鬼丸と金太郎は壁に手をつけて肩で息をし、かぐやにいたっては立ってすらいない。

「いくら場所が分かってもここの簡単に逃げられてはジリ貧ですね……。キントさん、雷力である亀、感電させること出来ませんか？」

「あのガメをか？……ちょっとデカすぎるだろ。巨大化される前だったらまだしもな、それにこんな街中で雷ぶつ放しては死人が出るぞ」

「……大事を為すためなら多少の被害は気にしない、という方向で」

「バカか、テメエは！俺は絶対にヤダからな！」

金太郎は拒絶の意を示す。

かぐやの、ケチ、という言葉が聞こえてきたが聞こえないこととした。

「……ケチって言う問題じゃないと思うが……。」

「鬼丸さん、ウラシマはどこにむかっているのでしょうか？」

「……竜宮城の本社、じゃないでしょうか？竜宮城の本社は長閑にあるといわれています……。」

「だったらそこに先回りすれば……。」

「残念ながらくぐや、竜宮城本社は誰一人として知らないのですよ。誰も知らない本社……情報流出も何もないところが、竜宮城の強みなのですよ……」

「マジかよ……。打つ手ねえじゃねいか」

金太郎はがつくりうなだれる。

これ以上追い続けてもこちらが不利になるのは圧倒的に明らか。おまけに所在不明の本社に逃げ込まれては、まさに打つ手なし。

皆の気力がそがれている中で、一人だけ頭を動かし続けているものがいた。

鬼丸であつた。

「と言うか鬼丸、地図なんか見て何やってんだ？」

「……キンタ、この町の構造を知っていますか？」

「ああん？……確かアレだろ。三方向は海に囲まれていて、

残りは俺たちが来た山。山から見て東は貿易関連の商業部分、逆に西は漁業が盛んな港。あと南は……鬼ヶ島か」

「その通りです。そして今まで私たちは西へ、東へ走り回っていました。しかし私たちが走っていた方向は真東でも真西でもないんですよね」

「？どういうことだ？」

鬼丸が地図から目を離し、金太郎の目を見る。

「微妙に南に向かっているんですよ。ウラシマ含めて私たちも」

「……すまん、それがどうしたのか俺には分からん」

「いえ、ただ私たちは上手く誘導されていたのではないのかと思ひまして」

「誘導、だつて？」

金太郎は思わずオウム返しする。

「どついつことだ？」

「いいですか、先ほど金太郎が言ったとおり、この町の東側は商業都市として成り立っています。私は今まで竜宮城がそこに隠されていると思っていました」

「竜宮城ほどの大企業なら商業都市にあるのは当然、と思ったのですね」

「ええ。しかし南に向かっていると分かれば話は違う……。竜宮城はこの街に南にあるのではないのでしょうか？」

「でもこの街の南側って鬼ヶ島しかないんじゃない……」

確かに金太郎の言うとおりである。

この街の南には港も何もない。何故ならすぐ近くに鬼ヶ島があるからだ。鬼ヶ島のせいで人は寄り付かず、あるのは青く広がる海だけ。そこに大企業の本社があるとは思えなかった。

「あの海しかないところで、どこに本社があるんだ？」

「……海の中、とか？……」

「こりゃ、期待できねえな」

金太郎は明後日の方向を向く。

ああ、夕日がまぶしいぜ……。

と、その時かぐやが不意に叫んだ。

「ウラシマを見つけました！本当に南の方向に向かっています！」

「本当ですか!？」



「マジかよ!？」

「ええ、それも凄いスピードで!早く行かないと間に合いませんよ!」

かぐやが二人をせかす。

その言葉を聞くと、二人の表情から疲労が消え、希望に満ちた顔となった。

「やっべ、テンション上がってきたああああ!」

「かぐや、月光お願いします!」

「分かりました。……月光・新月!」

三人の周りを望月が囲み、その後黒色に染まっていく。

次に見た瞬間にはそこには誰もおらず、ただ夕日が見えるのみ。

ようやく鬼ごっこも終わりにさしかかっていた。

第一章・第二十四話：鬼ごっこで追いかけられる人はなんと言うのでしょうか。

ただ今作者は絶賛テスト期間中です（笑）

今週でようやく終わる＆春休みに入るので更新を早めたいです。  
今後ともよろしく願います！

第一章・第二十五話：いざ、行かん！鬼ヶ島へ！（前書き）

やっとテスト終わったあああああ！！

## 第一章・第二十五話：いざ、行かん！鬼ヶ島へ！

「はあ……。はあ……。ようやく彼らも諦めたのかな？ここまで来れば、僕たちの安全は確保されたも同然。無問題かな？」

「ウラシマさん。それフラグ発生中ですよ」

「？フラグって何？」

ここは南側に位置する海岸。昼に鬼丸たちとはじめて会った場所でもある。

ウラシマは巨大亀の手から華麗に飛び降りると、その亀も次第に小さくなっていき、人間の大人と同じくらいになる。

人間と違うところといえば背中に亀の甲羅があるくらいである。

改めて自分の部下の姿を見て、ポツリと不意に思ったことを漏らした。

「……亀 人みたいだな」

「はい？」

「いやいや、何にも……。ところで、フラグの説明を続けて」

「フラグ、というのは小説、漫画、アニメなどにおいて、後に特定の展開・状況を引き出す事柄のことです。例えば『ここは俺に任せ先に行け！』とかの言葉を放った人物は十中八九死にます。それをフラグ、というんです」

「へえ……。ってことはアレかい、“お決まりパターン”って言うやつかい？最近の若者は難しい言葉を使うんだね」

ウラシマは自分の容姿からは考えられないような言葉を吐く。

姿だけを見れば子供同然、しかし中身はオッサンそのもの。違和感

たつぷりのその光景に亀吉は口端を引きつらせる。

「と言うことは僕が『追いかけてこない』と言ったら、彼らは追いかけてくるということかい？」

「そういうことです」

「はっはっは！まさかそんなことあるはずが……」

「見つけたぞー！ウラシマアアア！」

「あっちゃったよ……。ってエエエエエエエエ！！？？」

突然、自分の目の前に現れた金太郎、鬼丸、かぐやの三人に目玉が飛び出るかと思うほど驚くウラシマ。対して亀吉の方はそこまで驚いてない様子だ。

ここで亀の一言。

「フラグ回収、お疲れ様です」

「うるさいよ！また訳の分からない言葉を使って……。なんでここが分かったんだい、御三方？」

「ふっふっふ！それは私の力ですよ、ウラシマ」

ウラシマに自分の力を説明し始めるかぐや。説明を聞くに従って、ウラシマの表情がどんどん沈んでいく。

「はは……。それじゃあ、逃げても無駄だった、ということかい？」

「そういうことになりますね！」

「はは……。そういうことが。そういう、ことが……」

ウラシマの絶望した声が響く。

一日中逃げ惑った今まで努力を考えると……。アレ、雨も降っ

てきていないのに自分の顔が濡れているのは何故だろうか？

「そういうわけでウラシマ、もう観念して大人しく私たちを鬼ヶ島に連れて行きなさい！」

「もう逃げてても無駄だぜ！」

「……まさか君たちは僕が逃げるだけのただの腰抜けとは思ってはいないかい？」

金太郎と鬼丸は互いの顔を見合わせ、声をそろえて言った。

『うん！』

「……そこまでハッキリと言われるといつそ清々しい……、じゃなくて、大企業のお抱えである僕が何の算段もなしに逃げるなんて思えるかい？」

「そういう人なんじゃ……」

「ところがどっこい、さっきの話じゃないけどそれもフラグだよ、お二人さん。ハッキリと言おう、僕は君たちが思っている以上に、強い！」

突如、辺りの雰囲気が変わる。空气中に漂っている魔力がウラシマの下へ集まっていくのが肌で感じられた。

ウラシマの不気味な笑みを見て、鬼丸たちも武器を取り出す。

「キンタ……。奴が攻撃してきたらこちらも反撃します。良いですね？」

「分かった！」

金太郎と鬼丸が構えたと同時にウラシマが詠唱を開始する。

「我に宿るは水……モノ」



声高らかに、勝利を確信してウラシマは声を張り上げた。

「喰らえええい！水の陣、六重結」

ランランランラン、ランラランラン……

「ん？僕のか？」

『　　つて、おい！』

ウラシマは自分のポケットから携帯電話を取り出した。お陰で金太郎と鬼丸は浜辺にずっこけてしまった。

「K・T・ウラシマは携帯を持っているのか？……」

「そして誰からの着信なのか？……」

「何言ってるんですか？二人とも？」

かぐやがどこか冷めた目線を二人に送る。そんなやり取りも気にせず、ウラシマは話を始めた。

「もしもし。あつ、お疲れ様です。こちらは何も異常は……

えっ？今何と？……はい！？ちよつとそれは……

いえ、そういうわけでは……」

「誰と話しているんだ？」

「さあ？」

流石の鬼丸にも検討がつかないので、大人しく聞くこととした。

「はい。ではその方向で……はい、分かりました。はい、はい。それでは失礼します……」

ピッ。



ウラシマは携帯を切ると、鬼丸の方に向かって言い放った。

「君たちを鬼ヶ島に連れてってあげるよ！」

『エエエエエエエエエエエエエエエエ！！？？』

爽やかな笑顔でこう言い放ったウラシマのあまりの変わりように、三人は大いに驚く。

恐ろしいまでの変化振りにウラシマに詰め寄る。

「お前、いったい何が起こったんだ!？」

「いや、困ったときはお互い様って言うじゃないか」

「先ほどまでとは大違いですね……………」

「ゼンゼンカワツテイマセンヨ」

「何故そこで片言に?というよりも先ほどの電話相手ですがもしかして

「とにかく！」

鬼丸の言葉を遮り、ウラシマは三人から距離を取る。

「僕は君たちに協力するといったんだ。これ以上に君たちに不利はあるかい？」

「それは、ありませんけど……………」

「だったら良いじゃないか。互いの利益のために協力し合う。これは一つの契約、社会の一つの動きでもある。少なくとも君たちの力になるよう僕は君たちに尽力しよう。分かった？」

「……………分かりました」

ウラシマの言い分は正しい。鬼丸にとっても互いの利益のために動く、という理念は扱いやすいものであるから魅力的ではある。

しかし急に態度を改めたウラシマが不気味に思えて仕方がなかった。

「それでよし。亀吉君。僕の船を取ってきてくれるかい？」

「すでにここに」

亀吉がさした方向には一隻の船が見える。コレがウラシマ所有の船なのだろう。

ウラシマは満足そうな笑みをうかべる。

「用意周到だね。上出来だよ。……鬼丸君、いつ出発するんだい？」

ウラシマが鬼丸に問う。しかしその答えはすでに決まっていた。

「今です。早速出ます」

「……分かった。それでは、いざ、行かん！鬼ヶ島へ！」

話は数時間前に遡る……

#### 鬼が島

かつて鬼を含めた魔の楽園であったここは、今は見る影もなく荒れ果てている。人もこの地に近づくこともなくほぼ無人島と化していた。

そんな島に一隻の船が近づいてくる。船が島に着くと二人の人間が上陸した。

「はあく、やつとついたか・・・退屈やったで〜」

「あつはっは！それは君の気が短いだけだよ。」

「お前の笑い声はいつも鼻につくねん！ちよつと黙つときい！！」

桃太郎の部下、“猿”と“雉”であつた。彼らは長閑付近の山で鬼丸たちを襲つたが、かぐや姫のせいで逃げられてしまった。

それでも彼らの仕事は終わったも同然なのだが・・・

その2人を迎えるように一人の男が出てくる。

「お疲れだ、2人とも。そちらの仕事はうまくいったか？」

彼の名前は“犬”。猿、雉と同じ桃太郎の部下である。彼のほうが早く仕事が終わつたので、先に島に帰つていた。

「雉、奴らは今どの辺にいるか分かるか？」

「うゝん・・・そろそろ長閑に着いたんじゃないかな？と、考えればあのガキが連れてくるのは時間の問題かな」

「そうか・・・」

「せやけど犬、俺にはどうも、あいつらが桃太郎を倒せるとは思えへんのやけど。このまま来ても犬死やで」

「・・・力は関係ない。ただ桃太郎様と戦つてくれさえすれば。そろそろ我が主人は限界だ」

犬が鬼ヶ島中央にある塔を向く。かつて鬼たちの栄華の象徴であつたそこは今では桃太郎の家。

そこから突然、うめき声と共に爆音が鳴り響く。こんなことが出来る人間はただ一人、桃太郎だけだ。

「今日はまた派手に壊されたな……」

「……本当に時間がないよね。あの人の我慢はもう限界に近づいている。こちら辺でガス抜きをしないと、あの人は……世界を壊そうとするんじゃない？」

「……」

雉が冗談めいたことを言う。しかしその冗談が本当に実行されそうで犬と猿は笑えなかった。

犬は鼻をフン、と鳴らし二人の方へ向かってこう言い放った。

「雉、猿、客人のもてなしの準備だ。宴が始まるぞ」

第一章・第二十五話：いざ、行かん！鬼ヶ島へ！（後書き）

ちなみに言いますとウラシマの着信音はU・N・オーエンは何たら。  
私も大好きな曲です。

更新速度をなるべく上げたいと思いますので、今後ともよろしくお  
願います。

第一章・第二十六話：仲間の思惑、敵の考え、そして自分の迷い

「ウラシマ、あとどれくらいで鬼ヶ島に着くんだ？」

「もうちょっとだよ。もうしばらく辛抱してね」

「ん」

ウラシマの返答に金太郎は短く答える。

金太郎が船の外に出ると、暗闇に包まれている海の何に、一つだけポツンと漁火が浮かんでいるように明かりが見える。

吹き付ける潮風にも負けず船の先頭に立つと、感慨深げに金太郎は呟いた。

「アレが鬼ヶ島……俺たち本当に来たんだな」

まさか自分がこの鬼ヶ島にくることになるなんて誰が予想できたことか。そして“最強”と謳われる桃太郎と戦うことなどもってのほか。

想像しただけで体の震えがとまらない。果たしてこの震えは恐怖によるものか、それとも武者震いなのか、金太郎には分からなかった。

「怖いですか、キンタ？」

「鬼丸……」

後ろを振り向くとそこにはデザートイーグルを手入れしている鬼丸の姿があった。

金太郎は笑って見せた。

「怖いわけねえだろ！ここまで来たら焦っても仕方ねえ。いつも通りだよ、いつも通り」

「いつも通り、ですか……………。かぐやみたいに、ですか？」  
「zzzz……………」

金太郎は横目でかぐやを見ると、そこには寝息をたて幸せそうに眠っているかぐやの姿が。

最近、かぐやの話題になるとため息をしないことはない。今回も例にもよって金太郎は大きいため息をついた。

「まったくこいつは……………」

「ふふ、かぐやは寝顔も可愛いですね……………それよりキンタ、私は貴方に聞きたいことがあります」

「ん？」

いつの間にか鬼丸はデザートイーグルの手入れを終えて、まじめな眼差しで金太郎を見つめている。

ただならぬ雰囲気を読み取って、金太郎は鬼丸と向き合った。

「……………貴方は、桃太郎退治を終えたらどうするつもりですか？」

「えっ!？」

金太郎は思いもしなかった質問に大きく目を見開く。

「どう、いうことだ？鬼丸……………。俺はお前についていくって言っただろ!？」

「……………過去、あらゆる文献を読み漁り、長老からも話を聞いて、私は色々な知識を吸収してきましたが、魔である鬼と人間が

共に暮らしたという話は聞いたことがありません。桃太郎による鬼ヶ島侵略も、人間というものを知らない故に対処が遅れた、と言います」

鬼丸の眼差しがよりいっそう強く感じられた。

「そう、なのか？・・・」

「ええ、そして桃太郎による人間の恐怖、というのが我々鬼の多くに刻み込まれています。鬼ヶ島についてくる、ということは人間と鬼の線引きされた中で生きていくことになります。・・・もちろん私はそのようなことはしません。しかし貴方は修行の身であり、退魔師でもあるどうしますか、と聞いているのです」

「・・・」

鬼丸の言うことはもっともであった。

種族による差、というものが存在しなければそもそも魔と人間の間で争うことなどない。魔と人間は敵対関係。敵同士が互いに争うことなく生活することなど、金太郎も聞いたことはない。

鬼ヶ島についていくこととなれば、鬼丸の言うことは確実であることも容易に予想がついた。

果たして、退魔師の自分を取るか、鬼丸たちを取るか、金太郎には決められない問題であった。

「・・・鬼丸はどうして欲しいんだ？」

このまま黙っているわけにもいかない。話のつなぎ、そして今一番気になっていることを鬼丸に聞いた。

しかしそんな金太郎の意思を知ってか知らずか、鬼丸はあっさり答えた。



「私は、ここまで助けてくれただけでも感謝し尽くせないほど貴方たちには感謝しています。今、キンタが逃げ出しても貴方を決して責めるようなことはしません。大切なのは、貴方の意思です」

「……………お、俺は」

「お〜い！もうすぐ鬼ヶ島につくよ〜」

金太郎の声を遮るようにウラシマの間延びした声が聞こえてくる。鬼丸は表情を翻し、ウラシマに答えた。

「分かりました。ありがとうございます、ウラシマ。……………かぐや、もう着きましたから起きてください」

「ふわあ……………。もう着いたんですか？早かったですね」

「今から岸につけるから、もうちよつと待ってってね〜」

ウラシマは再び操縦席に戻り、かぐやは大きく背伸びをする。

鬼丸はいまだ突っ立っている金太郎に再び声をかけた。

「……………キンタ、とりあえず今は目の前のことに集中しましょうか。がんばりましょう」

「あ、ああ……………そうだな……………」

「よし、鬼ヶ島に到着したよ〜！」

今ではウラシマの愉快そうな声も、金太郎にとっては空しく響くだけであった。

「ここが、鬼ヶ島、か？……」  
「うん、そうだよ。どうかしたのかい？」  
「いや、だって……」

金太郎は思わず言葉に詰まる。自分の想像と現実が大きくかけ離れていたからだ。

自分の今、考えていることを口に洩らした。

「ここどこに人が住めるっていうんだよ……」

金太郎の眼前に広がっていたのは荒地、岩、そして廃墟……。

鬼丸から常日頃から聞いていた“魔の楽園”といわれていた場所とは想像もつかない。人が住む場所さえ見つからず、桃太郎という一人の人間がこの島で住んでいることは想像しがたかった。

「桃さんはね、あそこに住んでいるんだって」

「あ？」

ウラシマが指した方向を見ると、鬼ヶ島中央に巨大な塔が見える。確かに、ほぼ平らになっている地面から一本突き出しているあの塔の損傷は全壊の他の建物よりはまとも。

あそこならば人は暮らせるだろう。しかしそれ以上に気になることが現れた。

「ていうか、“桃さん”ってなんだ？ウラシマ」

「桃太郎のことに決まっているじゃないか、キンちゃん」

「キンちゃん？……いや、それよりもなんでそんな親しそう

な呼び名なんだ?」

「だって僕、会ったことがあるんだもん」

空気が固まった………。主に鬼丸の周りで。

いち早く回復した金太郎がウラシマに問う。

「どういうこと?ウラシマ」

「だってよく考えてみてよ。いくら桃さんが強くたって、他の三人は桃さんほどじゃないんだよ。だったらどうやってここに来たと思うんだい?」

「………。泳いだ?」

「そんなことできるわけじゃないか。正解は君たちと同じように僕の船で乗ってくるしかない。だから僕は当然のように彼らを知っているんだ」

「………。嘘だろ」

金太郎は愕然とする。

「こんなにも身近に桃太郎について知っている人物がいたとは……。……。」

それより今にもウラシマを殺してしまいそうな殺気を醸しだしている鬼丸を、いつでも止められるように準備をしなくてはいけなかった。

ウラシマは鬼丸にもかまわず話を続ける。

「だからさ、知っているんだよ。彼らも。僕たちがこの島に乗り込んでくる場所くらい」

「えっ!?!それってどういう」

「

「かぐや危ない！」

金太郎が言い終わる前に、すでに鬼丸は動いていた。白い斬撃。それはかぐやが元いた場所の地面を抉り、その力を誇示する。

ウラシマだけが全てを知っている、余裕の笑みを浮かべる。

「これは、これは、手荒い歓迎だこと……。お二人さん、いつまでそうやっているつもりだい？」

「鬼丸さん……」

「かぐや……」

「お前ら……」

かぐやを庇った時に、鬼丸はちょうど彼女に被さるような体制となる。

そして、二人は互いの名を呼び合い、徐々に顔を近づけていきそして……。

「……　　つてやめろおおおお！お前たちいいいいい！！」

「……　　ちっ」

「こら、鬼丸、舌打ちするんじゃねえ！そしてかぐや、顔を真っ赤にすんじゃねえ！」

「……　　君たちさ、犬さんが律儀に待っているんだけど」

ウラシマが指した方向に見える人物、何事にも染まっていない白色の髪、端正な顔立ち、そして腰に挿した二本の刀が見るものの目をひきつける。

彼の名前は犬。犬は腕を組み、一連の出来事を終わると一言だけ呟いた。

「……………茶番はすんだか？」

「茶番つて……………お前が犬なのか？」

「いかにも……………。我が名は桃太郎様に呼ばれたときから犬。それ以外の何者でもない」

「なんだか面倒くさい人ですね……………」

「おい、かぐや！」

「……………ふっ」

犬が鼻で笑う。

「愉快そうだな、貴様らは。そんなもので桃太郎様を倒せると思っているのか？」

「もちろん。私たちは桃太郎を倒します。ですから貴方はそこをどいてください、今すぐに」

「……………良いだろう」

「えっ!？」

「何!？」

「ふえ!？」

犬が道をあける。

その思いもよらない行動に金太郎ばかりか、鬼丸まで頭上に疑問詞を浮かべる。

「な、何故、止めないのですか？」

「……………ここで止めたところで、桃太郎様が貴様らを倒すことはかわることはない。だから私はここで戦う必要などないのだ」  
「それは桃太郎の部下として正しいことでしょうか？主人のために」

は命を張る。主人の危険を、身を持って守る。それが正しいのではないでしょうか？」

「……………その通りだ。私たちは普通ではない」

犬の表情が一瞬曇って見えたのを金太郎は見逃さなかった。

「だが、貴様らに都合のいいことにはかわりはしないだろう。ならば良いではないか。ここで私と戦うか、それとも素直に私についてくるか、どちらか選べ」

「……………」

犬の問いの答えは明白であった。

「分かりました。行きましょう、皆さん。桃太郎のところへ」

「おう！」

「……………あつ！私はここに残ります」

「つて、おい！」

突拍子もないことを言い放つかぐやに金太郎は身を乗り出してつこむ。

「おいおい、この期に及んで仲間の意識を乱すような真似をするなよ、かぐや……………」

「だって、さっきの犬さんの話を聞いていたらやる気がなくなっちゃったんですもん。行くならわたし抜きで行ってくださいね」

「お前な……………」

「だったら僕も残ろうかな？もし僕が死んじゃったら君たちも向こうに戻れないだろ。僕は船を守っているよ」

「確かにそうだけどさ……………」

ウラシマの言うことも理解が出来る分、強くはいえない。金太郎が言葉を濁しているとき、鬼丸が口を開いた。

「構いませんよ、かぐや、ウラシマ。ここに残ってもらっても」

「おい、いいのか？鬼丸」

「ええ、ウラシマの言うことも尤もですし、かぐやにいたってはか弱き少女。無理強いする必要はありません。コレは元々私一人の問題。キンタにもいった通り、私は責めるようなことはしません」

鬼丸が二人の方へ歩き、二人の前に来ると頭を下げた。

「かぐや、ウラシマ、今までありがとうございました。貴方たちお陰でここまで来ることが出来ました。本当にありがとう……」

「うん、がんばってね、鬼丸君」

「……鬼丸さん」

「……それでは行きましょうか、キンタ」

「あ、ああ……」

鬼丸は金太郎と犬の元へ戻ろうと歩き出す。次第に離れている背中を見て、かぐやは叫ばずにはいられなかった。

「鬼丸さん！」

「何ですか、かぐや？」

「あの……えっと……」

いつもははつきりモノを言うかぐやが言葉を濁す。いつもならこのような間は耐えられるもののだが、この状況では煩わしいものを感じられてしまう。

「必ず帰ってきてくださいね」

しかしそんな気持ちもすっかりどこかへ消えてしまった。  
鬼丸は笑って答えて見せた。

「ええ、もちろん。待っていてくださいね」

「……はい！」

「二人、か。それでは案内しよう、桃太郎様のところへ」

鬼丸と金太郎は歩き出す。宿敵、桃太郎を倒すために……

「行ってしまわれましたね……」

かぐやはそう呟いて、先ほどまでのやり取りを思い出していた。

必ず帰ってきてくださいね

ええ、もちろん

……いつから自分はこんな弱い人間になってしまったのだろうか？他人に縋るなんて今までの自分らしくもない。それに、鬼丸さんに庇われたときもそうだ。あの時のことを思い返すと、自分の顔が熱くなっているのが自分でも分かる。

もしかしたら、自分は鬼丸さんのことが……

「どうしたの？そんなに顔を真っ赤にさせて」

「……そのニヤニヤ顔が癪に障ります。私の視界から一刻



も早く消えてください」

「はいはい、分かりました」

ウラシマは大げさに後ろに一歩退く。

「……………この見た目十歳のオッサンには絶対に気づかれてはいけない。気づかれたら最後、なんて言われるか分からない。

「で、お姫様はこの後、どうされるのかな？」

「そうですね……………。私はこのままここで待ちたいのですが、それではあの人が見えなくてしょうね……………」

「あの人？」

ウラシマは振り返ると赤い服に金髪の男、手には真つ赤な棒が握られていた。だいたい予想はつくが、ウラシマは一応聞いた。

「“猿”？」

「ええ……………。どうやら指名が入ったので、行ってきますね」

「うん、せいぜいがんばってね」

「……………」

まるで他人事のような口ぶりにかぐやは顔をしかめる。

「……………貴方はどうするのですか？ウラシマさん」

「うん……………僕は“宝探し”かな？」

「宝探し、ですか……………。まあ、貴方が何をしようと勝手にしますが、もし鬼丸さんを邪魔しようとするのであれば……………」

殺す。

かぐやは明確に自分の意思をウラシマに告げる。しかしウラシマはへらへら笑い、何も気にしていないように振舞う。

本当にこのガキは苦手、というより生理的に無理な男である。

「まるで道化師みたい……………。せいぜいがんばってくださいね、お宝探し」

「そつちこそ、死なないようにね」

ウラシマはどんな魔術を使ったのか、霧のように消え去っていく。かぐやはそれを見届けると、一息つき、猿のほうに向かった。

「お久しぶりですね。機嫌はいかがですか、お猿さ」

「孫悟空や」

「……………?」

「わいの名前は孫悟空。御託はいいから、はよはじめようや!こないだみたいにはいかへんで!」

猿が如意棒を構えると、かぐやも月光を取り出す。

敵に自分の本名を言うということ、それは自分の全身全霊をかけて戦うということ。その決意を無碍にするほど、かぐやも無粋ではなかった。

「月光・七夜……………。孫悟空よ、私の名前をその脳裏に刻み付けなさい。私の名前は四方院かぐや。私が相手にしてあげるのですから光栄に思いなさい、愚民が!」

「上等やで、かぐや!ここで死んでもらうでええええ!」



第一章・第二十六話：仲間の思惑、敵の考え、そして自分の迷い（後書き）

いよいよ次回、桃太郎の登場です。長かった（泣）

今後ともよろしくお願いします！

第一章・第二十七話：桃太郎、満を持して参上！

今宵の月は美しい……………。

いや、“今宵”というのは御幣があるかもしれない。月の光は常に美しい。

満月でも、三日月でも、今夜の歪んだ月でも。

たとえ完全ではなくともこんなにも美しいのに……………。

「なのに何故、人々は完全を目指すのでしょうか……………」

かぐやの呟きは眼前に控える敵には届かなかった。

「おらあああああー!!」

勝負が始まり、最初に飛び出したのは猿。如意棒を振り上げ、ものすごい気迫で迫ってくる猿に、かぐやは怯むことなく向かい討つ。

「そんな顔じゃ、彼女なんか出来ませんよ!!」

「余計なお世話じゃ!喰らいなはれ!!」

猿の初手は如意棒の縦一閃。かぐやはそれを華麗なステップでかわすと、手の平を猿に向けた。

「月光・七夜!!」

かぐやがそう叫ぶと、七つの人魂のような光が一齐に猿に襲い掛かる。まるで幻想。初めてコレを見た相手は迷い戸惑うだろうが、あいにく猿は二度目。もうこの攻撃には騙されない。

「甘いんやで、姫さん！」

猿は七つの人魂を全てかわすと、身を回転させそのままの勢いで横一閃に振るう。

かぐやもそれを見越して後ろに下がるが、猿の表情を見てハツとなる。

猿はニヤツと笑った。

「伸びろ、如意棒！」

「っ！？しまっ……………」

気づいたときにはもう遅い。最低限の動きでかわすかぐやのバックステップではかわしきれず、如意棒の衝撃がかぐやの腹に襲い掛かる。

回転の際に生じた遠心力、それと純粹な猿の力が加わった衝撃は計り知れず、かぐやの声が思わず漏れた。

「かっ……………は……………」

「はっ！どうやー！」

かぐやはヒザを地につき、猿は如意棒をかぐやに向ける。その顔は勝利を確信していた。猿からはかぐやの表情は見えない、しかし苦痛に歪んでいるだろう、そう思っていた。

今度はかぐやがニヤツと笑う番。

「………なんちゃって!」

「な、なんやと!?!」

かぐやがペロツと舌を出すと、かぐやの姿が七つの光に散らばり消えていく。猿は信じられないような顔になり、すぐに辺りを見渡す。

「ど、どこにおんねん!?!」

「ここですよ〜っと!」

「!?!」

「月光・七夜!」

かぐやのいた場所は猿の後方遙か遠く。猿が振り向いたときには七つの光が眼前に迫っていた。

「うお!くっそ!」

「へ〜………。あの攻撃を避けますか。まだまだついてこれますよね、孫悟空さん」

「あつたりまえやる!なめとんやないで!」

「ふふふ………」

猿とかぐやの闘いはまだまだ続く………。

「はあ………はあ………。まったく、冗談じゃないよ。僕はここで死ぬつもりはないんだよ」

現在、鬼丸と金太郎が向かっている鬼が島中央の塔。そこを中心として、かぐやと猿が闘っている浜辺のちようど反対側に位置する、僅かに残った林に一人の男が懸命に走っていた。

男の名は雉。桃太郎の部下である。

いや、厳密に言えば桃太郎の部下ではない。彼は単なる情報屋として桃太郎の下にしていたのであって、ここで心中する気など毛頭なかった。

「あつはつは……。ここまでこればもう誰も来ないよね」

彼の手には切り札があった。最近、魔道科学によって生み出された“モーター”と呼ばれる、自動で推進力を生み出す装置を取り付けた船を用意していたのだ。

これならば竜神が司るこの海を乗り越え、無事本土にたどり着くことが出来るだろう。

そう思つて余裕の笑みを浮かべていたその時であった。

「ねえねえ、雉さん。ちょっと止まってくんない？」

「っ!!」

雉は目玉が飛び出るかと思つほど驚き、声のした方を振り返ると青髪の少年の姿。

少年の格好はまるで虫取りに出かけた子供のよう。残念ながらこの少年を雉は知っていた。

「なんだ……。ウラシマか」

「何だとはなんだい？雉さん。君は本当に失礼な子だね」。もう一



回小学校からやり直したらどうだい？」

「本当に口の減らないガキだな……。で、ただの運び屋の君が何のようだい？」

「うーん……。今日の僕は運び屋としてここに来た訳じゃないんだ。だから君たちの指図はつける気はまったくないんだよね」

「……。ん？どういうことだい？」

雉にはウラシマの言っていることが理解できなかった。このガキは単なる運び屋、自分たちを鬼ヶ島に連れていくただの道具に過ぎないと思っていた。

しかし今日のウラシマの雰囲気はただの運び屋とは少し違ったように見えた。

「株式会社竜宮城」

「……。はっ!？」

ウラシマは人差し指をピンと立て、唐突にそう言った。

「ありゃ？もしかして知らない？」

「そ、それは知らないわけじゃないか。で、そんな大企業がどうしたって言うんだい？」

「うん。僕はね、そこで働いているの。雉さん、いや、千鳥くん・

・

「っ!？」

何故このガキが自分の本名を知っているのか？自分の本名は誰も知らないはず。というよりも、もはや自分の名前を知っている人間はいないはずなのに……。

しかし、その答えはすでにウラシマ自身の言葉に見つかっていた。

「竜宮城で……働いているって?……」

「そう。僕はね、社長にちょっと探し物頼まれちゃって、僕一人じゃできないっばいから君の力を借りたいと思って。だから力を貸してくんない?」

「は……はは……別にいいよ」

雉が手を差し出す。ウラシマは笑って手を差し出そうとすると、雉の手の中には一枚の符が握られていた。

「……って言うわけないだろうがあああああ!!瞬即・風塵!!」

突如風が舞い上がり、雉の足に纏わりつく。ウラシマが一瞬だけ、瞬きをした時には彼の姿は遙か遠くにあった。

ウラシマはいたって冷め切った目で彼を見つめている。そして……

「水よ……」

ウラシマが短くそう呟くと、雉の周りに水の柱が四つ現れた。ウラシマの詠唱はまだ続く。

「縛れ」

「なっ!?!」

水柱が雉の風を打ち消し、雉の足に巻きつく。足をもがこうとも水は纏わりつき離れず、そのまま地面に伏してしまった。

「あれれ、転んじやつたね。大丈夫かい？」  
「・・・・・・・・え、詠唱破棄なんてチートじゃないか」

詠唱破棄とはその名の通り、魔術師最大の欠点である“詠唱”を短縮、または無詠唱で魔術を行使できるモノである。

しかし、その分消費する魔力は馬鹿でかく、普通の魔術師では使うことは出来ない代物である。

なのにこのガキは何の遠慮もなく使って見せた。雉が驚くのも当然であった。

「詠唱破棄なんて簡単さ。ただ頭の中で念じればいいんだから。そこまで驚くことはないだろ？」

「くっそ・・・・・・・・」

「にしてもさ、何で君はこんな船を用意しているんだい？天狗なら飛んでいけばいいのに・・・・・・・・。ああ、そうか。君は飛べない天狗だったね」

「貴様！！」

雉が激怒をあらわにする。しかし足が縛られてはとうしようもない、ウラシマは余裕の笑みを浮かべた。

「まあまあ、そんなに怒らずに。で、僕の依頼は受けてくれるかい？千鳥くん」

「・・・・・・・・ちっ！しょうがないから受けてやるよ。僕もまだ生きたいからね」

「賢明で助かるよ、千鳥くん。で、依頼というのはね・・・・・・・・」

ウラシマは自分の顔を雉の顔に近づけ、ニタリと笑った。

「玉手箱を探して欲しいんだ」

鬼ヶ島中央塔。かつての鬼の栄華を象徴するものであるコレは、以前は豪華絢爛なモノであったのであろう。しかし、今ではそれも見  
る影もなく崩れる寸前にまで至っている。

鬼丸と金太郎は現在、それを登っていた。

「……………」

「……………」

「……………」

鬼丸も金太郎も、もちろん犬も誰も喋ることはなく塔内部の螺旋階段をひたすらに登っていた。

誰もこの均衡を破ろうとはしなかった……………はずであった。

「……………お腹が減りました」

「……………つておい！」

金太郎は盛大にずっこけた。

「……………何してんですか、キンタ？」

「それはこつちのセリフだ！少しは空気がつてというのが読めないの？」

「貴方は人の生理現象までケチをつける気ですか？随分と狭量な人ですね、貴方は。それに昔から言うじゃないですか。“腹が減っては戦は出来ぬ”と」

「今なんか食ったら腹ふくれて動きづらくなるだろうが！動くときは少しぐらい腹が減っていたほうがいいんだぞ！」

「戦う前に餓死したら意味ないでしょ！」

「んなことあるか！？最近お前かぐやに似てきたことないか？」

「そうかもしれないね……。夫婦は似るって言いますし……」

「お前らいつ結婚したんだよ!？」

はて、先ほどの緊張はどこへやら……。途端に騒がしくなり、声が反響して耳障りである。

その時、鬼丸の目の前に手が差し出される。

「………食べ」

「どうも………」

手の持ち主は犬。その中には、どこから取り出したかは知らないが一つのおにぎりがあった。鬼丸はそれを受け取ると、毒がないことを確認してから口に入れた。

「………」

犬は再び頂上に向けて歩き出す。無言なのがまた怖かった。敵だから当たり前なのだが……。

「キンタ、犬の目的とは何なのでしょうか？」

「へっ?……いや、考えたことなかった………」

「………私たちを倒すこと、ではない。それならば部下として存在する意味はあるのでしょうか？それに雉、猿、犬、三人とも一人ずつ私たちの目の前に現れた。一斉に来れば私たちを倒せるの

に……」

「まるで俺たちを試しているみたいだな……」  
「その通りだ！」

先にのぼっていた犬がいつの間にかこちらを向いている。犬の方が上の段にいるため見下される形になっている。

鬼丸にはそれが気に入らなかつた。

「どういうことだ？俺たちをためしたって？」

「……貴様等が桃太郎様と戦うにふさわしいか、ためしたまでの事。そのために貴様等を少しつけさせてもらった……」  
「！あの時ですか？」

鬼丸はギルドで会った白髪の男を思い出した。

ああ、すみません。

構わん……

「あの時からかよ……」

「それよりも闘うのにふさわしいもありますか？誰でも闘えるでしょうに」

「……桃太郎様は欲求不満だ」

「よつきゅ……お前、何言ってるんだ！？」

「貴方こそ何慌てているのですか？」

……どうやら金太郎の頭はそっちの方向に向かったようだ。顔が真っ赤に染まっている。

後の二人はいたって無表情である。

「桃太郎様は破壊欲求が激しいのだ……」

「……アレ？そんな欲求、人間にあつたつけ？」

「破壊欲求……文字通り、モノを壊したい、人を殺したい、といった欲求ですよ。通常なら現れないんですけどね。一説には人間の中の野生の血が色濃く残り、行動が抑えられないそうですが……仮にも人間の英雄が破壊欲求者とは、皮肉ですね……」

「その通り。生半可な腕のモノでは一瞬で叩き潰されてしまう……。私はその光景を何度も見てきた。そして十三年の月日が流れ、桃太郎様ももう限界……。桃太郎様はいつかこの世界すら壊そうとする、そう諦めていたときに、鬼がここを取り返そうと動いたと聞いた。待ち望んでいたこの日がようやく来たのだ。あとは貴様等が闘うだけだ」

「勝手なことを言つてくれますね……。そんなことで闘うなんて冗談じゃないですよ」

「ふっ……。確かにな。だが貴様もここが欲しかろう。貴様らには戦う道しか残されていないのだ」

犬の言うことは尤も……。鬼丸は黙り込むしかなかった。いつの間にか頂上についていたようだ。犬は頂上の扉の前に立つ。

「さあ、鬼と金髪。この扉を開けよ。桃太郎様はここに居られる」

「鬼丸……」

「ええ、行きましようか」

鬼丸と金太郎は扉の前に立ち、同時にこの扉を押し開けた。

中央塔はかつては鬼の長老の部屋である。所謂玉座の間。しかしそこには原型を留めているものではなく、壊れたイス、つぶされた机のようなものが転がっているだけであった。

しかし唯一残っている中央の椅子に、確かにヤツは座っていた。

「クツクツク……………」

「アレが……………」

「桃太郎……………」

この国の英雄にして、破壊欲求者、桃太郎。ヤツは確かに待っていた。

桃太郎は見る限り、鬼丸よりは大きい。金太郎よりは小さい。だいたい170cmくらいであろうか。腰にはそれに不釣り合いな長さの日本刀。黒い刀身のそれは、それ自体が敵を威圧する。

そして敵を射抜く鋭い目、髪は黒色のセミロング。白い着物は死に装束を思い出させる。しかし見るものの目を一番にひきつけるのは、その豊満な胸……………」

「クツハツハツハツハ！ようやく来たな、鬼共！！アタシがぶつ潰してやんよ！！」

『　　って女じゃねえかああああ！！??？』

……………かつて鬼が島を滅ぼした英雄、桃太郎は女であったのだ……………」





第一章・第二十七話：桃太郎、満を持して参上！（後書き）

はい、桃太郎は女でした！・・・・・・・・すみません、完全に作者の趣味です。

こんなモノでもまだ続くので、今後ともよろしくお願いします！

第一章・第二十八話：ピンチ！（前書き）

いつもはタイトルで十分くらい悩むのですが今回はすんなり決まりました。

……テヌキジャナイデスヨ（汗）

## 第一章・第二十八話：ピンチ！

『　　』　　つて女じゃねえかああああ!!???』

「うっさいガキ共・・・・・・・・。キャンキャン喚くな、テメエら！」

この国の英雄にして最大の敵、桃太郎は女・・・・・・・・。まずその事実金太郎はついていけてなかった。

「なあ、鬼丸・・・・・・・・。太郎”つて女につける名前か？」

「そんなわけないでしょう。だったら、“金太郎”の貴方も女ですか？」

「そう、だよな・・・・・・・・。でも何でだ？何で桃太郎が女なんだよ？」

「ああ。それはな、アタシを拾ったジジイが最初見たときにどうやら男と間違えたらしくてな、桃の木で拾った男っていうことで、“桃太郎”つて名づけたらしい。ていうか、人の名前にケチつけるんじゃないねえ！」

「そんな無茶苦茶な・・・・・・・・。」

金太郎が呆然としていると、桃太郎が犬に指で合図する。犬は一瞬で桃太郎の隣に来ると、ヒザをつけそこに控えた。

「犬、あの金髪誰だ？雉からは何も聞いてねえぞ」

「はい、あの男は坂田金太郎。鬼丸童子がこの旅を始めて最初に出来た仲間でございます。名家“坂田家”直系の退魔師なので、実力に見劣りはないかと・・・・・・・・。」

「報告ご苦労。それじゃあ始めようぜ、ガキ共!・・・・・・・・と、その前に　　」

桃太郎は今まで確かに笑っていた。笑って犬のほうを見た。

「テメエは消える、犬！」

「えっ!?!?.....」

桃太郎の表情が一瞬で消える。

その冷徹な目は犬を確実に射抜き、犬は余程衝撃だったのか、今にも消えそうな表情になる。

「オメエはもういらねえ。さつさとアタシの前から失せな」

「しかし、桃太郎様！相手は二人、いささか無茶があるか」

「テメエは、“また”アタシの邪魔すんのか?.....」

“また”.....。

その言葉がいつでも犬を苦しめる。もしあの時をやり直せたら、その悔恨の念が犬に襲い掛かった。

「いえ.....。そういうわけでは」

「..... だったら消える！」

一瞬の出来事.....。何かの衝撃音と、人間が軋む音がしたと思うと、次の瞬間には桃太郎と犬は中央からかけ離れ、部屋の端にいた。

問題はその格好。犬は壁に叩きつけられ、桃太郎はその首を片手で締め付けている。

「かつ、は.....」

「テメエに残された道は二つ。今すぐにここから飛び降りてアタシの目の前から消えるか、それともアタシに殺されるかのどちらか！」

「さあ、選べ！」

桃太郎がさらに力を強める。  
ミシミシと人間から発せられるとは思えない音が辺りに響き、犬の顔には血管が浮かびあがる。  
いつ死んでもおかしくない。そんな状況にも関わらず、犬の表情は

笑っていた。

「……何笑ってた、犬？」

「わ、私は貴方様に憧れ、目標にし、ここまで来ました。その貴方に殺されるといふのならば……本望でございます」

「じゃあ、一発で落としてやんよ」

まさに神速、桃太郎は犬を掴んでいないもう片方の拳を突き出す。  
犬の腹に伝わった衝撃は犬を貫通、背後にある壁にまで伝わる。

壁はまるで紙のように穴が開き、犬はそのまま塔の外に落ちていった

「おい、犬！……桃太郎、テメエ何やってんだ！？」

「ただ邪魔者を排除しただけだ……」

「邪魔者……犬はテメエの仲間じゃね」

「うるさい！」

桃太郎は金太郎の声を遮る。その気迫に金太郎は圧倒されてしまった。

「アタシの勝負を邪魔するヤツは全員邪魔者だ！アタシはこの日を待ち続けて十三年。十三年間、鬼がここを取り返してくる日をアタ

シはずっと待っていたんだ。あの時みたいな最高の勝負……  
・フ、フハ、アツハツハツハツハ！！さあ今度こそ始めようぜ、ガ  
キ共！最高の勝負をな！！」

最高の勝負？金太郎の頭の中にはその言葉が脳裏を駆け回っていた。

仲間を殺しておいて最高の勝負だと？  
敵を待っておいて最高の勝負だと？

ふざけるな！

金太郎は無意識に紫電を構えていた。

「鬼丸、行くぞ！あいつだけは絶対許せねえ！」

「ええ、もちろん。行きますよ、キンタ」

「アツハツハツハツハ！行くぞ、ガキどもおおおおお！！」

294

「一撃で落としてやらあああああ！！」

先に動いたのは桃太郎。黒い日本刀を構え、二人に突っ込んでくる。  
当然、金太郎も、鬼丸も迎え撃つ準備は出来ていた。しかし……

速い！

「くっ！！！！！！！！！！」

「ほう………。アタシの攻撃を止めたい！だったらコレでど

うだい!？」

何とか紫電で受け止めている金太郎に向かってくる桃太郎の強烈な蹴り。体勢が崩れているにも関わらず、その威力は見劣りがしない。

こちらも左足を折り曲げの直撃は避けるが、その衝撃は体まで伝わる。

「ぐっ！」

「右がガラ空きだよ！」

「……………どうやら桃太郎というのは人間をやめたらしい。」

桃太郎は体を宙で回転させ、金太郎の頭めがけて右足の蹴りを放つ。所詮は金太郎も人間、そんな人間からかけ離れたような業に対応できるわけもなく、頭に直撃する。

脳震盪を起こして倒れる金太郎に、情け容赦なく刀を振り上げる。

「とどめだあああああ!!！」

「させるものですか！」

鬼丸の不意討ち。デザートイーグルによる弾丸は桃太郎めがけて放たれる。

しかし桃太郎にとってみれば何も意味をなさない。何故なら桃太郎にとって銃弾なんか止まって見えるから。

「無駄だよ!鬼っ子！」

桃太郎は日本刀で全て銃弾を叩き落す。するとその瞬間銃弾が弾け



飛び、破片が襲い掛かる。

流石の桃太郎も驚きの表情に変わった。

「おつと！……怖い、怖い。なんだい、この弾は？」

「我に宿りしは烈……。金太郎、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ……。」

「烈？……ああ、そうか。だから弾け飛んだのか……なるほど、なるほど……。」

桃太郎は顎に手を当て、いかにも考えているような格好をとる。そして再び笑い出した。

「面白い！面白いよ、鬼っ子！もっとアタシを楽しませておくれ！ヒヤッハッハッハ！！」

「言われなくとも……。我に宿りしは<sup>あつ</sup>圧！押しつぶせ！」

デザートイーグルから圧力の弾丸が放たれる。この弾丸に触れた瞬間、あらゆる物質は押しつぶされる……はずであった。

「クッハ！重たいねえ！でもまだまだだよ、鬼っ子！」

「バカなッ！？何故、圧力が負けるんですか？」

「終わりかい！？だったら今度はコッチの番だよ！」

桃太郎は飛び上がる。まるでこちらに反撃など考慮に入れてない全力攻撃。鬼丸は迎え撃つより、避ける選択を取った。

「ヒヤッハアアアアアア！！」

「ちっ！……化け物か……。」

鬼丸の元いた場所、そこは確かに平面だったはずだ。しかし鬼丸が次見た瞬間には巨大なクレーターが存在していた。

鬼丸の背中に冷や汗が流れる。

「おいおい！上に逃げちゃガラ空きだろうがああああ！！」

「我に宿りしは　　なっ！？」

瞬間移動でも使ったか……。

空中にいる鬼丸の目の前には日本刀を携えた桃太郎の姿。

鬼丸にはなす術もなかった。

「あつ……」

「鬼っ子、死ね……」

鬼丸に日本刀が振り下ろされる。確実にアレに当たったら死ぬ……。鬼丸が死を覚悟した時、金色の壁が鬼丸と桃太郎の間を遮った。

「おお！？」

「電磁結界、First Drive Create！……大丈夫か、鬼丸？」

「ええ、助かりました、キンタ」

「へえ……結界か……。退魔師で結界を使えるのか……。魔力を操る鬼に、結界を使える退魔師……。本当に面白くなってきたぞ、お前ら！さあ、アタシをもっと楽しませてくれ！ヒヤッハッハッハッハッハ！」

「くっ……」

「どうする？……鬼丸……」



よ

「んなわけない

ノワツ！」

猿が何かの衝撃を受け、転倒する。受身を取り、何があつたか確認すると背後には、一つの人魂がフワフワ浮かんでいた。かぐやはケラケラ笑っている。

「まったく本当にバカですね〜！貴方は。そんなに簡単に私に勝てると思っっているんですか？」

「うっさい！くっそ、この人魂、鬱陶しいなあ」

「ほらほら、当たりますよ！」

七つの光が一斉に猿に襲い掛かる。そんな不利な状況で猿は笑っていた。

「まっ！ワイはもう姫さんの弱点知ってるのやけどな！」

「へえ〜……………。私の弱点が分かるとは……………。私に弱点などないのですよ！」

「姫さん、その武器って“他の形態になつとるとき別の形態に変えれへん”のやろ？」

「……………。そ、そんなわけないでしょうが」

「それ、バレバレやで……………」

猿は如意棒を持ち直し、そしてかぐやに襲い掛かる。

「今、攻撃しとる時は、防御は出来へんちゅうことやな！」

「くっ！……………月光・望月」

金色の望月と赤色の如意棒が激突。圧倒的な力と力のぶつかり合い、凄まじい激突音と力の余波が辺りに響き渡った。

この時点では力は拮抗、かぐやも笑みを浮かべている。

「そんな攻撃では望月は壊せませんよ」

「……ワイはこんなところで負けるわけにはいかんや・

……」

「ん？どうしました？」

「ワイは“最強”になるんや……。最強がこんなところで負けるわけにはいかんや！」

「“最強”？……はっ！くだらない。最強なんているわけないじゃないですか！」

「ウキヤキヤキヤ！……ところがおるんやよ。最強の称号の持ち主、“G”って言う奴はな！」

猿は笑い出した。楽しそうに、愉快そうに。その顔には只ならぬ狂気を孕んでいた。

「強さとは相対的なモノ。いつ、いかなる時でも、どんな相手でも勝負に勝てるなんているはずがない。……最強なんていたらこの世界は確実にそいつに支配されていますよ……」

「せやから目指すんや、最強に！ワイは最強になる……。それがワイの夢。だから最強に一番近い桃太郎についていったんや。ワイは桃太郎も倒す！こんなところで負けとるわけにはいかんや！重くなれ、如意棒！！」

途端、力の拮抗が崩れる。猿の力が一気に増大したのだ。かぐやの顔からは余裕の笑みは消え、必死に耐えようとする。

「一体何が？……」

「如意棒はな、長さが変わるだけやない、重さまで変わるんや！」

「えっ？それじゃあ……」

「そうや！如意棒はどんどん重くなる！」

さあ、姫さんはこの状況をどうするんや？姫さんの武器は確かに強力。しかし防御しながら攻撃は出来ない。このまま姫さんは逃げることも出来ず、潰されるのを待つしかないんやで！」

「くっ！……」

かぐやの顔に初めて、汗が流れた。

第一章・第二十九話：永遠と最強と鬼、人間と

「さあさあさあさあ！どうするんや、姫さん!?」  
「くっ!.....限界、ですか?.....」

金色の光と赤い如意棒の均衡。それも今に崩れようとしていた。如意棒の重さは時間と共に重くなり、さらにその威力を強めている。このままでは望月は破られ、如意棒がかぐやを襲うだろう。

かぐやの選択肢はもはや一つしかなかった。

「.....舐めるんじゃないですよ!月光・七夜!」  
「なっ!?.....ぐほお!」

望月が途端に消え、七つの光に変わる。ほぼ同時、如意棒がかぐやを、光が猿に襲い掛かる。如意棒の衝撃によって辺りに砂埃が立ち込めた。

閃光の一つが猿の腹に襲い掛かり大きな風穴がポツカリと開く。血が腹から噴出し、激痛が猿を襲い、顔も歪む。それでも猿は立っている。立って勝利を確信した。

「ワイの、ワイの勝ちやな!姫さん!ウキヤキヤキヤキヤ!」  
「くっ.....痛い.....」

砂埃が晴れ、姿を見せたのはかぐや。しかしその表情からは余裕はもはや消えている。

まあ、当然と言うべきか.....。かぐやの右肩はもはや存在せず、血で真っ赤に染まっているのだから。

正直、あの一撃で終わらすつもりであった。望月を解除し、七夜で一気に猿を強襲。自分は如意棒をさけ余裕で勝利する、“つもり”であった。

しかし行動がほんの僅か遅れ、如意棒が右肩に直撃、そのまま持っ  
ていかれてしまった。しかも猿はなお健在……。かぐやには  
もう闘いの策は残されていなかった。

「直撃したはずなのに……。何故？」

「ウキヤキヤキヤキヤ！最強になるためにはな、こんなところで倒れるわけにはいかんのよ！ハアハア、もうコレでワイの勝ちやな！」

残されたのは絶望、猿はゆっくりと如意棒を構える。突きが来ると分かっていてもかぐやには避ける体力はなかった。

「……。終わり、ですか？」

「チエツクメイトや、姫さん……。伸びろ、如意棒おお

おおおお！！！」

ぐちゃ。。。。。

赤い鮮血が辺りに飛び散る……。如意棒の突きは確実に  
かぐやの心臓を貫き、かぐやはゆっくりと、まるでスローモーション  
でも見ているのかのように地面に倒れこんだ。

「は……。はは……。あっはっはっはっは！ワイの、  
ワイの勝ちやあああああ！！！」

もはや猿の言葉を否定するものはない。猿は思い思いに叫びだした。

桃太郎に仕えて十二年、ようやく最強の糸口が見えた。もう自分の



邪魔をするものはいない、そう思っていた時だった。

「・・・・・・・・・・やっぱり貴方じゃ殺せませんか・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・はっ!？」

猿は信じられないような、いや、信じてはいけない光景を目にした。

この世界、万物には“死”という概念は必ず存在する。人にも、魔にも、木にも、そして神でさえも確実に死というものはある。

そして死は誰にも否定されず、死んだものが蘇るなんてことはあるわけがない。

なのに、今、目の前で起こっていることは

「ふう〜・・・・・・・・痛いじゃないですか!まったく・・・・・・・・あつ!私の着物が台無し・・・・・・・・」

その概念を覆すものだった。

「ななななな何でや!?何でアンタ、死なへんのや!?天人といえどもこの傷は流石に死ぬやろ!？」

「煩い人・・・・・・・・。私はね、他と違って特別なんですよ」

「特別、やと?・・・・・・・・何がや?」

かぐやは至極当たり前のように答えた。

「私はね、死なない、いや、死ねない体なんですよ」  
「はっ!？」

猿は呆然とする。だったら今までの戦いは何だったのだろうか?生死を賭けた戦いに、片方は死なない。そんなことあっていいのだから

うか？……猿の頭の中は真っ黒になった。

「ん、んなもん勝てるわけ、ないやん……」

「そうですね。貴方の敗因は“私と戦ったこと”。最初から貴方には、勝機などなかったのですよ……」

かぐやは未だに突き刺さっている如意棒を手に持つと、それを伝って猿の方へ向かっていく。ぐちゅ、ぐちゅと、肉が音を立てながらこすれ、大量の血が流れるがかぐやはそんなもの気にしない。何故なら自分は死なないのだから。

猿はかぐやに言われもない恐怖を抱いた。

「う、うわああ！こつちに来んなや！」

「貴方が永遠を止められるとでも？無理ですよ、絶対に。止められるのなら止めてくださいよ……。月光」

かぐやの左手に光が集まる。七夜とも、望月とも違うその光は一つに集合。まるで太陽のような球体になり、まばゆい光を放つ。

猿はそれを本能で分かった。コレが自分の死か、と。

「や、やめろ……」

「孫悟空……。楽しかったですよ、貴方との勝負は。しかし如何せん私との格が違いすぎましたね……。また生き返ったら勝負して差し上げますよ。私は多分その時まで生きていますから」

「ひっ！……」

「それでは、さようなら」

かげろつ  
陽炎」

巨大な光が猿を襲う……。爆音と光が辺りを包み込み、それが消えた後に残っているのは地面に残ったくぼみのみ。かぐやは未だ刺さったままの如意棒を抜くと、呟くような声で言った。

「兵共のせむしが夢の跡……。いけませんね。どうしても闘った後には空しくなってしまう……。」

かぐやは大きく息を吐き出す。しかし突然自分の使命を思い出したような、そんな表情になって中央塔を見た。

「鬼丸さん、今、会いに行きますからね！」

はて、今回の戦いは過去十二年間を見てきても不思議なことばかり起こるね。アタシはそれが刺激だから別にいいんだけどもね。

まず、第一に敵が不思議だ。アタシは魔術師でも何でもないから詳しくはないけど雉によると、魔術の属性は命一つに一色だっさ。なのにこの鬼っ子は色々な魔術を使ってくる……。魔術師ともなんか違うし、こいつは一体何なんだ？

それにこの金髪……。てつきりオマケかと思ってたけど、そうでもないね。結界を使える退魔師なんかアタシは見たことないよ。力も強いし、こいつは有望だ。後百人くらい殺せばいい退魔師になる。でも……。

「ハア……ハア……」

こいつの行動が意味不明！

アタシが鬼っ子を殺そうとすると、すぐに鬼っ子を庇う……。片方が攻撃されている間、アタシを殺そうとすればいいのに、何故しないんだろうか？もしかしてバカなのか、コイツは？

……。まあ、いいさ。アタシはそれが楽しいからね。アンタらには踏み台になってもらうよ、アタシの“最強”への道のね……

「あっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！！！！」

「鬼丸！大丈夫か！？」

「ええ、何とか……。っ！キンタ、来ます！」

「ヒャッハアアアアアア！」

目で追えないほど高速移動、まばたきなどすればその瞬間には殺されているだろう。神経を研ぎ澄まし、やっと反応できるほどだ。

金太郎は結界を張って、桃太郎の猛攻を防ぐ。だが……

「くっ！……。結界だけじゃたりねえ……」

「おらああああ！ぶっ壊すぞ！」

「う、おおおおお！紫電！」

桃太郎の剣戟、金太郎の結界と紫電が激しくぶつかり合う。  
結界と紫電、その二つを合わせてようやく互角になる。しかも桃太郎の表情には未だに余裕がある。

「我に宿りしは波！……喰らいなさい！」

「おお！？いつの間に!？」

金太郎と桃太郎が均衡している間、鬼丸は二人の後ろに回っていた。デザートイーグルから放たれた弾丸はすでに弾丸としての形を失っていた。鬼丸の使った魔力は波。空气中を振動させ、衝撃波で攻撃する……。普通に考えれば、防ぐことの出来ない攻撃であった。

「音波?……まっ、関係ねえか！砕け散れええええ！」

「何ですって!？」

桃太郎は日本刀を振るう。そう、ただ振るっただけで衝撃波が消えた。

コレには鬼丸も動揺が隠せなかった。

しかしそんな暇もない。桃太郎の次のターゲットは鬼丸に変わった。

「鬼っ子おおおお！勝負だああああ!!」

「冗談じゃないですよ!!」

鬼丸の得意とする距離は中から遠距離。接近戦も出来ないことはないが、どうしても苦手であった。

さて、現在こちらに向かってきている桃太郎は接近戦が得意。今、彼らが闘ったならばどうなるだろうか？

確実に鬼丸が負ける。

「鬼丸！今行くぞ！」

「・・・・・・・・・・金髪、一つ聞いていいか？」

金太郎が立ち上がり、紫電を振るう。桃太郎は難なくそれを受け止めるが、不思議そうに金太郎に問うた。

「あつ！？何だよ！？」

「・・・・・・・・・・なんでお前アタシに攻撃してこないの？」

「えっ！？」

桃太郎は日本刀で紫電を防ぎながら、首をかしげる。

「お前の攻撃はどうもアタシに攻撃するためのモノじゃねえ。この鬼っ子を守るようにアタシと闘っている・・・・・・・・・・普通なら鬼っ子が攻撃されている間、反撃の機会を窺うべきだが、何でだ？」

「決まってるだろ、鬼丸が仲間だからだよ！仲間を守るのは当然だろっが！」

「・・・・・・・・・・仲間、ねえ・・・・・・・・・・」

途端、金太郎は言われもない恐怖に襲われる。

自分を射抜く冷徹な目・・・・・・・・・・。人間はここまで冷え切ったモノになれるとは金太郎は知らなかった。

「くだらねえな・・・・・・・・・・」

「何だと！？」

「くだらねえよ、テメエの言ってることは！そんな甘ちゃんじゃアタシに勝てねえし、アタシもアンタと闘う気は失せた！」

「失せた、だと？」  
「だから消える、オメエは！」

桃太郎は紫電の柄を持ち、思いつきり投げ捨てる。  
恐ろしいまでの怪力、金太郎はなす術もなく紫電ごと壁に叩きつけられた。

「ぐ、はっ!?!?.....」  
「キントア！」

「.....鬼っ子、オメエも分かっているだろ？オメエも仲間なんてくだらないって」

「何?.....」

金太郎は脳震盪を起こし、そのまま気を失う。鬼丸はすぐに助けに行こうとするが、桃太郎がその道をふさぐ。  
鬼丸は止まるしかなかった。

「オメエは鬼、ヤツは人間。違う種族が互いの手を取り合う?.....ふざけんな！仲間なんてくだらねえもん縛られるほど鬼も弱くねえよな!?!?」  
「.....」

桃太郎は確認するように鬼丸に問う。

桃太郎の言ったことは自然、というより当然のこと。桃太郎も、鬼丸も誰もが分かっていること。

この質問に答えることは簡単、であったはずだった。

「ふっ.....」

鬼丸は突然ふきだした。

「アツハツハツハツハツハ！」

「・・・・・・・・何笑ってんだ、鬼!？」

「確かに仲間はいくらでもない・・・・・・・・。私も今までずっとそう思っ  
ていましたよ」

「だろ? やつぱり鬼なら」

「しかし、私はこの旅が楽しかった。金太郎と、かぐやと、  
ウラシマと続けたこの旅が楽しかった。今までこんなに楽しいこと  
はなかった。それがキンタのお陰というならば、私は仲間という存  
在を大切にしますよ」

「・・・・・・・・」

桃太郎の表情は髪で隠れてこちらからは見えない。日本刀を鞘に納  
め、大きく息を吐き出した。そして髪を掻き揚げて鬼丸を見た。

桃太郎は全てを憎悪するような目つきで鬼丸を睨みつけた。

「だったら、テメエも」

消えるや、鬼iiiiiiiiiii!」

桃太郎は恐ろしい形相で鬼丸に向かって走り出す。武器など使わな  
い純粹な暴力、片手で鬼丸の首を掴むと持ち上げ、締め付ける。

「じつ、ほ・・・・・・・・」

「なあ、鬼っ子・・・・・・・・お前も鬼だろ? 鬼の力っていうのを見  
せてくれよ。お前にもあるんだろ、“滅力”<sup>めつりょく</sup>っていうのが? オメエ  
も鬼の端くれなら見せてみるや!」

「か・・・・・・・・は・・・・・・・・」

「使わないんだったらテメエは死ぬぞ! その力でアタシを殺して見  
せるや!」

「・・・・・・・・その必要は、ないですよ・・・・・・・・わ、私にはキ



ンタが、いますから・・・」

「まだ言うか！？もうオメエには仲間なんて必要・・・ねえ、だる？・・・」

桃太郎の腕が誰かに掴まれる。その誰かの力は、かつて桃太郎が戦った誰よりも強い力であった。桃太郎はゆつくりとその手の持ち主の顔を見た。

桃太郎の目に入ってきたのは金太郎だった。

「オメエ、鬼丸に何やってんだ！？」

「・・・金髪、オメエどっからそんな力が？」

先ほどまでの戦いで、金太郎の力は強いことは分かっていた。しかしどう考えても自分ほどの力は出せない、そう桃太郎は思っていた。しかし今この状況を見てどうだ？今この金髪は自分を圧倒するほどの力を発揮している。このボロボロの体のどこから、この力はきているのだろうか？

理解不能。

「俺はオメエに聞いてんだよ！鬼丸に何やってるかってな！」

「うお！？」

金太郎は桃太郎の腕を振り払い、投げ飛ばす。金太郎のようにそのまま壁に叩きつけられることはなかったが、動揺は隠せなかった。

「このガキが！何が起こった！？」

「うおおおおお！！！！」

金太郎は紫電を振るう。思いつきり、全力で。  
桃太郎はそれを日本刀で捌くが、一発、一発の重みが増している。  
金太郎の攻撃を受けるたびに腕が痺れる。

「くっそ！何が起こってやがる！？」

「オメエみたいなヤツには分からんだろうよ！仲間をどうでもいい  
とまっているようなヤツにはな！」

金太郎の逆袈裟切り、それは必殺の一撃にはならないものだったが、  
桃太郎の体制を崩しガードを壊すには十分な代物であった。

「っ！？まじか！？……」

「雷鳴」

もちろん、その隙を金太郎が見逃すはずがない。自分の魔力を充足  
させ、紫電が金色に光り輝く。

そして、自分最大の敵に、自分最大の一撃を叩き込んだ。

「怒涛おおおおおおお！」

第一章・第二十九話：永遠と最強と鬼、人間と（後書き）

作者です。金太郎君が大活躍したこの話でこの小説は30話を迎えました。

本当に飽きっぽい自分がよくここまで続けたな、と思ひまして。

（オイ）

まだまだがんばりますのでどうぞよろしく願ひします。

第一章・第三十話：桃太郎、陥落（前書き）

途中に空白がありますが表現上のことですので、ご了承ください。

## 第一章・第三十話：桃太郎、陥落

「やった、のか？……」  
「キンタ！」

金色の雷光が塔の壁を貫き、桃太郎が光に飲み込まれる。

全ての光が失せ、金太郎が倒れそうになったところを鬼丸が支えに入った。無理もない、自分の魔力を総動員させて攻撃したのだ。金太郎の体は外部的にも、内部的にもボロボロになっていた。

「も、桃太郎はどうなった？……」

「……まだです。ヤツはまだいます」

「だったらまた俺が」

「キンタは休んでいてください。キンタの魔力は空っぽ……私に任せてください」

「で、でも……」

不安がっている金太郎。先ほどまで首を絞められ、鬼丸の方もボロボロなのだ。

鬼丸は人差し指を唇にあて、こう言った。

「たまには私も活躍させてくださいよ、キンタ」

「あの金髪……。足がもう使えねえじゃねえか！」

瓦礫の中から這い出てくる桃太郎。あの一撃の中でも彼女は生き残り、尚且つ戦意は失ってはいない。そこは流石というべきなのだろうが、彼女の右足からは血が止まらない。もはや闘える状況ではなかった。

「流石、ですね。……まさかあの一撃でも死なないとはたいたもんですよ」

「鬼、か……。アタシはまだ負けてねえぞ！死ぬまで闘い続けてやる！アツハツハツハツハ！！」

「……上機嫌になつているところ悪いですが、貴方にちょっと聞きたいことがあるのですがいいでしょうか？」

「あん！？何だよ！？」

桃太郎は鬼丸に戦いを邪魔するようなことを言われ、不機嫌さを露にする。鬼丸はそれを無視して笑顔で桃太郎に問うた。

「それでは失礼を承知して……」

貴方は“何のために強くなつたのですか”？」

お前は何のために強くなるのじゃ？

「っ！！」

鬼丸の姿が桃太郎の記憶の人物と重なる。

自分の最も忌々しい記憶であり、自分の人生を変える一言。

先ほどは金太郎のことで動揺したが、今回は本当に精神的に動揺した。

「な、なに言つてやがる？……」

「……キントは、仲間や人々を助けたいがために力を求めま

す。私といえは自分の道を邪魔するヤツを排除するために力が必要です。そこで貴方はどうなのかな、と思ひまして」

「そ、それは」

「ないのでしよう、貴方には。強さを求める理由など最初から」

鬼丸が桃太郎の核心を突く。

桃太郎は鬼丸の言葉を打ち消すように、大声で否定した。

「そんなことねえ！アタシは“最強”になるっていう理由がある！」

「最強？・・・そんな存在がいるのですか？」

「いるさ！だってアタシのじいさんなんだからな！」

「へっ！？」

今度は鬼丸が動揺、というよりは驚きを隠せなかった。なんという天文学的確立・・・。

桃太郎はゆっくりと語りだした。

「・・・アタシには親なんかいねえ。だから生きていくためには闘うしかなかった。殴って、蹴って、ぶち殺して、そして奪って・・・そんななかアタシの目の前に現れたのがジジイだった」

・・・良い拳だ・・・餓鬼、名をなんと言う？

「ジジイは強かった・・・。アタシはヤツに勝つことなんか一度もなかった。だからこそ、アタシはヤツに勝って最強になりたかった！でも！」

桃太郎は自分の刀を握り締める。自分に向かってはいない、大きな憎悪を鬼丸は感じれた。

「ジジイはアタシが勝つ前に逝っちまった！だからアタシはアタシなりの方法で最強を目指した！だからこの国、最強の鬼を倒した。アタシはこれからもどんどん倒し続ける！コレがアタシの強さの道だ！」

「……………なるほど。最強ですか……………」

最強……………コレが桃太郎の強さを求める理由……………。コレのせいで鬼ヶ島も滅んでしまった。こんな理由で自分の故郷滅ぼされたなど、普通なら激怒するところである。しかし、鬼丸は笑いがこみ上げて抑え切れなかった。

「くだらないですね」

「……………何だと？」

「くだらないですよ、貴方の言っていることは……………。それに貴方の言っていることには一貫性がなさ過ぎる」

「一貫性？」

「そう。もし、貴方が最強になりたいのであれば、こんなところで引き籠もってないで色々な敵と戦えばいい。吸血鬼、九尾の狐、黒狼、ハイエルフ……………この世界には私よりも強いものなどたくさんいますよ」

「だが、鬼も最強種族の一つだろ！？それを待って何が悪い！」

「ええ、確かに……………。しかし、一度勝ったことのある種族よりもありとあらゆる敵と戦ったほうが最強に近づくのではないですか？」

「そ、それは……………」

明らかな動揺、桃太郎の額に汗が流れる。今までこちらが追い詰めていたのに、今では逆にこちらが追い詰められている。

あんな小さなガキが自分の行く手を大きく阻んでいるように感じら



れた。

「結論から言いましょ。貴方は強さを求めるよりも負けることを避ける弱者になっているのですよ！」

「弱者………。アタシが弱いつて言つのかい!？」  
「ええ」

鬼丸は迷わず肯定する。そしてついに迷うことなく桃太郎に突きつけた。

「だから貴方はキンタに負けた。貴方はもはや強くはないのですよ」  
さて、今まで強さばかり求めてきたものが突然、自分の前に現れた子供によって強さを否定され、拳句の果てに負けてしまったてはどうなるだろうか？

結果、狂わずにはいられない。

「う、うわあああああああ！！嘘だあああああああ！！」  
「本当ですよ、桃太郎……。私が早く最強の元へ送って差し上げましょう。我に宿りしは滅」

取り出したデザートイーグルの銃口に黒い何かが集まる。アレが滅びの力。自分の終わり……。。  
いつもなら楽に避けられるものも、今では避けることも出来ない。

体が重い。

叫びたい。

まだ終わりたくない！

「嘘だ……アタシは強くなるんだ……もっと、もっと  
強くだあああああ！」  
「……滅びなさい、“最狂”！」

「なあ、鬼丸……。お前、桃太郎に何やった？」  
「あつ、ばれましたか？」

金太郎と鬼丸、二人は一緒に中央塔の螺旋階段をおりているとき、唐突に金太郎がこういった。

闘うことしか考えてないあの桃太郎がこうも簡単に倒されるとは疑問に思ったからだ。

案の定、鬼丸はすぐにタネをばらした。

「実はアレ、鬼の一族に伝わる一種の催眠術みたいなものでして、ちよつとした暗示をかけたのですよ。まあ、桃太郎にはそういう予兆みたいなものがありましたからね、簡単にかかりましたよ」

「そう、か……」

互いに無言、金太郎はもちろん、鬼丸も今回は後味の悪い終わり方だと思っている。道を外れた哀れな敵……。とても楽しく笑いあえる状況ではなかった。

そしてこの沈黙を破ったのは、金太郎であった。

「……なあ、鬼丸」

「何ですか？」

「桃太郎は結局、どうしたかったんだろうな……」

「……私は超能力者ではありませんし、まして人間でもありません。だから真相は闇の中ですよ」

「そうだな……」

「ただ私の意見としては……」

先に歩いていった鬼丸が振り向く。

「桃太郎は最強に認められたかったのではないのでしょうか？」

「認められたかった？……」

「ええ、彼女のおじいさんとやらに……。桃太郎は強い……彼女の有り余るほどの戦いの才能によって、他のモノなどただの雑魚。そんな彼女の前に現れたのが、絶対的強者の存在です」

「おじいさん、か……」

「彼女の目標は最強に勝つこと……。しかし親のいない彼女にとってそのおじいさんは父同然。勝てなくとも、認められれば彼女は良かったのではないのでしょうか。キンタも、そういうことあるでしょう？」

「ああ、まあな……」

金太郎の頭に紫電をくれた父親の姿と自由奔放な兄の姿が浮かび上がる。

確かに、初めて父親に褒められたときはうれしかったし、兄に一撃を当てたときの満足感はすばらしいものがあった。

自分も、桃太郎も一緒……。所詮は子供なのだ。



「ているんじゃないかな？全部壊すために」  
「爆弾つてコレですか？」

かぐやが、どこから持ち出したのかは知らないが、着々と時を刻んでいるタイマーと筒が三本取り付けてある何かの装置を取り出す。

タイマーの現在の時間は十五秒……。鬼丸は冷静に、なるべく冷静に指示を出した。

「かぐや、とりあえずそれをどこかに置いてください。……ええ、そうです。さてこの塔の出口は？……一つしかない？……なるほど、それでは皆さん 逃げましょうか！」

『うわあああああ！！』

四人は駆け出す、自分の命を守るために……。金太郎は走りながらかぐやに聞いた。

「かぐや、残り時間、あと何秒だった！？」

「え〜っと……。確か八秒くらい？」

「鬼丸の話を入れると……。あと、五秒くらいじゃねえか！」

残り5秒……

「くっそ！桃太郎！最後の最後にやりやがってえええええ！」

「楽しいね〜。アツハツハツハツハ！」

「何がじゃ！？」

4秒・・・・・・・・・・

「ところで鬼丸さん、私、“絶対に燃えない布”を持っているのですが、何かに使えないでしょうか？」

「うーん・・・・・・・・火は防げて爆風は防げませんからね、ちょっと無理ですね・・・・・・・・」

「何喋ってただよ、テメエらは!？」

3秒・・・・・・・・・・

「ていうか、この塔でかすぎだろ! 出口見えねえじゃねえか!」

「あつ! 出口!」

「マジで!？」

2秒・・・・・・・・・・

「役に立たないのでしたらこんな布もありません!」

「ちよつ! かぐや、こんな時にモノ投げんな! 前が・・・・・・・・見えん・・・・・・・・」

1秒・・・・・・・・・・

「もうちよつとですよ!」

「前が見えんから・・・・・・・・分かん!」

「アツハツハツハツハツハツハ!」

「キンタ、皆さん、飛び込んでください!」





第一章・第三十一話・そして、旅はまだまだ続く……（前書き）

今回、非常に短いです。

第一章・第三十一話：そして、旅はまだまだ続く……

「ええと……それでは皆さん、お疲れ様でした」  
『お疲れ様でした!』

鬼丸の掛け声と共に、三人はそれに続いて杯をあげる。

あの爆発の後、無事本土につくことが出来た四人は、取り敢えず今すぐに動くことは出来ない所以で休息もかねて、飲み会のようなものが浜辺の甘味屋で行われた。

ウラシマは一気にコップの液体を飲み干すと、大きく息を吐いた。

「いや、仕事の後の一杯は最高だね〜!」

「それ、オレンジジュースだけだな」

「だって僕、お酒飲めないし」

「あっ! マスター! 取り敢えずモンブラン、チョコケーキ、シュートケーキを十個ずつください!」

「オメエは食い過ぎだ!」

いつの間にか、というより先ほど始めたばかりというのに、かぐやの横には小さな皿の山が出来上がっていた。

未だに追加を頼もうとしているかぐやを金太郎は止めようとしたが、鬼丸はそれをなだめるように言った。

「いいじゃないですか、キンタ。ようやく終わったのですから。無礼講ですよ、無礼講」

「まあ、そうなのかな〜……」

「……ところで皆さん、場が滅茶苦茶になる前に聞いておきます。これからどうするつもりですか?」

一瞬で場の空気が変わる。ウラシマはオレンジジュースを飲むのをやめ、かぐやは箸をとめる。かぐやは鬼丸に問うた。

「鬼丸さんはどうするのですか？」

「……私はこれから鬼達が住んでいる山に帰り、鬼ヶ島への移動の手伝いに行きます。もとよりそれが目的でしたしね。……私たちの旅は終わりました。ですからここからは貴方たちの自由です。どうしますか？」

「僕は君についていくよ。というか、僕がいなければ引越しも何も無いでしょ」

「そうですね。お願いします」

鬼丸はウラシマに頭を下げる。この人間のお陰で鬼ヶ島につくことが出来たのだ。感謝しても仕切れなかった。かぐやも当然のように口を開いた。

「私もついていきますよ。竹林に帰っても何もありませんし。というか妻である私がついていかなくて誰が行くのですか？」

「オイ、お前らいつ結婚した？」

「で、キンタ、貴方はどうしますか？」

今、鬼丸が一番聞きたかったこと。それは金太郎がどうするか、である。

金太郎はゆっくりと喋りだした。

「……俺は今、退魔師の修行中の身だ……」

「はい……」



あつはつはつはつは、そんな皆の笑い声が響き渡っていた。  
自分が悩んでいたことが思いのほかちつぽけだったと、鬼丸は思い  
知らされた。

「ふふふ……そうですね、私は卑怯です。そんな私でもついで  
てきてくれますか？」

それこそ愚問、三人の答えはもはや決まっていた。

「まあ、仕方ないからね」

「もちろんですよ！」

「おう、鬼丸！」

「では今日という日を祝いましょう！私たちの記念日です！今日は  
私の奢りですよ！」

『おう！』

ある時、鬼の少年鬼丸童子は鬼ヶ島にいる桃太郎退治の旅を始める  
こととなりました。

いつの間にか彼には退魔師の少年、月のお姫様、子どもで社会人と  
いう三人の仲間ができ、見事に桃太郎を倒すことができました。

鬼丸は鬼の元へ帰り、仲間と共に鬼ヶ島の再興に努めていきます。

・  
・  
彼らの旅はまだまだ続くでしょう。彼らが仲間である限り……

「あつ、まだ終わりませんかね」  
「お前、誰に言ってるんだ？」

第一章・第三十一話：そして、旅はまだまだ続く……（後書き）

こんにちは、作者です。

突然ですが鬼丸君の言うとおりまだこのお話は終わりません。完結を期待された方、すみません。

作者自身、まだ未熟者で皆さんが満足いくような文章はかけませんが、しかしわがままのようですが、自分はまだこの話を続かせていきたいのです。

今年度は自分は受験生です。しかし何とか時間を作って自分のやりたいことを全てこの小説につき込みます。

これからもどうぞ、この小説をよろしくお願いします。

閑話休題：鬼ヶ島へご招待（前書き）

今回、金太郎君の一人称視点です。本当に難しく、御見苦しい箇所も多々あるかと思いますが、よろしくお願いします。



## 閑話休題：鬼ヶ島へご招待

「ふう……コレで終わりか」

「いやあ、金太郎さんがいて助かりますよ。わしらもう年取っちゃつて動けませんもん」

「いやいや蘭鬼らんきさん、まだまだですよ……あつ、俺が後片付けやっときますね」

「おっ！悪いねえ。じゃあ頼むよ、金太郎さん」

蘭鬼、もうだいぶ歳もいつてる老人……。いや、老鬼は畑仕事が終わると、後は俺に任せて家へ戻っていった。俺はそれを見届けると、再び仕事に戻った。

現在、俺は鬼ヶ島復旧の手伝いをしている。

桃太郎によって破壊されつくされた鬼ヶ島であったけど、鬼の力つてモノも凄いものですぐに元通りになった。……。あつ、俺、前の鬼ヶ島知らねえや

今では草木が戻りちよつとした集落も出来ている。中央塔も復元され、鬼丸たちはそこで鬼ヶ島の統治について話し合っているらしいけど、俺には今の力仕事のボランティアの方が性に合っていた。今ではこの仕事も楽しんで、満足もできる。

今日の空はとても広く、青かった。

「ふう、今日もいい天気

いたっ！」

「差し入れですよ、キンタ」

なんだ、鬼丸か……。いつもは塔で籠りっぱなしなのに珍しいな。

ていうか、食べ物投げんなよ。

「珍しいな、お前がこんなところに来るなんて」

「私もいますよ」

かぐやもいたのか……。ってことはアイツも来るってことか。

「じゃじゃ〜ん！ご明察だよ、キンちゃん！」

ウラシマ、テメエどっから沸いてきた!?

どっからともなく、本当にどこからともなく現れたウラシマはかぐやの後ろに立つと、いきなり……。その……。む、胸をもんだ。

「う〜ん……。本当にかぐやちゃん、女の子？胸ほとんどないじゃん」

『ブツクロス!』

「はいはい、二人もやめろって。で、お前たちは何しに来たの？」

俺は二人の襟を持って、猫みたいに持ち上げる。二人とも持ち上げられると急におとなしくなった。

まるつきり猫だな、オイ。

「そうでした、こんなところで油を売っている場合ではありませんでした。実はですね、この鬼ヶ島の鬼を皆さんに紹介しようと思いましたが」

「鬼の紹介？俺はだいたい知っているぞ。さっきの蘭鬼さんとか……」

「うん……。それよりも長達のことを知ってもらいたく思  
いまして。ほら、鬼ヶ島の長たちとコネを持っておいたほうがいい  
でしょう」

コネって……。

まあ、そりゃ尤もだな。かぐやとウラシマもそれに同意したようだ。

「鬼ヶ島のトップとコネを持てるのか。うん、悪い話じゃないね」

「分かりました！今すぐ行きましょうか！」

「それでは行きましょう。キンタもそれらの道具置いて行きますよ」

はいはい、分かりましたよ。……。

「ここが、鬼ヶ島の集落か……。結構大きくなったもんだな」

本当にでかくなったな、畑仕事ばかりやってて分かんなかったけ  
ど、あの荒地だったころとは大違い。ちよつとした、じゃなくて結  
構な街になっている。

こんなことならもつと街を見とけばよかつたぜ。

「ここが鬼ヶ島の中心地です。城下街、というよりは塔下街とい  
うべきでしょうか。塔を中心としてこの街はできています。今から私  
たちが向かうのは塔なのですが、ちよつと寄るところがあるので先  
にそちらに行きます」

寄るところ、ねえ…………。

鬼丸はそういった後、とある家に入っていった。俺たちも鬼丸について入っていったが、家の中は真っ暗で何も見えない。ただ、剣のようなモノが見えた気がしたけど。

ここは、武器屋か？

「鬼丸さん、ここは何のお店ですか？」

「ここはですね、私の行きつけの鍛冶屋でして、このデザートイールもここで改造してもらったんですよ…………鬼丸さん、いますか？」

鬼丸さん？

鬼丸がそう呼んだ時、俺の目の前に火の玉が現れた…………つて、ひっ！

「おお、こんなところにいたんですか、鬼丸さん」

「やあ…………鬼丸君、久しぶりだね…………」

どっからは知らんが消えるような声が聞こえてくると、鬼火が人型になって鬼になった。その鬼は俺と同じくらいの大きさで、魔女がかぶっているような帽子をかぶり、前髪が顔を覆いつくすほど伸びきっている…………つて、怖っ！

「鬼丸さん、頼んでいた50AE弾もう置いてありますか？」

「ああ…………もう、あるよ。そのテーブルに置いてある…………」

「テーブルがどこにあるか分からねえよ」

「…………おや…………お客さんかい…………」

髪が伸びきったその不審者はこちらを向いた。本当に不気味すぎる。……。髪の間に残った顔のスペース、それが黒い闇となつて、それを見ているとそれに引き込まれる感じがした。

とにかく不気味だ、それが俺の鬼六さんに対する第一印象であつた。

「ああ、鬼六さん、紹介しますよ。彼らが鬼ヶ島攻略の際に共に闘つた仲間です。左からウラシマ、かぐや、そして金太郎です」

「よろしくお願ひしましうす！ウラシマでうす！」

「四方院かぐやです。姫様と呼んでくださいね」

「……。坂田金太郎だ。よろしく」

「ああ……。僕の名前は鬼六。ゆつくりしていくといいよ……。」

こんな暗闇じゃゆつくりできねえよ……。

「おや？金太郎君、だつたね……。なんだかいい武器のにおいがするな……。君の武器をちよつと見せてくれないかな？……。」

「えつ、紫電を、か？」

「職業柄でね……。いい武器は見たいものなんだよ……。」

いい武器、といわれて悪い気はしない。俺は鬼六さんに紫電を渡した。

鬼六さんはそれを嘗め回すように紫電を見た。……。なんかやらしいぞ、オイ！それに息が荒いぞ！

「ほう……。これはハルバードだね。それもだいぶ上等の……。おや？コレは魔道文字かな……。」

「それは親父が書いたものだ。それのお陰でだいぶ  
「だいぶ下手だね、コレ……」

……今、何つった、この鬼？……

「重力半減……それは分かるんだけど、他のヤツはよく分  
らないな……コレを書いたのは初心者かな？……」

「テメエ、言わせておけば！それはな、親父が  
「でも、何か愛情を感じるよね……」

……はっ！？愛？

鬼六さんはそう言うと、こちらを向いて髪を掻き揚げた。鬼六さん  
の顔はとても優しくそうで、そして笑っていた……。

「うん、コレを書いた人の愛を感じるよ……。いいよね、親  
つていうのは……。僕には親がいなくてね……。ちよ  
うどこの文字の乱雑さが君の魔力にあっているみたい。コレはその  
ままにしといた方がいいかな……」

「とにかくコレは君の武器……。君専用の武器だね。コレは  
大切なモノ、絶対になくしちゃだめだよ……」

鬼六さんはそう言って、紫電を渡してくれた。笑って、優しくそうな  
顔で。

俺はちょっとこの鬼のことを見直したんだ……。

「何か私じゃなくてキンタがメインみたいになっちゃいましたね・・・」

「というか、キンタさん・・・あんな程度の言葉で人を見直すなんて甘いですね」

「うるさい！別にいいだろ、実際にいい人なんだから！」

「まあ、そんな甘いところがキンちゃんのいいところじゃないかな・・・で、鬼丸君、君は僕たちをこんなところに登らせて何をさせる気だい？」

確かに・・・。何度も思うんだが、この塔作る意味はあるのだろうか？

今、俺たちは町を抜けて、中央塔を登っている。桃太郎討伐の時も思ったが、この塔はでか過ぎる。何で復元した時にもうちよつと小さくしなかったか？

「復元の時にもうちよつと小さくするように長老に言ったんですけどね、どうしてもそれを聞かなくて・・・今から会いに行くのはその長老です」

鬼の長老さんね・・・って、アレ？俺の頭に一つ疑問が浮かんだ。

「長老と長つて何が違うんだ？」

「・・・長老というのはもちろん私たち鬼のリーダーです。それで長というのは現在六人いまして、その六人と長老が話し合っただけ鬼ヶ島の政治について話し合います。長というのは長老の補佐みたいな役割です」

なるほどね・・・。不思議の国の元老院みたいなモンか。

と、そんなこと話し合っているうちに塔の頂上についたみたいだ。あの桃太郎と戦った場所、この部屋も復元されたのか……

「長老、いますか？」

「鬼丸かい？いいよ、入っておいで」

なんだか優しそうな老人の声が聞こえてくると、俺たちは鬼丸について部屋に入っていた。

あの桃太郎がいたときとは大違い、装飾品やら何やらが置いてあってなんだか立派な部屋になっていた。

そこにいたのは二人、老人と若い男の鬼がいた。

「やあ、鬼丸君、来てくれたね」

「鬼珠さん、栄鬼さん、キンタ達をつれてきましたよ」

「ああ、ありがとう。……やあ、人間たち、自己紹介をしよう。俺の名前は鬼珠童子。鬼丸君から聞いていると思うが、俺は鬼ヶ島の長老なんぞやっておる」

「息子の栄鬼童子です。よろしく」

鬼珠、と名乗った白髪の鬼はもうかなり年が言っているように見える。腰は曲がっているし、顔はしわだらけだ。でも決して隙を見せない、鋭く真つ赤な目が俺たちを射抜いていた。

対して栄鬼と名乗った若い鬼はいつも笑顔を絶やさない、コレもある意味隙が見当たらない人だ。少し茶色がかった髪に優しげな赤い目、凄い美系だ……。

ん、そういえば童子って？……

「鬼丸さんの親戚ですか？」

「いえ、童子というのは苗字ではなく、名高い鬼につけられるあだ



名みたいなもので……。とにかく皆さん自己紹介を」

おお、そうだった。忘れてたわ。

「俺の名前は坂田金太郎。退魔師です」

「四方院かくや。姫様です」

「ウラシマ竜胆。会社員です」

……よくよく考えると凄いメンバーだな、俺たち。若干、鬼珠さんも引いているみたいだ。  
でも何故かこの鬼を見ていると底知れない、というか……なんだか関わってはいけない感じがするのは何故だろうか？

「ふむ……やはり危険だな、この子たちは……」

「えっ!？」

危険？俺たちが、か？

突然のことで戸惑っている俺たちに代わって、鬼丸が聞いてくれた。

「何が危険なのですか、長老？」

「ふむ……その退魔師の子じゃ、坂田金太郎殿」

「……はい!？俺が!？」

「金太郎のどこが危険というのですか？こんな間抜けで、何も考えなくて、金髪なキンタが」

オイ、待て鬼丸！そこまで言うのか、オメエは！それに金髪は関係ねえ！

しかし鬼珠さんはそんな俺らのやり取りにも構わず、というより無視して話を進めた。

「しかしこの子は退魔師じゃ」  
「……………」

なんていう威圧感……………。鬼丸だけでなく俺たち三人も圧倒されてしまった。コレが鬼のリーダーといったところ、か……………。

「確かにこの子達はお主について鬼ヶ島を見事に奪還してくれた。それについては感謝しておる。しかしじゃ、儂にも長老としての立場もある」

「……………」  
「儂は長老として皆を導いていかねばならぬ。そのためには一つでも不安因子を取り除かなければならぬ。皆が桃太郎という人間の恐怖を抱えている今、無闇に人間をここに入れるわけにはいかんよ」

いかにも尤もな論理、コレには当事者である俺も納得させられてしまった。鬼丸もコレには黙っているほかないようだ。

……………俺の鬼ヶ島生活もここまで、か……………

「……………長老、少しいいですか？……………」  
「む？何じゃ？」

鬼丸はそう言つて鬼珠さんと部屋を出て行った。出て行くときに見えた鬼丸の横顔がとても不気味なモノに見えた。

……………一体何する気だ？

と、しばらく待っていると鬼丸たちが帰ってきた。そして開口一番、鬼珠さんは

「キミタチノタイザイヲ、ミトメヨウジヤナイカ」

「・・・・・・・・えっ!?!いいんですか!?!」

「ホッホッホッホ!オニマルクンノ、タノミナラ、シカタナイネ」

「・・・・・・・・何で片言なんですか?」

「ホッホッホッホッホッホ!」

鬼珠さんはそう言つて笑うばかり、笑いながらこの部屋に出て行つた。

・・・・・・・・鬼丸オメエ、鬼の長老に何やった?

「ふふっ・・・・・・・・私に逆らうからいけないんですよ、長老・・・・・・・・」

「鬼丸君、そんなに長老をいじめちゃいけないよ」

「栄鬼さん・・・・・・・・」

栄鬼さん、と呼ばれたニコニコ顔の鬼が鬼丸のことを嗜める。しかしそれは本当に怒っているわけじゃなくて、兄が弟を叱るような・・・・・・・・。

何かこの二人は似ているな。雰囲気というか、言葉遣いというか、まるで本当の兄弟みたいだった。

・・・・・・・・そうか!鬼丸の黒い部分を抜いたら栄鬼さんみたいになるんだ!

「・・・・・・・・キンタ、全部声に出ていますよ」

「あっ、悪い・・・・・・・・」

「ははっ、君たちは本当に仲がいいね。長老もね、君たちの事を歓迎してないわけじゃないんだよ。ただ仕事上ね・・・・・・・・。鬼丸君、幽鬼たちを紹介したかい?」

「いえ、まだ・・・・・・・・」

「じゃあ、早く行くといいよ。彼らも君たちを歓迎してくれるだろうしね」

「ありがとうございます。では、皆さん行きましょつか」

俺たちは栄鬼さんにお辞儀をして部屋を出て行く。最後まで栄鬼さんはニコニコ顔だった。本当に良さそうな人、というか鬼だったな。  
・  
・  
・  
・  
・

「では次は図書館に行きますよ。長は残り五人いますからね」

閑話休題：鬼ヶ島へご招待（後書き）

続きます。

閑話休題：鬼ヶ島へご招待2（前書き）

続きです。

## 閑話休題：鬼ヶ島へご招待2

「へえ〜・・・さっきの栄鬼さん、いい人だったね・・・」

「確かに、それにどこか鬼丸に似ているような気がするな」

「まあ、栄鬼さんは私の憧れですからね。長老よりあの人の言うことを優先的に聞くほどですから」

それっていいのか、長老のいうこと聞かないって・・・。

俺たちは今、階段を下って、鬼丸の言う図書館に向かっている。図書館、か・・・俺どうもあそこが苦手なんだよな、とか思っていたとき、物凄いスピードで俺に何かがぶつかってきた。

「あいたっ！」

「ちょっと、キンちゃん！こっちに倒れこまないでよ！」

「そうですよ、キンタさん！鬼丸さんと私に当たったらどうする気ですか!？」

オメエラ・・・ちったあ心配くらいしねえのか!？

俺にぶつかってきた何か、それは間違いなく鬼だった。倒れていく途中で金色の角が見えたから分かったんだが・・・何だかさすぎないか？

「いたた・・・こんなところに柱なんてあったっけ？」

「幽鬼、一体こんなところで何やっているのですか？」

「おお〜、鬼丸！ちょうどお前に会いたかったぞ！」

俺は腹筋を使って体を起き上がらせる。と、そこには座っている俺

と同じくらいの大サイズの鬼の女の子がいた。

……なんだ、コレ？

「私もです。幽鬼、彼らが例の人間たちです。さあ、自己紹介を」

「おお、分かったぞ！あたいの名前は幽鬼ゆうき、鬼の長の一人だ。よろしくな、人間共！」

「一応年は皆さんより上なのであしからず」

幽鬼さんは鬼丸の紹介を聞くと胸を張った。そんなないモノを張ったって……。

幽鬼さんの髪は軽いウェーブがかかった茶色のセミロング、もちろんその髪の間には金色の角がある。しかしそれよりも目を引くのは髪に結んである大きな真つ赤な赤いリボン、とても似合っていてかわいらしかった。

……俺はロリコンじゃないぞ！

しかし俺の一番気になること、それは大きさ。さっきも言ったが俺と座高くらいの大ささって……。しかも俺より年上なんてありえねえだろ……。

「で、幽鬼、貴方の用事とは一体何なのですか？」

「おお、そうだった！さっきな、身体測定してもらったらな、なんと二ミリ伸びていたんだ！」

「……な、何ですって？……」

「ふっふん！すごいだろ、鬼丸！」

だからない胸を張るなって……。

それに鬼丸、何でこの世の終わりみたいな絶望の表情になっているんだ？



「そんな二ミリ程度で……………」

その瞬間、場の空気が固まったんだ……………。  
驚愕の表情、羨望の眼差し、そして明確な殺意……………。逃げよう  
としたけどもうそのときには遅かった。

「死ね、このデカブツ！」

「ぐぼっ!?!」

「うわああああん！よっちゃああん！いじめられたよおおおお  
おおー!!」

幽鬼が放ったのは回し蹴り、それは見事に俺の腹に命中した。しかもその威力は半端ない。なんだコレ?……………。桃太郎と同じくらい強くないか?

しかも回し蹴りを放った後、俺達を残して走り去っていった。  
……………。いい年した大人が泣くんじゃねえ。泣きたいのはこっちだ!

「な、なんつう怪力だ、あの幼女……………」

「すみません、キンタ。幽鬼は鬼の中でも屈指の馬鹿力の持ち主でして、彼女にかかれれば石の壁など紙同然。キンタが退魔師でなければバラバラになっていましたよ」

「バラバラ……………。まあ、何とか大丈夫だな」

「ところで、キンタ……………。先ほどの言葉はいただけませんか……………」

殺気……………。俺の目の前に鬼がいる、色んな意味で……………」

「貴方の182センチという身長も二ミリによって出来ているんですよ……………。ふふふ」

「す、すみませんでした……」

俺は謝るほかなかった。だって、怖いんだもん。

「で、ここが図書館ですか？」

「ええ、そうですよ」

「ここが図書館、ねえ……」

「図書館、なのか？」

みんなが疑問に思うのも無理はない……。だって何だか扉の前からでも分かるくらい不気味な雰囲気、まるで悪魔の巣窟みたいなそこに俺たちは圧倒されていた。

「学校の怪談に出てくる理科室みたいだね」

「怪鬼<sup>かしき</sup>さん、いますか？」

「……ん？何かデジャヴ……」

「……はい、鬼丸ちゃん。お久しぶり……」

やっぱり出やがったな！不気味な鬼火！

「……ってアレ、鬼六さんにそっくり？」

「紹介しましょう、怪鬼さんです。この図書館の管理人であり長の一  
人でもあります。そして……」

「鬼六の妻でもあります……どうぞお見知りおきを……」

「あつ、なるほど。夫婦だったのか。どつりで雰囲気似ているわけだ。」

怪鬼さんは本当に鬼六さんそっくり、帽子をかぶっているかかぶっていないかだけだ。本当に夫婦つて言うのは似るもんだなあ。  
「……鬼丸、かぐやには似ないでくれよ……。」

「鬼丸ちゃん、そういえば貴方が借りている“世界の毒全集”、まだ返してもらってないわよ……。」

「ああ、すみません。今度持ってきます。」

なんつう不気味な本借りてんだ……。

鬼丸の用事も終わり、俺たちが自己紹介をした時、図書館の扉が勢いよく開かれた。入ってきたのは二人、男の鬼だった。

「怪鬼！妖鬼はここに居るか！？」

「ユ、ユウちゃんが暴れまわって大変なんだけど……。」

「あら、暗鬼、一鬼いらつしゃい……。」

図書館に入ってきたのは二人の若い鬼。

一人は背が高く、前髪で右目を隠している。服も着物なのだがあんな派手なモノは見たことがない。なんだかナルシストっぽい鬼だな……。

もう一人はおかつぱ頭の小さい鬼、小さいといっても隣に比べればの話なので人間からすれば平均以上。しかし何故か表情は不安に溢れており、オドオドしている。

ナルシストっぽい方がこちらに気づいたようだ。鬼丸は何故かいやそうな顔をしている。何で？

「おっ！鬼丸もいるじゃねえか！？何でこんなところにいんの？」

「…………私の仲間を紹介しようと思ひまして。彼らが私の仲間です」

「えっ！？…………じゃあこの人たち人間なの？怖いなあ…………」

「一鬼、そんなにオドオドすんなよ！俺様の名前は暗鬼、鬼ヶ島の長の一人だ…………ほら、一鬼、オメエも挨拶しろ！」

「う、うん…………僕の名前は一鬼、よ、よろしくお願ひします…………」

なるほど、ナルシストが暗鬼さんで、オドオドしているほうが一鬼さんね。

…………なんだか暗鬼さんの目線がくぐやに向かっているんですけど…………。

「君、かわいいねえ〜！名前はなんていうの？」

「…………四方院くぐや。気安く触らないでください」

「おっと、厳しいねえ！でも俺様、気の強い女の子、大好きよ！」

…………そういうことか。暗鬼さんは女たらしだからくぐやに会わせたくなかったというわけか。

その証拠に鬼丸の手にはいつの間にかデザートイーグルが…………。長を殺すつもりですか？

「暗鬼、そこまでにしなさい。彼女も嫌がっているでしょう…………。ところで貴方は何でここに来たの…………」

「おお、そうだった！なんだかユウのヤツが誰かに背のことでいじめられたらしくて、よっちゃん探して走り回っているんだよ」

……すみません。その犯人俺です。

「そ、そのせいでモノが壊れたりと大変で……怪鬼さん、妖鬼さんいるかな？」

「私ならここにいるわよ」

うわっ！びっくりした！天井裏からいきなり鬼が現れるもんだから……

その鬼は自分の髪をなびかせ見事に地面に着地した。

……というより髪なげえ。地面につきそうだぞ。

「話は全て聞かせてもらったわ。要はユウちゃんがまた暴れまわっているんでしょう。困った子ね……」

「う、うん。妖鬼さん、ユウちゃんをとめてあげて」

「でも幽鬼はこっちの居場所分らないだろ」

「心配ないでしょ、もうすぐ来」

「うわああああん！！よっちゃんああああん！！」

現れたな、怪力幼女！

図書館の扉はまるでそこにはじめから何もなかったかのように消え去っており、みんなも特に心配していないようである。日常茶飯事か……。

「うっ……よっちゃん、探したよ……えぐっ……」

「はいはい、ユウちゃん。落ち着いて。そんなに泣いてしまっては折角の髪が台無しよ」

……ん？そこは髪じゃなくて顔じゃないのか？

「鬼丸君、この人は？」

「鬼ヶ島の長の一人、妖鬼さんです。あの幽鬼を慰められる唯一の存在であり、比較的まともなほうです」

「よろしく願いますね」

比較的？……

妖鬼さんは微笑みながらお辞儀をする。その行動も様になっていて、思わず見とれてしまった。かぐやが“かわいい”なら、この人は“美しい”という言葉が似合う。

俺がそんなことを考えていると妖鬼さんと目が合った。

「あら、その殿方。少しいいかしら？」

「あつ、はい……」

妖鬼さんが俺に近づいてくる。次第に近づき、ついに俺の体との距離がゼロとなる。女性特有のいいにおいが俺の鼻をくすぐる……

やべえな、今の俺の顔は真っ赤ってということが自分でも分かった。

「なんと美しい金色……これは染めたのかしら？」

「いえ、コレは地毛ですけど……」

「ほう、本当にすばらしいですね、貴方の髪は……うふふ」

ぞくっ！

突然悪寒が……。しかも何が本能に訴えかけている、“今すぐ逃げろ”と。

「す、すみません。用事を思い出し

ザクッ！

「へっ！？」

「坂田さん、貴方の髪、切らせていただけませんか？」

もう切ってんじゃああああん!!

どっから取り出したかは知らないが妖鬼さんははさみで俺の髪を切った。それも大胆に。

「キンタ、妖鬼さんは俗に言う“髪フェチ”というものでして・・・」

「はあ!？」

「綺麗な髪を見かけると一種のトランス状態になってしまいます。

かく言う私の髪がこんなにも長いのはこの鬼のせいです」

「うふふ・・・。。金髪といえば、ツインテール？ポニーテール？それとももつと複雑なのを・・・うふふふふふ」

あの、妖鬼さん・・・俺はそんなに髪は長くないのですが・・・

そして笑っている妖鬼さんがとてつもなく怖い。コレがトランス状態なのか？

さらに俺は五人の長と会ってみて分かったことがある。“何故鬼丸は年齢より大人びて見えるか”ということだ。

・・・こんな変態達、いや個性の強い鬼たちに囲まれて育ったら、誰でも精神年齢は上昇するはずだわな・・・。

「怪鬼さん、ここに鬼ヶ島の構造について書かれている本はあるかな？」

「ええ、あるわよ・・・。。来なさい、年齢詐称君・・・」

「へえ、かぐやちゃんって言うんだ。どう、これから俺とどこか食べに行かない？」

「行きません。というか触るな、下種が」

「暗鬼……貴様、余程死にたいらしいな……」

「おお、お前はさっきのデカブツ！ボッコボコにしてやる！」

「だ、だめだよ、ユウちゃん！……キンタさんを殺しちゃ……」

……」

「そうよ、ユウちゃん。キンタさんはこれから私がカットをするんだから……。あつ、逃げちゃだめですよ」

「誰か助けてエエエエエエエエ！」



閑話休題：鬼ヶ島へご招待2（後書き）

いかがだったでしょうか、番外編。

鬼ヶ島の鬼たちについて触れてみました。彼らも本編に出すつもりです。のでかれらのこともよろしくお願いします。

閑話休題：とある退魔師の学習帳（前書き）

今回は今まで出てきた用語と人物についての紹介です。まだ書ききれなかったところがあるので、完全ではないですが一応こんな感じ  
です。

## 閑話休題：とある退魔師の学習帳

舞台：

ここは御伽の世界。この世界には大小含めて多くの国々が存在するが、三つの大国がほとんどの実権を握っている。

古き伝統と和をよしとする“御伽の国”

他の国とは一線を画する文化を持つ“童話の国”

近年魔法科学によって急激に成長した“不思議の国”

ちなみに鬼ヶ島が存在するのは御伽の国である。力的にはどれも一緒といったところか。

舞台の備考：

またこの世界には人間とは違う“魔”と呼ばれる生き物がいる。

魔、という言葉は古くから伝わっており原義は“世界によって生み出されたもの”の意味を持ち、魔力は世界から供給される力、魔物は魔力を持った生き物と書物には書いてある。

当然、人間にも魔力は備わっており、基本四大属性、火、水、風、土のどれか一色は必ず持っている。魔法の属性とはその人の魔力の色によって決まる。

しかし二色以上の魔力をもっているものは少なく、もちろん四色を操るものはさらに少ない。三色以上の魔法を扱えるものを俗に“魔術師”という。

魔力の属性は先の四色だけではない。もっと特殊な、例えば雷や光

などといった色も存在するが、それこそ魔術師より数は少ないので研究は進まない。

そこで人々が生み出したのが“退魔師”や“魔道騎士”といった存在である。退魔師などは魔術こそ一色しか使えないが、訓練によって魔術師にはない俊敏性を持つこととなった。

主に退魔師は御伽の国で、魔道騎士は不思議の国に存在する。今日では多くの戦士が魔の恐怖と戦っている。

人物：～主要人物～

鬼の一族の末裔：鬼丸童子おにまるごうじ

年齢：15歳

種族：鬼

性別：男

格好：この国に伝わる青色の着物を普段は着ている。髪は男にしては長め、普段はうつつとうしいので後ろでまとめている。痩せ型。鋭い紫色の切れ目のせいで子どもにはなつかれない。

身長は14・・・おや、誰か来たようだ・・・

武器：デザートイーグル・50AE版

備考：髪の間から突き出る金色の角を見て分かるように、彼は鬼である。普段は冷静沈着、というよりは効率主義である。桃太郎討伐の仕事を任され、その旅の途中で金太郎、かぐや、ウラシマという仲間と出会う。最近はそのらのお陰で丸くなったように見える。武器、デザートイーグルによって放たれる実弾はそのままでも強力だが、彼の能力によってあらゆる魔力を纏って放たれる弾丸は恐怖そのものである。

親は幼いときになくしているが、別段気にしていないようだ。そんな彼の親は結構偉大だったとか……。

月から逃げたお転婆姫：四方院かぐや（しほういん）

年齢：噂によれば1000歳はこえて……おっと、こんな時間にも客か……

種族：天人

性別：女

格好：基本赤い着物を身にまとっている。髪は艶やかな黒髪のスートレート。顔立ちは整っており、流石は姫というところか。その目は鬼丸曰く“強い意志を感じる”らしい。

武器：宝具、月光

備考：名前の通り、月のお姫様である。そのわがままっぷりは遺憾なく発揮されており金太郎はいつも悩んでいる。甘いものが好き。実力は折り紙つきで、桃太郎の部下と戦っても引けはとらない。その武器、月光による光属性の攻撃は美しいと形容できるほどである。ちなみに不老不死、そんな彼女が次の話の主役です。

年齢詐称の詐欺師：浦島竜胆うらしまりんごとう

年齢：39歳（自称）

種族：人間（自称）

性別：男（自称）

格好：おかつぱ頭の少し昔の虫取り少年のような格好をしている。その体と不釣り合いなほどの麦藁帽子がチャームポイント。

ちなみに鬼丸より身長は大きいです。

武器：釣具、魔法

備考：海中にあるという貿易会社、竜宮城に所属する魔術師。本人曰く“そこまで大した立場にはいない”

また長閑の船乗りで唯一鬼ヶ島にいける人物でもある。見た目と違い中身はまるでオッサンであり、無邪気さのかけらもない。その代わり腹黒さとずる賢さと魔力を持っている。

謎だらけだがいつも釣りをしているので、害はなさそうだ。

破壊欲求者にして、最狂：桃太郎<sup>ももたろう</sup>

年齢：27歳

種族：人間

性別：女

格好：死に装束を思わせる白い着物を身に纏い、鋭い眼光で敵を射抜く。セミロングの髪はボサボサで女の魅力も感じない。

しかしその立派な胸が……ゲフンゲフン、何でもありません。

武器：黒き日本刀、桃花<sup>とつが</sup>

備考：12年前、犬、猿、雉の三人と共に鬼ヶ島略奪の犯人。この事件のせいではない意味でも悪い意味でも桃太郎の名前は世に広まった。彼女を育てたという最強にあこがれたが、強さの意味を忘れ自爆。鬼丸と金太郎によって倒された。

現在行方不明。おそらく死亡したものと思われる。

〈桃太郎の部下〉

犬：本名不明。二つの日本刀を扱う二刀流使いで他の二人よりも格段に強いのだが、桃太郎の手により瞬殺。現在行方不明。

猿：本名、孫悟空。伸縮自在の如意棒が武器。見た目からは想像も出来ないテクニシャンだが、かぐやの手によって倒される。現在行方不明。

雉：本名、千鳥。鴉天狗で魔術師なのだが、ウラシマの手により捕獲。ウラシマによってとある契約をさせられたのだが……

く 鬼ヶ島の鬼たち

古き鬼：鬼珠童子きしゅどうじ

年齢：見た目60歳くらい

種族：鬼

性別：男

格好：黒色の着物を好み、普段もそれを身に着けている。決してボケた老人ではなく、その赤い瞳は常に未来を見据えている。というより怖い……

備考：鬼の長老。鬼丸を鬼ヶ島討伐に行かせたたのも彼である。昔は、今は亡き友と共に暴れまわったとか。

見た目は年齢と比例しないはずの鬼で、何故か老人の姿になっているのは鬼ヶ島の七不思議の一つである。

新しき鬼：栄鬼童子えいぎどうじ

年齢：見た目25歳くらい。

種族：鬼

性別：男

格好：基本的には鬼丸と似たような格好である。というよりも鬼丸が彼の真似をした。かなりの美系、鬼ヶ島でも人気がある。

備考：鬼珠の一人の息子である。決して親の七光りではなく、実力で現在の六長の一人になった。その性格、人望、そして能力は他と一線を画し次期長老との呼び声も高い。

後記する幽鬼とは幼馴染。よく体が持つもんだ……。

爆ぜる鬼：幽鬼童子<sup>こいし</sup>

年齢：見た目25歳くらい

種族：鬼

性別：女

格好：まず目につくのは頭にある赤い大きなリボンである。またクリクリした大きな赤い瞳、柔らかそうな頬、など見た目はかわいらしい。

身長は鬼丸よりも小さい。確か140を超えては……ノック？どうぞ入ってきてください。

備考：鬼ヶ島六長の一人。その見た目とは反して怪力の持ち主であり、彼女が走り回っただけで中央塔が壊れる。その力は長の中、というより鬼の中で最も強い。口癖は“おお！”

栄鬼とは幼馴染。彼女の父親はこれまた偉大だったとか……

他の鬼たち

妖鬼<sup>まじ</sup>：六長の一人。幽鬼をなだめられる数少ないの存在でもある。また極度の髪フェチであり、鬼丸の髪が長いのが、かぐやの髪が最近変わっているのは彼女のせいである。見た目は綺麗なの……

・



怪鬼<sup>かいき</sup>：六長の一人。長く下ろした前髪で顔が隠れている。図書館の管理人。笑い方は“ふふふ……”とにかく謎が多い。また六長の中で唯一の既婚者。

一鬼<sup>いっき</sup>：六長の一人。性格は極度の臆病。人見知りも激しい。また鬼丸のことを恐れている面もある。

暗鬼<sup>あんき</sup>：六長の一人。女つ誑しですけこまし。何だか最近の若者の乱れを一身に詰め込んだような鬼。でも子どもには人気がある。

鬼六<sup>おんむく</sup>：鬼ヶ島唯一の武器屋。その腕は確かなのだが、見た目のせいで誰も寄り付かない。怪鬼と結婚している。

「ふうう……まあ、こんなところか……」

「おや、キンタ。勉強とは珍しいですね。何の勉強をしていたのですか？」

鬼ヶ島中央塔の一階。金太郎の自室として設けられた部屋で金太郎は本を読んでいた。

あの脳筋のキンタが、鬼丸には少し予想できない光景ではあったが、勉強をするということは良いこと。鬼丸は何も言わないでおいでいた。

「いや、ちよつと確認を……。俺、人の名前覚えるの苦手だからさ、みんなのプロフィールを呼んでいたんだよ」

「ふうん……。おや？キンタ、コレには貴方の項目がないじ

やないですか？」

「あつ………本当だ」

「では、私が付け加えてあげましょう」

チョコとプリンをあわせたものにシロップをかけ、さらに蜂蜜をかけたような甘い退魔師：坂田金太郎さかたきんたろう

年齢：18歳

種族：人間

性別：男

格好：この国の人間とは少し違う服装、どちらかといえば不思議の国のような洋的な服を着ている。またその金髪はこの国の人間ではとてもありえない。外見は………まあ、いいほう？

武器：ハルバード・紫電

備考：退魔師の修行中である彼は鬼ヶ島討伐の際に仲間になったひとり。明るく社交的なのだが、いまいち頭のキレが悪い。

また雷属性の退魔師の卵であり、一族は名家坂田家。人殺しを極端に嫌い、かなり甘い。コレで退魔師になれるかどうか疑問が残るほどだが、実力は確かで結界も使える。

過去に一度だけ人を殺したことがあるとかないとか………。

「どうですか？」

「アレ？………俺こんな人間だったっけ？」

「はいそうです。間違いありません！」

首をかしげる金太郎だったが、鬼丸の自信満々の顔を見ては頷くし  
かなかった……。

**閑話休題：とある退魔師の学習帳（後書き）**

・・・・そういえばヨウタとか、坂田家について触れてませんでした（汗）

次からかぐやの主演のお話です。どうぞよろしくお願いします。

第二章・第一話：月の裏側（前書き）

今回非常に短いです。すみません……。

プロローグということで見逃して下さい。

## 第二章・第一話：月の裏側

今日のかぐやは機嫌がいい。

というよりも最近の彼女は一日一日を楽しんでいた。

彼女は長い間生きてきたが、こんなにも事が凝縮された時間はない。鬼ヶ島に向かう途中でであった金太郎、ウラシマという仲間。

金太郎は口うるさく、ウラシマはセクハラをしてくるが、月にいたときはこんな人間と関わったことすらなかった。

また幽鬼、怪鬼、妖鬼という鬼ヶ島でできた同性の友達と呼べるもの。

今まで同性で話しかけてくるものといえは侍女ばかりで、とても気軽に喋れるものではなかった。今ではこの三人と共におしゃべりをしていると心が休まる。

そして何より……

コン、コン、

「鬼丸さん、いますか？」

「ええ、どうぞ」

この鬼丸という存在が大きい。鬼丸と一緒にいると、顔が紅潮する。胸がときどきする。今までのかぐやならそれを病気か何かと疑ったのだが、何故だかそれが心地よい。

かぐやは今の時間が好きだった。

かぐやが鬼丸の部屋に入ると、鬼丸はイスに腰掛け本を読んでいた。その光景さえ様になっていてかぐやは見とれてしまった。

「……おおつと、こんなことをしている場合ではない。鬼丸に話すべきことがあったのであった。」

「鬼丸さん、これから時間ありますか？」

「ええ、ちょうど仕事も終わり、休憩していたところです。何か用事でも？」

鬼丸は鬼ヶ島の統治に関する仕事を手伝っているらしい。山にいたときからこの仕事を手伝っていたらしく、その手腕はなかなかのものらしい。

「……あの長たちを見ていたら妙に納得してしまった。」

「こ、これから本土の甘味処に行きませんか？」

「うん……いいですよ。頭の運動には糖分も必要ですからね。」

かぐやの顔に歓喜が満ち溢れる。ここの鬼たちと話すのも楽しかったが、やはり鬼丸と過ごしたい。しかも二人つきりで。

このときを待っていた、そうかぐやが思っていたところに扉が開かれた。

「おい、鬼丸。いるか？」

「……キンタ、部屋をノックしてから入ってきてください。もし私が人目についてはいけない何かをやっていたらどうするのですか？」

「何かって何？」

「……」

金太郎の純粹な質問に鬼丸は押し黙る。何かとは何かなのだ、人に

は言つのがはばかられる何か……。  
金太郎はその何かにそこまで興味なさそうに話を続けた。

「実はさ、今から俺、本土に行つて手紙出しに行かなきゃいけないんだよ。だから鬼丸、ついてきてくんない？」

「おお、ちようど良かった。私もこれからかぐやと一緒に本土に行くところでした。一緒に行きましょう」

「えっ……ちよつと、鬼丸さん……」

「だめですか、かぐや？」

「あつ……い、いいですよ」

そんな目で見られたなら断れなくなってしまう。せつかくの“デート”というものが三人では意味がない。

かぐやはため息を吐きそうになつたが、そこは少し我慢した。

「本土に行くなら僕の定番だね！」

「だからオメエはどつから現れるんだよ、ウラシマ!？」

……訂正、合計四人に……。

コレには流石にため息を吐かざるを得なかつた。そしてかぐやの気分は一転、一気に不満でいっぱいとなつた。

半分は鬼丸とのデートを邪魔した金太郎に対して、もう半分は朴念仁つぷりを遺憾なく発揮した鬼丸に対してだつた。

かぐやはもう一度、大きくため息をついた。

「かぐや、どうしたんです？早く行きましょうよ」

「はい、鬼丸さん。今行きますよ」

……かぐやはこのときまだ知らなかつた。こんな自分の些細な気分の変化など気にならないほどの事が起こることなど。



誰が想像できただろうか、少なくともこの四人には想像することさえ出来なかった。

ここはどこだろうか？

辺りは真っ暗、このことから時間は夜ということは分かる。しかし空には金色に輝く月はなく、代わりに青い星が浮かんでいた。

そう、ここは月。太陽がいなくなり、真っ暗な夜を照らす唯一の存在。

この裏側には地上から離れ、地上の命とはあらゆる点でかけ離れた“天人”というモノが存在していた。天人は喧騒を好まず普段は静かなはずなのだが、今日は怒声が響き渡っていた。

「何！？貴様ら“姫様”を連れ戻すことに失敗したのか！？」

「は、はい……。し、しかし途中で邪魔が入りまして！鬼と退魔師と、あと謎のモノが」

「黙れ！貴様らは天人の恥だ！ツクヨミ様にどうぞ説明する気だ！？死んでお詫びをしろ！」

「私たちは死ねませんけどね」

月の裏側でも一際目を引く豪華絢爛な建物とある会議が行われていた。

議題は月の姫について。

つい先日この会議で決まったことだが、この月の姫がどういうわけ

か地上に降り立ちその迎えへ使いをよこしたはずなのだが失敗。その使いの生き残りが今帰ってきているのだが、この大臣の怒りはおさまらない。

何故なら使いを遣わしたのも彼の提案だったからだ。

「それにしても情けないですな。貴方のでしょ、今回の部隊」

「うぐつ……」

「本当に天人の恥なのは貴方の方なんじゃないですか？」

双子の大臣が攻め立てる。元から高血圧気味だった彼のこめかみはピクピク動いており、今すぐ脳卒中になってもおかしくないほどである。

「……天人には寿命や病気などないのでそのような心配はないのだが。」

「まあまあ、いいじゃないですか。過去のこととはばつさり切り捨てましょうよ。今はツクヨミ様のために姫様を取り戻すことを考えましょうよ」

「ちつ……若造が……」

天人の一人が悪態をつく。あからさまな敵意、しかし他の大臣たちはそんなことは気にしない。いや、興味がない。

何故ならそういつ興味すら彼らにとって見れば無駄なものだから。

「姫様の奪還……。もはや大軍など不要ですな。そして姫の居場所が正確にわかるモノが適任かと」

「カナモリ殿が適任では？」

「……」

今までこの会議に参加しようとも思っていなかった男の眉が動く。

彼の名前はカナモリ、長身で細身、金色の髪、そして青と赤のオツドアイが特徴的な男である。

彼は今回脱走した月の姫の教育係、この大臣たちの中で最も姫への思い入れは強い。

大臣もそれを分かっている彼に頼んだのだ。もちろん彼には断る道理などない。

「ツクヨミ様。今回の件、カナモリ殿に任せてもよろしいでしょうか？」

大臣の一人が天井に話しかける。普通ならばそこには誰もいないはずなのだが、この場合は普通ではない。

ツクヨミというのは月の王、太陽の陰にいようと地上を見守る存在。故に“彼女”は全てを見通す目と、耳を持っている。だから天人たちは直接会う必要はないのだ。

「・・・・・・・・・・」

「沈黙は肯定・・・・・・・・。カナモリ殿、早急に地上に降り立ち、姫様を連れ戻すこと。それが今回の目標です。その目標を邪魔するものには容赦なく」

「排除する。そうですね？」

「・・・・・・・・結構。それでは健闘を祈ります。皆、解散」

その声を皮切りに天人たちは会議場から四方に散らばっていった。残ったのはカナモリ一人。彼の顔には決して感情は表れないが、内に秘めた感情が彼の中で渦巻いていた。

「かぐや様・・・・・・・・。今、迎えに行きますからね・・・・・・・・」

「やっと会議が終わりましたか……。まったく意味がないものでしたね……。」

彼女は小さくため息を吐く。それは誰の耳にも届くことなく宙に消えていった。

彼女の名前はツクヨミ、月の王である。金色と黒色が混じりあった不思議な色の髪、凜とした黒い目を持つ彼女は一人きりで、夜空に浮かぶ青い星を見上げていた。

彼女の中には一つ、憂い事があつた。それは他の何事でもない、月の姫の事であつた。

「まったく、うちのおてんば姫は何をしているのでしょうか……  
……まあ、カナモリに任せておけば大丈夫ですか……。」

彼女の声を聞くものは残念ながらいない。聞くものはいないと知つても彼女は喋べらずを得ない。基本的に彼女はおしゃべりなのだ。

「何だか煩い声……。まあ、いいでしょう。彼女がどう動こうが彼女の勝手。もう子どもではないのですから……。」

彼女は再び、姫がいるであろう青い星を見つめた。あの星は醜い。綺麗なツラをしていて、ひとたび蓋を開けてしまえば生と死が入り乱れる天人にとってみれば考えられないような穢れた地。

そんな場所に一人で、いや誰かと共に過ごしている彼女は何を見ているのか？全てを見据える彼女でさえ興味がわくものであつた。

「かぐや……貴方はこの月を見て何を思っでしょつか？」

## 第二章・第二話：かくやの思いは伝わらない

「ええと、私は取り敢えずミルフィーユを十五個、モンブランを二十個お願いします」

「かしこまりました。少々お待ちください」

『・・・・・・・・』

甘味処、桃の木。ここは長閑南の海岸に位置する、老夫婦二人で三十年以上続いている甘味処である。それゆえこの近辺の住民から人気があり、仕事の一休みに来る客も少なくない。内装も少し洒落た喫茶店のような感じになっており、最近若者にも人気だという。かく言う鬼丸達もこのお店はたいそう気に入っており、たびたび鬼ヶ島を抜け出してはこの店に来ているのである。

先ほども言ったとおりこの店は長年老夫婦の手によって営まれており、若い女の従業員などいないのである。

「おじいさん、ミルフィーユ十五個、モンブラン二十個の注文です！」

「あいよ〜!」

・・・・・・・・いないはずなのである。

それがどうだろう、さっき鬼丸たちの注文を聞いた従業員は？

短いが艶のある黒髪を今は一つに縛られていて俗に言うポニーテールになっている。また割烹着を着ているに加えて、その優しそうな微笑が母親っぽい雰囲気醸し出していた。

常連客すら知らない彼女の存在、客はみな新しいバイトでも雇ったのかと思っていた。

しかし残念ながら鬼丸と金太郎は彼女のことと彼女の正体を知っている。

「何で？……」

「何でだ？……」

「ん？どうしたんです？……」

（ どうしてこんなところに桃太郎がいるんだ？…… ）

彼らの宿敵、桃太郎。それが今二人の目の前で給仕の仕事をやっていた。

「おい、鬼丸！コレはどういうことだ！？」

「知りませんよ……。確かにあの時私はヤツの心臓を撃ち抜きました。あの時銃弾にこめたのは“滅”。私の最も強い力ですよ。それにあの時の爆発で生きているとは考えられないですが……」

「そう、だよな……。じゃあ、別人？」

常識的に考えて、そういう結論にたどり着く。金太郎は彼女を別人と決めつけ、自分も休息に入ろうと決めた。

そんな金太郎の努力を知ってか知らずか、ウラシマはさっきの店員を呼んだ。

「桃さ〜ん！僕、チョコレートケーキ！」

『ちよつとおおおおー！！』

鬼丸と金太郎は思わず身を乗り出す。幸いにも店員は自分が呼ばれたと気づいていないようだ。

かぐやは相変わらず膨れっ面。その表情も可愛い、と鬼丸が思ってしまったのは秘密である。

「へえ〜……あの人が桃太郎ですか。……綺麗な人じゃないですか」

「……あの、かぐや。何故今日はそんなにも機嫌が悪いのでしょうか？……私、何かしたでしょうか」

「ふんっ！」

かぐやがモンブラン一個丸ごと口に入れる。

何かをしたので怒っているのではなく、何もしないのでかぐやは怒っているということを鬼丸には分からなかった。

「何だ、桃さんじゃ通じないのかい？じゃあ、あのそっくりさんは誰だい？」

「俺たちも知らねえって。そんなに気になるのならマスターにでも聞いてみれば？」

「それもそうだね。マスター、あの人誰！？」

……遠慮を知らないというのも一つの強み。ウラシマの声に従いこの店のマスター、原義之さん（58歳）が厨房から現れた。

「はいはい、何だい？ウラシマさん」

「あの人、誰？新しいバイトさん？」

「あの人？」

ウラシマがさっきの店員を指差す。マスターはどこか嬉しそうに答えた。

「ああ、“キヨウ”の事ね。あの子はうちの娘だよ」



「えっ!? マスター、その年でまだお盛んで

「バカ! そういうこと言うんじゃないよ!」

「はっはっは! そうじゃないよ。あの子は拾ってきたのさ、海岸で」

ウラシマもそうだがマスターもさりと凄いことを言い放った。

海岸で? 自分の娘を拾った? 意味が分からない。

「海岸で? どういうことですか?」

「..... そう、アレはちょうど三週間ほど前のことだった.....」

誰も聞いてないのに関わらず、マスターは語りだした。こうなってしまつては誰も止められない。マスターの悪いところはすぐに自分の世界に入つてしまうことを知っていた鬼丸たちは諦めて聞くことになった。

..... そう、アレはちょうど三週間ほど前のことだった。私たちは..... ああ、そうだね、妻の由紀子と一緒に海岸を歩いていたんだよ。あの時の海は荒れていてね、不意に来た波のせいで由紀子が濡れてしまつたんだよ。その姿を見て興奮したものだ.....

(本当にまだ現役ですね)

(コラ、ウラシマ!)

で、その散歩途中で倒れている人を見かけたんだよ。胸からは出血、顔色は青白くてもう死んでいるんじゃないかと思つただけ、胸の鼓動は何とかあつたんだよ。

そこで由紀子に病院を頼んで、僕は見よう見真似で人工呼吸をした

んだ。人間その気になればなんでもできるもんでね、何とか意識を取り戻したんだよ。

あっ！……そういえば由紀子以外とキスしちゃったね。役得かな？

(男の人とは誰しもこんなふうですか、鬼丸さん?)

(……かぐや、やっぱり怒っているでしょう)

意識を取り戻したまではいいんだけど、その子はこの世の終わりでも見てきたかのように恐怖に震えていてね、私もなんとか話を聞くことができたんだよ。

「おい、君大丈夫かい？顔が真っ白じゃないか！」

「……」

「ああ、早く病院に。君立てるかい？」

「……ウ……」

「ウ？無理して話すことはないよ。というより喋らないほうがいい」

「……キヨウ……」

「キヨウ？君の名前かい？……ああ、由紀子、こつちだ早く来てくれ！」

「最強……アタシは、最強に……」

そういうと、その子は気絶しちゃってね。病院に連れて行ったんだよ。何とか一命は取り留めたんだけど、この子は前の記憶はないんだって。名前も親も……。

(記憶喪失、っていうやつか?)

(そうらしいですね。しかしあの爆発の中で生き残るとは……  
。本当に規格外ですね)

そこで一週間前に退院したこの子を私たちが引き取ることにしたんだよ。コレも何かの縁と思ってね。私たちの間には子どももいないし、ちょうどいいかと思って。

あの子の名前はももはり桃原キヨウ。この店の名前と私たちの苗字とをあわせただけだね。彼女は本当にいい子だよ。器量もいいし、優しいし。こうなれば私たちの子同然だよ。

……おっと、そろそろ仕事に戻らなきゃ。注文が溜まってあるよ。それでは皆さん、ごゆっくり……。

「桃太郎が記憶喪失、ねえ……」

「いいじゃないですか。桃太郎は桃原キヨウとして彼女は第二の人生を歩んでいくでしょう。それよりも記憶喪失は完全ではありません。いつ彼女の記憶が戻るか、私たちには分からないのですから」

マスターも罪なことをしてくれたものだ、と鬼丸は心の中で思う。今こそ人畜無害そうな顔をしているが、彼女は間違いなく破壊欲求者。海岸でそのまま死んでいれば、記憶が戻ることを恐れながら生活し、多くの人の命が危険にさらされる可能性も潰えたのに。

しかしそれは自分の都合、彼らには関係がないことだ。このまま記憶が戻らず、一生を終えればすむことなのだ。

「そういえばさ、記憶喪失ってショックをうけると思い出すらしいよ」

「ショック、って?……」

「ん」。例えば頭を強く打つとか、記憶を失う以前に会っていた人に会うとか。案外簡単に思い出すらしいよ」

「記憶を失う以前に会っていた人？」

「……それは自分たちのことである。何せ彼女を殺そうとしたのだから。」

「……でましようか」

「そうだな……。ほら、かぐやここ出るぞー！」  
「む〜」

「で、キンタ。貴方の用事とは一体？」

「ああ、そろそろ坂田のほうに手紙送ろうと思ってな。また飛脚さんに頼もうかと」

飛脚、というのは役職の名前ではない。彼らが話しているのは配達屋の鴉天狗の名前である。空を飛んで送ってくれるので、鬼丸も利用し馴染み深い。

「そうだな……。僕もせっかく本土に来たんだから用事を済ませうかな？ちよつと仕事も終わらせないといけないし」

「じゃあ、ウラシマさんとキンタさんで用事を済ませてはいかがですか？その間私たちは買物していますので！」

かぐやはいきなり息を吹き返したかのように表情をきらめかせる。もともとこの目的のためにここに来たのだ。このチャンス逃すはずなどない。

ウラシマは申し訳ないように口を開いた。

「でも僕の行くところ、キンちゃんの行くところと正反対だよ」  
「えっ……」

計画通り……にはならなかった。それどころか事態は悪化、極めて合理主義の鬼丸が次言うこともかぐやには容易に想像できた。

「では、二手に分かれましょう。かぐや、じゃんけんして勝ったほうがキンタに、負けたほうがウラシマについていきましょう」

予想通り……。当たって欲しくない予測が当たってしまった。かぐやの目的は鬼丸とのデートのみ。鬼丸の提案では勝とうが負けようが、どちらにせよ目的は果たせない。

かぐやは半ば絶望した表情で、どうでもよさそうに手を出した。

「じゃんけんポン……あら、負けてしまいました。では一時間後、中央広場で会いましょう」

ああ……鬼丸の背中が自分を残して遠のいていく……

「かぐや……あの、なんだかごめん……」  
「……ごめんと思うならついてこなければよかったじゃないですか……」

長関中央広場、金太郎たちは鬼丸たちよりも早く用事が終わったのでここで待っているのである。流石は長関、あと一時間でも経てば

日が沈むのに、この広場には人が溢れかえっていた。

無邪気な子どもたちの声、その母親たちの談笑。周りがこんなにもにぎやかなのにも関わらず金太郎とかぐや、二人の間には沈黙が漂っていた。正直、気まずい……………。

「まったく……………今日こそ鬼丸さんと過ごそうと思っていたのに……………。貴方は何か恨みでもあるのですか？」

「うっ……………ごめん……………」

二人の気持ちと性格を知っているだけに金太郎に対する責任は重い。しかし金太郎だけに非があるわけではない。ちゃんと金太郎にも言い分はあった。

「いや、でもさ。かぐや、何である時余計なことを喋ったんだよ？」

「余計なこと？」

「ああ。お前が俺たちを二人まとめようとしなければ、鬼丸は“では二人とも自分の用事を済ませてきてください。私たちは二人で待っていますから”とでも言ったのに」

「あっ……………」

かぐやは情けなく声を上げると、しばらくそのまま口をあけてポカンとしていた。

そして金太郎が鬼丸の気持ちを理解できることに少しむっとなった。もしかしたら自分の最大のライバルは金太郎かも知れない、そういう無駄なことも考えたりした。

「鬼丸もお前のことが好きなのは確かなんだからさ、そんなにも焦る必要はないって。お前はあいつのことを待っていればいいんだよ」  
「む……………」

膨れっ面のまま金太郎を睨みつける。金太郎のほうは圧倒的に背が高いので、かぐやは見上げる形となってしまう。不本意ながらかわいいと思ってしまったのは内緒だ。

「……………ふんっ！まあ、認めてあげますよ！」

「何をだ？……………なあ、鬼丸がお前のことを好きっていうことは分かるんだけどさ、お前の方はどうなの？鬼丸のこと好きなの？」

「と、当然じゃないですか！私と鬼丸さんが惹かれあうのは自明の理。冗談を言うのも大概にしてくださいよ」

「でもな……………お前の行動を見ているとどうもそうは思えないんだよね……………」

そんなわけない！そうかぐやは叫びたかった。

しかしその声はのどを通らなかった。何故ならかぐやにはそう断言できる経験がないのだから。

かぐやは天人たちの姫。天人のやることと言えば、そこまでおいしくもないご飯を食べて、地上を見てそして……………特にやることはないのであった。

だから今までこんな経験はない。今みたいに誰かと買物を楽しんだり、同性の友とお喋りしたりすることもない。もちろん誰かのことを好くことも……………。

初めて何かをするときは胸のドキドキが止まらない。幽鬼たちと喋っているときは楽しいし、今でさえ少し高揚感を抱いている。

それが鬼丸といるときの感じと一緒になのか、違うのかかぐやには判断する経験がなかったのである。

「……………どう、何でしょうね……………」

「まあ、いいんじゃないかねえの、それも分かるまで待つていれば。俺たちまだ時間はあるんだからさ、焦ることないって」

「……………キンタさん。考え方が老人ですよ」

「う、うるせえよ！」

金太郎は顔を真っ赤にして、怒鳴る。こういうふうに笑いながら怒られるのも新鮮だ。少し楽になった気がした。

「ふふっ……鬼丸さん早く帰ってきませんか〜」

「そうだな。ちょっと遅刻 何だ、アレ？」

金太郎は空を見上げ、かぐやもそれに続く。雲ひとつない空に何かの影が。それはこちらを見たかと思うと、一気にこちらに急降下してきた。

舞い降りたのは青年、赤いかばんをぶら下げた黒髪の天狗であった。

「こんちゃーす！毎度おなじみ、鴉天狗の飛脚です！」

飛脚と名乗った男はかぶっている帽子を取ってお辞儀をした。金太郎たちもつられてお辞儀をする。

「何かありましたか、飛脚さん？さっき出した手紙に何か問題でも……」

「いえいえ、全然そんなことはありませんでしたよ！今さっき届け終わったところです！」

はやっ……。金太郎が手紙を出したのは30分ほど前。自分だったら二日はかかる距離をたった30分で……。やはり飛べるというのは便利だな、と金太郎は再認識した。

「はい、お手紙です。かぐやさん！」

「えっ！？……私に、ですか？」

「はい。ちゃんと貴方宛ですよ！受け取ってください！」



かぐやはソレを受け取る。真っ白な便箋、差出人はなし。そもそも自分に手紙を送ってくる人間はいないはずだった。

「あ、ありがとうございます」

「それでは、私はコレで！良い一日を！」

そういうと再び飛脚は飛び上がる。凄まじい風が舞い上がり、砂埃が立ち込める。同時に女性の通行人のスカートも舞い上がり……。

「どこ見てんですか!?!」

「いてっ！すまん、つい条件反射で……」

「まったく、男とは本当にバカですね！あの配達屋もこんな人間が多いところに来ていいんですか!?!」

「まあ、天狗と人間は結構仲良しだし……。ところで、その手紙なんだよ？誰から？」

「さあ……。差出人はなし。それに私には地上で知り合いなど……。あけてみますか」

便箋の封を開けると、一枚の手紙と押し花が落ちる。

単なる押し花、しかしかぐやはそれを見た瞬間、驚愕の表情に変わる。その花は決して地上では咲かない花、月にしか存在しないのだから。

かぐやは恐る恐るその手紙を見た。

次の満月の宵、お迎えにあがります。カナモリ

「お、おい！大丈夫か、かぐや！」

かぐやが地面に倒れこむ。顔面は蒼白、さっきまで笑いあっていたのが嘘のようだ。

金太郎には何が起こっているのかわからなかった。

そしてかぐやは先ほどまでの些細な感情の変化がバカらしく思えるほどの絶望に襲われた。

## 第二章・第三話：祭の準備だ！

「で、コレが手紙ですか……」

鬼ヶ島、中央塔の鬼丸の自室。鬼丸と金太郎、ウラシマの三人は月の使者からの手紙について話し合っていた。

普段は温厚、というよりそこまで暴力を振るわないはずの鬼丸が手紙を握りつぶした。

「ぶち殺したくなりますね」

ぶち殺す……そういつた瞬間の鬼丸の表情は笑っているのだが、口元が笑っていない。そして周りの殺気に金太郎は圧倒されていた。

「まったく……私のかぐやを取ろうなど冗談も甚だしい。返り討ちにしてやりますよ」

「で、でもさ、相手は天人だぞ。流石にやばいんじゃないか？」

「はっ！天人だろうと何だろうと関係ありません。来るものは殺す。それに我々は一度天人を退いているではありませんか」

確かに金太郎たちは三人の天人を二人で倒してはいる。しかもそれを倒した桃太郎の部下、猿をも。

しかし金太郎には言いようもない不安が残っていた。

「だけどさ、鬼丸君。あのかぐやちゃん引き籠もるほどの天人だよ。一筋縄ではいかないんじゃない？」

「……」

この手紙を受け取って以来、一度もかぐやと顔を合わせていない。それどころか部屋に引き籠もってしまい、誰とも喋っていない。いつもは自信満々のかぐやがそれほどになる相手、鬼丸にも一抹の不安が出てきた。

「やはり、対策は練つといたほうがいいかもしれませんね……とりあえずかぐやの安全が第一ですから」

「確かにな……。でも対策って言ったって、相手は飛んでくるんだろ？ いったいどうやって……」

「しかも相手はこちらの居場所は分かっていると見た。どうする、鬼丸君？」

鬼丸は腕を組む。

鬼ヶ島は海に囲まれている。故に逃げ場はない。相手は飛んでやってくるのでこちらのほうが圧倒的に不利。ウラシマにどうにかしてもらおうか？ ……

それにしてもどうにか時間を稼がなければいけない。逃げ場がないこの孤島でどうやって逃げるか……。

「おい、栄鬼！ そっち持つてくれ！」

「はいはい。今行くよ」

栄鬼と幽鬼、二人で赤と白の縞模様の何かを運んでいる。

幽鬼と栄鬼の身長差があまりに大きいので、幽鬼は両手を上げて運ばなければならぬ。その光景が金太郎には滑稽に思えた。

「やあ、金太郎君。久しぶりだね」

「おお！ デカブツ！」

「何しているんですか、二人とも？」

「コレはね、祭りの準備しているんだよ」

栄鬼が微笑みながら答える。確かに二人が運んでいるのは祭りの道具のようなもの、その言葉も納得できた。

「祭り？鬼にも祭りって言う文化があるんですか？」

「おお！“魂流し”って言うんだ！」

幽鬼が飛び上がって答える。とても楽しそうに。

しかし金太郎に、なんとも物騒な名前のように思えた。同時に金太郎の頭上には疑問視が浮かぶ。

「ははは、何を言っているのか分からないかい？」

「ええ、全然……」

「そうだよ。簡単に言えば、魂流しというのは死者の魂をあの世に帰してあげるお祭りなんだ」

栄鬼はいったん荷物を降ろし、金太郎に向き合う。

「僕たち鬼というのはとても霊的なものに弱くてね、よく亡霊なんかにとり憑かれるんだ。元々僕らは地獄に住んでいたから幽霊なんかには格好の餌食っていうわけ。ここまではいいかな？」

「いや、何で格好の餌食なんですか？……」

「幽霊っていうのは寂しがりやなんだ。だからどうしても声を聞いてもらい。そこで元々地獄の僕らのところによく来るんだ」

なるほど、金太郎の考えが顔に出ていたようで栄鬼はそのまま続ける。

「そこで、この時期にやるのが魂流し。僕らにとり憑こうとしている幽霊さんたちにはあの世に帰ってもらうっていうわけ。この島の

鬼、全員が集まって飲んで、食って、騒いで、そうして幽霊たちには満足してもらって帰ってもらおう。まっ、今では騒ぐほうが主になっっているけどね」

「アタイも大好きだぞ、魂流し！」

「……幽鬼、お前は長の一人なんだから厳粛な態度で臨みなさい」

栄鬼が幽鬼を諭すと、幽鬼の表情がこの世の絶望でも見たかのような表情になる。そして次の瞬間、彼女の目には涙が溜まって今にも爆発しそうになる。

そしてそのまた次の瞬間には、爆発した。

「うわああああん！お母さんのばかあああああ！」

「ぐぼっ！腹にヒット！」

「ああ、悪い、金太郎君！後でちゃんと謝らせにいくから！……  
……コラ幽鬼、待ちなさい！それと僕はお前のお母さんではない  
！」

栄鬼がちよこまか動く幽鬼を追いかけていく。まるで猫と鼠、ウラシマはその光景を見て満足したようにニヤニヤしていた。

「相変わらず面白い人、いや鬼たちだったね」

「あいつと会うたびに何で俺は腹が痛くならなきゃいけないんだよ。

……」

「分かった！」

突然鬼丸が手を叩く。その顔は晴れ晴れとしていて、どこかすつきりとしている。しかし金太郎たちには何が分かったのかすら分からなかった。

「何が分かったの？キンちゃんの腹痛の原因？」

「明らかじゃねえか！」

「そんなことはどうでもいいです。かぐやを守る方法です」

金太郎の目が驚きで見開かれる。

「マジで！？どうやって!？」

「木を隠すなら森の中……ならば人を隠すときは人ごみ、いや鬼ごみの中に隠せばいいんです！」

「……ああ、言わんとしていることは分かったよ。じゃあ、僕も準備してこようかな」

何を察したのか、ウラシマは妙に納得した顔で出て行った。ウラシマのほうは大丈夫、こいつは何をすべきか分かる人間だから。問題は金太郎のほう、見事に右往左往していた。

「えっ!?!俺は何をすればいいの？」

「……後で教えますよ、キンタ」

「あ、ああ……」

金太郎は知っていた。鬼丸がこういう挑発的な目をしているときは何かが起こることを。そして必ず自分にも何かが起こることを。

金太郎は人知れず、ため息を吐いた。

「えー、それでは次の週末の魂流しの件ですが……」

中央塔会議室、栄鬼はその壇上に立つて鬼ヶ島唯一のお祭り、魂流しについて説明していた。魂流しは鬼ヶ島唯一のお祭り、皆が浮かれるのも栄鬼には理解できる。理解はできるのだが……

「オイ、一鬼！そのお面とつてくれ！」

「う、うん。分かったよ」

「ふふふ……楽しみ……」

「はいはい、ユウちゃん泣かないの」

「えぐつ……だつてえ、りんご飴食べたかったの」

これはあんまりである。そもそも鬼たちを率いるはずの長が一番浮かれていてどうするのか。というより皆精神年齢低過ぎないだろうか、栄鬼は鬼ヶ島の将来に言いようもない不安を感じた。

「栄鬼！そんな堅苦しいのをやめて、遊ぼうぜ！ほら、綿飴もあるぞ！」

「いらないよ……暗鬼、祭りは来週だぞ。それなのに何も決まってるのに何故遊べるんだい？」

「いいじゃん、今までと一緒に！かわんねえよ、そこまで！」

「……ここ12年間の記録もないのに変わるも変わらないもあるか！」

桃太郎にここを奪われて12年、もちろん山でお祭りを行えるはずもなくコレが実質、栄鬼たちが取り仕切る祭りとしては初めてなのである。その前の祭りも表面上の祭りしか知らず、前から取り仕切っている長老はただ今不在。

栄鬼が鎮痛剤を取り出したとき、会議室の扉が勢いよく開かれた。

「栄鬼さん、どうやらお困りのようですね」



「鬼丸・・・・・・・・」

逆行の光に包まれ映るその影は6人の長たちがよく見知ったもの。僅か15歳にしてこの島の統治に関する仕事を手伝っている鬼、鬼丸であつた。

「私とその仕事、手伝いましょう」

「・・・・・・・・鬼丸、お前の申し出は嬉しいが、コレは僕たちの問題。鬼丸の手を借りることはできないよ」

「栄鬼さん！残念ですがコレは私の問題でもあるんです！」

鬼気迫る形相で栄鬼に迫る。こうなつてしまつた鬼丸を止める術はない。彼は自分の道をとことん突き進む鬼だから。栄鬼は苦笑した。

「鬼丸、オメエどうすんだ？」

長の一人暗鬼がニヤニヤしながら鬼丸に問う。栄鬼を除いた5人の長に共通するもの、それは“面白そうなものがあれば迷わずそれについていくこと”。どこか楽しそうに鬼丸の顔を見ていた。

「とりあえず祭りの日程を次の満月の日にします」

「なっ・・・・・・・・」

栄鬼が驚きの声を上げる。何故なら次の満月の宵といえは・・・・・・・・

「そんな無茶苦茶な・・・・・・・・。後三日後じゃないか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・すみません、栄鬼さん。その日じゃないとダメなんです。お願いします」

鬼丸が頭を下げる。はて、鬼丸がここまで必死になることはどん

なことが、栄鬼の思いを代弁するように怪鬼が口を開いた。

「ふふふ……で、鬼っ子ちゃんは何をやるのかしら……」  
「……皆さん、その宵、天人がこの島に攻めてきます。それを是非とも歓迎してやってください」

途端、皆の表情が変わる。幽鬼は泣くのをやめ、妖鬼は目を輝かせる。暗鬼と一鬼は互いに顔を見合わせ、怪鬼は怪しげに笑い出した。

「ふふふ……面白そうね……」  
「へえ、天人さんがねえ……」  
「こ、怖いけど、見てみたいかも……」  
「やってやるうじやねえの！」  
「おお！もちろんやるよな、栄鬼！」  
「……しょうがないね、やるうか。みんな！」  
『おう！』

コン、コン

夜、鬼丸はとある部屋を訪ねていた。その部屋とはかぐやの部屋、今までこんな時間には来ることも憚られたが、今は躊躇はしていられない。鬼丸は扉ごしに話し始めた。

「かぐや、起きていますか？」

「……」

そこには誰もいないかのように、返ってくるのは沈黙だけ。それにも構わず鬼丸は話を続けた。

「かぐや、貴方が何を恐れているかは分かりませんが大丈夫です。私が貴方を守ります」

「……」  
「貴方がこの地上に降りてきてくれて本当に良かった……。貴方と出会っていなければ私はこんな気持ちは抱くことはなかったでしょう。だから貴方を天人などに渡したりしません」

鬼丸の正直な気持ち。それを喋った後に鬼丸はハツとなる。

「……すみません。そういえばかぐやは月の民でしたね。貴方の本心も分からないままこんなことを言ってしまう申し訳ない」  
「……」

「でも私には貴方にここにいてもらいたいです。これは私の我侷ですが、皆も同じ気持ちだと思います。かぐや、気持ちに整理がついたらまた返事をくださいね。……もうこんな時間か。それではお休みなさい、かぐや……」

鬼丸の去っていく足音が聞こえる。かぐやはそれをもうすぐ満月になるうとして見る月を見ながら、それを聞いていた。

彼女の表情は明るくもなく、暗くもなくただ無表情。感情を失ったように無機質な声で彼女は呟いた。

「……無駄なのに……」

彼女本心の呟き、残念ながらそれは人知れず宙に消えていった。

「何で無駄なのに、こんなことばかりするんでしょっね……」  
本当に馬鹿な人たち……」

第二章・第四話：祭に現る変態共（前書き）

タイトルがひどすぎる……………。

## 第二章・第四話：祭に現る変態共

魂流し、それは鬼たちの間に古くから伝わる唯一のお祭りである。鬼とは元々死んだ命が逝く地獄の門番であり、そういうことから幽霊など霊的なものとかかわりが深い。そのため霊的なものにとり憑かれやすく、それらをまた地獄に戻ってもらうのがこの祭りの起源である。

祭りは日が沈むと同時に始まる。するとまず各々の一家の物を持ち寄り、それを祭りの中心の地に集める。それらに火を灯しそれを巨大な炎で一気に燃やす。その周りに酒や米やその他諸々の食べ物をお供え、その周りを鬼たちが踊る。

悪霊たちには炎と共に成仏してもらい、この炎の煙に当たれば病気も患わず健康に一年を過ごせるといふ。

ただ現在では飲んで食って踊って騒ぐという行為が主だっており、この祭りの起源を知ろうとするものは少なくなっている。それでも鬼たちにとっては重要な祭りということは変わりなく、ほとんどの鬼がこの祭りに参加する。

その数は伊達ではなく、金太郎はこの規模のお祭りを見たことがなかった。

「すげえな、コレは……」

現在鬼丸たちがいるのは祭りの中央、すなわちこの祭りの象徴である巨大な炎が燃やされているところである。金太郎はそこから祭りの様子を見ていた。

炎とは違う、別の熱気がムンムンこちらに伝わってくる。完全に金太郎はその熱気に圧倒されていた。

各々の家が屋台を出すこともあって、様々な種類の屋台がそこら中に存在している。射的、りんご飴、綿飴……どこから聞き

出したかは知らないがクレープなんて代物も見られた。  
鬼丸は自慢げに金太郎を見てきた。

「どうです？すばらしいものでしょう」

「……ああ、こりゃすげえな！もうだめだ、待ちきれないぜ  
！」

金太郎はいきなり上着を脱ぐ。ついに露出魔の仲間入り、ということとはなく金太郎の上着の下には青いハツピが。金太郎の表情はいつにもまして輝いていた。

「それじゃ、行って来るぜ、鬼丸！ひゃっほおお

「待ちなさい」

「ぐえっ！」

ハツピの襟を掴み取る。金太郎は蛙をひき潰したような声を出して地面に盛大に倒れこんだ。すぐに起き上がり鬼丸に非難の声を浴びせた。

「な、何すんだよ、鬼丸！？」

「……貴方は目的を見失いすぎている。貴方はすべきことを分かっていてでしょうね」

「そりゃ遊び

いえ、かぐやを守ることでございます」

すぐに前言撤回、本能がそうするように告げていた。金太郎の答えを聞くと般若のような形相から一転、鬼丸の表情が元に戻る。  
正直ホツとした……。

「よろしい。では貴方はここにいてすぐに行動できるように待機しておいてください。分かりましたか？」

「で、でも綿飴が、焼きソバが、たこ焼きがあああああ！」

金太郎が喚きだす。どこかの長と姿がかぶってとても煩い。仕方なく鬼丸は妥協することとなった。

「………仕方ない。では30分、時間を差し上げます。それが貴方に与えられた時間です」

「30分………だと………」

希望が見えたのも束の間、一気に表情が落胆する。

「それじゃ短すぎるぜ！もっと、もっとおおおお！」

「煩い………ほらほら、後28分40秒ですよ。早く行かないとどこにもいけないですよ」

「くっ！………いつたいどうすれば………」

金太郎は芝居がかった口調で、頭を抱え悩みだす。そんなことする前に早く祭りに行ったらいいのに、鬱陶しい………、と思ったのは内緒である。

「ふふふ………どうやらお困りのようだね、キンちゃん！」

「そ、その声は！？ウラシマ！？」

青髪の少年、ウラシマはいつの間にか二人の後ろにいた。すでにウラシマの格好もハッピーである。

「その通りだ、キンちゃん！どうやらお祭りを楽しみたいのに時間がないらしいね」

「そうなんだよ、ウラシマ！どうすればいいんだ、俺は！？」

「ふふふ………僕がお祭りの楽しみ方を教えてあげようじゃな



いか！」

「マジでか!？」

金太郎は目を輝かせる。亀の甲より年の功、金太郎の答えはすでに決まっていた。

「行くぞ、キンちゃん! いざ、祭り(戦場)へ!」

「うおおおおおお!!!!」

金太郎とウラシマは屋台が多く存在している通りに駆け出していた。金太郎は18歳、ウラシマは自称39歳の大人たちが何をやっているのだろうか? 鬼丸は何かを諦めた。

「ふう……. ようやく行きましたか……. かぐやもどこかに行きますか?」

「…….」

かぐやは何も言わず首を横に振る。鬼丸は少し残念そうに俯いた。

「そう、ですか……. . . . . ならばここにいまししょうか」

「…….」

さて、ここで各々の祭りの楽しみ方を見てみよう。

「いいねえ! この熱気! テンション上がってきたよ!」

「お祭り最高!!」

まずは金髪と青髪のバカ二人……いや、金太郎とウラシマを見てみよう。二人は屋台が集まる通りを全速力で走っていた。人の迷惑など知ったことではない。

「さて、キンちゃん!ココが僕らの戦場となるわけだが……」  
「はい、先生!」

このテンションである。正直金太郎自身も何を言っているのか分からなくなっているのだろう。

「まず、手当たり次第に子供用お面を買っ!」  
「はい!」

二人が手にしたのはヒョットコのお面をつける。  
いかにも子どもの容姿のウラシマはともかく、すでに成人の域に達している金太郎がつけるのは見ていて、とても痛い。しかし今の彼にとってみれば関係のないことだった。

「そしてまず焼きそばの屋台に向かう!」  
「はい!」  
「そして焼きそばを受け取る!」  
「はい!」  
「そして駆け出す!」  
「はい　　って待てゴラ!!」

ウラシマのハッピの襟を引っ張り上げ宙に浮かす。ウラシマは必死に手足をバタバタさせるが、それは何の意味を成さなかった。

「何すんだよ、キンちゃん!? は〜な〜せ〜!!」  
「テムエのやっていることはモロ犯罪じゃねえか! . . . . . って、  
うわ!? オメエいつの間にかこんな盗りやがった?」

ウラシマの懐からはバラバラと、りんご飴、綿飴、たこ焼き . . . .  
. . . . . しかもそれをご丁寧につづつ袋に包んである。ココまで来る  
と尊敬に値する。

ウラシマはかわいらしく舌を出した。

「えへっ」

「えへっ」

じゃねえよ! 何が じゃ、ボケ! とにかく、コ

レ全部帰してこい!」

「えっ . . . . .」

途端ウラシマの表情が一変、絶望に染まる。

「そんな . . . . . 頼むからそれだけは . . . . .」

「何がじゃ!? はよ帰して来い!」

「 . . . . . こ、これは僕のものだ。誰にも渡さないぞおおおお  
! ! !」

どごその悪役のようなセリフを吐き捨て、その場から逃げ去るつと  
するウラシマ。もちろん金太郎はそれを見逃すわけもなく、骨髄反  
射並みの行動を取った。

「逃がすかああ! 親父、コレ借りるぜ!」

「あっ、ちよっ . . . . .」

「この17年間培った射的の腕前、見せてやるぜ!」

金太郎は射的に使われる銃を逃げるウラシマに標準を合わせ、コルクの銃弾を放つ。通常射的の筒は曲げているものだが金太郎はそれを考慮に入れ、銃弾はウラシマにまっすぐ向かっていく。しかもそれは単なる銃撃ではなかった。

「三連弾、だと!？」

三発の銃弾が全てウラシマに当たる。ウラシマが地面に倒れこむの確認してから金太郎は側に寄った。

「伊達に鬼丸と一緒に過ごしてきたわけじゃないんだ! さあ、それ全部返して来い!」

「でも、もう時間ないよ……………」

ウラシマが時計を見せる。現在時刻は7時31分、鬼丸と約束したのは7時4分だから残り時間は……………3分。

「ウルト マン!？」

「仕方ないね……………。じゃあ、ちょうど射的があることだしそれやっけて帰ろっか……………」

金太郎はそれに同意する。というより周りにそれにしかないからだ。まあ、金太郎が最も得意とすることだから別にいいのだが。

「キンちゃん、ココは勝負といこうじゃないか」

「ほお、この俺に挑むとは、ウラシマ。浅はかだな……………」

「ふつ……………こう見えても僕が若いときは散々暴れたものだよ。その熟練した僕の腕前に勝てるかな?……………」

二人は顔を見合わせ、見えない火花を散らす。



周りの声と金太郎の声がまるつきりかぶる。

ウラシマは三丁の銃を高速で切り替え、三発を同時に的に当てる。しかしそれでも的は少し動いただけで、落ちるには至らなかった。

「な、なに!？」

「ふっ、お前の力はその程度か……。俺の出番のようだな……」

「キンちゃん、敵の弱点は足だ。そこを狙え……」

「……ウラシマ、何故それを教えるんだ？お前と俺は敵同士だろ？」

ウラシマはフツと鼻で笑う。いかにも演技くさい行動に周りは少々呆れ始めていた。

「敵とは言え僕らは元々“戦友”じゃないか、キンちゃん……」

「ウラシマ……」

ウラシマは親指を立て、金太郎に笑いかけた。二人の目にはうっすらと涙が。

周りのギャラリーは完全に呆れ返っていた。

「ウラシマ、俺と一緒に戦ってくれるか？」

「……いいのか？僕は敵なんだよ？」

「戦友だろ、俺たちは？行くぜ、ウラシマ!」

「……ああ！行こうか、キンちゃん!」

……結局、金太郎たちは巨大な敵を倒すことに熱中し、約束の時間は過ぎたという。鬼丸の怒りが爆発したのは言うまでもな



## 第二章・第四話：祭に現る変態共（後書き）

こんにちは、作者です。

実は今日で春休みが終わり、明日から学校が始まります。

更新が今まで以上に遅れるかもしれませんが、どうぞこれからもよろしく願います。



## 第二章・第五話：逃げる？戦略的撤退ですよ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

鬼丸とかぐや、互いに無言であつた。ただ漠然と巨大な火柱を見ているだけである。

金髪と青髪のバカ二人は予想通り約束の時間に帰ってこなかったし、栄鬼さんは野暮用で今はここにはいない。

話しかけることもないし、話すこともない。しかし鬼丸にはこの沈黙でさえ心地よかつた。ただかぐやといれるだけでよかつた。

今は少し落ち込み気味だが必ずその笑顔を取り戻してみせる、そう鬼丸が決意した時辺りがざわついているのに気が付いた。

「何だ、アレ？」

「金色の光だあ」

「・・・・・・・・・・来たか」

鬼丸はそう呟くと立ち上がり、地上に降り立つ金色の光を睨みつけた。アレが今かぐやの笑顔を奪っている原因、そう思うと今すぐアレに殴りかかりたかつたが何とか踏みとどまつた。

金色の光が失せ、人の姿が顕になる。金色の髪、赤と青のオッドアイ、スーツ姿の端正な顔立ちの男だつた。

「・・・・・・・・・・貴方がカナモリ、ですか？」

「いかにも。私の名前はカナモリ、かぐや様の教育係でございます」  
教育係、きつと幼いときからかぐやに仕えていたのだろう。そう思うと無性にうらやましく感じられた。

「で、その教育係さんが地上に何の用ですか？」

「おや？手紙で伝えてあつたはずですが。．．．．．まあ、いいでしょう。先に伝えようが今伝えようが関係ない。かぐや様をお迎えに上がりました」

「何故？」

鬼丸は大きさに首をかしげる。その様子にカナモリも首をかしげた。この鬼は見るからにそこまで頭が悪そうでもない。だから自分が言つたことは理解できないわけもない。そうじゃないとすれば．．．．

(挑発、か？．．．．．)

「．．．．．かぐや様は我ら天人の姫。その姫がいなくなればお迎え上がるのは当然だと思いますが」

「姫、というのは民の団結の象徴です。直接的には姫は国政には関わりませんが、その存在は確かに国には必要ですよね」

「．．．．．何が言いたいのです？」

カナモリの脳裏に最悪の光景が思い浮かぶ。しかし動き出したときにはすでに遅かった。

鬼丸はかぐやの手を取り、軽々しく持ち上げる。いわゆるお姫様抱っこを試みせる。

「要するにかぐやは私たちにも必要なので渡せません、ということですよ！」

「．．．．．無駄なことを」

カナモリは腰の刀を抜き、鬼丸に向ける。白銀の日本刀は触つただけで切れそうだが、鬼丸はいたって余裕の表情。それに加えて笑つ

て見せた。

「ははっ、そんなもの向けても無駄ですよ。もはや日本刀など・・・時代遅れなのですから！」

まさに不意討ち、懐から愛銃デザートイーグルを取り出し魔力を纏った銃弾を放つ。

この至近距離だ。相手は天人故に致命傷は与えられないが、確実に当たり隙は作れる。そのうちに逃げるとというのが鬼丸の作戦であった。だが・・・

「無駄である」

「なっ!？」

鬼丸の顔が驚愕に変わる。

カナモリは鬼丸の銃弾を軽くそれをかわしてみせたのだ。この距離で高速で放たれる銃弾をかわすなど人間業ではない。それどころか今のがかわされれば、これから闘うこととなると全てかわされてしまう。勝機などない・・・。

「残念でしたね。さあ、姫を渡しなさい」

「バカな・・・」

「・・・鬼丸さん離してください」

今まで口を開こうともしなかったかくやが初めて口を開く。鬼丸が久しぶりに聞いたかくやの声は今にも消え入りそうな声、鬼丸は今の状況よりそれが心配となった。

「所詮は無駄なこと・・・。私が帰れば済むことだったんですよ、鬼丸さん。さあ、離して」

「いやです」

鬼丸が明確な拒絶の意を表す。鬼丸はカナモリの方をみていたので、そのときのかぐやの悲しそうな表情を気づくことができなかった。

「無駄なことなど何も無い………。私は諦めませんよ！」  
「むっ！逃げるか？」

鬼丸はお姫様抱っこをしたまま駆け出す。カナモリはもちろんそれを追おうと、飛翔の準備をするが不自然な現象に気が付いた。自分の影がウニヨウニヨ動いているのだ。

「何？」

「鬼丸の愛の逃避行を邪魔はさせないぜ！」

「暗鬼、来ましたか！」

カナモリの影から登場したのは長の一人、暗鬼。鬼丸はこの登場を待ち望んでいたのだ。さらに空を見上げると、見知った小さな鬼の姿が目に入る。鬼丸は思わず笑った。

「どっかああああん！」

「くっ！………」

爆ぜる鬼の名に恥じぬ空中からの攻撃。カナモリはそれをかわすのだが、地面を砕いた衝撃が彼に襲い掛かる。そのうちに鬼丸はその場から離れていった。

「何が起こっているのだ？」

「……我ら鬼ヶ島の六頭………」

カナモリは周りを見渡す。いつの間にか先ほどの鬼を含め6人の鬼に囲まれていた。他の鬼たちは明らかに違う雰囲気、少し圧倒された。

「我が名は栄鬼！」

「暗鬼！」

「ふふつ、怪鬼……」

「妖鬼です」

「い、一鬼です……」

「幽鬼だああああ！」

明らかに不利な状況、ここでこいつらを倒しても意味がないと判断しカナモリは飛び上がるようにする。

その状況を待っていたかのように栄鬼の口元がニヤリと歪んだ。

「皆の衆、よく聞け！かの者は人の形をした悪霊であるぞ！」

「なっ!?!……」

「この悪霊を放っておくわけにはいかぬ！皆の衆、奴を追い出せ！」

『うおおおおお!!』

周りの鬼が栄鬼の声に呼応する。何という統率力、カナモリの眉間にしわが寄る。

飛び上がりこの場から立ち去ろうとするカナモリの目に何かが飛び込んできた。

「うりゃあああ、ミサイル攻撃！」

こちらに飛んできたのは何と二人の鬼。幽鬼がそこらへんにいた鬼を掴んで投げ飛ばしたのだ。

あの小さな体にどれほどの力が秘められているのだろう。カナモリ

には休む暇などない。

「ふふっ……」

「うふふ」

二人の女の鬼、妖鬼と怪鬼がすぐ目の前に迫ってきていた。妖鬼は扇子を、怪鬼は爪を水平に振るう。カナモリは剣でそれを防ぐと、すぐ次の行動を取った。

「影に潜もうとしても無駄だ！」

「ありや、ばれた!？」

剣を自分の影に突き刺すと、暗鬼の姿が顕となる。暗鬼はそのまま重力に従って落ちていく。

「オイ、一鬼!助けてくれい！」

「うん、分かったよ」

カナモリのすぐ後ろにいた一鬼が助けに入る。もしこいつが自分に攻撃していたらどうしていただろうか、カナモリは相手のバカさに感謝した。

何はともあれコレで安全圏内に入った。そのまま姫を連れて逃げた鬼を追おうと飛び去った。

「ありやりや、逃げちゃった。どうするの、栄鬼？」

「ふむ……皆の衆、皆のお陰で悪霊を追い出すことができた!これにて魂流しを果たしたぞ。それでは皆の衆、後は楽しもうぞ!」

『うおおおおおおお!……!』

先ほどより大きな声で皆が呼応する。コレで鬼丸から頼まれた時間稼ぎは果たすことができた。栄鬼は今まさに逃げている途中の弟同然の鬼のことを思った。

「……………がんばれよ、鬼丸」

「栄鬼、早くこつち来て飲もうぜ！」

「……………はいはい」

ところ変わってここは鬼ヶ島北部の田んぼ地帯。鬼丸は畦道をかぐやを抱えながら走っていた。彼は鬼とは言えども明らかに力仕事をするような鬼ではない。流石に息が上がっていた。

「はあ……………はあ……………」

「……………鬼丸さん、つらいでしょうに……………。早く諦めたらどうですか？」

かぐやの声が悪魔の誘惑に聞こえる。この悪魔の声には負けてはいけない。鬼丸は無理に笑って答えた。

「馬鹿言わないでください。貴方のことで私がつらいことなどない。絶対に逃げ切ってみせますよ」

鬼丸のその声を聞いて、かぐやの表情は一層悲しそうになる。それはかぐやの未来を嘆いているのか、はたまた自分のことが、鬼丸には分からなかった。

そうして無我夢中で走っているとようやく浜辺に着いた。

「ついた、か……」

予定ではここでウラシマが船を準備しているはずだ。

しかしそこにはウラシマの姿はなく、いるのはヒョットコのお面をかぶった変態……。

「やあ、鬼丸君。こっちだ、こっち!」

「……誰ですか、この変態?」

……はて? 自分には仮面を被っている変態の知り合いなどいないはずだが。

「ひどいね。僕だよ、ウラシマだよ!」

「……ああ、あの人の約束を守れないばかりか、犯罪にまで手を出したあの馬鹿ですか……」

ウラシマともう一人の馬鹿のやっていたことは祭りの運営に関わっていた鬼丸の耳にも入っていた。しかしそんなこともまったく気にしていないかのようにウラシマは仮面を取って笑っていた。

「まあまあ、そう言わずに。天人が来る前に　　って、来たわ」

「何ですって!?!」

上空を見上げると確かに金色の光が。金色の光が地上に降り立つと、鬼丸は軽く舌打ちしカナモリと対峙した。

「……地上の鬼よ、今度こそ姫は返してもらおうぞ……」  
「どうでしょうか、私にはまだ切り札があるかもしれませんよ」



「何を世迷い事

「 オラアアアアア！」

カナモリが咄嗟に反応し剣を振りぬくと、ヒョットコの仮面をつけた変態が斧を振り下ろしていた。そしてポーズを取って一言。

「ヒョットコ仮面、ここに推・参！」

「後は頼みましたよ、変態」

「言い様がひでえええええ！」

今は仮面を被った金髪の変態のことなど気にしてられない。鬼丸はかぐやと共に船に飛び込んだ。

「さあ、6人の長の相手の次はこの俺だ、天人！」

「……無駄なことを。切り捨ててくれる！」

今度はカナモリが剣を振るう。金太郎はそれをアクロバティックに大げさにかわすとバクテンで距離をとる。気分はまさにヒーロー、金太郎は完全に調子に乗っていた。とにかく今の金太郎なら簡単にやられることはない。自分のやることはとにかく逃げることだ。

「ウラシマ、船の準備は出来ているでしょうね」

ウラシマは親指をグツと立てた。

「モチのロンだよ、鬼丸君！この日のためにエンジンを特注したんだ。この“KBT-01-MOMA”をね！」

「ではその実力を見せてもらいましょうか」

「OK！しっかり掴まってなよ、お二人さん！行くよおおおお！」

ウラシマはエンジンを起動させる。

並みのエンジンではありえない起動音、ウラシマがアクセルをいれると船首が持ち上がり、恐ろしいスピードで波を掻き分けていった。

「ちよっ……コレ速すぎじゃ……」

「ひゃっはあああああ！今の僕だったら音速だって超えられるぜ……」

こうして鬼丸の愛の（？）逃避行が始まった。

**第二章・第五話：逃げる？戦略的撤退ですよ（後書き）**

すみません。最近のお話にパロディネタが結構多いです。  
しかも自分はちょっと趣味が古いので、わからないかも……。

## 第二章・第六話：カナモリの実力

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、悪を倒せと俺を呼ぶ！……………」

目の前のヒョットコのお面をつけた男が何かのポーズを取る。カナモリにはそれが何か分からなかった。正確には分かりたくもなかった。

「ヒョットコ仮面、ここに参上！」

「……………貴公は何度登場すれば気が済むのだ？」

金太郎の宣言どおりならばコレで通算二回目。それでも金太郎はそれを気にしていない様子であった。

「オメエが何といおうとかぐやは渡さないぜ！」

「……………何故だ？」

「ん？」

何故、といわれてもかぐやを守るためかしか言いようがない。なのですぐには答えられなかった。

「何故貴公達は無駄なことをするのだ？我ら天人と戦おうとするその戦意、かぐや様のために奮闘するその姿、全てがまったくもって無駄である」

「んなもんやってみなくちやわかんねえだろ！」

「その言葉さえ無駄だ……………」

カナモリは金太郎の目の前に現れ金色の剣を振り下ろす。すぐさま金太郎は紫電で防ぎ、もう片方の拳でカナモリに殴りかかる。が、

軽くかわされる。

「ふっ……」

「くそっ！」

金太郎は一旦距離をとり、自分の有利な距離をとる。剣よりも斧が優れている点は範囲。近距離でのこまごました行動は剣のほうが有利だが、単純な距離と破壊力だけなら斧は負けない。

金太郎は力に任せて思いっきり水平に斬った。

「甘い！」

「何!？」

カナモリはそれを飛んでかわす。そして上空からのカウンター攻撃、重力を加えて放たれたそれを紫電で受け止めるが、それを見透かされていたように隙だらけの左横腹に蹴りを入れられた。

「くそっ」

ボディへの攻撃、内臓に直接ダメージが響くが、ここで倒れたりしてさらに隙を作ってはいけない。敵はまだ空中、この距離ならば拳は当たる。

「オラアアアア！」

カナモリはそれすら空中で身を翻し、金太郎の拳を受け止める。それどころか拳を絡めとられ逆に金太郎の体が宙に浮かぶ。

「まずっ！」

「コレで終わり……」

金太郎が気づいたときにはもう遅い……。直接地面に体を叩きつけられ、さらに腕を関節で決められる。金太郎には地面にひれ伏しているしか選択肢はなかった。

「どうだ？……コレが私と貴公の差なのだ。今からでも遅くない。降伏すれば命まではとらんぞ」

「う……。せんだよ！ごちゃごちゃと！」  
「むっ！？」

関節を押さえられているはずの金太郎がスルリと抜け出す。何故、と思っっているカナモリに金太郎は紫電を振り下ろすが、そこにはすでにカナモリの姿がなく、すぐ後ろにいた。

「また後ろに！？」

「……。なるほど、自分で肩の関節を外したか。その心意気やよし……。だが何度振ろうとも私には当たらんぞ」

「何でだああああ！？」

カナモリは確かに強い。剣術、体術に加えおそらく魔術の類のものも持っているだろう。

しかし、その全てが突出しているわけではない。雉のように速くもなく、桃太郎のような怪力は持っていない。なのに何故か攻撃が当たらない。

金太郎は自分が持ちうる最大の力を持って紫電で薙ぎ払うが、それはカナモリに届くことはなくただ空を斬るばかり。

金太郎には次第に疲労とイライラが溜まっていった。

「無駄だぞ……。貴公の攻撃は届かない。何をやるうとな」  
「だったらコレでどうだああああ！」

身を屈めての下段への蹴り。それを知っていたかのように飛び上がりカナモリは回避する。

金太郎はニヤツと笑った。

これはフェイント。金太郎は蹴りだした足で踏み込み、未だに宙に浮かんでいるカナモリに拳を突き出した。

「雷拳・白牙！」

金太郎の拳が白い雷に包まれ、必殺の拳が放たれる。拳に魔力を纏わせるなどやったことなかったが、人間土壇場になれば何でもできるものだ。

魔力の充足、タイミングも共に完璧。金太郎は今度こそ勝利を確信した。だが……

「がっ……」

「……自分の体のことも忘れるとはな、戦士失格だぞ。坂田金太郎」

金太郎の拳は楽々とカナモリの手の内におさまる。それどころか攻撃したはずの金太郎のほうに痛みが伝わっていた。

彼の放った拳は右手、すなわち自分で肩の関節を外したほうだ。敵に攻撃することを考えるあまりそのことは眼中になかった。

ギリギリと受け止められた右手を締め付けられ、さらに苦悶の表情を浮かべる。そんな彼を塵でも扱うかのように、カナモリは投げ捨てた。

「……」

もうここには用はない。カナモリが立ち去ろうとすると、何かに足

を引つ張られた。

「……………」

「いかせねえ、ぞ……………」

虫のように地面を這いずりながら尙足に喰らいついてくる金太郎。カナモリはそれを軽くあしらうと、月の姫がいるであろう方向へ飛び去った。

「畜生…………畜生がああああ！！」

敗者に口なし、戦いに負けた彼には止める術などなくただ喚くしかなかった。

夜、この海域には普段絶対に船は入らない。昼はこの海域の事情を知らない愚か者が興味本位で入ったりはするが、そのような者でさえ夜にはこの海には近づかない。

海面に妖しく映る月の影、生き物のようにつねる波、海の深い闇、その全てが人間に近づいてはいけないと、本能的に訴えるのだ。まるでここに住むといわれる竜神が語りかけてくるように。

今宵、そんな海域をエンジン付のモーターボートで突っ切る一台の船があった。

「ひゃっはああああ！！このエンジンは当りだぜ！！」



「このままじゃ、船が吹っ飛んでしまいますよ！」  
「はあ！？天人なんて屁でもないわ！！」

その船の乗客は鬼丸、かぐや、そしてウラシマの三名。現在絶賛夜逃げ中である。

「いいねえ、鬼丸君！今日の僕はテンション高いよ！」

「ええ、キャラが崩壊する程度にね」

「このまま突っ切れば後5分で本土につく。そこまで行けば逃げるのは成功かな？」

「ええ、とりあえず夜明けまで逃げれば奴は月に帰らざるを得ない。私は鬼ごっこなら負けませんよ」

カナモリは天人。夜が明け、月が沈めば彼は月には帰られなくなる。もし夜が明けても地上にいることとなれば彼は地上に縛られることとなり、月からの使者が来ない限り一生帰ることはできなくなる。あと少し、そう思っていた鬼丸に果報が訪れた。

「おっ！本土が見えたぞ！」

「本当ですか！？」

「うん。これから少し減速をするよ。このまま陸に乗り上げちゃあ、大事故」

らららららん、らららららん

「おっと、電話か……………」

鬼丸は盛大にずっこけた……………。何故こういうときは電話を切っておかないのだろうか……………。  
ウラシマは平然と電話に出た。

「はい、もしもし……………あっ社長……………いえ、特には……………」

「・・・へっ？今から会議ですか？・・・いえいえ、滅相もない。今から行かさせていただきます。・・・はい・・・はい。分かりました。それでは失礼します」

ピッ！

「・・・」

「・・・」

互いに何を思っているか分かっている沈黙。ウラシマは親指を立て、笑った。

「鬼丸君、あとヨロシクネ！」

「　　ってマテマテマテマテ！」

海の方へ飛び込もうとするウラシマの襟を掴む。先ほどの電話は十中八九竜宮城からの電話。ここで海に逃げられたら誰が船を操縦するのか。

「放してくれ、鬼丸君！男には行かなくちゃいけない時があるんだ！」

「ではせめて私たちを陸に上げるまで待ちなさい！」

「無理！社長にあと1分で来いって言われたから」

ウラシマはジタバタと船の上で暴れまわる。余程その社長が怖いのか、ウラシマは必死の形相で鬼丸の腕を振り払った。

「あっ・・・」

「それじゃあ鬼丸君、がんばってね〜！」

何という穏やかな笑顔、ウラシマはそんな笑顔を浮かべ夜の海に消えていった。

そして鬼丸は半ば絶望して操縦席に向かった。

「がんばってねって………」

鬼丸は操縦桿を握り正面を向く。目の前に見えるのは本土の浜辺。  
本当なら喜ぶべきなのだろうが、如何せん距離に問題が……。

「もうすでに目の前じゃないですかあああ！」  
「……………」

ドッカアアアアアン！！

## 第二章・第七話：金太郎、飛翔！

「くそっ……肩が上がらねえ……」

鬼ヶ島北部の海岸、本土に近いそこはただでさえ誰も近づかないことに加え、現在祭りが行われている最中なので普通ならひっそりと静まり返っているはずである。

金太郎はそんな場所で必死に立ち上がろうとしていた。

「いてて……」

カナモリの戦闘により全身傷だらけに加え、関節技から抜け出すために自分で肩を外した。

戦闘の疲労もあいまって、金太郎はそこから立ち上がることもできなかった。

立ち上がるうとすれば肩が痛み、立ち上がることを諦め寝転がると砂が傷口に入る。まさに八方塞。

それに今立ち上がっても金太郎には何もできなかった。

「……どうやって本土まで行くんだよ……」

金太郎はそうポツリと呟く。

この海を唯一渡れるウラシマは鬼丸たちと一緒に行ったし、この海を泳いでいくこととなれば間違いなく溺れ死ぬ。第一そんな規格外なことをできる奴は一人しか見たことない。

金太郎は肩の痛みを堪えながら何とか立ち上がり、本土の方を見た。

金色の光が揺ら揺らと宙を飛び、それを見ると無性に腹立たしくなった。

「おお！デカブツ。こんなところで何をしてんだ!？」

「・・・・・・・・何だ、ロリか・・・・・・・・」

奥歯をかみ締めていた金太郎のところに現れたのは、鬼ヶ島六頭の一人、幽鬼。現在は長である故に祭りの中心で取り仕切らなければならぬはずだが、そんなことはどうでも良かった。今は一人にしてもらいたかった。

「何だとは何だ、デカブツ!・・・・・・・・というよりロリって何だ？」

「オメエのことだよ」

「へえ。そーなのかー」

「・・・・・・・・幽鬼にあまり変な知識を入れないで欲しいな、金太郎君」

そう言つて現れたのは六頭の一人、栄鬼。いたつて真面目な栄鬼が祭りの執行という大事な仕事を放っておくわけがない。

大方この小さい鬼に連れられここまでやってきたのだろう。さながら保護者と子供の関係だ。

「・・・・・・・・で、何ですか、二人して？お邪魔だったら立ち去りますけど」

「そんな怪我じゃ立ち上がることも難しいんじゃないかな？」

「・・・・・・・・」

見破られている・・・・・・・・。

栄鬼は何か幽鬼に指示を出すと、幽鬼は笑顔で金太郎の元までやってきた。

「どつせい！」

「いたああああ！！！」

そして思いつきり外してある肩を叩いた。

普段から怪力の持ち主である幽鬼に叩かれたことに加え、怪我している箇所クリーンヒット。あまりの激痛に金太郎は辺りを走り回った。

「何するんですか、栄鬼さん！？」

「肩の痛みが治ったでしょ」

「あっ……」

金太郎は肩を回す。さっきまで上に持ち上がっていた肩が元の位置に入り、痛みも薄れている。先ほどまで立ち上がることさえ痛がっていたことが嘘のようだった。

栄鬼はニコニコ顔で、幽鬼は腰に手をあて自慢げにこちらを見ている。

「えっへん！」

「……あ、ありがとうございます……」

「どういたしまして。体の怪我也君の体だったら数日で治るだろう。さあ、鬼丸のことは鬼丸に任せて僕らは祭りを楽しもうじゃないか」

金太郎はハツとなる。そうだ、鬼丸はまだ闘っているんだ。こんなところで寝転がっている場合ではなかった。

金太郎は自然と立ち去ろうとする栄鬼を呼び止めていた。

「あ、あの！栄鬼さん！」

「ん？なんだい？」

「鬼ヶ島から本土に行く方法ってまだありますか？早く鬼丸のところに行かないとあいつがやられちゃう。だから」

栄鬼は複雑そうな表情になる。そして言い難そうに口を開いた。

「……無理だよ」

「えっ？」

「無理なんだよ。ここから船なしで行くことは……諦めなさい」

諦めなさい、その言葉が金太郎の脳裏にリフレインする。

そんな彼に情け容赦なく、栄鬼の言葉が襲い掛かる。

「神の力を超えることは不可能。それすなわち竜神の土地を踏むことも無理ということ。正直、鬼ヶ島に来た桃太郎やウラシマ君たちを見たときは驚いた。彼らは余程神の扱いに長けているんだね。でも僕らだけではこの海は越えられないんだよ」

「そんな……。じゃあ、桃太郎にここを追われたあと貴方たちはどうやってこの海を越えたというんですか？」

「……。それは我が父、鬼珠がうまくやってのけてね……。その方法も今ではもう使えない」

思い出したくもないその方法。そのせいで彼は老人の姿となってしまう。栄鬼は人知れず唇をかみ締める。

そのことを隠すように栄鬼は再び語りだした。

「第一、鬼丸の作戦ではここまで計画通りでしょうに。君にはこの鬼ヶ島でこのゲームから退場してもらおう。自分のために君を犠牲にしたくないって、彼は言っていたよ」

「それでも俺はあいつらのところに行かなくちゃいけないんです！」

「……………理由を聞こうか」

金太郎は俯きながら小さな声で、しかし感情のこもった声で喋りだした。

「俺は悔しい……………。天人に一度勝っただけであいつら全員に勝てるといい気になっていた。でも違った。俺はあの時も鬼丸と一緒にじゃなくちゃ勝てなかった。それはあいつも同じこと、あいつと一緒に闘わなくちゃいけないんだ」

「……………」

「それに……………それにあいつらと俺は仲間だから！仲間だから俺はあいつを助けなきゃいけないんだ！」

金太郎は栄鬼を見つめる。こんなに強い目をした人間は見たことがあつただろうか？……………

そういえば一人いた。人ではないが自分の一番近くにいた、内に秘める感情が今にも爆発しそうな鬼の娘が。

幽鬼はしゃがみこみ、ジッと金太郎を見つめる。

「……………」

「何だよ、幽鬼？」

「……………本当に行きたいのか？」

いつも笑っていきそうな幽鬼がいつになく真剣な眼差しで金太郎を見ている。突然のことで反応に遅れるがそんなことで折れるようなものではない。

「あ、ああ。当然だ！」

「死んでもかまわないか？」

「……………ああ！」



幽鬼は小さく笑うと立ち上がり、首をひねった。

「栄鬼、“アレ”をやるぞ。力を貸せ」

「……はっ？何を言っている、幽鬼？いくらお前でも言っているいい儘と悪い」

「いいから貸せって言ってるんだ！」

こうなった幽鬼は誰も止められない。栄鬼は渋々幽鬼に近づいていった。

幽鬼と栄鬼の身長差はあまりに激しい。それこそ大人と子供の差である。その距離を埋めるかのように栄鬼はしゃがみ、二人の影が重なった。

「ちよっ!?!……」

突然の出来事に金太郎はうろたえる。彼は年頃にも関わらずこういう話題には疎いのだ。

それにしても長い……長すぎる。これは所謂大人のキスという奴では？

金太郎の顔に血が昇り、顔が真っ赤になった時、ようやくその行為が終わった。

終わってもなお二人の間を渡す透明のものが……エロかった。

「なななな何やってんすか、二人とも!?!今はそれどころかないでしょ！」

「煩い……。コレくらいでいいだろう。おい、デカブツ。着地には気をつけるよ」

「はっ?えっ……。意味わかんないんだけど……」

幽鬼は袖で口周りを拭き取ると、目を見開く。鬼の目は一部の例外を除いて赤く染まっている。これは鬼一族に共通する特徴である。

しかし今の彼女の目は違う。違う色になっているとかではなく、よりいっそう赤く、まるで血みどろのように紅かった。

「デカブツ、鬼丸に会ったらよろしくな!!」  
「な、何を？」

幽鬼は軽々しく金太郎を持ち上げると、ニヤツと笑った。

「吹っ飛べ！」

「ってっわあああああ!？」

常人ではありえない怪力、それを用以て金太郎を投げ飛ばす。しかしスピードが半端ではない。すぐに闇夜に消えていき、まさにお星様となった。

幽鬼はけだるそうに首を回した。

「……ふう、疲れた」

「お疲れだね、幽鬼。久しぶりに見たよ、君の力を」

「まあ、使う機会もなかったしね……。ああ、腹減った！  
栄鬼、何かおごって！」

幽鬼は手首をコキコキ鳴らしながら祭りのほうへ歩いていった。  
……。さて、うら若き男女がキスをした後にそのまま平然としていられるだろうか？ 栄鬼はポツリと呟いた。

「生殺しだね……」

「何をやってるんだ、栄鬼？早く、早く！」  
「はいはい……………」

「いたた…………。かぐや、大丈夫ですか？」

鬼丸は頭をさする。ぶつかる瞬間にどこかのアクション映画のように陸に飛び移ったのだが、痛いものは痛い。とはいえ、あのまま船の上にといたらそれこそただでは済まなかったのだが。

かぐやは鬼丸の腕の中で無事である。それでもかぐやの表情は変わることなく、無表情である。

「かぐや、立てますか？」  
「……………」

かぐやは無言で、一人で立ち上がる。鬼丸はフツと笑いかけるとかぐやの手を引いた。

「では、行きましようか。まだキンタが頑張ってくれているはずですよ」

「……………もう諦めましようよ」  
「えっ!?!」

鬼丸とかぐやの手が離れる。かぐやがその場に踏みとどまり、鬼丸の手を払ったからだ。

鬼丸はその手の距離が遙か彼方のように思われた。

「鬼丸さん。もう諦めましょう。今まで言っていないかもしれませんが彼からは逃げることはできない。どこまで行こうと彼の目からは逃れませんかよ」

「へえ……何かあるんですか、彼の目には？」

かぐやは重々しく口を開いた。

「其の紅き眼は未来を、其の蒼き眼は地上を見据える……。彼はね、あらゆる場所を見通す遠見と未来を見る先見の魔眼の持ち主なんですよ」

鬼丸は思わず感嘆の声を漏らす。

今この状況でどこでも見える眼と未来が見える眼はどれだけ有効か。言うまでもない、圧倒的に有利だ。

どこに逃げても遠見で見られ、そもそもどこに逃げるかという未来まで見られる。どこにも逃げる場所などない。

先ほどから諦める、としきりに言うかぐやの真意がようやく理解できた。

「なるほど……。それじゃあ、逃げても追いかけられますね。だったら他の鬼を巻き込んで向かい討てば良かったんですね。なるほど、なるほど……」

「聡明な貴方なら分かるでしょう。これ以上逃げても無駄というところが。だから早く諦めて」

「でも諦めませんよ」

かぐやの表情が悲しみから怒りへと変わっていく。何故こうもかたくなに諦めないのか、かぐやには理解できなかった。

「……何故です。何故なんですか？」

「……」

「今から夜明けまではまだまだ時間はあります。これ以上逃げるというのならはその時間は永遠のように感じるでしょう」

「かぐやと永遠に一緒にいられるのなら本望です」

「それにカナモリに追い詰められたらどうするのですか？あの人は見た目以上に冷酷、間違いなく殺されますよ」

「愛する人のために死ぬるなんてカッコいいじゃないですか」

「私は死ぬところなど見たくありません」

「心配してくれるのですか？嬉しいですね」

「鬼丸さん！」

かぐやがついに怒りを顕にする。こんなに悪気もなく言われると怒りを通り越して呆れに変わる。

しかしそんなことに流されてはいけない。かぐやは鬼丸を責めたてた。

「いい加減にしてください！私は真面目に話しているんですよ」

「……」

鬼丸は黙っていてかぐやを見ている。そして大きいため息をつき話し出そうとした時、不意に誰かの気配を感じた。

「むっ？誰です？」

もしやカナモリが、そんな嫌な予感が脳裏をよぎる。流石にここで追いつかれたら逃げ切ることはいかない。

瞬時にデザートイーグルを取り出そうとした鬼丸だが、それは杞憂に終わった。

「あら、鬼丸さん。こんばんは」  
「……………も、桃太郎!？」

岩陰から現れたのは黒髪長身の女、桃太郎であった。かつての宿敵の突然の登場に、目玉が飛び出すほど驚くが、どうも殺気は感じられない。

鬼丸はデザートイーグルを一旦懐にしまった。

「あら、桃太郎とは誰のことですか？私の名前は桃原キヨウですよ。忘れてしまわれましたか？」

「ああ、そうだった。今は桃原キヨウでしたね。……………やあ、桃原さん。こんな時間になんでこんなところに？」

今の彼女は記憶を失い、桃原キヨウとして生きている。気をつけなければ忘れてしまう。うっかり記憶を取り戻したら厄介なこととなる。

彼女はそんなことも気にしないように、以前の桃太郎とは思えない柔らかい口調で答えた。

「私はいつもこの辺りをこの時間に散歩しています、あの島を眺めているのですよ」

「へえ……………そうですか……………」

「ええ。何故かあの島を見ると懐かしい気分になるんですよ。今日のはあの島は賑やかですね。お祭りでもやっているのでしょうか？」

「そうじゃないですかね……………」

今ここから鬼ヶ島を見れば、大きな火柱が天に向かっていている。今まさに最高潮の盛り上がりを見せているときであろう。

しかし今はそんなことはどうでもいい。適当に話を区切りをつけようとしたそのとき、ある天人の登場で強制的に幕切れた。

「カナモリ！」

「ようやく追いついたぞ、地上の鬼よ。さあ、かぐや様を返したまえ」

「あらあら、人が飛んでいらっしやる」

カナモリは地上を見下ろす。数は姫を合わせて3人、さっき見たときは2人だったはずだ。

その状況を見て、愚痴をこぼすかのように呟いた。

「……また、増えたか」

「いえ、コレは私にとっても想定外でありまして……」

「こんばんは、見知らぬ誰かさん。私の名前は桃原キヨウ。貴方の名前は？」

「……カナモリだ」

……この黒髪女性と話をしていると、その雰囲気呑まれる。ほんわかとした空気が自分を強制させる。

カナモリは何とか自分のペースを取り戻すかのように、声を張った。

「と、とにかくかぐや様を返してもらっぞ、鬼丸童子」

「はっ！今易々と手放すようならば鬼ヶ島からわざわざ逃げてきたりしないですよ。貴方こそ諦めたらどうですか？」

「鬼丸童子？……鬼ヶ島？……いたっ、頭が！……」

桃太郎は頭を抱える。しかし3人はそのことに気が付かない。

「かぐや様から聞いておられるだろう、私の魔眼のことを。もうこれ以上逃げても無駄だぞ。いかなる手を使おうともな」

「分かりませんよ。私のデザートイーグルにはまだまだ弾は残っていますから。弾切れまで私は諦めませんよ。あっ、私の弾切れしないんですけどね」

「無駄なことを……………」

「デザート…………イーグル?…………う、うわああああ!頭がああああ!」

桃太郎が頭を抱える。キョウの脳裏に様々な光景が駆け巡る。しかし、それが何かは分からない。その分からないイライラが彼女に積もっていく。

分からないのなら壊してしまえばいい!

その瞬間、浜辺の砂が舞い上がった。

「……………な、何が起こった?……………」

「まさか……………」

「うふふ…………ふっはっはっは!あっはっはっはっはっはっは!」

桃原キョウは笑い出す。いや、もはや彼女は別人か。それとも元に戻ったというべきか。

どちらにせよ、鬼丸にとっても、カナモリにとっても最悪の展開であった。

「思い出したぞおおおお!アタシは、桃太郎だああああ!」



## 第二章・第八話：最狂、再臨（前書き）

最初の部分は桃太郎の一人称視点となります。  
少し読みづらいとは思いますが、ご容赦ください。

## 第二章・第八話：最狂、再臨

「うふふ……」

滅びなさい、最狂……

「ふっはっはっはっは！……」

オメエみたいなヤツには分からんだろうよ！仲間をどうでもいいと思っっているようなヤツにはな！

「あっはっはっはっはっは！……」

精々ががんばっていくのじゃよ、鬼退治。

お前の名前は、今日から桃太郎じゃ

「思い出したぞおおおお！アタシは、桃太郎だああああ！」

ふう、アタシはようやくイライラから解放された……。思い出さないイライラがこんなに辛いものだとは知らなかった。

まあ、いいさ。解放された喜びのあまり、浜辺にクレーターを作ってしまったがそんなことは神様が許してくれるだろう。

「な、何が起こった！？いや、奴は何者なのだ!？」

「……桃原キヨウ、またの名を桃太郎。この国の英雄にして、破壊快楽者。そして最狂ですよ」

……目の前にあるモノは3個。見知った顔と見たような顔と見知らぬ顔。見知った顔の奴は一回殺りあったことあるし、アタ

シは女を壊すのは趣味じゃねえ。  
だとしたら……壊すのは、見知らぬ顔かな。  
というかコイツ……眼が赤と青、髪が金髪だと信号みたいに見えるな。

「桃花！」

どこから知らんがアタシがこう呼べば、コイツは確実に来る。最強からの置き土産、コイツに触れるのは何ヶ月ぶりだあ？

他の日本刀とは一線を画す黒く長い刀身、その黒は夜のように暗く見るもの全てを取り込む……。まさに名刀、いや妖刀だな、こりゃ。

アタシはコイツを手にした瞬間、駆け出していた。

「ぶっ潰れる！信号野郎！」  
「な」

アタシは信号野郎の真後ろにいた。右蹴りつつうオマケつきで。信号野郎はそれを、頭を引っ込めてかわす。

へえ……いい反射神経だ。だったら次の手は……左拳かな。

「甘い！」  
「……アア!？」

その時、信号野郎はおかしな行動を取りやがった。アタシが殴る前に回避行動を取り、さらに片手剣で反撃。普通ならありえない行動だ。

……なんかあるな、コイツ。

「今度はこつちの番だぞ、桃原キヨウ！」  
「今考え中だ、ボケ！」

当然、その声で信号野郎は止まるはずもなく片手剣を振り回す。  
「……おかしい、アタシが逃げようと思ったところに剣が振り下ろされる。アタシの行動が読まれてる？いや……未来が見えているのか？」

「まあ、どつちでも変わんねえよな！」  
「な、何！？」

何をそんなに驚いているんだ？ただ剣を素手で受け止めただけなのに。血がだらだらと止まらないがそんなことは関係ない。今はただ蹴り殺すだけ。

「砕け散るや！」  
「ぐっ！」

ボディへの一撃、いくらガードしようとするこの距離のヒザ打ちならダメージは残る。  
もちろんアタシのほうもノーガードだが問題ない。アタシの力はあらゆる力を凌駕するから。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

ただひたすらアタシは奴を殴る殴る殴る殴る。  
信号野郎は何とかかわそうとする、その心意気やよし。だが残念ながら全発当たっているんだな、コレが。

「……えっ！？剣を使ってないって？仕方ねえな、使ってやるよ！」

「死ぬ、オラ！」

「マズ」

信号野郎は片手剣を手放してアタシの桃花をかわす。

ほお、やるじゃねえか。でも、まだまだアタシの攻撃は続くぜ。

「かぐや、行きましようか……」

「……ええ」

見知った顔たちはどこかに行つちまう。だが、そんなもん関係ねえ。どうせ全員ぶつ潰すんだからよ。

「アツハツハツハツハ！」

「……ここまで来れば桃太郎からは逃げれたでしょう。あのままいたら間違いなく殺される……」

「確かに……私はまだ死にたくありません」

死ぬはずのないかぐやがそんなことを言う。桃太郎と対峙した時に感じたのは圧倒的威圧感と恐怖、鬼丸に言われなくとも自然と足は動いていただろう。

現在二人がいるのは長閑の入り口、三方を海に囲まれているこの都市の唯一陸地に面している部分である。

鬼丸たちが鬼ヶ島に向かうときに通過した場所であり、かぐやが一時身を寄せていた竹林が見えた。

「竹取の翁……」

かぐやはポツリとおじいさんの名前を漏らす。

そういえばあの老人も自分を逃がすために一役買ってくれた。今までは深く考えたことなかったが、あの老人は何を思っただけで自分を逃がしてくれただろうか。

「会いたいですか？」

「なっ……そ、そんなわけないでしょう。今さら懐古の情を引き起こしても無駄ですから」

「ふん……」

鬼丸はニヤニヤと笑いながらこちらを見てくる。こちらのことを見透かされているようで気味が悪かった。

「……その目は何だか不愉快です」

「コレは失礼、かぐや。ところで、先ほどまた貴方は無駄と言いましたね。本当に今でもそう思っていますか？」

「……思っていますよ」

かぐやは少し間をおいて答える。若干目をそらしたのを鬼丸は見逃さなかった。

「私はね、今までのことが無駄と思ったことはありませんよ」

「……嘘だ」

「本当ですって。信じてくださいよ」

家具屋が疑いの眼差しを向ける。そんな人生を送っている者などいるはずもない。

そんな目をかいくぐりながら鬼丸は話を続ける。

「この世に無駄なことなどない……。鬼ヶ島から逃げてきたのは他の鬼を巻き込まないようにするため、金太郎に足止めしてもらったのは時間を稼いでもらうため。今ここに来たのは、あのまま浜辺にいたら飛ぶことのできるカナモリに圧倒的に不利でしょう」  
空中を飛べるカナモリと地上を走る鬼丸とでは圧倒的差がある。砂に足を取られ、移動すらままならないだろう。  
しかしそういう問題以前にカナモリには勝てないのだ。かぐやは鬼丸に反発した。

「しかし、そんなもの、私が月に帰ってしまったら無駄になりますよ」  
「だから貴方は帰らせません。絶対に」

鬼丸はかぐやの目を見る。明確な意思をもって。  
こういう目で見られるとかぐやは弱い。反論することができなかった。

「かぐやは今の今までの旅、全てが無駄だと思いますか？」  
「。。。。。」

「私はそうは思わない。キンタやウラシマや、もちろん貴方に出会うことのきっかけになったこの旅を無駄なんて絶対に思わない」

かぐやは黙っている。

「だいたい結果を求めるなんて不毛だと思いませんか？今の一瞬を生きる、それこそが」

「でもいざその未来は来てしまうのですよ」

突然、かぐやが鬼丸の言葉を遮る。鬼丸はかぐやの表情を見た。

今にも泣きそうだった。

「千年や、万年、貴方たちにとっては長い時間かもしれませんが、私にとって見ればただの時間でしかない。いくら鬼だとはいえ、私と永遠に生きることなど出来るはずもない。貴方は“残していく者”だからそんな悠長なことが言えるのですよ！」

「……………」

「“残される”私はどうなるのですか！？貴方が死んでもなお生きるというのですか！？そんなことになるのなら、今ばつさりと縁を切ってしまったほうがいいです！」

今度は鬼丸が黙る番。反論すら許されないかぐやの本当の感情の吐露であった。

それでも鬼丸は負けなかった。いや、負けなくなかった。

「それでも私はかぐやに側にいて欲しいです」

「……………それは鬼丸さんの我侭です」

「ええ、そうですね。私は我侭です。だから私の欲しいものは必ず、何をしてもしも手に入れます」

突然、鬼丸がかぐやに駆け寄る。

おそらく抱きあげるつもりだったのだろう。しかし鬼丸の身長は女性の平均身長に劣る。かぐやを抱き上げるといふより抱きつくといふ結果に終わった。

「……………何をしていますのですか？」

「今、自分の身長が恨めしい……………」



こつそり後で金太郎に八つ当たりしようと思ったのは内緒である。

「じよ、冗談はさておき、かぐや。もし今別れてしまったら、貴方は絶望の気持ちにさらされますよ。早いか遅いかの問題、それならば私が死ぬまで楽しんでほうが得でしょう」

「……で、でも鬼丸さんが死んでも生きれるほど私は強くありませんよ……」

「待っていてください」

鬼丸がかぐやに見上げる。鬼丸の感情だつて嘘偽りもない、本当のモノだ。

「私が死んだら、また必ず貴方のもとに返り咲きます。何度も、何度でも……。どんな姿になろうとも必ず帰ってきます。そしてこの世界が終わるときを貴方と一緒に見ましょう」

「……鬼丸さん」

「好きです、かぐや！」

二人の顔が互いに紅潮する。そして二人の影が次第に近づき、ついに重なり合おうとしたその瞬間……天から金色の光が舞い降りた。

「……こういうときくらい空気読みましょうよ、カナモリ」

「地上の鬼……貴様、かぐや様に何ということ……」

カナモリの青筋がピクピク震えている。鬼丸が何か言おうとしたそのとき、どこかで破壊音と怒声が響き渡った。

「オラアアアア！信号野郎、出てこいや！」

「……まだ桃太郎は倒せてない様子で」

「ぐっ！……」

カナモリが苦虫を噛み潰したような表情になる。天人が地上に負けるなど一生の恥、それを隠すかのようにいつものセリフを叫んだ。

「か、かぐや様は返してもらどうぞ」

「そのセリフも聞き飽きましたね。いいでしょう、相手して差し上げますよ。天人風情が」

「寢言は寝て言え、鬼風情が」

二人の間に火花が見える。一触即発の雰囲気であったが、不意に鬼丸がニヤツと笑ったことでそれは破られた。

「って言っているうちに準備は済んだのですけどね」

「む？……なっ！貴様！」

気が付くのが遅すぎる……。

鬼丸の後ろに7色の魔方陣が描かれると、銃口をカナモリに向け引き金を引いた。

「我に宿りしは属、全門開放！放て！」

## 第二章・第九話：だって私はお姫様

七色の魔法、すなわち火、水、風、土、光、闇、そして滅の力がカナモリに襲い掛かった。凄まじい轟音と爆風が辺りに拡散し、もしコレが長閑に向けて撃たれたのならは大災害になっていただろう。当然、鬼丸もそれを放って平然としていられるはずもなく、地面にヒザをついた。

「鬼丸さん！」

すぐにかぐやが鬼丸に駆け寄る。

額には滝のような汗、顔面は蒼白。しかし彼は確実に笑っていた。

「未来が見える……。それは戦いにおいて確実に有利。敵の行動が分かり敵の攻撃が読める。単発の攻撃では当てることはほぼ不可能。しかし全体に攻撃を放てばどうでしょうか。いくら攻撃が分かって、それをかわすことは……。できない……。」「いいから喋らないで！今は休まないと。。。」

かぐやの脳裏に最悪の光景がよぎる。もしコレのせいで鬼丸が死んでしまったら……。もしそうになったら生きていても意味がない。

その心配は杞憂に終わった。だがその代わりにその嫌な予感別の方向へ向かっていたことを知ることになった。

「マジですか。。。」

「確かに貴公の言うとおりだ。私がかわすことは出来ない。しかし残念ながら私は何も出来ない木偶の坊ではない」

差し出されたカナモリの腕の前には青い魔方陣が描かれている。青色ということは水属性の、しかも防御結界であろう。鬼丸はカナモリのやったことを理解した故に、ため息をついた。

「なるほど、火の魔力を水で打ち消しましたか。派手な魔力を使っただけが間違いでしたね……。困りました、もう打つ手がありません」

属性には優劣がある。炎は水で打ち消されるし、風は炎を強める。カナモリは水の防御結界によって炎の部分を打ち消し、事なきを得た。

鬼丸の魔力はほぼゼロ、自分はまだ魔眼を持っている。圧倒的にカナモリのほうが有利にも関わらず、彼の表情は堅いものだった。

「しかし諦めないのだろうか？」

「ええ、もちろん」

当然のような反応。カナモリの口端は自然と釣りあがっていた。

「かぐやは私にとって必要な人。そうそう簡単に諦めるわけじゃないですよ」

「……………かぐやは我々にとっても必要なのだ」

カナモリはゆつくりと語りだす。

「かぐやは月の姫。……………しかし単なる政治のお飾りなのではない。かぐやは天命を持っておられる」

「天命？」

「そうだ。かぐや様の天命は我らが主、ツクヨミ様と共に貴様ら地上の民を見張ること。それはとある神によって命じられた天命であ

り、かぐや様はそのために永久の命を与えられたのだ」

カナモリの声が次第に強みを増していく。右手に持っている片手剣をより一層強く握り締め、手の血管は今にも破裂しそうだ。しかしそんなこともかまわずに彼は話し続けた。

「これ以上この穢れた地にいるわけにはいかない。今すぐに連れ帰り、その天命を全う」

「　　そんなのかぐやじゃない！」

鬼丸がカナモリの言葉を遮る。彼の眼光は様々な感情が孕みながら、カナモリをとらえ続けていた。

「　　……天命？永久？そんなものはかぐやの人生には関係のない！かぐやはかぐやだ！かぐやの事は彼女が決めることだ。貴方たちの道具のようものではない！」

「道具、だと？……」

「そうだ。貴方たちはかぐやの笑顔を見たことはあるか？怒った顔は見たことはあるか？道具なんかじゃない、かぐやは生きています。そんなことも分からない貴方たちには絶対に渡したりはしない！」

「かぐや様は我らの姫だ。重要な役割を持った大切な姫だ」

「かぐやは私の嫁です。私たちの仲間だ」

二人は対峙する。その均衡を破るかのように月の姫は歩き出した。

「違います。私は他の誰でもない私です」

「！？」

「そうですね。鬼丸さんの言うとおりです。私のことは私が決める……当然ですよ。だって私はお姫様なのですから」

かぐやはけだるそうに首を回す。何かから開放されたように、彼女の表情は生き生きと、鬼丸の知っているモノに変わっていた。

「だいたい永遠に月で見張ってるって、貴方たちは私を何と思っているのですか？今ここではつきり言いましょう。私はここに残りません。私の自由は私が勝ち取ります」

「かぐや様……」

「鬼丸さん、いや鬼丸童子。私が私であるために、力を貸しなさい！」

鬼丸は彼女の言葉を聞くや否や、地にヒザをついた。

「喜んで、我らが姫のためならば」

先ほどまでの冷静さを装っていた表情はどこへやら、カナモリの表情は怒りに包まれていった。

「地上の鬼……姫をたぶらかしたこの罪は重いぞ！」

「カナモリ、私が許可したことです。貴方が口出できる問題ではありません。もし私に逆らうのなら……覚悟はできていますね」

「くっ！……」

姫の言うことには逆らうことはできない。しかしここで諦めては天人の名が廃る。諦めるつもりは毛頭なかった。

「鬼丸童子、貴様だけでも」

「月光・七夜」

一筋の光がカナモリの頬をかすめ、血が垂れる。

かぐやの教育係であったカナモリはもちろんこの攻撃が何かを知っている。振り向くと、かぐやが蓬萊の玉の枝をこちらに向けている姿があった。

「いきますよ、鬼丸さん」

「はい、かぐや」

かぐやの声と共に二人は駆け出す。かぐやは蓬萊の枝を、鬼丸はデザートイーグルを持って。

鬼丸が高速で術を唱えると、先ほどの七色の魔方陣が描かれた。

「全門開放、放てええええ！」

「七夜、穿て！」

七色の光の閃光と、七色の玉、それら全てがカナモリに襲い掛かる。もちろんカナモリには未来が見えている。しかしその見える光景には依然として光の弾幕に覆いつくされている。かわす余地もない。カナモリは疑問を口にした。

「貴様、どこからそんな力が？……」

「愛故に」

「……こんな馬鹿な答えでも現実には現実。何か対策をとらねばならない。」

「未来が見えるのに追いつかん。青の防御円、我をまも」

「させるかあああ！ 1st Drive Create！」

何かの音が空から迫ってくる。何かと上を見上げてみれば、自分の防御円が崩れていく。

カナモリの目は大きく見開かれ、開いた口は塞がらなかった。

「何、だと!？」

「坂田金太郎、再び推・参！」

金太郎は多少よろけながらも着地し、ポーズを取る。ふざけている、そう思ったが今の彼の目は先ほどとは違う、本気マジの目をしていて。カナモリは納得することはできなかった。確かに、雷属性ならば青の防御円を簡単に打ち消せられるだろう。しかし奴は鬼ヶ島にいるはずだ。何故、ここにいるのか？

その答えを導きだせることもないまま、三人は

「キンタさん、鬼丸さん、終わらせましょうか」

「おう！」

「分かりました」

三人はそれぞれの武器をとって、構える。おそらく彼らの必殺の一撃だろう。そんなことは火の目を見るほど明らか。

そんなことよりカナモリの脳裏に映っている映像は………自分の敗北。

「馬鹿な……」

「我に宿りしは滅……」

「雷鳴……」

「月光……」

かぐやは上空に、鬼丸は右に、金太郎は左に。カナモリの視界の隅にはそう見える。

もしかしたら違うのかも知れない。しかし今はそんなことどうでもいい。かすかな嗚咽を漏らしている彼に、三人の光が襲い掛かった。



「放てええええ！」

「怒涛おおおお！」

「陽炎！」

第二章・第十話：夜明け（前書き）

突然ですが皆さんは40キロを歩いたことはあるでしょうか？

## 第二章・第十話：夜明け

渡さん、渡さんぞ……

貴様ら穢れた地上の民に、絶対に姫は渡さん……

私は姫が幼少のころから、否、生まれる前から姫と共にあった。

姫が笑い、泣き、怒り、どんなときでも姫と共にあった。

そんな姫がこの月から追放されたときは、目の前が真っ暗となった。

あの時、自分があんなことをしなければ……

後悔しても遅かった。

しかし姫の罪が許され、迎いの使者が派遣されると決まったときには踊りだしそうなくらいであった。やはり姫は月の人。月にいるべきなのだ。

しかしどうだ、今の有様は？ 姫はここに残ると言い張り、あまつさえ私に攻撃を仕掛けてきた。絶望と虚無が私を襲った。

しかしだ、もう一度言おう。姫は渡さん。

間違っているのは姫で、それを正すのは私だ。今ならまだ間に合う、まだ……今なら……

渡さん。姫は絶対に渡さんぞ……

「やった、か？……」

金太郎は息を整えるために、大きく息を吐き出す。まだ敵がどう出るか、分からない。鬼丸もかぐやもまだ警戒を解いてはいなかった。

そのお陰か、はたまたそのせいかわからないがカナモリの行動をすぐに視認することができた。

「くっ……うおお……」

カナモリの体はすでにボロボロ。自慢のスーツは肩やヒザなどに大きな傷をつけられ、本人の肩からも血が噴き出ている。

それでもなお立ち上がるカナモリ。彼は呪詛のように一つの言葉を唱え続けていた。

「渡さん……姫は渡さんぞ、絶対に……」

「カナモリ……」

かぐやが哀れみとも同情ともとれる目でカナモリを見つめる。

自分の教育係であつた彼は常に冷静沈着。どこか鬼丸と似ている部分もあつたかも知れない。

そんな彼のこんな姿は見たくなかつた。こんなに一つのモノに執着する彼の姿など。

それは自分も同じ、か。

「カナモリ、貴方の負けです。じきに夜も明ける……もう諦めて自分のいるべき場所へと帰りなさい」

「……私のいるべき場所は姫のいる場所だ。姫のお陰で今の私はある。姫がいなければ私は存在しなかった！」

カナモリは肩で息をしながら声を荒げる。理性など感じられない、感情剥き出しの声だった。

「姫と出会い1千年……私はいつも姫と共にあった。鬼丸童子、貴様は姫が必要とிட்டな。残念だが我々、否、私にとっても必要な存在なのだ。姫の間違ひは私が正す。姫がここに残るといふのならば、私が正さなければならぬのだ！」

そうカナモリが叫んだ瞬間、七つの光が彼の周りに現れる。どこか見たことのあるその光の存在に一同は驚愕した。

「コレは……月光？」

「そんな！蓬萊の玉の枝は私が持っています。カナモリが使えるわけが……」

「……魔眼？」

鬼丸が呟くと、カナモリの口端がニヤツと歪んだ。

「そうだ！よく分かったな、鬼丸童子！私には遠見と予見とそしてもう一つ、幻視の魔眼というのがある！この眼はありとあらゆるものの複製を映し出せる。火鼠の裘！」

「うお！？」

カナモリが朱色の布を振ると、三人の周りを業火が囲む。突然の出来事にまったく反応できなかった。

たったあの一枚の布切れにどれだけの魔力が内包されているのか、鬼丸には想像もつかない。偽物とはいえコレが宝具というものの力か……。

「かつてかぐや様に言い寄った愚か者共は、我々が作った五つの難題によって退いた。貴様にこの五つの難題が解けるかな？」

「……私ですか!？」

「ゆくぞ、火鼠の裘!」

標的が自分であることによろやく気が付いた鬼丸。しかしそれではすでに遅かった。炎で囲まれている範囲が徐々に狭まっていく。

「竜の首の珠!」

真珠のような形の深い藍色の宝具、竜の首の珠。その力は怒涛の水があらゆるものを押し流す。

鬼丸は炎と水の合間を縫って、それをかわすと目の前にはカナモリの姿があった。

「仏の御石の鉢!」

どこぞの高僧が悟りを開いたときに完成されたという宝具、仏の御石の石。その力は大地をかち割りあらゆるものを飲み込む。

飛んでかわそうとしたときには、カナモリの表情が笑っていることに気づいても遅かった。

「燕の子安貝!」

緑色に輝く貝殻の宝具、燕の子安貝。風の魔力を内包するその宝具

はあらゆるものを吹き飛ばす突風を生み出す。  
空中にいる鬼丸にかわす術などない。吹き飛ばされること覚悟で体を丸めるが、すぐ近くにカナモリが迫ってきていることは分からなかった。

「やばい……」

「終わりだ、鬼丸童子！蓬萊の玉の枝！」

「鬼丸さん！」

「かぐや！」

かぐやの宝具、蓬萊の玉の枝。その枝についた珠たちは光を集め、それを操る。

カナモリの手が光り輝き、鬼丸に向ける。かぐやと金太郎は駆け寄るが間に合わない。

鬼丸は諦め目を瞑ると、どこからともなく声が聞こえた。

「カナモリ、貴方には失望しましたよ」

「っ！？その声は！？」

その声と共に強大な光が辺りを包み込む。

それが消えると、カナモリの光も消えており代わりに一人の女性が立っている。穏やかな目、絹のような白い肌、そして少し金髪が混じっている艶のある黒髪を腰まで伸ばしている。

そして何故かかぐやとカナモリはヒザをついていた。

「……誰？」

「キンタの馬鹿！かぐややカナモリが頭を下げる相手といえれば一人しかしないでしょう！」

「……話が見えん」

「はじめまして、金髪君。私の名前は“ツクヨミ”です。気軽にツ

「つちゃんとも呼んでくださいな」

金太郎の表情が固まる。いくら彼でも、いやこの国の人間なら誰でもその名前は知っている。

月詠尊ツクヨミノミコト。この国の三貴神が一柱にして月の神。人間とは程遠いその存在が自分の目の前にいた。

私のことは姫様とお呼びなさい！

今度は本当に気軽に言えそうもない。

「ツクヨミ様！このような者共に」

「黙ってね、カナモリ」

ツクヨミが微笑みながらカナモリを諭す。カナモリの顔は真っ青になっていた。

「おお！すげえな！あのカナモリが黙っているぞ」

「キンタ、それぐらいにしないと大変な目に遭いますよ。ツクヨミ様は月の王であり神。今ここに現れてなさっているだけでも大変光栄なのですから」

いつの間にか鬼丸も地面にヒザをついていることに気が付き、慌てて金太郎もそれ従った。

人間が太陽を信仰するように、魔は自分たちの力の源である月を信仰する。故に太陽神よりも月神を信仰する魔は多い。

鬼丸もその例に漏れずに月の信仰者であった。

「あらいやだ。そんなに畏まらなくてもいいのに」

「いえいえ、そんなわけにはいきません。ツクヨミ様は我ら魔にとつて主神同然。崇めないわけにはいきません」



「うふふ。いい子ね」

ツクヨミが鬼丸の頭を撫でる。ツクヨミの見えないところでかぐやが鬼丸を睨みつけていたのは内緒である。

その後、穏やかな表情から一転、ツクヨミはカナモリを睨み付けた。感情を感じられない冷たい目で。

「カナモリ、貴方には失望しましたよ。かぐやに当たったならばどうするつもりでしたか？・・・帰ったらお仕置きですね」

「・・・はい」

どんな理由があろうと、彼女の言うことは絶対。カナモリには頷くことしかできなかった。

ツクヨミは、今度はかぐやを見た。我が子を愛でるような目で。

「かぐや・・・。貴方は、本当にここに残りたいですか？」

「・・・はい」

「どうしても？」

「私はここに残ります。私はここに残って、この人たちと共に生きます。たとえその先に絶望が待っていようとも、気が遠くなるほどの孤独が待っていようとも、私は彼らと生きますよ」

かぐやは意志の強い目でそれに答える。迷いなど一切感じられないその透き通った目。

ツクヨミは少し微笑むとかぐやの頭を撫でた。

「・・・結構。それではカナモリ、帰りましょうか」

「はい」

じき夜も明ける。

ツクヨミとカナモリはゆっくりと天に昇っていった。不意にツクヨミが何かを思い出したかのように口を開いた。

「あっ！かぐや。たまには月に帰ってきてくださいね。お喋りをする相手がいなくて最近つまらないんです。もちろん、彼らも一緒にね」

「……はい！ツクヨミ様！」

彼らは一瞬にして消えた。

永い夜の物語の幕切れはあつけないもの。鬼丸は小さくため息をついた。

「さて、私たちも帰りましょうか。私たちの帰るべき場所に」

「ええ〜！俺来たばかりなのにか？ちよっと休もう……ぜ？」

どこかから音が聞こえる。誰かの叫び声と何かの破壊音が。

振り返りたくないが振り返らなければならぬ。ゆっくりと振り返ると、予想通りの人間がこちらに向かってきていた。

「オラアアアア！鬼っ子！勝負しやがれ！」

「やっぱり帰ろう。今すぐ帰ろうか」

「分かりました。月光・新月」

「あっ！待ちやがれ！」

桃太郎は手を伸ばすが月食のスピードのは間に合わない。彼女がそこについたときはすでに鬼丸たちは消えていた。

「ちっ！消えやがったか……」

「おや、キヨウ。こんなところで何しているんだい？」

「……爺さんか」

記憶を取り戻した後もこの人間は覚えている。自分を介抱してくれ、面倒も見てくれた。最近は早朝にジョギングしていると話してくれたことも覚えていてる。だがそれも今日で終わりしなければならぬ。

「ん？ 雰囲気変わったね」

「ああ……あたしゃ、記憶を取り戻したんだ。元はこんな女だよ」

「へえ。そーなのか」

桃太郎は空を見上げた。雲一つない、夜明け前の空。旅を始めるにはもってこいだ。

「爺さん、世話になったな。アタシはここにはいられない。じゃあ、達者でな」

「おや？ どうしてここにいられないんだい？」

「そりゃ……アタシは記憶を取り戻した。だから私はここにいられない。爺さんも聞いたことあるだろ、最狂の桃太郎って。アタシにも迷惑かかるし、アタシは消えたほうがいいんだ」

最狂、どれだけ物を壊そうが満たされない欲求の持ち主。いつ道を誤ってその欲求が現れるかどうか分からないし、そうなれば爺さんも危ない。

甘味処という創造の場に自分のような人間は必要ない。

桃太郎がこの場から去ろうとしたとき、呼び止める声彼女に届いた。

「そんな悲しいこと言わないでくれよ、キョウ。お前はもはやワ

シの娘同然。それが最狂や最強とはいえども変わらないことさ」

爺さんの真剣な眼差し、どこか見覚えのあるその目から桃太郎は目をそらすことができなかった。

「お前が物を壊したいのなら、ワシはその倍の物を作ろう。そしてお前に破壊以外のものを教えてやるうじゃないか」

「爺さん……」

「さあ、帰ろうじゃないか、キョウ」

桃太郎に手が差し伸べられる。

そういえば手を差し伸べられるなど何年ぶりだろうか。始めはその意味が分からなかったが、ようやくその意味が分かり嬉しくなった。

「ああ！帰ろうか、爺さん！」

差し出された手を壊さないようにそっと握り返す。そして手をつないだまま彼らは自分の家へと帰っていった。

最狂、桃太郎はこの日、桃原キョウとしての創造の旅の一步を踏み出した。

「ツクヨミ様……私は間違っていたのでしょうか？」

カナモリが不意に口を開く。この坊やはまだ分かっていないのか……

ツクヨミは苦笑いを浮かべた。

「カナモリ、貴方は間違つてなどいませんよ。だから私はこれまで貴方にかくやを任せてきたのです」

「では何故!? 何故かくや様はこのような無駄なことをなさるのですか!? かくや様は月の姫。こんなところにいるべきじゃないのに……」

彼の言っていることは尤もだ。

「確かに。私たちのような永遠の存在にとって見れば今彼女がしていることは無駄でしょうね」

「……」

「しかし、彼女は私たちが無駄とと思っていることの中に、何かを見つけたのでしょうか」

「それは、何でしょうか?」

全てを見通す月の神、ツクヨミならばそれも分かるだろう。しかし返ってきた答えは求めるそれとは正反対のものであった。

「さあ?」

「ツクヨミ様!? 貴方は全てを見通せるでしょう! 何故分からないのですか!?!」

「まあまあ。いいじゃないですか。とにかく彼女がこの道を選ぶと言ったのです。いつものように生意気に偉そうに我俣に……。彼女が一度決めたことを変えないことは私たちが良く知っているでしょう」

「まあ、それはそうですね……」

カナモリは妙に納得した顔になる。幼いときから彼女を見ていた彼なら分かるだろう。

「だったら私たちは諦めるほかないのですよ。彼女が永遠に彼らと生きるのならば、我々はそれを永遠に待ちましょう」

「……かしこまりました」

「うふふ、いいこ。では帰りましょうか」

カナモリの頭を撫でると彼は頬を紅潮させる。自分にとって見れば彼は息子同然。

そうしていると自然に地上にいる娘のことが思い出された。

「ふふつ……」

思わず笑い声が漏れてしまった。何故ならあんな彼女の一面を見ることはなかったからだ。

鬼丸という少年が危機にさらされている時、彼女は彼を庇うように走った。そして彼女を庇うかのように金髪の少年がさらにその先を走っていた。

そして事が終わったときの彼女の表情。とても穏やかで、美しかった。

よき仲間にも恵まれたものだ。彼らに感謝すべきかもしれない。

「ツクヨミ様。何を笑っておられるのですか？」

「いえいえ。何もですよ。さあ、お仕置きは何にしましょうね」

「うっ……」

彼らも彼らの帰るべき場所に帰っていく。そして彼らが霞のように消えたとき、永き夜ようやくも明けていた。



## 第二章・第十話：夜明け（後書き）

前書きの話ですが・・・

実は僕が通っている高校の伝統行事として男子40キロを歩いたり走ったりする行事がありまして、昨日まさにそれだったんです。

9時から始まり終わったのは2時、その後部活で帰ってきたのは7時。疲れきって

昨日更新するはずの分ができませんでした・・・すみません、言い訳ですね。自重します。

今回でかぐや編はオマケを除いて終了です。そして何とこの小説のPVが一人を超えました。本当にありがとうございます。まさかこれほどまでの人に読まれるとは思ってもみませんでした。

今後ともよろしくお願いいたします



## 閑話休題：天人騒ぎの後日談

「鬼丸、いるか？」

図書館にも鬼丸の姿はなし、か……。それどころか怪鬼さんもない。みんなどこ行ったんだ？

俺こと坂田金太郎は現在鬼丸と鬼ごっこの途中である。鬼ごっこといってもこちらが一方的に始めたことでありあいつは俺がそんなことをしていることすら知らないだろう。

要するに単に俺が鬼丸を探しているのである。

「ここもない、となると後はどこにいるんだろうか？部屋は見に行っただし、会議室も行った……。後はどこだ？」

それどころか長の6人の姿も見かけないとはどういうことだろうか？ウラシマは頼りにならないし、かぐやの姿もない。本当にみんなどこ行っただろうか？

俺がそんなふうに途方に暮れていると見知った姿を二つ見かけた。その影は床に横たわっておりまるで死人のようだ。

普段の俺ならすぐさま駆けつけるのだがその必要はない。何故ならその二人は普段床に寝るのが趣味のような鬼だからである。

「暗鬼さん、一鬼さん。そんなところに寝転がって何しているんですか？」

「き、金ちゃんか？本当に金ちゃんなんだな！？」

「き、キンタ君はまだ無事だったんだね！？」

その二人とは鬼ヶ島の六長のうち、最もバカといわれる暗鬼さんと最も臆病といわれる一鬼であった。彼らはよくバカなことをやらかし、そのたびに栄鬼さんの手によって一時的な永眠に堕ちる。今回もその類だろうな……。

それにしても何だ、その言い方は？まるで戦場にも言ってきたかのようにじゃないか。

「で、今回は何をやらかしたんですか？暗鬼さん」

「ち、違えよ！俺たちは何もやってねえ！ただ鬼丸が……」  
「鬼丸？」

鬼丸が何をしたというのだろうか、と俺は暗鬼さんに聞いたが彼はそのことについて言及しようとはしない。代わりにこんなことを言ってきた。

「このままアイツを放っておいたら島中の……いや、全世界の男が滅ぶぞ。何とかしてとめないと……」

「何言ってるんですか？……とにかくこの先に鬼丸がいるんですね。俺は鬼丸に用があるんで失礼します」

「ま、待った……この先には行ってはいけない。汚染されるよ！」

一鬼さんは普段は暗鬼さんの側にいて、特に悪ノリもしない。そんな彼までが俺を止めるなんて異常だ。

足に喰らいついて俺を止める一鬼さんを振り切って、俺はその先に進んだ。

「何だ。ここから先って鬼丸の部屋じゃないか」

俺が、鬼丸はついにかぐやを守るために全男子を滅ぼす計画を立てているとか、鬼丸と天人が手を組んだとか、そういうどうでもいい想像を膨らましていと見知った道に行き着いた。

おかしい。俺は先ほどここを通ったはずなのだが……。

と、そこには先ほどいなかった三人の姿が見えた。俺は彼女らに声をかけようとして……やめた。何故ならというと……。

「おお！」

「うふふ……」

「鬼丸くんだったら……」

三人とも不気味に笑っていたからである。いや、一人は違うが残りの二人が不気味さを十分に補っていた。というか怖すぎる。俺は勇気を振り絞って声をかけた。

「何やってんですか？チビ、妖鬼さん、怪鬼さん？」

その三人とは言うまでもなく、右から幽鬼、妖鬼、怪鬼の三人であった。

三人は俺の声に反応し、一斉にこちらを振り向いた。一種のホラーだ……。

「おお！デカブツ！久しぶりだな」

「あら、キンタさん」

「うふふ……こんには」

「こんにちは……で、三人とも部屋の前で何やってんですか？  
ってこの部屋って鬼丸の部屋！？覗いてて大丈夫なんですか？」

人の部屋を覗くのは犯罪だ。子供でも知っている常識である。

そして鬼丸の部屋を覗くことは死だ。何が飛び出るか分からない。  
鬼ヶ島の皆なら誰しも知っている暗黙の了解である。

以前鬼丸の部屋を覗いたものがいたが、その鬼は全治三ヶ月に加え  
精神錯乱に陥ったという。何をやった、鬼丸？……

「大丈夫、大丈夫。今なら」

「今なら？」

「そうそう、キンタさん。今なら鬼丸君の部屋を覗き放題、見放題。  
せっかくだから覗いておいたほうがいいわよ」

「ちよっ！押さないで！」

俺は二人に押されるままに部屋を覗いてしまった。中にはかぐやと  
鬼丸の姿が。

ん？何だ、この甘ったるい雰囲気は……。コレが暗鬼さんが  
言ってたことなのか？……

「鬼丸さん」

「何ですか、かぐや？」

「いえ、何にもです。ただ貴方の名前を呼ぶことが嬉しくて……

「かぐや……」

鬼丸とかぐやは互に見つめあう。途端に恥ずかしくなったのか、二人は顔を赤らめ互いの作業に戻る。鬼丸は本を読み、かぐやは何か手作業をしている。

アレは……編み物、か？

「鬼丸さん。コレ、もうすぐ完成しますからね」

「楽しみですよ。かぐやが作ったマフラー」

今は夏のはずなんだが……。

俺はニヤニヤしながら見ている二人に現状を聞いた。聞かざるを得なかっただろう。

「何ですか？このイチャイチャバカツプルは？」

「えっ？鬼丸君とかぐやちゃんだけど」

さも当然のように妖鬼さんは言う。

「俺の知っている鬼丸はもつと冷静で冷酷で血も涙もないような奴ですよ。そしてかぐやは超絶お姫様で我侭でどうしようもない奴です」

「キンタさんが二人をどう思っているかよく分かったわ……」

「で、貴方たちはずっと鬼丸の部屋を見ていたんですか？あれ？変ですね。俺さつきここを通ったけど誰も見ませんでしたよ」

「それはカイちゃんが人払いの结界を作ったからだって」

「うふふ……」

なんて事をしてくれるんだ……。

と、俺が今までののが徒労に終わったことを思い返していると怪鬼さんがポツリと呟いた。

「あつ、動いた……………」

『マジっ!?!』

動いたって……………鬼丸とかぐやか?

でもあの様子じゃそこまでも進展も

『おっ!キスするぞ!』

何ですとおおおおお!?

「ちよつと!俺にも見せて!」

「おい!デカブツ!見えんぞ!」

「あらあら、若いっていいわね」

勝手に言ってる!

俺が部屋の中を覗き込むと、二人の距離はほぼ零。っておい!

「デカブツって鬼丸とぐーちゃんのお父さんだったっけ?」

「さあ?」

何か幽鬼たちが喋っているが俺の耳には入ってこない。

それよりも目の前のことに集中しろ。もしもだ。もしもここで奴らがキ、キスでもしてしまったらあいっらは……………アレ?別に  
よくね?

<かぐや……………>

<鬼丸さん……………>

二人の距離はどんどん近づいていく。コレはもうとめるものなどいないだろう。余程の空気を読まない奴がない限り……

「鬼丸？いるかい？」

『ひゃい！』

……いたよ。予想外の存在が……

栄鬼さんは俺たちとは逆の方向の扉から入ってきた。おそらく仕事関連だろう。真面目な人だ。

しかしそのせいで仕事の同僚から攻められることになるとは思っても見なかっただろう。

『栄鬼！』

「うわ！？なんだ、お前たちは！？」

「せっかく鬼丸とぐーちゃんのファーストキスだったのに……栄鬼なんて嫌い！」

「ちょ！ちよつと待ってくれ、幽鬼！話が見えない」

「ふん！」

「……っっていうより貴方たち、もしや覗き見していたわけじゃないでしょうね！」

「ま、まさか……」

「待ちなさい、貴様ら！」

デザートイーグルの発砲音、それを皮切りに犯罪者の3人は部屋から飛び出してくる。その後を追うように死刑執行人は飛び出してきた。そして俺の存在に気づいた。

「キンタ！貴様もか！」

「ええ〜！？俺も！？」

・・・その後、俺は全治1ヶ月の怪我を負った。3ヶ月じゃなくて本当に良かったと思う。

「うっ・・・」

ここはどこだ？浜辺・・・ということとは長閑の浜か。運よく生き残れたようだな。

私の名前は・・・といっても皆様には分からないだろうから分かるほうで説明させていただく。  
私は犬である。

「何？分からないだと？・・・困った、私のことを一番指し示す一番の言葉なのだが・・・」

ふむ、仕方あるまい。自己紹介をさせていただこう。  
私の名前は犬。もちろんコレは本名ではないのだが、今の私にはこの名しかない。

得物は日本刀。コレは我が主を真似たものだ。  
そして我が主の名は、今は亡き桃太郎様・・・。

「オメエ、こんなところで何してんだ、犬？」

そう、桃太郎様はもういない。鬼との戦いに負けたからこそ、島を爆破したのだろう。

だからこんなふうに私に話しかけてくれることもない・・・。



つて、えっ!?

「桃太郎様?.....」

「何だ、テメエ。主のことを忘れちゃったのか?」

「桃太郎様!」

忘れもしない、その姿。女性にしては鋭い目と凜とした顔立ち。言葉遣いも相まって男と勘違いするものも少なくない。

その乱雑に切られた髪は漆黒、白い着物を好む彼女にとってその黒はいっそう際立ち、見るものを魅了する。

私の唯一の主、桃太郎様は確かにそこに立っていた。

「良かった!ご無事なんですわね、桃太郎様!どう.....されて、いましたか?」

.....はて?桃太郎様の得物は黒き日本刀、桃花とうかであったはずだ。

それが今もっているのは右手にはボウル、左手には泡だて器.....

本当に桃太郎様の身に何が起こったのだ!?

「ああ!?見りゃ分かんذار!?!菓子づくりだよ、菓子づくり。ちよつど良かった、オメエちよつと手伝え!」

「えっ!?!」

翌日

「いやあ、良かったですよ。キンタの怪我が早く治って。恐ろしい回復力ですね」

「恐ろしいのはお前だよ……」

金太郎はポツリと呟く。

この怪我をさせたのは鬼丸なのに……。そう言ってやりたがったが自分にも非があるので強くは言えない。

しかしそれでも全治一ヶ月の怪我が2週間で治ってよかった。そこだけは僥倖といえよう。

「まあまあ、そういわずに。回復祝いに今日は奢りますから」

「……前から思ってたんだけどさ、お前のお金ってどこから出てるの？」

「以前、依頼を受けたじゃないですか。それのお金が未だに残っていますよ、そこから引き出しているのですよ。キンタも使っていますよ」

以前の依頼、とは狼男退治の話だろう。金太郎はそのとき会ったヨウタのことを思い出して懐かしく思った。彼は元気にやっているだろうか？

さて金の心配はない。気を使う相手もない。となれば選択はひとつであった。

「じゃあ、今日は甘味処で食いまくるか！マスターいるか！？」

「いらつしやいませだ」

「！？」

「ご注文は何なのだ？」

「オラ、犬！テメエ客に何言っつてやがる！？」

奥からは桃太郎の怒声が響く。ついこないだ完全に復活した彼女はお菓子作りにはまったようだ。それはかぐやの話から聞いていた。

しかしこの男がいるとは聞いていない。目の前のこの男は桃太郎の手によって殺されたはずだ。  
それが自分たちの目の前で、しかも甘味処で働いている。金太郎と鬼丸はどうしようもなくこの店の将来が不安になった。

犬、復活。

**閑話休題：栄鬼童子の祭りの楽しみ方（前書き）**

これは第一章・第三十六話：逃げる？戦略的撤退ですよ、の前の話になります。覚えていらっしやらない方はもう一度確認することをお勧めします。

## 閑話休題：栄鬼童子の祭りの楽しみ方

今宵は祭り、皆後先を忘れ、呑み食い踊り、思い思いに楽しんでい  
る。こんな日に何故僕は業務外仕事をしなくちゃいけないんだろう  
か……。

「おお！栄鬼！あっちにりんご飴あるぞ！行こう！！」  
「……幽鬼、びっくりマークが多いよ」

僕の口から思わずため息が漏れる。それも全てあのバカ四人のせい  
だ。後でひどい目にあわせてやろう……幽鬼はその後だ。

こんばんは、僕の名前は栄鬼童子。この鬼ヶ島の長だ。  
本来、僕らは長であるから中央広場において祭りの進行に携わらな  
ければならない。

しかし幽鬼含め5人の長たちは愚かにも遊びに出かけてしまった……  
幸い、というか幽鬼は見つけることはできたが未だに他の4人は見  
つかっていない。それを探し出して仕事をさせなければならぬの  
だが、現在幽鬼に連れまわされこんな有様である。

本当に勘弁してくれよ……。

「というより僕たちは長なんだよ。それなのにこんなところに来て……  
もつと自覚を持ってだね」

「お〜い！栄鬼！遅いぞ〜！」  
「……」

ピョンピョン跳ねている僕の元へ仕方なく向かう。仕方ないこと……

・・・。

そう、コレはやむ終えないことなのだ。

もし僕が幽鬼をここで放してしまつたら、迷子になり泣きじゃくり、そしてこの祭り自体を破壊するに違いない。

僕は自分にそう言い聞かせると、グツと拳を作った。

「・・・何してんだ、栄鬼？」

ばつちり幽鬼に見られてしまった。

・・・少し恥ずかしい。

「と、取り敢えず幽鬼、他の4人を探そうか？」

「や！」

・・・子供か？年齢的にはすでに大人のはずなのだが・・・。  
鬼は肉体的には年をとらない。だから幽鬼がこんなに小さくても立派な大人・・・おっと、どこから視線を感じるからここでやめておこう。

さて、このまま無理に強制させれば幽鬼が暴れだすことは目に見えている。そうなつては今までの努力が水の泡だ。

僕は仕方なく最終手段を使うこととした。

「幽鬼、もし4人を見つけれたら、りんご飴買ってあげるよ」

「！」

途端幽鬼の表情が輝きだす。

彼女は単純明快、自分に不利なことは決してやらないし、自分に有利なことは必ずする。

つまり物につられやすいのだ。今こそ彼女は損得勘定で悩んでいるがコレは間違いなくつれる。

伊達に幼馴染じゃない。

「……クレープもつけて」

「いいよ。ついでに綿飴もつけようじゃないか」

最後のダメ押し。幽鬼は何も言わずに頷いた。

そして彼女はくるつと体を回し、叫びながら駆け出していった。

「よっしゃあああああああ！ヨツちゃあああああん、どこお  
おおおおお！！？？」

……この様子なら後5分で全員見つかるだろう。  
彼女の凄いところは間違いなく仕事をやりきること、他の長もそれをわかつているから抵抗はしないだろうし……。  
僕は出店のイスの背もたれに背中を預け、ようやく一息を吐いた。  
色んな意味で疲れた……。

と、僕がつかの間の休息を感じていると出店のおじさんが声をかけた。  
「きた。」

「どうした、栄鬼さん？そんなため息ついて。らしくないよ」

「うん……公私を混合せず仕事をできる彼女はすごいな、って思っ……」

「はっ？」

このまま待っていても手持ち無沙汰なので、僕は二人分のりんご飴を注文することにした。彼女と僕のために……。

事態は思ったより早く解決した。女性とは言えど軽々しく二人の鬼を持ち上げて、幽鬼が帰ってきたのだ。

相変わらずの怪力だ、と僕が捕まったバカを見ているとそのバカ共は騒ぎ出した。やかましい。

「ちよつと、栄鬼君！卑怯よ、ユウちゃんを使うなんて！」

「ふふふ……残念……」

妖鬼と怪鬼、その二人が幽鬼の手によって地面に下ろされる。まず幽鬼に報酬のりんご飴を渡すと、僕は二人に問い詰めた。

「二人とも何してたんだ？」

「私はただ道行く鬼の髪をチェックして、問題があればその場で力ツト。とてもよろこばれたわ」

「私は鬼六のところに行つて店を手伝っていたわ……今年のお店は……ふふつ、秘密……」

……まったく反省していないようである。しかも二人とも自分のやりたいことしかやっていない。少しは仕事をしてくれないだろうか？

しかし今、そんなことを嘆いても仕方がない。気を取り直して幽鬼に他のバカ二人の居場所を聞こうとした、その時だった。

「あら、一ちゃん」



「びくつ！」

その必要はなくなったようだ。頭隠して尻隠さず、自分たち長の中で最も臆病、一鬼は隠れながらこちらを見ていた。

それにしてもびくつ、つて……。行動を口にするなよ。

「隠れているつもりなら無駄だぞ、一鬼。早く出て来い」

「だ、だって、今出て行くと栄鬼君が怒るし……」

……。今、自分が喋っていることが無駄になっていることが分からないのだろうか。

しかしアイツを怖がらせてはいけない。余計面倒くさいことになる。

なるべく穏やかに、僕はそれに答えた。

「そんなことはない。早く出て来い」

「本当？」

「ああ、絶対だ」

「絶対？」

「本当だ」

「本当にホン」

「おい、あいつ連れ出して来い」

「ラジャー！」

正直鬱陶しくなってきたので最終兵器（幽鬼）を起動させる。

あっ、とか、ちよつ、とか聞こえてくるが関係ない。有無を言わず一鬼を引っ張りだした。

「一鬼、最バカはどこにいる？」

「さ、最バカつて、アイツのこと？か、彼なら僕と一緒に金魚すくいの店をやっていたよ。ただユウちゃんが探しているって聞いて、僕だけ自首しようと思って……」

「自首とか思っているのなら始めからやるな！」

「ひゃ、ひゃい！」

一鬼はすぐに涙目になる。

……いかん、こいつと話していると自分の加虐性が刺激されるし、何より周りの目が痛い。いったん冷静になることにした。

「……まあいい。それで、最バカはどこにいる？」

「う、うん。そこに……」

『近づい！？』

一鬼以外の全員が叫んだ。

まさに灯台下暗し、そういえばあの店主、どことなくあのバカに似ている気がする。

僕がその店主に近寄ると、悪気もなく話しかけてきた。

「よう、栄鬼！こんなところで何してんだ、オメエ？」

「……それはこっちのセリフだ。何をしている、暗鬼？」

鬼ヶ島最後の長にして最大の問題児、暗鬼はそこで店主をやっていた。

彼のこの表情から察して、まさかこれから怒られることになるうなど思ってもいないだろう。

「何って……金魚すくい？」

「それは分かっている。だが長であるお前がここで何をしていると聞いているんだ」



もとより期待していない僕は皆を連れて帰ろうとした。ようやく本来の業務に戻る、そう思っていた、が……

「じゃあ、私たちは金魚すくいやってようか。ちょうど紙もあるし」「しかしそれでは暗鬼の邪魔になる。だからやめといた」

「おお！やろう、やろう！」

「……………」

幽鬼の手によって僕は無理やり座らされた。

……………誰だ、そこでデレヤがって、とか言った奴。断じてデレなどいない

「それじゃあ、私からやろうかな」

「おお！がんばれ！」

まず妖鬼が金魚すくいの紙を取る。水につけ、金魚の腹の方からすくおうとするとすぐに重さに負け破れてしまった。

へたくそ……………。

「あら？」

「ふふふ……………妖鬼、それでは金魚は捕まえないの……………男と同じだね……………」

「うふふ、嫌いだよ」

妖鬼と怪鬼は互いににらみ合う。おいおい、そこらへんでやめてお

け。

怪鬼は紙を手にとると、いったん水に濡らした。このほうが紙は強くなるからだ。そして静かに紙を金魚の下に持って行った。

「金魚をすくうときはこうやって……端を使うように……」

その瞬間、金魚が突然暴れだし紙を突き破る。怪鬼はしばらくその格好のまま固まっていた。

余程悔しかったのだらう。肩をフルフルと震わせ、それを見て妖鬼は笑い声を抑えるように息を漏らす。だからやめとけて……。

「おお！私の出番だな！」

ついに幽鬼の出番か。……別に楽しみにしていたわけじゃないぞ。

紙を受け取ると幽鬼は金魚を眺める。

ターゲットはあの出目金、それ目掛けて幽鬼は乱暴に水の中に手を突っ込んだ。

「ふん！」

おおよそ女の子が出すことのない声と共に、幽鬼はすくい上げた。

……うん、確かに幽鬼はすくったよ。大量の水を。5人に水が降りかかり、大雨でも降られたかのようにびしょぬれとなる。しかも幽鬼の取った紙は柄から折れてしまった。

「折れちゃった……」

「何で棒の部分が折れるのかしら？」

「幽鬼、力任せにやってはだめだよ。もうちょっと慎重にだね」

「

「じゃあ栄鬼がやって！」

「……へっ？」

「……仕方ない、自分だけやらないというのも締りが悪い。幽鬼に頼まれたからというわけではない、断じて！  
僕が水槽の前に座ると何故か皆が集まってきた。」

「……何でみんな集まるんだい？」

「だって」

「栄鬼君が」

「金魚すくいをやることなんて」

「もう見れないかもしれないし……」

「貴様らは僕のことをなんだと思っているんだ？……  
とにかく僕は一番上手そうだった怪鬼の見よう見真似で金魚すくいを始めた。」

「狙いはあの出目金だ。」

「僕はその出目金の腹部を紙で見事にとらえた。」

「おお！」

「早くお皿を！」

「怪鬼！これからどうすればいい？」

「正直、そのときの僕は珍しく焦っていたのだろう。いつもは頼るはずのない怪鬼に頼ってしまった。後で何を要求されるか分からない」

ぞ……………。

その不安を助長させるかのように、怪鬼は不適に笑いながら適切な助言を僕にくれた。

「ふふふ……………手首をひっくり返してみて……………」

駄目で元々……………。僕は目をつむって言うとおりにやった。辺りは静か。僕がゆっくり目を開けると出目金は皿の中を元気よく泳いでいた。その瞬間、幽鬼が爆ぜた。

「おお！凄いぞ、栄鬼！！」

幽鬼の笑った顔を見て、ようやく僕はこの祭りを楽しんでいたということを自覚することができた。

……………僕がとった金魚の総計は一匹。つまりあの後すぐに紙が破れたのである。僕たちは未だに金魚を配っているであろうバカを放っておいて、中央広場へ続く道を歩いていた。

「ふっふっくん！」

「ご機嫌ね、ユウちゃん。そんなに金魚が好きだったっけ？」

妖鬼が、僕がとった一匹の金魚を眺め続けている幽鬼に尋ねる。本当に今の幽鬼はご機嫌だ。

はて、そんなに彼女は金魚というものが好きだったのだろうか？

「いや、栄鬼が取ったから嬉しいの！」  
「ぶっ！……」

僕は思わず食べていたりんご飴をふきだした。

「どうした、栄鬼？」

「いや、何でも」

ん？何だ、この光は？」

夜にしては不自然な金色の光。まさかこれは、と思う僕の心を代弁するかのよう<sup>に</sup>に怪鬼が呟いた。

「ふふっ、どうやら天人さんがお出ましのようね……」

やはり、か。

怪鬼の言葉を聞くと同時に皆の口端がニヤリと歪む。おそらく僕だつてなっているだろう。

「ようやく、か……」

「こ、怖いねえ……」

「やっと暴れられるんだね？」

「そうよ、ユウちゃん。思う存分やっちゃっていいのよ」

「おい！みんな、仕事か？」

暗鬼も来た。

コレでようやく役者は揃ったよ。鬼丸は僕たちに足止めでいいと言ったけど、そんなことできるはずもない。

やるからには全力で。それが、僕たち長が初めて決めた掟<sup>ルール</sup>だ。



「……行くうか、みんな」  
「う、うん！」  
「ふふっ……」  
「ええ」  
「任せろ！」  
「おお！」

閑話休題：とある退魔師の学習帳2（前書き）

今回は非常に短いです。すみません。どうかお許しを……。

## 閑話休題：とある退魔師の学習帳2

人物：〜今回登場した人々〜

月の姫の教育係：カナモリ

年齢：天人に年齢聞いて意味があるんですか？

種族：天人

性別：男

格好：どごぞのサラリーマンのような黒いスーツを着こなし服装の乱れなど一切感じさせない清潔感が漂っている。髪は金髪、目は赤と青のオッドアイ。桃太郎曰く“信号野郎”かなりの美系のはずなのだが、眉間にいつも皺を寄せているのでわざわざ彼に近づこうとする人はいない

武器：日本刀

備考：かぐやの教育係であった彼はツクヨミに適任であろうと選ばれ、かぐや姫を取り戻すために地上に赴く。しかし鬼丸たちの必死の抵抗もあつて失敗。ツクヨミと共に月に帰る。

彼には三つの魔眼が備わっており名を、未来を見る“予見の魔眼”、“地上を見渡す遠見の魔眼”、そして幻想を生み出す“幻視の魔眼”という。今では遠見の魔眼で地上にいるかぐや姫を盗さ……いや、見守ることぐらいしかやることがないらしい。

地上を見守る月の神：月詠尊  
ツクヨミノミコト

年齢：神に年齢聞いて意味があるんですか？

種族：神

性別：？

格好：純白に金色のラインが入った着物を着ており、常に柔和な笑顔を浮かべている。髪は腰まで届くような黒に所々金色が混じっているロングで、装飾品も何もつけないがそこがまた高貴さを生み出している。

武器：笑顔

備考：御伽の国三貴子のうちが一柱で彼女の姉から月を任されている。本来天人の前でも姿を現すことは少ないが、愛するかぐやのためならなんのその。彼女らの前に現れた。

笑顔を絶やすことのない彼女だが怒ると怖いと評判。具体的には何も無い月から全て満ち終わるまで説教が続くらしい。なお自由奔放な姉と乱暴な弟にはいつも悩まされている。

マスター：原義之

年齢：58歳

種族：人間

性別：男

格好：見た目は渋いオッサン。が、それに似つかわしくない黒いエプロン姿が奇妙である。ちなみに髪影のことは聞かないであげて

武器：・・・包丁？

備考：長閑の浜辺に位置する甘味処“桃の木”のマスター。カフェのようなその雰囲気から桃の木は人気があり、同時に彼も近所からは、気さくな人と評判はよい。

また倒れていた桃太郎を助けた人でもあり、記憶を取り戻した彼女を再び受け入れた懐の広さも持ち合わせている。しかし普段はウラシマと話が合うエロオヤジ、よく夫婦喧嘩になるらしい。

記憶を失った最狂：桃原キヨウ

年齢：桃太郎と一緒

種族：人間

性別：女

格好：短くも艶のある黒髪を一つにまとめ邪魔にならないようにしている。服装は割烹着と昔のお母さんを思い出させる。以前の桃太郎とは思えないほどの優しさを持っている。

武器：・・・泡だて器とボウル？

備考：記憶を失った桃太郎、その人である。マスターに助けられ穏やかな日常を送っていたが鬼丸のデザートイーグルを見たことにより復活。

桃太郎が破壊の一面ならばキヨウは創造の一面、桃太郎として記憶が戻った後も時々人格が入れ替わり菓子作りをしているようだ。

以前のような穏やかな暮らしはできなくなったが、桃原キヨウの名をもらい普通の暮らしをしているようだ。

今回の舞台：

月、それは魔の象徴である。月の魔力は地上のものと比べ穢れていないため、魔はその魔力を糧に生活している。人間の日光浴ならぬ、月光浴をしている魔の姿を見かける人も少なくない。

その月はツクヨミの手によって管理、統治されておりその目的は地上を見張ること。

彼女はその永遠の命を持って地上の世界を見渡し、その役割を果たしている。

そんな彼女の身の回りの世話をするために天人は存在している。彼らもまた彼の永遠の命が与えられ、彼女の周りを守護している。しかしそんな彼らもツクヨミから離れれば死は訪れるし、死の許容範囲を超えればそれもまた死の原因となる。

またあるときツクヨミは自分と気軽に喋れる存在が欲しいと思い、ある天人の子に自分と同じ永遠の命を与えたというらしい。

その子が地上に降り立ち、地上のものが言い寄ったときには、五つの難題を提示しそれを退けた。

〈五つの難題〉

蓬萊の玉の枝・・・・・・・・・・はるか遠くの山に生えているという七色の宝玉がなっている枝。主に光を操る力を持っており、現在はいかぐやが所持している。

様々な形態があり、敵に向けて七色の光が撃ちだされる七夜。結界のような働きをする望月。対象を移動させる新月。巨大な光が襲い掛かる陽炎などがある。

火鼠の裘・・・・・・・・・・絶対に燃えないという布。主に火を操る力を持っている。カナモリが幻視の魔眼によって具現化された。

仏の御石の石・・・・・・・・・・いつの時代か、偉い僧侶が悟りを開いたときに完成したといわれる鉢。主に大地を操る力を持っている。カナモリによって具現化された。

燕の子安貝・・・・・・・・・・母親の燕が子を生むときに一緒に出てくるといわれる貝。主に風を操る力を持っている。

カナモリによって具現化された。

竜の首の玉……水の神、竜神の首に存在するといわれる宝玉。主に水を操る力を持っている。

いつだったか、かぐやがウラシマに渡しそのままである。また登場するかも……。

「おや、キンタ。また勉強ですか。偉いですね」

「ああ……。そういえば鬼丸。暗鬼の影に潜む力とかチビの怪力とかどうなった？アレ何か秘密があるのか？」

「まあ、それなりに……。ところでキンタ、この作品思い返すと結構矛盾がありますよね。（5月4日現在）桃太郎の髪型とかその際たるものじゃないですか（短い 長い）」

「作者は焦って明日から編集しなおすらしいぜ。アホだな」  
「まったくです」

閑話休題：とある退魔師の学習帳2（後書き）

．．．．．はい、というわけで鬼丸君たちの言つとおりできる限り推敲しなおす予定です。

ミス多発の未熟者ですが、今後ともよろしく願います。



### 第三章・第一話：始まりはどちらも会議室で

「それでは定例会議を始める。よろしくお願いします」

鬼ヶ島中央塔の一室。今日ここで六人の長と長老の間で会議が行われる。題は主に先日の天人騒ぎの後始末とそろそろ行われる作物の収穫の準備。

前者ははともかくとして、後者は来るべき冬の存在もあり無視できないものである。

早々に案をまとめないといけないのだが……

「ヨツちゃん！髪結って！」

「はいはい。あら、ユウちゃん、また髪が伸びたわね」

「おい、一鬼！そこらへんに六角ドライバーないか？」

「えっ？な、ないよ。……というか何に使うの？」

「うふふ……ここにあったわ……」

「……」

この有様である。栄鬼は開いた口が塞がらなかつ、ただ黙っているしかなかった。

今自分の目の前で思い思いの行動を取っているのは紛れもないこの鬼の長たち。こいつらは自分の身分というのが分かっているのだろうか？

いや、分かっているはずがない。むしろ分かっていると云われたほうが困る。

「……おい、お前たち。今は会議の途中だろ。少しは参加してくれないか？」

そついうと五人の長は一斉にこちらを向いた。そして一斉に口を開いた。

「だって」

「どうせ」

「栄鬼が」

「全部」

「やっつけてくれるし」

何というシンクロ率。コレを何か別のことに生かせないのだろうか？……

五人は栄鬼を見た。肩がわなわなと震えている。

五人は途端に変わった雰囲気から生命の危機を感じ逃走を図るがもう遅い、栄鬼の怒りは有頂天に達した。

「貴様ら、少しは長としての自覚を持てえええ!!」

『うわ! 栄鬼が怒った!』

「貴様ら! 逃げるなあああ!」

五人は会議室から一斉に飛び散り、栄鬼は一人ずつ潰しにかかる。毎度のことなので他の鬼たちは驚く様子もない。後10分もすれば全員捕まるだろう。

そんな様子を鬼丸は下の階で聞いていた。

「馬鹿ばっか……」

「まあまあ、鬼丸。そついわないでおくれ。彼らもれっきとした長なのじゃから」

長老がこちらを向かずに答える。鬼丸もそれを長老のほうを向かず

に聞いていた。

現在、鬼丸がいるのは会議室下の倉庫。なにやら長老は探し物があるとの事で、それを手伝っているのだ。

さて倉庫での探し物で何が大変かというところ、散乱と広がっているものの整理である。山から引越してきたばかりで未だに整理がついていない。鬼丸はこの部屋を見たときにこの依頼を受けたことをひどく後悔した。

なので少しでも気を紛らわそうと鬼丸は普段より多く口を動かしている。

「栄鬼一人で長は十分ですよ。何で奴らに長なんてやらせているのですか？」

「ん〜。そうじゃの〜・・・栄鬼が完璧すぎるからかのか？」

長老の冗談に鬼丸は眉をひそめる。

「親の鼻肩目かもしれんが栄鬼は完璧じゃ。じゃから全体としてのバランスを考えての。ほら、バランスが悪いとヤジロベエは成り立たないのと一緒にじゃ」

「からかわないでください、長老。政治にやりすぎなんて事はまずありえませんよ。政治に必要なものは決断力のあるリーダー。それが完璧ならば他のものはいりませんよ」

これは鬼丸の持論である。政治に大切なのはまず行動、そしてそれを指導するリーダーが最も必要。何より効率である。

それを聞くと突然長老は笑い出した。鬼丸にはそれが自分の持論が否定されさらに眉の溝を深めた。

「ほっほっほ。鬼丸は本当に効率主義じゃの。効率を追い求めすぎ

ると人生つまらんどぞ」

「大丈夫です。最近楽しい無駄が増えましたから」

「ほっほっほ！よきことじゃ」

鬼丸の頭の中に愉快な4人の顔が思い浮かぶ。最近の自分の行動には無駄が多すぎる。それが楽しいからやめられないのが事実であるから困ったものだ。

いつの間にか長老がこちらを見ているのに気が付いた。

「……………なんですか？」

「顔がにやけておるよ、鬼丸」

「なっ！……………」

「ほっほっほ！よきこと、よきこと。彼らには感謝しなければの……………。さて、ちよつと話を戻すか。先ほどは冗談を言ったがな、実際幽鬼たちは栄鬼に必要なのじゃよ」

鬼丸にはそれがまったく理解できない。

「どんなところがですか？」

「“鬼闘術”の継承」

長老は短く答える。

鬼丸も聞き覚えのあるその言葉。一番嫌いなその闘法。鬼丸の顔は自然としかめっ面になっていた。

「鬼闘術の継承には栄鬼一人では力不足。いや、一人では不可能じゃ。鬼闘術の継承には熟練の師が何人いようと困ることはない。儂が死に、栄鬼が長老となったとき幽鬼達が鬼闘術を鬼の子達に継承する。そのためにも奴らは儂の目に届く場所においとかなければならん」

長老は口を歪ませ語る。何故か長老の後ろには、人間たちの間で広まっている巨大で醜悪でおぞましい鬼の姿があった。威圧感是十分、伊達に鬼の長老はやっていかなかった。

鬼丸はその存在を否定するように鼻を鳴らした。

「ふんっ！くだらない。あんな闘法にこだわらなくとも勝つことはできます。現に私はそれを証明している」

「まあまあ、そういうな。アレは一種の伝統のようなもんだ。それよりも鬼丸……お主、鬼闘術を学ぶ気はないか？」

「……はい？」

鬼丸は持っていた本を手から落とす。何を言っているんだ、このジジイと口から出そうになっただがそれを何とか押しとどめる。長老は自分がそれを嫌いであることを知っているはず。からかっているのか？……

しかし長老は至って真面目に話を続けた。

「先ほども言ったとおり鬼闘術を学ぶものは多ければ多いほど良い。お主なら良い使い手になると思うのじゃがの」

「……」

鬼丸は落とした本を拾うと元にあった場所に片付けた。そして無言のまま、ここから立ち去ろうとした。

「鬼丸？」

「……すみません。用事ができました。私はここで失礼させていただきます」

「うむ、分かった」

「それと……父は私に“一色には染まるな”といっ

したので」

鬼丸はそういうと扉を閉め部屋から立ち去る。残されたのは長老のみ、長老は独りでにつばやいた。

「ふむ……あいつらしい言葉じゃの……。さて、そろそろ見つかると思うのじゃが……」

独りになった長老はそれでも倉庫の中を探し続ける。むしろ余計荒らしている。今重要なことは探し物を見つけること。他のものなどどうでも良かった。

探し物は棚の一番上にあった。

「おお！あつた、あつた。こんなところにあるとは……。そろそろコレをとりに来ることじゃろうな、あの金の亡者どもが」

長老の探し物とは黒い箱。何の塗料が使われたかは知らないが品の良い黒で染まっており、それは赤い紐で閉じられている。弁当箱にでも使えば高級感溢れるものになるだろうが、残念ながらこの箱はそういう用途はない。

長老はそつとその箱の名前を呟いた。

「玉手箱……。おや、今日の海は荒れておるな」

天気は晴れ、それにも関わらず荒れている海を見て長老は一瞬口を歪ませた。

これは数日前、天人騒ぎのときにまで話は遡る。

「はあ……まったく、社長もひどい人だよ。せつかくいいところだったのに」

青髪の少年がそう呟く。彼の名前はウラシマ、長閑の船乗りであり鬼ヶ島の渡し役であり、そして竜宮城の社員である。

今彼がいるのはその竜宮城、紛れもなく海の中である。ウラシマが門を通ると一人の男が待っていた。

「お疲れ様です。コレ、タオルと着替えです」

「おう、テンキュー、亀吉君！」

ウラシマは着替えとタオルと受け取る。

彼の名前は亀吉。トロンとした眠そうな目、ボサボサの黒髪、ネクタイをつけていないのにスーツといかにも駄目そうな雰囲気。漂う男だが、仕事は至って真面目である。ウラシマの重要な部下の一人だ。というかウラシマには彼を含め3人しか部下はいない。

また冗談のようだが、彼は名前の通りに亀の甲羅が背中についている。というより彼は二足歩行の正真正銘の亀である。

ウラシマはそんな彼に愚痴をこぼした。

「で、今度は何？またこないだみたいに満漢全席作れとかだったら、僕帰るよ」

「そうおっしゃらずに……。会議場で社長が待っています」「たくっ……………」

ウラシマは悪態をつきながら渋々向かう。彼女に逆らうとどんなお

仕置きが待っているか分からないから怖い。給料カットだけは御免である。

「失礼します。第零技術開発部、亀吉です」

「しつれいしまーす」

広い会議室で待っていたのはたった一人、それも女性である。その女性はチョココンとイスに、まるで人形のように座っていた。彼女はその赤い髪をまるで綾取りをするかのように指に絡ませていた。

彼女の名前は乙姫<sup>おとひめ</sup>。この株式会社竜宮城の代表取締役、いわゆる社長である。外見は女子高生にしか見えない彼女がこの大企業の全てを取り締まっていると誰が信じるだろうか。

しかし彼女の手腕はこの巨大な竜宮城が証明している。彼女の代で竜宮城が一気に発展したことはその手の人間なら誰しも知っていることだ。

ウラシマたちが入った瞬間、彼女の口から短く声が発せられた。

「おそい」

たった三文字、それが彼女の機嫌が悪い理由である。ウラシマは慌てて弁明した。

「おそいって……コレでも僕急いだ」

「おそい」

「そんなこと言うなら社長だつてこないだ」

「おそい」

「……社長は走るのが」

「おそい……」



「ぷー！ひっかつかつてやんの！……って痛い、殴らないでくださいよ！」

無言での本気の殴り、ウラシマは虐待だと何だと叫ぶがそんなことは関係ない。この会社では彼女が絶対なのだ。

「コレだからお子ちゃまは……」

ちなみにウラシマの外見は10歳である。

「どうした、ウラシマ？」

「いえ何にも……で、社長。今回は何のようですか？またこないだみたいにくだらないう事でしたら他の部署をあたってくださいよ」

ウラシマはたびたび彼女に呼ばれる。主に彼女の暇つぶしのために今の今まで今度こそ断ろうと思っていた。

「今回は貴方たちしか頼めない仕事です。実は今朝、彼女が行方不明となりました」

『！？』

彼女、という言葉にウラシマと亀吉は大きく反応する。ウラシマはいつもニヤニヤ顔をやめ真剣な表情になっている。

「で、目処はたっているんですか？」

「GPS情報によると彼女がいるのは…… “鬼ヶ島” です」

一瞬だけ、ウラシマのニヤニヤ顔が止まったように見えた。

「鬼ヶ島、ねえ……」

ウラシマの脳裏に三人の顔が思い出される。鬼とお姫様と、それと金髪の退魔師……。

「で、どうするんですか？僕が偵察にでも

「戦争」

思いもよらなかった言葉にウラシマは言葉につまる。代わりに亀吉が聞いてくれなければ、辺りに沈黙が流れただろう。彼には感謝しなければならない。

「戦争、ですか？」

「彼女を取り返すために手段を選ばない。コレは聖戦、私たちは勝たねばならない。躊躇はいらぬ。分かった、ウラシマ、亀吉？」

「はい、乙姫様！」

亀吉が威勢よく答える。対してウラシマはあまり気乗りしないていた。あの三人と戦うことなど気が引ける。ウラシマはこの件を断ろうとした。

「社長、僕は……」

「契約を忘れたの、ウラシマ？」

「っ！」

ウラシマに衝撃が走る。目の前にあるのは一枚の紙切れ、こんなモノのために自分は縛られている。追い討ちをかけるかのように乙姫はウラシマに喋りかけた。

「貴方は私のために尽くさねばならない。この契約書がある限り、

貴方は私に縛られる。いいわね、ウラシマ」  
「……………はい、乙姫様」

ウラシマには選択はできない。彼に与えられた選択肢は常にYes  
しかないのだから。

第三章・第一話：始まりはどちらも会議室で（後書き）

はい、というわけで今回からウラシマ編です。個人的にウラシマは好きなキャラなのですが、今まであんまり活躍してない気が……。

ウラシマ君大活躍の（予定の）お話をよろしくお願いします。

第三章・第二話・だから四人は竜宮城へ（前書き）

### 第三章・第二話：だから四人は竜宮城へ

「よっこいしよっ」と!

「悪いね、金さん。いつも手伝ってもらって」

いつもの通り金太郎は鬼ヶ島の復興のボランティア中である。最近では金さんと呼ばれこの仕事も箔がついてきた気がする。ボランティアに箔がつくかどうかは知らないが……。

「何言つてんだよ、爺さん。困ったときはお互い様って言うだろ」

「それでも、俺らは金さんに何もしてやれてねえよ。それでもいいのかい?」

「十分さ」

金太郎は最後の荷物を荷台に乗せ、一息つく。コレは自分のためでも何でもない。ただのボランティア。金太郎は今の仕事が好きであった。

年老いた鬼は深々と頭を下げ自分の荷物を持ち、自分の家に向かっていく。

その代わりに別の人間が自分に向かってきていた。

かぐやである。

「やあ、キンタさん。こんなところで何やっているのですか?」

「おう、かぐやか。見りゃ分かんذار。畑仕事の手伝い。お前こそこんなところに何のようだ?」

「……………」

かぐやは何も答えない。幸か不幸か、事情を知っている金太郎はそ

こから全てが分かってしまった。  
このお転婆姫が落ち込むことなんて、一つしかない。

「……鬼丸に追い出されたのか？」

「そ、そんなことあるわけないじゃないですか！鬼丸さんは仕事  
が忙しくて、それで少し会っていないだけです。こないだの天人騒ぎ  
の収拾に追われているらしいですし……」

「要するにお前は暇でさびしいんだな」

かぐやは再び押し黙る。弱弱しく視線は俯き、何かあればすぐにも  
泣き出してしまいそうである。

最近の金太郎の悩み事トップ3の一つがコレ、かぐやの意気消沈で  
ある。普段はお姫様なかぐやも鬼丸関連のことになるとすぐにしお  
れ、こんな様になってしまう。

ちなみに他の二つの悩み事は、鬼丸の意気消沈と最近自分の名前が  
呼ばれなくなったな、というどうでもいいことだ。

「まったくお前は……おい、かぐや。お前は鬼丸の妻な  
んだろ、仮にも」

「はい……」

「妻って言うのが何かお前分かってるのか？」

「はい？」

「妻っていうのは夫が不在のときに留守を預かるものだ。よき妻の  
お前ならそれぐらいのことができるよな？」

「……はい！」

かぐやの顔が満面の笑みに変わる。こんな風な生意気な姫でもやは  
り、かぐやは笑っていたほうが似合っている。

「そうですね！月の姫である私にできないことなどないですよね！」  
「単純な奴……まあ、いいか。とりあえず腹でも減ったから  
どっかに食べに行くか」

「でも最近ウラシマさん見かけませんよ」  
「あつ……そうだった」

金太郎はああ、と声を漏らした。今の今まで思い出していなかった  
こと、だけどそれはとても大切なことだった。

最近ウラシマの姿を見かけていない。それどころか誰も見たことが  
ないという。

あのウラシマのことだ。何か考えがあるかないかは知らないが、迷  
子になって泣くような奴じゃない。

それでも金太郎の中には引つかかるものがあつた。

「まあ、私なら一跳びなんですから問題ないんですけどね」

「そう、だな。じゃあ、かぐや。頼む」

金太郎は言い終わる前に浜に何かか打ち上げられているの見た。

あれは、明らかに……

金太郎はかぐやに確認するように呟いた。

「あれは人か？」

「キンタさん、女の子が倒れていますね。どうしますか？……  
つて貴方には愚問」

「大丈夫か！？」

「はやっ！？」

ついさっきまで自分の隣にいたはずの金太郎が、倒れている女の子



のすぐ側にいてかぐやは驚愕した。

「瞬間移動でもしたんですか？」

「おい！おい、大丈夫か？」

金太郎の呼びかけに答えるように、少女はパツチリ目を開く。気絶していたとは思えないほどのスピードでムクツと、起き上がると金太郎の顔を見つめた。

「あつ、目を覚ました」

「大丈夫か、お前？」

少女はその無機質な目で金太郎を見つめるばかり、何も語るうとはしない。

「……」

「黙ってないで何か喋ったらどうですか？ええ？」

「お前はどこそその不良か？……名前、いえるか？」

少女はその小さな口を開き、消え入るような声で答えた。

「……リュウ」

「リュウちゃんか。お前、どこから来たかいえるか？」

金太郎は今までこの子は海を漂流し流れ着いてきたものとはばかり思っていた。しかしそれは大きな間違い。

それどころかこの子に関わったこと自体が間違いだった。少女はポツリとその場所の名前を呟く。

「……竜宮城」

『へっ!?!』  
「助けにきて」

金太郎とかぐやの周りに突如魔方陣が発生。それにより生じた光が二人を包み込み、それが消えたときにはそこにはもう誰もいなかった……。

「はい。コレから改めて会議を始めます。よろしくお願いします」  
『よ、よろしくお願いします』

栄鬼が頭を下げると他の五人もそれに続く。

何故か五人の頭にはそれぞれたんこぶが存在していた。暗鬼には5つ、一鬼には3つ、怪鬼、妖鬼には1つ、幽鬼には何故かなかった。普段ならこの鬼ごっこは一時間ほどかかるのだが、今日はその半分ですんだ。というのも、栄鬼には味方がいたからである。

「悪いね、鬼丸。手伝わせちゃって」

「いえ、悪いのは栄鬼さんではなくこの馬鹿共です。栄鬼さんが謝ることはありませんよ」

「おい、誰がバ  
」  
『主にテメエだ、バカ!』

栄鬼と鬼丸が口をそろえる。暗鬼はひどくビビリ、肩をすくみあがらせる。

たんこぶの数からも分かるようにこの中で一番怨まれているのは暗

鬼。二人の睨みの中に孕んでいるのは本物の怨みのみ。暗鬼を黙らせると、栄鬼は会議を始めた。

「それでは妖鬼、天人騒ぎの報告を」

「はいはい」

妖鬼は間延びした声で答える。

それとは打って変わって真剣な表情で報告を始めた。

「天人騒ぎは祭りのせいもあってそれほど混乱はありません。ほとんどの鬼が祭りの余興と誤っているそうです。ただ一部の疑り深い鬼は本物じゃないか、と疑っているそうよ」

「ふむ……。では妖鬼、その件の收拾は任せていいかな？」

「はいはい」

妖鬼は再び間延びした声で返事をした。興味が失せたようで回転イスを180度回転させて髪をいじくって遊び始めた。

毎度のことなので栄鬼は気にしない。今度は一鬼に問うた。

「では一鬼、収穫のことを説明してくれ」

「う、うん。……。収穫に関しては問題ないみたい。引越して初めての年だから多くは見込めないけど、思ったより少なくはないみたい。来年も期待できるかな」

「で、他の問題とは？」

「……。実は最近漁の調子が悪いみたいで」

一鬼は答えにくそうに答える。興味深い話題に栄鬼は迷わず食いついた。

「ほう……。原因は？」

「そ、それが分からないんだ……」

「分からない？」

「う、うん。天気、水温、潮の流れ……どれも異常ないはずないんだけど」

一鬼は本当に分からないように首をかしげる。

この鬼は非常に臆病だが、いや、臆病だから情報という分野に関しては右に出るものはいない。その一鬼が分からないとなればまさにお手上げである。

「ふむ……確かに僕たちは山暮らしが長かったから、漁に出る人がいなくなっただかも知れん。しかし昔とった何やら、以前ここで暮らしていた漁師も少なくはないだろう。人材的には問題ないはずなんだが……。一鬼、暗鬼ももう少し調べておいてくれ」

「わ、分かったよ」

「あゝい」

幽鬼と一鬼が答える。いつも通りの反応、栄鬼もいつも通りに会議を終えようと思っていた矢先にいつも通りにはなりそうにないことが起こった。

窓が突き破られる。

皆が振り向くと、青い髪の少年が窓の外で立っていた。

「はっはっは！その件については調べる必要がないよ、鬼の皆さん！だってそれは僕の仕業なんだからね！」

『！？』

青い髪の少年とはいうまでもなくウラシマ、そして彼は巨大な手の上に立っていた。

栄鬼と鬼丸はウラシマの突然の登場に驚いている。それは分かるのだが、他の五人の視線がどうも違つところに向かっていることにウラシマは疑問に思った。

「ん？どうしたんだい、皆さん？」

「アレって何だっけ？」

「ええつと……昔やってた特撮の……」

「分かった！ゴ　ラだ！」

「あれ？そんなんだっけ？」

「ふふ……みんな違つわよ、正解はガメ」

『ああ！なるほど！』

五人が一斉に手をつき頷く。あまりの能天気さに栄鬼は頭を抱えた。

「みんな、そんなこと今はどうでもいいだろ！戦闘準備を……」

「

ん？遅い遅い」

声が出た時にはもう遅かった。

窓淵に立っていたはずのウラシマの姿はすでになく、栄鬼の後ろに部屋に置いてあった箱を持って立っていた。

ウラシマが魔術師ということは知っている。が、瞬時に人の後ろに回りこめる魔術など聞いたことがない。あらゆる考えが栄鬼の頭の中を駆け巡るが、解決には敵わなかった。

「な！？いつの間にな？」

「甘いよ、栄鬼君。僕たち竜宮城の者たちにとってコレぐらいちよるい、ちよるい！それじゃあこの箱はもらっていくよ」

栄鬼は当然ウラシマを追いかけてしようとする。

しかし何者かの手によってそれは遮られることとなった。長老の手だ。

「父さん？」

「それじゃあ、コレにてドロンさせていたどうかね」

「待ちなさい、ウラシマ！」

鬼丸がウラシマを呼び止める。

ウラシマは少し笑ってそれに答えた。少し疲れたような顔だった。

「鬼丸君、悪いね。コレばかりは仕方ないんだよ」

「貴方、一体？……」

鬼丸の言葉が言い終わる前にウラシマは亀の手に乗り込む。巨大亀は海のほうへ飛翔し、飛び込む。巨大な水しぶきが上がるとともに、五人の歓声上がる。

「おお！あのガメ 飛んだぞ！」

「そんなこと言っている場合か！易々と侵入者を許し、あまつさえ物も盗られたんだぞ！幽鬼は追撃隊を編成、他のものは戦の準備を

「 その必要はない。栄鬼」

長老が栄鬼の言葉を遮る。

先ほどのこともあり、栄鬼は痺れを切らしついに反発した。

「長老、何故ですか！？」

「そろそろ潮時じゃと思っていたからの、ちょうどいいんじゃない」

「はい？一体何のこと……」

若い栄鬼には分かるはずもない。このことが分かるのは今では長老一人しかいないから当然だ。

「とにかくお前たちはこの件については関わる必要はない。お前たちは会議を続けよ。竜宮城へは儂と……そうじゃの、鬼丸が行く」

「私が、ですか？」

「適任じゃろ」

長老は不適に鬼丸に笑いかける。

この老人の考えていることは確かに分からない。しかし今まで間違ったことはない。鬼丸はおとなしく従うことにした。

「ふむ、分かりました。ご同行させていただきます」

「よろしい。では栄鬼、後は頼んだぞ」

「は、はい。お気をつけて……」

鬼丸と共に長老はウラシマが出て行った窓から出て行く。いくらなんでもそんな場所から出て行く必要はないだろう、と思ったが口には出さなかった。

「栄鬼、お爺ちゃんは何を考えているんだろうね？」

「分からん……。未だにあの人の思っていることは分からん」

父と子は似るものという。いつか自分もあんな風になるのかと思うと将来が不安で仕方なかった。





第三章・第二話：だから四人は竜宮城へ（後書き）

今回は記念すべき50話。ありがとうございます。

しかし今思えば何か記念話を書けば良かったな、と……。。す  
みません。

今後とも御伽話をよろしくお願いします！

### 第三章・第三話：そろいに揃って戦闘開始

暗い暗い海の底、誰も近寄らないそんな場所で、今日も明日も明後日も、多くのモノがお仕事、お仕事。

株式会社竜宮城。世界規模で活動を続けるこの会社は、世界の誰も目の向けようもないこの海底に存在していた。

「ここが、竜宮城ですか……」

鬼丸が竜宮城を目の前にぼつりと呟いた。

確かに竜宮城は大きな会社だ。その本社ともなれば規模は巨大なものになることは容易に想像できる。しかし目の前にあるコレの規模はまるで規格外だ。それは会社というよりはまるで……

「まるで城ですね」

広大な面積を存分に使ったその建物。横に広がっているコレは通常の城とは違う。南の島にあると聞く、民族的な雰囲気醸し出している。赤い瓦を使った屋根と守護霊と思われる像。

なかなかお目にかかれないこのお城に鬼丸は目を奪われていた。

「儂から見れば要塞にしか見えんがな。まあ、当然じゃろう。竜宮城の連中は元々巫女じゃからの」  
「巫女？」

鬼丸が隣にいる長老に聞き返す。長老は表情一つ変えずにそれに応えた。

「巫女、というよりはシャーマンと言ったほうがイメージが合うかの。．．．．元来奴らは水の神様に仕えるシャーマンじゃった。じゃからこんな場所に奴らは根城を構えるのじゃよ。空気も地上からわざわざ引っ張ってきとるらしい」

「なるほど．．．．だから問題なく息ができるんですね」

鬼丸は大きく深呼吸する。

海に入ったときに必死に息を我慢をしようとしていた自分が恥ずかしい。

「それが今から三代前、奴は何を思ったのか知らんが地上を侵略し始めた。．．．．経済というものを使ってな。本当に卑怯なものどもよ。小賢しい．．．．」

「というよりも長老、かなり竜宮城に詳しいですね。コレも年の功ですか？」

長老は驚いた、といった表情でこちらを見た。

はて？何か自分は失言でもしたであろうか。

「なんじゃ、知らなかったのか、鬼丸。お主も勉強不足じゃの。竜宮城と鬼ヶ島は元々同盟を組んでおったのじゃよ」

「えっ？．．．．」

今度は鬼丸が驚く番。

自分の鬼ヶ島と世界的な大企業の竜宮城と関係があるとは思わなかった。鬼珠は無知な子供同然の鬼に説明をしてやることにした。

「ここは鬼ヶ島のほぼ真下。互いにここらへんを独占したいから、竜宮城にとっては我らのことは目の上のたんこぶじゃし、我らにとっては足元すくわれかれんからの。無用な争いを避けるために十代

くらい前に和平を結び、竜宮城は物資の補給、鬼ヶ島はこの守護  
ということを手をうつたらしい」

「でも私たちは桃太郎に負けてしまった……」

「そうじゃ。じゃからかの。今回、何代も続いた和平を破り、攻  
めてきたのは……。しかしまあ、いい機会じゃ。鬱陶しい  
と思っていた連中を潰す、な……」

長老の口端がニヤリと三日月形に歪む。顔の皺とは明らかに違うそ  
の歪み、鬼珠の目には老人とは思えないほどの謀略と策が渦巻いて  
いて、鬼丸は顔を引きつらせた。

最近この老人の実年齢が分からなくなる……。

「長老……実は貴方が一番黒いですよね」

「ほほっ、何のことかの？……さて、鬼丸。行こうかの」

「はい」

鬼丸は鬼珠に従い、竜宮城に侵入を試みる。

その第一歩を踏み出そうとしたとき、鬼丸の頭にある心配ごとがよ  
ぎった。

「ていうか私たち見つかりませんか？こんなに堂々と会社に忍び  
込むなんて流石に危険じゃないですか？」

「大丈夫じゃよ。結界を張るから」

「ああ……」

鬼丸は納得して踏み出した。

そういえばそうだった。普段長老は自ら動かないので忘れがちだが、  
この老人はある一点において誰にも劣らなかつた。

その点は結界。金太郎のような攻撃を防ぐようなものはもちろん、空間遮断、気配消去など、魔術師のような真似ができる化け物である。

鬼丸は長老以上の結界の創造をできる者を見たことがない。その結界が張つてあるなら鬼に金棒。安心して一步を踏み出すと、突然警報のような音が辺りに鳴り響いた。

「おや？」

「……………長老。貴方の結界は穴だらけですか？」

「おかしいの。隠密の結界には自身があつたんじゃが……………」  
他のマヌケが引つかかったのかの？

「そんなマヌケがいるわけ……………うわっ、何かたくさん出てきた！」

警報音がしたと思えば、今度は兵隊があちこちからこちらに向かつてきている。大方警備隊か何かなのだろうが、何故か違和感がある。

兵隊の手足は鱗になつたり、頭が魚になつていたりした。

『待てえええええええい！』

「何だ、アレ？……………」

「戦略撤退じゃ。逃げるぞ、鬼丸」

「くそっ！忌々しい。恨むぞ、マヌケどもが！」

この人数を相手にするのは面倒くさい。

鬼丸と長老は撤退を余儀なくされた。

そのころ一方、鬼丸から恨みを買ったマヌケどもは……。

『待てえええええい！』

「うわああああん！！この馬鹿あああ！！」

「俺のせいじゃねえよ！全部この子のせいじゃねえか！」

「……」

鬼丸同様逃げる一手であった。

かぐやは着物の裾を上げ憐れもない姿に、金太郎は正体不明の女の子を抱え必死の形相である。

また鬼丸たちと同様、通常の人間とは異なり半漁人に追われていた。

「A班に連絡、敵は第肆区画に向かっているぞ！」

「ていうか、この子一体誰なんですか！？」

「……リュウ」

「んなこと分かつとるわ！お前本当にここから来たのかよ？」

自分のことをリュウと言う少女は口を閉ざすばかり。ため息をつく余裕もないかぐやは代わりに愚痴をもらした。

「ったく……ここ出身なのに迷子になって、警報装置なんて書いてある怪しげなスイッチを押して、さらには海洋生物に似た変な奴らに追いかけて、もう散々ですよ！」

「まあ、半分はそれを促したオメエの責任だけだな」

ここでここに来たまでの経緯を説明しよう。

・ まずリュウに怪しげな術で突然海の中に転送された金太郎とかぐや。かぐやがここが海の中と指摘した途端、金太郎は手足をばた

つかせ息を必死に止めていた。

その様子を見てかぐやは爆笑していた。リュウは奥に連れて行けと短くそう言った。

・ とりあえず竜宮城に侵入しようとする三人。豪華絢爛な建物に目を奪われる金太郎だが、かぐやの「私の家の方が美しいです」という発言に苦笑する。

リュウはそれとは関係なく辺りを走り回っていた。

・ リュウが走り回っている姿を見ていたかぐやが何かを発見。その名前は“警報スイッチ”。かぐやが「押してみたくありませんか」という発言を聞き、リュウが無言でそれを押す。金太郎はそれを止めようとしたがもう遅い

警報音が辺りにせわしく鳴り響いていた。

警報音と共に半魚人が追いかけてきて、そして現在に至る。

かぐやはどうしようもない現状をいい加減鬱陶しく感じられ、追ってくる半魚人共と対峙するように振り返った。その手には蓬萊の玉の枝が握られている。

「とにかく！このまま逃げているのは性に合いませんね。とっととやりますか」

「・・・そうだな！」

金太郎もそれに同意する。これ以上逃げるのは性に合わない。

「ようやく観念したか！おとなしく捕まれ！」

「誰が捕まりますか。というよりお姫様である私を捕らえようだなんで無礼にもほどがありますよ！愚民共が！」

「こいつの言うことはとにかく、ここで捕まるわけにはいかないだ！」

金太郎も隣にいるリュウを見て紫電を取り出す。

この子は何も喋らない。だが自分に助けて、と頼んだ。それだけで理由は十分。自分が闘うのもそれで十分だ。

「月光！行きますよ、キンタさん！」

「紫電！一暴れしてやろうぜ、かぐや！」

「何を生意気に！お前たち、やって

」

半魚人の一人がそう叫ぶと同時に、辺りが七色の光と青い電光に包まれる。

それが晴れたと思えば、あんなにたくさんにいた仲間全員地面とキスをしていた。

「ひよっ!?!」

「はっ！この程度で私を捕らえようだなんて浅ましいにも程がありますね！ねっ、キンタさん！」

「そうだな。確かにコレは弱すぎだな。というか、雷属性の俺に対して相性悪すぎ。何か悪く思っちゃうな」

通常の水は電気によって電気分解される。魔術でもその性質は失われておらず、常に水に濡れている半魚人はもちろん感電する。見たところここにいる全員は水属性の魔力の持ち主だそうで、要するに雷の金太郎は彼らにとって天敵なのだ。

残り一人の首筋を叩いて気絶させ、再び奥を目標そうとする三人。しかしこの場で立っている人間は合計四人いた。



「これはこれは、たいそうひどくやってくれたものですね・・・」  
「む？誰ですか？」

かぐやが自分たちの後ろに立っているいかにもジエントルマンな男に問いかける。姿かたちはほぼ人間、しかし手首のところが魚の鱗のようなものに覆われている。

言うまでもなく竜宮城の人間だろう。しかもかなり上位の。

ジエントルマンは丁寧な口ぶりでかぐやの問いに答えた。

「おっと、コレは大変失礼。月姫様に対する礼儀がなかったですね」  
何故そのことを知っているのか、自分は名前さえ喋ってはいないはず。

ジエントルマンの当然分かっているような口ぶりにかぐやは不快感を感じた。

「私、竜宮城第肆技術開発部、部長の岩土いわじです。以後お見知りおきを」

「第肆、技術開発部？・・・ウラシマさんは何でしたっけ？」  
「・・・アレ、なんだっけ？」

「・・・そういえばウラシマは竜宮城に働いているとは言っても自分の役職については喋っていない。秘密主義だから仕方ないこと・・・なのだろうか。」

「アイツは俺らのことどう思っているのかな？・・・」  
「さて可愛い部下たちがやられた仕返しは・・・可愛い部下たちちやってもらいましょうかね。カモン！」

岩土が指をパチンとならすと、先ほどの倍はあろう半魚人が湧き出てくる。

しかも先ほどとは違い武装は重装備。先ほどが見張りならば、今回は本当の兵隊。金太郎は首を回して、奴らと向き合った。

「はっ！上等じゃねえか……」

「塵が積もればいくら積もっても塵であることには変わりはないんですよ。行きますよ、キンタさん！」

「おう！」

「ぐ……あ……」

「敵は……内部に侵入中……至急応援

ぐぼっ……

……

「ふう、ざっとこんなもんですかね。コレでいいですか、長老？」

「結構。ほっほ、強くなつたな、鬼丸」

死屍累々……。竜宮城の気絶した兵隊の山が築かれていた。

犯人はこの鬼、鬼丸童子。逃げるのが鬱陶しく感じられたからであろう。兵隊の至る所には痣ができていた。デザートイーグルも何も使わずに、単純な暴力だけでここまでやるとは流石は鬼である。長老もそれを見て小気味よく笑っていた。

「さて後はこのまま社長のもとまで直行したいんですけど

」

……何かいる。鬼丸は懐からデザートイーグルを取り出した。

「そう簡単にはいきなさいですね。お二人さん」

「ありやりや？」

「ばれっっちゃった？」

「バレバレです。さあ、姿を現しなさい」

床が盛り上がる。明らかに砂ではない素材が使われているのに、そこに潜んでいたというのか。隠れていたものは小さい二人組みであった。

「こんにちは」

「こんにちは」

「僕の名前は佳麗<sup>かれい</sup>。竜宮城第弐技術開発部、部長だよ」

「僕の名前は比良<sup>ひらめ</sup>目。同じく第弐技術開発部、部長だよ」

「ここで貴方たちは」

「ゲームオーバーだよ」

そついった彼らは左右対称。服も行動もポーズも性別もほくろの位置もまったく正反対。

まるで鏡を見ているようである。

こんなのが部長だと？ウラシマにしても然りだが、この会社はどうかしている。

忌々しい……………。

「鬱陶しい……………。喋るのは一人ずつにしなさい。そして面倒くさいので二人いっぺんに私に倒されなさい」

「おや？随分尊大な口だね」

「やっちゃおうか、佳麗ちゃん」

「……………上等」

誰であろうと関係ない、来るものは全て拒む。鬼丸はデザートイーグルを持って駆け出した。

### 第三章・第四話：海洋生物って気持ち悪い！

株式会社竜宮城、会社自身で商品も開発しているこの会社にはいちきから陸くまでの技術開発部が存在する。

正確に言えばどこの分野が担当か、分かるように名前がつけられているのだが開発部同士関わることがないのでただの数字が名づけられている。

それぞれの部署には当然部長と呼ばれる存在があり、全員そろいに揃って曲者そろいらしい。

そんな奴らが今、自分の目の前にいた。

「えへへ」

「えへへ」

「君はね」

「今から」

「私たちに」

「倒されるんだよ」

第壱及び弐技術開発部、佳麗と比良目。二人は仲良く、侵入者の目の前でクルクルと踊っている。そして当の侵入者は、一層不機嫌そうであった。

「……鬱陶しい。さっきから喋るときは一人で喋りなさいと言っているでしょう。それに何となく幽鬼たちを思い出させるから不愉快です」

現在の鬼丸の頭の中にはあのバカ五人が自由気ままに行動している姿が浮かぶ。さっきからこいつらと喋っているたびに、その姿が思

い出されるから鬱陶しく思っていた。

ただ鬼丸が不機嫌そうなのはデフォであり、今から普通に戦えば多少はマシだったかもしれない。おそらくは半殺しですんだはずだ。しかしこの双子は言っではいけない禁忌を口にしてしまった。

「そういえば君」

「僕たちよりちっちゃいね」

「　　コロス！」

骨髄反射のスピードで鬼丸が駆け出す。二人諸共、蹴り横薙ぎ払いで一気に勝負を決めようとしたが、そんなに簡単にことが終わるわけではない。

双子は当然のように、金属で加工してある床に溶けていった。

「む？また消えた」

鬼丸は双子が消えた地点の床を踏みつけるが、何も異常はない。ただの金属加工された床である。この大企業の守りがそんなにも脆いものなら大企業にはなり得ない。

となれば原因はあの双子か。

それを裏付けるように、どこからともなく双子の声が辺りに響いた。

「えへへ、僕たちはね」

「えへへ、どこにでも隠れられるのさ」

「そこが土じゃなくても関係ない」

「関係なしに移動できるの」

双子の声がやむ。この双子の言うことが正しければ、自分には何もすることができない。金属の床に金属の弾丸を撃ち込んでも無駄な

ことは決定的に明らかだから。  
鬼丸の機嫌はより悪くなるばかりだ。

ならば魔力で！

そう思った瞬間、鬼丸はゾワツと殺気を感じた。

「下！」

「うりゃ！」

左手による奇襲、鬼丸はそれを飛んでかわすが今は一人。

鬼丸の予想通りもう片方の手が床から右手の殴りと共に、双子の片割れが飛び出してきた。

「ほいさ！」

「時間差！？」

空中では体勢が不安定。いつも通りのガードはとれないがそれで十分。とつさに身を引き威力を殺す。

どうやら敵も奇襲に頼っているばかりで、パワーはさほどないらしい。それでも奇襲は厄介である。

どうしようか思案している鬼丸に追い討ちをかけるように、双子の声が鳴り響く。

「君に分かるかな？」

「分からないだろうね？」

。 . . . . 不愉快だ。こんなガキ共に手玉を取られるとは . . . . .

「分からなくとも . . . . .」

鬼丸は右足を振り上げる。それに見事に対応するように双子が鬼丸の足めがけて飛び出す、がその反応は間違いであった。双子は相手が容赦をしない鬼であることを忘れていたのだ。

「どうせ下に来るんだから踏み潰せばいいでしょ！」

「うぎゃー！」

顔面めがけて思いつきりそれを踏み潰す。手加減も何もない全体重をのせた踏み。

双子の片割れは蛙を踏み潰したような声を発して気絶する。鬼丸のイライラも多少晴れたのだろう。どこか達成感に満ち溢れた表情になっていた。

それに対して片割れを失った敵に余裕はない。顔面蒼白で床から飛び出して片割れの名前を叫んだ。

「比良目！」

「……おや、貴方が比良目ではないのですか？」

「うにゅ？」

予想外の言葉に、普段は絶対使わないような言葉を発してしまった。

「僕が、比良目？……」

「ええ、私の記憶が正しければ貴方は比良目。性別は男。左利きで若干相方より行動が遅い。左右非対称の右側が黒色の服を着ているはずですが……」

「な、何でそんなこと分かるの？僕たちでも分からなくなるのに……」

「だって、ずっと目で追っていましたから」



この双子たちには共感シンクロという能力が備わっている。特定の相手の思考や感覚を共有できる能力だ。だから音が伝わらない地中でも合図が取り合えるのだが、そのお陰でたまにどちらがどちらか分からなくなる時がある。

それがこんな初対面の相手に見破られるとは……。こんな奴に勝てるわけもない。

「貴方たちは互いが近すぎるから分からなくなるのです。さて、相方がいなくなれば貴方は塵同然。ここは通らせていただきますよ。それとも、私たち二人を相手にしますか？」

「……………どうぞお通りください」  
「結構」

鬼丸はいつもの不機嫌そうな顔で、長老は好々爺のように笑いながら出口に向かっていった。

鬼丸、鬼珠。第壹及び第貳区画突破。

「広いところに出ましたね」  
「どうやら儂達は第参区画に入ったようじゃの」  
「第参区画？」

自分はこの場所に関しては、何も知らない赤子同然。知らぬは一生の恥というし、鬼丸は思い切って聞くことにした。

「この城は八つの区画に分かれておる。今は正面の第壹区画から入って三丁目。もうちよつとで東部分と合流して、それから最後の第捌区画、要するに社長室じゃな。もう一頑張りじゃ」  
「と思つてここに来たのが間違いだぞう。お前たちはここで死ぬんだからなあ」

こんな広い場所で一人ポツンと顔長おちよぼ口の男が立っている。先ほどの区画は二つが合同だったとしても部下が大量にいたのに、ここはゼロ。

それがこの男の人望のなさをあらわしていた。

「第参技術開発部部长、万坊<sup>まんぼう</sup>。お前たちのあいてだぞう」

万坊と名乗つたこの男はスーツ姿、まではいいのだがモヒカンという髪型が明らかにミスマツチだった。その髪型が自分の顔長さを助長させていることに気が付かないのだろうか？

とにかく、そりゃこんな奴が上司じゃ嫌だな、と鬼丸は妙に納得していた。

「また変な奴が出てきて……で、私たちと戦う気ですか？  
無謀な……」

「当然。お前たちは坊を怒らせたからなあ」  
「？はて、何かしましたっけ？」

自分たちはここに来たばかりである。恨みを買つようなことは……  
・・確かにやったが、名前も知らなかったこの男に関わるようなこととは何もやっていないはずだ。

そんな態度に腹を立てたのか、万坊は声を荒げて怒鳴りあげた。

「お前たちは坊の可児かにちゃんをいじめただろう!!」

かにちゃん？何とおいしそうな名前だろうか、鬼丸は蟹が好物である。

「おや？そんな人は知りませんが……。人違いじゃないですか？」

「うるさい！そんなこと関係ないぞう！お前たちは坊が倒す！ホッ  
プ……」

顔長の男がスキップをする。本来ならば気持ち悪いと思うところだが、いや、気持ち悪いとは思っているが、この男は部長クラス。

吐きそうな感覚に襲われながらも、鬼丸はデザートイーグルを握り締めた。

「ステップ……ジャアアアンプ！」

「……はあ!？」

巨体が華麗に宙を舞う。鬼丸は驚きの声を上げながらも妙に納得していた。

なるほど、この広い場所はこのためにあつたのか、と無駄に広い場所に感心していた。

20メートル以上飛んだ万坊の姿を見て、鬼珠がポツリと呟いた。

「そういえばマンボウは自分についている寄生虫を落とすためにジャンプするらしいの。鬼丸、アイツには触らんほうがいいぞ。ヌルヌルの粘膜と寄生虫がこびりついているから」

「言われなくとも触るつもりはありません。だってマンボウというのは、ジャンプすることはできても……」  
「ふおおおおおおー!!」

万坊が奇声を発する。劈くような声に不快感を覚えながらも、鬼丸は体を半回転させた。

「着地はひどく苦手なのですから」  
「　　グベシッ!」

着地に失敗した万坊の体がひしゃげる。血がドクドクと出ているが、どうやら生きているようだ。

20メートル跳んだという事実には驚きだが、20メートルの地点から落ちても生きているという生命力にも驚きである。鬼丸は憐れむような声で、話しかけた。

「バカですねえ。わざわざ自分の体の限界を無視するようなジャンプをするから悪いのですよ」  
「………いい」  
「へっ?」

万坊の呟きに、鬼丸の脳裏に嫌な予感が走る。そして見事にその予感は当たってしまった。

「この痛みがいいんだぞう。もっと!もっとおおおおおー!!」  
万坊は再び跳躍する。その跳躍は先ほどより高く、血が辺りに飛び散ってすぐく………気持ち悪かった。

鬼丸は落ちてくる血を左手で払いながら、本当に困ったように長老

に話しかけた。

「あちゃあ、根っからの変態さんでしたか。どうしましょうか、長老……」

「うむ、ああいう奴は何度殴ろうが無駄。悦ばせるだけだからの。見ておれ……えい！」

「ひよ!?!」

万坊の周りが透明な箱によって囲われる。コレこそ長老の十八番、結界による拘束である。

コレによって囲われた敵は、長老より強い魔力を持たない限り出ることにはできない。オマケに魔力がどんどん吸い取られていくという、悪魔の拘束具のような代物である。

万坊は結界の壁をどんどん叩き何か叫んでいた。

「な、何やっているんだぞう?はやく……早く坊に悦びをおおおお!」

「ちよつと長老。アレ、どうするんですか?魔力がどんどん吸い取られていくんですよ。最悪死に至ることも……」

「大丈夫じゃよ。魔力がなくなれば自動的に出ることができる。まっ、なくならない限り出れんがの。さあ、鬼丸、行こうか」

「えぐい……」

生きたまま敵の動きを制限する、それがどんなにえぐいことか。金太郎などはもちろん、鬼丸でもやらなことだ。

この老人のようにはなりたくないものだ、鬼丸はそう思いながらも、その長老の背中を追っていった。

「もうすぐ第斜区画ななに入るのう。そろそろ気を引き締めよ、鬼丸。本物の金の亡者が来るぞ」

「本物の……金の亡者ですか？」

確かに、第斜区画に近づいていくと徐々に霧囲気が変わっていく。空気が重いような、体全体にかかるプレッシャーのようなものが鬱陶しかった。

それでも進んでいくと、巨大な魔力の余波のようなものを感じた。

「む？確かにこの霧囲気は……今までとは違う。かなりの実力者……長老はここにいてください。私がやります」

「うむ」

長老が下がり、鬼丸はデザートイーグルを取り出す。少しずつ精神が高揚していくのを押さえながら、鬼丸は敵に近づいていった。

「……この霧囲気、どこかで感じたことがある。ここは第七区画、竜宮城の深部。油断は禁物……決めるなら、一撃で」

鬼丸は曲がりの角に身を潜め、デザートイーグルを握り締める。敵の動きが止まったことを感じると、その一瞬をとらえ、敵に銃口を向けた。そして……

「覚悟！」



第三章・第五話：海洋生物って面白い（前書き）

今回のお話、今まで一番馬鹿げたお話になっていきますので、肩の力を楽にして、リラックスしてお楽しみください（笑）



### 第三章・第五話：海洋生物って面白い

竜宮城第肆区画。竜宮城の東門から入って最初にあるこの区画は、規模としては広さ的にも人口的にも竜宮城最大である。

というのもこの開発部の部長がすばらしく人がよく、別のある開発部から人が流れてきたという話だ。

そんな第肆技術開発部部长、岩士は敵に対しても友好的であった。表面上は。

「ははっ！大変そうですね、手を貸しましょうか？」

そついいながらも岩士は手を休めない。人差し指で空に印をきり、右手で部下に指示を出している。それに従い半魚人たちは先ほどとは比べ物にならないほど、知的に、戦術的に攻撃を仕掛けていく。正直言うと、金太郎とかぐやは岩士の部下に囲まれ、八方塞がりであった。

「何が大変そうだ！全員オメエの部下じゃねえか！」

「そんなこと言うんだったら、早く引き上げさせてくださいよ！」

「はっは！それはできないねえ」

そつ文句を言っているうちに部下の数が増えていく。その原因は岩士の後ろに存在する黒い穴のせいであった。

岩士が作り出したあの黒い穴、おそらくは空間と空間をつなぐものなのである。そこからウジャウジャと、まるで働き蟻のごとく岩士の部下が出てくるのであった。

金太郎が部下をいくら雷で倒そうが、かぐやがいくら月光で防ごうが、その倍の数の部下はでてくる。

金太郎も、かぐやもうんざりしていた。



いはついに爆発した。

「そんなに笑うなって」

「あっはっは！……ふう、さて、どうしますか？このまま貴方一人で戦いますか？私たちはそれで一向に構いませんけど、キントさんのビリビリは痛いですよ」

「ビリビリ言うな」

「……そうだね。彼のビリビリは痛そうだ。ここは一旦引くのが得策でしょう」

その言葉と反して、岩士は自分の武器を構える。

「しかしここで諦めては倒れていった部下たちに面目が立たない。最後の一人になっても僕は戦うよ」

「ほう……」

なるほど、こういう態度が部下に慕われている理由なのか。どこの誰かは知らないが、こういう人間に部下を取られても仕方なからう。敵ながらあっぱれである。

金太郎は岩士と正面に向き合つと、紫電をとって構えた。

「来るなら来い！俺が相手してやる！」

「……感謝する。それでは、覚悟！」

岩士は駆け出す。倒れていった部下のために。金太郎は力を入れてそれを受け止めようとす。

さて、余談だが金太郎は魔術師ほど魔力の制御に長けていない。なので感情の起伏によって、不意に魔力が漏れ出すことが多々ある。周りの者を痺れさすこともあった。

残念ながら今回も例によって、魔力が漏れ出した。

「ビリビリビリビリ！」

「……………あれ？」

「……………最悪」

「……………ひどい」

岩土は感電して、黒焦げになって倒れる。金太郎はしばらく呆然として立っていた。

金太郎、かぐや、リュウ、第肆区画突破……………。

「キンタさんは本当に慈悲も欠片もありませんね。あついう場面では一騎打ちするのが礼儀でしょう」

「し、仕方ねえだろ！力入れたら出ちまったんだから！」

「……………かわいそう」

非難轟々……………

かぐやはともかくとして、リュウにまで言われるとは……………。子供が好きな金太郎にとって少し、いや、だいぶショックであった。

「そんな……………リュウまで……………」

「当然の反応ですよ。ねえ、リュウちゃん」

「ねえ」

「いつのまに仲良くなったんだよ？」

リュウがかぐやに同意を示す。自分にはあまり反応してくれないの……………。

この差は何なのであろうか、とリュウに聞いてみると、女の子だからという簡潔な答えが返ってきた。  
なるほど、それならば仕方ない。

「ていうよりココはどこですか？随分広いホールですけど」

「さあな……」

そういえば金太郎たちはリュウに目的も何も聞かされず、ここまで来た。ここがどこかも分からず変な場所に進んできて不用意にも程があるだろう。

そしてさらに悪いことに変な場所には変な奴が現れるのであった。

「ふはっは！お困りのようだね、お嬢さん方。俺が出口まで案内しようか？」

広いホールにジャージ姿の黒髪、浅黒の肌の男。少し自分たちとは顔立ちも違うように見える。この国の人間ではないことが分かった。初めて見たその人種に、金太郎は少々驚いていた。  
かぐやとリュウは、というと眉をひそめ金太郎の影に隠れた。

「あの人どことなく暗鬼に似ているから嫌いです……」

「確かに……。オメエ誰だ？」

「ふっは！俺の名前は第五技術開発部部长、真黒まぐろ。野郎には興味ネエゼ！」

「やっぱり暗鬼だ……」

なるほど、この会社の部長というのは碌な奴はいないらしい。

まあ、あのウラシマが勤めている会社だ。まともじゃないと思っ  
ていたからそこまでショックじゃない。

ところで、金太郎は先ほどから疑問に思っていたことを口にした。

「ところでオメエ。何で常に走り回ってんだ？」

「あ？オメエしらねえのカヨ？」

「はあ？」

はて、何のことだろうか。

「マグロつつうのは海水から酸素を補給するだろ？だからたとえ休んでいるときでも常に動き続けているんだよ。つつか止まったら死ぬ。そんなこともしらねえノカ？」

「いや……ってどうかオメエ、マグロなの？」

「んなわけねえジャン。ばっかじゃネエノ？」

「……」

……駄目だ、こいつ。話に通じていない。人種の壁が高いことを金太郎は始めて実感した。

と、半ば絶望していると、そんなことも無視して真黒は動き出す。

「オメエたちの命運もここでエンド。死んでもらうぜ、高速泳法“九七式”」

今までジヨギング程度だったスピードが突如加速する。まるでそれはジェット機、音すらも遅れて聞こえるほどのスピードであった。

金太郎は目でしか追えないそのスピードに驚愕しながら、その顔は笑っていた。

「おお！はええな、おい！」

「はっはっは！マグロは最高時速で魚雷並み（約90キロ）のスピードを出せるんだぜ！しかも俺の皮膚は抵抗を極限までなくしたものだし、心拍数はオメエらの4倍。まさに走りに特化してんだ！そ

んな俺についてこれるカナ？」

「だからオメエ、マグロじゃねえだろ！？」

と、ツツコミながらも自分にはどうすることもできない。槍斧なんて扱っていることから分かるとおり、金太郎は速さというものに疎い。自分の専門は力と結界による防御だ。

一人の戦士としてならば自分は未だに半人前なのだろう。しかし金太郎はそれで納得していた。

自分の専門外ならば、仲間に任せればよい。

「かぐや、いけるか？」

「……正直あんなものに触りたくもないんですが仕方ないですね。一つ勝てる方法を思いつきました。キンタさん、少し協力してください」

自分には仲間がいる。何も全てを自分でやる必要もない。自分の強さとはこういうものだ、と金太郎は思っている。

かぐやは首をけだるそうに回しながら月光を取り出し、それを振るった。するとそれは一筋の光となり、絹糸のように美しかった。

「月光。キンタさん、コレに掴まってください」

「えっ……ああ　　って何する気だよ？」

「……自分で頼んどいてアレだが、金太郎の脳裏に嫌な予感が走る。」

「そんなもん……こうするに決まっているじゃないですか！」

かぐやは月光を大きく振りかぶり、そしてそれを釣りの要領で投げ

飛ばす。

金太郎はなす術もなく吹っ飛ばされ、女性に吹っ飛ばされた悔しさと、何がなんだか分からないで叫ぶばかりであった。

「うっそおおおん！」

「うおおおおお！！獲物きたあああああ！！」

まるで金太郎が吹っ飛ばされたタイミングを見計らうかのように真黒が迫ってくる。金太郎は逆さまになりながら、真黒が大きく右手を振りかぶっているのが見えた。金太郎はそれを不安定な体勢の元で必死に防ごうとした。

「うぶっ！」

「キンタさん、絶対に放さないでくださいよ」

金太郎は必死に命令を果たそうとする。

とにかく今はかぐやに従うしかない。腕を絡ませ、真黒の拳が抜けないように固定し引き寄せる。

「ちよ、お前、離せっテ！」

「かぐや！どうにかしてくれ！」

「分かりました。どうにかしましょう！」

そう言っただけかぐやは月光を両手で握り締める。まるでその姿はベテランの漁師のように堂々と、威厳に満ちていた。

しかしかぐやの顔をよく見ると、彼女の口が三日月形に歪んでいた。

「マグロ、一本釣り！」

『ちよっとおおおお！』



突然系状になっていた月光が巻き上がる。離すこともできない金太郎と真黒は引つ張り上げられるばかり。

まずい、このままだと地面に直撃する！

地面に叩きつけられる直前、とっさに金太郎は体を入れ替える。下に真黒、上に金太郎が来る形となり、そのまま地面に直撃した。

「いてええ！」

「ぐぼおおおお！！！」

床に叩きつけられた衝撃と、金太郎による衝撃が合わさりそれは非常に甚大なものとなる。真黒は口から血を少々吐きながら、ピクピク動いていた。

「つ、釣られた、ゼ……」

「……こんなことで勝ったっていいのか？」

「いいんですよ。さあ、もっと奥に進みましょう」

「いや、待て………。こいつ何か言っているぞ」

真黒が倒れながらブツブツと何か喋っている。遺言を聞いておくのも悪くないかもしれない、そう思っただけかぐやは耳を近づけた。

「び、美少女に釣られるのも……悪くないかも……」

「死ね、変態！」

「ぐぼああああ！！！」

真黒の腹に力一杯、それこそ殺す勢いで蹴りを入れる。口からは胃の中にあつた何かを吐き出し、体はビクビクと痙攣している。

金太郎は言いようもない気持ち悪さを感じながら、彼に少し同情していた。かぐやの蹴りは本当に苦しい。

「不愉快です！早く行きますよ」

「うん」

「ああ……分かった」

当の犯人のかぐやとリュウは当然のように奥へと進んでいく。金太郎はその後を追うしかなかった。女と言う生き物は怖い、と金太郎は不意に思った。

かぐや、金太郎、リュウ、第五区画突破。

「オメエも大概、情け容赦ねえよな」

「ふん！そんなもの、乙女に不用意に近づこうとする野郎共が悪いのですよ！」

「お前のほうから近づいたんだけどな……んな事よりも腹が減ったな。俺たち昼から何もくってねえから……」

「そうですね。敵も鰯やらマグロやらおいしそうな名前ばかりですからねえ。今度は何がでてくるでしょうか？」

今まで見た魚の種類は鮪、鰯、鯖、鮫鰯、鯖、秋刀魚、鰹、鯛、鰯……実においしそうなのはかりである。見ている飽きないくらいだが、想像するだけで涎が出てくるから困ったものだ。

部長クラスにもなると何故かおいしそうに見える。少し楽しみにしていた。

「いたぞ、敵だ！誰か来てくれ！」

了解。第陸区画に増援を送る。敵を見失うな。

辺りにけたたましく警報音がなり、ワラワラと半魚人が武器を持って出てくる。彼らもおいしそうに見えるが、部長の登場を待っていたのに……。

雑魚には興味ない。早々に退場してもらおう。

「あちゃあ。雑魚のお出ましですか。ビリビリお願いします」

「もう俺の名前、ビリビリでいいや……」

金太郎は手を振るう。と、一瞬にして半魚人が倒れこんだ。ただ単に地面に電気を流したただけだ。常に水に晒され、感電しやすくなっている彼らにとって金太郎と言う存在は死活問題であった。

そして、今の金太郎にとってもこの部下たちは死活問題であった。

「お疲れ様です。キンタさん。……どうしましたか？」

「やべえ。本当に腹が減ってきた……マジ死にそう」

魔力を使うと体力や精神力も磨耗する。体がエネルギーを求め叫んでいた。

腹と背が引っ付きそうとはこのことなのだろうか、あまりの空腹感に幻覚すら見える。かぐやは月見団子に、リュウはショートケーキに見える。

と、どうにもならないことを考えていた金太郎に声かけられる。

「へえ。随分とアタシの部下をやってくれたじゃないの……」

「おや、誰ですか？」

いつの間にか後ろにいたのはまだ年端もいかない少女。林檎のような真っ赤な髪の毛を二つ結び鋭い釣り目が、彼女がどういう人間か

ということを主張していた。

彼女の右手は明らかに人間のものではない、はさみになっていた。

「竜宮城第陸技術開発部部长、可児かにや！よろしゅうな！」

「……どこその関西弁の猿を思い出させるような少女だった。かぐやは少女の登場に少し驚いていた。

「あら？女の子の部長もいるんですか？」

「そうよ！竜宮城は実力主義だからさ！アタシみたいな女でも部長になれるのさ」

「へえ……じゃあ私も竜宮城に入りましょうかね？」

「ってキンタさん、どうしました？」

「………った」

金太郎が聞き取れないほど、小さく何かを呟く。

「腹が………減った」

「えっ？」

「腹が減った………蟹か………蟹はうまいよな………」

よろよると、今にも倒れそうな雰囲気な足取りで金太郎は歩いていく。

しかし彼は倒れない。何故なら彼には目標があるから。

目の前の食料を手にするために

「しゃぶしゃぶ………刺身………鍋………締めは、雑炊か？………」

「………ちよっと、あんさん。こっち、くんなや………」

可児の表情がひきつる。迫り来る金髪の敵は、弱々しく、しかし抗えない雰囲気を携えこちらに向かってくる。逃げようとしても逃げられない、こちらが逃げた瞬間、捕食されるだろう。なす術もなかった。

「でもやつぱり、蟹は刺身か……新鮮な蟹は、生で食べるのが一番いいよな！」

「ちよつと！あんさ　　アッーーーーー！」

蟹は金太郎がおいしくいただきました。

「ふう……ごちそうさまでした」

「ひどい　　アタシ、初めてだったのに……」

「ちよつ！誤解を招くような言い方すんなって！」

そう言われても仕方ない。かぐやはどこか軽蔑の眼差しで金太郎を見る。

どうやら少女の右手のはさみは後で付けられたものらしく、簡単にはずれ、そしておいしかったです。本当にありがとございました。

と、金太郎が満足しているとかがやが何かを発見した。

「あつ！出口」

「本当か！？じゃあ急ご」

「いや！かぐや、待て！」

「？……どうしましたか？」

金太郎がかぐやの進行を止める。

「この魔力……他の奴らとは違う……膨大に、おぞましくて……かぐや、リュウ、ここで待ってる！俺が見てくる」

「はいはい。分かりました」

「……」

リュウとかぐやは金太郎の後ろへと下がる。

この角の先に何かを感じる。さっきまで感じなかった魔力。部長レベルとは比べ物にならないほどの魔力。

金太郎の額に汗が流れる。

「この魔力……たくさんの色を持っているな。魔術師か……」。しかし、瞬発力なら退魔師のほうが上。ならば一撃で

「

金太郎が飛び出す。

「決める！」

### 第三章・第六話：最深部に突入だ！

「まったく……なんで男の人はこんなにもでしゃばりなんだろうね？ここで待っていれば敵は向こうから来るというのに」

「……………」

かぐやは呟くがリュウはその問いに答ええない。かぐやも元から期待していなかったものでそれで別によかった。双方喋ることもなかった。辺りには静寂だけが漂っていた。

さて、金太郎は自分に任せると言ってお出で行ったきり、帰ってこない。どうせあの人のことだから、と大して気にしてもいないのだが、すぐ暇である。金太郎からココを動かす、と言われていたが、暇で暇で仕方がない。

かぐやがつまらなさそうにあくびをすると、リュウがポテポテと歩いていった。

「ちょっと、リュウちゃん！どこに行くのですか？一人で行ってしまつては危ないですよ」

「……………」

リュウは答ええない。

流石のかぐやでもこんな小さな子が迷子になるのは気にかかる。仕方のない。大きく息を吐いて、その小さな背中を追いかけた。

「まったく……貴方も大概仕方ない子ですね。ちょっと待ってくださいよ」

リュウはどんとどんと歩いていく。迷うことなくまっすぐに目的地ま

で歩いていく。

リュウを見失ってしまったては逆にかぐやが迷ってしまいそうだ。

と、しばらく無言でリュウについていくと明るい場所に出た。海中トンネルのような、周りが海に囲まれたその美しい光景にかぐやは目を奪われていた。

「うわあ……綺麗……」

澄み切った青、それに太陽の光が差し込んでより一層輝いている。その青を優雅に泳ぐ魚達。こうして見ると本当に優美で、夢くて、まるで夢のようだ。

……この会社の部長を見てみると、どうしてもこの美しさを忘れてしまう。自分たちは今海の中いると言う神秘の中にいるのだ。

しばらくかぐやが見とれていると、リュウが突然口を開いた。

「リュウ、かぐやが好き」

「え？」

「リュウ、かぐやが好き」

「な、何言っているんですか？いきなり……」

「リュウ、かぐやが好き。だからココ連れてきた」

リュウの口数が途端に増える。突然の変貌ぶりに少々驚きが隠せないが、自分たちの立場を忘れてはいけない。自分たちは侵入者、長くココに留まることは危険だ。

「私もリュウのことは好きですが、ココは危ないですよ。早く戻りましょうよ」



「危なくない。リュウがかぐやを守るから」  
「ちよつと！」

突然リュウがかぐやに抱きつく。  
甘えんぼの子が大事なものを抱きしめるように、ギュツとかぐやを抱きしめた。

自然と嫌な気分にはならなかった。

「……どちらかというところが守る側なんですけどね」

「リュウ、かぐやが好き。だってあの人の匂いがするから」

「……あの、人？」

「あの人はいい匂いがする。蓬萊の花の匂い。かぐやもおんなじ匂いがする」

蓬萊の花、それは月にしか咲かない花である。かぐやはそれが幼いころから好きで、カナモリをはじめとする周りの天人に押し花をあげていた。

何故その花のことを知っているのだろうか、そうかぐやが疑問に思っている、リュウが予想外のその名を口にした。

「リュウ、かぐやが好き。ツクヨミ様とおんなじ匂いがするから」

「っ!?!……何故その名を？」

ツクヨミの名前を知っていることは別段不思議なことではない。御伽の国のほとんどの人がその名を知っているから。

しかし、今この子はなんと云っただろうか。匂いが同じ、だど……  
……どういうことか？

かぐやはリュウに詰め寄った。

「答えなさい。貴方、一体誰なんですか？」  
「……リユウは」

「覚悟！」

「決める！」

二人は同時に自分の武器を敵の首筋に向ける。互いに相手を殺す勢いで出て行ったのだが、拍子抜けしてしまった。互いに顔を見合わせ、しばらく間が空いた。

「……ってキンタ？」

「……鬼丸か!？」

「貴方こんなところで何をしているのですか？」

「それはこっちのセリフだぜ。お前こそココで何やってんだよ?」  
「……長老と一緒に」

長老はほっほっほど、笑っている。どうやらこうなることが分かっていたらしい。それよりも金太郎は彼がまともに動いている見たとががない。

本当に何をやっているのだろうか？

「私は、ウラシマを追ってきたんです」

「ウラシマを?何で」

ウラシマといえば金太郎の中では渦中の人間である。そのウラシマ

が何かをしたと言つのならば一番気にかかる。自然と声のボリュームが大きくなつてしまった。

鬼丸は別に語りづらそうもなくはつきりと言いつつ放った。

「ウラシマが鬼ヶ島を強襲し、玉手箱を奪つていきました」

「えっ？」

「これは竜宮城と鬼ヶ島の間には結ばれていた契約違反です。ですから私は長老と共にこの会社の社長、乙姫に」

「ちょ、ちよつと待てよ！ウラシマが竜宮城に攻めてきたって・・・それって俺たちを裏切つたって事か！？」

金太郎からサツと血の気が引く。

ウラシマは確かに掴みどころもないし、いつもヘラヘラしていて何を考えているのか分からなかったが自分たちが助けを求めれば必ずそれに答えてくれた。

だから金太郎はウラシマのことを頼りにしていし、その仲は変わることはないものだと思つてさえた。

鬼丸は金太郎のそんな表情を見て答えにくそうに、しかしはつきりと答えた。

「正確に言うならばウラシマは私たちを裏切つてなどいません。ウラシマは元々竜宮城の人間。本来ならば私たちの仲間ですらなかったのですよ」

「・・・そんな・・・」

金太郎はあまりの衝撃に呆然とする。

ウラシマは自分たちを鬼ヶ島に連れて行つてくれた。

仲間でもなんでもないのに

ウラシマは天人を退ける鬼丸の計画に協力してくれた。

なんとなく？

ウラシマと共に祭りを駆け巡った。

それも嘘。

それでもすぐさま否定しようとするが、鬼丸の言葉が重くのしかかった。

「とにかくコレは事実。竜宮城がこちらを攻めてきたのならばこちらも攻めるまでです。……キンタ、どうしました？」

「いや、なんでもない……」

「……キンタ、貴方はこんなところで何をしているのですか？」

「ああ……。俺は、鬼ヶ島からかぐやと一緒に知らん女の子に連れてこられたんだよ。それで今に至る」

「おや、かぐやがいるのですか？かぐやはどこに？」

鬼丸にとってかぐやは最優先事項。すぐさまこの話題に喰らいついた。

「おい、かぐや。出てこいよ」

自分が先ほどまでいた角に話しかけるが、返事はない。

「……あれ？おかしいな。さっきまでいたはずなんだけど」

お、おい、鬼丸！そんな目で俺を見るなって！

「キンタ……。かぐやに何かあったらどうするんですか？……その場合の責任、キンタに百八回の鞭叩きですよ」

「除夜の鐘！？ていうか怖い！そんなに不安なら自分で探しに行けばいいだろ！？」

「はっ！そうだ！今すぐいかないと！キンタ、後頼みま」

「何言っておるんじゃ、鬼丸。仕事をサボル気か？」

今まで黙っていた長老が俊敏な動きで鬼丸の首根っこを掴み持ち上げる。鬼丸はなす術もなく大人しく持ち上げられ、説教を受ける覚悟をしていた。

「お主、自分の仕事の責任とかぐや、どちらが大切なんじや？」

「かぐ」

「仕事に決まっておろうが。早く行くぞ、鬼丸。金太郎君も」

「……はい」

長老の言うことは絶対である。それは立場上の問題だけでなく、彼が発する雰囲気にも飲み込まれるからだ。当然鬼であり、若輩者である鬼丸は逆らうことはできず、素直に顎を引くことしか出来なかった。

「……って俺も？」

それは金太郎ですら例外ではない。

「……本当にココ、海の中なのか？」

金太郎はその光景に唖然としていた。

大体海のなかに酸素があること事態、非常識なこと。それなのに今自分の目の前に広がっているそこは今まで以上に広く、何故か草木も生きている。

何も知らされずココに来たら、間違いなく海の中とは思えないだろう。

「正真正銘海の中じゃよ、金太郎君。さてようやく第斜区画か・・・そろそろ来るかの」

「来るって・・・今までの流れから言うと第斜技術開発部とやらでも出てくるんですか？」

「いや、第斜技術開発部なんてものは存在しん。技術開発部は6つしかないからの」

では誰が来るというのだろうか、鬼丸の頭に疑問詞が浮かぶ。

「ただ、例外が一つある。存在するはずのない七つ目。その名は・・・」

「はいはい。僕たちの事ですか？」

木の陰から人影が現れる。トロンと眠そうな目、ヨレヨレのスーツを来た覇気なんてものは感じられない・・・二足歩行の亀。

「あつ！あの時の亀だ！」

金太郎はこの亀の顔に見覚えがあった。

この男はウラシマと最初に会ったときに、ウラシマの側にいたこの男、そして突然巨大化して自分たちを邪魔したあの亀だ。

「どうも、お久しぶりです。第零技術開発部副部長、亀吉です。どうぞよろしくお願いします」

「第零技術開発部？」

見た目とは裏腹にはつきりとした口調で疑問を残すような自己紹介をする亀吉。

鬼丸と金太郎の頭の上には疑問詞が増えるばかりである。

「零って何ですか？零って……」

「何も無いってことか？」

「あながち間違っていないかもな。零というより  $i$  (imaginary number) というほうが正しいか？」

「うーん、そうかもしれないですね」

Imaginary number、虚数と言われるそれは通常の数には含まれず、大小関係すら存在しない本来ならば存在し得ない数である。

その言つとおりであれば何故彼らは存在するのだろうか、虚数というものは実数(現実)には存在しないはずなのに。

「貴方が僕たちのことを覚えていてくれるなんて光栄ですね」

「御託はいい。どうせ僕たちのことを今まで監視していたのじゃろう」

「ご名答です。いやあ、流石ですね。うちの部下たちにはこつそり、と言っておいた筈なんですけどね。……こりゃ減給かな？」

亀吉がそういうと、木陰がガサッと揺れた。亀吉がそちらに視線を配ると、木の陰に感じられた気配が二つ、消えうせた。

金太郎は驚いているが、鬼丸と鬼珠にとっては何てことない。ココに来たときから誰かに監視されていることなど分かっていた。だから何事もなかったかのように、鬼丸は亀吉に問うた。

「で、その第零技術開発部の副部長さんがどういっつもりですか？」  
「君たちを止めようかな、と」

丁寧な口調でサラリと言う。あまりの爽やかさに少し言葉に詰まっ

てしまった。

「へえ……私たち三人を相手にして、ですか？」

「うん、そうだね」

「随分と自信があるじゃねえか。いつておくが、俺たちは結構強いぞ」

「できるさ。彼女のためなら……我に宿りしは形、我の姿形は変幻自在　　超巨大化！」

「……驚くようなことは何もない。

この男のやることは分かっていたし、こういう魔術もあることは知っていた。自分の細胞を変化させ巨大化、凶暴化させるような魔術が。

この魔術は強力だ。少なくとも身体強化の魔術の分類では最強の一種である。しかし元には戻れなくなる危険があり、今では誰も使わないはずだ。

そんな情報を頭の中で反復させながら、鬼丸はデザートイーグルを取り出す。現実には現実、現実ならばそれをぶち壊すのみ。

「もうこの展開には慣れましたよ。さあ、全力で　　」

「まあ待て。鬼丸」

長老が右手で鬼丸の進行をふさぐ。何もかも分かっているような顔で自分の行動をとめる長老に鬼丸はイライラが溜まっていく。いい加減こんな展開はうんざりだ。

「もう、一体さつきからなんなのですか？長老。私のセリフをことごとく邪魔して……今度は何です？」

「ありていの言葉を言うならば、“ここは儂に任せて、先に行け”かの」



「よっ！フラグー級建築士！」

巨大化した亀吉が野太い声で茶化すが長老と鬼丸は聞く耳をもたない。

イライラしている鬼丸は長老を糾弾するように言い放つ。

「長老、何故ですか？ココまで来たのは貴方が襲撃、もとい交渉するためでしょう。ココで貴方がとどまる必要はない」

「まあ、聞け。鬼丸。こいつら第零技術開発部の部長は、お前らがよく知っているウラシマじゃ」

「・・・・・・・・」

今度は金太郎の表情が曇る。

ウラシマ、その名を今は聞きたくはなかった。しかし・・・・・・・・

放っておくわけにはいかない！

「儂よりお主らのほうが、話があるんじゃないのか、彼に？ん？」

「いえ、私には話など」

「あるぞ、俺たちには！アイツと一度話さなくてはならない！」

「・・・・・・・・もう！二人揃って私のことは置き去りですか？酷い人たちですね。いいですよ！そこまで言うのなら行ってやるうじやないですか！」

こうなつた金太郎は止めても無駄であることを鬼丸は知っていた。

「さあ、行け。若者たち。・・・・・・・・ああ、そうだ。助言を言うとならば、“後ろに気をつける”。それと餞別じゃ。ほい」

「む・・・・・・・・」

鬼丸は長老から何かを受け取る。

手の中にあるそれを見ると、三枚の紙切れ。もちろんただの紙切れではなく、長老自家製の結界の符。その力は折り紙つきである。

「あ、ありがとうございます……」

「うむ。気をつけてな」

鬼丸と金太郎は駆け出して行く。巨大化した亀吉の股を抜け、扉に向かつていく。

亀吉はその光景をボウツと見ていた。

「おや？止めないのか？」

「うん。僕に言われた命令は“鬼の長老の足止め”だからね」

「なるほど、のう……」

自分のことはすでに相手に知られている。敵はこうなることも予想済みだったらしい。

大方この亀吉で自分を疲れさせておいて、全力で討つつもりだったのであるう。

しかし残念だ。こいつらの予想は間違っている。人生とはいつもうまく行かないものだ。その法則に則って今回も、無敵の鬼丸と金太郎イレギュが現れた。

長老はフツと笑った。

「では、始めようか巨大亀。いや、それともこういった方が良いかな？“キメラ君”」

「……違うね。ガラだよ。始めようか、老いぼれ」

「ほほっ、若造め。覚悟せよ」

長老と亀吉が戦い、鬼丸と金太郎が奥へと進んでいるとき、その光景をモニターしている二人がいた。

「……………来るわね、敵が。ウラシマ」

「はい……………」

一人はイスにチヨコンと座っている女。まだ成人していないように見え、都市は17、8と言うところか。陶磁器のように白い指にその長い指を絡ませて、モニターを凝視していた。彼女の名前は乙姫、この竜宮城の社長である。

そしてもう一人はよく見知った青い髪の少年。竜宮城最後の部長、浦島竜胆であった。

「貴方が果たすのは竜宮城との契約。それ以外は」

「いえ、違います」

乙姫の遊んでいた指が止まる。信じられないものを聞いた際に、聞き返すような目で浦島をにらみつけた。浦島は当然のようにそれに答えた。

「僕が果たすのは、貴方との契約です」

「ウラシマ……………」

「……………それでは、第零技術開発部部长、浦島竜胆。参ります」

### 第三章・第七話：理想と現実に飲まれて水没しやがれ

金太郎は成り行きでココまで来た。

リュウに勝手に連れてこられ、かぐやとなんとなく奥を目指し、そして鬼丸たちと合流した。成り行きで来た自分には特に今回は何かをすべきことはなかったはずだ。

しかしココまで来たのは、ありふれた言葉だが“必然”だったような気がする。自分はココに来て仲間を連れ戻す、使命を帯びていたのだと。

「だから、ウラシマ……」

暗い通路から明るい場所にでる。そこに立っているのは見知った青髪の少年。金太郎はその少年に大きく呼びかけた。

「お前に会いに来たんだぜ！」

「やあ、ようこそだね。鬼丸君、キンちゃん！」

ウラシマは人懐っこそうな笑顔で二人を迎え入れるように腕を広げた。その顔はいつものニヤニヤ顔とは違い、妙に爽やかで、逆に気味が悪かった。

「社会見学はどうだったかな、二人とも？ 楽しんでくれたかな？」

「社会見学？」

「僕が特別に用意したんだよ。感謝して欲しいね」

ウラシマは大きさにポーズを取り、後ろを向く。何かを探したような素振りをしたかと思うと、その手には一枚の紙が握られていた。

その紙には入場許可と、鬼丸の名前が書かれていた。

「鬼丸君も将来のためにこの経済の中心地、竜宮城を見たいだろうと思ってるね。君にも来てもらったんだ。おもてなしに満足していただけたかな？」

「随分なおもてなしでしたよ……」

「まあ何でか知らないけどキンちゃんとかぐやちゃんも来たんだけど、それも好都合だったかな。前に来たと言ってたよね。良かったよ」

「そんなことはどうでもいい！ お前どうして俺たちを裏切ったんだよ、ウラシマ!？」

「……」

ウラシマの表情が一瞬だけ止まる。しかしそれも一瞬だけで、何事もなかったかのように正常に、いつもと違う表情で口を動かし始めた。

「僕は君を裏切ったりなんかしてないよ。鬼丸君の言うとおり、始めから僕は君たちと仲間になった覚えはない。初めから仲間になっていないのなら裏切ったことにもならないよね。言うならばスパイ、コレも仕事のうちだって事さ。今じゃあ元の仕事に戻ってせいせいして」

「ならば何故、あの時あんな顔をしたのですか？」

鬼丸が口をはさむと、ウラシマの表情が凍ったように止まる。

しばらくしてようやく溶け出した彼の口はぎこちなく、動き始めた。

「……あの時の顔？ 一体どんな顔だったっけ？」

「とぼけないでください。あの時の顔、貴方のおんなに疲れた顔を見たら誰でも一生忘れませんよ。せいせいしているのならば、何故

あんなに疲れたようだったのですか？」

「……そりゃ、仕事もだもの。疲れることはあるさ」

「いえ、貴方の疲れはそういうものじゃない。もっと何か違う、負  
い目から来ているような……」

「……うっさいね」

今度はウラシマが鬼丸の言葉を遮る。

その声はとても激しく、荒々しい波のようにウラシマの感情の全て  
を孕んだような声で、今までとは明らかに違う彼に圧倒されてしま  
った。

「とにかく！ 僕は君たちの仲間なんかじゃない。その証拠に僕は  
君たちに三つ、嘘をついている！ 一つ、僕の歳は39歳ではない  
ということ。本当の僕の歳は今年で700歳を越えている。僕は魔  
術師だ。それぐらいどうとでもなる」

「二つ、僕は鬼丸君を前から知っていたということ。鬼が鬼ヶ島奪  
還を目指す時、全ての鬼を洗いざらい調べさせてもらった  
よ」

「三つ、何度でもコレを言ってやる。僕は君たちの 仲間  
じゃないということ。僕こそ竜宮城第零技術開発部部长、浦島竜胆  
逃げ出すと言うのなら見逃そう、しかし向かってくると言うのなら  
ば……排除する」

ウラシマの声は変声期を迎えていない少年ように高い。しかし今、  
その声が重厚で凄みのある、押し付けがましいものに聞こえた。  
それに少しでも抗うために、鬼丸は声を荒げた。

「そんなものできるはずないでしょう。さあ、ウラシマ。玉手箱を  
返しなさい。返さない限り私たちは帰りませんよ」

「やだね。返すつもりなんて毛頭ないよ。君たちだって無用な戦い

はしたくないだろう？さあ、帰った。帰った」

「キンタ、黙っていないでどうにか言ったらどうですか？」

「……俺はウラシマと争う気はない」

予想外の返答に鬼丸も、そしてウラシマも耳を疑った。

「キンタ！？」

「そ、そうかい。いやあ、キンちゃんが懸命で助かったよ。それでは出口はあちら」

「だからウラシマ、俺はオメエを受け入れるよ」

「……はっ？」

ウラシマは、今度は自分の脳を疑った。

今この目の前の男はなんと言っただろうか、今までこの男の甘さに関しては認識していた。そこがこの男のよき点と思っていたし、弱点であると思っていた。

しかしコレはただの馬鹿だ。

「だから敵であるオメエを受け入れるって言ったんだ。俺はオメエのことを赦すよ」

「間欠泉」

ウラシマは短くそう言霊を放つと、金太郎たちの真下の地面から熱水が噴出する。

もちろん、二人ともこんな攻撃で死ぬような奴らじゃない。瞬時に二手に別れ、熱水から脱した。

こんな攻撃、無駄だと分かっているでも攻撃してしまった。いや、せざるを得なかった。怒りで気が狂いそうになったが、あまりの怒りで一周回ってまた正気に戻った。

馬鹿は死んでも治らないと言っし、だったら殺してやる  
しかない。

「オメエが仲間じゃないと何度でも言うのなら、俺は何度でもオメ  
エを赦してやるよ。だから」

「ふざけんじゃねえぞ！」

ウラシマの感情が爆発した。

普段からニヤニヤ、道化のように振舞っている彼には感情なんても  
のは存在しないと思っていた。

しかしなんてことはない。彼も一人の人間。あまりの憤怒に圧倒ば  
かりされている金太郎だが、心の奥では少し安堵していた。

ウラシマの感情はあふれでた洪水のように止まらない。

「敵を受け入れるだと？ 僕を赦すだと？ 甘つたれてるんじゃね  
えぞ、坂田金太郎！ 僕は竜宮城の人間で、君たちは鬼ヶ島の者だ。  
双方相容れない存在なのに赦すも何もねえだろ！？ 敵は敵らしく、  
全力で敵を排除するのが筋つてもんじゃねえのよ！？ さあ、今決  
めるよ、俺から逃げるか、俺と戦うか。どちらか選べよ！」

ウラシマは憎悪のこもった目で金太郎を睨みつける。

彼の全身から放たれる感情の波は、金太郎は肌で感じていた。しか  
しその感情は金太郎をすり抜けもつと別の所に向かっているように  
も感じられた。

憎悪の籠っているにも関わらず、ウラシマの言葉は宙に消え、誰に  
向かっているのか分からないまま発せられていた。



金太郎は紫電を構える。自分が、彼を何とかしなくてはいけない。

「今から俺がオメエに決着をつけさせてやるぜ、ウラシマ」

「上等だ。理想と現実に飲まれて水没しやがれ」

「オクタ、八重結合」

ウラシマは短く詠唱を唱える。と八つの水球が出来上がり、それぞれが金太郎たちを襲う。彼は魔術師、コレぐらいのことなら造作でもない。

しかし金太郎にとっても、コレを防ぐことは造作でもない。

「First Drive Setup Create!」

「……デカ、過重結合」

今度は十個、しかもそれぞれの大きさが先ほどより一回り上回っているように見える。しかしどんなに強くしたって、金太郎の結界は壊せない。

「無駄だああああ！ 鬼丸、後ろ頼むぜ！」

「仕方ないですね。コレもあの箱を取り戻すためです。ウラシマはおまけですからね」

「……」

ウラシマは金太郎が自分に向かって突っ込んでくる様子を見ていた。ただの退魔師と鬼ならば倒すことなんて簡単だ。人間の70パーセ

ントは水、ちょっとそれを弄ってやれば簡単に死ぬ。

ただ、鬼丸と金太郎は二人揃ったら厄介だ。

何故なら彼らは無敵だから。

桃太郎（最狂）を倒し、天人（監視者）を退ける。今までの彼らは負けなし、そしてこれからおそらくそうだろう、とウラシマは思っている。その様を傍観していると、自然とそう思ってしまったから不思議だ。

ウラシマの右手が光りだす。敵が無敵ならば、自分も全力を出さなくてはいけない。

「我に宿りしは圧……逆浸透、開始」

「む？」

鬼丸が何かに気が付く。あの魔力の光は明らかに水の魔術ではない。

「キンタ、気をつけて！ ウラシマは何かやろうとしています。不意討ちをくらうかも」

「おう！ 分かったぜ、鬼丸」

「逆浸透、完了……モノ、純一重結合」

ウラシマは左手と右手を合わせる。圧力と水が混じりあい、新たな水が生まれる。その水はどこか今までとは違う、透き通った青であった。

金太郎は雷で迎撃しようとする。しかし……

「な！？……」

信じられないことが起こった。水が雷を打ち破った。

その勢いは止まることなく金太郎に命中する。腹部に直撃し、腹の中身が吐き出そうになるが何とか堪える。

口の中に酸味が広がるが、関係ない。今はウラシマのことが重要だ。

「な、何しやがった、ウラシマ？」

「それぐらい自分で考えろ、坂田金太郎。尤も、鬼丸童子のほうは分かっているらしいけどな」

鬼丸は少し考えてから、考えうる最大の可能性を呟いた。

「純水？」

「その通りだ、鬼丸童子。濃度の違う二つの水を用意し、その間に半透膜で遮る。すると水は浸透圧によって濃度の高いほうに水が流れ込む。コレによって生じた圧力と同じだけの力を加えてやると純水が出来上がる。コレを逆浸透法と呼ぶ」

「純水は不純物を持たない。だから電気は純水を分解することはできない。実験で水を電気分解したいときに不純物を加えるのはそのためです」

「……ごめん、意味わかんない」

……残念、金太郎には理解できなかったようだ。

「要するにだ、坂田金太郎。貴様の雷の属性的アドバンテージは失われ、魔術同士の対決では魔力の保有量によって決まるようになってたわけだ。さて、退魔師の出来損ないの魔術と、魔術師でない鬼の魔力が700年生きた魔術師の魔力に勝てるかな？」

「勝てる？ 愚問ですね。魔力の保有量では勝てなくとも、色はこちらの方が上です。見たところ、そんな少ない色の数で、貴方こそ勝てると思っっているのですか？」

ウラシマにデザートイーグルを向ける。

鬼丸の力は魔力自体を操るもの。だから力を扱うものは鬼丸にとっ

て格好の餌食。金太郎がウラシマにとって天敵であることと同じように、鬼丸も魔術師にとって天敵なのだ。敵は二人、しかも二人とも自分に不利な相手と言う一般的に考えれば絶望的な状況で、ウラシマは震えていた。

彼は笑っていた。

「くっくっく……アハッハッハッハッハ！」  
「……何がおかしいのですか？」

鬼丸の眉間に自然と皺が寄る。収まることを知らない笑いを必死に堪えて、ウラシマはようやく喋りだした。

「いやあ、悪いね。流石の鬼丸童子でも知らないことがあったとはね。くっく……失礼。鬼丸童子、君は一つ勘違いをしている」

「何？……」

「もし君の言うことが正しければ、歴史上いかなる偉大な大魔術師も君には勝つことはできないだろう」

「そうです。全ての魔術師は私に劣る」

「違うね。魔力を方法としか思っていない君はどんな魔術師にも劣る」

ウラシマはふうつと大きく息を吐き出した。

鬼丸にはそれが、出来の悪い生徒を教える教師がするように思えて不快でならなかった。彼の眉間の皺はさらに深くなっていく。

ウラシマは出来の悪い生徒に、魔術をもう一回学んでもらうために彼らに向き合って教授を始めた。

「魔力には色々な種類がある。火、水、風、土、雷……数えるのも馬鹿らしく思えるほどにね。命一つの魔術回路は一つ、それも一色

だ。だから君の隣にいる退魔師は雷しか使えないし、他でも例外はない」

「……」

君の隣の退魔師、その言葉に金太郎は言いようもない寂しさを感じた。もはや名前すら呼ばれなくなったか……。

彼が感情の波に襲われているのを予測していたのか、はたまた違うのかは知らないが、ウラシマは構わず鬼丸に教授する。

「ところが僕たち魔術師というのは、魔術回路は一つだがあらゆる色に染まることができる。言うなれば白色、いや、透明かな。だから僕たちは色々な魔術を使えるし、一般的にはそこが魔術師の強みだと思われている。しかしそれは違う。僕たちの本当の強みは色を極めたからなんだ」

魔術師でも何でも無い鬼丸と、退魔師の金太郎にはウラシマの話は理解できない。

「色を極める？」

「そう。あらゆる色が見えるからこそ、一色しか極めることができない。僕たちは魔力の研究者だ、狂気に取り付かれたね。本来なら“最狂”の称号は魔術師のためにあるんだけど残念ながら今代はちがうようだ」

誰かは言うまでもない。ココにいる人間誰もが知っている規格外だ。

「さて、僕も魔術師だ。当然極めるべき色もある。それを今から見せてあげようじゃないか」

「……水、ですか？」

鬼丸はそう呟いた。そうあって欲しいと思ったからだ。今のウラシマでさえ自分たちでは止めるのは難しい。これ以上のものはあってほしくない。

そんな鬼丸の願望を打ち砕くように、彼は首を横に振った。

「水の魔術はココにいて自然と身についたものだ。僕の本当の命題は “時”」

「時間？」

「そう、今から見せてやろうじゃないか。僕が700年生きている由縁と、700年かけた研究の成果を！」

人は見かけによらないものだ、とは誰が言い始めたかは知らないが良く出来た言葉だと、鬼珠は思う。コレこそ人付き合いの真理だとさえ思う。

かく言う鬼珠の周りには、体つきがまるで子供にも見えるのに鬼一番の怪力の持ち主だったり、同性から見てもかなり整った顔立ちをしているのに女関連の縁がまるでなかったりする鬼もいる。

亀の動きはノロいもの。

だから亀だからと言って目の前の巨大亀の動きが決してノロいとは限らないし、自分も老人だからと言ってまったく戦えないと言うわけではないのだ。

「グシャット・ハンマー！」

亀とは思えないスピードで繰り出される拳を、老人とは思えない動きでかわす鬼珠。

音もなく地面に着地した鬼珠の目に入ってきたのは巨大な足の影であつた。

「ふん！」

「もしもし亀よ、亀さんよ……」

今度は蹴り、いや、この規格になると蹴りというよりは踏み潰すという表現が正しい。巨大な亀の全体重をかけた踏みは、予想通りかなりの威力をほこり竜宮城の床を踏み抜いてしまった。

あんなものが当たってしまったらひとたまりもない、と鬼珠は人事のように思っていた。所詮仮定の話、自分に当たるわけもない。

「世界の内でお前ほど……」

「ハアアアアア！」

「歩みの遅い者はない……」

ちよこまかと動く鬼珠をしとめるために、亀吉は必殺の一撃を放つ。

「ギガント・プレス！」

「どうしてそんなに……速いんじやろうな？」

鬼珠は結界の発動と共に唄をしめる。結界と亀吉の圧力がぶつかり合い、辺りの木々は激しく揺れていた。

彼はいい加減飽き飽きしていた。と言うのもコレまでずっと避けてばかりで、こちらから攻める機会がなかったからだ。そろそろ終わりにしたかった。

「亀だからと言って遅いとは限らない。むしろ亀は案外速いもんです」

「……そうじゃの。亀と言って遅いと見限っておった儂の勉強不足

だったの」

「そうです。だから早く老いばれは潰れた方が良いと思いますよ」「不謹慎な……」

亀吉はさらに力を入れる。いくら強力な結界と言えども、人の何十倍もの大きさの全体重に耐えられるはずもない。ギリギリと、音を立てながら少しずつ結界は崩壊していく。

「早く潰れれば楽になると思いますよ」

「……さて、亀吉君。鬼の強さとは何か知っているかな？」

「はあ？」

一瞬だけ力が抜けた。この老いばれは何を言っているのだろうか？ 絶体絶命のこの状況にそぐわない話題だ。

自分の隙を生み出すためか、別の目的か。どちらかは知らないが、冥土の土産に答えてやることにした。

「鬼の強さとは狼男を遥かに超える身体能力と圧倒的な魔力保有量、じゃないんですか？」「うむ。30点じゃ」

思ったより低い点数に亀吉は思わず顔をひきつらせた。

「……どこが違うと言つのですか？」

「ほっほ、若造。鬼の強さとはそれだけじゃないんじゃないよ。鬼の強さとはな 終わりの恐怖とそれを具現した魔力なんじゃよ」

「……」

ゾクッ！

背筋が凍てつく。鼓動が早くなっていく。

今自分の目の前の老いばれが自分以上の化け物に感じられた。



「その名は“滅”。元々地獄に住んでおった我々は、物が滅んでいく様をその目で見てきた。その家庭で身についたのがこの力。さてお前にも滅びと言うものがある。その未曾有の恐怖に打ち震えるがいい」

「……笑止。僕は滅びなど怖くない。彼女のためならね」

「それこそ笑止。お主、人のために死ぬほど空しいものはないぞ」

呼吸が荒い……。生きるために必要なことなのに、今ではそれすら煩わしく思われる。

鬼珠が手の平を上に向ける。するとそこに見たこともない色の魔力が巻きついていく。

どす黒い混沌とした色。

生命が警笛を鳴らしている、早く逃げろと。

しかしそれでは遅かった。

「鬼の力は滅びの力……鬼闘術・絶！」

「む？ な、何!？」

結界は対象を選ばない。いくら壊れかかっているとはいえども、解呪しなければ鬼珠も攻撃できないはずだ。

しかしそんなことを無視して、鬼珠は攻撃を仕掛けた。

結界を易々突き破り、亀吉の拳と激突する。すると亀吉は妙な感覚に襲われた。自分の腕がなくなっていくような、ぶつかり合っているはずが無に腕を突っ込んでいるような感覚。激痛と共に。

「ぐっ！」

「鬼闘術・戒」

腕は完全になくなり、バランスが取れなくなった亀吉に追撃が入る。

亀の甲羅は一方は強固だが、もう一方は弱い。とは雖も自分のガドの固さには自身が合った亀吉であった。しかしそんなこと関係ないと言わんばかりに、自分よりはるかに小さい老人に吹っ飛ばされた。

理解不能。

「な、何が起こっている？……ほ、報告によれば、鬼の長老の力は以前より弱まっていると……」

「モノは見かけによらないんじゃないよ、若造」

鬼珠は華麗に着地する。その口端はニヤリと釣りあがっていて、亀吉はその顔を見てようやくこの鬼珠に恐怖、と言うものを感じた。

「若いときには本物を見るべきじゃ。儂が人生の先駆者として、本物を見せてやろう。本物の、恐怖というものをな」

第三章・第八話：玉手箱、それはブラックボックス（前書き）

梅雨ですね……。

自分は雨を見ながら寝るのが好きですが、皆さんは如何お過ごしでしょうか？

雨で外に出られない、そんなときの暇つぶしにでも読んでくださると光栄です。

### 第三章・第八話：玉手箱、それはブラックボックス

「はっ！ …… 本物の恐怖だと？」

亀吉がその巨大な凶体を持ち上げ、瓦礫の中から起き上がる。

人間の何倍もあるうその体が立ち上がるだけで辺りの大地が震動し、多くの木々がなぎ倒される。どんな敵でも、どんな軍隊でも彼を止めるのは容易ではない。

しかし、今彼が相手をしているのはたった一人。それも人間とほぼ変わらない大きさの老人であった。誰が見てもこの光景が異常であると分かるだろう。亀吉もコレが現実とは思いたくはなかった。

しかしコレは現実。紛れもない現実。その現実を振り払うために、亀吉は声を張り上げた。

「本物の恐怖などとうに知っている！ 彼女と契約したそのときから…… 僕たちは恐怖など克服したんだ！」

「甘い、甘いよ、お主らは。自覚していない分金太郎君より甘いよ。お主らは恐怖と言っものを受け止めていないだけじゃ。そんなんで  
はマトモに戦えん」

「煩い……。フォームチェンジビードフォルム 変形。高速移動形態」

亀吉がそう言霊を放つと、彼の体が蠢く。彼が軋む音と共に、彼の体はだんだんと変化していき、ついには人と変わらない大きさとなった。しかし異様なはその姿。彼の手首からは刃物のようなものが剥き出しになり、刀鍛冶のように赤い皮膚からは煙が噴出している。

と、その刹那に亀吉の姿が消えた。

「ほう……速くなったか」

「ハアアアアア！ これで終わりだあああああ！」

無防備な長老の背中から、首を狙う。刀のように研ぎ澄まされた彼の手首は、すでに枯れかけている老人の首を刈り取るには十分。と、亀吉が思っていたときにまるで自分に話しかけるように長老が呟いた。

「ところで亀吉君。鬼鬪術にもこんなモノがあるのはご存知かな？

鬼鬪術・序」

「な、に！？」

その言葉と同時に長老の姿が消える。空しくからぶつた亀吉は呆然とし、立ち止まってしまった。その一瞬の隙が、勝負にとっては致命傷。長老はすでに亀吉の背中を捉えていた。

「鬼鬪術・破」

「ぐ、はっ！」

鬼鬪術・破。超高速移動の術“序”から展開されるこの攻撃は、まさに名前の如く、全てを壊さんとする威力を誇る。その破壊は相手のガードなど意味を成さず、防ごうとする敵に貫通して衝撃を与える。

頼りの強固な甲羅も通り抜け、内臓に直接ダメージを与えられた亀吉はその場に倒れこんだ。だがこの流れはこの攻撃で終わりではない。与えた衝撃と同じだけ上空に吹っ飛ばされた長老は次の攻撃に移り、そして……。

「……鬼鬪術・急」

上空から自由落下する長老が、倒れこんでいる亀吉に押し掛かる。

押し潰す瞬間、一瞬だけ加速しその威力を高めるこの技の名は“急”。

序・破・急。この三連の動きを持って終結したこの鬼闘術。まとも受けた亀吉の甲羅はボコボコに、彼のあちこちから血が噴出し、見るも無残な姿になっていた。

「さて、もはや亀という面影もないな。さあ、まだやるかね？」

「……やるに決まっている」

「ほう、そんな体になってもか。余程体が丈夫なのか、はたまた愚かなのか……」

「……どっちもですよ」

亀吉は力なく、しかししつかりと喋りだし立ち上がった。

「僕は彼女と出会った……。その時から僕の運命は彼女だけのためにあるものと決まったんだ。僕だけじゃない。ココにいるみんな、全員が彼女のが好きだ。いや、愛している！ 愛しているから僕たちは全力で彼女のために動ける。死など怖くない！」

「……なるほど、それがこの竜宮城をココまで大きくした理由か」「僕は任務を全うするだけ！ 覚悟！」

亀吉は走り出す。ただ彼女のために、目の前の敵を倒すために。

しかしその目の前の敵の表情は 自分を蔑むような冷徹な顔。

「ふむ……なるほど。しかしじゃ。儂はお主と全力で殺り合うとは考えておらんよ」

「なにっ!？」

長老が指をならすと、亀吉の動きが止まる。彼の四本の手足は小さな箱のようなものに覆われ、さらに背中まで箱によって圧迫されて、まるで身動きが取れなくなった。

長老のお得意の魔術、結界である。

「なっ!? 卑怯な……」

「勝負に卑怯も何もない。誇りですら、戦いのなかでは無意味なものとなる。……ああ、なつかしい。儂にもお主のような情熱を持っていた時期もあつたよ」

今度は長老が亀吉に向かって歩き出した。大きく息を吐き出し、ゆつくりと。彼の頭の中にはすでに亀吉の姿はなく、ただ懐かしい昔の友人の姿だけがあつた。

「儂も思っていたよ。儂らは三人揃って最強じゃ、とな。しかしそんなものも無意味なものと終わった。今では残るは儂一人じゃ……」

「……一体何が？」

「 ホッホッホ、お主には関係のないことじゃ。さて、両手両足を掴まれ、背中も圧迫されている今の状況……。まさにまな板の上の鯉じゃな。いや、それよりも酷いか」

「……!？」

「今お主を正面から押してやればどうなるか……。君は作用、反作用の力を知っているかな？」

壁を押した際に、それと同じだけ自分も押される。それが作用、反作用の力である。手足を縛られ、背中も圧迫されている亀吉は力を抜き威力を殺すことも出来ない。

ということは、彼は長老の攻撃を一身に受け、さらに同じだけ衝撃の反作用をくらうしかないということである。

「まさか! や、やめる!」

「……さようならじゃ。鬼の力は滅びの力。鬼闘術・戒」

長老の掌に混沌色の魔力が巻きついていき、弾丸のように放つ。“戒”とは鬼闘術の中で敵を吹き飛ばすのに最も優れた術。その威力は他の鬼闘術と同様、並大抵のものではない。結界を解き彼の四肢が自由になると、亀吉はもろく砂の城のように崩れ去っていった。

「か、は……」

「さて、ようやく終わったか……思ったより時間がかかった。早く行かなければ、な」

昔に思いを馳せるのもいいが、今はその時ではない。若い希望に満ち溢れた二人の、老いぼれなりの手助けのために、老人は再びゆくりと歩き出した。

時間、とは一体なんであろうか、という命題に多くの研究者たちが考えてきた。

それは限りなく一方通行で、連続して進み続けている。最近の研究でようやく、重力によって伸び縮みする、ということが分かった。しかしそれが分かったとしても、未だに時間の真となることは分かっていない。だから、時間を調べるような人間はいても、操るよう  
に考えた人間は今までいないはずであった……。

その禁忌を犯そうとする愚か者が目の前にいる。鬼丸はすぐさま浦島の言葉を否定した。

「馬鹿な！ 時間を操るなんて出来るはずもない。時間を操るなんてことが出来るのは、神様くらいなもんです。というより、むしろそれは我々が踏み込んではいけない領域……あなたはそれを犯そう



とするのですか？」

「ああ、そうだね。この玉手箱を使って」

浦島はさも当然のように答える。そのあまりの爽快さに、鬼丸の反応が一瞬遅れた。

「この玉手箱は小さいくせに大喰らいでね。何でも吸収して飲み込んでんじゃうんだ。物も人も魔力も、時間も例外ではない」

「時間を喰らう？」

「そう。本来あるべき時間がなくなる……。僕の行動したその時間がなくなるということは、周りの人間からすれば僕が一瞬で活動したように見える。それは擬似的にも時間を跳躍したのも同然だ。そしてその研究を、僕は700年続けている」

「700年……」

その途方もない数字に金太郎は呆然とする。

時間を止めることが出来て、永遠に近い時間を生きれたとしよう。しかしその時間の全てを一つのこと注ぎ込むことができるだろうか？

無理だ。常人の沙汰ではない。自分を突き動かす強い何かがない限り、人間はそこまで強く出来ていない。

浦島に何が起こったのだろうか……。金太郎は気遣うような目で浦島を見た。

「君たちは竜宮城に来て何かおかしいと思ったことはないか？」

「存在……」

「……それとは何か違うところでないか？」

「年齢」

鬼丸は小さく、しかし確信を持って呟いた。

「えっ！？ 何？」

「ココに来てから大人と言うものを見ていない。貴方はもしかして年齢すら操っているのではないですか？」

「正解だ、鬼丸童子」

浦島は鬼丸の答えを聞いて、少し満足そうな顔になった。

「ご名答だよ。ココには大人なんてものは存在しない。だって僕が“肉体の老化の進行”の時間を止めているから。肉体の老化を止める、という何だか夢のような話だけど、とりあえず80年間は玉手箱の力は有効らしい。その証拠に前の実験では老いることなくそのままの姿で死んでいったからね」

「だからお前は子供なのか……」

「いや、僕は本当に十歳で成長期が止まったんだ」

そう証言する浦島の顔は少し引き攣っている。やはり、伸び盛りの成長期がないということは余程悲しいことなのだろう……。

「……しかしそれだと700年間には到底及びませんよね。どうやって貴方は今まで生きてきたのですか？」

「僕と乙姫は肉体の老化の時間だけではなく、魂を玉手箱に喰わせているから」

「……！？」

「魂さえ消えなければ僕は永遠に動き続けることが出来る。玉手箱にあるものは何もなくなるわけじゃない。そのまま、永久に封印されて箱が開けられるまで持ち主に変えることはない。たとえ人形に成り果てようとも……。こうして僕は700年生き続けることが出来るようになりました、とさ……」

想像を超えた答えに二人は絶句する。

人や鬼や、命のないものにも魂が宿ると言われている。この世の全てのものは魂があるからその役割を果たすことが出来るのだ。

では魂を失ったものはどうなるか。器しかないものは全てを受け入れるしかない。全て言われたことを忠実に行動する人形に成り下がってしまふ。それはもはや、人間とはいえない。

鬼丸は思わず疑問を口にした。

「貴方……それでいいのですか？ たとえ700年生きようともし身が空っぽの貴方には、目指すものさえなくなつた。それは魔術師としては致命的な欠陥……。それで、本当に良かったのですか？」  
「いいさ、それで。彼女のために永遠に動き続けられる人形ならばそれで……今回も彼女の命令だ。彼女が玉手箱をとって来いと言つた。だから僕達はそれに従つた。ただ、それだけだ」

浦島は無機質な声でそういつた。

それがあまりに感情が感じれず、しかしどこか寂しそうに見えた金太郎は浦島に問う。

「……お前、何かに迷つてないか？」

「何が？」

「……いや、いい」

「さあ、コレも命令だ。“君達を排除しろ”っていうな。さあ覚悟はいいか、坂田金太郎、鬼丸童子」

浦島はニヤリと笑つと、玉手箱を右手に置く。

漆黒に漆塗りされ金色の装飾が施されたそれは、あまりに禍々しく見つめていると吸い込まれるような錯覚に陥るほど不気味なものであつた。

「魔術師、浦島竜胆が問う……。答えよ、汝が名は何ぞ？」

我が名は玉手箱。全てを飲み込む大喰らい（ブラックボツクス）

「なっ！？」

「ぐっ！！」

……。それは一瞬の出来事であった。

玉手箱が黒く光りだしたかと思つた瞬間、自分たちの目の前に水球が現れた。その距離まさに零。金太郎と鬼丸にはなす術もなく、直撃した。

「な、何が起こつた！？」

「気が付いたら……。目の前に水球が……」

「僕の動いた時間を玉手箱が食べたんだ。さあ、どんどんいくぞ」

浦島が再び玉手箱に手を添える。このままではまた時間を喰われ、なす術もなく攻撃をくらうことになるだろう。それだけは避けたい金太郎は、結界を張ろうとする。だが……

「デカ、過重結合！」

「くっ……。First Drive Set」

「遅い！」

結界が完全に張られる前に金太郎の周りを10個、水球が浮かび襲い掛かる。結界はもろく、紙の如く破られ四方八方から衝撃が金太郎の内部に伝わる。

「ぐぼっ！……」

「無駄だよ。結界が発動するまでにも多少ラグが起こる。僕が喰らうのは一瞬なんだ。君にはそれを把握することすらできない」

「だったら……コレで、どうだ！」

First Drive Set Up!

その掛け声と共に金太郎の周りを金色の結界を覆う。何故か中にいる金太郎は得意げだ。

「コレならいつ来たって対応することが出来るだろ！」

「……………」

「キンタ、貴方馬鹿ですか？……………」

「えっ！？ 何で？」

「モノ、純一結合……………」

たった一つだけ、しかしいつもと違う色の水球が金太郎に向かう。

その水は純水。つまり金太郎の結界を易々と破る力を持っているわけ……見事に金太郎の顔に直撃した。

「ぐわしっ!?!」

「さっき僕の力を見ただろ。お前の結界ぐらい、易々と打ち破る。

それに結界だって無限に続けられるわけじゃないんだ。お前の魔力もどんどん減っていく…………。僕の攻撃を防ごうとするならば、僕が

玉手箱を使う一瞬に、全力で結界を張らないとな」

「一瞬…………?」

確かに理屈はあっている。

結界の発動にラグが発生するように、玉手箱の発動にもラグが生ずる。そのラグの間に結界を発動できれば、浦島の攻撃が防げる。しかしそれは理屈での話。

相手がいつ魔術を始動するなんて分かるわけもなく、時間を操る浦島に勝てるわけもない。

「さあ、そろそろ終わりにしよう。僕もそろそろ飽きた……。時を喰らえ、玉手箱！」

「くっ」

「……………」

辺りが黒い光に包まれる。それは浦島が時間を喰らう瞬間。これに気づいたときにはもう遅い。鬼丸は覚悟を決めて目を閉じた。

しばらくして目を開けると、何事もない。ただ少し驚いている浦島と軽く息を荒げている金太郎の姿だけであった。

「……………生きてる、のか？ 何故？」

「どうやらお前の力を少し見くびっていたらしい。坂田金太郎」  
「えっ!？」

鬼丸は改めて金太郎を見る。何事もない。ただいつもの金太郎だ。彼が一体何をしたと言っのか？ ……  
鬼丸には理解不能であった。

「本当に一瞬で結界を張るとはな。しかも僕が破れないほどの強度のものを……………」

「なっ!？ どうやって？」

「魔力を感知したんだね、坂田金太郎」  
「……………ああ」

金太郎は小さく頷く。浦島はそれを見て、大きく溜息をついたがその表情はどこか満足そうであった。

「魔力とはそのままでは何の役にも立たない、空気みたいなものだ。その空気を有益なものに変えるのは僕達の魔力回路だ。それを通して、僕達は神秘を引き起こす。……………最近の研究で証明されたことだ

が魔力を変換させる際に、魔力は一瞬だけ色を失い無色になると分かったんだ。ようやく証明されたことだけど、昔から魔術師はそういう微妙な変化を察して戦っていたんだ」

「それを金太郎が分かった、と……」

「魔術師にしか分からないことなのにね。魔力を方法としか思っていない鬼丸童子にはコレは分からないだろう」

鬼丸は魔力そのものを扱う。魔術師は魔力を変換する必要があるが、鬼丸にはその必要はない。いつもならそれはメリットなどだが、今回は仇となったようだ。しかし普通なら金太郎にも出来ないこと。浦島は小さく呟く。

「本当に、君は天才だよ……キンちゃん」

本当に彼は天才だ。

退魔師というものは魔力によって身体能力を底上げするが、魔術の知識に関しては一般人程度。そんな退魔師が複雑な術式を使えるはずもなく、結界など持つてのほかである。使えるはずもない。

それを、この金太郎は感覚によって統制している。そればかりではない。ついには魔力をも感覚によって掴んでしまった。コレは退魔師の存在の歴史を塗り替えるもの、まさに天才と言うのにふさわしいものであった。

金太郎ばかりではない。物を見れば壊さずにいられない桃太郎も、決して死ぬことのないかくやも、魔力を操る鬼丸も、みんな天才。だからそんな彼らを見ていたかった。

しかし自分はそのポジションには戻れない。自分の居場所は竜宮城だから。

「……もう、戻れないんだよね……」

幸か不幸か、不意に漏れたその嘆きは二人には届いていなかった。

「鬼丸、さつき長老からもらった符あるだろ。アレ貸してくれ」

「えっ……これですか？」

鬼丸が三枚の紙を取り出す。それは饞別にと、長老からもらった結界の符であった。その力は金太郎のモノを軽く凌ぎ、小さな城砦にも匹敵する。

「俺が今からそれでアイツの攻撃を防ぐ。そのうちに鬼丸はアイツを殴ってくれ」

「殴る！？ 何故？」

「だって結界張ってあつたら、デザートイーグル使えねえだろ。だから、頼むよ」

「しかし、そんなことしなくたって」

「頼むよ、鬼丸」

金太郎はその澄み切った青い瞳を鬼丸に向ける。毎回コレだ。金太郎はいつも無茶な頼みごとを普通に自分に頼む。そしていつも苦勞するのは自分だ。

鬼丸は小さく息を吐き出し、やれやれと言った顔で頷いた。

「……しょうがないですね。いいでしょう。やってあげますよ」

「ありがとな、鬼丸」

「何しようが無駄無駄。君達の拳は僕に届かないよ」

「……ウラシマ、それはやってみなくちゃ分からないぜ」

二人は浦島に向き合う。今回だって、変わることはない。いつも二人でどんな問題にも立ち向かってきた。そして今回も、いつも通り



に終わらせてみせる。

「さあ、いこうぜ！  
鬼丸」

「了解しました！」

### 第三章・第九話：それは契約ではなく約束

「魔術師、浦島竜胆が問う。汝が名を答えよ！」

「退魔師、坂田金太郎が問う。汝が名を答えろ！」

浦島は伝統的な詠唱を、金太郎はぶつきらぼうに詠唱を唱える。同時に発せられた言葉と共に、結界を玉手箱の力が発揮された。いくら玉手箱で時間を超越できたとしても、結界を越えることは出来ない。

浦島は何もせず、ただ時間を過ぎるのを待っている。玉手箱の力がきたようだ。それと同時に鬼丸が動き出す。

「行きます！」

「おや、鬼のくせにだるまさんごっこがご所望かい？ だったらご期待に沿ってあげるよ。汝が名を答えよ！」

「させるか！ 汝が名を答えろ！」

浦島の行動を、金太郎はさらに遮る。

確かにコレではだるまさんごっこだ。浦島が鬼で、自分たちがそれをタッチしようとする。しかしそんな遊びと違う点が一箇所あった。

「金太郎、君の符は後一枚。それに対して僕の玉手箱は無制限。この差をどうやって埋める気だい？」

「はっ！ 瞬発力だったらこっちの方が上だぜ！」

「……」

確かに金太郎の言うとおりである。凶星を突かれ浦島は思わず押し

黙った。

玉手箱は大喰らいで底なしのようにも思われる。しかし、どんな生き物でも物を食べたときに消化するのと同じように、玉手箱にも再び魔力を充填して使うのには間というのができる。そこだけが金太郎たちにとつての勝機であった。

玉手箱の魔力の充填が完了する。

息をつく間もなく、すぐさま浦島は玉手箱を起動させた。

「……汝が名を答えよ」

「お前の名を答えろ！ 鬼丸、行け！」

「了解！」

浦島のだるまさんが転んだが終わり、鬼丸が再び駆け出す。

その距離およそ10メートル。

玉手箱の魔力の充填が早いのか、それとも鬼丸の方が速いか、ギリギリの距離。普段は動くことのない鬼丸はかつてないほど息も絶え絶えながら、全力で駆けた。

「……甘いな」

浦島が短く呟く。

確かにこのままならばギリギリで、鬼丸は自分に攻撃ができるだろう。しかしそれは“このまま”の話。

彼らは知らないのだ。自分の大量の魔力を犠牲にすれば、玉手箱はいつでも起動できると言うことを。

「な、なに！？」

「魔術師、浦島竜胆が問う。汝が名を答えよ！」

我が名は玉手箱。全てを飲み込む大喰らい（ブラックボックス）

金太郎と鬼丸の動きが止まる。そればかりではない、浦島以外の全ての時間が止まった。ここからは自分の所有領域。誰にも犯されることない不可侵領域。

まず息を整える。こうなったら攻撃も何もされないから安心して動きを止められた。

鬼丸の周りに七つの水球を並べ、包囲する。自分の時間が終わったときに、鬼丸の悲鳴が今にも聞こえるようだった。

僕の勝ちだ。

玉手箱の力がなくなり世界は再び動き出した。

「は……ハッハッハ！ 見ろ、金太郎！ コレが甘いお前の末路だ。今度こそ僕の勝ち」

「オメエが甘えんだよ！」

世界が動き出した瞬間、吹っ飛んだのは浦島の想像とはかけ離れたものであった。

金太郎の正拳突き、鬼丸の裏拳が同時に浦島に当たり、その軽い体は面白いように吹っ飛ばされる。

さらに、設置してあった水球は金太郎の結界によって阻まれ、鬼丸は無傷である。何が起こったというのか、浦島には理解できなかった。

「がっ……！ な、何故攻撃できた？」

浦島は金太郎に問う。すると返ってきたのはなんと簡潔で、短い答えであった。

「お前の癖」

「……はっ!?」

「お前、いつも時間を喰った時、俺たちの後ろに回るんだよ。だから鬼丸にはわざと攻めてもらって、俺の注意を外してもらったんだ。まあ、鬼丸と攻撃が揃ったのは偶然」

「偶然ではありませんよ」

鬼丸が金太郎の言葉を遮る。

「長老から注意を受けていましたね。“後ろに気をつける”と。だから裏拳で虚をつこうと思いました。それに金太郎の思うことなど、お見通しですよ」

「うへえ……何だかそれは嫌だな」

「とにかく、私とキンタは二人揃って無敵。貴方も敵ではありませんよ、ウラシマ」

鬼丸が銃口を浦島へ向ける。

動いたら殺される、大人しく両手を挙げ、無力であることを示すと金太郎が歩いてきた。

彼が差し出したのは紫電、ではなくその右手であった。

「ウラシマ……。俺はお前を赦すよ」

「……まだ、そんなこと言うのか。いい加減にしてくれよ」

「お前とだっいたらまたやり直せる。今ならまだ間に合うんだ。さあ、ウラシマ」

「……」

金太郎が浦島に手を差し出す。

おそらく、いや、絶対に金太郎は嘘をつかない。金太郎は前のように自分と接し、他の連中もゆっくりながらも元の関係に戻る。この手を取れば、自分はその暮らしに戻るのだろうか。あの非常識

に囲まれた、自分を常に楽しませてくれる暮らしに。  
……思わず、自然と手が伸びてしまった。しかし、そんな自分を止めてくれる存在がそこに立っていた。

「 負けることは赦さないよ、浦島」

『っ!?!?』

いつの間にか立っていたその存在に二人は驚く。  
そこに立っていたのは金太郎と同じくらい年端もいかない女の子。  
赤く長い髪をその指で遊ばせ、倒れている浦島に歩いていく。  
その様子があまりに自然で、そして優美で、鬼丸たちはただ見るばかりしかなかった。

「乙姫……何故こんなところに?」

「アレが……乙姫」

「ちっちゃい……」

そう呟いた金太郎の横腹を小突く。鬼丸の前ではいかなる相手でも身長の話は禁句である。

「私との契約、忘れたわけじゃないよね。貴方は一生、永遠という時間をもって私に仕えなければならぬ。私が危険にさらされるよ。うなことは赦さないよ」

「……でも、僕は負けました……」

「では、勝つまで立ち上がって」

乙姫が浦島の前に立った。自分を見下しているその脆くて空しい眼に、何度自分は狂ったことだろうか。

「この会社にはたくさんの方が私に仕えてくれる。でも私の本当の

部下は貴方一人しかいないの。だってそう契約したよね。“私が死ぬまでずっとそばにいてくれる”って」

それは契約ではなく“約束”。その約束があるから、自分は……

「……そうだね。僕はずっと貴方のそばにいるよ。ずっとね」

「浦島……」

「ごめんね、キンちゃん。僕は、もうそっちには戻れないんだ」

浦島がこちらを見る。

その顔は憂いを帯びている、が先ほどまでと違い妙にすっきりとしていた。その表情を見て、金太郎も安堵の声を漏らす。

「決着がついたみたいだな、ウラシマ」

「……ああ、そうだね。じゃあ、僕達の決着もつけようか」

「行くぜ」

「行くよ」

自分との決着はついた。さあ、今こそ金太郎との決着をつけるときだ。浦島は躊躇なく詠唱を唱えた。

「（カイ）、幾何学結合！」

浦島の言霊と共に無数の水球が金太郎たちを囲む。それも10や20の話ではない。コレが浦島の本当の本気。螺旋を描き、向かう水球を二人は紙一重でかわしていく。

「鬼丸、俺がまっすぐ突っ込むから、援護頼むぜ」

「……相も変わらない無茶振りですね。良いでしょう、やってあげますよ」

金太郎は知っている。この攻撃はまだ決定打ではないことを。その予測を裏付けるように、浦島は次の術の準備をしていた。

「我に宿りしは水、其れ即ち自然が与えし恵み」

「我に宿りしは水、其れ即ち自然が行う破壊」

「我に宿りしは水、其れ即ち……我が魂」

魔術は当然、詠唱が長いほどその威力は高まる。しかしその分、隙も大きくなり一対一の勝負では好まれない。

しかし、浦島にとってはその隙もないに等しい。彼には時間を操る術があるからだ。そして彼が打ち出すのは700年かけて作り上げた最強の術。彼は声高らかにその詠唱を締めくくった。

「さあ、答えよ、我が魂！ 全てを飲み込む水竜となれ！ 重合、  
流々螺旋！」とせいのり、まじり、まじり

幾重にも重なった水球が交じり合い、一つの大きな水流となる。渦を巻きながら、それはまるで竜のように金太郎たちを飲み込もうと襲い掛かる。

金太郎は怯むことなく、それに全力で立ち向かった。

「はっ！ 上等じゃねえか！ 雷鳴、怒涛おおおおお！」

青い螺旋と金色の雷撃がぶつかり合う。

それは均衡しているように見えて、実は違う。圧倒的な水流に金太郎は次第に押され、体ごと後ろに押し潰されていく。

「グッ……」

「無駄だよ、キンちゃん。この水は君の大嫌いな純水。そして君の



魔力ではコレを超えることは出来ない。このまま終われえええええ  
！！」

浦島は心からそう願った。このまま終わってくればどんなに楽なことか。しかし勝負とは、特にこの二人との戦いは思い通りにはいかないもの。

それを証明するかのよう金太郎はニヤリと笑った。

「確かに、俺一人では超えることは出来ねえよ。俺よりオメエの方が遥かに強え」

「しかしそれはキンタだけの話。私とキンタは二人で無敵です！」

鬼丸が金太郎の隣に立った。その手にはデザートイーグルが握られ、圧倒的不利な状況にも関わらず、金太郎同様笑っていた。

「この戦い、私の能力は魔術師の貴方には劣る。しかし、私の能力はこんなことが出来るのですよ。変成・劣」

「……！？」

「“劣”とは貴方の知っているとおり、物事を劣化させる魔力。肉体は腐り始め、金属はさび始める。そして貴方の完璧な純水は、完璧を失い始める」

「なっ！？」

「貴方の水も魔力、つまりは私の管轄化にあります。故に  
「鬼丸の能力が通用するってことだよな！」

黒い一滴の染み、ただそれだけの欠陥が浦島の勝利を崩した。純粹さを失った水はただの水、電気分解され始めた浦島の術は、脆くも崩れ去っていった。



### 第三章・第十話：リュウオウノヒメノカミ

「……」  
「すみません、乙姫……。僕の完全な負けです。」

乙姫は何も言わずに、浦島を起こして鬼丸と金太郎をにらみつけた。浦島竜胆が倒された。あの浦島がやられた。

浦島はこの竜宮城で最強の魔術師。それが負けたとなれば、それは竜宮城が負けたということ。それだけでも、この竜宮城にとっては大きな損失である。

しかし、どんなに損失が出ても、どんなに計画が狂おうが乙姫は退かない。この計画は絶対<sup>プロジェクト</sup>に成功させないといけないのだから。

「いいわ、別に。貴方が負けても竜宮城は負けないもの……」

全てを捨ててでも、そう再認したところで見知った顔がこの社長室に入ってくる。もちろん、誰かとは言うまでもなく、鬼の長老、鬼珠童子であった。

「やあ、乙姫。久しぶりじゃの」  
「鬼珠……」

今になって鬼珠が来たことはこの先の展開にどう影響するか、それは誰にも分からないことだが、少なくとも乙姫は悪くなく思っていた。自然と顔にそれが表れる。

兎にも角にも、ここでようやく互いのトップが集まった。これからはトップ同士による交渉<sup>しゃんかくたう</sup>の時間だ。

「今回もお主には迷惑かけられたものよ。もう子供じみた遊びはやめたらどうじゃ？」

「遊びですって？ ……冗談やめてよ。コレは本気よ。今回ばかりは退かないわ。そのためにこの玉手箱も取り返したんだから！」

乙姫の手の中にある玉手箱を見せ付ける。それを見て、鬼珠はある疑問を口にした。

「何故じゃ？ そこまでする理由はお主になかろう」

元々玉手箱は竜宮城と鬼ヶ島の和平の印として送られたもの。それを取り返すということは、長く続いた均衡を破ることになり、自分たちが逆襲に行くのは明らか。それ以前に、鬼ヶ島に攻め入る危険も伴う。

何故今になって奪い返したのか、鬼珠には分からなかった。

「あるわ！ 貴方たち、竜神様を誘拐したでしょう！」

「……はあ！？」

ここに来てから初めて、鬼珠が素っ頓狂な声を上げる。そしてはじめて見た彼のその表情に鬼丸はギョツとした。

竜神様、とはここ一帯を治めている水神である。その力はすさまじく、鬼ヶ島付近の海流は恐ろしく渦巻いている。金太郎たちもよく知っている神様であった。

また竜宮城の祭神でもあるゆえに、竜宮城の人間の信仰はとてもあつい。そしてトップである乙姫の信仰は異常とも言えるレベルであった。

「竜神様が突然姿を消した……。それは貴方たちが誘拐したこと以外に考えられない。売られた喧嘩は買っわ！」

「ちよつと待て！ どうすればそつという結論に至るんじや？ 竜神様を誘拐するなど……そんな業が我々に赦されるとでも思っているのか？ そんなことするなら手っ取り早くお主らを攻めておるがな」  
「敵の言うことなんて信じると思うの？ とにかく、囚われた竜神様のために私にも考えがあるわ」

乙姫は短く詠唱を唱えると、鬼珠との間に結界が張られる。いくら鬼珠が結界のエキスパートと雖も、人の結界を解くには時間がかかる。

これでもう、乙姫を止めることは出来ない。

「この玉手箱には色々なものが入っている。魔力も、時間も、私たちの魂も、そしてここに眠る竜神様の力も……。そして今こそ、ココに開放する！」

「なっ！ お主よせ！ そんなことしたらここが」

「百も承知よ！」

信仰は時に人を狂気に陥らす。我が神こそ全て、と考えている人間ならば尚更だ。

そして今の乙姫がまさにそれで、結界を張った彼女を誰にも止めることができない。鬼珠の額に冷や汗があふれ出た。

「これは……逃げたほうがよさそうかの……」

「竜神様がいなくなってしまうた今、こうするしかない！ もう誰にも止めることはできないわ！」

「お待ちください！ 乙姫様！」

今まさに玉手箱を開けようとした乙姫を止める手が現れた。それは浦島の手であった。

「何の真似？ 浦島」

「出すぎた真似です。いいですか。今ここで玉手箱を開けてしまえば、ここが崩れるのは当然。しかしそれだけではないです！ ここにいる全従業員の肉体の時間が動き出し、急激な老化の変化に耐え切れず、死に至るものもいるでしょう。なにより、貴方の魂は行き場を失い、永遠にこの地をさまよう靈に

「うるさい、うるさい、うるさい！ 貴方にとやかく言われる筋合いはないわ！ 貴方は私に付き従ってればいいの！」

乙姫が浦島の手を全力で振り払う。

「貴方は契約を違える人ではないはず！ まだあの契約は有効よ！」  
「だからこそです。僕はあの時もう一つ誓った。“貴方を守る”と。だから僕は貴方を止める、貴方を守るために」

「……貴方」

一瞬だけ、狂気に浸っていた彼女の表情が真に戻る。が、それも一瞬だけ。すぐに彼女の顔は元の狂気を取り戻した。

「それでも私はやめない。貴方が私に命をかけて仕えるように、私は命をかけて竜神様に仕える。誰にも止められないわ」

「やめ

「やめて」

再び乙姫を止めようとする声がかかる。その声はか細く、今にも消え入りそうな声で明らかに少女の声。

その声を聞いた瞬間、乙姫の動きが完全に止まった。

「……この声は」

「あつ、リュウだ」

「さあ、さあ、皆の衆、図が高いですよ！ ひかえおろごう！」  
『 つてかぐや！？ 』

現れたのは金太郎についてきた謎の少女、リュウと……何故か分からないがかぐやであった。かぐやは大げさにポーズを取り、声を張り上げた。

「ここにおられる方を誰だと心得る？ このお方は竜王姫神。リュウオウノヒメノカミ即ち竜神様ですよ。さあ、控えなさい。キンタさん、鬼丸さん」

「はい！」

「鬼丸、お前……」

呆れたふうに鬼丸を見た金太郎であったが、周りを見れば鬼珠も、乙姫も、ウラシマも皆一様にひれ伏している。というわけで金太郎も取り敢えず頭を下げることにした。

リュウはポテポテと歩き出し、乙姫の前で止まった。

「……乙姫」

「は、はい。竜神様」

乙姫が一層頭を下げる。リュウはその肩に手を置くと、身内を心配するように語りかけた。

「……貴方ずつとは私のために尽くしてくれたの。だからそのことはいつも感謝しているよ」

「勿体無きお言葉」

「でも今回はかりは頂けないの。私は自分の意思でここを出て行って、自分の意思でここに帰ってくるつもりだった。それを全部鬼のせいにしてしまうのは許せないよ」

「……はい」

乙姫の頭が垂れる。リュウが次に向かった先は、鬼珠のところであった。

「鬼のおじいちゃん」

「なんでじゃろうか、竜神様」

「貴方には迷惑かけたの。でも今回のことは昔からの因果から成ったもの。もう今後こういう過ちを起こさないように、竜宮城とは仲直りして欲しいの」

「なっ！それは」

驚嘆の声をあげたのは乙姫であった。あまりに衝撃的で、飛び上がってしまった。が、それをリュウが目で制する。リュウが一瞥すると乙姫はおずおずと引き下がった。

鬼珠は冷静に、リュウの願いに答えた。

「もちろんですとも。竜神様の仰せられとおりに」

「……そして、浦島竜胆」

「はい……」

浦島は地に着くほど頭を下げる。命令されたとはいえ、この騒動の一連の戦犯は浦島。さらには元々竜神様の持ち物であった玉手箱を略奪し、それを無用で使った。償えるものではないと分かっていた。どんな咎めも受けるつもりでいた。

しかしリュウが浦島に向けたのは咎めの言葉でも、怒りの言葉でもなくたった一つの箱であった。

「コレは貴方のもの」

「えっ……これは玉手箱、何故？」



リュウから手渡されたものは玉手箱。予想外の出来事に、リュウの顔を見上げた。

「これでいつまでも乙姫を守って欲しいの。それに、貴方なら任せられると思ったから」

乙姫が竜神を信仰するのは代々続くシャーマンの血ゆえ。しかしそれ以上に乙姫は竜宮城で一人眠るリュウのことを慕っていた。まるで家族のように。

だからリュウにとっても乙姫は家族同然だと思っているし、その乙姫を守ってくれる浦島もまた然り。浦島は竜神から認められたのであった。

「有難うございます！」

「うん。……久しぶりに動いたから眠くなったの。そろそろ私は眠るよ……。あつ、鬼の子と、金太郎と、かぐやも有難うね。貴方たちのお陰だよ。じゃあね、バイバイ……」

そう言っつてリュウは目を閉じると、その体は光に包まれ消え入っていく。皆その光景に見とれていたが、いち早く鬼珠が動き出した。

「……さて、儂らも帰るとするか」

「えっ……玉手箱のことはいいのですか？」

「竜神様に言われてしまったては逆らうわけにもいかんしの。アレはウラシマ君のものじゃ。乙姫、また後日話し合いといこうか」

「……そうね。鬼と続くこの因果にも決着をつけましようか」

「ホッホッホ！ そうじゃの。では皆、帰ろうかの」

乙姫との睨み合いを断ち切ると、鬼珠は出口に向かった。それにか

ぐやと鬼丸はついていくが、たった一人だけ未だに歩き出していないものがいた。

「キンちゃん……」

「ウラシマ……」

ウラシマは決着をつけた。自分の迷いを断ち切り、竜宮城の人間として生きていくことを決めたのだ。

しかし金太郎自身に決着はついてはいえ、はい、そうですか、さようなら、と割り切れるほど彼には人間はできていなかった。本当に苦しそくに、顔をしかめていた。

「僕はもうそっちは戻れないからさ、鬼ヶ島には帰れないんだよ」

「そう、か……そうだよ、な……」

「でもさ」

ウラシマは笑って、金太郎を見た。

「いつかまた会えるさ。そう遠くない未来に。……そう、僕は信じているよ」

鬼ヶ島と竜宮城は長く続いたこの因果を切り、いつか分かり合える日が来る。ウラシマがそう口にする、金太郎もその顔を綻ばせた。

「おう！ また、いつか会おうな！ ウラシマ」

「そうだね。じゃあまた会おう！」

『じゃあな！』

「　　って言ったものはいいんだけどさ」

数日後の鬼ヶ島。

鬼丸の自室で金太郎は……だれていた。

「やっぱり別れるのはつらいよな……。はあ……」  
「ほらほら、キンタ。そこ邪魔ですよ」

鬼丸は本を読みながら、金太郎を足でどける。金太郎はそんな様子の鬼丸を見て、ポツリと疑問を漏らした。

「……お前は寂しくないのかよ、鬼丸？」  
「別に」

鬼丸は簡潔に答える。

「むしろかぐやを脅かす愚か者がいなくなつて清々しています」  
「……時々お前のそういう利己主義が羨ましくなるよ」  
「まあまあ、キンタさん」

そんな光景を見て、珍しく機嫌の良いかぐやが金太郎をたしなめた。

「別れは新しい出会いのきっかけというじゃないですか。そうクヨクヨしていると新しい風も吹いてきませんよ」

「そう、だよな……」  
「はいはい。シャキツとして、シャキツと。胸を張って、背筋を伸ばさないとかつこ悪いですよ」

「　　でもかぐやちゃんが胸を張っても、とても誇れるよう

なものじゃないよね」

「うるさい！ その下賤！」

反射的に右足が出る。誰かは知らないがそれは明らかにセクハラ。とどめをさそうと、蓬萊の玉の枝を取り出したところで、何かに気が付いた。この声には聞き覚えがある。

「　　ってこの声って……」

「いたた……。流石かぐやちゃん。ナイス蹴り」

『ウラシマ！？』

壁にめり込んでも、なお親指を立てているのは見た目十歳ばかりの少年。忘れるはずもない。その青い髪と、ニヤニヤ笑っているその顔はまさしくウラシマそのもの。

彼はいつもどおりのニヤニヤ顔を一層顔に広げていた。

「やあ、お久しぶり、皆さん。元気にしてたかな？」

「お前……どうしてココにいるんだよ！？」

「うーん、話すと長くなるんだけどね……」

「幸いにも時間はたっぷりありますよ」

部屋の扉に鍵をかけられた。

「ありやりや、逃げられないや……。簡単に言うと、僕は人質ってところかな？」

「はあ？　どういうことだよ？」

金太郎がウラシマに問う。するとやれやれと、大きく息を吐き出し長い説明を始めた。

「つい先週に乙姫様と鬼の長老が話し合っただけ、取り敢えずの休戦と相なったわけだよ。でも何年も続いたがみ合いがそう簡単に終わるわけもない。上は理解しても、下が理解しなくて反乱、と言うこともあるからね。だから建前上、もう少しがまんしなくちゃいけないんだ」

「だから、人質……ですか？」

「そう。僕が鬼ヶ島で働いて、長老の息子……そうそう、栄鬼さんが竜宮城に派遣されることになったんだ。まあ、人質というより交流かな？ 鬼ヶ島と竜宮城、お互い仲良くやっていきましょね、っていう第一歩だよ」

分かった？ とウラシマは大げさにジエスチャーを取る。三人はしばらく呆然としていたが、金太郎が確認するためにいち早く動き出す。

「ウラシマ、じゃあお前……」

「そうだよ。僕は帰ってきたよ、キンちゃん。またよろしくね、みんな」

「……まあ、仕方ないですか。長老の意向に逆らえませんが」  
「鬼丸さんがそう言うなら仕方ないです」

鬼丸とかぐやもそうはいいながらも顔は笑っている。ウラシマも少しホッとして、安堵の笑みを浮かべた。

「……ウラシマ」

「ん？ なんだい、キンちゃん」

「おかえり」

金太郎は破顔してウラシマに言う。一瞬キョトンと呆気にとられるが、ウラシマはすぐに反応した。

「ただいま。これからまたよろしくね」

ウラシマも笑ってそれに答える。ようやく、彼は鬼ヶ島の日常に戻ってこれた。

「それではウラシマ……貴方には栄鬼さんなみの仕事をやってもらいましょうか？」

「ひよっ？」

「はい、この書類の整理……一日でやってくださいね」

ズドンッ！

山のように築かれたその書類の束。その山の向こうから聞こえる鬼丸の声が妙に恐ろしく聞こえる。ウラシマはその恐怖を振り払うために、全力で……

「う、嘘だアアアア！」

「逃げるな！ 待て、ウラシマ！」

逃げ出した。こうして、鬼丸とウラシマの鬼ごっこが始まり、四人にいつも通りの日常が戻ってきましたとき。めでたし、めでたし……。

「めでたくねえ！ うわああん！」

## 閑話休題：はいはい、こちら竜宮城出張所

ここは鬼ヶ島中央塔最上階。

この階で働いているのは、長老、栄鬼、それと時々手伝いに来る鬼丸のみ。また遊び目的で幽鬼たちも来ることがあるが、少なくとも人がここに来ることはない。

そんな場所にただ一人、人間がデスクワークに取り掛かっていた。

「はいはい、こちら竜宮城出張所……ああ！ 栄鬼さん、お久しぶりですね」

はい、ウラシマさん。こちらこそお久しぶりです

皆さん、こんにちは。浦嶋竜胆です。僕は今、監獄のような……いや、鬼ヶ島の最上階にいます。

さて、何故僕がこんなところにいるかと言うとつい先日、竜宮城と鬼ヶ島の仮の和平が結ばれた際に、互いの交流的なもののために出張所を開いているためだ。鬼ヶ島には僕が、竜宮城には栄鬼さんが向かっている。

それで交流の一環として電話を設置させてもらったんだけど全然電話がかかってこない。今日はじめてかかってきたのがその栄鬼さんからの電話なんだけど、何か用かな？

「どうですか、そちらのご様子は？ 何か不備でも？」

いえ、特に何も。貴方の部下はとても優秀で……。勉強になります

「まゝたまたご謙遜を。亀吉君からうわさは聞いていますよ。前よりもずつと仕事がかどるって」

それはウラシマさんがサボっていたからじゃ……

「……」

あつちやく、おキツイ一言。丁寧な物腰で案外はつきり言うタイプなのね。やっぱり鬼丸君と似ているや。

……ちよつと逆襲しようかな。

「それにしても……栄鬼さんは計算が苦手ですか？ ここの支出計算、すこしずつ、ずれて間違っていますよ」

いやいや、お恥ずかしい……。どうしても昔から計算が苦手でした……いつもは鬼丸に手伝ってもらっているんですけどね

「そりやそうですよ。こんな……こんなに膨大な資料を相手にしているんですから……」

僕は苦笑いをしながら右を向いた。

そこにあるのは一つの山……。いや膨大な資料。こんな資料を相手に毎日戦っていると思うと、彼の苦勞が窺える。本当に部下に恵まれてないんだな……。

部下に恵まれるダメ上司と部下に恵まれない優秀な上司か……。どちらも救われないな。

「それではまた今度。今度一緒に飲みましょう」

いいですね。ではまた今度

ぴつ、と音がして電話が切れる。今度亀吉君も誘ってやるか。僕はつけているネクタイを一旦緩め、イスにもたれかかった。

「ぶつ、……それにしても、凄い量。少し休もう……」



一息ついてお茶を飲もうとするとプルルルと電話がかかってきた。僕は氣を楽に受話器をとった。

「はいはい、こちら竜宮城出張所」

もしもし、ウラシマさん……

「やあ、比良目くん。どうしたんだい」

おや、これはシヨタコン狙いの呼び声高い第弐技術開発部部长、比良目君じゃないか。あの子といるとお姉さん受けがいいんだよね。

……ぼくはあんまり良くないんだよね。どうしてだろ？

「実は佳麗ちゃんのことなんだけど……」

「む？ 佳麗ちゃんがどうかしたのかい」

彼らの仲は非常に良い。何年も彼らを見てきたが、喧嘩をすることはあれど互いが離れたことはなかった。

その彼ら何かあったとすれば一大事だ。僕は思わず身を乗り出した。

「うん。佳麗ちゃんが今朝からいなくて……。もしかしたら誰かにさらわれたんじゃないかな!? ねえ、どう思う、ウラシマさん？」

「あ、ああ、そう……」

彼らは共感シンクロと言う特定の相手の考えが共有する能力を持っている。それを使えばどんなに離れていても、合流することが出来る。

それを使えばいいんじゃないかな、と言うと、安心した様子で呟いた。

あっ、そうか。ありがとう、ウラシマさん！

「うん、そつだね。じゃあね……」

どこか元気よく電話が切れた。多分これからスキップでもして佳麗ちゃんを迎えに行くんだろう。

ああ、心配して損した……。比良目君は泣き虫なのが玉に瑕だな……。今度こそ一服を取ろうとすると、またまた電話がかかってきた。今度は誰だい？

「はいはい、こちら竜宮城出張所」

はっはっは！ ウラシマ！ 久しぶりだね

「……真黒くん」

第五技術開発部部长、真黒。走りに目覚め、走ることに命を駆けるような男である。そして色々と面倒くさい。あんまり相手にしたくないな……。……。

「一体何のようだい？ 僕忙しいんだけど」

まあ待てヨ。お前玉手箱持ってたんだヨナ？

玉手箱のことは社内全部に伝わっている。別に隠すようなことでもないけど、アレはあんまり使いたくない。なるべく魂を危険にさらしたくないからね。

今はこの部屋の金庫に眠っているはずだ。

「ああ、持っているよ。それがどうかしたのかい？」

だったら……。俺と足で勝負シロ！

「はあ！？ 何で？」

玉手箱を使えば時間を操れるんだロ。それを使えば俺と足で張り合えるかも知れないダロ。だから俺と竜宮城最速をかけて勝負シロ！

「ああ、そう……」

お前本当にバカだろ、という言葉は僕は我慢して飲み込んだ。

「まあ気が向いたらね……」

よっしゃ！ 忘れんナヨ！ じゃあナ！

プツツと電話が勢い良く切れる。多分また走りに行ったんだろう。面倒くさい……。

あの黒人野郎、一回溺れさせてやろうか、とか思っていると間髪いれず再び電話が鳴り響く。

あっ、何か嫌な予感……。

「はいはい、こちら竜宮城出張所」

もっしもっし！ ウラシマさん、お久しぶりで〜す！

「……万坊君」

ほら、やっぱりいいいい！！

竜宮城で最も嫌われているナンバーワン（当社比）の第参技術開発部部長の万坊。

ああ、声だけで僕を不快にさせるとは流石最ウザ。そしてその内容ももちろん最ウザの保有者にふさわしいものだった。

聞いてくださいよ！ 可児ちゃんったらまた僕のことを無視して

……。ほんっとツンデレですよ〜！

「……」

やっぱり照れているのかな〜！ 早くデレが見たい

僕は無意識にその電話を切っていた。ごめん、だってこれ以上聞くと耳が腐りそうだったもん。というか……

「何で竜宮城にはバカしかいないんだ！ 気が休まらんわ！」

と、僕が叫んだところで再び電話が鳴り響く。また万坊かと、イライラしながら僕は受話器を乱暴に取った。

「はいはい、こちら竜宮城出張所！」

もしもし、浦島。久しぶりね

「じゃ、社長！？ 如何なさいましたか？」

思いもしない相手に僕は少しうろたえた。だってこわいんだもん。

別に。ただ貴方が仕事を頑張っているか、気になっただけよ

「そ、それはもう。身を粉にする思いで仕事を頑張っております！」  
その仕事ぶりが竜宮城でも見たかったわ

「……………」

相変わらず厳しい一言だな……………。

ところで浦島。貴方は私の忠実な部下よね

「はい、もちろん」

その貴方を見込んで頼みがあるんだけど……………

ほう、社長が僕に頼みごととは珍しい。いつもは亀吉君を通して僕に伝わるのに……………。  
いいでしょう。その任、第零技術開発部部长の名にかけて果たしましょう。

本土の甘味処、桃の木でケーキ買ってきてくれない？

「……………はっ？」

あそこのケーキがおいしいと評判で、いつも食べたいと思っていたのよ。でもなかなか地上に出る機会がないじゃない。そこで貴方地上にいるんだからちょうどいいし、何より早いじゃない

「……」

人数は、私、可児ちゃん、佳麗ちゃん、比良目、それと仕事をいつも頑張っている岩土にも差し入れがしたいから5個。今すぐ届けなさい

なんとという横暴さ。呆然と黙っているとそれを肯定と受け取ったのか、社長はフフツと笑う。

「それじゃあね、また。私の忠実な部下」

「あつ、ちよ」

ツイッターと空しく電話が切れた音が響く。僕はしばらく呆然としてから、ようやく動き出してそして

「ちくしよおおおおお!!」

僕は財布を持って本土に駆け出した。その後キンちゃん達がついてきてみんなにケーキを奢らされたことは言うまでもない。

閑話休題：我が名は犬である、名などもうない〜前編〜

「おや、キヨウ様。どこか出かけられるのですか？」

我の名前は犬。桃原キヨウ様に仕える忠実な僕しもへにして、甘味処“桃の木”のウェイターである。

我わたしが声をかけると、前方にいる女性がこちらに振り向いた。

「ああ、ちよつと買い物に、な」

この方こそ我が主、桃原キヨウ様、またの名を桃太郎。肩口で切り揃えた黒い髪、刃物のように鋭い黒い両眼、白を基調とした着物、そして腰にある黒い日本刀が特徴のお人である。

今日もなお、お美しい……。

「犬、どうした？」

「い、いえ！……何も買い物ぐらい我に言ってくればよろしいのに。わざわざキヨウ様が出向く必要はありません。そのために我がいるのですから」

「ふむ……それもそうか。じゃあちよつと手伝ってくれ。少し今回は量が多いんだ」

「喜んで」

我もキヨウ様の後に小走りですついていった。愛用の二本の刀を持つて。

「あの……キヨウ様。本当に最初は一人で行こうとされていたのです

か？」

「ああ、そつだ」

キヨウ様はこちらを振り向き、頷く。しかし我はその表情は見ることはかなわず、俯いたまま声を絞りだした。

「この量は流石に一人では無理かと……」

「ああん？ だらしがねえな」

キヨウ様が呆れた目でこちらを見ている、のだらう……。

我が必死に両手と背中を使って支えている膨大な荷物。それだけでも驚きの量なのだが、キヨウ様はその3倍はあろう量の荷物を片手で支えている。

もはやここまで来ると曲芸師のレベルである。道行く人々は一様にこちらをギョツとして見ている、だらう。

キヨウ様はそんな視線は気にもかけず、ずんずんと町を歩いていった。

「キヨウ様……こんなに菓子の材料を買ってどうするつもりですか？ また新作ケーキでも作るのですか？」

甘味処“桃の木”の菓子作り、主に洋菓子の担当はキヨウ様である。というのもお爺さんもお婆さんのどちらも洋菓子作りというのが苦手だからである。

今では店の洋菓子のほとんどはキヨウ様が作っているのだ。もちろん味は最上である。

「ああ、まあな……」

「？」

キヨウ様が珍しく歯切れ悪く答える。桃太郎であるときも、桃原キヨウでも見たことない姿であった。

さて、桃原キヨウ様には二つの人格が備わっている。破壊と強さを求める“桃太郎”としての人格と、記憶喪失により生まれた創造と和を求める“桃原キヨウ”としての人格。この二つが交じり合い、今の桃原キヨウとしての人格を形成している。

普段は桃原キヨウの力が強く、桃太郎の力はあまり出てこないが確かにキヨウ様の中には桃太郎が眠っている。

あの破壊と殺戮を繰り返す破壊欲求者にして、“最狂”。桃太郎としての人格が

「む？」

何やら裏の路地が騒がしい……。キヨウ様も気づいたようで眉を顰めてこちらを見た。

「行くぞ、犬」

「えっ……何故ですか？」

他人を助ける道理などない。それが危険そうなものなら尚更である。今、路地裏で行われているのはまさにそれで、誰もが関わろうとしないだろう。一般的にはそういうものだ。

……まあ、一人だけ喜んで助けに行く金髪を知っているが。

キヨウ様も当然無視して行くと思っていたので、呆氣をとられてしまった。我が呆然としているとキヨウ様は当然のように答えた。

「何故って……戦えるかもしれねえだろ？」

その瞬間、キヨウ様の表情は桃太郎様としてのものに変わっていた。



狭い狭い路地裏……。近年急速に発展したここ、長閑には人目につかない路地裏などが迷路のように入り組んでおり、深い闇となつて近づこうとするものを拒む。壁などないはずなのに表とはまるで隔離されているそこは裏の者にとつては絶好の場所であり、誘拐や強姦などが横行していると聞くが……。

「やだ！ 誰か助けて！」

「コラ、オメエ！ 騒ぐんじゃねえ！」

「クソ！ 威勢のいいガキだぜ！」

そこには三人。一人は10歳ほどの団子頭の少女。あと二人は帽子で隠れて分らないがおそらくは男だろう。その二人が一人の少女相手に集<sup>たか</sup>つていた。

「誘拐、か？」

強姦だつたらこいつらの趣味を疑うぞ……。

「ああ！？ 何だ、テメエら？」

「おい、そごどけよ！」

おっと、気づかれてしまった。まあ、気づかれること前提でここに立っていたのだが、こいつらは少し反応が遅いな。

キョウ様は未だに動かない。その代わり肩を震わせている。普通の女性なら恐怖で震えていると思われるだろうが、残念ながらここにいる女性は普通ではない。キョウ様は今

「クッハッハッハッハッハ！」

『!?!』

笑っているのだ。三人は皆一様に動きを止め、その異様さに驚いていた。

「なあ、犬。犯罪者っていうのはどうすんだっけ!?!」

「はい。犯罪者はその罪に合った裁きを受けることになっています」

「だよな。だったら……この社会のゴミ共を殺してやらんといかな!」

桃太郎様が駆け出す。

突然の敵の登場に驚くが、すぐに構えようとするがもう遅い。反応するならば桃太郎様と出会うことを予期していないと間に合わないんだから。

「潰れる、オラアアアア!」

「!?!」

声も出す間もなく一人が壁にめり込む。

もう一人はやつと反応したのか、自分の手元にいるはずの女子を盾にとった。

「お、おい! このガキがどうなってもいい」

「そのガキとはどのガキだ?」

「なっ!?!」

まあ、残念ながらその子供は我の手元にすでにいるのだが。

「い、いつの間に?」

「ククク……」

我はキヨウ様の忠実な手駒。キヨウ様の霸道に落ちている小石すら  
払う番犬。キヨウ様が壊すことを望むならば、壊すのに邪魔になる  
ものは全て排除する。

「あ、やめて……」

「壊れちまえ」

男の断末魔が辺りに響く。が、当然だが助けに来るような人間は誰  
もないのだ。

「……つもらん。帰るぞ、犬」

「はい、キヨウ様」

キヨウ様は本当につまらないさそうに、先ほどとは違って変わってこ  
の場を立ち去ろうとする。余程つまらない闘いだっただのか、そのイ  
ライラを道にある全てのものにぶつけながら歩いていった。  
そして我はキヨウ様についていくのみ、その壊れたものを出来るだ  
け道の隅に避けながらついていった。

「あ、あのちよつと！」

おっと、しまった……。少女の存在をすっかり忘れていた。キヨウ  
様も今やっと思いついたようにこちらを振り返った。

「ああ……大丈夫だったか？」

「は、はい……」

「もう変な奴らに絡まれんなよ。……ってそれは無理か。絡んでく

るのは向こうだもんなふむ……」

キヨウ様は顎に手を当て考える。

そして名案が思いついたように手を叩き、そしてこちらを見た。あつ、嫌な予感……。

「おい、犬。この子を家まで連れてってやれ」

『えっ!?!』

「あたしや先に帰るからその子を無事に家まで送るんだぞ。じゃあな」

「ちよっ……キヨウ様!」

……私の制止も聞かずにキヨウ様はこの場を立ち去っていった。桃太郎だったときと相も変わらず、自分本位なところは変わらないな……。

「……ああ、行ってしまわれた」

「……」

少女と我は思わず顔を見合わせる。少女の顔は今にも泣き出しそうで、不安に満ちていて、崩れそうであった。こういう顔は苦手だ。

「ふむ……キヨウ様に言われてしまったては仕方ない。行くぞ、女子」

「……」

「そういえば名前も聞いていなかったな。名をなんと言う?」

我が名を尋ねると、その少女はおずおずと小さく呟くように自分の名を答えた。

「……音子ねい」

「……なるほど、その姿にぴったりだな」

「？」

「いや、何でもない。……我が名は犬だ。犬と呼べ」

犬、と聞いて少女は小首をかしげる。確かに犬と聞いて人の名と思ふような人間はいないだろうな。

しかし我が名は犬である。本当の名前などとうに捨てたのだ。

さて、突然だが我は喋る、ということが本当に苦手である。必要最小限のことしか喋らないし、何より無言であるほうが多い。未だに“桃の木”の主人とはうまくコミュニケーションはとれず、家で喋るのはキョウ様のみ。数ヶ月同じ屋根の下で暮らしている者でさえコレなのだ。  
であるからして……

「……」

「……」

こんな無言の状況も当然といえば当然なのだ。

しかしこのままではいけない。年長者として少女を安心させないといけないのだ。我は勇気を振り絞って声をかけた。

「おい、音子。お前の家とやらはどこなのだ？ このままどこに行くか分からないまま歩いていても無駄だぞ」

……帰ってくるのは無言のみ。そんなに怖いか、我のことが。

「

むっ？」

ここで我はようやく気がついた。誰かにつけられていることに。まさか音子のことには気を取られ、ここまで距離を許すとは情けない。キョウ様がいたら殴られてしまうな。

「……音子。次の道を右に曲がったら全力で走れ」

「えっ？」

「いいから走れ。いいな」

音子は未だに何のことか分からず、ただ呆然としている。我は仕方なく音子を引つ張り、全力でその場を走り去る。路地裏に身を潜めたとところで、後方では男達の騒ぎ声が聞こえる。やはりと思い、我はふうつと、溜息をついた。

「……あの人達、一体誰なの？」

「それはお前が一番知っていることではないのか？ 音子、お前は一体何者なのだ？」

音子はやはり黙っている。

「まあ……答えたくなければいい。人には言いたくないこともあるだろうからな」

「……い、犬さんにもあるんですか？ 言いたくないこと」

「ある。しかしそれも今では笑い話に出来るぐらいだがな」

突然喋りだした音子に少し驚くが、それ以上に自分の答えに驚いていた。そして我の口からは自然に、喋るのが苦手な人間とは思えないほど流暢に言葉が発せられていた。

「我は家から勘当されているのだ」

「えっ？ ……」

「我が家は少し名の通った退魔師の家柄でな。それなりに力を持っている。だから我という弱く、小さな存在が赦せなかったのだろう。元の姓はもちろん、与えられた名まで取り上げられ持たされたのは路銀のみ。後は一人で生きていくしかなかったのだ」

ここで初めて音子は自分から口を開いた。

「……お、怒ったりしなかったのですか？」

「もちろん、怒った。家を恨んだ。家族を憎んだ。いつか復讐してやると誓い、どんな手を使っても生き抜いてやろうと思った。幸いにも、農村にたどり着き日雇いで何とか食をつないでいった」

音子は黙って聞いている。そのほうが有り難かった。

「しかしどうだろう。日々一生懸命に生きていると、だんだんそれが楽しくなっていく。憎しみも次第に薄れていった。ご老体しかその村にいなかったせいか、我はとても頼られ可愛がられた。そして我が十三になった頃、キョウ様に出会い……ああ、さっきの女性な。彼女に拾われて、我は今まで生きてきたのだ」

今でも鮮明に思い出されるその光景。あのときはあまりに衝撃的で、ただただ呆然とするばかりであった。

……と昔を思い出すといつも動きが止まってしまふ。これでは昔と変わらないではないか。

「おっと、すまない。つい長話をしてしまったな。つまらん話をし  
てすまなかった」

「……ううん、全然平気だよ」

「そうか。それは良かった。ではそろそろ出るとするか。ここに

ると息が詰まる」

こんな閉鎖的な狭い路地裏、衛生的にも精神的にもよくない。今にも押し潰されそうなその空気から逃れるためにここから出ようとすると、音子が唐突にその口を開いた。

「あのね、犬さん……。わたし、家出してきたの」

「……ほう。何故？」

「家族が嫌になったから」

今度は我が黙る番であった。

「お父さんは約束をしてもいつまでたっても遊んでくれないし、お母さんも毎晩どこかに遊びに行つちやうし……。誰もわたしを見てくれなかった。こんなところにいたくなかったから、家を飛び出してきちゃったの。そしたら変な人に襲われて、犬さんたちに助けもらったの」

なるほど、あの時はそういう状況だったのか。

しかし……。一人で歩いているだけで誘拐されそうになるとは、世の中が余程恐ろしくなったのか、それとも音子が恐ろしいのかこれでは分らないな。

「わたし今まで一番家族に恵まれてないと思つてた。一番不幸な子と思つてた。でも犬さんの話を聞いて、わたしなんかまだ恵まれたと分かつて……。勘当つてもう家族と会えないってことでしょ。そんなのわたしには耐えられないもの」

「……ではこれからどうする、音子？ 帰るのか？」

「……ごめんなさい。まだ家には帰りたくないの。まだ家族に会える余裕はないから」



音子は再び俯く。我は再度溜息をついた。どうして皆、物事を難しく考えるのか。もっと考えればいいのに。答えなど、すぐ目の前にある。

「ではそう言えば良かったのに。早く言えばこんなところにたむろする必要などなかったのだぞ。とりあえず我の家に行こう。キヨウ様も許してくださるだろうし、お前が落ち着いたら出て行けば良い」「い、いいの？ そんなこと」

「当然だ。キヨウ様にも“無事に家まで届ける”と言われたからな。心が病んでいたら約束は果たせないからな」

我は音子に手を差し出す。

「帰ろうか、音子」

「我に宿りしは風、その力は全てを薙ぎ倒す」

その瞬間、背後に強烈な風が舞い上がった。気づいたときにはもう遅く、成す術などない。我は風に押し倒された。

「い、犬さん！」

「……魔術師か。本当に音子、お前は何者なのだ？ 魔術師にも狙われるとは、やはりただものではないな……」

「犬さん！ 犬さん！ 大丈夫、しっかりし」

音子の声だけが我の頭の中に響き渡り、だんだんとそれが小さくなってゆく。

……すみません。キヨウ様。我は、約束を破りました。



閑話休題・我が名は犬である、名などもうない〜前編〜（後書き）

本当は一話で終わらす予定が二話になるなんて……。犬は予想以上の敵でした。ああ、恐ろしい……。

閑話休題：我が名は犬である、名などもうない〜後編〜

これはほんの十二年ほど前の記憶……。

「百十一！ 百十二！ 百十三！ ……」

辺り一面草原、まるで海さえ思い出させるようなその平原に一人の少年がいた。

その少年がその体に似つかない木刀を振り下ろしている。一心不乱に、ただ真つ直ぐに刀だけを見つめ何度も何度も振り下ろしていた。まだ年端もいかないうようなこの少年が何故このようなことをしているのか、それは彼の主人のせいに他ならなかった。

「ふわあ……。よく寝たわ……」

「桃太郎様！」

木にもたれかけ、先程まで眠っていたこの少女こそが彼の主人、桃太郎。男の名前だが性別は女。拾われた先の気紛れによってこの名前が名づけられたこの少女もようやく歳が十五になったばかりで、この少年とあまり歳は離れていないように見えた。

「お前はいつでも頑張るな……。そんなに気負いしているといつか壊れちまうぞ」

「大丈夫です！ 僕はまだまだやれます！」

「ふ〜ん……」

再び刀をふり始めた少年を見て、桃太郎がポツリと疑問を投げかけた。

「なあ、お前の“最強”って何だ？」

「えっ……？」

「お前にとっての“最強”。お前が思い描く強さと考えてくれてもいいぞ」

それはポツリと、何気なく投げかけられたわりには難しい質問であった。桃太郎は教育を受けてないにしても頭はよい。きっと彼女なりに考えがあるのだろうと思ひ、少年は自分の最上を答えた。

「僕にとっての強さは……“速さ”です」

「……というと？」

「敵より速く動ければ、敵より反応が早くなれば、敵の攻撃を見切れれば、そうなれば敵に何もさすことなく戦いに勝利することができます。だから僕が極めるのは“速さ”。それが、僕の“最強”です」

桃太郎は何も答えない。その代わりに今までもたれかかっていたその木から離れ、傍に置いてあった日本刀を拾いあげた。

「今日は特別だ。アタシが相手してやろう」

「えっ……？」

「ホラ、どこからでも来い。攻めないと戦いは終わらんぞ」

こんな経験はじめてであった。桃太郎は旅をする間は黙々と歩き続け、暇があれば寝ることに費やすような人間であるからだ。今まで稽古をつけてもらったことなどない。

しかしそれは少年にとって好都合。自分の目標としている人物と戦えるのだ。これほど嬉しいことはない。

少年は木刀を捨て、腰にある日本の真剣を抜く。訓練でさえ、彼ら

にとつては常に殺し合いだからだ。

「では、参ります……」

「……本当の戦いではそんなこと言つとれんぞ」

桃太郎の小言を耳にしながら、少年の姿が一瞬で消える。  
狙うは一撃。そう、首の頸動脈。

「もらつた！」

「甘え！」

桃太郎はその太刀をかわすと、少年の腹めがけ、力いっぱい拳を振りぬく。少女の力とは思えないその怪力。少年の軽い体は成す術もなく、先程まで桃太郎が寝ていた木に衝突した。

「オラア！ 追撃が入るぞ！」

「くっ！」

桃太郎は腰にある日本刀を抜く。黒い黒い、夜のように漆黒の日本刀。自分とあまり変わらないはずの背格好をしている桃太郎なのに、何故これほどまでにこの日本刀が似合うのか。例え敵であっても、戦場で見かければふと動きを止めてしまふに違いない。

とにかく、あの刀は真剣。さらに桃太郎の力が加われば間違いなく殺される。

と思つた時には桃太郎は自分の目の前にいた。

「……速い」

「潰れる」

容赦なく小年にその漆黒が振り下ろされる。  
もうダメか、と少年は目を瞑った。

「……………つてそこであきらめんなよ。バカ」  
「えっ……………？」

少年が目を開くと、目の前には怒った顔の桃太郎。

そして振り向くと先程までこの平原に唯一そびえ立っていた大木が真つ二つに割れていた。これが桃太郎の力か、と思うとゾツとした殺されるといふより、本当に跡形なく潰されていただろっ。

「オメエ、最後まで勝負は諦めんなって言うってんだろ？ わざわざ大振りにしてやって逃げるチャンス与えてやったのに……………これで一回死んでんぞ」

「す、すみません……………」  
「後な……………本当にこれがお前の求めている“最強”か？」

先程までとは打って変わって、桃太郎は少し悲しそうな目で少年を見た。

「お前がさっき言った強さはな。……………確かに戦いにおいて重要だが、それは絶対ではねえ。速さだけ追求した奴は、それは確かに強いが同時に弱いということなんだ」  
「……………」

「もし自分より速い奴が目の前に現れたらどうする？ すぐに魔術を遠距離から使える魔術師が敵だったらどうする？ お前はそれらに対応できるのか？ 死んでから後悔しても遅いんだぞ」

少年は黙るしかなかった。誰よりも、何よりも強さというものにとり憑かれている彼女には何も言い返せなかったからだ。

「求めるならば、“速さ”ではなく“疾さ”を求める。誰よりもどんなものより疾さを求めて、最速を目指せ。それが、お前の強さとなるんだ」

「……はい！」

少年の返答に、桃太郎は満足したように笑みを浮かべた。

「よし、じゃあそろそろ出るか。今度はどんな奴に会えるかな？」

少年はその言葉を聞くとすぐに旅の準備をし始める。今度は山を越える。それも迷いの竹林とか言われている物騒な森を通るらしい。しかしそんなもの彼らにとっては何の障害にもならない。目指すは鬼が島。立ち止まってなどいられないのだから。

少年がせっせと動き回っていると、桃太郎がこんなことを言い出した。

「でもさ。……速さを求めるっていうのもいいもんだよな」

「へっ？」

先程とは真逆の言葉に、少年の口から間抜けな声が漏れる。

「だってさ……もし約束をしていたり、誰か困っていたりしたら、すぐに駆けつけて安心させられるじゃん」

「……そうですね！」

「よし、じゃあ行こうか、犬」



「い、起きる。もう昼だぞ、犬」  
「……？」

我の名を呼ぶ声が聞こえる……。  
うつすらと目を開けるとそこにあつたのは四つの頭。それは知人の如何にも能天気そうな表情が浮かんでいた。

「おお、やっと起きた。おはよう、犬」

「もう昼だから、こんにちはじゃないかな？」

「いや、待つてください、ウラシマ。今日初めて会った人には“おはようございます”が使えるとどこかの本で読んだことがあります」  
「えっ！ 本当ですか、鬼丸さん？」

坂田金太郎、鬼丸童子、浦島竜胆、四方院かぐやの四人……。中身も能天気か……。

「……何故こんな場所に？」

「それはこっちのセリフだけ。ウラシマにケーキ奢ってもらった後にここを通りかかったら、ここでお前が寝ていたんだよ。何やってたんだよ、本当に……」

金太郎は後ろに目を向ける。そこに広がっていたのは魔術により舞い上げられたゴミや箱が散乱としていた。我の髪の毛にもクモの巣が引つ掛かっていて見るも無残である。

……なるほど、確かに只事とは思えないだろうな……。というよりも

「そつだ……音子、音子は知らないか！？」

「ネコ？」

「私、ネコって嫌いなんですけど」

「違う！ 人だ、人。お団子頭の目がクリクリしていて十歳ほどの子供だ！」

こんなところで倒れている場合ではない。早く音子を助けに行かなくてはいけないのだ。

しかし私の問いに答えられるものはここにはいない。知っているはずなどないのだから。

ここまでか……。

「ふうん……音子、ねえ」

「何だ？ 何か知っているのか、浦島竜胆」

「いやあ。ただうちの社長と仲がとつてもよろしいどつかの会社の重役さんの娘さんの名前が確かネコっていう名前だった気がするなあ、って思ってたね」

……なるほど、そういうことが。

「お、おい、そんな体でどこに行くんだよ？」

「……無論、音子を迎えに行くのだ」

「ちよつと無理じゃないかなあ？ ここに残留する魔力を見るに、敵は魔術師。風に催眠の魔術でも組み込んだのかな。相当強力だね。そんなものをマトモに喰らった君がまだ戦えるとは思えないけどね」

「それでも…… 我は行かなくてはいけないのだ。約束を、果たすためにな。……浦島竜胆、魔力が把握できるといふならば敵の居場所もわかるだろ。教えてくれ」

「あっち」

浦島は端的に東の方を指さす。確かあそこには貿易関連で使われなくなった倉庫がたくさんあるはず……。

今はこのいけすかないニヤニヤ顔に感謝しよう。

「感謝する。では」  
「ちょっと待ってください」

我を呼びとめたのは四方院かぐや。あまり面識はないはずだが……。

「何だ、小娘？ 何か用でもあるのか？」

「……今は特別にその暴言を許してあげましょう。ただ、戦いは気合いで何とかなるものではありませんよ。月光・癒華」

そう小娘が唱えると、金色の光が我を包み込んだ。回復系の魔術か。猿の戦いを見ているも分かったが、なんでもできるのだな、こいつは。

「おお……その技、久しぶりに見ましたね」

「ええ、正直私も忘れていましたよ。確かこの技で、鬼丸さんの怪我を治したんですよ」

「ふふ、いつもありがとうございます。かぐや……」

「鬼丸さん……」

『バカツプル爆発しろ！』

鬼丸とかぐやが手を取り合い、互いに見つめあう。残りの輩はそれを見て叫んでいる。

なかなか愉快的なメンバーじゃないか……。面白い、それでこそ桃太郎様を倒した奴らだ。

……と、私の傷も完全に癒えたようだ。体が軽い。

「私の女神如きの慈悲深さに感謝しなさい、犬っころ」

「……礼を言うぞ、月姫。では、さらば」

我はすぐさまここから飛び去った。早く行かなくては。目指すは東、音子のもとへ。

(……ここはどこ?)

音子は目を開けるとそこには自分の知らない光景が広がっていた。散乱する物、無機質な壁、そして厳重な扉。ここがどこだかは分からないが、一つ言えることがあった。

こんなところに一人でいたくない。

ここから出ようとしてもダメ。扉には鍵がかかっているし、何より自分は縄で縛りつけられていることが今分かった。あまりにも孤独で、泣き出しそうになった時に、不意に声をかけられた。

「へへっ。ようやくお目覚めかい。音子お嬢様」

「！」

その声はあまりに下品で、もう二度と聞きたくないような声であった。

「貴方たち……誰なの？」

「単なる賞金稼ぎなのですが、何か？」

「賞金稼ぎ……？」

「そう。大金を夢見るしがない賞金稼ぎ共。そんな俺らに捕まっているのさ。藤吉コーポレーション社長、藤吉総一郎の一人娘の音子ちゃんよ」

音子はその名を聞くと、顔をしかめた。

その名前のせいで今まで家族にも、友達にも、仲間にも恵まれなか

ったのだ。そんな名前などいらなかった。

「あんたが一人で歩いていたら俺らみたいなのに狙われることは分かっていただろう？　これはもう必然といつてもいいよな。まっ、何人か邪魔が入ったみたいだが」

「そ、そうだ。犬さんは？　犬さんはどこななの！？」

「犬だ？　……そんな奴は知らんが一緒にいた男なら雇った魔術師が始末したらしいぞ」

一瞬で血の気が引いた。

あの犬が死んだという絶望と、自分のせいだという自責の念。その二つが音子を襲い、その幼い精神は今にも壊れそうになっていた。

「へへっ……身代金が届くまでもうちよつとある。その間、少し俺たちと遊ばねえか」

「い、いや……」

「家族と別れたかったんだろ？　俺がいいところ教えてやるよ。お前さん、顔はいいし結構いけると思うぜ……」

呆然とする音子に追撃をかけるように男が近寄ってくる。

気味が悪い……。寒気がする……。こんな奴に手籠めにされることだけは御免だ。

音子は思わず助けを叫んでいた。

「た、助けて、犬さん！」

「だから、そいつは死んだって」

「勝手に人を殺すな。このウスラボケ」

その声と同時に嚴重に閉まっていたあの重厚な扉が突如断ち切られる。ものすごい轟音とともに現れたのは、白い髪の毛、まるで感情を

感じさせないような眼をしている男。そして、今音子が最も待ち望んでいた人物

「犬さん！」

「悪いな、音子。こんなに遅くなってしまった。お陰でこんな暗い場所に……。さあ、今すぐ帰ろうか」

「おっと、待てよ。お帰りはお一人にしてくれねえかな？ まだこいつには用があるんでね。それとも、この人数を相手にするのかい？」

その声と同時に、倉庫のあらゆるところから男たちが湧いて出てくる。なるほど、これだけの人数ならばまさか自分たちが負けるとは思わないだろう。

賞金稼ぎはニタニタ笑いながら犬を促す。

「さあ、お帰りはあちら」

「帰るか、音子」

「うん！」

「っ！？」

いつの間にか、犬は入口にいた。先程まで賞金稼ぎが捕まえていた音子を抱えて。

そう、ほんの一瞬だ。自分たちは犬から目をひと時も離さなかったし、第一犬と音子との距離は十数メートル離れている。賞金稼ぎたちはわけも分からず、ただ叫ぶしかなかった。

「オ、オメエ！ い、一体今何やった！？」

「だから帰ろうと……」

「ふざけんじゃねえぞ！ 折角の金づるをみすみす見逃すわけねえだろ！ 野郎ども、行くぞ！」

『うおおおおお!!』

怒声を上げながら迫りくる男たちを見て、音子は不安げに呟く。

「い、犬さん……大丈夫なの？」

「……安心してろ、音子。我は犬といつても吠えることしかできない負け犬ではない。あの“桃太郎様”の犬だからな」

そついった瞬間、犬の姿が消える。いくら犬でもこの人数を一瞬で倒せるほど器用ではない。だから犬は効率的に戦うことにした。

「俺たちを!!」

「踏み台にして!?!」

障害物<sup>おとし</sup>たちを踏み台にして、飛び上がる。狙う目標はただ一人、敵の大将のみ

「……って俺!?!」

「当たり前だ。敵の頭を取った方が早いだろ?」

敵の後ろに回り込むと、間髪いれずその首に手刀を叩き入れる。

賞金稼ぎは、うつ……、と言い面白いように気を失い地面に倒れこむ。もう少し頑張れよ、大将、と同情の目線を送りながら犬は立ち上がった。

「さて、後何人」

「……我に宿りしは風、その力は全てを切り刻む」

「む?」

突如発生する真空の刃がここにいるものすべてに襲いかかる。敵味

方問わないその魔法を、犬は最小限の動きでかわしながら音子を抱き抱え、守り抜く。

風が収まった後、残っているのは気絶している大将、犬と音子、そして黒いローブの男だけであった。

「ほう……避けたか。やはり二度も不意打ちをくらうほど間抜けでもないようだな」

「お前……あの時の魔術師か」

「いかにも。魔術師故真名は答えられんが、“the fast”と答えておこつ」

魔術師には二つ名、というものがある。人の名前を使ってその人を召喚したり操ったりできる魔術が存在する以上、自分の真名を知られるのは大変危険だからである。故に魔術に関する出来事、研究の際にその二つ名を名乗る。

多くは自分の師である人間から授かるのだが、自分でも名づけることができるらしい。浦島竜胆はその典型だ。奴にもちゃんと二つ名というのが存在するらしいが、師なんてそもそもいないので自分で決めたらしい。

犬は忌々しげにその名前を呟いた。

「the fast（最速）……。なんともけつたいな名前をつけたな、魔術師」

「ふん。当然だ。私が極めたのは速さ。風よりも何よりも速い“光”。それが私の本当の魔術だ」

「随分と親切じゃないか。余程己の魔術に自信があると見える。油断しているとガキにも負けるぞ」

「……依頼内容は計画を邪魔するものの排除。故に……お前を排除する」

「上等」



両者が対峙する。その距離数十メートル。だが敵が最速と名乗る以上、こんな距離は意味を為さない。敵は魔術師、自分は剣。遠距離戦は不利なのは決定的に明らか。犬が駆け出した時、魔術師は同時に術を唱え始めた。

「我に宿りしは光、その力は……最速」

「む!？」

犬が反応した時はすでに遅かった……。

焼きつくような熱さと衝撃が、反応できなかった犬を襲いかかった。犬の戦い方も速さに頼るもの、防具のない彼にとってこの一撃は致命傷であった。

「い、犬さん……大丈夫!？」

「私の力に及ぶ速さなどこの世には存在しない。小僧、あきらめろ。そんな刀では私には勝てんぞ」

「ふむ……確かに分が悪いな。キョウ様の言うとおりだ……」

昔の出来事を思い出し、苦笑する。あの頃は何も分からないまま速さを求めていた。ただ強くなるために、桃太郎様に少しでも追いつくために。そう、この魔術師と同じように

「……ところで最速。お前は どうして速さを極めたのだ？」

「愚問だな。速きことは強き如し。敵よりも速ければそれだけ強いということだ。」

「はっ!」

犬は笑い出す。笑いながら立ち上がる。笑いながらその日本の刀を手取る。辺りに犬の笑い声が響きわたる。これでは負けようがな

い。昔の自分と戦って負けるわけもない……。

「……何を笑っている、小僧？」

「くつくつく……これは失礼。あまりにお前の速さが滑稽だったの  
でな……。我もな、速さを求めたのだ。何故だと思っ？」

「……」

魔術師は答えない。狂人のような笑い方をするこの男の言葉に耳を  
傾げる必要を感じなかったからだ。

「我はな、“強さ”ではなく“速さ”を求めた愚か者だ。戦士とし  
ての強さを捨て、それでも速さを追求した。何故だと思っ？」

「……分かん。お前という人間が分からん。強さではなく、速さ  
と？ 速きことは強きことだ。それなのに」

「我が主に仕えるために」

犬は両手に持った刀を構える。

「強くなくとも構わない。ただ主に言われたことだけは最速にこな  
す。主との約束を確実に果たす。そのためだけに速さを求めたのだ。  
今ここで証明してやろう。お前の“最速”は私の“最速”に劣るこ  
とを」

「戯言を……。我に宿りしは光……その力は最速！」

先程までとは段違いの光が襲いかかる。速さも、威力も今までを上  
回っている。

その光を、犬は紙一重でかわした。

「な、何!？」

「……飼い犬が主に似るとは良く言ったものだ。とうに我は、速さ

にイカれている」

魔術師の目から犬の姿が消える。今まで、賞金稼ぎと犬の戦いぶりを見ていて一つ分かったことがあった。

こいつはそこまで速くない、と。

犬の姿が消えたのは敵の死角に潜り込んだため、または進行方向とは逆に動くことによつて敵の視界から消えたことだと魔術師は睨んでいた。

しかし今は違う。気配も、まるでそこには始めから誰もいなかったかのように犬の姿がない。視界から外れたようなこともない。敵が捉えきれない純粋な速さ、犬はそれを体現していた。

「ちっ！ プリズム！」

魔術師はその左手を握り締める。すると、その左手から発せられていた光が拡散し、ここにいるもの全てに襲い掛かる。

なるほど、目で捉えきれないから全体攻撃に頼る。最速の誇りも感じられなかった。

「無駄だアアアア！」

拡散する光を避けるのではなく、逆に向かつていく犬。上空から叫びながら、その刀を自分の前で交差させる。

「ひ、光を切り裂いただと!?!」

「だから言っただろう。お前の最速は我に劣る、と。……覚悟はいない。強くなりたいのなら速さではなく“疾さ”を求めるべきだったな」

「ひっ！」

「疾風、正の陣！」

犬の剣戟が魔術師の光を裂き、その体を捉えた。高速に切り裂かれた五つの刃は犬の最速は“最速”を破ったのだ。

しかし殺しはしなかった。全て峰打ちである。

そして魔術師が倒れこんだと同時に、サイレンの音が聞こえてきた。犬はその眉をしかめた。

「……後は警察の方に任せるか。まったく、遅いんじゃないか……」

犬は刀を納め、この場から立ち去ろうとする。国家権力というのは基本的に嫌いだからだ。と、そんな犬を止めるものがいた。もちろん音子である。

「……い、行かないで。まだ帰りたくない……」

「音子……」

「まだ犬さんと別れたくない……。犬さんのところに行きたい……。もう、こんな目に会いたくないから！ 犬さんがいればいつでも私のこと守ってくれるんでしょ！ だから……だから……」

音子の目から何か輝くものが零れ落ちた。犬はしゃがみこみ、その頭に手を置いて喋りかけた。

「音子……確かに我はお前の味方だ。しかしいつでも、都合のいい時に助けに行けるのほど我も暇ではない。我が桃太郎様に救われたのも偶然。いつでも助けに来てくれる、そんなヒーローみたいな存在はいないのだから」

「……」

「だが、ヒーローはいなくとも絶対にお前を守ってくれる人たちがいる。家族というものがな」

「ね~~~~~こ~~~~~!」

突然呼ばれた自分の名前に飛び上がった。この声には聞き覚えがある。

「パパ？ ママ？」

「大丈夫だったかい、音子？ 怪我は？ …… ああ、良かった……。

お前が怪我でもしていたらと思うと…… 本当に、本当に良かった……

……」

「パパ……」

「もう、本当に卒倒しそうで…… 貴方が無事とわかって本当にホッとしたわ」

「ママ……」

両親に抱きかかえられている音子に、犬は声をかける。

「音子…… お前にはまだ家族がいる。お前をいつでも守ってくれる家族がな。我に頼らなくとも、お前は生きていける。ただどうしても厄介事に巻き込まれた時は我を呼べ。誰よりも早くお前を助けてやる」

「犬さん……」

「では、じゃあな」

次の瞬間には犬の姿は見えなかった。きつとあの女の人のところに帰ったのだろう。もう会う機会などないかもしれない。

しかし、きつといつか会えるだろう。音子はその名を呼べば、きつと助けに来てくれる。そう約束したのだから。

だから今は、自分達の家に戻る。

「さあ、そろそろ私たちも帰ろうか。音子」

「……うん……」

音子は笑って、元気よく頷いた。

「随分と遅かったじゃないか、犬」

「キョウ様……」

もう日が暮れかかった頃、キョウ様は桃の木の玄関先で立っておられた。マズイ、待たせていたとしたら大変マズイ。

「すみません。少々厄介事に」

「本当に厄介事と思っているのか？ 随分とモテるじゃないか？

ん？」

「……見ていたのですか？」

我の口から思わずため息が漏れた。

「はあ……見ていたならば助けてくださいよ。魔術師相手にするのはなかなか大変なのですから」

「お前……アタシがあの場合に行ったら全員跡形もなく消し飛んでたぞ」

「……やっぱりいいです」

容易にその惨状が想像できて、我は身震いした。

「はあ……今日は早く寝よ」

「おいおい。今日の主役がそんな様子じゃ困るぜ」

「はい？」

「だって今日はオメエの誕生日だろ？」

今日は確か……………あつ。

「本当にバカだな、オメエは。まあいい。とにかくオメエのために祝いの席と特製ケーキを作ってやった。感謝しろよ」

なるほど、あの買い物はそのためのものだったのか。キョウ様は基本的に妥協を許さない。今回もその手と顔を見れば明らかであった。顔に小麦粉が付いておりますよ……………。

「おつ、犬君が帰ってきたのかい？　じゃあスピリタス開けちゃおうかなあ？」

「おじいさんや、それは世界最強のお酒じゃよ……………」

「ホラ、犬。早く行くぞ。今回のケーキは自信作なんだ。蠟燭もついているぞ」

家の中から愉快そうな声が聞こえてくる。それは我が一度失ったもの。我は急いで家の中に入って行った。

「はい！　今行きます！」

「あつ、そつだ。明日鬼ヶ島いくから」  
「へっ？」

閑話休題：我が名は犬である、名などもうない〜後編〜（後書き）

やっと終わった、犬のお話！

いやあ、本当に犬君には苦戦させられました。何でこんなに書きにくいんだろ、と思うほど苦戦しました。いやあ、本当に完結できてよかったです。

というわけで、ウラシマ編は完結です。後一話書いたら新章に入りたいと思います。主役はあの金髪かも……。

ここまで読んでくださいありがとうございます。w a l t e r でした。



### 閑話休題：とある退魔師の学習帳3

#### 株式会社竜宮城。

それはどこかの会社に勤めていけば必ず取引をする相手であり、この国に住んでいる人間ならば必ずニュースで見かけたことのある超有名企業である。

貿易、商品開発、食料品、技術開発、最近には薬品などあらゆる分野に手を伸ばしておりながらいずれも国内のシェアの上位に食い込んでいる。しかしそれほど有名なにも関わらず、その本社は誰も知らず分かることは“乙姫”という女性を取り仕切っていること、その女性はシャーマンの末裔らしいという不確定な情報だけである。

その会社は七つの技術開発部に分かれている。

双子の少年少女が部長の第壱、第弐技術開発部。

部下が何故か一人もない第参技術開発部。

上とは対照的に大勢部下がいる第肆技術開発部。

社内一の体力を誇る第伍技術開発部。

女とオタク系男子が多い第陸技術開発部。

そして、社内でも社長と部長クラスの人間しか存在すら知らないという第零技術開発部。

これが謎の株式会社竜宮城の実態である。

小さな魔女：乙姫

年齢：見た目十五歳ほど

種族：人間

性別：女

格好：長い赤い髪が特徴の女の子。手持無沙汰になるとその髪をくるくるいじる癖があるようだ。服はその場その場でいつも変えており、決まった服はない。パソコンなどを操作する時は眼鏡をすらしい。

備考：株式会社竜宮城の真正正銘の社長。影武者はいっぱいいるらしい。その容姿と、噂、経営手腕から“小さな魔女”とも言われる。先代は竜神様に仕えるシャーマン。その社をより豪華なものにするために会社を立ち上げたらしい。またその栄華を永遠のものにするために、浦島の時間の研究をバックアップし、不完全ながらの不老不死を手に入れた。名前を変えているが実は何代も前から竜宮城の社長は彼女である。実年齢は見た目プラス300（このセリフは権利者によって削除されました）

部下は浦島だけだと思っている。しかし全社員が彼女を慕っており、特に部長からの信仰はあつい。

↳ 竜宮城の部長たち

第壹、第貳技術開発部：佳麗<sup>かれい</sup>、比良目<sup>ひらめ</sup>

黒と白の二色で統一された服を着ており、ポーズ、服の模様、ほくろの位置まで全てが左右対称である。共感<sup>シンクワロ</sup>という互いに意思疎通ができる能力があり、そのお陰でたまにどちらがどちらか分からなくなる。泣き虫で左利きなのが比良目、お転婆で右利きなのが佳麗である。

第参技術開発部：万坊<sup>まんぼう</sup>

異様に長い顔、そしてそれを増長させるようなモヒカンがとつても……目障りである。跳躍力なら社内一であるが、大抵は失敗して血を吐きだす。しかしその痛みがいい、とM的な発言をするどうしようもない変態である。もちろん、社内からは嫌われており部下は一人もない。

第肆技術開発部：岩士いわし

その優しげな雰囲気と言葉づかいから“ジェントルマン”と言われる。誰とでもわけ隔てなく喋り、万坊とマトモに話せる唯一の間である。

社内で二番の人気（一位は乙姫）を誇り、部下は全部署中一位である。そのほとんどが第参から流れ込んできたものばかり。その大人数も巧みに操る彼は、乙姫からも一目置かれている。

第五技術開発部：真黒まぐろ

浅黒の肌、チリチリした髪の毛、如何にも外人風な男で、喋り方もどこか片言である。とにかく走ることだけを考えている男であり、周りもそれについていくためにこの社員は全員体力バカである。走りながら仕事をし、走りながら食べ、走りながら寝る……。万坊とは違う意味での目障りな奴である

第陸技術開発部：可児かにか

実力主義の竜宮城で、乙姫にその才を買われ出世した女性。大変な苦勞人であり、弟たちが何人もいるとか。以前は蟹のハサミがついていたが、金太郎に食べられて以来、持物を巨大ハサミに変えている。そして金太郎に恋をしている。

しかし社内では万坊に付きまとわれ、苦勞は絶えないとか……。

静かなる海の王：竜王姫神リユウオウノヒメノカミ

年齢：……あまり覚えていないの。

種族：神

性別：？

格好：無機質な大きな目、黒いおかつぱ頭に着物を纏う少女。しかし神にとって容姿は無意味なものであり、変えようと思えばいつでもグラマラスなお姉さんのようになれるらしい。しかし浦島にそれ

を言ったところ笑われたからポコポコにしたとか……。

備考：ここ一帯の海を納める神、通称竜神様である。またの名をリユウ。散歩していて金太郎たちに拾われた際に、竜宮城につれて行った張本人である。

また竜宮城に不用意に近づけさせないために鬼ヶ島周辺の不規則な海流も彼女の仕業であるが、この一件以来鬼丸たちは普通の船でも渡れるようになった。

他の神に懐くことがあり、特にツクヨミ様のお気に入りらしい。また乙姫、浦島ことも大好きである。

第零技術開発部部长：浦島竜胆

年齢：739歳

種族：人間

性別：男

格好：普段は虫取り少年のような格好をしているが、仕事の時になるとオーダーメイドのスーツを着る。またパソコンを操作する時には乙姫同様眼鏡をかける。

備考：約700年前に生まれた魔術師。その生涯のほとんどを時間の研究に費やし、不完全ながらも不老不死を手に入れることができた。なおその体型は時間の研究の弊害ではなく、元々成長期がなかったらしい。

竜宮城と二つ契約をしており、一つは玉手箱を提供してもらった代わり、もう一つは乙姫を永遠に守るという約束である。

社内では社長と部長クラスの間しか知らない第零技術開発部の部長を務めており、大体の仕事は乙姫の警護である。また亀吉以外

に二人ほど部下がいる。現在の仕事は竜宮城出張所で鬼のために身を粉にする思い出働しているらしい。

第零技術開発部副部長：亀吉

年齢：？

性別：男

種族：……亀と人間のハーフ？

格好：ヨレヨレのスーツに、如何にも眠そうな目。ネクタイをしていないのは本人曰く「クールビズ」。また人間時には亀の甲羅を背負っており脱着が可能らしい。

備考：竜宮城第零技術開発部副部長。しかし実際には部長がアレなためにほとんどの仕事は彼に回ってくるらしい。

種族は本人もよくわからず、おそらく何代か前に亀の血でも混じったのではないかと思われる。そのため魔法を使用しなくとも人間と亀のどちらにでもなれる。亀の姿でいる方が楽しい。弟が一人いる。

得意魔法は身体強化。パワーフォームとスピードフォームという二つの形態になることができ、社内でも実力はトップだが鬼珠には敵わなかった。

鬼の長老：鬼珠童子

年齢：……見た目ほど歳はとってないらしい。

性別：男

種族：鬼

格好：本来肉体年齢は取らないはずの鬼で、唯一の老人。普段は好々爺らしい笑顔を浮かべているが、時折黒い笑顔を見せる。白髪、鋭い赤い目はまるで遠くのことを見透かしているようである。

備考：鬼の長老であり、栄鬼の父親であり、現存する唯一の童子名持ち。（鬼丸、栄鬼、幽鬼は親から受け継いだため考慮に入れない）  
（結界と、鬼闘術を自在に操り、他を圧倒する。知識もかなり蓄え、鬼の中では一番の賢人。今では長たちに少しばかり知恵を貸す程度で、今回のように自分から出向くことはほとんどない。

鬼丸の師匠であり、鬼丸の人格はかなり彼によって作られたものと推測される。

かつての友人、酒？童子と茨木童子とは義兄弟の契りを結ぶほどで、今でも時折彼らのことを思っていることがある。

### （鬼闘術）

鬼闘術とはその名の通り、鬼の闘法であり、鬼特有の魔力“滅”を存分に發揮できる戦い方である。ものに元から備わっている滅びを利用して戦うこの闘法によって、鬼は最強種族と言われるようになった。

しかしこの術が大成されたのはほんの100年前。とある童子名持ちの鬼によって今の姿になったといわれている。技の種類は少ないが、一つ一つが強力であり、またその者オリジナルの術もあるという。

### 鬼闘術・絶

鬼闘術の基本となる技。自らの腕に滅力を纏わりつかせ、相手を殴るといったシンプルな技。一度受ければ当たった個所が次第に消え

ていき、最終的には消滅する。

鬼闘術・怪

絶を改良した技。絶は壊すことに特化したか、これは相手を吹っ飛ばすことに特化した技。

鬼闘術・序、破、急

三つで一つの連立した技。まず空間を一時的に消滅させる“序”で敵の懐に飛び込み、衝撃を伝えやすい“破”で敵に揺さぶりをかける。相手の体勢が崩れたところで必殺の“急”を放つ。

序だけ、単体に使われることもありその際は単純な高速移動と変わらない。

現在分かっているのはこれだけである。しかしオリジナルを含めるとどれだけ数があるのか見当もつかない。

最狂の番犬：犬

年齢：二十五歳

性別：男

種族：人間

格好：若いはずなのに老人のような白い髪。無感情的に思えるその双眼が冷徹さそのものを醸し出している。腰にある二本の刀が武器。仕事中はウェイターの服をビシッと着こなす。

備考：かつて桃太郎に仕えて、現在は桃原キヨウに仕えているウェイターである。なにかと桃原キヨウには縁があり、海で漂流していても必ず主人のもとにたどりつく。

元は有名な退魔師の家系の子であったが、その弱さゆえに家からは勘当され何とか食をつないでいたところを桃太郎に救われる。

桃太郎に言われ、“速さ”ではなく“疾さ”を求めようとするが、

自分の在り方に気づき速さを求めた。

腕としてはキヨウウには劣るが、それでも十分強く、魔術師相手でも引けを取らない。近日音子から誕生日プレゼントが贈られる予定。

「……………」

「やあ、キンちゃん。何を読んでいるだい？」

「いや、ちよつと調べ物を……………」

「おお、勉強はいいことだね。どれどれ……………。おや、真っ白じゃないか。何を勉強していたんだい？」

「えっ？ お前には見えないの、この文？」

「何を言っているんだい？ 何も書いてないじゃないか」

「……………」

「はて、何のことやら」

「こら、ウラシマ！ 貴方の仕事はまだ終わってないでしょう！ 今日中にこの資料、あとここの計算を全て終わらせてくださいね」

「ぎゃー！ 勘弁して、鬼丸君！」

「うるさい、早く来なさい！」

「うわあああ！ キンちゃん、助けて」

「……………行ってらっしゃい」



閑話休題：とある退魔師の学習帳3（後書き）

浦島編、完結！ ありがとうございます！

次の話の主人公は、そう、あの金太郎君です。ここまで読んでいただきありがとうございます。次の章も精一杯がんばります！

第四章・第一話：忘れてた……（前書き）

今回はプロローグなので短いです。ご了承ください。

#### 第四章・第一話：忘れてた……

それは夏の夕立のように突然に、雷鳴のように衝撃的な出来事であった。

「郵便でーす！」

「あつ、飛脚さん。毎度ありがとうございます」

「今日のお届け物は……これ一通ですね。金太郎さん宛てですよ」「俺？」

天狗の配達屋、飛脚から一通の封筒を受け取る。裏を見るとあて先には確かに自分の名前が、しかし差出人の名前は書いていなかった。金太郎は不審にその封筒を眺めていると、それでは、と言って飛脚は大空へと飛び去っていった。

「相変わらず速えな。……さて、誰からだ、この手紙？」

金太郎は封を開ける。と、出てきたのは一通の手紙。丸っこい字体に書かれているそれを読んでいくと、どんだん金太郎の顔が青ざめていく。その様子を見かけた鬼丸は思わず声をかけた。

「どうしました、キンタ？ 顔、真っ青ですよ」

「忘れてた……」

「何がです？」

金太郎は顔面蒼白で答えた。

「親父の誕生日、忘れてた……」

「はあ？」

退魔師の名家、坂田家。古き伝統を重んじるその家訓の内のその一つ“当主の生誕の日には、たとえ修行の身であるつと皆で祝うために帰参しなければならぬ。”

もし破れば、何をされようが文句は言えない。たとえ死に至るような拷問だったとしても……。

「やっべ！ 帰らなきゃ！」

「ちよっ！ キンタ、どこに？ ……ちっ、しょうがない。かぐや、ウラシマ、出かけますよ！」

「はあ……」

金太郎は大きく溜息をついた。

その右手には家族へのお土産、左手には父への祝いの品が握られている。

さて、それはいいのだが何をされるのだろうか。家には掟には人一倍厳格な父と、全身武器な兄がいる。どんな拷問が待っているのか……。

考えるだけでも憂鬱である。

ただでさえ、今日は幽鬼の機嫌が悪かったり、桃太郎が鬼ヶ島に訪れたり、不思議と憂鬱なことが起こっているのに……。

そして残念ながら目の前にも憂鬱な存在があった。

「いやあ、今日は絶好のピクニック日和だねえ。言ってくれば何か準備したのに……。玉手箱も忘れちゃったじゃないか」

「そうですよ。私もお握りでも何でも作ったのに……。キンタさんは本当に駄目ですね」

「何でオメエらがいんだよ!？」

金太郎は振り返る。

と、そこにいるのは暢気にも先ほど村で買ったお握りを頬張っているかぐやとウラシマの姿。そしてそのかぐやを嬉しそうに見ている鬼丸であった。

その大きなお握りを飲み込むと、かぐやは当然のように答えた。

「だって鬼丸さんが出かけるって言うから」

「全てはオメエが元凶か、鬼丸!」

「まあまあ、どうせ何もすることがないんですからいいじゃないですか。私もキンタの家に行くのは楽しみですよ」

「ちよつと待て。オメエら、俺んちに来る気か?」

三人は一様に頷く。

「駄目ですか?」

「駄目だろ。普通に考えて」

「む? 何故です?」

鬼丸は眉を顰める。金太郎に普通に考えて、とは言われなくなかった。

しかしそんな態度が癢に障ったのか、金太郎は大声で怒鳴りながら指で指した。

「鬼! 魔術師! 月姫! どう考えたって駄目だろうが!」

退魔師、とはその名の通り魔を退ける者である。そして鬼とは魔の

代表。どう考えても相性は最悪、敵の本拠地に何故わざわざ向かうだろうか、常識的に理解できなかった。

またウラシマは魔術師である。自分のために魔力を使い、自分のために魔術を研究する。人のために魔力を用いて戦う退魔師に基本的に良くは思われていない。

かぐやは身分上は問題ない。が、自分のことを姫と、相手を愚民と言うような人間と家族と会わせていいのだろうか。いや、間違いなく良くない。

金太郎は懇願するように、三人に言った。

「本当に悪いことは言わんから、今すぐ帰れ。退魔師の家って言うのは思ってたより閉鎖的なんだ。ましてや鬼なんて来ている事がばれたらどうなるか」

「　　って言っているうちについちゃったよ。キンちゃん」

「うそん!？」

金太郎は再び振り返ると、そこにあるのは武家屋敷のような蔵かな門。広い敷地。そして門に書かれているのは間違いなく“坂田”の二文字。

そう、ここは金太郎の実家、退魔師の名家“坂田家”。人気のない山奥に堂々とそびえたつその門は訪れるものを歓迎するものではなく、拒絶するような威圧感を放っていた。

「おお、ここがキンタの実家、ですか」

「へえ〜……なかなか大きいじゃないか」

「まあ、私の家よりは小さいですけどね」

「オメエら目線で語るなよ。というかやべえ……本当にまずいぜ」

金太郎の背筋を冷や汗が流れる。そしてそのまずい状況を助長させるような人物が、門の前に立っていた。

「あれ、玄関先に誰かいますよ」

かぐやがその人物に気づく。その人物は、浅黄色の着物がよく似合う、長い黒髪の女性。門の前で掃除しており、その行動一つ一つが洗練されている。大和撫子、とはまさに彼女のためにあるような言葉だろう。

金太郎以外の皆がそれに見とれていると、彼女もこちらに気づいたようだ。

「あら？　もしかして……」

あらあらあら……と、驚いている割には素早い行動で金太郎に近づいてくる彼女。有無を言わせないようなその行動に、金太郎も何もできずにそれを見ていた。

その時信じられないことが起こった。彼女が金太郎に抱きついたのだ。

「金太郎ちゃん、本当に金太郎ちゃんなのね！」

「蓮華<sup>れんげ</sup>姉さん、離れて……みんな見ているから」

「あらあら、いけない」

そう言つて彼女は金太郎から離れる。今から止めないと今すぐ飛びかかってきそうな勢이었다。

そして後ろで呆然と立っている三人に気づいた。

「お友達？　金太郎ちゃんがお友達を連れてくるなんて珍しいわね」

「友達を連れてくることすらなかったら……」

金太郎は呆れるように呟く。

過去一度として金太郎は友達というものを家につれてきたことはない。それは金太郎に友達ができなかつたわけでは無く、単純に坂田という家がそれを邪魔したのだ。

坂田直系としての立場、それが人を寄せ付けなかつた。友ができたとしても坂田の名前を聞くだけで離れていく子も多かつた。

ああ、そういえばそんなこともあつたな、と感慨にふけている金太郎をよそに蓮華は深々と三人に挨拶をしていた。

「私は坂田金太郎の姉、坂田蓮華。よろしくお願いいたします」

「私の名前は鬼丸童子。金太郎君とは仲良くさせていただきます」

「誰？ お前？」

「私の名前は四方院かぐや。気軽にかぐや様と呼んでください」

「お前はかわらねえな……」

「僕の名前は浦島竜胆。ところでお姉さん、今夜一緒に食事でも」

「  
」

「テメエは人の姉さんを口説いているんだよ、バカ！」

反射的に浦島の頭を小突く。

母親の顔を知らない金太郎にとってこの人は母親同然、それをウラシマのような奴に近づけさせてたまるか、と思う前に体がまず動いていた。それもかなり力一杯に。

ウラシマの軽い体は面白いほどよく飛んでいき、門の壁に当たつてようやく止まつた。

それを見ていて、蓮華がポツリと呟く。

「あら、楽しそうな人たちねえ」

「どう見たらそうなるんだよ……」

「さあ、皆さん。こちらにいらして。お客様は客間へ。そして金太郎ちゃん……お父様が待っているわ」



「……はい」

やはり来たか、と金太郎は内心で舌を出していた。

姉がここで掃除をしていたのは、半分は金太郎のため、もう半分は父親の命令。やはり怒られるのか、と金太郎がうんざりしていると視界の隅に何か横切った。

「ん？」

人間の形をした何か坂田家の塀を飛び越えていく。盗人用の結界が働かないということはこの家の者だろう。しかし金太郎は別にそこには気にしてなかった。自分も門限を破った時にはよくあの塀を越えたものだった。

問題は一つ、それが灰色の髪の毛だったということだ。金太郎の知る限り、灰色の髪の毛の退魔師は一人しかいない。

だが、それはあり得ない。なぜならそれは金太郎の手によって

「キンちゃん、優しそうなお姉ちゃんじゃないか。僕が貰っちゃってもいいかな？」

「あ、ああ……」

「キンちゃん？」

ウラシマの声にハツとなる。いつの間にか呆然としていたようだ。

「あつ、いや……それは、駄目だぜ！ 姉ちゃんはもう結婚を約束した人がいるんだから」

「やはり、退魔師の家系筋と？」

「いや、姉ちゃんは退魔師の才能がなくてな。普通の家の人だよ」

「じゃあ、キンタさんは許婚とかいるんですか？　いても不思議じゃないですよね」

「あ、いや……俺は」

「　　皆さん、こちらですよ。皆さん！」

すでに門の目の前に到着していた蓮華が皆に声をかける。今回ばかりは助かったと金太郎がホツとしていると、ウラシマが真っ先に食らいついた。

「はいは〜い！　綺麗なお姉さん！」

「まったく、この人は……。鬼丸さん、行きましょう」

「はい」

鬼丸もかぐやの後についていく。しかしどこか心在らずの金太郎を見かけて、声をかけた。

「キンタも行きますよ」

「あ、ああ……」

金太郎もあわてて彼らについていく。

彼らが門に完全にたどりついたとき、その嚴重な扉が閉まり始めた。この門は頑丈、いくら高等の魔術師とはいえど、この扉を破るには骨を折ることになるだろう。

そして扉は完全に閉まりきった。

#### 第四章・第二話：灰色の髪の乙女

坂田の家はまさに武家屋敷という風柄である。

広大な敷地の周りを結界で補強した塀が囲み、現代では珍しい一階のみの和の構造。各部屋は障子で仕切られており、壁は最小限のみである。

その広大な敷地のほとんどは屋敷ではなく、むしろ庭につき込まれており、おそらく分家の者と思える退魔師が訓練していた。

鬼丸たちはそんな光景を目にしながらい長い長い廊下を渡っていた。

「ごめんなさいね、お客様。こんな無骨な光景を見せてしまって」

「いえいえ、構いません。退魔師の本質は戦うこと。そのため己を鍛えることは当然です。私たちも退魔師によって守られているんですから」

「……あれえ？　なんか違うような……」

それは鬼丸が鬼だからだ、という言葉をも金太郎は飲み込んだ。もしここで鬼丸たちの正体を明かせば分家の者が襲いかかってくるだろう。そして兄さんたちも出撃して……。

考えるのをよそ。それだけで精神が擦り切れる。

「ではお客様はこちらに。客間に案内します。金太郎ちゃんは……」

お父様のところに」

「……はい」

「では皆さま。こちらですよ」

「はい！」

他の三人が蓮華につれられ去っていく。これでもう誰も支えとなる人間はいなくなったというわけであった。この広い空間で何もせず

突っ立っているのがひどく気味悪く思えたので、とりあえず歩くことにした。

金太郎は幼いころから、この広い屋敷というのが苦手であった。誰もいないただ長い廊下、無駄に広い部屋、そして自分を避ける分家の者ども。幼い時は、言いようもない孤独感と日々戦いながらこの屋敷で生きていた気がする。

そんな生活から自分を救ってくれたのは、そう、一人の灰色の髪の少女であった。

「楓……」

金太郎はその名を口にして少し後悔した。彼女の名前が思い出させるのは楽しい日々と、あの絶望の別れの日。全ては自分のせいだと思うと目の前が真っ暗になる……。

そんなことを思っているといつの間にか自分の部屋についたようだ。金太郎はその扉をスライドさせて入った。部屋は畳に少しの家具があるぐらいのシンプルな、もっと言うならば殺風景な部屋であった。変わらない。何も変わっていないその部屋は誰かが管理してくれているのか、密閉された部屋の匂いや圧迫感を感じさせなかった。

「……」

何も言わずに金太郎は黙々と準備する。これから父とは雖も坂田家の当主に会うのだ。半端な格好では会うことすら許されない。

しかしそうして準備している間も考えるのはただ一人のことであった。

楓。その名前を聞かずともこの屋敷には彼女を思い出させるような場所が数多くあった。というよりは彼女との思い出がないような場所はどこにも存在しない。この部屋だって、気を許せばたちまち楓との思い出に吞まれてしまうだろう。

そんな自分に嫌気がさし、金太郎はとつと準備を終わらす。黒い上等の布に金色の家紋が入っている装束。それが退魔師にとつての正装であった。こんなもんか、と金太郎は思い部屋の外に出た。

と、次の瞬間に感じたのは殺気。

「おいおい、金太郎。家の中に客人入れるとはなかなか大胆なことしたな」  
「っ！」

乾いた銃声が辺りに鳴り響く。

金太郎は紙一重のところでの銃弾をかわした。もし反応が遅れていたならば、今頃金太郎のこめかみには風穴があいていただろう。しかし金太郎はこの敵からの襲撃を受けても反撃に移ろうとはしなかった。なぜならその敵には見覚えがあったからだ。

「金剛兄さんか……。やめてくれよ、こういうこと……」  
「いいじゃねえか、これぐらい。かわいい弟を鍛えようとしているんだからよ」  
「……」

鍛える、という言葉に甚だの疑問を持ちながら金太郎はため息をついた。弟を鍛えるという兄の心遣いは嬉しいが、下手すれば死んでしまうというのに……。

そう、この人物こそが坂田家長男、そして金太郎の実の兄、坂田金剛さかたこんである。金剛は満足したような顔でその拳銃、S & Wマグナム44をホルダーにしまった。

実は、というかもうお分かりかもしれないが、退魔の名家坂田というのはかなりの変わり種である。山奥に厳重な門を閉じ、閉鎖的な伝統を守っていると思えば、また別の一面では他の退魔師にはない

個性的な、新しいものも取り入れている。

その新しいものを取り入れている代表がこの男、坂田金剛であった。この国のほとんどが着物を主流にしているというのに、この男の服は迷彩柄のズボンにタンクトップ。武器も古臭い剣や槍を用いず、科学によって作られた拳銃がメインである。

良く言えば個性的、悪く言えば異端というこの男は新進気鋭の退魔師として注目を集めていた。

……ああ、そしてもう一つ、この男はオタクなのだ。軍事的な意味で。

「まあ、とりあえず久しぶり。兄さん。また……拳銃が増えたんだね」

「おお！ 分かるか、金太郎！ 流石は俺の弟。これはな、少し原点に返ってオートマチックから回転式に」

「いいよ。どうせ分かんないから」

……あつ、いじけた。この男は家族の中では一番弱いのだ。体の強さではなく、心の強さという意味で。ちなみに一番強いのは、あの楓である。

「兄さん、いじけないで……俺結構急いでいるんだ。また話は後で聞くからさ、とりあえず歩こうよ」

「……本当に後で話を聞いてくれるんだな？」

「本当だよ、俺が嘘をついたことがあったか？」

「うわああん！ 我が弟よ！」

……そうだ。この男は人に抱きつきたがる癖があったのだ。それにしても身長180センチを超える金髪と、それをさらに上回る男が抱きあうなんておぞましいにも程がある。

そしてこの男、金剛は全身に武器を隠し持っているため抱きつかれると当然のように。

「　　って痛い！　痛いよ、兄さん！」

「おお。悪い、悪い」

そう言っただけでようやく離してくれた。

しかしこの顔を見る限りは反省なんて微塵もしていないだろう。

「それにしても、お前でかくなつたな。旅出る前と今ではまるで別人のようだ。色々なことがあつたのだろうな」

「そりゃあんな奴らに囲まれてたら嫌でも変わりますって……」

「ん？」

「いや、何も……。兄さんたちは？　何か変わったこととかはないの？　特に……。その……。親父とかは？」

金太郎が何を言いたいか分かり、金剛は笑い出した。

「ハツハツハ！　別に親父はお前のことを怒つたりはしてねえよ！　ただ毎年欠かさずプレゼントを贈っていたお前のが突然贈つてこなくなつたのを心配になつただけだって。要するに寂しいんだよ」

「ははっ！　親父が寂しがるなんて、そんなタマじゃないだろ。……良かった」

金太郎が安堵の声を漏らす。この金剛がこんなにも気楽に過ごしているということは、この家は安泰ということだ。親父もそこまで怒ってないということだろう。

金剛は未だにニヤニヤした顔をやめようとはしない。

「寂しいんだよ、親父は。どんなに達観した大人だつて子が旅立つときは寂しがるもんだ。だから年一回ぐらいは……顔をさせるや！」  
「おわつ！？」

金太郎は金剛に無理やり部屋に入れられる。この部屋は大広間。何も準備をせずまラスボス親父のところに来てしまったのか。

「ハツハツハ！ 頑張れ、我が弟よ。親というものの中にはなかなか子離れできない親もいるからな。せいぜい頑張れ。ハツハツハ！」  
金剛の笑い声が遠くなっていく。今確信した。あの人は変わってない。どいいないと。金太郎はげんなりとなった。

別室にて、不意に蓮華はこんなことを口にした。

「金太郎とはどのように知り合つたのですか？ ……どうぞ、粗茶ですが」  
「ありがとうございます」  
「どうも、どうも」

差し出されたお茶をかくやは落ちついて、ウラシマはずけずけと、鬼丸は無言で受け取つた。素人目からも分かるほどの上等なお茶であった。

鬼丸は一息つくと、先程の問いに答えた。

「実は彼に助けられたのですよ」

「えっ……？」

「これはほんの数ヶ月前……そう、私が一人で旅をしていたときに



起きました」

鬼丸はさらに続ける。

「私は世界各地の風景を見るのが好きで、一人旅をしていました。御伽の国、不思議の国、童話の国、また世界に名の知られてない小さな国まで。私はその暮らしが好きだったので、ある日盗賊に襲われてしまったのです」

「まあ……」

「抵抗する力もなく必死に逃げ惑う私。体力も尽き、もうここまでか、と思っていたときに助けてくれたのがキンタ……いや、金太郎だったのです。彼はその巧みな雷術と驚異的な身体能力で私を助けてくれ、さらには敵にも気を遣う優しさ。それを見たとき私は確信したのです。彼こそが私の仲間だと、彼についていくことが私の天命だと。そう思い、現在に至るわけです」

「よくもまあ、臆面もなくそんな嘘つけますね」

「詐欺師になった方がいいんじゃないかな？」

いつになく饒舌で、さらに嘘つきというところでもないオプションがついている鬼丸を見て、かぐや達はそう呟いた。そして蓮華はとうとう……。

「う、うう……。き、金太郎ちゃんが、そ、そんなに立派になっっているなんて……。うう……」

「あちゃあ、信じちゃったよ」

「これでは騙すほうも悪いですが、騙される方も悪いですよね」

かぐや達は目もあてられないと、顔に手をやる。そして鬼丸はとうとう、随分冷静にお茶を飲んでた。大方このお茶が欲しいのだから。基本的に鬼丸は茶が好きだからだ。

蓮華はというまだ涙を流していた。

「うう……。これは大変お見苦しいところを……。貴方たちのような心強いお仲間がいると聞き、私は安心しました。まだまだ未熟な金太郎が一人旅なんて、あのときは心臓を掴まれる思いでしたが本当に安心しました。これからもどうぞ金太郎をよろしく願います」

「こちらこそ」

「こ、こちらこそ」

深々とお辞儀をする蓮華に鬼丸は丁寧に、かぐやはつられてお辞儀を返した。ウラシマはお茶を飲んでいた。

それはともかく、鬼丸たちと蓮華の距離は金太郎という共通の話題を以って少し距離が縮んだようだった。かぐやの質問にも快く答えられる。

「そういえば……。キンタさんの昔とはどんな風だったのですか？  
やはり今と変わらず？」

「はい。あの子は昔から純粹で、優しくて、少し頼りないけど友達を必死に守ろうとする男の子でしたよ」

「友達？ キンタさんにも友達なんていたんですか？」

「それはもちろん。金太郎ちゃんにも友達や許嫁の一人ぐらいはいます」

……。おっと、聞き間違いだろうか？ 蓮華の言葉から意味不明な言葉が出た。許嫁、といったのだろうか？ 金太郎に許嫁。

「ええ！？ 許嫁！？」

「は、はい。そうですが……」

ウラシマはお茶を吹き出し、かぐやは咳き込む。鬼丸はそんな彼女の背中をさすりながらも少々ショックを受けているようだった。三人がそんなリアクションを取るのはある意味当然、理由はあの金太郎だからだ。

「あのキンタさんに許嫁がいるなんて……。侮れませぬね、キンタさん」

「畜生。キンちゃんとは非モテ同盟（非公式）を結ぶ仲だったのに……裏切ったな、あの野郎！ コロス、溺れさせてからもう一回コロシてやる！」

「どんな人なのですか？ ……ちょっと落ち着いて、かぐや、ウラシマ。話が聞けません」

蓮華はウラシマの気迫に押されぎみに、ようやく鬼丸の問いに答えられた。

「えっと……とても活発でいい子ですよ。灰色の髪がとてもよく似合っていて……。他の分家の子が宗家には滅多に近寄らないのに彼女だけはいつも金太郎ちゃんと遊んでくれました」

「……えっ？ 分家って血が繋がっていますよね。それって近親相姦……」

「義妹フラグか！？」

「煩い……。元より純血を重んじる退魔師にとって従兄同士の結婚なんてさほど珍しいものでもありません。それに分家といえども血が繋がっていたのは何代も前。遺伝的にも問題ないレベルでしょう。で、その子は今どこに？」

……鬼丸の様子が少々変である。いつもは他人のことはあまり追求しようとはしないのに、かぐやは首をかしげた。

「今も屋敷の中にいますよ。おそらく会えると思います。……では私はこのへんで。どうぞ、じゅるりと」

「ああ、ちよっと待つてください。最後に一つだけいいですか？」

部屋を出て行こうとした蓮華を呼びとめる鬼丸。はい、と快く受け答えをしてくれた蓮華にさらに追及を続ける。

「……金太郎は退魔師の仕事をしたことはありませんか？」

「？ いえ、ないと思いますけど……」

「そうですね。……失礼、もう結構です」

蓮華は軽く今度こそ軽く会釈をしながら部屋から去って行った。彼女の気配が完全に消えたのち、かぐやは鬼丸に尋ねた。

「どうしたんです、鬼丸さん？ そんなに質問をして」

「……キントは殺しを極端に嫌っています」

鬼丸は続ける。

「私が以前、とある盗賊を殺しにかかったことがあるのですが、キントはそれを必死に止めようとしていました。それはもう懇願する勢いで。だから過去に何かあったと思っただんですが……」

「キンちゃんは優しいからね。殺しはいけないうつていう妙な正義感があっただんじゃない？」

「……私もそう思っただんですが、あの時の目はむしろトラウマに近いものがあつた気が……。それにウラシマ。気づいていますか？」

この家の異様さに

「もちろんだね。入った時から薄気味悪かったよ、この屋敷」

「ん？ 何の話です？」

かぐやは気づいてないようだった。気づいてないならばそれでいい、鬼丸は少しホツとした。

「……ちよつと調べてきます。かぐやは絶対にウラシマから離れなように」

「えっ？　ちよつと、鬼丸さん……ああ、行っちゃった。……ウラシマさん、何の話だったんですか？」

ウラシマは顎に手を当てる。これはかぐやに対する心配か、はたまた金太郎に対する配慮なのか。その結論は思いのほか早く出された。

両方だな。

ウラシマはフツと笑った。

「気づかない方がいいこともあるんだよ、かぐやちゃん。……ところで、僕の君に対する思いは気づいてくれたかな？」

「近寄るな、変態！」

この広い屋敷にとてつもない衝撃音が響いた。

「イタタ……相変わらず無茶する人だな……金剛兄さんは」

「金太郎、騒がしいぞ。お前」

その声があった瞬間、金太郎はすぐさま頭を下げた。

金太郎はその声の主を知っている。そしてこの人物の恐ろしさも。

「さ、坂田宗家次男、坂田金太郎ただいま参上いたしました。ち、父上」

「うむ……」

威厳と重みあるこの声の主こそ、今代の坂田家当主坂田公時さかたきんときである。家族だからと言って頭を上げることは許されない。いや、上げようとしても上げられないのだ。その言葉の重みによって。金太郎のできることはただただ、頭を下げることだけであつた。

「顔をあげよ、金太郎。そしてお前の成長したその顔を見せよ」

「は、はい。父上。おひさし」

金太郎の時間が止まつた。自分の父に控えている人物、それが信じられなくて金太郎の頭はフリーズした。

「久しぶりね、キンタ」

親しみと、挑発的な口ぶりが混ざつたような挨拶をするその少女。その少女は大人びているがかつての面影が確かに残っていた。髪もあの頃と一緒の灰色。自分の一番好きな髪の色。ようやく動き出した金太郎の口がその少女の名前を発した。

「……か、楓？」

その少女はここにいることはあり得ない。

だって俺が楓を殺したんだから……。

#### 第四章・第三話：己が道を突き進め

「どっなっているんだ……」

金太郎は倒れこむように自室の畳に寝転がった。

どうやってここまで来たかも分からない。親父とどんな会話をしたのさえ覚えていない。自分が何も持っていないということはどうやら祝いの品は渡せたのだろう。それさえもハッキリと分からなかった。

「楓……」

金太郎はその名を呟く。

何事もなかったかのように自分の目の前にいた彼女。自分のことを“キンタ”と呼ぶ彼女。あのあと姉さんにも兄さんにも親父にもみんなに確認した。何故楓は生きているのか、と。

そして返ってくる答えは皆一様に、何言っているんだという顔で、楓は死んでなどいないというものであった。

そんなはずはない。

自分に刻みつけられている記憶は楓の死の有り様。確かに楓は死んだはずなのだ。……そう、自分の手によって。

「もうわけわかんねえよ……」

自分の記憶と現実が相反している。どちらが正解で、どちらかが間違いののか、金太郎には分からない。とにかく今の自分はパニックを起こしているということが分かった。

このまま起きていても仕方ない。もういい、何もかもどう

でもいい……。

金太郎はそこで意識を手放した。

幼い頃、自分はひどく卑屈で泣き虫であった。

「うおりゃあああああ！」

「うわああああ！」

「……一本」

父親の左腕が上げられる。それは同時に自分が負けたことを意味していた。自分は投げられ床に倒されていた。

今やっていたのは体術の訓練である。退魔師として己の体を鍛えることはもちろん重要であり、父親はよく自分たちにこの訓練をやらせていた。

この時の金太郎6歳。ずっと倒れている金太郎を見て苦笑しながら、自分より体格が良い相手　金剛が手を差し出そうとした。

「ほら、大丈夫か。金太郎？　手を貸してやる」

「その必要はない、金剛！」

金剛の手がビクツと震える。しかしその倍震えたのは自分の体であった。

坂田公時、退魔師の名家坂田家の当主にして、自分の実の父親。そしてこの時の金太郎の一番の天敵であった。

「金剛、お前がそのように甘やかすからこんな泣き虫次男が育つのだ。少しは反省しろ、この愚か者！」



「……す、すみません。父上」

金剛はおずおずと下がる。そして父親が次に見たのは、もちろん自分である。

「ほれ、金太郎。さつさと立たんか！ まだ稽古は終わりではないのだぞ！」

「……は、はい。父上……」

「それに何だ、あの戦い方は！？ 逃げ腰ではないか！ 悲鳴を上げている場合ではないのだぞ！」

「う、うう……」

自然と大粒の涙がこぼれそうになる。しかし、相手はあの坂田当主。泣いて許してもらえるような相手ではない事は金太郎自身も分かっていた。

「泣いても無駄だ！ おい、金剛。今日の訓練は朝までやれ。休憩など取らせるな！」

「……し、しかし父上。金太郎はまだ6歳。その体では厳しい

」

「……黙れ！」

金剛は黙るしかなかった。

「つべこべ言わずさつさとやらんか！ 金太郎は次男とは言え宗家の人間。これぐらいのことどうとでもなるわ！ では始め！」

……結局その日、いや翌日の訓練が終わったのはもう日の頭が出かかっている頃であった。父親が退室した後、金太郎は我慢しきれず大粒の涙をこぼした。

「えっぐ、えぐ……」

「大丈夫か、金太郎……。どこか、痛いところはないか？」

こんなときに慰めてくれる人は二人しかいなかった。姉の蓮華と、兄の金剛。金太郎はこの二人だけが心の拠り所であった。

「まったく、父上は考えが古すぎるのだ。こんなスパルタ教育では伸びるもの伸びんぞ……。大丈夫だ、金太郎。お前のせいではない」

……しかし金太郎は知っていた。金剛は自分と同じ鍛錬を行っているのにも関わらず、怪我ひとつしてないということが。

自分の体は傷だらけ、しかも精神もボロボロであるのに、兄はとうと屈することなく父親とともに鍛錬している。厳格で偉大すぎる父親、強い兄、この二人に挟まれ金太郎はいつも思っていた。

ああ、自分は何でこんなにも泣き虫で、弱いのだろうか、と。

「金剛、金剛はどこにおるか？」

「は、はい！ ただ今参ります！ ……金太郎、お前は部屋に帰って休め。決して泣き顔を分家に見られるなよ」

「う、うん……」

金剛は呼ばれた方に駆けていった。

こんな広い道場に一人いても寂しいだけだ。金太郎は涙を拭ってこの部屋を出ることにした。

「……………」

金太郎は一人でこの長い廊下を歩いていく。なるべく、弱さを気づかれぬように気丈に振舞って。金太郎の行く道を邪魔するような輩はいなかった。

しかしそれは金太郎の振舞いのお陰ではない。皆金太郎のことを避けているのだ。宗家だから、恐ろしいから、そういった理由ではなく金太郎に対する拒絶。

「異端」

金太郎は勢いよく振り返ったがそこには誰もいない。当然だ。陰口とは陰で言われるものであって、本人に特定されては意味がない。この坂田家、いや、この国には金色の髪の人間などいない。それは特徴ではなく、遺伝的に。金色の髪の間人は西方の国にいるそうだが、少なくともこの国では見たことがない。

しかし金太郎の髪の色は紛れもない金色。家族全員黒い髪をしているのに、自分は金色。周りを見ても黒、黒、黒。自分は間違いなくこの集団の中に浮いているのだ、と金太郎は幼いころから分かれられてきた。今が良い例だ。特異すぎる人間は集団から排除される。

「ぐ……」

金太郎は下唇を食いしぼり、またあふれ出そうになる涙を必死に堪えた。そして涙が出る前に自分の部屋に急いで戻って行った。

金太郎にはお気に入り場所があった。

山頂にひっそりと佇んでいる坂田家、そこから少し下りたところにちよっとした崖があるのだ。そこから見える夕日は格別で、まさに

この崖は特等席とも言えた。金太郎は嫌なことがあるとここに良くここに逃げ込んでいた。そしてある日のこと、金太郎はここを訪れていた。金太郎だけの秘密の隠れ家、誰にも知られていないはずであった、のだが……。

「誰か、いる……」

ここには誰も来ないはずだ。兄も姉も、もちろん父にも教えてはいない。しかし気配が感じられる。恐る恐る、木陰からそつと覗いた。もし父上にはばれていたらどう釈明しよう、と考えていた金太郎の心配事は杞憂に終わった。

そこにいたのは女の子だったからだ。

「あら、誰かしら？」

その少女が振り返る。夕日をバックに佇むその少女の姿は、凜として、少し金太郎より大人びて見えた。

そして金太郎は少女のある部分に目を奪われていた。髪の毛だ。その少女の髪の色は他の皆とも、自分とも違う灰色。夕日に照らされているその髪の色は光り輝いて見えて、差ながらそれは銀色に

「誰でもいいから早くここから立ち去りなさいよ。ここは“私の”秘密の場所なんだから」

金太郎の意識が連れ戻される。今この少女は何と言っただろうか？

……“私の”？

「何だよ、その言い方は！ここは僕の場所だぞ。僕が初めて見つけたんだ！」

「私の方が先よ！ 私が初めて見つけたんだから！」

二人は睨みあった。

「おい！ 僕の名前を知らないのか？ 僕の名前は坂田金太郎。坂田宗家の次男だぞ！」

「へえ、あの泣き虫甘えん坊次男ってアンタのことだったんだ」  
「う……」

確かに、陰で自分がそう呼ばれていることは知っていた。時期当主として素晴らしい力を発揮している金剛に対して、金太郎はまだまだ弱く泣き虫。頼れる兄とダメな弟という構図が自分でもはっきりと分かっていた。

金太郎は言い返すことができなかった。対する楓はどこか得意げな顔をしている。

「アンタこそ私のこと知らないの？ 私の名前は熊谷楓。将来女性で初、熊谷の家を継ぐことになる天才退魔師よ！」

熊谷、楓？

金太郎はどこかで聞いたことがあるその名前を、ようやく思い出した。

「ああ、こないだお尻ペンペンされてたじゃじゃ馬イタズラっ娘って君のことだったんだ」

「きゃー！ そのことは言うな！」

楓は必死に金太郎の声をかき消そうとする。しかしここには自分と金太郎と二人だけ、隠すような相手もないのだが……。

「フフフ……よくも私に恥をかかせたわね、こののほほんとした次男坊！ 私を怒らせたことを後悔させてやるわ！」

「む、言ったな！ このお転婆野郎！ 覚悟しとけよ！」

「私野郎じゃないもん、このおたんこナス！」

「すつとこどつこい！」

『むー』

再び睨みあい激しくなる。さて、縄張り争いをしている二匹の猫はどう解決するのか。二匹の立場は対等、それならば取る手段は決まっている。

決闘だ。

「てやあああああ！！！」

「たあああああ！！！」

二人は同時に走り出す。武器も、防具も何も持たずにただ自分の肉体だけで相手を打ち砕く……と言えばカッコいいのだが、流石に子供の喧嘩である。そんな激しい戦いになるわけもなく、ただ組み合っつてそのままゴロゴロと転がっているだけであった。そしてその一時間後、ついに勝負は決した。

「はあ……はあ……」

「ひい……疲れた……」

当然のように引き分けである。決定打の何もない戦いの終わりなど、金太郎には分かり切っていることであった。

しかしやめられない。いや、やめたくなかった。こんなに楽しかったのはいつ以来であろうか。特訓ばかりの日には楽しみなど感じれない。それが今はこの少女と組み合うことがとても楽しかったのだ……とは言いつつも体の方は限界だ。おそらく、相手もそうなのだ。

ろつ。

「と、とりあえず休戦にしようか……もう、日も暮れるし」

「この戦い、6：4で私の判定勝ちね」

「勝手に言ってるよ……」

「でもこの私とここまで戦えるなんて十分よ。貴方……えっと、名前なんだっけ？」

さつき名乗ったばかりではないか、という言葉を金太郎はグツと堪えた。

「坂田金太郎。宗家の人間の名前ぐらい覚えていてよ……」

「だってそんなもの関係ないじゃない。貴方がどんな人間でも私と話していたら対等。身分とか分からないわ」

「……」

「まっ、アンタの場合私より低いけどね」

「なんだと、お前！ どういう意味だ!？」

「そのまんまの意味よ」

言い返そうとした金太郎は辺りが暗くなり始めていることに気づいた。

日が落ちてきたのだ。だんだんと暗くなっていく空を見て、金太郎は悲しくなった。

楓とはこれでお別れなのだ。

「何辛気臭い顔をしてるのよ。また明日会えるじゃない」

「また、明日……?」

「そうよ。私は毎日ここに来てるの。貴方も明日来るでしょ」

当然のように言う楓。

しかしそれは金太郎にとつてみれば当然ではないのだ。一度も友達と遊んだことがないのだから。

また明日会えるというのなら、また会いたい。金太郎は自然と頷いていた。それを見て楓は満足したように破顔した。

「それじゃあ、またね。キンタ」

手を振って去っていく楓。金太郎はその姿を見える限り見送りながら、一言呟いた。

「誰がキンタだ……」

そう言いつつも顔が緩んでいることは金太郎自身にも分かった。

そついや手を振り返してない、とようやく気付き、慌てて金太郎は手を振り返した。

楓と遊ぶようになってから一カ月が過ぎた。会う時間は日が落ちる前から日が落ちるまで。

そのほんの一瞬のような時間のために、金太郎は午前と午後の稽古を早く済ましていた。どんなに辛い稽古でも、これから楓と会えると思うと頑張れた。夜の稽古も明日になれば楓と会えると思えば我慢できた。すつかり彼女中心の生活になっている、と思いつつもそれでいい、とも思っていた。

さて二人の遊びとは一体何なのか？ それはもちろん、戦いである。

「はあ……はあ……」

「今日は僕の勝ちでいいよね、楓？」



金太郎は得意げに楓を見る。彼女は本当に悔しそうに、金太郎を見ていた。

「……フン、でもまだ私は49勝38敗13分けで勝ち越しているからね！ アンタの方がまだ弱いんだから」

「誰が今日こそ50勝にしてやるって言ったっけ？」

「うぐ……」

楓の顔が歪む。よっぽど悔しかったのか、彼女の足回りが削れていた。地団駄だけで穴を掘るとは、彼女も相当の負けず嫌いである。この戦いは楓との決闘、第100回目。彼らはこのような決闘から、ご飯早食い対決のような小さなものまで全てを競い合ってきた。結果は彼女言ったとおり、まだ楓の方が勝ち越している。しかし最近勝ち続きの金太郎は得意満面であった。

「はあ、とりあえず休憩しましよ。アンタと戦っていると疲れちゃうわ」

「誰が先に仕掛けてきたんだよ……」

金太郎はため息をつきながら楓の隣に座った。ムスツとして、如何にも不機嫌そうな楓を金太郎はジツと見つめていた。

「……何よ。なんか私の顔についてる？」

「い、いや……楓はさ、自分の髪の毛のことを気にしたりはしないの？」

とっさに出た言い訳なのに、妙にリアルな質問であった。

楓の髪の色は灰色、もちろん灰色なんて髪は他で見たこともないし聞いたこともない。自分と同じ境遇にある彼女はどうしているのか、金太郎は最初から疑問に思っていた。

「別に。何も気にしないわ」

「……………そう、か」

「何よ、気持ち悪いわね。そんな塞ぎこんじゃって、何かあったの？」

楓になら話せるかもしれない、金太郎はその重い口を開いた。

「……………僕の髪の毛ってさ、他の人とは違うじゃん。お兄ちゃんもお姉ちゃんも皆、黒い髪の毛で、僕だけ金色……………。周りの大人からはさ、“異端”や“化け物”とか言われたりしてんだ……………」

「そういえば聞いたことあるわね。“宗家の次男坊は金色の有るまじき者”って。確かに金色の髪の毛は見かけないわね」

「そうだろ。……………僕だけ皆と違う。皆の輪の中に入れない。僕だけ拒絶されてる。……………いつかお兄ちゃんやお姉ちゃんにも拒絶されるんじゃないか、と思うと怖くて……………そうだったら僕は」

「ワレテシマウ……………」

最後まで口に出せなかった。その言葉を言ってしまったら、絶対に泣きだしてしまいそうだった。

何とかして堪えようと必死に唇を噛んでいる金太郎。そんな彼に楓は……………拳骨をお見舞いした。

「アイタ！ 何すんだよ、楓」

「……………アンタ鬱陶しい」

「はあ？」

金太郎は素っ頓狂な声を上げた。そして同時に怒りがフツフツと湧いてきた。人が真面目に相談しているというのに、と怒りが込み上げてきた。

しかしそれは楓の顔を見たら掻き消されてしまった。彼女の顔はおふざけでも、茶化しているわけでもなく真剣そのもの。逆に自分が怯えてしまつて、金太郎は息をのんだ。

「真面目に自分の不幸自慢をされてもこつちが困る。いい？ 私はアンタと遊んでいるのが楽しいの。そんな在りもしない仮定の話よりも今遊ぶ方がよっぽど楽しいわ」

「……」

「アンタのあのお兄さんとお姉さんがアンタを裏切ると思う？ そんな結論、出すまでもないわ。分かっているでしょ、あんただつて」

優しい姉と、強い兄。彼らは絶対に自分を裏切らない。

楓に言われてからハツとなった。そして楓は続ける。

「それに私だつてこの髪のことを言われないわけじゃないし」

「えっ……？」

「灰色狼とか、石頭とか、アンタと変わらないくらいね。でも私はそんなこと全然気にしてないわ。何でだと思つ？」

「……全然」

「私は私のことが好きだからよ。好きだから自分のことを否定する気にもなれないし、自信が持てる。“自分を信じる”って書いて自信でしょ。私は自分をとことん信じているもの」

「……自意識過剰の間違いじゃ」

「うっさいわね！ とにかく、私はこの灰色の髪のことも好きなの。他人と違ってカッコいいじゃない！ ……アンタさ、もしかして他の誰よりも自分のことが嫌いなんじゃないの？」

泣き虫で弱い自分。僕はそんな自分が嫌いだった。

全て、楓の言うとおりだ……。

「私はね、アンタの金髪好きよ」

「はあ!？」

「だってカツコいいじゃない! そんな綺麗な髪の色、他にいないわ。アンタはもっと自信を持つべきよ。“己が道突き進め”他人からなんて言われようが気にしないわ。……さあ、もう一戦やりましょうか、キンタ。今度は負けないわよ」

そう言つて立ち上がった彼女は真っ直ぐで、やはり金太郎より大人びて見えた。

そして金太郎はそんな彼女を見て気づいたことがある。

楓のことが好きだ。

そう自覚した瞬間、自然と口が動いていた。

「あ、あのさ、楓……」

「何？」

「ぼ、僕も、楓の髪、す、好きだよ……」

金太郎の顔が紅潮する。言ってしまったという後悔や、遂に言つたという達成感、様々な感情が金太郎の中を交錯していた。そしてその楓の返答は……。

「そ。ありがとう」

……なんともあっさりしたものだった。構わず準備運動をしている彼女を見て、金太郎は呆然としていた。

「キンタ、あんたも準備運動しときなさいよ! 怪我でもしたら大変なんだから」

「……お、おう!」

慌てて金太郎も準備運動を始める。  
そして準備運動しながら、この日がいつまでも続けばいいな、と金太郎は思っていた。

#### 第四章・第四話：アンタの体って温かいのね

「よし、今日の稽古はここまでとする。夕食まで好きに  
「それでは遊んできまーす！」  
「……………」

父の声がかかると同時に金太郎は駆け出して行った。その速さと言え、今までの稽古を遙かに上回るもので、公時はその様子を呆然と見ていた。

「なあ、金剛。金太郎は毎日毎日どこに行っておるのだ？ 稽古が終わればすぐに駆けだして……………あんなに元気なら稽古の量を増やそうか……………」

「やめてくださいよ、父上。金太郎にも都合というのがあるのですから」

「都合？ 都合とは如何に？」

「“逢引”ですよ。父上」

「……………ああ、なるほど……………」

公時は得心いった。

そういえば何カ月か前に金太郎に許嫁を決めたのであった。その少女の名前は楓といったはずだ。なるほど、愛の力は素晴らしい、と公時は思った。

「あの楓っていう子と出会ってから金太郎は変わったんです。どんなに厳しい稽古でも泣かなくなり、それに他人と違うという劣等感がなくなった。彼女のお陰ですよ。それにアイツももう十歳。一人で物事を決められます」

「うむ……………そうであるか」

「……父上。いくら寂しいからといって稽古は増やさないでくださいよ」

公時の体がピクツと動いた。

「バカ者！ そんなことするわけなからう！ ……金剛、私は少し部屋に籠る。少し調べ物があった。その間の稽古、お前に任せたぞ」

「はい。……食事はどうされますか？」

「いらん。三日ばかり籠るが、その間誰も私の部屋に近づけるなよ。それじゃあ、頼んだぞ」

そう言つて公時は立ち去つていく。その背中をずっと目で追いながら、父が部屋に入ったことを確認した瞬間、金剛は叫びだした。

「ヤッホー！ 鬼の居ぬ間の洗濯だ！ おーい、皆。サバゲの準備だ」

坂田家次期当主、坂田金剛。真面目で器もある彼の唯一残念なところは、この常軌を逸脱したサバゲ大好き人間であること。これさえなければなあ、と分家の者どもは常日ごろから思うのであった……。

そのころ一方、金太郎は走っていた。今日はいつてもより遅くなつてしまった。楓を待たすわけにはいかない。

金太郎は険しい山道を難なく走り抜け、ようやくそこに着いた。夕日が綺麗な楓との秘密の場所。息を少し整えてから、金太郎は楓を呼んだ。

「おーい、楓！」





声にならない叫び声を上げ、こちらに向かってくる。その姿は獲物を捕える肉食獣のよう、さながら熊と言ったところか。

金太郎はその姿を見て動けなかった。速いがその直線的な攻撃を目で捉えながらも、体が言うことを聞かなかった。ただ呆然とするしかなかった。

「くっ……」

爪で皮膚が抉られた。血が滲みだし、あまりの痛さで地に膝をついた。しかしそれ以上に絶望が彼を追い込んだ。間違いなく次の攻撃でやられる、そうは思いながらも金太郎は動けない。恐怖や畏怖ではなく、ただ絶望によって。

金太郎はその光景を見たくなくて目を閉じた。後に来るのは自分の首がもぎとられるであろう痛み。それを覚悟していたのだが、いつまでたつてもその痛みが伝わってこない。

金太郎は恐る恐る目を開けると、そこには化け物が、目の前で止まっていた。

「……止まった？」

金太郎がそう呟くと、化け物の体がまた蠢き始めた。

また変化するのか、と思っていたが、その予想は裏切られた。化け物は本来在るべき大きさに戻り、異形の部位は縮小していく。

全てが終わった時、残ったのは倒れこんでいる少女の姿だけであった。

「か、楓　！」

金太郎は楓に駆けよった。幸いにもまだ息はある。金太郎は楓を背負い、急いで家まで走って行った。涙がこぼれそうになる目を必死

に拭いながら。

「魔染病ですね」

「魔染、病？ ……」

医者からそう告げられた楓の病名は聞いたことのないものだった。

「はい。退魔師や魔術師の方にだけ見られる病気です。魔力は本来人間には備わっていない力。いわば不必要な毒です。少なければ命には問題ありませんが、魔力を多く保有している人間はその全ての魔力を回路によって正常に動かして命が汚染されないように生きています。ただこの魔染病にかかると、体のどこかの回路が切れてしまうのです。そうして漏れ出した魔力が命を汚染しているのです」

「それで、楓は助かるんですか!？」

「……この病気にかかったものは99パーセント死にます。そして後の1パーセントは……魔になります」

「っ!？」

医者の中からゆっくりと発せられた事実は、金太郎の希望を断つには十分であった。

「魔力に汚染された命が何らかの原因で変革、進化し、より優れた命を望むようになります。人間よりはるかに強靱ですからね、魔の命というのは。そして、先程の証言……金太郎様の証言から判断して、間違いなくこの子は魔になります」

そんな言葉信じたくはなかった。

今別室で安らかに眠っている楓が、あんな醜いものになるなんて考

えたくはなかつた。しかし、自分の見た光景は紛れもない魔。信じないという方が無理だ……。

金太郎の中を様々な思いが交錯している時、もう一人絶望にうちひしがれている男がいた。それは金太郎もよく知る、楓の父であった。

「そ、そんな……。娘は、娘はどうにかならんですか？」

「無理ですね。今こうして眠っているだけでも奇跡なんです。一度魔に反転したものがまた人間に戻るなんて聞いたことがありませんよ。今は人間です。それでも、また近いうちに反転するでしょう。」

おそらく今度は戻れないでしょうね。……では失礼します。今回はかりはお手上げですよ」

医者は逃げるように立ち去って行った。

障子がトンつとハッキリした音と共に閉められると同時に、分家の者どもが騒ぎだした。もちろん、議題は楓のことである。

「それで、どうするのだ？ 楓の件は……」

「今までこんな事例なかったから……。何故こんな時に公時様はいらっしゃらないのだ」

「金剛様。公時様は何処へ？」

「……父上は今自室で籠っておられる。絶対に入るな、ということだ」

腕を組み今まで会議を傍観していた金剛が立ち上がる。その顔は軍事オタクとしての顔ではなく、坂田家次期当主の顔であった。

「父上がいない今、俺の意見を無理に通すことは出来ぬ。ここは皆の意見を聞こうと思うが、それでよいな？ ……それと熊谷、お前の意見は受け付けぬぞ」

「……はい。承知しております」

楓の父が皆から一步下がる。公平さのためには仕方ないことだ。金剛は皆に問いかける。

「では、反転した楓を処罰するということに」

「ちよつと待って、兄さん」

金剛は初めてしまった、と思った。まだ公平さを乱すものが一人いたのではないか。

「何だ、金太郎？ 何か意見か？」

「うん。楓は僕が救うよ」

金剛は思わず出そうになるため息をグツと堪えた。

「……金太郎、確かにお前は楓の許嫁だが、この問題は坂田家全体の問題。お前一人だけの我侭は通らんぞ」

「……それでも僕は楓を救う」

金太郎は金剛を睨みつける。

この時、金剛は初めて弟から拒絶というものを受けた。今まで自分についてくるばかりの金太郎が自分を拒絶した。それは兄としては嬉しいが、坂田としては面倒な、複雑な気持ちにさせた。

「あの時、楓は僕を救ってくれた。どん底で、ただただ沈むだけの僕に手を差し伸べてくれたんだ。あの日から僕は変わった。楓のお陰なんだ。……今度は僕の番。僕が彼女を救うんだ！」

金太郎に圧倒されかけている時、金剛は一人手が拳がっているのを見た。少し、助かったと思った。

「何だ、稲穂？ お前も意見があるのか？」

相馬稲穂。そしあいなほ 坂田分家の相馬家で、若くして当主となった優秀な退魔師である。金剛はその腕を見込んで仕事を頼むことがあるのだが、自己顕示欲が強く、少々傲慢な男であった。深々とお辞儀するその様はなんとも演技くさく、大袈裟に問いかけるように喋りだした。

「はい。恐れながら申し上げますと、金太郎さまはまだ子供。いくら宗家の人間だとはいえ、一人の人間を救うだけの度量が備わっているのか疑問でございます」

「……」  
「確かに。お前の意見は正しい」

稲穂の言葉は否定することは誰にも出来ず、金剛は頷いた。

「それにどのようにして病魔と闘うのか甚だ疑問がありますな。所詮は子供、発想が幼児くさい。気合いでどうにかなるものではないのですよ。やはりここは楓を処刑した方が」  
「  
    煩いぞ、お前」

稲穂の動きが止まった。

「今何と？ 金太郎様」  
「俺は煩いと言ったんだ、稲穂」

稲穂はいつも金太郎を見て思っていた。

あんな人間より俺の方が上だ。

いつも泣いてばかりで異端の金太郎。稲穂はいつもそれを見下していた。

しかし今はどうだろうか。今自分の目の前にいるのはそんな弱い金太郎ではなく、坂田家宗家の血を引いた退魔師。紛れもない、純粋な力に稲穂の足は自然と震えていた。

「俺が楓を救うと言ったんだ。それは誰にも変えることはできない。部外者は引つ込め！」

「は、はひ！」

「いいな、お前ら。今後一切楓のことで俺に意見を出そうとするな。もし口出した時は、その時は間違いなくお前たちを、殺してやる……」

稲穂の恐怖は他のものにも伝わった。在る者は金太郎から眼をそらし、在る者は前にいるものの背中に隠れている。

金剛はこの事態に收拾をつけるために言う。

「……と、言うことらしい。楓のことは金太郎が面倒をみる。これでいいな。……それでは、解散」

その言葉とともに分家の者どもは蜘蛛の子を散らすように去って行った。特に稲穂は真つ先に部屋から出ていき、どこかの壁にぶつかった音がした。

金剛は今まで溜めに溜めた息を大きく吐き出し、隣にいる問題児に問いかけた。

「……おい、金太郎。どうするつもりだ？」

「別に。さっき言ったことは変わらないよ。でも兄さんと姉さんには迷惑かけるかもしれないな」

「もう迷惑かけられとるわ……」

「別に私はいいわよ。楓ちゃんのお世話、手伝っわ」

今まで鬼のような形相だった金太郎の顔が少し柔らかい。

「ありがとう。姉さん。……ちよつと楓を見てくるよ」

金太郎はゆつくりと部屋から立ち去り、蓮華もそれについていく。ただ一人残された金剛は呆然と呟いた。

「あのバカ……親父にそっくりじゃねえか……」

11月13日：この日より楓の治療を開始。楓の部屋には宗家の人間以外誰にも近づけさせず、金太郎と蓮華のみで世話をすることとする。

11月15日：父、坂田公時事情を聴く。金剛と蓮華の説得により、楓の件は了承。この日よりまた公時は部屋に籠り始める。

11月21日：楓が目覚めます。医者から絶対安静と言われているので、まだ起き上がれず。

12月1日：医者からの助言で、魔力を感知できる人間がいれば溢れ出る魔力を止められるかもしれないと聞く。この日より、魔術師の搜索、また金太郎の修行が始まる。

12月24日：金太郎、魔力の吸引に成功する。またこの時の試験体、金剛は魔力の吸引のされすぎで倒れる。

1月17日：第一次魔力吸引。楓の中に残留する魔力の10パーセントを回収。

2月3日：何故か今年より豆まきを禁止になる。

2月26日：第二次魔力吸引。楓の中に残留する魔力の26パーセントを回収。

3月3日：金太郎の誕生日。この日から楓が起き上がることが許される。

3月29日：第三次魔力吸引。楓の中に残留する魔力の40パーセントを回収。

4月15日：第四次魔力吸引。楓の中に残留する魔力の58パーセントを回収。

5月4日：第五次魔力吸引。楓の中に残留する魔力の78パーセントを回収。この日から楓の魔力回路の傷が奇跡的にふさがり始める。

6月7日：第六次魔力吸引。楓の中に残留する魔力の90パーセントを回収。

6月18日：魔力回路の傷が完全回復する。

7月7日：全ての魔力が回収完了。念のために体を動かさず、安静を保つ。

8月14日：楓リハビリ開始。

そして10月10日……。

「楓、本当に外に出るのか？」

「当然よ。こんな秋晴れ、外に出ない方が失礼ってもんだわ」

「……誰に失礼なんだ？」

金太郎は呆れた表情を浮かべながら笑っている。走り回る楓を見失わないために、その背中を追いかけて行った。

結論から言うと楓は魔染病から回復した。全力疾走や魔力の使用などいくつかの制約はあるが、日常生活には問題はない。リハビリも順調に進み、ようやく今日外出許可が出たのであった。

「まだ医者からあまり動き回らないようにって言われているんだろ？ そんなに走りまわっちゃダメだって」

「だって久しぶりに機嫌がいいのだから。寝てばかりで力が有り余



つていたからちよつどいいわ!」

楓はクルクルと回り始める。本当に楽しそうに、嬉しそうにはしゃいでいる彼女の姿を見て、金太郎も胸から何かが込み上げてきそうだった。

「キンタ、私あそこに行きたい!」

「あそこ? ……ああ。あそこね。でも今のお前の体力じゃ少々きつと思うが……」

「大丈夫よ。私が倒れそうになったらキンタが助けてくれるんでしょ」

「……ああ。そうだったな。じゃあ行くか!」  
「うん!」

二人の言うあそことは、もちろんあの崖のことである。山を下り岩を越え森を抜けてようやくたどり着くその崖。そして、二人が初めて出会った場所……。

「ここは変わらないわね! ああ、やっぱりここに来ると落ち着くわね」

「あんまりはしゃぐなよ。何かあったら困るのは俺なんだから」  
「大丈夫よ。しばらくは景色を眺めているから」

そう言つて楓は静かに腰を下ろす。金太郎もその隣に座り、空を眺めていた。

じきに日が沈む。

「ねえ、キンタ……」

「ん? どうした?」

「どうして自分のことを俺つて言うようになったの?」

金太郎はその質問にすぐに答えられなかった。以前は僕と違っていたはずの金太郎、そんな彼が何故俺と言い始めるようになったか。それはいつも俺と言った方が強そうに思えたからだ。そして何故強くなりたいからというところ……。

楓を守りたかったから。

「な、なんとなくだよ。なんとなく。ただ兄さんが使っているのを真似しただけだ！」

「ええ？ 本当かな？」

「ほ、本当だ！ 他意はないぞ！」

これでは本当のことを言っているようなものではないか、と金太郎は後悔していた。そしてきつとそのことを言及されるのだろうと身構えていた。

しかし楓は何も言ってこない。ただ微笑んでこちらを見るばかりであった。

「楓……どうした？」

「……キンタ。私今まで言ってなかったけど、結構なロマンチストなの」

首をかしげる金太郎を見て楓が少し笑う。

「お姫様には白馬に乗った王子様が迎えに来てくれる。囚われのお嬢様は忠実な騎士に助けられる。そういうことを思っちゃっ女の子なの。そして……それらに憧れたわ」

「……」

「だから私はあの頃毎日ここに通っていたの。ここから見える夕日と一緒に眺めてくれる素敵の人がいつかきつと現れることを待ち望

んでいたわ。そしてアンタが現れた」

金太郎は黙って聞き入るしかなかった。

「最初アンタを見たとき、なんてひ弱な男と思ったわ。軟弱そうですぐ泣きそうだし、私より弱そうだったし」

「悪かったな。そんな俺が現れて……」

「フフ……だからすぐに追い返そうとした。少し強く出れば、すぐに言うことを聞くと思ってた。でも違った。アンタは私に反発してきたわ。その時私は何か起こりそうな予感がしたの。そこからはアンタも知る通り、毎日毎日喧嘩をしたわね」

楓は金太郎から目をそらし夕日を見る。今にも落ちそうな日の光はいつもはとても奇麗と思っっているのに、何故か今日だけはとても切ないものに思えた。

「あの時は楽しかった。アンタと喧嘩した後に見る夕日はとても奇麗だった。また見る事ができるなんて思ってもいなかったわ。ありがとっ、キンタ」

楓の微笑みを見て、金太郎の口は自然と動いていた。

「何かあったのか、楓……？」

「ん？ 何が？」

「とぼけんなよ。何年一緒にいると思ってんだ？ お前は俺に礼なんか言う奴じゃねえだろ」

「フフ……やっぱりキンタには隠し事ができないわね」

楓は立ち上がる。夕日に照らされる彼女の姿は、彼女を初めて見た凜とした強さではなく儂さを感じさせるもの。そしてその彼女の口

から紡ぎだされるのは衝撃的な言葉。

「私死ぬわ。多分、今日中には」

時が止まった気がした。

「……はっ？」

「だから死ぬの。私」

「どうしてだよ……。魔染病は治ったんじゃないかよ!？」

楓の魔染病は治った。医師からそう言われたし、治療した自分もそう確信していた。楓はこれから回復していき、また一緒にこうして遊べると思っていた。なのに何故……。

日は完全に落ちたらしい。辺りは真っ暗になった。

「確かに魔染病は治ったわ。汚染されることもなくなった。でもね。私を犯そうとしている奴がまだいたの」

「だ、誰だよ？ 誰なんだ!？」

「私」

またもやの衝撃に金太郎は息をのんだ。

「魔という遥かに強靱な命に魅せられてしまった私は、それを望むような別の人格が誕生した。それは魔染病よりはるかに遅いけれど、確実に私を蝕んでいった。今もこうして話している間もね……。そして今、アンタを殺したいとまで思っている」

楓は隠していた自分の右手を見せる。その腕の色は黒、爪は長く恐ろしいというよりおぞましい。あの時金太郎が見た魔の腕と同じものだった。

「その腕は……」  
「魔になりかけている証拠。魔になりたいという私はどんどん私を侵食していった結果がこれよ。そして私はそんな私を殺し続けていた」

そう言つて楓はナイフを取り出す。そして楓は自分の反転した右手をナイフで切り落とした。黒色のそれは地に落ちたと同時に消え失せ、跡形もなくなった。

「っ!？」

「驚かなくていいわ。数日すればまた生えてくるんだから……。こうやってアンタ達に見られないように殺し続けていたの。……でももう限界。どんどん膨れ上がったその願望を殺すのが間に合わなくなってきたの。いつ魔になってもおかしくないほどにね」

「そんな……嘘だ……」

「だから私は自分を殺す。魔になんて制覇されない。私は人として死ぬ」

「ちよつと待て、楓！ 早まるなよ。まだ何か方法があるかもしれないえじゃねえか！ 諦めんなよ！ 今まで我慢できたんだから絶対に」

「ごめんね。キンタ。早まるんじゃないで、遅すぎたのよ」

楓の口から何かがこぼれおちる。それは真つ暗な闇の中でも分かるほどの鮮やかな赤色 楓の血だった。

「これで……ようやく、終わり……」

「楓！ 今助けを」

楓は金太郎を引き留めた。

「そんな、ことより抱きしめてよ。キンタ。さっきも言ったとおり私はロマンチストなのよ。愛しの男の中で死ねるなんてロマンチックじゃないの」

「楓……」

「早くしなさい、キンタ！　いつも我俣を聞いてくれたじゃない！」

少し戸惑ったが、金太郎は彼女の言うとおりに抱きしめた。

初めて抱きしめた彼女の感触は、予想以上に柔らかくて小さくて、そして冷たかった。

「アンタの体って温かいのね……。今まで気づきもしなかった。……キンタ、アンタは私を」

その言葉は最後まで紡がれなかった。楓は笑いながら、金太郎の腕の中で果てていった。

「あ、ああ……」

金太郎は楓の体を力いっぱい抱きしめる。彼の口から漏れるのはただ嗚咽のみ。暗くなった空に向けて彼は吠えた。

「楓　　！」

……その後のことはよく覚えていない。どうやって帰ったのか、楓をどうやって供養したのかさえ。

しかし一つだけ分かっていることがある。楓の異変にもっと早く気づいていればこんな悲劇は起こらなかったのだ。ただ自分の都合だけで楓は苦しんでいたのだ。

楓を殺したのは自分。もう誰かが死ぬところなど見たくない。だから自分は強くならなくちゃいけないんだ。皆を助けられる、強い人間へと……。

#### 第四章・第五話：貴方は私を利用すればいい

「ん……」

金太郎は起き上がった。どうやら自分は寝てしまっていたらしい。となれば、あれは夢か。

久しぶりに見たこの夢は、なんとも不愉快に悲しげにさせた。

「楓……お前はあの時何て言ったんだ？」

“ キンタ、アンタは私を ”

あの言葉の続きは何だったのであるうか。今まで自分を苦しめた恨みか、何もできなかった自分への無常観か、果たして彼女は何と言ったのだろうか。

金太郎は今までずっと考え続けていた。しかし答えは一向に現れない。それがまた金太郎を縛り付けていた。

金太郎は再び寝転がり、天井を仰ぐ。すると又ツと顔が現れ、自分の顔を覗き込んだ。

「のわっ!?!」

「……」

金太郎は驚いて跳ね上がる。お化け屋敷に似た感覚を覚えながら、金太郎はその無言の人物を見た。その人物は人ではなく、自分が最もよく知る鬼だった。

「な、何してんの？ 鬼丸……」

金太郎の問いにも答えず鬼丸は未だに無言。鬼丸は体操座りで金太



郎を見つめ、金太郎もそんな彼を苦笑いしながら見ていた。そんな不思議な状況がしばらく続き、もう終わらないんじゃないかと思いかけたころ、唐突に鬼丸がその口を開いた。

「……キンタ。私は非常に恵まれています」  
「へっ?」

突然の話題に金太郎はすぐについていけなかった。

「私には両親はいません。しかしそれは幼い時の出来事であり、あまりはつきり覚えていない。同時に今はたくさんの大切な人と暮らしています。大切な者との死別の悲しみなど、私には分かるわけありません」

話が読めない。今は聞き役に徹するしかなかった。

「だから、貴方は私を利用すればいい」  
「っ!?!?」

金太郎の顔が一気に険しくなる。鬼丸の言葉が度を過ぎるのはいつものことだが、この言葉だけは納得しがたかった。しかし鬼丸が最後まで結論を言わないのもいつものこと、金太郎は言葉をグツと堪えた。

「私は貴方の事情など何一つ知りません。貴方に何があつたのか、貴方はどんなに悲しんだことか、想像もつきません。私は何一つ事情を知らない。だから貴方を全面的に信じるしかない。貴方は、そんな私たちを利用して真実を知ればいいのです」  
「そんな……利用なんて……」

利用、という言葉は自分のために人を使うということだ。そんな利用という言葉にどうしても抵抗を覚えてしまう。ただ自分のためだけに鬼丸たちを巻き込むなんて、金太郎には出来なかった。

「でもキンタ、貴方は答えを知りたい」

「……」

鬼丸は真つ直ぐ自分の顔を見ていた。

「貴方がそれを知りたいと望むならば、私たちは答えを導く力ギになりましょう。貴方がそれを知りたくないと思ふならば、私たちはその答えを塞ぐ蓋になりましょう。さあ、キンタ、選んでください。私たちを巻き込んでまでも真実を知りたいか、否かを……」

鬼丸は立ち上がり、手を差し出す。

その姿はかつてあそこで見た、夕日に照らされ凜として立っている楓の姿と重なるものがあつた。しばらくその姿に見とれて呆然としていたが、ようやく動き出した金太郎の顔はかすかに笑っていた。

「……んなもん決まっているだろ。お前らを利用するなんて、俺には出来ないよ」

「……」

鬼丸の表情がかすかに沈む。その沈みかけた手を、金太郎は力いっぱい握った。

「だから鬼丸、俺はお前たちを信じるよ。俺は絶対にお前たちを利用したりしない。俺はお前たちを信じている。だから、俺の過去のこと……楓のことを今、話す。そして、楓の答えを、探してくれ……」

…

「合点」

鬼丸も金太郎の手を強く握り返した。

「  
というわけで、私たちは情報収集に徹することになりました」

『……………』

かぐやとウラシマはキョトンとしている。鬼丸はその反応に不満を覚えたのか、少し顔を曇らせた。

「む？ どうしたのです。二人とも。反応が薄いですよ」

「いや、だって……………どこかに行くってくるってフラって消えちゃって、突然帰ってきて言い出すのがそれじゃあねえ……………」

「鬼丸さん、せめて何の情報を集めればいいのかくらい教えてください」

ああ、そうだった、と鬼丸は気づく。この二人は何も知らないのだ。ウラシマはともかく、かぐやは何も知らない。最低限のことは教えなくてはいけなかった。

「金太郎は今、楓という女性が現れて困惑しています。その女性は過去に、金太郎の目の前で死んだそうで……………。私たちはその謎を解明すべく、情報を集めるのです。分かりましたか？」

「ああ、なるほど。それで？」

「“それで”？」

かぐやの予想外の反応に少々驚いた。

「まさか鬼丸さん、分かっていることはこれだけじゃないですよね？ 私に言っていない事もまだまだありますよね。さあ、話してください」

「いや、それは……だから、あの……」

「話してください」

言葉に詰まる鬼丸、それを追求するかぐや。それを傍から見ているウラシマは思った。

まるで浮気がばれた旦那みたいじゃないか……。

そしてそれは似たようなものか、と自分で納得していた。

「……かぐやには危険な目に合わせたくなかったんですけどね。仕方ない……。実は先程、いえ、ここに来た時から魔の気配がこの屋敷から漂っています」

「そんなバカな……。ここはキンタさんの実家といえど、御門から認められる名家、坂田家。魔の気配に気づけないはずがありませんよ」

「かぐやちゃん。どうやらこの魔は隠れん坊が得意みたいでね、気配がとつても薄いんだ。魔術師である僕や、鬼の鬼丸君がようやく気付けるぐらいのね。まあ、確かに、君の言うとおり坂田の人間が、一人も気づけないとは考えづらいね」

「何故退魔師の本拠地に魔の気配がするのか、そして魔になりかけて現在生きている女性、楓……。なんらかの関係はあると思います」

鬼丸は続ける。

「私たちはそれを調査します。ウラシマ、貴方は楓という人間について調べてください。竜宮城の力をもってすれば簡単でしょう」

「僕、仕事と私情は分別するタイプなんだけど……」

「乙姫にここ数日間の貴方の仕事ぶりを告発しますよ」

「よーし、僕ががんばっちゃうぞ！」

ウラシマは早速準備に取り掛かる。その目に光るものが見えて、何故か自暴自棄気味になっていたのは気のせいではないだろう。

「かぐやは月光を使ってこの屋敷を調べてください。もしかしたら魔の正体分かるかも」

「分かりました。で、鬼丸さんはどうするんですか？」

かぐやの問いにすぐに答えられなかった。何故か答えるのが怖かったからだ。

「……私は、少し気になることが……」

「何ですか？ 気になることって？」

「う……」

再び言葉に詰まる鬼丸を追求するかぐや。それを見て、ウラシマは納得した。

鬼丸君もこっち側の人間だったんだ。

“こっち側”とはもちろん女性に虐げられる男のことである。

「さ、坂田家当主、坂田公時のことです」

「……誰です？」

「金太郎君のお父さんだね。彼がどうかしたのかい？」

鬼丸はウラシマに向けて答えた。

「いえ……ただ、御門に直接仕えている者がこの異常事態に気づけ

ないのはおかしいと……。現に私は何も言われていませんしね」

「あつ、そうか。鬼丸さんも魔でしたね」

「退魔師が魔に気づけないのはおかしい……。というわけで、私は彼を調べます。……。これでいいですか、かぐや？」

鬼丸は恐る恐るかぐやに尋ねる。どこかぎこちない彼の行動は見ていて滑稽であった。

「まあ、いいでしょう。……。鬼丸さん。秘密を隠しても無駄です。

女の勘というのをなめない方がいいですよ」

「……っ！」

鬼丸の顔が一瞬だけ恐怖に染まる。その表情は、桃太郎と戦った時も、天人を退けたときも、もちろんウラシマを倒した時にも見たことがなく新鮮だった。

やっぱり僕たちの裏のリーダーはかぐやちゃんなんだなあ、と呑気に考えているウラシマ。対するかぐやはこの状況をちよっぴり楽しんでいた。

「で、では皆さん。各自の調査を始めてください」

「はい！」

「OK！」

かぐやは優雅に、ウラシマは元気よく部屋を飛び出していく。それを見届けた後、鬼丸も自分のすべきことに取り掛かった。

「頼むぜ、みんな……」

そのころ金太郎は自室で黒に染まりきった空を見ていた。自分ももちろん何かは調べるつもりだ。だが、彼らと違い自分は坂田の人間。下手に出歩けば目撃者が出る。今日は何も動かず、鬼丸たちを信じることにしていた。若干の眠気を感じてきたころに、部屋の戸が叩かれた。

「どうぞ」

「オッス！ 金太郎。元気にしてる？」

「兄さん……」

ノックしたのは金太郎の兄、金剛であった。妙に顔がにやけていて、金太郎は疑問に思った。

「どうしてこんな夜遅くに？ 何か用？」

「金太郎……お前……」

金剛の表情が一転、信じられない、とでも言いそうな顔で金太郎を見ている。何か自分はやっただろうか、と金太郎が考えていると、その何かを思い出した瞬間に金剛が泣き叫び始めた。

「俺のコレクションについて聞いてくれるって約束したじゃんかよ！」

「うわあ！ 忘れてたあああ！」

「嘘つき！ 金太郎の嘘つき！ もう金太郎なんか信じないからな！」

「ちょ、ちょっと待って、兄さん。聞くから。今聞くから！」

……果たしてなぜこの人はここまで子供っぽいのか。自分の夢の中ではもう少し大人な、カッコいいお兄さんだったはずなのに、と思いつつながら金太郎は金剛を抑えつけていた。

と、ここでいきなり金剛の顔が笑顔に変わった。

「冗談だよ。冗談。俺もそこまで子供じゃねえって」

「ははっ……冗談、ねえ……」

今ではただの愉快なお兄ちゃんだ。金剛はハツハツと高笑いしていた。

「何しに来たんだ……ホントに……」

「いや何。お前が何やら浮かない顔をしているから心配しに来てやったのさ。久しぶりに会う許嫁に緊張するのも分かるが、気楽に構えた方がいいと思うぞ。……時に金太郎。あの客人たちは、お前の友人か？」

はて、なぜそんなことを聞くのだろうか。少々疑問に思いながら金剛の問いに答えた。

「はい。旅で知り合った仲間ですが……何か？」

「いやいや、いいんだ。別にいい。ただお前に友達がいるとは聞いてなかったものでな。いやあ、良きこと。良きこと。めでたいことよ。……うむ、残念ながら眠くなってきた。また話は明日にしよう。じゃあな、金太郎」

「あ、ああ。お休み、兄さん……」

金剛は部屋を出て行った。戸が閉められ時、金剛の顔が一転した。その顔は、金太郎が夢に見たカツコいいお兄さんのような顔ではなく、愉快なお兄ちゃん的笑顔でもなく、金太郎の知らない表情。坂田家次期当主としての退魔師の顔であった。

そして暗い暗い夜を見上げていた。





#### 第四章・第六話：ちょっと黙ってくれないか

この日、鬼丸たちは朝早くから動き出した。

「どうです？ かぐや、何か見えましたか？」

「いえ、全然……。魔は鬼丸さん以外見えませんよ」

かぐやの言葉に鬼丸は少し落胆した。かぐやに月光を通して屋敷を見てもらったが、どうやら無駄だったようだ。少し期待していたのだが……。

鬼丸たちの情報収集は思うように事が運ばなかった。客人という立場だけにあまりウロウロしては怪しまれるし、まだ人物を把握しきれしていない。まだこうやって月光を通して屋敷を調べることに留まっていた。

「今は屋敷の庭で訓練している人間が8人いますね。他の人は見当たらないですけど……」

「8人……」

「実戦形式で稽古しています。よくもまあ、こんなに戦えるもんですね」

「そりゃ退魔師のお屋敷だからね。日々の鍛錬が自分の命を守るわけだよ。退魔師って言うのは偉いもんだね」

「……で、魔術師である貴方は何をやっているんですか？」

かぐやが呆れたような目でウラシマを見た。無理もない。何故なら彼は寝転がってお菓子を食べながら、自前の携帯電話を操作しているという如何にも何もしていないようだったからだ。

「僕は動かなくていいの。情報は自然と耳に入ってくるんだから」

「どついつ意味ですか？」

ウラシマは今日初めて起き上がって、鬼丸たちと向き合った。

「僕の部署は僕を含めて四人いてさ、僕と亀吉君と、あと情報オタクの二人組がいるんだ。ほら、竜宮城で君たちをつけていた彼らさ」

「……ああ、なるほど。で、その情報は信じられるんですか？」

「オイオイ。竜宮城の力をなめないでほしいな。彼らは情報を集めることに關してはプロだよ。……まあ、少し性格に難はあるけど、それでも仕事は確実に遂行する。もうすぐ調査は終わるはずだよ」

「……しかし結局ウラシマは何もしないんですね」  
「優秀な部下を持つと嬉しいよね」

ウラシマは再び寝転がって携帯を操作し始める。

まあ、欲しいのは過程ではなく結果だけだ。竜宮城が信頼ある情報が提供してくればそれでいいし、ウラシマのこの姿勢も部下が信頼できるから敢えて動かないのかもしれない。果報は寝て待て、と言っものだし。

……しかしもう少し何とかならないだろうか、と鬼丸が思っている  
と、かぐやがその沈黙を破った。

「あっ……」

「どつしました、かぐや？」

「今キンタさんと楓が話しています」

「何!？」

一番に喰らいついたのはウラシマだった。先程の怠けぶりが嘘のようだ。

「あの野郎、許嫁といちゃつきやがって! どんだけ羨ましいんだ、

あいつは！？ 許すまじ、絶対に殺す！」

「ちよつとウラシマ、落ち着いて」

「かぐやちゃん、僕にも見せて！」

「無理ですって！」

ウラシマとかぐやがギャーギャー騒ぎだす。そろそろ止めるか、と鬼丸が動こうとした時、客間の戸が開かれた。金太郎の姉、坂田蓮華がポカンと呆然としていた。

「お邪魔、でしたか？」

『いえいえいえいえ！ 全然大丈夫です！』

「はあ……」

ウラシマとかぐやの尋常じゃない反応に、蓮華は少々頭を傾げている。返事もぎこちない。そして鬼丸の口からも“はあ”とため息が出そうであった。

「すみませんね。何もないと。御暇でしょうに。……どうぞ、粗茶ですが」

蓮華から差し出されたお茶に口をつける。彼女のお茶はどこか上品な甘さがあり、先程まで混沌していたこの場の人間の心を落ち着けるのに一役買っていた。鬼丸は心の中で彼女に感謝していた。

「何か暇でも潰せるものでもあればいいのですが……。生憎ここには娯楽という娯楽がなくて、本ぐらいしかないので」

「へえ。どのような本があるんですか？」

「そうですね……。昔の兵法書や、魔についての研究。ああ、あと対人戦向けの戦い」

「すみません。やっぱり要りません」

かぐやは断る。そんな物騒な本見たくもない。しかしここで意外な人物が口を開いた。  
鬼丸だった。

「いえ、是非貸していただきたいですね」

「鬼丸さん？」

「では、後ほど持ってこさせますね。では、失礼します」

蓮華が戸を閉めると同時に鬼丸も立ち上がった。

「かぐや、私は少し外を見てきます。……ちょっと、そんな目で私を見ないでください。直接外を見るだけですよ。何も隠したりしませんって」

それでは、と言って鬼丸もこの部屋から立ち去っていく。

彼の真意は誰にも分からない。例えそれが自分やウラシマや、金太郎であっても。それがとても寂しく感じられて、かぐやはその名を呟いていた。

「鬼丸さん……」

そんなしんみりとした気分を吹き飛ばすのは隣にいる男の着信音だった。

「おっと、ようやく来たか。ちょっとタイミングが遅かったかな……」

「はい、こちらウラシマ」

もしもし。亀吉です。お疲れ様です

「おう、お疲れ、お疲れ。で、どうだった？ 調査の方は？」

熊谷楓という女性についてでしたね。流石に軟体コンビも苦労し

たと愚痴っていましたよ。何せ相手は退魔師ですからね。何か労ってやってくださいよ

「分かった分かった。彼らには何か奢るよ。で、結果の方は？」

電話越しにパラパラと紙をめくる音が鮮明に聞こえる。だいぶ詳しく調べてくれたのだろう、ウラシマは本気で臨時ボーナスを考えていた。

えっと……楓という女性は確かに死んでいます。8年前に。魔染病という不治の病にかかって。御門の記録に残されていましたから、間違いないでしょう。流石の坂田も、御門には嘘はつけないでしょうから

「楓が死んでいなかった、っていう可能性はないかい？」

それはないと思います。魔染病の死亡率はほぼ100パーセント。今まで治療法など見つかっていません。当時楓を担当した医師のことも調べました。彼はなかなか変わった男で世界の発展のために命を捧げるような男、と書いてあります。坂田から拷問を受けたとしても、おそらく治療法が発見出来たら発表をしていたでしょう

なるほど、とウラシマは納得した。しかしそれは同時に金太郎には辛い結果だ、と複雑な気持ちになった。

以上で報告は終わりです

「ありがとう、亀吉君。彼らにも礼を伝えといてくれ。ああ、そうそう。何かそつちで変わったことがあったかい？ 例えば社長がまたドジやったとか」

何期待してるんですか……。ああ、そういえば何かあったと言えば、鬼ヶ島で大規模な爆発が感知されましたね。竜宮城のシステムには異常はないですが、何があったんでしょうか？

「それってどういう

」

突然そこで会話が途切れた。電話からはツー、ツーという空しい音しか聞こえず、携帯を見るとそこには圏外の二文字。先程までは確かに使えたはずなのに……。

「どうしましたか、ウラシマ？」

「電波障害だ……どうして急に？　というより鬼ヶ島で爆発って……」

携帯から流れる音が妙に無気味に聞こえた。

金太郎は毎朝、一人で稽古をしている。いつから始めてかは覚えていないが、その習慣は絶えることなく続き鬼ヶ島でも人知れず稽古をしていた。

もちろん、本家に戻っても変わらずに、他の分家の者に混じって稽古を行っていた。

「はっ！　はっ！　はっ！」

だがしかし金太郎の相手をしてくれる者はいない。金太郎は本家の人間、分家の者が彼とお手合わせをお願いすることなど恐れ多くも出来なかった。ただ一人は除いては……。

「相変わらず頑張るわね、キンタ」

金太郎に声をかけたのは渦中の人間、楓だった。彼女に対する不信感からか、彼女の顔を真っ直ぐ見ることが出来なかった。

「楓……お前、外に出てきても平気なのか？」

「ええ。平気よ。魔染病は治ったって言ったじゃない。昔ほど激しく動けないけど、それでも稽古するくらいなら十分。……どう、久しぶりにやる？」

「いや、だつてお前……」

「あら、キンタ。私とやるのがそんなに怖いのかしら？」

安い挑発だ。だがこういう挑発も彼女の一つの方法だった気がする。金太郎は初めて彼女と向き合った。変わらない。大人びているが、その強気な目や、自信に満ち溢れた顔。そして何より光り輝く灰色の髪、いや、灰色というよりはむしろ銀色に近かった。その顔を見ると彼女は本当に死んだのだろうか、と自分の記憶に疑いすら持ち始めてしまう。

違う。彼女は死んだのだ。目の前の彼女は偽物で

。「 どうしたの、キンタ？ まさか本当にビビってるの？」

「あ……い、いや！ そんなことはないぜ！ 後で泣いても知らないぞ」

「フン！ アンタとの成績、勝率上げさせてもらっわよ」

楓から木刀が投げられる。木刀でのチャンバラ、それは自分たちが最も多く戦った遊びであった。ルールは簡単、ただ相手を殴ればいいだけ。そんな単純明快だからこそ、自分たちが一番好きだったかもしれない。

始まりの間も決まっている。双方が準備し終えてから、約5秒後にその遊びは始まる。

「いざ尋常に……」

「勝負……」



その言葉が終わると同時に彼らは駆けだした。

「たあああああ！」

「てやあああああ！」

初手は金太郎だった。男という体格的にも有利な金太郎が初撃を取るのとは分かり切ったこと。だからこそ楓は最初木刀を構えなかった。

「フン！ そんな単純な攻撃じゃ当たらないわよ！」

金太郎の下薙ぎ払いを跳んでかわす楓。金太郎の追撃も空中で、体をひねってかわす。

体操選手並みに柔軟に、そして派手に動くこの彼女の特質はもちろんこの遊びの中で培われたもので、このお陰で男ばかりの退魔の世界でも渡り合って行けた。柔能く剛を制す。これが彼女の基本だった。

「アンタは昔からトロいわね。そんなんじゃ私の攻撃はかわせないよ」

空中の不安定な体勢から、予想外の攻撃を繰り出すのも彼女の特徴だった。まるで曲芸師のような彼女の戦い方は、金太郎は昔から嫌いだった。しかし金太郎も負けてはいない。

「鬱陶しいな、オイ！ なめてんじゃ……ねえ！」

楓が柔とすれば、金太郎は剛。それも柔に簡単に制されないような強き剛。

金太郎は手当たり次第に木刀をふるう。もちろんそれは楓にあたることはないが、それでいい。その木刀によって巻き起こる風圧が狙

いだからだ。

その生じた風圧によって、微妙なバランスを保っていた楓の体勢が崩れる。それを見逃すほど、金太郎は甘くはなかった。

「もらった！」

「甘い！」

当然、楓も甘くはない。空中ですぐさま体勢を立て直すと、一旦着地し自分と距離を取った。どうやって空中で体勢を変えるんだ、と長年の金太郎に疑問である。

「ふう、なかなかやるじゃない。キンタ。強くなったのね」

「伊達に修行を積んできたわけじゃないぜ！」

「そう……なら、ちよつと本気を見せないと、ね」

楓がこちらに向かってくる。その動きはユラユラと、まるで幽霊のように捉えづらい動きだった。狙いは右か、左か……、と金太郎が考えている予想とは裏切る結果となった。

「う、上!?!」

楓は跳躍する。わざと重心を左右へ移動させながら、フェイントをかけていたのだ。もちろん、それを迎撃出来ぬ程金太郎は弱くない。しかし楓は二重に自分を裏切った。

「てい！」

「っ!?!」

空中にいる楓を叩き落とすつもりだった金太郎の刀は宙を切った。楓は自分の木刀を踏み台にしてさらに跳躍したのだ。

後ろを取られた金太郎はすぐさま身構えた。しかし……

「飛んでけえええええ！」

楓の蹴りが自分の背中を捉えた。その衝撃が直に頭に伝わる。

出来るガードはした。それでも数メートルは吹っ飛ばされた。もしガードしていなければどうなっていただろうか。

楓はガードされたことに不満を持っているようだった。

「あら、ガードされちゃった……案外器用なのね」

「それにオマケつきだぜ」

少々よろめきながらも立ち上がった金太郎の手には二本の木刀があった。倒れる直前に拾っておいたのだった。

金太郎はそれを楓に投げ返した。

「……随分と優しいのね」

「そりゃ女の子には優しくしねえといけねえからな」

昔から、楓は女の子扱いされるのが嫌だった。それは今も共通で、楓の顔は笑ってはいるが口元は笑っていないかった。

もちろん金太郎はそのことを忘れるはずもない。これは挑発だ。

「アンタ……今言ったことを後悔させてやるわ。この木偶の坊」

「じゃじゃ馬め」

双方が再びぶつかり合う。彼らの顔は笑っていた。

金太郎にとって久しぶりのその遊びは、彼女が偽物かどうかなんて関係ないと思わせるには十分であり、彼は目の前の遊びを楽しんでいた。

屋敷から覗く、その視線に気づくこともないまま……。

金太郎が自室に帰ると、そこには体操座りをして部屋の隅で待っている鬼丸の姿があった。

「キンタ……随分と楽しそうでしたね」

その雰囲気は重く、部屋に明かりがついていないので暗いのは当然だが、彼の周りだけより一層暗くみえた。

「お、鬼丸さん。またそんな場所で何をやっていらっしやるのですようか？」

「別に……それよりも机の上。見てください」

鬼丸の指さした方向には紙の束があった。その一枚目には“熊谷楓の調査”と書かれていた。

「これは……」

「文字通り熊谷楓についての調査です。ウラシマがまとめてくれました」

金太郎は表紙をめくる。そこには現在坂田家が置かれている状況、楓の経歴、魔染病についてなど事細かに書かれていた。そして最後にはこんな言葉で締めくくられていた。

熊谷楓は魔、またはそれに準ずるものである。

「シヨックでしたか、キンタ？」

「いや……別に。最初から思っていたことだったしな」

そうは言う金太郎の顔は明らかに動揺しているものだった。鬼丸は少し考えてから、その口を開いた。

「どのような経緯で彼女がここにいるのかは分かりませんが、ここ坂田家にはどうもきな臭い部分があります。熊谷楓の偽物、魔の蔓延り、稽古場以外で見かけない人の姿。ですからここは一旦この家を出て」

「悪い、鬼丸。ちょっと黙ってくれないか」

自分の口から出た言葉は思ったより強い言葉だった。鬼丸は唇を噛み締めてこちらを見ている。いかにも悲しそうな目で。金太郎はその目を見て、ハツとなった。

何で鬼丸がそんな目をしなくちゃいけないんだ……？

鬼丸は立ち上がって部屋から出ようとした時に、金太郎を見て言った。

「……キンタ。前にも言いましたが、私たちは貴方のために動きまします。貴方が知りたいならば鍵となり、知りたくないなら蓋を閉めます。全ては、貴方次第です。しかし……真実から逃げるということは、貴方はこれから何にも向き合うことは出来なくなりますよ」

そう言って鬼丸はこの部屋から出て行った。後に残されたのは金太郎のみ。金太郎はその顔を歪ませて机を思いっきり叩いた。

「畜生……どうすりゃいいんだよ……」

その問いの答えを教えてくれる人はここにはいなかった。

「く……」

部屋から出て行った鬼丸も顔を歪ませていた。まさか金太郎からあんな風に言われるとは思ってなかった。そしてそれ以上に自分がそのことでこんなに動揺するとは思っていなかった。

鬼丸の気持ちが沈みきって行く時、前を見ていなかったせいか人とぶつかった。鬼丸はすぐさま顔を作って対応しようとした。

「おっと失礼。少し考え事を」

「御客人。このような時間に、何用ですかね？」

鬼丸の表情が一転、先程まで作っていた顔が壊れて驚きの表情になる。その人物は鬼丸自身が気になると言っていた坂田家当主にして、金太郎の父親。

「坂田、公時……」

「あまりウロウロされては困りますな。貴方は金太郎の友人というから彼に会いたいという気持ちもあるでしょうが、彼は坂田直系。彼にあまりにも親しくすると、威厳が失せる」

鬼丸は、先程の動揺もあつてか彼の雰囲気呑まれていた。なるほど、この威圧感が魔が恐れる退魔師の当主の威厳なのか……。彼は少しでも笑うと空を見上げた。今夜は陰りもない、光り輝く満月だった。

「今夜の月は美しい。怪しいほどにな……。こんな夜には、魔が蔓延りそうだ。そうは思いませんか？」

「……同感です。月は魔を狂わせるといいますからね」

ようやく絞り出せた鬼丸の反応に満足したのか、公時は微笑した。その笑い方が、なんともいえぬ気味悪さを醸し出していた。

「それでは、御客人。ごゆるりと……」

軽く会釈をして鬼丸を通り過ぎる。そして長い長い廊下の闇へと消えていった……。

第四章・第七話：俺はこいつが許せない（前書き）

自分は今日で夏休みが終わりです……早かったなあ（泣）



#### 第四章・第七話：俺はこいつが許せない

「キンタさん……立ち直れると思いますか？」

かぐやは誰に問いかけるつもりもなく、そう呟いた。

鬼丸から金太郎の様子を聞いたウラシマとかぐやは驚いていた。いつも口うるさいが結局は自分たちに協力してくれる金太郎が、鬼丸の言うことをすぐに信じなかったからだ。信じることを第一とする金太郎らしくなかった。

そして鬼丸はというと、この部屋に戻ってきてから一言も言葉を発していない。深く目を閉じ瞑想をしている。ウラシマもいつものように携帯を操作しているが、やはりどこか気乗りしないのか、携帯を閉じてかぐやの問いに答えることにした。

「どうだろうね」。キンちゃんだって人間なんだ。もしかしたら楓の方を選ぶかもね」

「そんな……じゃあ、鬼丸さんのやっていることはどうなるんですか！ 今の仲間より過去の思い出をとるなんて酷過ぎます！」

「じゃあかぐやちゃん。もし君がキンちゃんの立場で、偽物の鬼丸君が現れたらどうするよ？」

「そ、それは……」

かぐやは言葉に詰まる。

「そういうことだよ。誰も自分を厳しく追い立てようとするストイックな奴はいないし、それは全種族共通のこと。だったらその人の判断に任せるしかないのさ」

「その通りですね、ウラシマ。私がどうかしていました」

「鬼丸君？」

今まで一言も発しなかった鬼丸がようやく動き出した。ずっと動かなかったせいで重くなったその体を慣らすようにゆっくりと立ち上がった。

そしてその顔は多少はましになったものの、いまだどんよりと沈んでいた。

「何故キンタにあんな風に言ってしまったのでしょうか……自分でも分かりません。全てを決めるのはキンタのはずなのに、私は余計な口出しをしてしまった……。私には、言う権利などないのに……」  
「まつ、いいんじゃないの。それくらい。それを聞いてキンちゃん  
がどんな風に動くのか、見物だね。ゆっくり寝て待とうじゃないか」  
「貴方という人は……」

再び寝転がったウラシマを見てかぐやは眉をひそめる。  
その様子を見て、鬼丸は少しだけ笑った。

「すみません、ウラシマ。私にはゆっくり待つ時間はないんです。  
後一つだけ……調べなくちゃいけない事がある……。そろそろ出ます」

「ちょっと待って、鬼丸君。この本たちはどうするんだい？ 折角  
蓮華さんが持ってきてくれたのに」

「それなら昨日全て覚えましたよ」

「……………」

ウラシマは後ろを見た。鬼ヶ島にいたときに自分が一日にこなしていた仕事の量と同じくらいの本の山だ。あの量を一日で覚えただと……？

ウラシマはしばらくの間、固まっていた。

「じゃあ、ちょっと行ってき  
」  
鬼丸さん！」

かぐやが心配そうな目で鬼丸を見る。いけない。かぐやはこんな表情をしてはいけない。  
彼女はいつも笑っているべきなのだ。

「大丈夫です、かぐや。私は絶対帰ってきますし、金太郎だって絶対帰ってきます。私は、私たちの日常を壊させたりなんかさせません」

「鬼丸さん……」

「それじゃあ、かぐや。何か危なくなったらウラシマを身代わりにして逃げてくださいね」

そう言い残して鬼丸は屋敷のどこかに去っていった。かぐやがしばらくその去っていった方向を眺めていると不意にウラシマがその口を開いた。

「……かぐやちゃん。前言を撤回するよ。ストイックな奴は目の前にいたわ」

「鬼丸さんのことですか？」

「うん。あれはもしかしたら自分に一番厳しい種類なのかもね。誰からも頼られる能力を持ちながら、誰にも頼ることなく自分の内情は打ち明けることはない。どんどん彼の秘密は溜まっていった、自分でも分からなくなっていく……。ホントに怖い奴だよ」

「……鬼丸さんは怖くありません」

「そうかな？ かぐやちゃんだって鬼丸君のことは分からないくせに。……今回のことだってそうだ。素直にキンちゃんに“帰りましょう”とでも言えば良かったのに、自分のことが言えないからこういう結果になるんだ。まあ、かわいく言えば“ツンデレ”なのか

ね」

かぐやは大真面目な顔で、心配そうに呟いた。

「私ツンツンされたことないですけど……」

「……安心してよ。鬼丸君について一つだけ分かることは、ツンなんてする暇がないくらいかぐやちゃんにデレデレだったことさ」

「どうすりゃいいんだよ……俺は」

そのころ一方、金太郎は自室で寝転がり、考えていた。内容はもちろん、楓と鬼丸のことだ。

「鬼丸たちを信じるって決めた……。決めただけ……」

鬼丸が渡してくれたレポートを隅々まで読み返した。自分の過去から楓の経歴まで、全てが書かれているそれは並大抵の努力ではなかっただろう。しかも竜宮城を使ってまで調べてくれたとなれば、信頼性も十分足りうる。

ここに書かれている通りあの楓は“偽物”なのだろう。しかし……

貴方は私の友達。

「っ……」

金太郎の顔が苦しそうに歪んだ。

楓は自分の初めての友達であり、そして自分の初恋の相手でもある。もし彼女が生きていれば、と思うことは今まで何度もあったことだ。その羨望が今、実現している。例え偽物でも彼女は今日の前で生き

ている。

しかし、彼女を受け入れることは、鬼丸たちを裏切るということと同義。羨望か、現実か、金太郎は何日も思い悩んでいた。

「もう、いい……。何も考えたくない……。今日は、眠ろう……」

破裂寸前の金太郎は思考をやめた。そしてまた、ここ何日が続いたように深い眠りにつこうとした、その時だった。

アンタ、逃げてんじゃないわよ！

「っ！？ 楓？」

金太郎は跳び起きて、周りをキョロキョロと見渡す。

確かに今のは楓の声だった。しかも、その声は自分の記憶にしっかりと刻み込まれている彼女の本当の声……。

「己が、道を、突き進め……」

金太郎は時計を見る。現在午後4時37分。日が少しだけ傾きかけていた。

彼の体は自然と動き出していた。

「ん？ キンタ、どこに？」

「悪い、兄さん！ また後で！」

廊下を歩いていた金剛を突き飛ばして、長い廊下を駆けていく。何故自分は動こうとしなかったのだろうか。

どんなに稽古が厳しくても、どんなに天気が悪くとも、自分はあの場所には必ず行かなければならなかった。それは何が起ころうとも、その約束は変わらない。彼女が待っている限り。

「あら、金太郎ちゃん、出かけるのなら御夕飯までには帰ってきてね」

「分かっているよ、姉さん！」

坂田家の門を抜け、山を下り、川を渡り、岩を越え向かう先はただ一つ。楓と初めて出会ったあの場所に。

「……はっ……ははっ……そういうことか」

楓と初めて会ったあの場所、そこには記憶の中にはない、まだ成熟しきってない木が立っていた。自分が植えたのか、彼女が植えたのとは分からないが、夕日に照らされ佇むその姿を見て、金太郎はようやく悟った。

「お前はずっと待っていてくれたんだな……ごめんな、楓」

金太郎は木に寄りかかる。凜として、ここに立っている様は紛れもない彼女。

そして、今来たこの女は、偽物だ。

「……久しぶり、か？　なあ、魔」

「……」

「お前と会ったのはあの時……最悪が始まった日一回きりだったな」

楓は訳の分からない、と言うような顔をしている。かすかに舌打ちが聞こえた。

「何言っているの？　私は熊谷楓よ。魔なわけがないじゃない」

「そっだよ。お前は楓だよ。だけど違う。お前は、楓が必死に殺し

続けていた、あの魔……楓の中に潜んで彼女を苦しめていた奴、そうだろ？」

「……………」  
「楓の言ってた通りだ。早まるんじゃなくて遅すぎたんだ……。彼女はお前に気づいた。でもそのころにはお前は自我を持ち、彼女とは違う生き物になっていた。そして彼女が死んだ時、お前が彼女の体を奪ったんだ」

金太郎は木に手を当てる。その木からは確かに命の脈動が感じられた。

「楓はここにいて……。ここにいて、ずっと俺を待っていてくれる」

金太郎は言い終わると、そこに立っている楓を見た。その目は酷く冷たく、彼女の灰色の髪は荒んで見えた。

「それで、私を偽物と疑う貴方は私を殺すって言うの？」

「…………俺はもう誰も死ぬところなんか見たくない」

それは金太郎の信条の一つだった。誰も殺さない。それは楓が死ぬ時彼女と約束したものであり、自分を構成する一つの定義。

しかし金太郎が思い出すのは、そんなちっぽけな信念ではなく、楓との思い出であった。

私の名前は熊谷楓。

「見たくない……………」

それじゃあ、また明日ね。キンタ。

「見たくない……………」

私はアンタの金髪、好きよ

「見たくない……………」

「アンタの体って温かいのね……。」

「もう楓が苦しんでいるところなんか見たくない!」

金太郎は紫電を振り下ろす。その雷光の如くの速さに反応することができず、魔の右腕がなくなった。遅れてやってくる激痛に、魔は声にならない悲鳴を上げた。

「……っ!」

「俺は楓と約束した。もう誰かが死ぬところなんか見たくない。だから強くなるって。……でも、ごめんな。俺は今、その約束を破る」

金太郎はゆっくりと紫電を引き戻して、魔に向けた。その目は真っ直ぐに魔を捉えていた。

「俺は、楓を犯したこいつが許せない」

「だから、殺す。」

金太郎は紫電を構える。何回も、何年もこの場所で楓とチャンバラごっこをしたのと同じように。

しかし今は遊びじゃない。本気だ。自分と楓の尊厳をかけて金太郎は魔に挑む。楓が初めて魔に反転した時、動けなかった彼とは違うのだ。あの時より遥かに大きく、そして強くなった彼がそこにいた。木が少しだけ、風もないのに揺れ動いた気がした。

「……バカだね。アンタ。本当にバカだよ」

「何?」

「この世界には知らない方がいいことなんてたくさんあるのに。どうしてそれを知ろうとするのよ? アンタは楓と夢に溺れて一生遊んでいれば良かったのに。どうして、ここに来たんだい?」

「……俺の、仲間のお陰だ。仲間がいたから俺はここに来られたん



だ」

ウラシマ、かぐや、そして鬼丸。この三人がいなければ今ここに自分は立つてはいなかった。金太郎は彼らに感謝しているし、同時に今まで無下に扱ったことを申し訳なく思った。帰ったら桃の木で何か奢ってやつてもいいかもしれない。しかしそれだとまた煩くなるな、と金太郎の表情に笑みがこぼれた。魔は本当に煩わしそうに金太郎を鼻で笑った。

「はっ！ くだらない。そんなに楓と会いたいんだったら……さつさと逝っちゃいなよ！」

楓の手から“何か”が放たれる。その白い衝撃が金太郎を襲った。

突如鳴り響いた爆発音でウラシマは跳び起きた。

「何だ！？ 今の爆発音！？」

最近携帯ばかり操作していたせいか、ウラシマはだいぶゲーム脳になっっておりそしてだいぶ混乱しているようだった。

「宇宙人の侵略か？ 火星人？ 金星人？ というかどうしてこんな田舎を攻めるんだよ！？」

「落ち着いてください。宇宙人なら目の前にいますから」

かぐやは月人である。あつ、そうか、とウラシマは落ち着いた。

「……どうやら爆発は下の方で起こったようです。おそらく、キン

夕さんが関係あるかと」

「ふん」

ウラシマはゆっくりと立ち上がる。

「だったら行かなきゃね。キンちゃんが危険な目にあっているなら、助けに行かなくちゃ」

「……仕方ないですね。じゃあ行きましょうか」

かぐやも立ち上がって部屋の障子をあげた。二人がいた客間は庭に面しており、すぐに外に出ることができた。

すぐさまここから抜け出して金太郎を助けに行こうとしたが、ウラシマはどこか違和感を感じていた。

（何だ、ここ……まるで人がいないじゃないか）

「あつ、鬼丸さんは？ 鬼丸さんはどこですか!？」

鬼丸は出かけて行ったきり戻ってきていない。まさか鬼丸が坂田の人間に捕まるようなドジはしないと思うが、彼の顔を見ていないだけでかぐやには不安が訪れる。

右往左往している彼女に、一度ため息をついてからウラシマは彼女に言った。

「かぐやちゃん、落ち着いて。鬼丸君のことだ。何も考えなしに動くような軽率な奴じゃない。何か考えがあるんだ。今は彼のことを置いておこうよ」

「でも、鬼丸さんは……」

「大丈夫。鬼丸君はかぐやちゃんに何て言ったんだい？」

私は必ず帰ってきます。

その言葉を思い出しかぐやの顔に平常が戻る。鬼丸が一人で行動するのはいつものこと。ならば自分たちは自分たちのすべきことをやらなくてはいけないのだ。

「取り敢えず、爆発のところに行こうか。キンちゃんを助けに行つて、それから」

「ようやく見つけたぞ。魔術師」

銃声。それも一発や二発の量ではない。まるで銃撃戦でもやっているかのような銃声音が辺りに鳴り響いた。ウラシマとかぐやはとっさに身を翻し、岩陰に隠れた。雨のような銃弾が止まると、二人は恐る恐る顔を覗かせた。

そこには金太郎の兄、坂田金剛が立っていた。

「あつ、キンタさんのお兄さん」

「おい、お前！ いきなり何すんだよ！ 僕たちはゲストだぞ。VIPだぞ。そこらへん分かってんのか!？」

「黙れ、魔術師。お前が今回の首謀者だつてことは分かっているのだぞ」

時が止まった。はて、坂田家には相手を凍結させるような魔術でもあるのだろうか？

「……えっ?」

「……今何と?」

「だからお前らが今回の事件の首謀者だろう?」

『はあああああ!?!』

ようやく動き出した二人は今度は叫びだした。

「何で僕らがそんな犯人になるんだよ？ 何の根拠があつて？」

「とぼけるな！ お前らが怪しげな光で屋敷全体を監視したり、外部と連絡を取っていたことはすでにばれている！ よくも金太郎を騙し、この家に入り込んだな、魔術師め！」

「あの時の電波障害って君のせいだったのか！？」

「勘が鋭いだけキンタさんより厄介ですね……」

金剛は当然聞く耳を持たない。彼はその名の通り、金剛の如く意思は堅く、そして頑固なのだ。一つ決めたら捻じ曲げない、それが彼の信条であつた。

「我が坂田家の秩序を乱す者は即刻に排除する。退魔師・坂田金剛、参る！」

『嘘おおおお！』

#### 第四章・第八話：別に君ぐらい僕一人で倒せるんだからね

坂田金剛はかなり変わった退魔師である。

この国の最高峰、御門みかどに次ぐ退魔の家系、坂田家。伝統を重んじ守護するはずのその名家の次期当主としては不適切にも思えるほど、彼の戦い方は特異であった。

その主な戦い方とは“銃”。

最近発達しつつある科学によって生み出された拳銃などの火器。金剛はそれらを積極的に採用し、自分の魔力と組み合わせで戦うと言った前例にない退魔師である。

もちろん批判もある。実の父からは程々にしろ、と言われたこともあるし弟からは変な目で見られることもある。身内ですらそうなのだから、外部の人間からの評価は賛否両論、特に頑固な年寄りからの非難は激しい。

しかしそれを打ち消すような強さを持ち合わせ若い退魔師からカリスマ的人気を誇る彼はここ御伽の国だけにとどまらず、全世界に一目置かれる存在であった。

そしてそんな大物に追われていることなど知る由もないまま、かくやとウラシマは逃げるばかりであった。

「待て、魔術師！ これ以上逃げるのをやめ、早々に降伏しろ！

今なら罪も軽くなるぞ！」

「黙れ、この軍事オタク！ 待てと言われて誰が待つか！」

「というかあの人、どんなけ武器を持っているんですか!？」

金剛は追いかけながら、正確に狙いを定めて恐ろしい数の銃弾を放っている。確かに今立ち止まったら命の保証はないだろう。現に、ウラシマの麦わら帽子は蜂の巣に、かぐやのの着物もところどころ

破れていた。

しかし二人はどうすることも出来ず、延々と屋敷の周りで鬼ごっこを続けていた。

「な、何か策はないの、かぐやちゃん!？」

「このまま逃げ惑つてもやられるだけです。月光を使って出来る限り遠い場所に飛びますからそこからキンタさんと合流しましょう。キンタさんならこの軍事オタクを説得できるはずですよ!」

「分かった! 出来るだけ時間を作るよ!」

かぐやは蓬莱を取り出し、ウラシマは金剛と向き合う。そして二人は同時に詠唱した。

「月光・望月!」

「テトラ、四重結合!」

「むっ!?!」

七つの光が集まり、一つの球体が二人を囲む。そして金剛の周りにはウラシマの十八番とも言える四つの水球が彼を取り囲んだ。

金太郎と鬼丸、この二人を苦しめたこの水球、しかしそんなことで止まるような今号ではなかった。金剛が取りだしたのはアサルトライフル、M16A4。海軍の主力火器として用いられるそれを二つ構え、乱射した。

「この水球、邪魔だあああああ!?!」

「マジかよ!?!」

「……大丈夫。敵の注意がない今なら飛べるはずですよ。月光・新月!」

「させるかあああああ!?!」

金剛はM16を投げ捨てると、どこからともなく黒い筒を取り出す。それは対人戦用には決して用いられないような火力を持つ兵器。

「ロ、ロケットランチャー!?」

「ッ! 逃げてください、ウラシマ!」

「Fire!」

金剛の発射と同時に、かぐやは新月を解除する。しかしこんな短い距離でロケットランチャーをかわせるわけもない。直撃は免れても着弾の時の衝撃で、かぐやは後方に吹っ飛ばされた。辺りは土煙が立ち籠り、ウラシマの様子も分からなかった。

「けほっ……だ、大丈夫ですか、ウラシマ?」

「他人の心配をするよりも自分の心配をしたらどうだ?」

額に冷たいものが当たる。金剛はリボルバーを構え、いつでも始末できるように構えていた。流石のかぐやも背中にも冷たいものが流れた。

「降伏しろ。今ならお前たちを条件付きで解放してやる」

「……その条件とは?」

「金太郎に今後一切近づくな。あいつほど優秀な才能をこのまま埋もれさせるわけにはいかん。そのために、俺があいつを鍛える。故にお前らのような奴はもう近づくな、ということだ」

金剛の言葉はあくまで冷酷で、金太郎と喋っている時とは比べ物にならないほど無感情だった。これが退魔師の血の繋がりと改めて思い知らされる。

だが、今のかぐやの思考は別のところに飛んでいた。

私は、私たちの日常を壊させたりなんかさせません。

「…………ふっ」

「む？ 何を笑っている？」

鬼丸は確かに日常を壊させない、と言った。鬼丸は日常を大切にしている。ならば、妻である自分がそのことを諦めて何になるというのだろうか？ 鬼丸の言うことは、絶対なのだ。鬼丸のことを考えると、自然とかぐやの顔は笑っていた。

「はっ！ 誰に口を利いているのですか、この愚民が。自分の身分をわきまえなさい。私の名前は四方院かぐや、この穢れた地上に降り立つ最後の天人ですよ。貴方の方が私の偉大さにひれ伏しなさい！」

「…………交渉は決裂。ならば取る手段は一つ、か」

金剛がリボルバーを回転させる。

「…………悪いな、姫様。俺は良い意味でも悪い意味でも男女平等が主義なんだ。故に、死ぬ」  
「間欠泉！」

かぐやと金剛の間から熱水が湧き出る。その衝撃で金剛の銃は弾き飛ばされ、その熱で右手がマヒした。金剛は声のした方向に銃を向けた。

かぐやは知っていた。こんな大掛かりで、派手なことが出来る魔術師など一人しかいない。あのいつもニヤニヤして麦わら帽子の少年の姿をしている、オッサンだ。



「だめじゃないか、かぐやちゃん。お姫様が戦前に立つちゃいけないよ。もしかぐやちゃんに傷でも付いたら殺されるのは僕の方なんだから」

「ウラシマ！」

土煙から現れた彼の姿は少々違っていた。ボロボロの短パンからオーダーメイドしたスーツに、金剛と鬼ごっこをしているときに失くしたその妻わら帽子もちゃんとかぶっていた。

いつの間に着替えたのだろう、という疑問は残るがそれは敢えてスルーである。

なぜなら彼はいつもと同じようにニヤニヤしていたからである。

「くっ！ まだ生きていたか！」

「おお、おお、甘い、甘い。そんな単調な攻撃、僕には当たらないよ。じゃあ、お姫様は返してもらおうかな」

ウラシマの指が鳴らされると同時に、3つの水球が金剛に襲いかかる。金剛の右手は現在は痺れて使えない。直撃を避けるために後退したその隙に、ウラシマはかぐやの前に立った。

「さて、お姫様。君には戦線離脱してもらおうかな？」

「なっ！？ どういうことですか？」

「だって二人であれを倒しても何の意味もないんだもん。僕たちの目的はこの戦いを終わらせること。だから倒さなくてもいいんだよ。幸いにもかぐやちゃんならすぐにキンちゃんを探せるし、僕が囷になるからそのうちに探しに行ってくれよ」

「でもそれだとウラシマが……」

ウラシマはかぐやの肩に手を置き、真面目な顔で重々しく口を開いた。

「かぐやちゃん……もし君が傷ついたときに、もつと傷つくのは僕  
と言つことを察してくれよ……」

「あつ……」

かぐやの脳裏に何故か黒と赤の情景がよぎった。しかもその中央に  
はウラシマが倒れていて、そして鬼丸は笑っていた。怖い、笑顔だ  
った。

「な、なるほど……で、では行つてきます。ご武運を」

「は……い。ありがとねん」

かぐやの体が黒い球体に囲まれ、消えていく。ウラシマはその光景  
を見送ると、ニヤニヤと振り返った。どうやら相手の右手はもう完  
治したらしかった。

「優しいのだな。女の子を守るが故に、自分を犠牲にするとは。見  
た目以上の紳士と見える」

「……か、勘違いしないでよね。別にかぐやちゃんのためにやった  
わけじゃないんだから！」

「ツンデレ？」

「別に君ぐらい僕一人でも倒せるんだからね」

その言葉とともに、周りの空気が凍った。主に金剛の周りで。  
彼のプライドもまた、かなり強いものだった。

「……面白い。この坂田金剛を一人で倒す気か？」

「君の全力なんてたかが知れてるね」

「いいだろう。そこまで言つと言つならば、全力でお相手いたそう。

……参る」

「はっ、来いよ。軍事オタク」

「ふん！ 消え失せる！」

金剛は再びアサルトライフルを構える。今度はM16A4とは違う型、AK-47。先程投げ捨てたものを含めるとこれで四丁目。まさに動く武器庫と言える戦い方だった。

「甘い甘い。僕に“かがく”で挑もうなんて百年早い。まっ、僕の専門は“化学”の方なんですけど」

その弾幕をウラシマは軽々しくかわす。飛んだり跳ねたり……まるでピエロのような動きでかわし、そして着地すると同時に少し趣の違う詠唱をした。

「ゼロ、氷結合」

ウラシマの魔術は主に水、しかし今地面から現れたのは巨大なつらら。まるで氷山のようなそれは、地面から次々と現れ金剛は追い詰めていった。

「鬱陶しい……。めんどくさいから消え失せる！」

マシンガンの次に現れたのは火炎放射器。迫りくる氷柱をすさまじい火力で溶かし始める。

しかしここで予想外の出来事が起きた。

「なっ、霧だと……」

「水には三つの形態がある」

どこからかウラシマの声が聞こえる。魔術の力だろうか、どこから声が発せられているのか分からないような仕組みになっていた。

「すなわち気体の水蒸気、液体の水、固体の氷だ。僕の専門は水じやないんだけどね、それぐらい十分に操れる。さて、君は今僕がどこにいるか分かるかな？」

「……索敵開始」

「リーダー!？」

そう、金剛の力（兵器）の前では敵が視認できないなど関係ない。熱、呼吸、気配、その全てを読み取り、正確に敵に攻撃を加える。敵は、すぐそばにいる……。

「そこか!」

金剛がサバイバルナイフを振るう先にはちょうどウラシマの腕があった。この距離ではかわしきれない。自分に触るよりもまず刃物が彼の腕を叩き切る。金剛はやった、と確信した。

「残念でした。僕いやらしい手つきには定評があるんだ」

「なっ……!？」

満員電車で痴漢をする男のように、またはベテランのスリ師のような手つきで金剛のナイフをかわし、彼の体に触った。

右腕に触られただけで何の外傷もない。しかしウラシマのその顔は満足げに、一層ニヤニヤしながら後退した。

「……?」

「何をやったか分からないって顔だね。じゃあ見せてあげよう。…君の水を圧縮する」

突如金剛の右腕に激痛が走る。まるで筋肉自体を鷲掴みされているような、通常の銭湯ではありえない感覚。あまりの激痛に、金剛はサバイバルナイフを地に落とした。

「くっ……お前、何をやった？」

「人間の体の60〜70パーセントは水だ。君の体に触れた時、僕は君の水を把握した。それを操ってやれば、君の筋肉を圧迫することなんて造作でもない事なんだよ。ほら、痛くて銃も持てないだろ？」

「……確かにな。しかし、俺はここであきらめるわけにはいかんだよ」

金剛の右腕はダランと、力なくぶら下がっている。そんな腕になってもまだホルダーを握ろうとする彼の姿に、少しだけ畏怖を覚えた。

「弟の仲間と言うことは、弟が認めた相手と言うわけだ。その相手に兄が負けるわけにはいかんからな」

「どちらかと言うと僕が認めただけだね……」

「まだ俺はあいつの兄でいたいんだ」

さて、忘れてはいけないのが金剛は坂田の人間であるということだ。坂田の力は雷、そして今金剛が取りだしたのはモーターなどの動力源でボルトなどに連結したチェーンを駆動させて連射する、航空機用兵器。

「30mm M230」

「そ、それってヘリとかに積まれているチェーンガンじゃ……」



ウラシマは不満げに口を尖らせた。

「純粋な兵器としてのレールガンだ。磁力を利用して弾丸を超高速で飛ばす。極めて破壊力の高い、殺戮兵器だ」

「でもそれってまだこの世界の科学では完成されてないんじゃない？」

「俺が作った」

「オタクスゲ！」

ついにオタクは科学を越えたいらしい。

そして金剛はまたどこからともなく今までの兵器より少し近未来的な兵器を取りだした。

「しかしまだ試作品の段階だ。一発撃つとしばらく熱暴走で使えなくなるし、チャージにも時間がかかる。というわけで、俺はこの戦いの始めからレールガンをチャージしていた」

「っ！？」

「現在92パーセント。お前なら、100パーセントの威力を想像できるよな？」

金剛の口元が歪む。その笑みにウラシマは恐怖を感じた。

あれは、やばい……。

ウラシマの口からは自然と詠唱が唱えられていた。今玉手箱がない故にウラシマの術は完全ではない。しかし、そんなことを言っている暇ではない。とにかくあの攻撃をどうにかしないと自分はおぼろげだ。

「我に宿りしは水、其れ即ち自然が与えし恵み」

「94パーセント……」

「我に宿りしは水、其れ即ち自然が行う破壊」

「98パーセント……」

「我に宿りしは水、其れ即ち我が魂！」

「100パーセント」

「重合・流々螺旋！」

「Spark！」

金剛の砲身から超高速で弾丸が射出される。それは今のウラシマの全力とぶつかり合つと、均衡する余地すら与えることなく打ち破つた。

「なっ……バカな……」

「我が意志は金剛の如く、堅く強きもの也……お別れだ、浦島竜胆」

音速を遙かに超える弾丸、その衝撃にウラシマは呑みこまれていった。



#### 第四章・第九話：異常事態、発生！

ウラシマは顔に幾度と当たる痛みでようやく目が覚めた。

「　　　　　つと！　ここは、どこだ？」

「ようやく気付きましたか。ウラシマ」

飛び起きたウラシマの目に入ってきたのはかぐやの呆れた顔であった。

顔が痛い。なるほど、彼女に何度も顔を叩かれたのは明らかであった。というより何故かぐやがここにいるか分からなかった。

「かぐやちゃん……どうしてここに？」

「……月光で私が貴方を助けたんです。今は屋敷の塀の上。

　　　　　というかそんなことより！」

かぐやが不安定な塀の上に立ち上がる。どこか怒っているように見えた。

「何でこんな無茶をしたんですか！？　玉手箱を持ってない貴方でどうやったらあの全身兵器に勝てるというのですか？　もし貴方が死んだら悲しむのは誰かということを考えてください」

「まさか僕のことを心配して……」

「……勘違いしないでよね。別に貴方のためにやったんじゃないんだから。ただ乙姫が悲しむだけですよ」

顔がマジだった。どうやら照れ隠しなどではなく、本当にそう思っているらしかった。

「ふん！ まったく、困った人ですよ。何が僕一人で十分なんだから、ですか？ 全然大丈夫じゃないではないですか。貴方はいつも私たちの後ろでニヤニヤしているんです。決して前に出ることはない。それが貴方の日常でしょう」

かぐやの言葉にハツとなった。

確かにそうだ。自分は決して前に出るような人間ではなく、いつも後ろで何かをやっていた。今回のように表だって戦う機会など滅多にない。何を焦っているのか。

そう思うと、ウラシマの頭は妙にスッキリとした。自分の奥から笑いがこみあげてきた。

「……そうだったね。そういえばそうだったわ。アハハ、忘れてたよ」

「まったく……。で、どうしますか？ 今なら楽に逃げれると思いますけど」

このまま塀から飛び下りれば、かぐやの言っどおり楽に逃げることができる。爆破の方向へ行けば金太郎に会うことも出来るだろう。しかし、ウラシマはその選択を取りたくはなかった。あの全身武装の軍事オタクに負けっぱなしでは胸糞悪い。どうして一矢報いたかった。

「いや、あいつのことだ。すぐにリーダーやら何やら使って捜し出すだろうよ。見た目粘着質っぱいから」

これでは自分の方が粘着質だ、とウラシマは苦笑した。

「しかし戦うと言っても今の私たちに到底勝てるとは思いませんが……」

「大丈夫。化学で不十分なら、別の何かを加えればいいんだから」  
「その何かとは？」

「  
数学」

その時のウラシマの顔は、かぐやの見た中で最高のにやけだった。

金剛はあの月の姫が戻ってきていることを知っていた。レーダーによる探知は彼らの居場所を正確に感知し、いつでも戦えるよう装備を備えていた。

もし逃げるようなことがあれば、リモートミサイルをぶっ放してやろうと思っていたがそれは杞憂に終わったようだった。

「来たか……」

その言葉と同時に金剛の前に二つの影が立ちふさがる。それは言うまでもなく、かぐやとウラシマだった。

「まさかまだ生きているとはな。どうやら少しお前を見くびっていたようだ、浦島竜胆」

「やあ、金剛君。また会ったね。第二ラウンドを始めようじゃないか。今度は負けないよ」

「レールガンが使えない貴方なんて、怖くありませんよ」  
「ふん……」

金剛は鼻で笑う。こいつらはまだ、自分の底とこのを見ていないのだ。なのに何故自分に勝てると言うのか。

嘲りを含んだ笑みを浮かべて、金剛の体の至る所から兵器が姿を現した。

「これでもか？」

「……はっ！ 流石だね。金剛君。やっぱり君は強いよ。でもね、僕たちは負けない。かぐやちゃん、“アレ”をやるよ」

「はい！」

「カイ、幾何学結合！」

「月光・七夜！」

七つの光と幾多の水球、それらが金剛の周りに現れる。その幻想的な光景をぶち壊すのはもちろん、金剛の破壊的兵器だった。

「無駄だ。俺の武装の前に、立ちはだかるものなどない！」

「いいよ。だって立ちはだかる気もないから。H27度、入射」

「はい！」

ウラシマの掛け声とともに、かぐやは月光を起動させる。しかしそれから発せられた光はあさっての方向に向かい、どう考えても金剛にあたる弾道ではない。

金剛が無視して走り出した時、その光は金剛の目の前の地面にあたった。

（曲がった！？）

「B35度、入射」

再び光が発射される。自分の後ろに向かうようなその光は、自分の目の前にあつた水球に当たると、その弾道を変え金剛に当たった。

「くっ……！？」

「I48度。T13度。K40度。G2度。V39度。E19度。

R35度。一斉入射！」

「はい！」

七つの光が放射される。本来一直線のはずの光が何故か曲がる。予測不可能なその弾道に訳も分からず、金剛に与えられた選択肢は逃げの一手だった。

「ぐっ……な、何が起きている!？」

「そんなに種明かしして欲しいかい、金剛くん？」

「なっ!？」

「モノ、単一結合」

ウラシマが自分と並走していることなど気づきもしなかった。当然彼の攻撃に反応することなど出来ず、金剛の腹に水球が直撃した。しかし金剛の思考を覆っているのは痛みではなく、分からない自分への叱咤と屈辱であった。

「まったく君は本当にダメだな、金剛君。一つのことにとらわれて全体が見えなくなっちゃいけないよ」

「ぐ……」

「まあ、そんな間抜けな金剛君のために種明かしをするとね、あれは案外簡単なんだ。ただ光を屈折させているだけなんだよ」

ウラシマはニヤニヤしながら言葉を続ける。

「塵気楼つてあるだろ。あれは空気の密度の差によって光が屈折されるんだ。だから地面が浮き上がって見えたり、逃げ水なんて現象が起きる。あれといっしょ。この水球の中には濃度の異なる部分が存在していて、それによって屈折させていただけなんだ。かぐやちゃんの力は“光”だからね。ちなみに屈折する角度なんかは僕が計算しているんだ。なかなか凄い“数学”でしょ」

「……なるほど、だがそれを敵に伝えていいのか？」  
「うん。だって今すぐ君を倒すし。かぐやちゃん」  
「了解！」

金剛の前に一っだけ水球が現れる。しかしその形はどこか歪で、嫌な予感を感じさせるには十分であった。そして、その予想は当たることとなる。

「水はレンズの役割を持つ……。集められた月光は、より一層美しい」

「七夜！」  
「な……」

かぐやの光が水球を通ると、その輝きがより一層強くなる。歪な形の水球が光を一点に集中させ、その光を強くしたのであった。集光、その光を全面に喰らった金剛はこの時初めて吹っ飛ばされた。辺りには土煙が舞っている。

「やりましたかね？」

「どうだろう……。でもだいぶ損傷は与えたから、しばらくは安心」

「畜生があああああ！！」

その怒声と共に漂っていた水球が全て打ち碎かれる。その光景に流石のウラシマも息をのんだ。月光によってボロボロになった体を引きずりながら、チェーングンを起動させたその男の姿、その男の眼には確かに狂気を孕んでいた。

「まだ俺は負けん！ 負けるわけにはいかない！ 弟の仲間などに絶対に！ まだ俺はあいつの兄でなくちゃいけないんだ！」

「……なるほど。それが君の理由か」

「レールガン、急速チャージ！ 奴らを撃ち滅ぼす力となれ！」

取り出したレールガンに自分の全力を込める。この武器はまだ試作品プロトタイプ、まだ完全に冷却しきっていないこの状態で撃てば、おそらく使えないものにならなくなるだろう。

しかしどうでもいい。目の前の敵を倒せばそれで……。

金剛はレールガンの引き金を引いた。

「 Spark! 」

金剛のレールガンは音速の三倍は優に超えている。つまり彼を中心とした半径約一キロが一秒間で到達する射程範囲なのだ。具体的に言うならばこの屋敷全体。この屋敷にいる時点で金剛の攻撃はかわすことなど出来ないのだ。

それは魔術師と同じこと。金剛の放ったレールガンに二人は呑みこまれていく。後に残ったのは金剛唯一人だけであった。

音もなく塵となった彼らを見て、呆然としていた金剛に笑いが込み上げてきた。

「は、はは……俺は勝った。俺が勝ったんだ！」

金剛の笑いが止まらない。本当に、笑いが止まらなかった。

「 誰が勝ったんですって? 」

「 ツー! ? 」

金剛はその声に驚く。その方を向くと、先程倒したはずのかぐやが立っていた。

「敵を倒したことがそんなに愉快ですか……。貴方も大概戦闘狂ですよね」

「な……。何故だ？ 何故生きている！？ お前たちはレールガンを確かに受けて……。かわせるわけもない。音速の三倍は軽く超えているんだぞ。なのに何故、何故だ……。」

「だからさつき言ったじゃん。塵気楼って」

今度はウラシマが前から現れた。

「君が見ている僕たちの姿は、僕たちに反射した光の像に過ぎない。かぐやちゃんの力は光、それで霧に僕たちの姿を映し出していたのさ。さつきから霧が出ていることに気づかなかったのかい？」

そういえば先程から霧がかかっていたことは知っていた。だが、それがまさか像を映し出すスクリーンになるとは予想持つかかった。ウラシマはニヤニヤ笑いだす。

「君は案外完璧主義者だ。君が銃を集めるのもそれらをコンプリートしたいがため、君がレールガンを作ったのもそれを空想の物に留めておくのが許せなかったため。でも、だから君は細かいことこだわって全体のことが見えないんだよ。そう、鬼丸君を見つめるかぐやちゃんのようにね」

「……。そういえば、彼女はどこに？」

「あそこ」

ウラシマは空を指さす。

そこには空に浮かんでいるかぐやの姿、そして二人を結ぶ架け橋のように続いている水球の列……。

「……は？」



「かぐやちゃんの必殺技、陽炎は範囲が広いだけに威力が分散しやすい。だから僕らの力で集光してやればどうなるかなって、言わなくても分かるよね。水球の数は26個。光は温度ん集光されていつて今概算しても……その威力はレーザーガンを超える」

「特製フルコースを召し上げれ」

かぐやの手に光が集まっていく。その光景をただ呆然に見ているほかなかった。

「月光・陽炎」

「オワタアアアアアア!!」

「さて、これどうしようかな？」

「取り敢えずウラシマの流々螺旋を喰らわせて……」

「かぐやちゃんはこの様を見てまだ攻撃を続けるのかい？」

この様、とは金剛の姿のことだった。服は焼かれ、自慢のコレクシヨンの一部は焦げている。もうこれ以上底がないような姿の金剛に、まだ追撃を喰らわそうとしているかぐやに少しばかり恐怖を覚えた。

「ああ、そつだ。蓮華さんを呼んでこよう。あの人だったら治療を

「その必要はない」

今まで倒れていた金剛がムクツと起き上がる。どうやらもう戦意はないようだった。ウラシマは胸を撫で下ろす。

「やあ、おはよう、金剛君。起きるの早かったね。ところで僕たち

が悪い魔法使いじゃないってことは信じてもらえたかな？」

「……………これでどうやって信じると言うのだ？」

確かに……………。見知らぬ人にポッコポッコにされて、その人はいいい人ですよー、というバカはいないはずだ。

とにかく信じる信じないは別として、今の金剛の思いを閉めるのは別の思いだった。

「ついに金太郎に負けた、か……………」

「ん？ どういうことですか？」

「……………俺は昔からあいつに嫉妬していたのだ」

金剛はしんみりと自分の胸の内を明かした。

「あいつは誰よりも才能に溢れていた。魔術師並みに雷を操る力、魔と対峙しても引けを取らない怪力……………。おそらくまだあいつが気が付いていない才能など山のようにあるだろう。そんなあいつを見て、俺は自分の力の弱さを嘆いていたのだ。俺にあるのは、オタク的な知識と、武器の扱いだけだ」

「オタクって自覚あつたんですね」

「それでもあいつは俺を兄として慕ってくれた。こんな力のない奴を兄として慕ってくれていたのだ。だから俺は誓った。せめてあいつが旅を終えるまではあいつには負けないと、強い兄としての姿を見せると。……………まさか、あいつと戦う前にその仲間に負けるとはな……………。本当に情けない……………」

項垂れる金剛を見て、ため息をついたのはウラシマであった。その肩に手を置くと、真面目な顔で金剛に語りかけた。

「バカだね、君は。キンちゃんだけが力だけ見て君を慕っていると思っ

ているのかい？ 君が彼の兄でいるのは、もっと違う何かのはずだ。力でも歳でもない、キンちゃんより優れている何かを見ているんだよ、彼は」

「ほんつと野性的な勘だけは備わってますもんね、キンタさんは」  
「……そうだったな。ありがとう」

この時初めてウラシマたちのことが分かった気がした。

金剛は正座をし、彼らと向き合う。

「浦島竜胆殿、四方院かぐや殿」

「はい、何でしょう？」

「何だい？」

「まだまだ未熟な弟で色々は無茶をするかもしれんがその時は、よろしく頼む」

金剛は頭を伏してウラシマとかぐやに頼んだ。彼らなら、金太郎と共に歩んでくれるはずだと……。

ウラシマはニカッと笑って親指を立てた。

「OK！」

「まあ、その願い、聞いておきますよ」

「……ありがとう。門は開けておこう。おそらく金太郎はここから少し下ったところにいるはずだ。おそらく楓と一緒に」

金剛の言葉は壁の破壊音に遮られた。三人はその音に驚き見ると、そこには黒い影が……。

長い爪、黒い体、明らかに人間とは思えないその体の持ち主の名前は……。

「魔！？ 何故こんなところに？」

異形の魔は声に言い表せれないような声を上げ威嚇する。それも一体や二体の話ではない。計八体の魔が三人を取り囲んだ。

「こんなときに魔か……。タイミング悪いね」

「……違う。あれはうちの退魔師だ」

「えっ……!?!」

かぐやが驚きの声を上げる。ウラシマも声には出さないが、その驚嘆は顔に現れていた。

「確かにあの顔見覚えがある……。最近熱心に訓練していると思っ  
て見ていた奴だから覚えている」

「でも人間が魔に変わるなんて……」

「はっ！ 父上！」

金剛の目つきが変わった。

「父上はどこにおられる!? この異常事態早く知らせなければ！」

「ちよ、ちよつと……」

「うおおおおおおお!! どけええええええ!!」

金剛は道行く魔を蹴散らし屋敷に向かう。なるほど、退魔師は家族のつながりが強いと聞いたがこれほどとは、とウラシマは呆然とその様を見ていた。

「まだまだ全然元気じゃん……」

「だからトドメを刺そうと言ったじゃないですか……」

「ていうか囲まれちゃった。かぐやちゃん、月光は？」

「……すみません。陽炎で全部使っちゃいました。もうヘトヘトで

す

ウラシマとかぐやは顔を見合わせる。辺りは魔ばかりで四面楚歌。自分たちには戦えるだけの力はない。となれば選択肢は一つだけであつた。かぐやとウラシマは同時に叫んだ。

『逃げろおおおおおお！！』

#### 第四章・第十話：Second Drive、始動

坂田家、という一族は言うまでもなく雷の力を宿す退魔の家系である。

純粹に雷を操り敵に攻撃したり、磁力を用いて鉄の弾を超高速で飛ばすといった変わり種もある、非常に応用が利く力である。

その力は分家にも引き継がれているのだが、ある一つの家系は残念ながらそれを受け継いではいない。遺伝上の支障があったのか、はたまた別の血が混じったことでその力が消えたか、理由は定かではないがその家系は雷の力を持ち合わせていない。

その名は熊谷。本家に最も近い血筋でありながら、一族から異端と恐れられる家系である。

「ぐ……思い出したぞ。楓の能力は俺たちと違ってたんだ……」

金太郎は紫電を杖にして瓦礫の中から起き上がった。もし直前に彼女の能力を思い出していなければどうなっていたか分からない。

熊谷楓の能力とは“熱”である。触れた物質全ての熱力を自由に弄れる、それが彼女の人間時代から能力だった。

そして彼女は、自分たちに限りなく近いものを生み出せる力も持ち合わせていた。

「ふふ……大人しく死ね」

彼女は笑う。不敵に笑いながら彼女は空を掴む。

すると彼女の手の周りにはバチバチと、音を立てながら電気を発している球状の何かが出来上がった。これが彼女の最大の武器にして、金太郎を吹っ飛ばした代物。

超電離体。  
フラスマ

物質には三つの形がある。すなわち、気体、液体、固体の三つだ。それらは温度によって変化し、例えば氷に熱を加えると水に、さらに気体を加えると水蒸気へと変化する。

そして気体にさらに熱を加えれば、物質の電子が分離し始め完全に電離した時、それは電気を帯びた物体となる。

それが超電離体<sup>プラズマ</sup>。気体、液体、固体のどれとも異なる第四の形態。そしてその高温を帯びるそれを、楓は自由に操ることができた。

「さあ、あのときみたいに遊びましょう、キンタ」

楓が四つのプラズマを放つ。超高速で放たれるそれは相手が視認していようがしてしまい関係ない。避けることなど不可能。金太郎も例外なく、その衝撃に呑みこまれた。

残ったのは倒された木々と、辺りを漂う土煙のみ。楓はふん、と息を吐いた。

「……何だ、つまんない。この程度で終わりかい？ 随分と弱くなつたもん」

「誰が弱くなつたって？」

土煙が晴れる。楓の目に真っ先に入ってきたのは、金色の球体であった。

「First Drive Create! だから言っただろ。俺はお前を許さないって。こんなところで倒れてなんかいられないんだよ」

「ふん、どうしても私を殺すんだ。……でもね、アンタは私を殺せない」

「やっつて見せるぞ」

金色の球体がシャボン玉のように弾けた。それと同時に金太郎は走り始める。

魔との距離はおよそ十数メートル、この間合いを金太郎はおおよそ二歩で縮めることができる。しかしそれでも、魔の方が早い。

「遅い！ やる気があるのかい！？」

気づいた時には後ろを取られていた。まるで人と獣の違い。魔を受け入れ人間より遙かに優れた命をもった楓にとって、金太郎の行動など止まっているように見える。

全身が刃物のように鋭いものに覆われている楓の体はそれだけで脅威となる。金太郎はそれを紙一重で、かわしていた。しかしこのままでは攻撃に転ずるなど、夢のまた夢だった。

それでも金太郎は負ける気がしない。

金太郎の紫電は宙を裂き、そのままの勢いで地面を抉る。その衝撃で土ぼこりが舞いあがった。

「……………」

これは怪我の功名か、はたまた作戦の内なのか。楓にはそれは分からなかったが、この程度の土ぼこりで自分を撒こうだなんて片腹痛い。視覚などに頼らずとも、彼女にはまだ金太郎を捉える事が出来るのだ。

彼の気配は……上だ。

「そこ！」

タイミングは完璧。空中からただ落ちる彼に、自分の攻撃を防ぐ手段などない。結果は遅すぎるし、避けることも出来ない。これは勝



った、と確信した。  
しかし金太郎の表情はまだ終わりを覚悟している顔ではなかった。  
しっかりと、楓だけを見ていた。

「！」

金太郎は左手で楓の攻撃を防ぐ。いや、犠牲にしたという方が正しいか。彼の目は自分の左手が無くなったのにも関わらず、まだ楓を捉え続けていた。

肉を切らせて骨を断つ。いつもの彼なら考えようもない作戦だ。しかしそれだけ、彼の執念が強いということか。

紫電が楓の頬を掠める。その傷から赤いものが流れ出ると同時に、金太郎は着地し瞬間から攻撃に転ずる。

いくら魔とは言えど元は人間の女、力だけなら金太郎は彼女に劣る要素はない。金太郎の紫電は楓の反応速度を遥かに上回っていた。楓の体が不意に持ち上がる。その隙を見逃すわけもない。

「これでトドメだ

！」

紫電をふり上げる。そこにあるのは殺意だけで、殺すという言葉しか残っていない金太郎は気づけなかった。楓の顔が命乞いするように怯えているわけでもなく、死を覚悟した表情でもないことを。

彼女の顔は歪んでいた。

「また、私を殺すの？ キンタ？」

「！」

ピタリと、まるでパソコンがフリーズしたように体が固まった……。金太郎の意に反してそれは動くことなく、まるで別人の体のようだった。

「何で……。どうして体が動かないんだ？」  
「それはアンタに罪の意識があるから」

ムクリと、当然のように起き上がる楓。ゆっくりと緩慢に起き上がる彼女を見てもまだ、金太郎は動けないでいた。

「アンタはいつもこう思っている。“楓を殺したのは自分だ”と。何年にも渡って脅迫的に植え付けられたそれは、今一時の感情だけで抗えるような、そんな軽いもんじゃないんだよ」

「そんな……。俺は楓を殺してなんか、いない……」

「いい加減認めろ、キンタ。楓を完全に殺したのは自分だということ」

魔が吐き捨てるように言い放つ。その表情は何故か元の楓と重なり、金太郎は息を呑んだ。

「彼女を犯していたのは確かに私だ。しかし楓がそんなことで死ぬような弱い人間じゃないことはキンタ、お前が一番よく知っているだろ。彼女は生きるつもりだった。しかしアンタというお人好しがいるせいで、彼女は追い込まれた。アンタと離れたくないという愛情と、離れてでも自分だけは生き延びるとい主義に挟まれてな。その二つを守ろうとして彼女は見事に……。パンクした」

「そんなの……。嘘だ……」

「嘘なもんか。楓の一番近くにいたのはこの私だぞ。そして今彼女の声を代弁しよう。“キンタ、貴方は私を殺した”と」

キンタ、貴方は私を……。

それは楓の最後の言葉だった。なるほど、あの時の言葉はそういう結末だったのか、と金太郎は妙に納得してしまった。と、同時に目

の前が真っ黒に染まっていく。ガクン、と膝が折れ地につき、空を仰ぐ。しかしその目は焦点が定まっておらず、まるで廃人のようだった。坂田金太郎は完全に停止した。

「声すら出ないか……。全く、何でこんな奴を好きになっちまったのかね……。じゃあ、キンタ。さよなら」

金太郎の顔に手を当てる。超至近距離から放たれたプラズマは、容赦なく金太郎に襲いかかった。

目を覚ますと、広がっていたのは青い空だった。辺りを見渡すと魔の姿がない。ということはどうやら違う場所に飛ばされたようだった。

……これが死後の世界か、とかそんな考えもよぎった。しかしそれはないだろう。なぜならこの景色は見覚えがあるから、それどころかここは坂田家の庭なのだから。

「うっ……うっ……」

どこからか鳴き声が聞こえる。見れば女の子が泣いていた。灰色の女の子、金太郎の記憶の中で灰色の髪と言えば彼女しかいなかった。

「楓、か……?」

間違えるはずもない。あの後ろ姿は楓に間違いない。しかしどう考えても少女の姿だ。先程まで見ていた成人に近い彼女ではない。そこで初めて金太郎は気づいた。自分の家が微妙に今より新しいと

いうことに。どうやらここは過去の世界、もっと言うならば自分の記憶の中らしい。

……そういえば一度だけあった。楓が泣いている姿を見たことが。となれば次にやってくるのは間違いなく……

「お〜い！ 楓！ そんなところで何をやっているんだ？」

少年らしい元気な声がこちらに向かってくる。目につくのは金髪、それだけでその少年が誰か分かった。

少年の声が聞こえると、楓の小さな肩がビクツと震えた。そして服の裾で顔をゴシゴシと拭くと何ともないように振り返った。

「べ、別に。何もやっていないわ。さ、今日も遊びに行きましょう」

「……楓、目赤いよ」

金太郎の指摘に驚く楓。確かに楓の目の周りは赤く腫れていた。心配そうに少年は楓の顔を覗き込んだ。

「……泣いていたの？」

「な、泣いてなんかいないわ！ ただ目にゴミが入って……少しこすり過ぎただけよ。何も悲しいことなんて、ないわ……」

「楓……楓はどうして泣きたいときに泣けないの？」

少年の心配はより一層強くなる。

「僕は泣き虫だけれど、泣きたいときに泣ける。それはとてもいいことだ、って金剛兄ちゃんが言ってた。涙を流すと嫌なことを忘れるって。……ねえ、どうして素直に泣けないの？」

「……だって、私は強くなりたいたいから……こんなことで泣いていたら、絶対に強くなれないから」

楓は肩を震わせながら言う。俯き髪に隠れて表情は良く分からないが、おそらく今にも泣きだしそうな顔に違いない。

「強いは孤独って、どっかの偉い人が言ってたわ。私は強くなる。誰一人泣くことがないくらい、もっと強く……」

「だったら僕はもっと強くなるよ。楓を守るくらい、楓が安心して泣けるくらい強くなるよ。……少し時間はかかるけどね」

その瞬間、楓の震えが止まった。顔を上げると、そこには少年の照れくさそうな笑顔があった。

楓はそっぽを向いて、先程とは違う口調でしゃべりだした。

「ば、ばかじゃないの？ アンタが強くなれるわけじゃないの。今だって私に勝てないのに。ちゃんちゃらおかしいわ」

あからさまに肩を落とす過去の自分。もうちょっと頑張ろうぜ、と自分でも言いたくなった。

「でも、ありがとう……」

「ん？ 何か言った？」

「別に。 さあ、遊びに行きましょう」

楓が少年の手を取り、そのまま連れていく。おそらくあの場所に行くんだろう、と金太郎はその光景を見て思い出していた。

楓の顔はまだ完全に晴れ渡ることはない。しかし、先程までの泣きだしそうな顔に比べれば千倍輝いている。凜として、可憐で、でも本当は弱くて、そんな彼女を見て思い出した。

俺はこの笑顔を守らなくちゃいけないんだ。

「そう、だったよな」

金太郎は何事もなかったかのように立ち上がる。プラズマも、今までの傷もないようにゆっくりと立ち上がった。その光景を魔は固まってみるしかなかった。

「俺が守りたかったのは楓の笑顔だ。それは今も変わらない。あの時の約束、今果たすぜ、楓」

「バカなっ！？ まだ立ち上げられるのか？」

あり得ない、とでも言いそうな表情の楓。それを無視して、金太郎は口を開いた。

「もうお前と付き合っているのは飽き飽きだ。俺の聞いたかった声はそんな声じゃないし、俺の知っている髪は、そんな荒んだ色じゃない。……さあ、もう、遊びは終わりだ」

金太郎は一步踏み出す。その一步がとても重いものに見え、楓は知らず知らずに後ずさっていた。

何故、という疑問しか彼女の頭には浮かばなかった。自分は魔で、あれは人間。いくら強い人間とは言えど、自分に勝てるような人間などまずいない。それにあれは先程までボロボロだった。壊れかけのラジオみたいに同じ言葉を繰り返し、それに縋るしかない愚かで弱い人間。なのに何故　　私はあれに“恐怖”しているのか？

「Second Drive Set Up」

金太郎はゆっくりと手を伸ばす。まるで何かを求めるようなその仕

草は、今までとは明らかに違う構え。

今まであんなにも綺麗な夕日が見えていたのに、突然それが一転した。金太郎の頭上には黒い雷雲が立ちこめる。金太郎は空を握りつぶすように拳を作ると、始動した。

「 Start! 」

#### 第四章・第十一話：こつちだつて我慢の限界なんだ

自分に衝撃が走つて、初めてそれが殴られたと分かった。

軽々しく吹っ飛んでいく自分の体、それをまるで他人事のように、

“ああ、よく飛んだな”と思つている自分、そして先程まで自分のいた場所に佇む金太郎

「 Accelerate 」

ギョーン、と言つ加速音と共に自分の視界から金太郎の姿が消えた。分かつている。金太郎が何をやったのかということも、あれがどんな術なのかと言つことも。そう、単に金太郎は走っているだけ。“ Second Drive ”とはただの身体強化の術にすぎないということも。

退魔師は闘う時、常に身体強化の術を自分にかけている。退魔師の魔力とはほとんどがそれに費やされる。というのも、それがないと魔に文字通り瞬殺されてしまうからだ。もちろん金太郎も身体強化を常に行っているのだろう。それを考慮したうえで、楓は金太郎より強かった。今までは。

“ Second Drive ”はそれを越える身体強化というものらしい。一時的な強化、それによつて金太郎の速度は自分を越えているらしかった。だが、問題はその次だ。

もし、“ Second ”が“ First ”に続くものだとしたら？ “ First ”は雷の結界、あらゆる攻撃をはじき返すような強力なものである。それがもし、自分に壁となつて襲いかかつてきたらどうなるだろうか。それは 脅威を超えて、凶悪だ。金色の光に包まれている金太郎が再び動き出す。

「 ウラアアアアア！ 」



「！」

衝撃が背中を襲う。声にならない叫び声と共に口の中に血の味がする。痛みは治まることを知らない。

立場は完全に逆転した。今まで捕食者の立場にいた自分が今度は被捕食者の立場にいる。人間がケモノに襲われるように、ケモノは化け物に襲われていた。あの金色の、冷徹なまでにこちらを見つめている修羅に。

「諦める、魔。お前じゃ、今の俺には勝てない」

「く……バカが……。私は生き続けるんだよ。そのためならプライドだって、捨てる」

魔は立ち上がり、一目散に後退する。幸いここは森、隠れる場所ならいくらでもあるし、もし闘うことになっても地形的にこちらの方が有利。すぐに森の闇へ隠れることができた。

……しかし、と楓は思う。先程見た金太郎の恐怖は異常だった、ともはや魔になり果てた今では感じる事が出来なかったその感情、楓の記憶を覗いてみても思い出せないそれは、今でも自分の中に残滓を残している。楓の息は上がる一方だった。

「遅い」

「！」

いつの間に、という言葉は楓の口から発せられなかった。その前に金太郎の拳が腹部に直撃し、再び元のあの場所に引き戻された。

……ああ、そうか。ここは遊び場なのだ。楓と金太郎の遊び場。何年にもわたって二人で遊んだこの場所は彼らにとってもホームステージ。そこが森であろうと、傾斜であろうと関係ない。アウェイなのはこちらだ。逃げ切ることなど不可能。

「ぐほつ……あ、ああ……」

口の中は血の味しかしない。動く気力など全部削がれてしまった。それでもまだ楓は動き続けようとした。あの修羅から逃げるために紫電を携え、ゆっくりと金色の退魔師がこちらに歩いてくる。そこから感じられるのは殺気が半分、もう半分は分からなかった。

「トドメだ。魔」

「バカ野郎が……まだ私は生きるって言ってるだろうが！」

金太郎が紫電を振り抜くと、楓は後ろにあった木で防ぐ。

……いけない。これは楓だ。間違ふことなくここで自分を待つてくれている楓だ。金太郎の攻撃はギリギリで停止した。

その様子を見て、口を歪ませる楓。その一瞬の隙に後ろの崖から飛び下りた。

目算で数十メートルはある。魔である彼女なら無事だろうが、自分はまだ人間。地面の¥に叩きつけられる衝撃で十中八九死ぬことになるだろう。

金太郎は迷うことがなかった。

「絶対に、逃がしはしない！」

金太郎は数十メートルはあろう崖をためらうことなく飛び下りた。

魔は少し安心していた。というのも、金太郎はここから飛び下りることはないと確信していたからだ。

高さは数十メートル、さらにここがホームである彼にとってはこの

崖が如何ほど危険なのか分かっているはずだからだ。慣れというのはメリットになることもあるし、デメリットになることもある。飛び下りてまで自分を追いかけることは、まずない。しかし時として、感情は慣れと言うのを超えることを魔はこの時知らなかった。

「おら、待てや！ 魔！」

信じられなかった。金太郎は自分を追ってきているのだ。しかも垂直にある崖を走りながら。こいつには重力と言う概念がないのか……？

その余りの非常識さに目が飛び出るかと思うほど驚いた。

「デメエはバカか！ ここ何メートルあると思ってんだ！？ 落ちたらアンタは死ぬんだぞ！」

「だったらその前にお前を殺す  
S e c o n d   D r i v  
e …… All Out！」

紫電が光り輝く。いつもより、いや、今までのどの魔力より強い力を持ったそれはまさに金太郎の全力だった。

崖を蹴り、飛び上がる金太郎。自分の真上に来た金太郎をスローモーションのように楓は見ていた。

「俺はお前を許しはしない。楓の笑顔を犯したお前を絶対に！ さあ、覚悟しろよ、魔！ 楓は返してもらおうぞ」

魔はその時初めて分かった。こいつの全ては殺意だけではないというところを。こいつはただ、取り返したかっただけなんだ……。

「 雷鳴、激動！」

その一撃を受け入れた魔は金太郎と共に回転しながら落ちていく。それでも金太郎は攻撃をやめようとはしない。顔を歪ませ魔力が枯渇しているにも関わらず、さらに力を込めた。

雷の如くに落ちていく二人は遂に地面に衝突した。すでに紫電が体を貫通している魔は地面にそのまま叩きつけられた。もはや虫の息、助かる見込みがないことは自分自身で分かっていた。

金太郎はというと落下の衝撃で投げ出され、高く放り出される。まるでボールのようにバウンドしようやく止まった。“Second”の影響だろうか、体が全く動かなかった。

「相変わらず無茶をする、アンタは……。もっと自分の体を大切にしないと、皆を助けるなんて言っていられないぞ……」

「え……」

思いもよらない言葉に金太郎は耳を疑った。こいつがまさか自分を心配する様なことを言うはずもないと思っていたからだ。

「言つたら、私と楓は繋がっていたって。楓が好きなのは私も好きなんだ。でも私には壊す感情しかないからさ、こんな結果になっちゃまったってわけ。分かる、キンタ？」

人を小馬鹿にするような目でこちらを見る。その姿を見て金太郎はハッとなった。まるで、楓と同じだった。

楓は手を投げ出し、体を伸ばした。

「あゝあ……。負けたよ。結局楓はお前より弱かったってわけか。残念だね……。なあ、キンタ、アンタは楓の罪を背負えるかい？」

「ああ、もちろん」

「じゃあ、アンタに託すよ、楓の夢を。誰も泣く必要がないくらい強くなるって夢。託せる？」

「当たり前だ」

金太郎は力強く頷くと、楓はそれを鼻で笑う。少し、満足げに見えた。

「お前はきつと強くなるよ。お前が楓のことを忘れないで、でも自分の道を突き進めばきつと……アンタにはそのための仲間もいるから。その様子を楓はきつと上で見てるさ。……ああ、そうそう。そういうえば私一っだけ嘘をついていたんだ。楓の最後の言葉は“殺した”なんて物騒な言葉じゃない。“キンタ、アンタは私を救ってくれた”だって。……嘘ついて、悪かったな」

「楓……」

「じゃあな、キンタ。縁があれば、またな……」

楓は白い煙となって消えていく。そこにあるのは憎しみや恨みでもなくただの笑顔。金太郎が一番見たかった顔だった。

楓が完全に消える頃には金太郎の体も自由が利くようになっていた。金太郎はゆっくりと立ち上がる。

「……さあ、帰るか」

もう遊びは終わった。遊びが終わったならば自分の家に帰らなくてはいけない。

その時金太郎の頭に最初に思いついた家は、鬼丸たちがいる鬼ヶ島。そうして金太郎は帰路につくことにした。

またいつか、ここに来ると誓って。

……全てが終わった。

ウラシマとかぐやは金剛を見事に退け、無事に逃走中。

金太郎は過去とけじめをつけ、ようやく自分のもとへ帰ってくる。全てが終わった。だから彼は動き出す。帰ってくる皆を迎えるために、自分の日常を奪おうとした愚か者を排除するために。

鬼丸は誰もいない不自然に長い廊下を歩いていく。まるで人の気配が感じられないそこは、さながら廃墟のようだった。

しかしそれも当然と言えば当然だった。家と言うのは人が住んで初めて成り立つ。魔が人間に代わって住んでいるそれはもはや家とは言えず、ただの巢。ここはもはや人間の常識が通用するところではなかった。

鬼丸はここに魔が人間の代わりに住んでいることを知っていた。この事件が始まる前から。人間の言葉に“類は友を呼ぶ”という言葉があるが、同じ魔同士不穏な空気を感じ取っていた。故に魔が発生したことは視野に入れてなかった。

……一番心配なのは、今まさにその魔に追われているであろうかぐやの身であった。ぎゃー、とかうわーん、とか叫びながら逃げていることを思うと何だかとっても申し訳ない気分になるのは何故だろうか。

ウラシマが何とかしてくれるだろう、と少し期待しながらまだその廊下を歩いて行くと、視界の端に黒い影が入った。獣のようなそれらは、もちろん魔だった。

「ぐるるる……」

「……」

影は二つ、共に元は人間だったと考えづらい唸り声を上げながらこ

こちらにジリジリと詰め寄ってきた。なまじ人間だったせいか、こいつらは襲っていい相手と悪い相手が分かっている。いくら自分たちが強くても、私の前では捕食される側だというのに……。

鬼丸が無言で立ち尽くしているとそれを隙と受け取ったのか、一匹の魔が声を張り上げ襲いかかる。

その瞬間、それは肉片へと変わった。鬼丸はそれを冷たく見降ろしていた。

「邪魔。取り敢えず死んどいてください」

鬼丸は腕を軽く振るっただけだ。それだけでこれは何のためらいもなく死んだ。力の差は歴然、いや、むしろ比べることすら無駄かもしれない。

もう一匹はそれを見て分かった。これはやばい、と。一匹は脱兎の如く逃げようとした。

が、それよりも鬼丸の銃弾がその胸を穿つ方が早い。

「お、鬼丸さん……い、今のは一体……？」

力なく倒れていくそれを見届けていると、後ろから声があった。

坂田蓮華はどうやらその部屋に隠れていたらしかった。恐怖におびえる彼女を安心させるためにも、努めて冷静に言った。

「蓮華さん。貴方は今からここを出て、里に向かってください。そして魔が出た、と村人に伝えたらそこで保護してもらってください。坂田家は名家、そこで魔が出たと聞けば、近隣の退魔師がすぐに駆けつけるでしょう」

「で、でも……他のみんなは……」

「いいから早く行ってください」

思ったより強い口調の言葉は、彼女をおびえさせるのに十分だった。どうやら自分は自分で気づかないほどイライラしているらしかった。彼女が出ていくのを見届け、再び鬼丸は歩き出す。目指すは最奥。長い廊下の先にある闇を越え、ようやくそこにたどりついた。鬼丸がその部屋の扉を開けると、そこは闇だった。黒ではなく、闇光すら届かないそこに、奴は確かにそこにいた。

「やはり君か。君なら必ずここに来ると思ったよ、鬼丸童子」

「坂田、公時」

まるで鬼丸が来ることが分かるような口ぶり、暗闇の中でも分かるほど鋭い眼光。現坂田家当主、坂田金剛はその暗闇の中で、確かに存在していた。

……努めて。冷静にその闇に問うた。

「坂田当主の貴方が何故こんな場所で閉じこもっているのですか？ 外は魔で溢れかえり、それを排除する人間も少ない。当主と言う立場にいる貴方は真っ先に動くべきではないのですか？」

「ああ、それが……。もう、そんなことどうでもいいんだよ。それよりも聞かせてくれよ。お前が何故ここに来たのか、どうこの事件を見ているのかを」

親しい友人と話すような口調で鬼丸に問う。

その口調に不快を感じながらも、鬼丸は懐から紙の束を取り出した。何かのレポート用紙のようなもので、公時はそれを見た瞬間流石に驚きを隠せなかったようだった。

「これは貴方が書いた魔の考察です。拝見しましたが、その出来は素晴らしいの一言。これを世に出せば、魔と言う物の見方が変わるほどに。しかし疑問があった。それは人間では知り得ないようなこ



とも書かれていたからです。そこから私の疑問は始まりました」

「ふむ……まさかこれを読んでいるとは……蓮華が渡したのかな？」

公時は顔に手を当てる。まるで困っているような素振りだが、実は違う。

退魔師は確かに嗤っていた。

「そしてこの本。この本は普通に読めば、単なる兵法書です。しかし、ある特別な見方をすればこの本の内容は一転する」

「その内容とは？」

「……人間を魔に変える魔術」

その言葉を聞いた瞬間、ソレの口は大きく歪んだ。

「貴方なのでしょう。数年前楓という女性を魔に変え、現在になって蘇らせた。そして無関係の退魔師をも魔に変えた犯人は。坂田公時、貴方がこの事件の黒幕ですね」

パチパチと、乾いた拍手が鳴った。あまりに予想外で、一瞬何が起こったか分からなかった。

……いや、実は今も分かっていない。自分が追い込まれたというのに、依然として笑みを浮かべさらには高笑いまでしている奴の心境など、分かりたくもない。

「素晴らしい。君なら分かるかと思っていましたがまさかここまでとは……。もう一度、鬼と言う魔について考察を改めなければな」

「何故こんなことをしたのですか？ 人間は人間として死に、魔は魔として死ぬ。それは我々に共通に与えられた一つの権利。それなのに貴方が魔に変えた者たちは、中途半端に成り下がり、人として存分の死が与えられないでいる。貴方は多くのその権利を奪って、

何を為そうとしていたのですか？」

「……全てを救うためだ」

どこかで聞いたことがあるその科白に、鬼丸は眉を顰める他なかった。

「私と金太郎は似ていてね、いや、金太郎が私を見て育ったというか。とにかく私と彼の求める場所は一緒なのだよ。 全てを

救いたい、という漠然として崇高な望み。其れが私の求めるものだった。

金太郎はまだまだ未熟だ。それを為すために何をすべきか分かっていない。まあ、直に知ることになるだろう」

「息子の大切な人を奪ってまで、叶える価値のあるものなのですか、それは？」

「ああ、もちろん」

ソレは嗤って当然のように答えた。しかしその嗤いも一瞬の物、彼の表情は無に転じ、重々しく話し始めた。

「……私は救いたかったのだ。人間を救うならば、それを脅かす魔を倒せばいい。しかし、倒された魔はどこに行くのだ？ 行くあてもなく、ただ彷徨うだけ……。私は、そんな魔も救いたかったのだ。あの時、私は救えなかった……。まだ幼い命だったというのに……。あの鬼の子供には何も罪はなかった。ただ純粹に、生きていただけなのに……」

その時、鬼丸の時間が止まった。

「命を奪う権利など誰にもない。それを知りながら、私は彼を救えなかった。私は、力不足だった」

「……める……」

「親は確かに悪名高かった。しかし彼も、私たちとの平和を望んでいただけだった。それなのに、あの頼光（らいこう）はそれを切り捨て、あまつさえその子供にも……。ああ、その時から始まったんだ、私は……ただ私は、あの鬼を救いたかった」

「……だまれ！」

まるでこの場を一瞬で崩壊させそうな、悲痛な声が辺りに響いた。鬼丸は肩で息をしており、公時はそれをジッと見つめている。彼は何にも気づいていないようだった。

「……魔を研究したのも、そのためだ。救うにはまず知らなければならん。そのために最も魔に近いと思われた楓の体を魔に変えた。実験は成功、それから部屋に引きこもり、ずっとその研究ばかりしていた。魔を救うためには自分も魔にならなくては。……そうしてようやく、その魔術が完成した」

「……貴方は、悪魔だ」

「悪魔にでもならなければ、全てを救うことなど出来ないんだよ。もしくは神になるほか方法はない」

公時が立ち上がる。どうやら計画の邪魔な異分子は排除する気でいるらしい。それで良かった。いい加減このままコレと話していたら気が狂いそうになるほど、不快に思っていたところだ。

ああ、こっちだって我慢の限界なんだ。

「私は、貴方を殺す。坂田公時」

「……いいだろう。全てを救うという偉大なる目的のために犠牲は付き物だ。……見せてあげよう、私の夢を」

その時ボコボコと、公時の体の内側から何かが沸騰しているかのよう  
に蠢き始める。まるで公時の体を喰い破ろうとしているそれを、  
鬼丸は不快になりながらただ見ていた。

そして次の瞬間には公時の体は人間ではなくなっていた。

……確かに、自分は知っている。この化け物の名前を。頭は猿、胴  
は狸、尾は蛇で手足は虎というこの偉大なる化け物を自分は知って  
いる。

鬼丸は憎しみを込めながらその名を口にした。

「  
鵂ぬえ」

正体不明が咆える。その瞬間、鬼は目の前のそれを排除するために  
走り出した。

#### 第四章・第十二話：一緒に帰ろう

それは二つ、目に見えない衝撃が肌を抉った。

「くっ……」

鬼丸はそれを、両手を交差させて受け止めた。それでも、自分の体ごと数メートルは動かされたのは圧巻の一言。鬼丸の額に汗が流れ始めた。

「クハハハハ！ ドウシタ、鬼？ オマエノカハコンナモノデハアルマイ。モット、モット本気ヲ見セテミロ！ クハハハハ……ガアアアアアア！」

「……遂に狂い始めましたか。いや、元から狂っていたのかな。取り敢えず、すぐに楽にしてあげますよ」

「！」

正体不明は咆哮し、こちらに向かってくる。自分の数十倍はあろう怪物がこちらに向かってきてても鬼丸は動こうとしなかった。この怪物を止めるのはもちろん、愛銃デザートイーグル50AE版。鬼丸は銃口を定め、それを放った。

退魔用の兵器として生み出されたその破壊力は、例え鶴の皮膚とは言えど易々と貫くであろう。それを分かっていたいながら、正体不明は前進を止めようとはしなかった。止める必要などないのだ。

鬼丸の弾丸は、正体不明の見えない力に吹き飛ばされた。

「ちっ……！」

「ドウシタ！？ ソノ程度デハ止メレンゾ！」

正体不明は突進する。ただ純粋な自分の力を以って、目の前の小さな鬼を粉碎した。お陰で屋敷の壁も大破したが問題はあるまい。すぐに自分には必要のなくなるものだ。

それよりも正体不明は自分の新たな力に感動を覚えていた。鶴としての力は正体不明、自分にも、もちろん敵にも分らないこの力はまさに無敵。鬼でさえもその気配に気づくのに数秒はかかるこの力を一体誰が止めれようと言うのか。

正体不明は咆えるようにして嗤った。

「クハハハハ！ 素晴ラシイゾ、コノ力ハ。鬼サエモ凌駕スル怪力、魔力、ソシテコノ生命！ コノカト術ガアレバ私ノ夢ハ叶ウ。クハハハハハ！」

「ならばその力、私が止めてみせましょう」

いつの間にか、鬼は自分の目の前に立っていた。正体不明はそれを見て、ニヤリと嗤った。

当然だ。鬼がこの程度で倒れるわけがない、いや、倒れてはいけないのだ。だから自分はこんなにも魅了されたのだ。

正体不明は全力で、見えない衝撃を鬼に放った。鬼丸はそれを、右手を防ごうとする。

「ソナ手デ受ケ止メレルト思ウナ！」

「くっ……」

鬼丸の右手はその衝撃に打ち抜かれ、その痛みで顔が歪んだ。それでもなお左手にデザートイーグルを持ち、攻撃してくる鬼丸の姿に正体不明に疑問が浮かんだ。

「何故ダ？ 何故鬼デアルオマエガ私ノ邪魔ヲスルノダ？ 元々鬼ハ人間ト関ワリを持チタガラナイ者。只ソコニイルダケノ恐怖ノ象



然結果も張つてあつたはずだ。それを易々粉々にしたのに、何故遺体……？

自分の攻撃が鬼の皮膚を貫くことも実証済みだ。あの衝撃の嵐を耐えることなど出来まい。それなのに何故、何故  
鬼はその形を保っているのか？

「……出来た」

「何故……何故オマエハ立ツテイルノダ!? 鬼丸童子!」

鬼丸はボロボロになりながらも、そこに確かに立っていた。もし正体不明が人間だったら、驚愕の表情は隠せないだろう。恐怖は柔らかな微笑を浮かべて、その口を開いた。

「乱発すぎなんです、貴方は。お陰でようやく貴方の攻撃が見えましたよ。いえ、理解しました。鶴」

「馬鹿ナ! 私ノ攻撃ヲ捉エタトデモ言ウノカ!? アリエナイ!

私ハ鶴、正体不明ノ権化ダゾ!」

「正体不明だから理解し得ないと言つのですか……。残念、現代ではもはや正体不明は正体不明でなくなっている。そして、私がかからないことなどないのです」

「黙レ!」

激情と共に衝撃が放たれる。鬼丸はそれを、左手で受け止めた。衝撃は無に還つていった。

「ナツ……! 何が起キタ?」

「……万物には力が宿る。魔力はその典型です。あらゆるものには魔力が宿り、その自己を形成するために、互いを識別するために魔力の色が分かれる。そして、魔力にはある一色に対立する、反対は必ず存在している」



以前読んだことのある本に書かれていたことを公時は思い出していた。確かその本には、あるものにはそれと反対の性質の物が内包されており、また逆も然りと。だから自分は確かに人間と言う自分の中に内包されている、反対の魔としての力を引き出そうと考えた。

だからどうした？ 今はそれとは関係あるまい！

鬼丸は図体だけが大きい、出来の悪い生徒に教えてやることにした。

「さあ、問題です。貴方の攻撃に、私がそれに反する魔力をぶつけてやればどうなるか……。数学と一緒にですね。プラスにマイナスを足せばどうなるでしょうか？」

「マ、マサカ……」

「そう、ゼロです。この私の手に触れた瞬間、貴方の攻撃は相殺されます。これが私の力、名前は……特に決めていませんけど」

「フザケルナ！ ソンナ力ガ認メラレルト思ッテイルノカ！」

正体不明が咆え、力が鬼に向かう。しかしそれも、先程と同様に打ち消され無に還っていた。

後に残るは、鬼丸の冷酷な微笑

「ええ、だって私が認めていますから。貴方に指図される覚えはありません」

目の前の恐怖は一步踏み出す。一步一步確実に。

その様子が死人の魂を集める死神のようで、公時は完全に余裕をなくしていた。

「ク、クルナ！」

「大体この力は私の魔力を消費して打ち消しているんです。無条件

で相手の攻撃を消しているわけではないんですよ」

「ク、クソガ……！」

「魔力の消費量は貴方に比べて二倍。それに全く正反対のものを生み出さなくてはいけない故に、精神も摩耗する。まったく、効率のいいやり方ではありません」

「ヒイ……！」

「それなのにどうして私がこんなことをやっているのかというと

」

鬼丸の手との距離が0となる。当てられた手は氷のように冷たく、狂い始めていた公時を戻すのに十分だった。

「貴方は私の日常を奪おうとしたから」

鬼丸は言い放つ。その表情は柔らかな微笑でも冷酷な嗤いでもなく、ただ無。

情も慈悲も感じられないその表情を見て、ふと冷静になった公時は悟った。自分は、踏み込んではいけない領域に踏み込んでしまった、と。

「先程も言ったとおり、私と金太郎の出会いには偶然でした。偶然に金太郎を助け、偶然に一緒に旅をすることになり、偶然にここまで来た。そして私は、その偶然の産物に固執するようになってしまった」

鬼丸は一言一言を噛み締めるように続ける。

「ただ人間と話し合っているだけなのに、ただ人間と寄り添っているだけなのに、私はそれを楽しんでいると思ってしまった。だから、この偶然が少しでも長く続くように、私は守りたい。」

ウラシマが後ろでニヤニヤしながらついて来て

かぐやが自分の隣に寄り添って

キンタが自分たちの先頭を歩いている。

そんな日常を私は守りたくて、私はここまで来たんです」

それは鬼丸の抱く夢の形。その夢を犯そうとする奴は誰であろうと許さない。だから……

「だからその日常を崩そうとした貴方を、私は滅殺する」

金太郎が実家に帰る、と言った時何か嫌な予感があった。

もしかしたら金太郎と一緒に帰ってこられないかもしれないかもしれない。

その予感は見事に当たり、楓という思い出に金太郎は縛られた。それもこんな男の、こんなちっぽけな望みのせいで、金太郎は苦しむ羽目となった。

だから殺す。例えそれが金太郎の親だとしても、金太郎の大切な人であろうと自分にとっても金太郎は大切な人。絶対に渡したりなどはしない。

鬼丸は正体不明に触れている右手に力を込めた。

「さあ、先程の続きです。ある魔力に反する魔力を与えてやれば、それは相殺される。そして我々魔は魔力の塊である。この二つから考えられることはというと　　貴方の消滅です」

「……ナツ!？」

「流石に鵠を殺そうとするのは骨が折れますが、やってみせましょう。日常のために」

「　　ヤメロオオオオオオ!!」

「無理です。貴方を殺すのは絶対ですから。……ああ、そうそう。貴方とキンタは違いますよ。貴方には誰も傍にいないくて、キンタに

は鬼わたくしがついていますから。

キャンセル  
拒否

鬼丸と接している鵜の皮膚が消えていく。伝説と謳われた正体不明が無くなっていく。たった一人、こんな小さな鬼のために。その激痛に公時は再び狂い始め、悲鳴のような咆哮を上げた。

「！」

「くっ……私の中に入ろうとするのか、この出来損ないが。そんなこと……許されると思っているのか！」

鬼丸は力を強める。鵜のその皮膚が消えていくと同時に、自分の中の何かが消えていく感覚に襲われた。そしてそれは魔力だということも鬼丸は知っている。

これは賭けだ。自分の魔力が切れる前に奴を滅すれば自分の勝ち、魔力が切れてしまえば奴の勝ち。鵜という膨大な魔力を消すために、鬼丸もまた自分の存在を賭けなければいけなかった。これ以上魔力を使えば、危険ということは百も承知。

しかし鬼丸は止まらなかった。その理由はただ一つ、ただ日常のため。

「消え失せるおおおお！」

「！」

賭けに勝ったのは鬼丸であった。すさまじい轟音と共に正体不明は白い光となって散り、その姿は跡形もない。自分の体から力が抜け、倒れこんだときによく自分が勝つたのだ、と自覚した。倒れこむ鬼丸の表情は、柔らかな笑みを作っていた。

「父上！ 父上 ！」

どこかからこちらに向かってくる声がする。

……ああ、この声は聞いたことがある。確か金太郎の兄、金剛だったはずだ。鬼丸はしばらく動けそうにもなかったその体を何とか起こし、ようやく座ったところで予想通り、金剛が現れた。

「む……御客人。父上がどこに行っただかご存じないか？ 屋敷の中を捜しまわっても、どこにもいないのだ！」

「ああ、それなら……」

鬼丸の表情が先程の柔らかな笑みから反転した。

「私が殺しました」

「なっ……！？」

鬼丸は今にも倒れそうな体を起き上げ、金剛の前に立ち上がる。その表情は自分を憐れんでいるようで、金剛の怒りは今にも爆発しそうだった。

「大体どんくさいですよ、貴方は。こんなにも身近に鬼がいるというのに、それをみすみす見逃すなんて。貴方本当に退魔師ですか？」

「鬼、だと……」

「ええ、私の名前は鬼丸童子。童子名を持つ、悪鬼です」

金剛の手は自然にアサルトライフルに向かっていった。。

「き、貴様……よくも父上を！」

「遅い」

取り出そうとした金剛のM16がはじき落とされる。自分の手が痺れ、鬼丸のデザートイーグルを視認したとき、ようやく早撃ちで負

けたのだと分かった。

「貴方は大量の武器を持っていると聞きましたが、それら全てを使っても私には勝てませんよ。だって、貴方は弱いんですから」

「貴様……！」

「そんな怖い目で見ないでください。怖くて怖くて、貴方を殺してしまつかもしれないから」

鬼が自分を睨みつける。たったそれだけで、自分の足が縫いつけられたように動かなくなった。愛銃を持つ自分の手が震える。その時金剛はようやく、肌で分かってしまった。

これが最凶、鬼なのか、と。

「あつ、鬼丸さんだ！」

「ホントだ。鬼丸君、君は何をやったんだい？」

「……別に、何もやっていませんよ」

「鬼丸さん……また隠し事ですか……」

かぐやの周りが暗くなっていくように見える。

突如寒気を感じた鬼丸は震えながら、その雰囲気を払拭するためにわざとらしく声を張り上げた。その様子を見て、ウラシマは笑いを必死に堪えていた。

「と、とにかくキンタのところに行きましょう。かぐや、月光を」

「むう……仕方ないですね。月光・望月」

「あれえ？ かぐやちゃん疲れて使えなかつたんじゃないの？」

「そんなこと一言も言ってないですよ。第一、貴方のために力を使いたくありませんから」

「ひでえ！」

ウラシマを無視して、鬼丸はかぐやの手を取る。軽く、金剛を一瞥しながら。

「さあ、行きましよう、かぐや」

「はい。月光・新月」

金色の球体が消えていく。金剛はその様子をぼくと見送るしかなかった。

球体が完全に消えた時、自分を呼ぶ声に気がついた。近隣の、別の退魔師の家系の者のようだった。彼には見覚えがあり、なかなか優秀だったと覚えている。

退魔師は頭を下げ、呆然としている金剛に呼びかけた。

「坂田金剛殿。屋敷内にいた魔は全て滅しました。もうしばらくで、外に出た魔も排除できると思います。しかし誰の仕業でしょうか……人を魔に変え、この事件を起こしたのは……一体誰が」

「……鬼だ」

「はっ……!？」

予期し得ない単語を聞いて、その退魔師は反応出来ていないようだった。金剛は立ち上がり、その退魔師に命じた。

「今すぐ御門様へお伝えしろ！ 鬼が、しかも童子名を持つ鬼が現れたとな！」

御門はこの国の最高権力者にして、退魔師の祖。それに事を伝えるということは、国家を揺るがす事件と坂田家が認めたことになる。この事件はまだ収束を迎えそうになかった……。

「いやあ、今回は大変だったね。キンちゃんの許嫁は出るは、変な退魔師に追われるは。本当に酷い目にあつたよ」

「ホント。キンタさんに関わると碌な事ありませんね」

「……いや、勝手に関わってきたのはお前らじゃん」

金太郎はげんなりと、二人に文句を言った。前後にいる二人に文句を言うのは予想通り難しかった。

朝早く、四人は歩いている。ひっそりと人影はなく、ただその道を歩いているのは四人だけであつた。金太郎が前を歩き、ウラシマは後ろで何か操作しながら歩いていた。

そして三人とも金太郎の過去には敢えて触れなかつた。金太郎と楓に何があつたのか、楓をどうしたのか、と。決して楓の事は忘れない。絶対に忘れられないのだ……。

三人は迎えに来た時に“一緒に帰ろう”と言ってくれた。それが金太郎にはとても有難かつた。

「しかし良かつたです。皆無事に帰ることが出来て……。キンタに何かあつたらどうしようと思つていましたよ」

「お前が人の心配をするなんて……本当に鬼丸か？」

「む、失礼な。私は鬼丸童子、紛れもない本物ですよ」

「おっと、こりゃ失敬」

笑い合っている二人に、ウラシマがその口を開いて気になることを訊いた。

「それで、帰ったら何しようか？ ここのところ騒動ばかりだから、僕は休みたいんだけど……そうだね、たまには不思議の国へバカンスに」



「貴方に休みなんてありませんよ。鬼ヶ島に帰ったらサボった分の仕事はやってもらいますからね」

「……えっ、マジで？」

「マジです。ところで、キンタはどうしたいですか？」

「俺？ 俺は……」

金太郎は立ちどまり言葉に詰まる。先に行く三人に見つめられながら、金太郎は自分の決意を口にした。

「俺は強くなるよ。皆を助けられるくらい、もっと強くなるぜ、鬼丸」

「……ふふっ、そうですか。ならば私はそんなキンタを助けましょうか。かぐやはどうします？」

「私は鬼丸さんに全面協力ですよ。何たって、妻ですから」

「はあ……全員そうなのか……だったら僕もやるしかなさそうだな」

「みんな……」

金太郎は立ち止まる。高くそびえ立っている山の後ろで、今にも日が見え始めていた。金太郎はそれを見て、叫びださずにはいられなかった。

「楓　！　絶対にお前の夢を叶えてやるからな　！」

……突然叫びだした金太郎に襲ったのは、かぐやとウラシマの何とも言えない視線であった。

「……嫌い」

「……近所迷惑」

「なっ……！！　いいだろ。それぐらい別に！　少し叫びたくなった

んだから！ お、おい、先に行くなって！」

「何やっているんですか？ 早く行きますよ、キンタ」

そう、それでいい……。

貴方はそうやって皆を助けるといふ夢に向かってひたむきに歩いていればそれでいいのです。悪いこと、苦しいことは全て私が引き受けましょう。鬼はそのためにいるのですから……。

鬼丸は歪んだその嗤いを隠しながら、三人と共に歩いて行った。

この時、鬼丸たちは知らない。自分たちの日常の舞台、鬼ヶ島が何者かによって破壊されているということ。

鬼丸たちが鬼ヶ島に着くのは数時間後、すぐに鬼丸たちはその犯人を追うことになる。

しかしそれは、また別のお話。

桃章：オメエラがいなくなっちゃ意味ないじゃん

時がさかのぼること、数日。金太郎が実家に帰る頃の話である。  
ここは月の都。

地上からは見ることが出来ない月の裏側。まるで空気まで統制されたように冷たく、静かなこの地には地上の生命の常軌を逸した存在、天人が暮らしていた。

喧騒を好まず、ただ静かに地上を傍観している彼ら。ただ永遠の命を持って余し、何をするわけでもない彼らも、今日ばかりは動かずにはいられなかった。

月の都の象徴とも言えるこの屋敷に侵入者が現れた。

「早く扉を閉めよ！ 絶対にツクヨミ様のところへ行かせるな！」

その屋敷の主がいる部屋の前で、必死に部下に指示を出している彼の名前はカナモリ。普段は赤と青のオッドアイ、そして優美な金色の髪を持つ、都の中でも指折りの美男子に入るほどだ。しかしそれは今では見る影もなく髪は荒んでいて、さらに彼の紅眼は刃物で切られたような跡が付いていた。彼の部下達も同様で、むしろ彼が一番まともと言えるほどである。いつか地上に鬼と人間にやられた時でさえ、ここまでにはならなかったというのに……。

断っておくとこの屋敷の主の側近で、月の姫の教育係でもある彼はもちろん弱いということではない。この月の都の兵も皆屈強ぞろいで、地上の者では刃も立たないだろう。

しかし残念。今回の侵入者は、地上の者ではないのだ。

「おやおや、その傷は痛そうだね。カナモリ君」

『…』

兵達が皆驚き、振り返るとそこに侵入者がいた。重力が逆転したかのように、天井に足をつけて逆さまにこちらを見下ろしていた。この侵入者はどこから入ったのか、という疑問は今では意味を為さない。カナモリはすぐに動き出した。

「黙れ、侵入者！ 貴様を排除する！」

カナモリは飛び上がり、侵入者に彼の愛刀を振り下ろす。カナモリが空を飛ぶ人間ならば、その侵入者は密林に潜む獣だった。壁を這いずりカナモリの斬撃をかわすと、すぐさま反対側の壁に飛び移りカナモリを見る。

数ある獣の中から、カナモリはその男の中に大蛇を見た。

「おお、まだ戦力があるのか。てっきり未来を視る目が無くなったから諦めると思っていたが、案外往生際が悪いんだな」

「貴様……どこで先見の魔眼のことを……」

男はニヤリと嗤い駆けだす。

壁を蹴り、地を這いずって高速で移動する。地上にいる兵士は成す術もなくそれを見送ることしか出来ず、男は瞬時にカナモリのいる場所に到達した。男の右手に見える歪な形の剣を防ぐべく、カナモリも刀を振り下ろした。

「やっぱり先見の魔眼がないと人並みだな」

刃物が曲がった……。

まるで生き物のように蠢き、その刃物は形を変えてカナモリの刀をかわす。そして、容赦なく彼の肩を貫いた。

「が……！」

「羽を失った天使は人間と一緒に。墮落しろよ、天人」

カナモリは地に堕ちていく。

永遠の命を持つ彼らとは言えど、それは何も起こらなかつたら話致命傷となる怪我や傷、爆発などに巻き込まれてしまえばそれは地上の人間と同じように死ぬ。そしてこの高さからの墜落は、カナモリを殺すのには十分な物であつた。

カナモリはその目を閉じた。

「……ツクヨミ様、お許しを……。命を果たせず逝く自分をお許しください……」

「貴方にはまだやってもらわねばならぬことは山ほどあります。勝手に死なないでください」

……衝撃が来ない。死を覚悟したカナモリはその目を恐る恐る開ける。すると、目に入つたのは自分の最も慕う顔であつた。

「ッ、ツクヨミ様！？」

「はい、私です。カナモリ。良く今まで頑張りましたね」

カナモリを今お姫様抱っこ(?)をしているのは、この屋敷の主、そしてこの国の三貴神が一柱、月詠尊、ツクヨミノミコトその人である。彼女は母性的な笑みを浮かべながら、カナモリをそつと下ろし、そして侵入者の方を見た。その余りに洗練された動きに誰もが目を囚われた。侵入者も目を奪われ動くことが出来なかつたが、それも一瞬の事。すぐに再起動して、待ってましたと言わんばかりの嗤いを上げた。

「ようやく来たか、ツクヨミさんよ。一体いつまで雑魚の相手をさせられるかと思つていたぜ……」

「……流石の私でも獣畜生と話す言葉はありませんよ。早急にこの屋敷から立ち去りなさい」

「黙れ！」

侵入者は動きだす。その獣のように移動はまさに捕食者。刃物を構え、蛇行しながら彼女の首元狙って突き出した。

対してツクヨミは動こうとしない。侵入者がすぐそこまで来ても、まったく動じなかった。しかしそれで良かった。

彼女は動く必要などないのだ

『跪きなさい』

彼女の口から短く発せられたその言葉で、皆の動きが止まった。一様に地に足をつき、頭くちかを下げる。侵入者も、兵士も、カナモリさえ皆一様に。

まるで自分の体で無くなったかのように力が入らなかった。

「何だ、コレ……？ 体が、動かねえ……」

「貴方は神と一つのを舐めすぎている。神は不可侵。貴方のような身分の人が私に触れようなどおこがましいですよ。……カナモリ、貴方まで何をやっているのですか？ 貴方にはそこまで影響はないでしょうに」

「すみません……。力が弱まっていたものでつい……。ツクヨミ様、コイツは何者のですか？」

「……この者の名前はヤ」

「あゝあ、やっぱりお前には無理だったか……。まっ、ここまで来ただけでも上出来か」

カナモリは驚いて振り返る。自分は確かに先見の魔眼は使えない。しかしまだあらゆる場所を見通す遠見の魔眼はまだ健在なはずだ。

しかしそこには、自分が気づかないうちに赤い髪の男が腕を組んで立っていた。

カナモリはすぐさま、刀を手に取る。

「こいつ……いつの間に！」

「おっと、そこまでにしろよ、カナモリ。いくら神のお付き人だからと言っても、やっていいことと悪いことがあるんだからよ」

「……そうです、カナモリ。剣を下ろしなさい」  
「ですが……」

ツクヨミは目でカナモリを命ずる。しかしそれだけではなかった。

この赤い髪の男から発せられる圧力に自分の手は自然に下りていた。ツクヨミと同等の圧力をかけるこの男は何者なのか、カナモリには分からなかった。

赤髪の男はけだるそうに歩きだすと、ツクヨミの前で止まる。ツクヨミの術も関係なしに立ち止まると、長年の旧友と話すかのように喋りだした。

「よう、久しぶりだな。アンタと会ったのは何年振りだ？」

「……ええ、そうね。ざっと二千年は経っているかしらね。……それで、今日は何の用なのかしら？」

赤髪の男が後ろを振り向き、手のひらを天井に向ける。余裕綽々にツクヨミの問いに答える。

「別に大した用事じゃない。ここまで大した事にしたのはコイツのせいだ。それで要件なんだが、地上に行く門を通らしてくれるだけでいいんだ。なっ、簡単だろ」

「……なるほど。地上に行って何する気なのかしら？」

「別に大したことはない。ただ……“世界を救おうかな”と」

そんな馬鹿げた内容を当然のように口にする。しかしツクヨミは知っていた。この男は本気であるということ。赤髪の男の腰にある剣がその存在感を現していた。

「どうぞ。別に私は構わないわ。あれは元々姉上から預かったもの。私がとやかく言うものではないわ」

「あんがとさん。じゃあ、早速俺は行くわ……おい、いつまで寝てんだ！ 早く起きろ、このボケが！」

今までひれ伏していた侵入者の腹を容赦なく蹴りあげる。そして宙に浮いたその体を乱暴に肩に乗せ、その門があるところへこんな言葉を残して向かって行った。

「じゃあね、大好きな“お姉ちゃん”」

不敵な笑みを浮かべて、その姿が消えていく。この部屋を包んでいた圧力が消えると、ようやくカナモリはその口を開いた。

「ツクヨミ様、今の者は一体……」

「口を慎みなさい。カナモリ。貴方がそのような口を利ける者ではありません。それよりも怪我人の治療の指示を。貴方も少し休みなさい」

「……承知つかまりました」

澁々ながらカナモリはこの部屋から去っていく。自分は天人で、ツクヨミは神なのだ。自分が触れてはいけない事もある。少し無常観を漂わせ、カナモリは自室へ帰っていった。

カナモリが去ったことを確認すると、ツクヨミはポツリと呟いた。



「……スサノウ、貴方は何をする気なのかしら？」

カナモリに自分の気持ちが分からないように、自分も彼の気持ちは分からない。せいぜいあの乱暴な弟が、何もしない事を祈るばかりであった。

時は同じくして、ここは鬼ヶ島。

金太郎たちが今まさに帰ろうとしているところに、鬼ヶ島を訪れる二人の人間がいた。

「おい、鬼丸、金髪。遊びに来て」

「スマン、キョウ！ 俺実家に帰らなくちゃいけないんだ！ 適当に遊んで帰ってくれ！」

「お、おい。ちょっと待」

「そうそう、キョウ。私たちがいない間、鬼ヶ島の事を頼みましたよ！」

「それじゃあ、キンちゃんの実家に……」

『レッツゴー！』

目にも止まらない速さで、ウラシマのボートが発進する。あつという間に見えなくなり、残るは自分と、ついてきた犬だけであった。桃原キョウは呆然として、ポツリと呟いた。

「……お前らいなくなったら意味ないじゃん」

ですね、と言う犬の相槌が余計空しさを加速させていた。

いやいやいや、人が折角訪ねてきているのに、あいつらがいなくなったら意味ないだろ！

アタシの名前は桃原キヨウ、別名桃太郎だ。どちらで呼ばれるかは人による。アタシは、桃原キヨウの方が気に入っているけどな。

「それで、どうしましょうか。桃太郎様？ あいつらがいなくなってしまうてはここに来た意味はないのですが」

こいつの名前は犬。本名は忘れた。でも別に私もこいつも困っていない。だってこいつはアタシの飼い犬で、こいつはアタシの番犬なんだから。

アタシは頭を？きながら、その問いに答えた。

「いや、別に遊びに来たわけであって、特に理由なんかないんだけどな……。ここで帰ってもいいんだが……」

ここは鬼ヶ島。悪の具現とも言える鬼が住まう場所。そして、かつて桃太郎が滅ぼした地。

ここでアタシは罪を犯したんだ。たった一つの、大きな罪を。この島の中央にそびえたつ巨大な塔を見つめて、私は決心した。

「そういうわけにはいかないか。ケジメをつけないとな……。よし、行くぞ、犬」

「はっ？ どこに？」

「お前、そんなもん決まってるだろ」

鬼ヶ島の中央、塔へ。

「いやあ、よく来たな、桃太郎。僕は君を歓迎するよ」  
「……」

鬼ヶ島中央塔最上階、長老の間。そこにいたのはたった一人の人間、いや、鬼か。名前は確か……鬼珠童子と言ったはずだ。かつて鬼の三頭と言われた、長老の一人。アタシはこいつを知っている。でも、あれ？ こいつ、こんなにも老けていたっけ……？

「……そんな陳腐な挨拶はどうでもいい。そんなことより」  
犬の肩がわなわなと震えている。いつもアタシの二歩下がってついてくるこいつにしては珍しいこともあるもんだ。でも仕方ないか。だってここ……

「歓迎しているというのならこの結界を解かんか！」

そうなのだ。ここに入った瞬間、アタシたちの周りに見事なまでに結界が張られ、アタシたちは入り口付近で拘束されているのだ。なるほど、こりゃ見事な結界だ。四重、いや、五重結界まで張られているか。これを壊すのはアタシでも数分はかかるだろう。犬はガミガミ怒っているが、鬼珠の方はのらりくらりとそれを笑ってかわしていた。果てには、用心深さが長生きの秘訣じゃよ、とまで言っていた。

「それで、何用でここまで来た？ もはやここはお前の根城ではないぞ、桃太郎」

突如、ガラリと空気が変わった。鬼珠が座りなおしたせいだ。鬼珠は見るだけで人を殺せそうな眼光でこちらを睨んでいた。犬が押し黙ったのも頷ける。これほどの威圧感、流石鬼の長老と言ったところか。アタシはそいつに向き合って、話し始めた。

「……別にアタシは何をしようって気はない。ただあの時のケジメをつけに来ただけだ」

「ほう、ケジメとな。一体何のケジメじゃ？」

「あの時戦ったんじゃないかって、お前らを壊したことだ」

アタシは続ける。

「アタシはさ、どうしようもない奴なんだ。生まれてから初めて覚えたことは物を壊すこと。自分の周りに物があるのが許せなかったんだ。だから物でも、魔物も、人でさえ壊し続けた。そんな生活が六年続いた時、アタシはとある最強と出会ったんだ」

おじいさんはその拳を難なく受け止めました。

「……そいつは強かった。ただ壊すだけしかできなかったアタシの拳を受け止めたんだ。そして、何を思ったのかアタシを拾ったんだ」

名がないのか？ ならば儂がつけてやろう。お前の名前

は桃太郎、今日から儂の子じゃ！

「ただ壊すだけだったアタシに爺は戦うことを教えてくれた。互いの尊厳をかけて戦う大切さを教えてくれたんだ。アタシはそいつに育てられた」

「……それで、戦うことの大切さを知ったお前は何故鬼ヶ島を壊した？ お前が戦っていれば、あんな結末にならなかつただろうに」

鬼珠の言葉が容赦なく突き刺さる。

……そうだ。アタシが戦うことを思い出していれば、あの鬼は死ぬことはなかつたんだ。

「……爺は死んだ。今までアタシを止めてくれた奴がいなくなったから、アタシは止まらなくなった。アタシは次第に戦うことと壊すことの境界が分からなくなって、アタシは狂っていった」  
「お前は止めてくれる人がいないから狂ったと言っのか？ そんなもの、子供でも通用しない我侭だぞ」

犬の表情が明らかに暗くなっていく。

……ああ、そうか。こいつはアタシの近くにいたんだ。アタシを止められなかったんだ。

「犬、お前のせいじゃない。ただアタシがバカだったんだ。……アタシはお前らを壊した罪がある。だからその罪を償わなくちゃいけない」

アタシは地に膝を付き、頭を下げる。そして奴の目の前に自分の刀を置いた。

犬が慌てて止めようとしているが、邪魔をするなど睨んだ。これはアタシの業なんだ。

「すまなかった。アタシは償いきれない罪を犯した。本当にすまなかった」

俗にいう土下座という物だ。もちろんこんなことで許してもらえないとは思っていない。しかしこれをしなくては何も始まらないんだ。

桃太郎にケリをつけて、桃原キヨウを始めるために。

アタシのそんな姿を見て、鬼珠は何をしようとはしなかった。ただ冷涼に、冷やかにアタシのことを見つめていた。

「頭を上げよ、桃太郎。お前は今償えない罪を犯したと言っただな。」

当然じゃ。お前の罪は償えきれず、いくら転生しようとその罪からは逃れられぬぞ」

鬼の言葉がアタシに容赦なく突き刺さる。アタシはそれを耐えるしかなかった。

「泥水にいくら水を加えようとそれは泥水に過ぎず、人はそれを飲むことは出来ぬ。……お前が犯した罪はたった一つ、とある鬼を壊したことでじゃ。しかしそいつを壊したことは、数えきれないほどの鬼を悲しませることになった」

そう、アタシが実際に壊したのはたった一人だ。アタシはそいつを忘れないし、この島にいる全員も忘れることはないだろう。

たった一人、茨木童子という存在を。

「立ち去れ。お前の罪を償う方法はない。金太郎たちのお陰で人間への恐怖はだいぶ薄れたが、それでもまだ消えぬ。またお前を殺したいと思っているものもまだいることは事実。早く立ち去って、己の巢へ帰るがよい。それが僕たちにとって最も良い道じゃ」

触らぬ神に祟りなし、ということか……。そりゃそうか。この爺だつて変な騒ぎを起こしたくないもんな。

アタシは桃花を手に取ると、ゆっくり立ち上がった。

「……犬、帰るぞ」

「えっ……よろしいのですか？」

「いい。たった一日で償える罪とは思っていない。……じゃあな、鬼珠。また来る」

桃太郎はそう言い残してその部屋から立ち去って行った。ピンと張りつめた空気は消え去り、ようやく鬼珠は一息つくことができた。鬼種は椅子の背に身を預け、ポツリと呟いた。

「はっ、忌々しいことをいうもんだ。老人のいうことは聞くべきなのこの……」

茨木童子を亡き者にした罪は重い。だから変な意地は張ることなく奴は来るべきではなかったのだ。

でなければ、あの童子は爆発しないというのに……。

鬼珠は本日何回目か分からないため息をついた。

「うー……」

この日、幽鬼童子は朝から不機嫌だった。

別になんという日でもない。空はどんよりと曇り確かに気分は落ちこむ日ではあるが、いつもと代わり映えしない普通の日であるはずだ。

しかし、何故だろうか。自分の気分が優れず、何かに押し潰される様な感覚があるのは確かだ。一体何があるというのか、それが分からないことがさらに幽鬼の不機嫌さを加速させていた。

「どうしたの、ユウちゃん？ そんな唸り声を上げて……。栄鬼君がいないことがそんなに不満なのかしら？」

「煩い！ 栄鬼は関係ないやい！」

「はいはい。そういうことにしときましょ」

そういう幽鬼を担当するのは決まって彼女、妖鬼であった。彼女は

母性的な笑みを浮かべて、幽鬼の隣を歩いている。幽鬼が何を怒鳴るうが、何を言おうが彼女は笑って応えるだけであった。そういう寛容さが、幽鬼のお守りという最も難しい仕事を任されている所以なのかもしれない。

事実彼女といることで、幽鬼のイライラも少しは収まっていた。もし彼女がいなければとつくに爆発していたことだろうに……。

「なあ、よっちゃん。今日誰か来ているのか？」

「いや……そんなことは聞いてはいないけど。あつ、怪鬼なら何か知っているかもよ。ほら、あの人フットワーク軽いし」

幽鬼があからさまに嫌そうな顔をする。

怪鬼、というのは彼女らの同僚でとにかく謎という言葉が似合う女性であった。いつも図書館にいるくせに、自分たちの弱みは握っていて、さらには同僚の中で唯一の既婚者。

感情がストレートな幽鬼にとって、謎な彼女は最も苦手とする人物であった。

幽鬼はイライラをため込んだまま、塔の窓から外を見やった。

「どう考えてもおかしい……。こんなに圧迫されたことなんかないのに。誰か他の誰かが来ているとしか思え」

幽鬼が止まった。

ある存在を見てしまったからだ。幽鬼はその人間と十三年も前から会いたかった。会いたくて、会いたくて殺したいほどに。

ああ、血液が逆流してしまいそうだ。震える右手を抑えながら幽鬼は聞いた。

「どうしたの、ユウちゃん？」

「おい、妖鬼。あれ誰だか分かるか？」





「……いけない。栄鬼を呼んでこないと」

彼女を止められるのは彼しかいない。幽鬼のことを誰よりも分かり、同じ童子の名を持つ彼しか……。

## 桃章・邪しき神の直系

鬼が行きかう塔から延びる中央道、この日は市場もあることで鬼が賑わっていた。

その乱雑に行きかう鬼の間を縫って、高速で駆け抜ける影があった。幽鬼童子、普段ならば子供じみて、幼稚で純粋な彼女の顔は、今日は違っていた。

彼女を支配しているのは“破壊”。とある人間の純粋な破壊を望んでいる彼女は、むしろ本来な姿なのかもしれない。

彼女の破壊を止める鬼などいない。彼女の抑止力となっていた妖鬼は倒れ、栄鬼はこの島にはいない。誰も動き出した彼女を止めることなどできない。それが“爆ぜる鬼”の所以なのだから。そんな彼女についてくる影があった。影がついてくることは別段不思議なことではない。ただその影が異常なだけであった。

「……何のつもりだ、お前？」

今まで彼女を象っていた影が止まる。幽鬼の言葉とともに影は蠢めきだし、その姿を変えると影の中から一人の鬼が現れた。こんなことが出来る鬼は一人しか知らない。鬼ヶ島の六長の一人で、いつも人の影に潜んで覗きを試みる愚か者だ。

「よう、奇遇だな、幽鬼」

「……暗鬼、質問に答える。お前は何のためにその術を使ってまで私のことを追っていたんだ？」

鬼闘術・影撃<sup>かげうち</sup>

今ではこの男、暗鬼しか扱えない術である。その能力は文字通り、

敵の影に潜むという物。これを使って自分の影に潜んでいたことを幽鬼は最初から知っていたが、いい加減飽き飽きして呼び出したのだ。

暗鬼は白々しく答える。

「いやあ、偶には幽鬼と散歩してみるのもいいかなって思ってたよ。ほら、俺ってさ、結構ロリもいけると思うだよ。だから今日は俺とデートしようぜ、幽鬼」

「断る。他を当たれ。私にはやることがあるんだ」

「……お前、その眼は何だ？」

ちやらちやらしていた暗鬼の言葉が鋭いものに変わった。表情も真剣で、それだけで気の弱い人なら殺せそうだった。

しかし幽鬼にしてみれば、まるでお遊戯のような恐怖だった。

「その眼だけは許さねえぞ。お前はあの時栄鬼と約束したじゃねえか。お前はまたケダモノに戻る気が、幽鬼!？」

「煩い！ 私は確かに約束したさ。でもな、それは栄鬼がいるときだけだ。目の前に仇敵がいるというのに何故見逃せる？ 憎き者がいるのに何故復讐しない？ お前だってあれを許すことは出来まい！」

「……確かにそうだ。あの人を殺されたことは確かに悲しかった。怒った。憎いと思った。でもな、そんなことのために人生左右されてどうする？ 俺たちはもう過去に囚われてちゃいけないんだ！」

暗鬼の言葉は幽鬼には届かない。幽鬼の悲しみは誰もが分かっているから、彼女の気持ちというのは痛いほどわかる。

だが、それでも彼女を止めなくていいという理由にはならない。

「……幽鬼、お前は俺が止める」  
「ほう、お前に私を止められるというのか？ お前は、一度たりとも私の攻撃を見切ったことがないじゃないか」  
「それでもやらなくちゃいけない。栄鬼がいない今、俺たちがお前を止める」

なるほど、と幽鬼は納得する。  
目の前のこの男は軟派なくせに変な所で律儀な奴だと知っている。思ったより頑固で、そこが皆に買われていた。

しかしそれがどうした？ 自分の復讐の邪魔となるものは全て壊す。  
幽鬼が左手を差し出し、手のひらを向ける。塔の壁を破壊した時と同じように、空間を圧迫しようとした彼女の手が 何かに貫かれた。

「鬼闘術・一糾いとうじゆ」

「……!?!」

見えない何かが自分の手を撃ちぬいた。しかしその何かというのは彼女は理解していた。

声だ。圧縮された声は、鬼の皮膚をも貫く。しかし驚くべきところはそこではない。

そういう術があるのも知っているし、何より身近にその達人がいるからだ。

そんなことより、何故その達人が自分に向かって放ったのか、それが幽鬼の驚きであった。

叫び声の達人は、岩の上に立って自分のことを見下ろしていた。

「僕だつて長なんだ。どんなに怖くても、やらなくちゃいけないことがある。それが今だろう、ユウちゃん、暗鬼」

「一鬼！」

あんなに泣き虫で、あんなに頼りない一鬼が自分の目の前に立ちただかっている。

予想外の敵に、幽鬼は少々顔を曇らせた。

「……お前まで私を止めるのか、一鬼」

「当たり前だよ。僕たちは仲間なんだから」

仲間？

仲間なら何故自分の邪魔をするんだ？ 何故仇敵を討とうとしないのか？

幽鬼には分からない。こいつらが何故こんなことをするのか、何故、わざわざ殺されに来るのか。

どちらにせよ、邪魔なことに違いはない。

自分の復讐は止まらない。幽鬼は目の前の二つを障壁と捉えた。

「さあ、行くぜ、一鬼！」

「うん、暗鬼！」

「……いいだろう。だったら二人まとめて相手してやる。栄鬼の力がないから、不完全なものだがお前らを倒すということなら問題はない」

暗鬼は影に潜み、一鬼は息を大きく吸い込んだ。

この二人のコンビネーションは強力ということを知っていた。影に潜めば全てを破壊する叫び声から逃れることが出来るし、破壊しそこなった細部を暗鬼が補う。何よりこの二人の息のあった攻撃が、その強さに拍車を掛けていた。

影が襲い掛かり、叫び声が放たれる。

しかし、それでも本気を出した爆ぜる鬼には遥かに届かな

いのだ。

「 鬼闘術・凶鬼きょうき！」

衝撃音が鬼ヶ島を襲った。

まるで地震のようなその震えは塔の最上階にいる長老にも届き、その震えで落ちた湯呑を見て長老は再びため息をついた。

「アホ共が……」

幽鬼が塔の壁を破壊したのはほんの少し前。

いくら幽鬼が速かろうと桃太郎のもとにつくまでには早すぎる。となれば、幽鬼の進行を邪魔したものがいてそれと戦闘を開始したということだ。

長老の呟きは決して幽鬼に向けられたものではない。愚かにも、童子名を持つ鬼に挑んだ二人の長に向けられたものだった。

長老…… よろしいでしょうか……？

「ああ、なんじゃ？ 怪鬼」

長老の頭の中に言葉が響く。

断っておくと、これは長老がぼけたわけではなく幻聴でもない。

鬼闘術・幻戯げげ。対象者の脳内に直接言葉を訴えかけ幻聴による混乱や、最悪の場合には精神を崩壊させるという術である。

しかし六長の一人、怪鬼はこれを見事に調整し、離れたところでも会話できる、まるで携帯電話のように使うことが可能にしていた。

……まあ、この術のせいで余計気味悪がられているのだが、本人はまるで気にしていなかった。

一鬼、暗鬼、この両名が幽鬼と戦闘を開始しました……どうしましようか……？

「知つとる。そんなものここまで届いたわ。それにどうもせんていわ。幽鬼を止められる奴が今はいないんじゃないから」

自分では明らかに力不足である。歳のせいで体は上手く動かないので、幽鬼の目の前に立った瞬間殺されることは目の目を見るより明らかであった。

幽鬼を止められる力を持っているのは実の息子、栄鬼のみ。今あいつがいないことをここまで恨んだことはないだろう。

……では他の鬼はどうしましょうか……？

「ああ、そうじゃな。他の民を塔の南方に避難させよ。なるべく幽鬼たちと離れた方がいい。お主も安全なところへ避難せよ」

……分かりました

そこで交信が切れた。

長老は再び淹れなおしたお茶に一口つけると、ホツと一息ついた。お茶というのは人を和ませるが、残念ながら今回ばかりはその効果も期待できそうになかった。

「全く、童子名を持つ鬼と戦おうとするとは……愚か者め」

長老は忌々しげに呟いた。

何故ここまで彼が悩んでいるのか、少しここで説明しよう。

童子、という名前は寺院にいる雑事をする少年を表すが、聖人や賢者に与えられる高位を示す名前でもある。

では何故諸悪の根源と言われる鬼にその名前が与えられたのか？

それは他ならない、童子名を持つ鬼は鬼の中でも高位な存在だから



である。

この国には八百万と言われるほど神様がいます。水や火を司る神様や、太陽や月のような偉大な神様もいます。しかしそれらが全て善神と言われれば、決してそうではない。死の国に行った神様もいますし、疫病神のような神様さえもいます。

その中で邪しき神、すなわち得体の知れない何か。それでいて人々から畏敬を集める神がいた。人々は目に見えないその恐怖の象徴を“鬼”と呼んだ。

童子名を持つ鬼は全て、この神の血筋を受け継いでいるというのだ。すなわち邪しき神の直系、人を喰らうだけに留まらず、恐怖で人間を縛る鬼の原型とも言える存在。それが童子名を持つ鬼である。

……近年童子名を与えられた鬼は三人。

知恵の鬼、鬼珠童子

力の鬼、茨木童子

そして鬼の原型、酒吞童子

今ではこのうち二人は失われたが、その血は確かに続いている。神の血を引いている鬼はまだ存在するのだ。

だから　　童子名を持つ幽鬼に勝てるわけがないのだ。

「……」

とにかく幽鬼を止めないにしても、あの二人は救わねばならない。

こんな馬鹿なことで、優秀な長二人を失うのは痛すぎる。

長老がその重い腰を上げ、窓を覗き込んだとき信じられないものが目に入った。

「おいおい……嘘だろ？」

あまりの驚愕に脳細胞が活性化でもしたのか、柄にも似合わず若者の言葉が口から洩れた。それほど驚きには違いなかった。

桃太郎と、幽鬼童子が対峙していたのであった。

「アア？」

「どうかなさいましたか、キョウ様？」

アタシこと桃原キョウ、別名桃太郎は連れの犬とともに本土に帰る準備をしていた。流石のアタシでも何の準備もなしにここを渡るのきつい。どうやって帰るかだって？ そりゃ泳ぐに決まってる。

ところがその準備の最中、妙な感覚がアタシを襲った。悪寒のようなこの感覚は、アタシを不愉快にさせるには十分であった。犬は敏感にそのアタシの変化に気付いたようだ。

「いや、なんか嫌な匂いが漂ってきてな……なんか血の匂いっぽくて鬱陶しい」

「先ほどの爆発に然り、何やら変ですね、ここは」

確かにここは変だが、それとは何かが違う。何か、こう……災害が起る前兆というか、嵐の前の静けさのような感じだ……。

「……行ってみるか」

「えっ、行くのですか？ ……私が見に行きましょうか？」

「いや、いい。アタシも気になるから。……急ぐぞ、犬」

アタシは踵を返して、元の道に戻った。次第に元の道に近づいていくと、嫌な感覚が強くなっていく。こんな感覚は、初めてだった。

「……なんだ、こりゃ……？」

アタシの口からそう漏れたのも仕方がない。犬に至ってはその細い目を大きく見開き、大いに驚いていたから、反応できたアタシはただ冷静だということか。

中央塔に続くこの道、先ほどまでは多くの鬼で賑わっていたはずのここが今では完全に異世界と化していた。まるでペンキのようにべったりと辺り一面に塗りつけられている赤、地に伏してもはや虫の息となつている二人の鬼、そしてその中央に佇む小さな鬼……。

どこかで見た風景と酷似していたので、アタシは息を呑んだ。確かこの光景は、鬼ヶ島侵略の時の

アタシたちがその異界を目の当たりにしていると中央の鬼が振り返った。この異界で地で汚れていないものはないというのに、彼女の顔だけは純粹であつた。

「ああ、お前から来てくれたのか、桃太郎。悪いね、妙な邪魔が入って遅れてしまつて」

「お、お前……何をやつ

」

「鬼鬪術・白」

小さな鬼がその左手で空を握る。その瞬間、アタシの体が圧縮された

「ぐぼっ！」

アタシの体は何が起きているか分からないまま、その機能の何割かを失った。口からは血が漏れ、おそらくアバラ骨の何本かは折れているだろう。酷く痛むその体は、動かすだけでもさらに痛みを主張しだした。何とか体を起き上がらすと、その小さな鬼を見た。

久しぶりに味わった、壊れた実感だつた。

「キヨウ様！」

「来るな、犬！……お前、自分の名を名乗らずに攻撃してくるとはどういう了見だ？ 鬼とはいえどそれぐらい知っているだろう」

小さな鬼は表情なくアタシを睨んでいた。そして、その口を開いた。

「……お前はどっだったというのだ？」

「アア？」

「お前は自分の名前を名乗ってから、この鬼ヶ島を侵略したというのか、桃太郎？」

小さな鬼が歩き出す。一步一步、アタシのもとへ。近づいてくる彼女を見てようやく分かったことがある。

彼女は純粹ではない。歪な狂気を孕んでいるということ。

「どうなんだ、桃太郎？ お前は自分の名前を名乗ったのか？ お前は尊厳をかけて戦ったのか？ お前は 鬼を壊したんじゃないのか？」

「……テメエ、何もんだ？」

ザン、という土が掠れる足音とともに彼女はアタシの前に止まる。幼い顔立ちながら、かわいいというより美しいという言葉が似合う彼女は重々しく自分の名前を語った。

「私の名前は幽鬼童子。鬼鬪術の開祖にして、桃太郎の鬼ヶ島侵略の際、たった一人犠牲になった童子名を持つ鬼、茨木童子の娘だ」

茨木童子。

忘れるはずもないその名前。自分が桃太郎だったとき、鬼ヶ島を侵略した時、たった一人犠牲になった鬼。そして桃太郎の業。

「は！　そういうことかよ。それで、アタシをどうするつもりだ？」  
「……無論、壊しつくす。お前が我が父にしたように、私がお前を壊す。尊厳も建前もなくただお前を殺戮してやる。それが私の復讐だ！」

小さな鬼はそう宣言した。

この鬼はその小さな体でどれほどの悲しみを背負っているというのか、アタシには見当もつかない。しかし、一つだけ分かることがある。

桃太郎はこいつの大切なものを壊したということ。

「……いいぜ、やろう。犬、絶対に手を出すなよ」

「……承知つかまりました」

「幽鬼童子、と言ったな。お前の復讐を受入れるぜ。これが桃太郎としてのケジメの一環だ」

これはアタシの業だ。アタシが償うべき、狂ったことへの代償行為なんだ。本当はもつといい方法があるかも知れない。しかし、アタシはこれ以外の方法は知らないんだ。罪を償うというのなら、全力でこの鬼を相手する。

桃花を取り出し、構える。鬼もそれに呼応するように手を空に差し出した。

壊しあうアタシたちにもはや言葉は必要ない。壊しあうのに合図なんていらぬ。互いが破壊し始めたとき、それが合図なんだから。

「鬼闘術・白」

「は！ぶっ壊れるー！」

桃章：邪しき神の直系（後書き）

童子の説明は作者が勝手に考えた妄想です。いつもこんなことばかり考えているから授業に身が入らないんだよな……といつも反省しております。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

## 桃章：終劇への始まり

「空間を圧縮する力、か……」

犬は目の前の悍ましい力を見て、驚いていた。

空間を圧縮するということはこの世界自体に影響を及ぼすということだ。突然その空間がなくなれば、次元の法則が乱れるかもしれない。

それをあの鬼は乱発している。その異常な力にただただ驚くばかりであった。

「う、うう……」

「おい、まだ動くな。傷口が開くぞ」

血みどろの中で影が動く。それは鬼へと姿を変えると、犬の前に倒れこんだ。

暗鬼は自分の体が血にまみれようが幽鬼を止めようとしていた。

「いけねえ……。早く幽鬼を止めねえと……」

「それならば心配ない。キョウ様が受け止めてくれる」

「そうじゃねえよ！ あいつは止まらないんだよ！」

その鬼の鬼気迫る雰囲気、犬は首をかしげた。

「止まらない？」

「あいつは止まらない。……自分でも止められないんだ。それが爆ぜる鬼で、あいつの“凶鬼”だから……」



再び双方の拳が激突する。桃太郎と童子、この戦いはまだ始まったばかりだ……。

「ぶっ壊れるオオオオオオオ！」

「はああああああああ！」

双方の拳が激突し、規格外のエネルギーが生じる。その衝撃に巻き込まれないように、後方に跳んでそれをかわした。

桃太郎は幽鬼の想像以上の力に驚いていた。この小さな体にどれほどの力が内包されているというのか。あの金太郎でさえ自分の攻撃を止めることが出来なかつたのだ。自分が規格外ならば、間違いなくこの小さな童子も規格外であろう。それも、自分以上の。

……幽鬼からしてみれば、人間である桃太郎が鬼である自分と拮抗する力を持っていることが驚きなのだが、それはお互い様である。とにかく、力勝負では埒が明かない。幽鬼は左手を差し出すと、空を握った。

「鬼闘術・白！」

鬼闘術・白。幽鬼童子が最も得意とする、空間に干渉する技である。

鬼の力は滅びの力、というのならば鬼闘術・白はそれを最も体現に示したと言える技である。ある一空間を滅ぼし、空間に穴を開ける。まるで風船のように萎む空間を補うように周りの空間を巻き込み、空間を圧縮したように見えるのだ。

この技の強さは威力もさることながら、一番の脅威は“見えないこと”にある。空間が萎むまで、どこを対象にしたかは幽鬼以外誰にも分からず、敵はただ押し潰されるだけである。故に白の対象を桃

太郎と自分の間の空間に指定すれば

「こういうことも出来るんだよ」

「っ！？」

限定的な瞬間移動も可能である。

突然目の前に現れた幽鬼の蹴りに反応できるはずもなく、桃太郎は民家の壁まで吹っ飛ばされた。それでも幽鬼は止まらない。

「まだ私の復讐は終わらない。止まらないのが私だから」

壁に倒れこんでいるであろう桃太郎を追撃すべく、幽鬼は駆けだした。辺りはまだ土ぼこりが舞っていて桃太郎を確認することは出来ない。しかし、それでも幽鬼は止まろうとしなかった。

土を払い、幽鬼は一直線に進む。ようやく、桃太郎の顔が確認できた。

桃太郎は唾っていた。

「よう、お返しだ！」

「っ！？」

桃太郎の蹴りが幽鬼を襲う。

いくら力で拮抗していようと桃太郎にリーチで勝つことは出来ない。自分では予測外の蹴りに幽鬼もまた吹っ飛ばされた。

桃太郎は肩をポキポキ鳴らしながら立ち上がる。反撃はしてみたものの、自分の体も案外ヤバイ。先手の鬼闘術とやらに押し潰された体はいまだに治る気配はないし、こめかみを襲った先ほどの蹴りによって脳震盪もはなはだしい。体は休ませろ、と訴えかけていることが直に分かった。

しかしそれでも桃太郎も止まらない。ここで止まっては、あの鬼に

申し訳ないからだ。

「いいね。お前は最高だよ、幽鬼童子。でも、まだまだだろ？　まだオメエの復讐は止まんないはずだ。さあ、もっと潰し合おうぜ！」  
「……」

幽鬼童子は答えない。ただ立ち上がり、桃太郎を睨みつけるだけだ。その眼は赤く、血のように深紅色だ。

「 鬼闘術・凶鬼」

幽鬼の姿が消える。まるでそこにいなかったかのように、屋気楼のごとく消えた。

……おかしい。桃太郎がああ鬼の気配を感じることが出来ない。今までこんなことはなかったのに、何故……？  
桃太郎の強さとは第一に、その野生じみた戦いの勘である。敵がどんなに目に見えないとも、どんなに速く動こうとも桃太郎はそれを瞬時に把握できる。そんな獣のような勘が、この鬼には働かなかった。

「どこに、いやがる……？」

「もうだめだ……凶鬼は発動した。もう、幽鬼は止まらない……」

倒れている暗鬼が震えながらそう口にする。

「アア？　どういうことだよ、オメエ。止まらないってどういうことだよ？」

「さつきはまだ大丈夫だった。理性が残っていたから……。でももうだめだ。……幽鬼の“凶鬼”はさ、全てを犠牲にして加速するエンジン。そして魔力も、理性も、命も、思い出も喰らって走り続け

る怪物、それが幽鬼童子なんだ……」

鬼鬪術・凶鬼。世界最高の身体強化の術を使えるのは、今ではこの鬼しかない。

幽鬼童子。彼女が視認できない速さの中で空を握ると、周りの空間それ全てが歪んだ。

……懐かしい、夢だ。

まだ私は幼く、鬼鬪術の“き”の字も知らなかった頃のこと。私たち五人（栄鬼はこの頃から長老の手伝いをしていたので除外）はいつも一緒に、そして私たちをいつも見守っていてくれる人がいた。私のお父さん、茨木童子だ。

いつもは遠くから私たちの遊びを見ているお父さんが今日は違った。珍しく私たちの遊び場まで来て、こう言った。“君たちにプレゼントしよう”

「えっ、何々？」

そのころから何に対しても好奇心旺盛だった暗鬼が早速食らいついた。それを見て、満足そうにお父さんは答える。

「君たちはいずれ長になるべき鬼たちだ。だから君たちにこれを教えなければいけない。“鬼鬪術”を」

『きとうじゆつ？』

みんな一斉に首をひねった。お父さんは笑いながら、一人一人の頭を撫でた。

「鬼闘術は君たちに必ず必要となるものだ。そして君たち一人一人に個性があるように、君たち専用の技がある。それが何か教えよう。それが君たちへのプレゼントだ」  
「要するに、課題ってこと？」

妖鬼がお父さんに尋ねる。お父さんは笑って、その問いには答えなかった。

「暗鬼、君には“影討”を。これを使って覗きなんかしちゃだめだからね」

「おう」

……残念ながらその約束ははまだ効果を果たしていない。

「一鬼、君には“一糾”を。泣き叫んでばかりじゃいけないよ」

「うん」

だからそんなに素直に頷いたなら、約束を果たせつて！

「妖鬼、君には“幽玄”を。君は優しく、綺麗だからね」

「はい」

……この頃から妖鬼は一番まともだったに違いない。

「怪鬼、君には“幻戯”を。……悪戯しないようにね」

「……ふふっ」

怪しく頷く怪鬼。お父さんは不安げに、自分を納得させていた。

「そして、幽鬼。お前には……“凶鬼”を」

お父さんは今までのニコニコ笑顔を一転させて、まじめな顔で私を見つめた。

「いいか、幽鬼。この技はとても怖い技だ。でもこの力はいずれ必ず必要になる。だから教えておくんだ。……必要な時を考えて使うことを約束してくれるかい？」

お父さんの真剣な目に私は圧倒されるばかりであった。でもここでお父さんを心配させてはいけない。私力が強く頷くと、お父さんは再び笑い出した。

「それでこそ、俺の娘だ。その力はね、仲間が

」

……ああ、その言葉の続きはなんだっただろうか？

もう思い出も薄れてきた。凶鬼の蝕みは予想以上に早いらしい。

でもね、お父さん。安心してね。私はきつとうまくやるから。これをやり終えるまで私は絶対、止まらないから……。

周りの物が得体の知れない力によって壊れていく、というこの光景は桃太郎にとって爽快限りない物だったが笑ってばかりもいられない。

民家は木の屑に、地面は抉られ、もはやここは廃墟としか思えなかった。桃太郎は、倒れている鬼を犬に任せただ、その得体の知れない力を避け続けていた。

「おい、その鬼。どうすれば幽鬼は止まる？」

よけ続けながら桃太郎は問う。

正直に言うところの桃太郎はかなり危ない状況にある。今までの余裕は消え、額からは汗が止まらない。桃太郎はお手上げのこの状況から早く抜け出したかった。

……おっと、危ない。今の一撃も跳んでかわさなければ足が持つていかれていただろう。ただの乱発に過ぎなかった空間圧縮が必殺一撃に変わろうとしている。長期戦は明らかに不利だ。

「だから止まらないだつて！ 凶鬼は対象を動く限り加速し続ける。これが発動したら誰も止めれないんだ！」  
「……なんだ、それ？ そんな技、技じゃないよ。この技は致命的な欠陥がある」

何、という暗鬼の驚きの声が発せられる。今までこの術を止めて見せたのは栄鬼ただ一人。それもこの技に唯一対抗できる技を使った場合のみだ。

この女はどうやって、止めるというのか……？

「要するに、“止めれば止まる”んだろ？ だったら私が止めてみせるぞ」

あまりに単純な答えに暗鬼は絶句した。

「だからどうやって！？ どうやって止めるか聞いてんだよ！」

「……煩い。犬、そいつを黙らせる」

「御意」

短く発せられた了承の言葉とともに、暗鬼の口が防がれる。モゴモゴという暗鬼を、犬は無表情で抱きかかえていた。

……さて、煩い邪魔はいなくなった。桃太郎は精神を集中させ、今まであえて使わなかった桃花を構えた。

黒き日本刀、桃花はもはや自分の半身と言っても過言ではない。物心ついた時から肌身離さず持っていたこれを構えることで、桃太郎は一種の自己暗示にかかる。

曰く、自分は負けることはない、と。

曰く、自分に勝る敵はいない、と。

曰く、自分は最強である、と。

最強の自分に捉えられない敵はいない。ならば目の前の敵を捉えられないことはない。

桃太郎は気の向くまま、刀を振り下ろした。

「そこだ！」

「っ！？」

振るった先は何もないように見える場所、だがそこに確かに奴はいた。桃花の先には鬼の血が付着していた。桃太郎はニヤツと嗤う。しかしただで捉えたわけではない。迎撃された時の拳の衝撃が、桃花を伝って自分まで来た。どうやら凶鬼は速さだけでなく、力も強化しているようだ。びりびりと、いまだに痺れている自分の腕を見て桃太郎は覚悟した。

敵が全てを犠牲にするというのなら、アタシも犠牲にしなければならぬ。

「は！ まだ速くなるか！ ……おい、幽鬼童子。アタシはここにいるぞ。お前の父を奪った桃太郎は、ここにいる！」

桃太郎がそういった瞬間、四散していた殺気が自分に向かってくるようだった。

今までは捉えられなかった速度も、桃太郎はすでに攻略している。全力で桃太郎に向かってくる幽鬼も、それは把握していた。

それでも、こいつは全力で叩き潰す！

幽鬼は渾身の空間圧縮と、拳を同時に繰り出す。この連撃は止めることは出来まい！

幽鬼の全力攻撃に対する桃太郎の答えは

「っ！？」



自分の左手を犠牲にすることであった。

空間圧縮により手はすでに手としての機能を失い、幽鬼の拳によって肩まで抉られる。

それでも桃太郎は止まらない。止まるどころから桃太郎は嗤っていた。

幽鬼の動きが一瞬止まった。

「終わりだあああああ！」

「あつ……」

桃太郎は桃花を持つ右手で立ち止まった幽鬼を殴りつける。

白により壊され、何も無いところで彼女の体を止めるものはない。彼女はされるがままに吹き飛ばされた。

「幽鬼が、止まった……？」

信じられない光景だった。

凶鬼を使った幽鬼を止める、それも何一つ術を使わずに力だけで。常識を覆す、規格外な出来事だった。驚愕が収まると次の感情は歓喜だった。

「うおおおおお！ すげえええええええ！ あつ、いたた……」

「は！ だから言っただろ、アタシが止めてやるつて。……ああ、でも今のはヤバかったな。原型とどめてねえじゃん……」

いたた、と呟きながら犠牲にした肩を見る。

彼女の言うようにもはや原型を留めていないそれは確認するとさらに痛みを主張し始めた。桃花を杖代わりにして何とか立っている彼女にこれ以上の戦闘は不可能である。

しかし、そんなに都合よく敵が倒れてくれるわけもなかった。

「まだまだ……。まだ私は止まらないぞ。私は、絶対にお前に復讐すると、誓ったんだ……。絶対に、絶対に！」

幽鬼は立ち上がる。その表情に狂気と、憎しみを孕ませながら。

桃太郎は一息ついた後、再び桃花を構える。こうなればとことん付き合うつもりだった。しかし、再戦を始める前にどうしても聞いておかなければならなかったことがあった。

「どうした、桃太郎！？ もう戦意はないとかそういうことは言わないよな。早く来い、桃太郎！」

「……なあ、幽鬼。アタシは復讐が悪いことだとは思わない。どんなに道徳的に外れていても、それはお前の父親への変わらぬ思いだからな。……だけどさ、それは“今の仲間を犠牲にしてまで”復讐することだったのか？」

「……！」

驚愕、幽鬼の表情はそれ一色に染まった。

「周りを見てみる。これはお前の望んだ復讐だったのか？ 周りを地獄にしてもやるべきことだったのか？」

「あ、ああ……」

「幽鬼。お前の力はこんなことのために使うべきだったのか？」

幽鬼は崩れ落ちる。

私は、何をしていたのだろうか？ こんなことのために使う力だったか？

壁を壊し、家を潰し、そして長たちを破壊した。仲間である彼らに酷い目にあわした。桃太郎というたった一人の人間のために力を使

ってしまった。

昔父にどんな時に力を使うべきか教えてもらったことがあった。しかしそれも凶鬼のせいであまく思い出せない。それも全て、私のせいだ。

「だったら、私はどうすれば良かったんだ？ どうすれば、私は良かったんだ！？」

「……そんなもん決まってるだろ。お前は  
「お取込み中のところ悪いんだけどさ、そろそろ俺たちのことに気付けてくれない？」

突然の声に驚いて振り向く。そこには一人、赤い髪をした男が腕を組んで立っていた。

人を見下すような目に桃太郎は不快感を覚えた。

「テメエ、いつの間に？」

「さつきから。ああ、どこかで見たと思ったらお前は桃太郎か。なあ、何で鬼を滅ぼすお前がこんなところにいるんだ？」

「そんなのテメエには関係ねえだろ！」

こいつは誰だか分からないが雰囲気わかる。こいつは敵である、と。

気付けなかった自分への鬱憤もあってか、桃太郎は桃花を構え飛び出していった。

「オロチ」

だが、それは防がれた。

男と自分の間に刃が割って入ったと思うと、それはグニヤリと曲がり桃花に巻きついた。

目の前の異様な光景に桃太郎は驚愕する。

「はっ ……!?」

「へへっ、おい、スサノウ。こいつやっちまってもいいのか？」

「構わん。そいつはお前に任せる」

そう言つてスサノウと呼ばれた男は歩いていく。代わりに現れたのはもう一人の男……。

先ほどの赤髪の男を人と称するならば、新たなこの男は獣と評するべきか。まるで人間性の欠片のないようなこの男は舌で口を舐めると、ニヤリと嗤つた。

「へへっ、お前が桃太郎か……。 “似た者同士” 仲良くしようぜ」

「は！ ふざけんな。おい、犬。早々にこいつを片付けるぞ」

「御意」

今まで黙して状況を見ていた犬も動き出す。

犬は速さ、桃太郎は力。この二人にかかれれば壊せないものなどない。犬と桃太郎の剣戟は 蛇の如くうねる剣によって防がれた。

『なっ!?!』

「おいおい。もっと楽しもうぜ、桃さんとその家来さんよ」

「デメエ！」

桃太郎は再び襲い掛かるが、まるで別の生き物のようにつねる剣をなかなか攻略することは出来ない。

あの様子なら時間稼ぎになるだろう、と赤髪の男は視界の隅で戦っている三人を放つておいて自分の目的を果たすことにした。

目の前に、小さな影が立ちふさがった。

「おい、待て。お前！ どこに行くつもりだ？」

「……おいおい。俺に向かってその口ぶりはねえだろよ。テメエのことは知らねえな。まあ、取り敢えず“跪け”」

突如幽鬼に得体の知れない何かがのしかかる。

まるで自分の体におもりをつけられたように、自分の体が重くなる。気が抜けばすぐにでも倒れこんでしまいそうだった。

「く　　！？」

「お？ ……ああ、そうか。お前、童子名か。なるほど、神の直系であるお前らに対して神力はあまり通用しないってことね。なるほど、なるほど……」

「お、お前、何言ってる……？」

「となれば、命題はあまり効かないってわけだ。だったら脳に直接聞くしかないよな」

幽鬼は男に顔面を掴まれ、持ち上げられる。

男は術を唱えると、幽鬼の脳髓を探る。必要な項目はたった一つ、ある鬼のことのみ。

それと同時に幽鬼の頭の中に走馬灯のように今までの光景が思い出されていく。父のこと、仲間のこと、そして栄鬼のこと……。無理やり脳髓を探られ、幽鬼は声にならない悲鳴を上げた。

「　　！！」

「へえ、鬼丸童子はここにいないのか……。まあ、いいか。どうせここじゃ祭壇は組めねえし、取り敢えずは　　」

「あ、貴方は！」

驚きの声が出た方を振り向くと、老人が一人。赤髪の男はその老人には見覚えがなかったが、その雰囲気には見覚えがあった。

「お、そういうお前は鬼珠童子だな。おいおい、かつては鬼の三頭に数えられたオメエも墮落したもんだよな。昔は神に対しては牙を剥いたつていうのに、そんな様に成り果てたか。残念だよな」

「な、何のためにここに？ 何故貴方のような方がこんなところに

」

その瞬間、中央塔が真つ二つに割れた。

「うるせえよ。俺は用があつてここに来たんだ。オメエ如きが気にしてんじゃねえよ」

ズドン、と爆音を立てて塔が倒れていく。その目の前の信じられない光景に、幽鬼と鬼珠は口を開けて見るしかなかった。

「さて、鬼丸童子が俺のところに来るようにしとかなくちやな。人質でももらつておこうか。お前ら全員“止まつとけ”」

この男は何者なのだろうか……？

この男がそう唱えると、皆その通りになる。今の言葉も、この男が唱えただけで、暗鬼も一鬼も、そして長老までも動きが止まった。とにかく分かったことは幽鬼と桃太郎、犬の三人以外の動きが止まったことだった。

「な、何が起こつたんだ？ 全員止まつちまつたぞ」

「そういうオメエらはどうして止まんないのかね……？ まあ、いや。おい、オロチ！ オメエまで止まつてどうする！ 早く動け、このポンコツ！」

他の鬼と一緒に止まっているオロチを蹴り上げる。それでもなお止

まっているオロチをキャッチすると、一発殴ってから抱きかかえ空に浮かんだ。  
もちろん、飛べない桃太郎はそれを見て追いかけようとするが無駄なことである。

「あつ、テメエ待ちやがれ！」

「じゃあな、皆の衆。おい、その童子名、鬼丸たちが来たらこう伝えておいてくれ。“鬼ヶ島を返してほしくば天岩戸まで来い”とな。頼んだぞ」

そう言つて男は飛び去っていく。その光景を幽鬼と桃太郎は見ているしかなかった。犬は困惑気味に桃太郎に聞いた。

「……キヨウ様。どう、しましうか……？」

「クソツタレが！」

「……」

桃太郎は吼える。しかしそれこそ意味がないことは、彼女自身も分かっていた。

幽鬼は顔を歪ませ、苦痛に耐えようとしていた。

その後、数時間後に鬼丸たちが鬼ヶ島に到着し、事の次第を知つて再び旅に出る。しかしこれは鬼丸にとって、金太郎にとって、終劇の始まりに過ぎなかった……。

## 桃章：終劇への始まり（後書き）

次回から最終章に入ります。さてどうやってまとめようか、今から決めかねているところですが、何とか時間を作って頑張ります。

これからも御伽話をよろしく願います。拙い文章ながら、読んでくださいますようお願いしました。



## 第五章・第一話：取り戻すための旅

「な、何だよ、これ……？」

鬼ヶ島についた金太郎は愕然とした。金太郎だけではない。かくやも、ウラシマも、もちろん鬼丸もそうであった。

桃太郎の侵略から数ヶ月、ようやく鬼たちの生活が安定し始め笑顔が戻り始めた。それなのに、この惨状は何だろうか……？

民家は壊され、道は挟られ、さらに中央塔もなくなっている。まるで廃墟のようなその光景を見て、すぐに信じることが出来なかった。鬼丸は倒れこんでいる暗鬼と一鬼を発見すると、すぐにそこまで駆け寄り、問い詰めようとした。

「どういうことですか、暗鬼、一鬼……」

鬼丸の言葉が次第に小さくなっていく。

話しかけても反応がない。彼らは石像のように動かなかったのだ。

彼らだけではない。時間が止まったかのように、崩れ落ちる塔の土煙までも止まっている。

鬼ヶ島の時間が停滞していた。

「こいつらに話しかけても無駄だぞ、鬼っ子。何かの術がかけられているから」

「桃太郎！ どういうことですか!？」

鬼丸が振り返ると、桃太郎が壁にもたれかかって立っていた。ただし、その崩れかけの左手を抑えながら。その腕を見るだけで、この惨状の悲惨さを物語っていた。

桃太郎は吐き捨てるように、鬼丸の問いに答えた。

「アタシも知らねえよ。ただなんか変な奴が来て、この状況を作り出していったんだ。……ああ、止まっている鬼はこいつらだけじゃねえよ。避難した他の鬼も、あの鬼の爺までも止まっているんだ」  
「長老も!？」

鬼丸だけではなく、全員が驚いた。

長老と言えば、あのどこを攻めてものらりくらりとかわされ、そして時には腹黒い抜け目のない人物である。

その長老さえ文字通り敵の術中にはまったのだ。一体どんな強大な敵なのだろうか……。

「おゝい。みんな大丈夫かい？」

その時何ともこの場にそぐわない声が耳に届いた。

栄鬼童子、竜宮城とのとある一件でそこに出張することになった長老の実の息子である。同僚に恵まれず、何かと損な立ち回りの男だがその美形にいつも笑いを絶やさないような男の表情がこの日は反転していた。

彼はこの状況を誰にも説明されることもなく、察したようだった。

「幽鬼、これは、お前の仕業かい？」

「……」

幽鬼は答えない。ただ栄鬼を弱々しく見つめ、その口を閉ざしているだけだ。

見かねた桃太郎が何とか体を起こし、栄鬼との間を割るように入っ

「おい、それは違うぜ。……いや、違わないことはないか……。いや、それでもこいつは何もやってねえんだよ。こいつはただ変な奴に巻き込まれて」

「君は黙っていてくれないか、桃太郎。僕は今、幽鬼と喋っている」  
その言葉とともに桃太郎はおずおずと引き下がった。英雄ですら殺しかねない今の栄鬼とは関わりを持ちたくない。

「お前は僕と妖鬼に約束したはずだ。復讐をもうしない、と。もう昔は振り返らない、と。お前は十年やそこらで約束を破ってしまうほど愚かではないはずだよ。なあ、幽鬼、答えてくれないか？」

「……わ、私は、ただ……」  
「答える、幽鬼！」

栄鬼の、その強い言葉が引き金となったのか、幽鬼も爆ぜるように自分の内にある思いを打ち明けた。

「私は、我慢できなかったんだ！ お父さんを尊厳もなく壊し、さらには鬼ヶ島を奪ったこいつのことが！ 栄鬼だつて分かるだろ！？ こいつさえいなければ長老だつてあんな姿にならかった。こいつさえ、こいつさえいなければ！」

そう、桃太郎さえいなければ鬼ヶ島から追われることはなかったし自分の父、茨木童子も死ぬことはなかった。

何故その恨みを晴らすことがいけないことだろうか。純粋な父への愛から生まれた純粋な殺意、仮染めの正当性を得た復讐。当然、それを行った後はその罪を背負うつもりだった。敵も同意して、自分も罪を背負おうとしている。そのどこがいけないことだといつか……。

しかし、もちろんそれを許すような栄鬼ではなかった。

「……言いたいことはそれだけか、幽鬼」

落胆するように栄鬼は続ける。

「お前はバカだ。幽鬼。茨木さんはお前に強さとは何なのか、言っていたじゃないか。お前は何のための強さということをおぼれている」「っ……」

栄鬼の言葉に桃太郎は人知れず眉を顰める。その些細な変化に気付いたのは隣にいる犬だけであつた。

初めて鬼丸たちと対決した時に問われた言葉が思い出された。曰く  
貴方は何のために強さを求めるのですか、と。

確かに自分はその時から変わった。偶然とはいえど、創造の一面を持つ桃原キヨウとしての人格と交じり合い、ようやく人並みに生きる道が出来た。

しかし自分の目的は変わらない。“最強になる”という果てしなく、先が見えない目標は揺るぎなく自分の根幹に君臨している。だが  
最強になって何になるという疑問は今に払拭出来ていない。

最強になって何を指すのか、何のために強さを得るのか、その答えがまだ桃太郎にはなかつた。

アタシは、何処が変わつたというんだ……。

桃太郎が自分に問い詰めているその時、また黙り込んでいる幽鬼を放つておいて栄鬼がこちらに歩み寄ってきた。

「すまなかつたな、桃太郎殿。うちの幽鬼が迷惑をかけた」

「いや、それは別にいい……アタシにも責任はあるんだから」

「……ありがたい」

栄鬼が頭を下げる。本当に丁寧に、幽鬼を止めてくれたことを感謝

して。

しかし今の桃太郎には何も響かない。自分の命題めいだいに疑問に再び疑問を抱いてしまった彼女にとって、他のことなど全て平等にないに等しかった。

あの幽鬼が黙り込み、あの栄鬼が謝り、あの桃太郎が自分に疑問を持っていて、そんな異様な光景を目の当りにして、とても收拾しそうになかったので鬼丸は単刀直入に聞くことにした。

「それで、キョウ。この騒ぎを起こした犯人とやらは誰なのですか？ 私たちの知っている人？」

「いや……アタシもそいつは知らねえんだけど……。そうだ、鬼丸。お前になんか伝言頼まれたぞ。確か“鬼ヶ島を返してほしくば天岩戸まで来い”ってよ」

「天岩戸だつて？」

その場所にいち早く反応したのは栄鬼であった。

「知っているのですか、栄鬼さん？」

「……そこは確かこの国の神域だったはずだ。そこを指定してくるとなると、敵は神に仕える者……もしくは」

「もしくは？」

「神そのもの」

皆が一樣に押し黙る。

今まで神という物と自分たちは多く関わってきた。かぐやと月詠様、ウラシマと竜神様、しかしその二人とも敵として関わったことはなかった。

今回の敵は神、またはそれに匹敵するもの。皆が緊張するのも分かる。しかしそんな中、一人だけ今にも飛び出していきそうな鬼がいた。

鬼丸童子である。

「行きましょう。鬼ヶ島を取り戻すために、敵をぶつたおしに行きます」

「ちよつと待って、鬼丸君。相手は鬼ヶ島に喧嘩を売るような強者だ。取り敢えずここは冷静になろう。敵の要求にすぐに答えてはいけない」

「では、どうします？ 長ばかりか長老さえ動かない。こんな状況で私たちが何かできるとは思えません」

「……何とかしてみよう」

そう言つて栄鬼は固まっている長老のもとに歩いていく。そしてその顔に手を当てると、短く言つた。

「鬼鬪術・命想めいそつ」

その瞬間、栄鬼の手が光りだす。彼の口から放たれる念仏は途切れることなく、神聖さすら感じられる光景であった。

……しかし残念ながらそれを初めて見て分かる人間はここにはいなかった。ポカンと口を開けてそれを見守っていた。

「……おい、あいつ何やってんだ？」

「栄鬼特有の鬼鬪術です。栄鬼は接触した相手の生命に直接干渉できるんですよ。それを増幅することも奪い取ることも出来る。おそらく生命に干渉して動かそうとしているのではないでしょうか？」

「ああ、だからあの時……」

妖鬼の説明に金太郎は納得する。

以前、天人を追う時に幽鬼と栄鬼に手伝ってもらって時があった。

その際、二人は突然に口づけしていたのだが、なるほどこの術のた

めだったのか、と金太郎は分かった。

……しかしそこまでする必要があったのかどうかという疑問が生まれた。あそこまでしなくて良かったんじゃないかな、と思っっているうちに命想は終わったようだった。

玉粒の汗を額に滲ませながら、栄鬼は振り返る。

「……ふむ、手応えはあった。しかしもう少し加えないといけないらしい。それにこの人数だ。ちょっと時間がかかるかな」

「ではやはり原因を元から絶たないと。行きますよ、キンタ、かぐや、ウラシマ」

いつものように三人の声が聞こえてくるはずだった。

何の疑問もなくついてくれるかぐや、口では何かといいながらも結局ついてくるウラシマ、その二人の音が聞こえてこない。ただ金太郎の“応”という声が響いているだけだった。

振り返ると、ウラシマの姿も見えない。いつの間にかどこかに行っただようだった。かぐやはそこにいるのだが、何か様子がおかしい。まるで何かに怯えるような、左手が少しだけ震えていた。

「どうしました、かぐや？ 顔が真っ青ですが」

「いえ……大丈夫です。もちろん、行きますよ」

「って、ウラシマは？」

「僕ならここだよ」

能天気な声が中央塔の瓦礫の山の上から聞こえる。見れば、小さな体が何かを探しているようだった。

「いつの間に。お前も行くよな？」

「……まあ、ね」

いつもより乗り気でない返事の仕方に金太郎は疑問を覚える。まるでこの事がどうでもいいような、つまらなさそうな彼の表情が目から離すことが出来なかった。

「アタシも行くぞ。あの蛇野郎を一発殴らなきゃ気が済まねえ。犬、ついてこい」

「御意」

「幽鬼、お前も行きなさい。決してお前だけの責任ではないが、お前は力の使い方を誤った。その責任を負わなければならない」  
「……うん」

幽鬼は力なく頷く。栄鬼もついていきたいところなのだが、そういうわけにもいかない。このまま止まっている皆を放つてはおけないし、何より幽鬼はもはや子供ではない。罪を背負うというのなら、自分の口出しする問題ではない。  
幽鬼はそれが分かっていいたから口出しはしなかった。

「では、みなさん。行きますよ」

こうして鬼丸たちと、桃太郎、そして幽鬼を含めて、鬼ヶ島を取り戻すための旅が始まった。しかし鬼丸はこの時、皆の気持ちが崩れそうになっていることに気が付けなかった。

「なあ、スサ。本当にこんなことやる意味あったのか？」

ここは天岩戸。この国において神域に指定された聖なる場所。普段はその神聖さゆえに、この国の最高権力者、御門でさえ特別な時しか訪れないこの場所に今日は二名、来客があった。



その洞穴のような岩の上に座っている男の名前はオロチ。浮浪者のようなボロボロの、一枚の布に近い服を身に纏い、獣のような鋭い目が特徴的な男である。その獣じみた男が問うのは、それとは対照的な高貴な外套を纏う赤髪の男であった。

赤髪の男、スサノウは答える。

「ああ、あるぜ。というか、お前が戦うこと以外に興味を持つなんて珍しいな。変なものでも食べたか？」

「別に。ただお前が言うその鬼がお前のお眼鏡に敵うほど、強い奴かって思ってたね。そうだとしたら、俺が……」

「おいおい、やめてくれ、あいつを壊すのは。というか、あいつはそこまで強くねえよ。強くないから、オメエには桃太郎を任せただ。あいつならお前の暇つぶしになるだろ」

確かに、とオロチは納得する。

鬼ヶ島に行ったときは齧る程度しか戦うことが出来なかったが、その些細な触れ合い（ころしあい）の中でも自分の興奮は止まらなかった。今でもその残滓があつて、息が荒いのはそのせいである。

もし本気で殺り合ったらどうなるのだろうか。想像するだけで疼きが止まらない。口端が歪むのが自分でも分かる。何かあつた瞬間には目の前のスサノウすら殺しにかかりそうな勢いである。もちろん、返り討ちにあうのは明確なのでそんなことはしないのだが。

何とか気を紛らわすために、スサノウにふとした疑問をぶつけることにした。

「強くなくて、この世界を救えるのか？」

「お前は単純だな。強さが全てだとは思わな。……この世界を救うのは、強さだけじゃねえ」

オロチはスサノウが何を言っているのか分からず、首をかしげる。

そして別にそれで良かった。このオロチは何も知らずに、自分についてきてくれればそれで。だから戦うことにしか興味のないこの男を連れてきたのだった。

スサノウは何かを察知したのか、外套をなびかせて動き出した。

「さて、そろそろ動くか。盛大なお出迎えの準備をしなくちゃな」

「……神が動いていいのか？ お前、自分で神はあんま動いちゃいけないって言うてたじゃないか」

「この程度は動いたうちに入らねえよ。というか、俺の動きが制限されるのは、世界に干渉するときだけだ。俺たちは直接この世界に干渉できねえ。だから、鬼丸というギリギリの存在を使っただよ」

当然、オロチにはこの意味を理解できまい。

「……はあ？ 何言ってるんだ？」

「ははっ、オメガには分かんなくていい。お前は自分のやりたいことをやればそれで。」

さあ 宴の準備だ」

スサノウは嗤う。ようやく自分の理想を叶えられるのだと。その歪んだ笑みを知るものは誰もいなかった。

**第五章・第二話：爽やかな風と一波乱の予感（前書き）**

PV3万、ユニーク1万突破、ありがとうございます！

これからも駄文ながらも頑張って書き続けますのでよろしくお願  
いいたします！

## 第五章・第二話：爽やかな風と一波乱の予感

鬼ヶ島を取り戻すために出発して早三日。鬼丸たち一行は神域、天岩戸に向かつてひたすら歩き続けていた。金太郎は別に歩くことに文句はない。自分は慣れてるし、何より皆と一緒に旅をするということが好きだからだ。

しかし今回は少し趣が違う。いつもと違う雰囲気に体力よりも、精神がすり減りそうであった。というのも……。

「……………」

「……………気まずい」

誰も喋らないからだ。

鬼丸は元から喋らない性質たちなので期待はしていないが、鬼ヶ島を再び襲われたことで珍しく激情しているようだった。雰囲気が近寄りやすい。

かぐやとウラシマも何やら変だった。かぐやは何かに怯えるように時折震えて後ろを気にしてばかりいるし、ウラシマはといういつものニヤニヤ顔が何処か黒く感じる。これは自分の心境を表しているのか、それとも彼が何かを隠しているのか分からなかった。

そして何より桃原キヨウと幽鬼である。自分たちがいなかったときに何があつたかは知らないが、とにかく彼らの間の空気が悪い。火花さえ散りそうなその雰囲気に、金太郎の精神は摩耗していた。とにかくこの場から抜け出したい。その気持ちだけで、この中で比較的まともそうなウラシマに話しかけた。

「な、なあ、ウラシマ。敵はどんな奴なんだろうな？ 鬼ヶ島を攻める奴なんて物凄く強い奴か、余程自意識過剰な奴だろうな」

「おい、それはアタシのことか？」

……いかん。今のは失言だった。桃太郎のこちらを睨む視線が痛い。今にも殺されそうだ。

しかしそれを無視してウラシマはその問いに答えた。

「さあね。でも敵は神様ってことはないんじゃないかな、って僕は思っただけどね」

「えっ……どうして？」

金太郎は素直に尋ねる。ウラシマはふう、と大げさに肩を落とすと仕方なさそうに話し始めた。

「キンちゃんも勉強不足だね。神様ってというのはね、何でも出来る代わりにこの世界に干渉できない存在なんだよ」

「どういうことだよ？ 今までツクヨミ様だってリュウ……竜神様だって俺たちの前に現れたじゃねえか」

「あれは干渉したんじゃないよ。ただ現れたただだよ。あの方たちは何もやってない」

あつ、と金太郎は声を漏らす。それに気付いた金太郎の反応に満足したように、さらにウラシマは続ける。

「神様ってというのは何でも出来る。一説によれば僅か七日足らずで世界を作ったらしい。そういう存在がたくさんいたら、この世界だって困るだろう？ 何度も世界の根幹から変えられては安定することなどできない。だから何も出来ないように、この世界は制限を加えたのさ。全てのことが出来るから淘汰されるといっても皮肉だけだね。……もしもこの世界に干渉しようとする神がいたら、それは世界によって排除される。だからその禁忌を犯そうとする神様はいないと思っただ」

「なるほど……そうなのか」

「でもね。もしも神様だったら……」

ウラシマは声を潜め、金太郎を見つめる。その表情はニヤリと、本当に楽しそうだった。

いつの間にか金太郎だけでなく、全員が聞き耳を立てていた。

「それすら捻じ曲げられる強い神様なのかな……ってね」  
「……」

ウラシマの言葉に皆が押し黙る。

もしその狂言が本当だったらどうするのだろうか。相手は神、それも最上位の存在だったら自分たちが敵うはずもない。鬼丸は眉を人知れず顰め、流石の桃太郎もその嫌な現実から抜け出したかった。再びピンと張りつめた空気になったことを少し後悔して、ウラシマは冗談めかしく言う。

「……なぐんで。そんなことあるはずもないよね。神様が現れること自体稀だし。やっぱりキンちゃん言うとおり、敵は余程のバカなんだろうね」

「おい、だからそれは誰のことだ、ウラシマ」

「はいはい。愉快的な会話はそこまでです。歩き続けて約三日。そろそろ天岩戸が見えてきてもいい頃だと思っんですが……キンタ、今どの辺りか分かりますか？」

「いや……栄鬼さんから渡された地図も曖昧だしな。今どの辺りにいるかはちょっと……あつ、でも何か見えるぜ。人影のような何か……」

地平線の向こうに確かに何か黒い影が見える。

こんな何も無い、ただ平坦な道の中ではただの人に会うだけでも安

心する。金太郎は少しホツとした。  
しかし視力5・0の桃太郎と、人間離れた感覚の持ち主の鬼丸にはそれが何なのか、すぐに分かった。

「……おい。あれはただの人影じゃねえぞ」

「ええ、確かに……ただの人影じゃないですね」

影がだんだん近づいてくる。轟音と土煙と、ただならぬ雰囲気と共に。

ここまで来ると金太郎たちにもそれが何か分かった。取り敢えず、自分たちにとつて都合の悪い物なのは確かである。地鳴りのような声も聞こえてきた。

『うおおおおおおお！！』

「うん。ざつと見て200人はいるかな？ こっちに向かってきてるよ。どうしようか？」

「そんなもん決まってるじゃないですか……」

鬼丸がげんなりしながら言う。

これ以上鬼丸に言わせるのも悪い。というわけで金太郎が彼の、いや、みんなの気持ちを代弁することにした。

「逃げるおおおおおお！！」

その掛け声とともに皆が来た道を全速力で戻る。なぜ逃げるかは知らないが、何となく嫌な予感が皆の脳裏に走っていた。

「……ってあいつら馬持つてんぞ！」

「そんなもん勝てるわけないじゃないですか！」

「安心しろ、相手が馬ならこっちは犬だ。おい、犬。何とかしてこ

い

「……我にどうしろと？」

確かにそうだ。犬一人では何も出来まい。発言した桃太郎本人もそう思った。

と、そうこうしているうちに囲まれてしまった。馬に乗っている敵つい男たちに囲まれて、鬼丸たちはその円の中心にいた。

「ちっ、囲まれたか……」

「おい、こいつら全員ぶっ倒しちまっつていいのか？」

「状況によつては止むを得ないですね。キョウ、やっってください」

「おい、ちよつと待て！ 早まるな！ まず話し合いをしてだな……」

「おや、かぐや殿ではないですか！」

ギャーギャー騒ぎ合う金太郎たちをよそに、何ともさわやかな声がかぐやに向けられる。

聞き覚えのない単語を耳にして、皆が声のした方向を向いた。

『かぐや殿？』

「あつ……お久しぶりです。御門、さん……」

男が一人、馬から優雅に飛び降り挨拶をする。五月の風のようにさわやかな男は、本当にうれしそうにかぐやに話しかける。

しかしかぐやの方はというと、顔を引きつらせながら形式的に優雅にお辞儀する。このかぐやにこんな表情をさせるなんて、察するに余程この男のことが苦手らしい。

金太郎はこの容姿端麗という言葉が似合う男と面識があった。というのは、彼が金太郎にとって上司にあたる存在だからだ。

そう、目の前の黒色の外套を羽織っているこの男こそが、御門



。

「……って誰だ？」

「ええ！？ お前、知らないの？ 御門様だよ、御門様。この国で一番偉い人、御門武様みかどたけら」

金太郎から説明を受けても、桃太郎は知らんと言う。

しかし普通ならばそんなことはあり得ない。なぜならこの男は金太郎の説明通りこの国の最高権力者にして、全ての退魔師の祖、そして神の血を引いているとも言われる世界で最も有名な一族の一人だからだ。もちろん国民のほとんどはその存在を知り、他の国でもその容姿と共にその名を知らないものはいない。

そして、その御門の次期当主が月から来たとあるお姫様に入れ込んでいることも、周知の事実であった。

「本当に久しいですね。天人が貴方を迎えに来たときはもう貴方とは会えないと思っていましたが、また会えるなんて……これも宿縁ああ、いつ何時も貴方は変わらずに麗しい」

「まあ……歳取りませんし、ね……」

突然いなくなってしまった恋しい相手を目の前にして、男は止まるわけもない。矢継ぎ早にかぐやに話しかけ、かぐやはそれを何とか対応していた。周りを取り囲んでいる男たちと共に、かぐや以外のメンバーはどうでもよさそうに傍観していた。

しかし、そんな様子を見せられて面白いわけもない存在が一人いた。

メキヤッ！

「おや、デザートイーグルのグリップが壊れてしまった。おかしいな。このグリップはインド象に踏まれな限り壊れないはずなんです。少し直してきますね」

「あ、ああ……。ゆっくり、な……」

鬼丸はそう言つて座り込んで、自分の愛銃をいじり始めた。

御門という最高権力に反抗するのも、かぐやの立場を悪くすることになる。それを分かつて鬼丸は敢えて何もしないのだろうが、こっちの方が金太郎にとっては怖かった。

「貴方のような人がこんなところにはいけない。さあ、私の後ろに乗ってください。私の部屋でゆっくりとお茶でも飲みながらお話を」

「あの……ちよつと用事がありまして……」

バキッ！

「おや、ドライバーが折れてしまった。どうしてかな？ そんなに力を込めてないはずなのに」

「もうやめて！ 自分のフラストレーションを物にぶつけるのはやめて！」

「ん？ その声は坂田金太郎、かな？」

しまった、気付かれた……。と金太郎も肩を震わせる。かぐやとは違う意味合いで、金太郎はこの男が苦手なのだ。

全ての退魔師の家系は言つてみれば御門の分家である。退魔師の中で血の繋がりというのは非常に大事にされ、宗家と分家の隔たりは特に大きい。そういう意味で、金太郎はこの男には逆らえなかった。

「は、はい！ 坂田金太郎、ここに参上しました！」

「顔を上げてくれ。……君と会つのも久しぶりだな。かれこれ……四年くらいになるかな？」

「は、はい。それくらいになります。……それで、今日は何用でこんなところまで」

「ああ、ちよつと調査にな」

調査、という言葉に金太郎は首をかしげる。

御門が動くような事件とは一体何なのだろうか。そんな災害レベルの魔なんて聞いたことが……

「どうやらここらあたりに鬼が出たという情報を聞いてな」

「……（ビクッ！）」

「しかもそれはどうやら童子名を持つものらしい」

「……（ギクッ！）」

「というわけで坂田金太郎殿、このあたりに鬼を見なかったか？」

貴方の目の前にいます。それも二人。

……とは口が裂けても言えなかった。金太郎が必死に我慢しているのに気付かず、御門は語り始める。

「いや、今回は本当に残念な事件だった。まさか坂田殿が鬼に殺されるとはな。本当に惜しい人を亡くした……」

……今ちよつと聞き取れなかった。この男は何と言っただろうか？

「……えっ？」

「何だ、聞いてないのか？ 今回の情報元は坂田金剛殿、すなわち貴殿の兄上からだぞ。父の凶報は聞いていないのか？」

「いえ……でも、それは……」

「鬼にやられたものだとは私は聞いている。……まあ、鬼のことだ。

もはや鬼ヶ島に帰っているところだろう。しかし私たちも

「

今御門様が何かを話してらっしゃる。それに集中して耳を傾けなくてはいけない。

しかし今金太郎の思考を覆っているのは自分の父親のことと、その殺した鬼のことであった。あの時屋敷にいた鬼は、鬼丸ただ一人のみ。目的のために人を殺すことも厭わない鬼丸なら十分考えられる。しかし鬼丸が自分の父親を殺すなんて、そんな……。それが本当だったら自分は。

「 というわけだ。聞いていたか、金太郎殿？」

「 えっ……ええ、はい」

「 ……ふむ。まあ、修行中とはいえ、一回は家に帰ると良い。私たちもそれそろ帰るつもりだ。……それでは、かぐや殿。またお会いした時にお食事でも」

「 は、はあ……楽しみにしています、よ？」

では、とさわやかな声と大軍のけたたましい音とともに御門は去って行った。

あつという間に現れ、あつという間に去って行った彼らを見て、桃太郎は呆れるように唾を吐いた。

「 どんだけ従者が多いんだよ。どう考えてもあんなにいらないだろ」  
「 まあ、腐っても三大国の最高権力者だからね。あの人に何かあつたら困るのは周りなのさ。しかし名目上は鬼退治と来たもんだ。全ての退魔師の家系が一人ずつ護衛を送ってもまだまだ足りないだろうね」

「 ちっ、忌々しい。鬼退治だなんて馬鹿げてる。……それよりもかぐや、あのウスラボケに何もされませんでしたか？」

ええ、と疲れ気味かぐやは答える。本当に苦手だったのか、老いない彼女の顔が何処か老けて見えた。

「 あゝあ。日が暮れちまった。今日のところはこの辺で野宿か？」

「まあ、そうですね。では夜番は昨日の続きということ、ウラシマ。お願いしますよ」

「ええ〜！ また僕？ ローテーション早くないかい？」

ウラシマが何かを叫んでいる。

しかしそれを気に掛けることが出来るほど、今の金太郎に余裕はなかった。思考が完全に停止していた。

「キンタ、どうしました？ 早く夕食作りますよ」

「あ、ああ……今行くぜ」

鬼丸に呼ばれて初めて動き出す。

鬼丸はいつもあの時から変わらない様子だ。基本的に無表情の彼の考えを読むことは難しい。だが、それでも金太郎は鬼丸が何をしたのか知りたかった。鬼丸が坂田の屋敷で何をしたのか、何で親父を殺したのか。

しかし聞いてはいけない気がする。なんとなく、これを聞いた時に自分と鬼丸のこの関係が崩れる気がする。聞かすにおくか、聞いて壊れるか、金太郎には選べなかった。

どういうことだよ、鬼丸……？

夜、野営をしている御門の軍を見下ろす影が一つ。その影は月を背に宙に浮かんでいた。

「御門直属の軍隊、か……。いいところにいい駒がそろってんじやねえか」

影の名前はスサノウ。焰のように真っ赤な髪を風になびかせるその

様は、御門武と同等、それ以上の高貴さが漂っていた。スサノウは顎に手を当て、考えるような素振りを見せるとその口がニヤリと歪ませた。

「俺もすんげー遠い親戚だけだよ、でも一応は御門の“叔父さん”なんだ。だから半分くらい使う権利はあるよな」

そんな理屈とは程遠いことを言っつて、スサノウは宙に何かを描きだす。ざっと見て200人。この人数に術をかけるとなると多少は準備が必要である。男はまるで筆を操るように指で書き終わると、手を合わせて詠唱した。

「さあ、“俺に従え、駒共”」

## 第五章・第三話：俺たちは似たもの同士だ

夜、魑魅魍魎共が騒ぎ出す深夜。今日の月は大きく弧を描き、空しい闇を明るく照らしていた。こんな不気味な夜で、それだけが幸いだった。

皆が寝静まった頃、金太郎はまだ寝つけないでいた。別に何かの気配を感じたわけでも怖くて寝ることが出来ないとかそんな理由でもない。体は疲れを感じており、今も睡魔が襲っている。しかし金太郎は眠ることが出来なかった。目を閉じることが出来ない。

金太郎は起き上がり、考える。内容はもちろん、鬼丸のことだ。

「……鬼丸が親父を殺した」

金太郎の目線の先には鬼丸がいる。起きているときの無表情な顔とはかけ離れ、無邪気にかぐやの隣で眠っていた。

良く考えれば彼はまだ齡20にも満たない子供。この表情も当然なのだが、いつものことを考えるとどうしても違和感を受けてしまう。そしてそんな子供が自分の父親を殺したなんて想像を絶した。

「でも、それだったら……だけど……」

上手く考えがまとまらない。というより、自分は鬼丸と違って考えるタイプの人間じゃないのだ。頭の中で何かを考えようとしている方が間違っている。

……そうだ。素直に聞けばいいじゃないか。鬼丸が起きたら鬼丸にあの日のことを聞こう。

それでいいじゃないか。聞かずに後悔するより、聞いて反省する。その方がよっぽどすっきりする。

自分なりの答えに満足して金太郎がいよいよ眠りにつこうと思ったとき、今度は本当に何かの気配を感じた。金太郎が紫電を手に取りうとしたとき、青色の頭がひょっこり現れた。

「やあ、キンちゃん。眠れないのかい？」

「ウラシマか……。驚かさなくてくれよ。これでも周りを警戒しているんだから」

「ごめん、ごめんと内心反省はしていない様子で頭を下げるウラシマ。どうやら夜番の交代の時間らしい。金太郎は立ち上がり、背筋を伸ばす。バキバキと骨が鳴った。

「お疲れ、ウラシマ。あとは俺に任せて寝てていいぜ」

「いや、キンちゃん、寝てないんだろ？ 僕に任せてくれていいよ。でもさ、ちょっと話し相手になってくれない？ ちょっとだけいいんだ」

「ああ、いいぜ」

金太郎は重い腰を起こし立ち上がる。

皆が眠っているところから数歩進んで、ちょうどいい岩に腰掛ける。何も無い荒野の夜はとても寂しく、ウラシマがいなければ居たくもなかっただろう。

ウラシマが目の前に座り、そのニヤニヤ顔のまま喋りだした。

「いやあ、忙しいね。キンちゃんの家遊びに行ったと思ったら、今度は天岩戸かい？ 忙しすぎて目が回りそうだよ」

「確かにそうだな……。でも今はそれが楽しいよ。お前たちというだけで何でも乗り越えられそうだし」

「おや、余裕だね。今回が僕たちの最後の旅になるかも知れないのに」



ぴくつと、金太郎の肩が震える。ウラシマの言葉が妙に刺々しく感じられた。

「……………どういうことだよ、最後の旅って？」

「ん？ そのまんまの意味だけど。まさか、キンちゃん。僕たちがずっと一緒に旅を続けられるとは思ってないよね」

……………そのまさかである。ウラシマの、自分の意に反するような言葉に金太郎が明らかにその眉を顰めた。

「図星だね。そんなキンちゃんの甘さも魅力だけど今回はいららないかな？ ……さて、キンちゃん。君の目標はなんだっけ？」

「……………みんなを守ることだ。みんなが笑顔でいられるような、そんな世界を守りたいんだ」

「そつだ。君の夢はそんな御伽話みたいな、純粋な夢だ。誰もが望んで、誰も成し遂げられない夢。それが君の夢だ」

何かウラシマの言葉からはまるで自分がその夢を叶えることなど出ないような、そんな非難じみた声に聞こえた。

……………いや、実際金太郎の夢は子供じみた夢物語なのだが、それでも今まで一緒に生きてきてくれた仲間に言われると傷ついてしまう。

金太郎の表情は徐々に暗くなっていた。

「おつと、悪い、悪い。気分を害したんだつたら悪かった。でもね、真面目な話をすると、君の夢は誰と一緒にいたら叶えられるのかなあつてことだよ」

「誰と一緒にいたら叶えられる……………？」

「うん。君の夢はさ、鬼丸君と一緒にいて叶えられるかい？」

その言葉に金太郎は僅かな齟齬を感じた。ウラシマの言うとおり、自分は本当に夢を叶えるために鬼丸と仲間になったのだろうか。鬼丸は、自分のことを桃太郎との戦いの壁にでもなればいいと思っていたらしいが、自分はどうかだったのだろうか。ウラシマの言葉とこの異常な空間のせいで上手く思い出せない。

叶えられると思ったから、今まで一緒に仲間をしてきたのだろうか……。

「結論から言おう。無理だ。仲間を作ることとは悪いことじゃないけど、それに入れ込むのはナンセンスだよ。浅く広く、利害関係によって成り立つドライな間柄が君の夢にとっては理想的だ。……そして僕には、それだけの力がある」

「……？」

「簡単に言つとね、キンちゃん。鬼丸君とは手を切つて、僕と一緒にその夢を叶えようよ」

「何言つて……？」

ウラシマの言葉の衝撃が金太郎を襲う。まるで鈍器で横殴りされたみたいに、しばらく立ち直れそうにもない。ウラシマからそんな言葉を聞くなんて考えられなかった。

ウラシマは、今まで見たこともないような真摯な目つきでこちらを見ている。それから目を離せなかった。

「君はその夢を叶えるだけの力があると僕は信じている。だけど周りがそれだけの力がない。鬼丸君やかぐやちゃんは確かに優秀だが、全を救うのには如何せん力が足りない。僕なら力も経済的にも君の力になれる。なんなら竜宮城全体を君のために動かしている。竜宮城全体で君のバックアップになるよ。……君は他の二人のことを仲間間と思つているらしいが僕は違う僕にとっての仲間はキンちゃん、君だけだ。君が竜宮城まで僕を追ってきたとき、僕はそう確信した

んだ。僕を動かせるのは社長だけだけど、僕の時間を動かしてくれるのは坂田金太郎、君なんだ。 さあ、キンちゃん。この手を取って。僕なら君の夢を叶えられる。一緒にその夢を叶えようよ」

ウラシマは一步踏み込んで左手を差し出す。乙姫同様彼の為なら、ウラシマは何でもしてやれる。金太郎の答えも自分の望むようなものになる、そのはずだった。

金太郎はその首を横に振った。

「どうして……？ こんな危険な旅、早く抜け出して帰ろうじゃないか。君の時間は永遠じゃないんだから……こんなところで無駄足を踏むわけにいかないだろ」

「……ああ、確かにお前の言うとおりだよ。でもさ、鬼丸も俺の仲間なんだ。それだけだよ。仲間を放っておくことは、出来ない」

「……そう、か」

至極残念そうな声で、ウラシマは差し出していた左手を下した。金太郎はそれを見て、何もしてやれない。ただ消え入るような声で、ごめんと呟くしかなかった。

一陣の風が自分たちの間縫って駆けぬける。この広大で、何も無い場所で風はどこに行くのか、金太郎は見えない風を目で追っているとウラシマが不意に口を開いた。

「ねえ、キンちゃん……さっき言った話だけどき、君は本当に鬼丸君と一緒にいられると思うているのかい？」

「……もちろんだ。鬼丸は俺の仲間だから」

「それは嘘だよ。君は根本的なことを忘れてる。君は人間で、鬼丸君は鬼なんだよ」

金太郎は人間で鬼丸は鬼、そんな根本的なことを言ったウラシマの言葉が先ほどとは打って変わって妙に意地悪いものに聞こえた。

「この700年間、僕は様々な人間を見てきた。魔と関わりを持たないもの、魔を退けようとするもの、そして魔に入れ込むもの……。確かに魔と関わりを持った奴はいたよ。だけどね、そいつらの結末は皆一様に“破滅”だったよ」

「……！」

「魔に裏切られて死ぬ者、厳しすぎる環境に身をすり減らすもの、そして人間の裏切り者だつて人間に殺された奴もいた。……。鬼と僕は他人同士で敵同士。繋がりを持つことは悪くない。悪くないけど、それは極力隠さなくちゃ。君が人間に殺されてはつまらないからね。それに……。彼は君のお父さんも殺したじゃないか」

ウラシマの指摘に金太郎は肩を震わせた。今、その話題はしたくなかった……。

しかしその金太郎の思いを知らずに、いや知っているからこそウラシマは言葉を続けた。

「いつか彼は君も殺す……。だからさ、鬼丸君は君の障害でしかないんだよ」

ウラシマの言葉を否定しようとした時、先に動いたのは金太郎でもウラシマでもなく、金太郎の影であった。ひゅんと、風を切る音が聞こえるとそこにはもう誰もいなかった。

「ん？」

「気にすることはないよ。だって、鬼丸君がそこにいただけなんだから」

鬼丸がそこにいた、その意味が最初は分からなかった。

「……えっ？」

「盗み聞きするなんて感心しないけど、今ではそれが僥倖かな。彼は天岩戸に行ったよ。一人でケジメをつけるためにね」

「何で……？」

「当然だろ。自分が仲間の邪魔って分かったんだ。君だって、鬼丸君の邪魔と分ったら自分から立ち去るだろ？ でもまあ良かったじゃないか。それだけ愛されたってことさ」

「鬼丸は、一人で……。ダメだ、助けに行かないと！」

「おっと、行かせるわけにはいかないね。ちょうどいいじゃないか。君は人の道を行き、鬼丸君は鬼の道へ。素晴らしい決別だ。さあ、キンちゃん。帰ろうよ」

ウラシマの提案に金太郎は答えない。ただ紫電を持って、魔力を集中させるだけだった。

「Second Drive Set Up……」

「……そうか、どうしてもダメか。じゃあ力づくで連れて帰るしかないね。ねえ、玉手箱」

ウラシマが何処からともなく玉手箱を取り出す。おそらくあの塔の残骸の山の中から発見したのだろ。しかし金太郎にはそれに構う暇も、時間もなかった。

「Start！」

「魔術師浦島竜胆が問う。答えよ、其は」

ウラシマが詠唱を唱え終えようとした時、一筋の光がウラシマの手を貫いた。そのせいで玉手箱を落としてしまい、術が完成しなかつ

た。

金太郎はすでに地平線の向こうへ消えている。あの距離では玉手箱を使っても一回では追い付けないだろう。ウラシマは追跡を諦め、自分を邪魔した女と少し喋ろうと振り返る。

「……君まで僕の邪魔をするのかい？ かぐやちゃん」

「……」

問われたかぐやは答えない。何か負い目を感じているのか、普段の彼女からは想像もつかないしおらしさだった。

「すみません。優しい貴方にこんなことをして……」

「優しい？ 僕が？ ……何を言っているんだい？」

「だって優しくなきゃキンタさんにそんなこと言わないでしょう。それに玉手箱まで持ち出して……いつものりくらしい貴方が本気を出したのは私たちの為でしょう。少しでも鬼丸さんの力になるように……。でも、ごめんなさい。貴方にとってのキンタさんと同じように、私にとって鬼丸さんは絶対。あの人とキンタさんが離れるなんて考えられないんです」

それはウラシマも同意することだった。

鬼丸と金太郎は二人で一人、二人そろって無敵であるという言葉も頷ける。その様子を傍から見ているのは楽しかった。それは鬼丸が絶対というかぐやも同じことなのである。

「だから私は鬼丸さんを助けに行く。何があるかと……」

「……覚悟は出来ているんだね？」

覚悟、という言葉にかぐやは反応する。

金太郎と鬼丸は知らないのだ。今回の敵が誰であるのか、どうして

鬼ヶ島を攻め落とせたのかということ。かぐやはそれを知っているから恐怖する。“あれ”は間違いなく自分たちにとって終わりに近い物だと。

それでもなお、決意を変えない彼女を見てウラシマはため息をついた。

「ふう。まるで僕が悪者みたいじゃないか。分かった。僕も行く。キンちゃんに死なれちゃ僕が困るからね。さあ、行こうか」

「……月光・新月」

かぐやの月光で二人の姿が消える。

目指す先は天岩戸、たとえ何が待っていようと彼らを迎えに行かなければならないのだ。それがたとえ、神であろうとも……。

「ようやく行ったか……おい、犬。片付け終わったか？」

桃原キヨウは姿の見えない犬に話しかける。高速に移動しているせいで常人にはいないようにも見える犬の姿も桃太郎ははつきりと捉えていた。

キヨウは犬にある仕事を任せていた。その内容は“鬼丸たちの進行を邪魔する奴の排除”。本来ならば自分が直々にあの赤髪の男の所に行つて一発その顔をぶん殴りたいところだが、残念ながらそういうわけにもいかない。あれは鬼丸たちの問題だ。自分は関係ない……というわけで、今回は二番目に甘んじることにした。

「はい。取り敢えず鬼丸たちの邪魔にならない程度には。しかしまだ……」

犬が何かを捌きながら主の問いに答える。

そういう犬の言葉と共に自分たちの周りからウジャウジャ這い出てくる。確かあれは昼に見た御門直属の兵士だったはずだ。まるで生気を感じさせない、ゾンビのような様を見てすぐに洗脳されていると分かった。

「OK、分かった。じゃあ犬、雑魚の相手を頼むぞ。アタシたちは殺る奴がいる」

「承知」

「……」

犬は再び消え、ゾンビの海に道が開く。キョウは意気揚揚に、幽鬼は黙ってその道を堂々と歩いていく。周りの惨劇など気にせず、ただ真っ直ぐに。今から始まる自分たちの戦いの方がよっぽど惨劇だ。キョウは思いつくことがあったのか、ふと立ち止まると幽鬼に話しかけた。

「おい、幽鬼。アタシたちは敵同士だ。けど今のアタシたちには共通の敵がいる。もしアタシが奴と刀で殺り合ったら迷わず押し潰せ。アタシのことは構うなよ。奴を殺すことだけ考えろ」

「……そんなこと、百も承知だ。機会があればそれを見逃さない。それは強者の掟だろ？」

「ははっ、違うない」

キョウは愉快そうに嗤う。

あの四人が和の道を行くのなら、自分はさながら修羅の道だろう。同情や馴れ合いなど必要とせず、ただ自分の最強のために突き進む。それで十分だ。

「じゃあ、行こうか。幽鬼」



キヨウと幽鬼が再び歩き出す。そしてゾンビの海を抜けたころ、自分たちの正面にそいつは座っていた。

「よう、桃太郎。幽鬼童子。待ってたぜ」

「待っててほしくなかったけどな。でも会いたかったぜ。面面向かってなきゃテメエをぶん殴れないからな」

オロチとキヨウは嗤いあう。言葉さえなければ、まるで古くからの友人に会ったような情景なのだろうが、残念ながらそれとは真つ向に逆の場面であった。

オロチ、と言われるこの男は例えるならば“蛇”であった。手入れとはかけ離れた荒んだ黒髪、ボロ布のような服、爬虫類じみた鋭い目、下衆なその嗤い。その口を開けば、おそらく舌の先は二つに分かれているのだろう。それほどこの男は蛇らしくもあつたし、幽鬼はそれが不快でならなかった。鬼ヶ島が奪われようが奪われまいが、この男は見た瞬間に殴り掛かっていただろう。幽鬼の言葉も自然と強くなる。

「おい、オロチ。鬼ヶ島はどこにある!？」

「まあ、焦るなよ、幽鬼童子。預かった鬼ヶ島はちやくんとここに  
あるぜ」

オロチの手には光る球体が握られていた。

幽鬼にはそれが直感で鬼ヶ島だと分かった。あそこに自分が自分の手で失った鬼ヶ島がある、そう思うと気が気でなかった。

「そんなに目をぎらつかせるな。こういう時は“テンプレ”ってやつがあるだろ?」

「……勝てば返してもらえる。そういうことか?」

「ああ、半分正解だ。でもさ、それじゃつまらないから制限時間を決めようぜ」

「制限時間？」

オロチの言葉に疑問を投げかけたのと同時に、オロチはその光る球体を呑みこんだ。球体が彼の喉を通り、胃の中に入っていくのが明らかに分かった。

『っ！』

「ご覧通り食べちゃまった。早くしないと消化されちゃうかもな」

「貴様……！」

幽鬼の肩が怒りで震える。しかしそれ以上に、憤慨している人間が隣にいることを幽鬼は気付けなかった。

「……早くやるうぜ。早くやしないとアタシの我慢がきかねえ」

「ああ……、そうだな」

僅かに桃太郎の目つきに驚きながらも、オロチは細く長い剣を取り出す。以前見たことある、曲がる剣だ。オロチは嗤いを浮かべながら、キョウたちに言葉をかける。

「俺たちは似た者同士だ。桃太郎は壊すことでしか強さを証明できないし、俺は殺すことでしか自己を証明できない。幽鬼童子は復讐する鬼へと変わり、もはや俺たちは世界から外れちゃってる。

外れちゃってるなら……」

『外れている者同士、殺し合おうぜ！』

三人の言葉が重なる。桃太郎は桃花を構え、幽鬼は今にも空間を圧縮させそうだ。



## 第五章・第四話：決別

ドン、と何かが爆発したような音が後ろで聞こえた。

桃原キヨウが幽鬼がまた何かしてかしたのか、それとも敵に襲撃されたのか。様々なことが考えられるこの状況で、ただ一つ分かっていることはとても危険であるということだ。本来ならば一旦戻って集合するということがベストなのだろうが、それが分かっていても鬼丸はしなかった。

理由はただ一つ、戻れば金太郎がいるからだ。

「……」

鬼丸は無言で、駆ける。

急がなくてはいけない。金太郎はすぐに追ってくるだろうし、あと数時間すれば夜も明けるだろう。仕掛けるならば夜の間でなければ勝ち目はない。金太郎が来る前に片を付けて、彼の目の前から去らなくてはいけないのだ。

「……私は、バカだ……」

呟くように鬼丸は言う。自分に向けられたその言葉は何とも虚しく、何の意味も為さないことも知っていたがそれでも言わざるを得なかった。

金太郎は自分にとって、初めての仲間だった。母親の顔は知らず、父親も自分が幼い時に死んだ。ようやくたどり着いた鬼ノ山でも、彼は他人を知ることがあっても交じることがなかった。長老や他の長たちも鬼丸を理解することは出来ず、鬼丸にとっても彼らは“同僚”であった。幼心に愛というものを知らなかった彼は、誰も信じ

ることは出来なかった。

そんな中であつたのが金太郎だ。彼が人間に襲われているのを見かけたとき、自然と彼を助けようと動いたのは今でも分からない。

しかし一つだけ分かることがある。それは金太郎が純粹であつたということだ。見返りも求めず、ただ助けることだけを生業といている彼は純粹で、彼と一緒にいたらたとえ夢物語であつても出来そうだった。彼とずっと一緒に戦つていける、そう思っていた。

でも、違つた。私は私であつて、金太郎は金太郎なのだ。そんな根本的なことを私は今まで忘れていた。彼にも叶えたい夢があつて、しかもそれを私が邪魔しているというのなら自分は潔く彼の視界から消え失せよう。

私は一人でもやっていける。それを証明するために、私はここまで来た。だから

「 貴方には消えてもらいますよ、侵略者」

だから目の前の赤髪の男を倒すのだ。自分一人の力で。

目の前の赤髪の男は岩にもたれかかり、自分を待っていたようだった。おそらくあの縄で縛つてある岩が天岩戸なのである。そして神域の、さらにその中心にもたれかかっているこの男は余程傲慢なのである。

男はまるでお話の世界から飛び出してきたような、そんな雰囲気のものだ。どこかの国の王子様です、と言われれば納得するぐらい整っていた。神秘的なその雰囲気と、それとは相反するような腰にある威圧的な刀。ここに立っているだけで気圧されるようなそれに鬼丸は反感を覚えた。

赤髪の男が体を起こし、その口を開いた。

「初めまして、だな。鬼丸童子」

「ええ、初めまして。早速死んでもらいます」

言い終えるのと同時に鬼丸はデザートイーグルを放つ。手加減などしない、本気の殺し。一瞬で集められる最大の魔力を鬼丸は放った。その鬼丸の本気を、赤髪の男は当然のように紙一重でかわした。

「おいおい、そう急くな。お前とは話をしなくちゃいけないんだ。

開口一番銃を取り出すのはやめろ」

「私には貴方と話し合うことなどありません」

「まあ、そう言うな。……自己紹介がまだだったな。俺の名前はスサノウ。スサと呼んでもらっても構わない」

スサノウ、という名前を鬼丸は聞いたことがあった。いや、聞いたことあるどころではない。何度も何度も、耳にタコが出来るほど聞いたことのあるその名前。それは確かツクヨミ様と肩を並べる存在。

「三貴神が一柱、“スサノウノミコト”！？ 何故そのような存在がここに？」

「それを含めての話だ。ちょうど、お友達も来たみたいだしな」

「鬼丸　　！」

しまった、と鬼丸は思った。こんなことなら早くこいつを始末するべきだったのに、と後悔さえした。そうして後悔しているうちに、かぐやとウラシマも月光を使って来てしまった。

鬼丸が最も望まない展開に、スサノウはほくそ笑んだ。

「ようこそ、坂田金太郎、四方院かぐや、浦島竜胆。これにて役者は揃ったということだ」

「鬼丸、俺はお前のことを邪魔なんて思っていない。だから

」

「来るな！」

鬼丸の拒絶の声が金太郎の足を止める。今まで鬱陶しがられることはあっても、デザートイーグルを向けられるほど拒絶されることはなかったのに……。

「それ以上近づいたらその脳髄ぶち抜きます。これは私の問題、部外者は黙っていてください」

「部外者、だと……」

「おいおい、痴話喧嘩はよせ。俺が喋っているんだ。喋らせる」

痴話喧嘩、というにはいささか物騒だがその様子にスサノウは呆れるように呟く。鬼丸はしぶしぶながら銃をおろし、ようやく喋れる状況となった。

「さて、俺の名前はご存じの通りスサノウ。この世界の神だ。なんで神がこんなところにいるか気になる奴もいるだろう。それはな、神が動かなくちゃいけない状況になっちまったからだ」

「神が動かなくちゃいけない？ そんな状況あるわけが……」

「あるんだよ。世界が滅んじやうとかな」

そんな冗談めいたことをスサノウは本気で言う。その表情からは真意は判断できなかった。

「この世界は御伽の世界ということは知っているな。……えっ、知らない？ ……まあ、いい。そういうことと仮定しろ。その証拠に

この世界の物事は予め決められた運命に沿って動いている。これがその予言が書いてある本だ」

「あっ、俺の学習帳」

「……何だと、お前？」

途端、スサノウの顔が一転、憤怒と驚愕、その二つが混ざったような複雑な表情になった。はて、何か変なことを言っただろうか……？

「馬鹿野郎！ これは全ての予言が書いている“オリジン原書”だぞ！ テメ工何学習帳に使ってやがんだ！」

「ええ！？ そうだったの！？」

「何か書いてねえだろうな……。下手に書き込むと運命が捻じ曲がるぞ……」

そう言つてスサノウはすごい勢いでページをめくりだす。余程重要なことなのだろうか、目の前にいる鬼丸には目もくれず、目を通していく。

そんな中、ウラシマは納得するように手をポンと叩いた。

「なるほど、そりゃそんな高位な存在を僕如きが読めるはずもないよね。ある意味それは魔術師の最終目標でもあるから見る事が出来るだけでも僥倖だな。納得いったよ」

「でもなんで俺は見る事が出来たんだ……？」

「……えっ？」

「ふう、どうやら何も影響のあるところには書いてないようだ。…話を戻そう。とにかくこの世界は全てこの本によって決められる。この本を分かりやすく書き直したのが“御伽話”と呼ばれるものだ。お前らもガキの頃読んだことがあるだろ。たとえば、“桃太郎”とか“かぐや姫”とか。その主人公たちがお前らの目の前にいるのがこの世界が御伽の世界たる証拠だ」



スサノウの話は滅茶苦茶であった。しかし、納得せざるを得ない。かぐやと出会った時、何故目の前の女の子がかぐやだと分かったのか、それは“竹取物語”という話を知っていたからだ。ウラシマの時も然り。誰も見たことがないはずの竜宮城の話を知っていたのはその話を知っていたからであった。見ず知らずの誰かが書いた、そんな予言に自分たちが左右されるとは何とも複雑な気分だが、そこで一つ疑問が生まれた

「でも、それと世界滅亡とどういう関係が……？ いいじゃないですか。その本に書かれている限り、この世界は滅びることなんてない。それと、世界滅亡何の関係が？」

「この世界の運命が原書オリジンに従わなくなってきた」  
簡潔に、そしてはつきりスサノウは言う。その手にある本を見せつけながら、叩きつけるように喋る。

「この原書オリジンは絶対だ。今までこれに書かれていることは必ず起こった。世界はこれに従っていた。今までも、そしてこれからもそのはずだった。だが、最近になってそれがだんだんと狂い始めてたんだ。例えば……」

「……桃太郎が鬼に倒される」  
「……そうだ。それだけじゃねえぞ。なんでかぐや姫は月に帰られなかった？ なんで浦島は玉手箱を開けなかった？ なんで金太郎は熊と一緒に遊んでいられなかった？ なんで神である俺がここにいるんだ？」

完全な矛盾をスサノウは指摘する。神はこの世界に干渉してはいけない、というのはこの世界の秩序ルールであったはずだ。それが本当に崩れているとすれば、それが好ましくないのは鬼丸たちでも分かった。

「これは本来あり得ないことだ。予兆だ。世界が確実に狂い始めている。完全に狂わないうちに、俺が干渉しないといけない」  
「それで、貴方がここに来た、と……」

鬼丸の言葉にニヤリと嗤う。

「俺はこの世界を救う。姉さんがいない今、俺がやらなくちゃいけないんだ。……そのためには原書の働きを正常に戻さないといけない。……原書第129項、“白き鬼が死をもたらす”。手始めにこの予言を完成させようと思う」

「白き鬼が死をもたらす？ 誰です、そんな物騒な鬼は？」

「何言ってるんだ。お前のことだよ、鬼丸童子」

当たり前のようにスサノウは鬼丸を指差す。それにしばらく反応することが出来なかった。

「はっ………？」

「原書に書かれている項、内容、素質から言ってお前に間違いない。……というわけだ、鬼丸童子。世界の為に取り敢えず全てを捨てて死をもたらす鬼になってくれや」

軽い口調で重いことを頼むスサノウ。

死をもたらす、そんな悍ましい能力を自分が持っているなんて鬼丸は自分のことが信じられなかった。動揺している鬼丸よりも先に動き出すものがいた。

坂田金太郎である。

「ぶざけんなよ、オメエ！ なんで鬼丸がそんなことやらなくちゃいけないんだ！ そんなことのために鬼丸を犠牲にしてんじゃねえ

よ！」

「……おいおい、坂田金太郎。そんなこと、とはどういう了見だ？  
それに今回はお前にこの話をしたかっただけだ。お呼びじゃねえよ」

「デメエ！」

金太郎はスサノウに紫電を持って襲い掛かる。

瞬時に結界を張って突撃する彼の攻撃はまさに雷鳴の如く、あつと  
いう間にスサノウの目の前に現れた。紫電に魔力を充足させ、スサ  
ノウを振り下ろす。

しかしその瞬間までスサノウは腕を組んで動かなかつた。何を  
する必要などない。僅かに手を動かし、手を合わせただけだった。

「神域・注連縄」

その瞬間、鬼丸は黒い空間に放り込まれた。いや、包み込まれた。

当たり前のようだが、金太郎の姿はない。ここが結界の中だとい  
うことはすぐに分かった。

それにしても何だろう、この空間の異様さは。金太郎のように結界  
に張らない鬼丸にとって、結界の中というのは新鮮そのものだがこ  
んなにも空しい物なのだろうか。

ここは暗く、寂しい。こんなところには数秒たりとも居たくなかつ  
た。

「もうお前は戻れないぞ、鬼丸童子」

暗い闇から赤い髪が現れる。スサノウノミコト、彼はその手に古び  
た刀を持って一歩一歩近づいてくれる。

「死をもたらず、ということはお前の本質は死に存在するといふこ

とだ。本質を理解させてやるためには少々面倒な術がいる。そのための壁だ。さあ、大人しく術をかけさせるや」

「……それも悪くないかもしれませぬ。もうあそこに戻る気はありませんし」

もし金太郎がいたら文句の一つでも言われたかもしれない。しかし、その彼も今はいない。自分はたった一人なのだ。これが自分のあるべき姿だと納得させて、鬼丸は言う。

「でも、私は人の思惑通り動くのは嫌なんです。今までも、そしてこれからも……。帰らせてもらいますよ、スサ」

「……へえ」

その声は関心か、それとも憐みか、その両方の感情が入り混じっていた。

「お前もうちよつと賢いと思ってたんだけどな。まあ、仕方ないか。それがお前だもんな。無理やるのも悪くない」

そう言つてスサノウは刀を構える。これが威厳か、その姿を目の前にしているだけで体から震えが止まらなかった。鬼丸はそれに何とか打ち勝つために、デザートイーグルを力いっぱい握りしめた。

スサノウは愉しそうに嗤う。

「さあ、神に逆らう愚か者よ。覚悟しろよ。鬼っ子」

「……鬼丸童子、参ります」

鬼丸はデザートイーグルをスサノウに向ける。

仲間の為でも、もちろん金太郎の為でもない、ただ自分の為に戦う。デザートイーグルがいつもより重く感じられた。

「おい、鬼丸！ 聞こえたら返事をしてくれ、おい！」

鬼丸とスサノウが戦い始めたとき、金太郎はその結界の外にいた。声をかけても返事はない。当然外から中の様子は見ることが出来ない。そのどうしようもない状況が、金太郎の焦りをさらに加速させていた。

目の前の黒い球体が絶え間なく流動している。それに触れようとすると腕が飲み込まれる様な感覚だった。

その禍々しい結界を目の前にして、金太郎は嘆くように呟く。

「何なんだよ、これは……ビクともしねえぞ」

「当たり前じゃないか。それは注連縄だよ。破れるわけないじゃないか」

「注連縄？」

どこかで聞いたことある名前だった。金太郎が必死にその場所を思い出そうとしていると、それを待たずにウラシマは言う。

「鬼の長老の張る結界がこの世界屈指の硬さを誇るんだったら、それは紛れもなく最強の防御陣だよ。僕ら如きが破れる存在じゃないんだ」

「そんなのやってみなくちゃ」

「分かるんだよ。それはね、ただの結界じゃない。神様を縛りつけるような、そんな目的で作られたものなんだよ」

神様を、という言葉聞いて思わず言葉に詰まった。どうして自分たちには神様というものがこんなにも関わってくるのか、金太郎は

神様というものを恨んだ。

「かつて天照大御神様がここ天岩戸からお出でになった時、もう二度とそこに入らないように縛られたのが注連縄だ。これはその模造品、とはいっても強度は絶対を誇るだろうね。流星の僕でも、触るのさえ恐れ多いよ」

ウラシマは大きさに手を上に向けて、降参のポーズをとる。しかしその顔はいつものニヤニヤ顔ではなく真剣、この話は本当であることは金太郎でも分かった。ウラシマの眼が、これ以上干渉するな、と語っている。

しかし、自分はそんなことで諦めるほど人間が出来ていないことも金太郎は知っていた。

「それでもやらなくちゃいけないんだ。鬼丸を、鬼丸をたった一人で行かせちゃいけないんだ。なあ、かぐや！ お前もそう思うだろう！？」

「……………」

「かぐや……………」

返事はない。いつもならば大見得を切って“当然です。だって私は鬼丸さんの妻なんですから”とでも言いそうな言葉が今回は聞こえてこなかった。

彼女は震えていた。それも尋常じゃない汗と共に。いつもの彼女からは考えられない姿に金太郎は驚き、

ウラシマはふう、とため息をついて何も知らない金太郎に説明し始めた。

「キンちゃん……………スサノウ様は善神でもあると同時に悪神でもあるんだ。いや、悪神というよりはなんというか……………。とにかく、スサ

ノウ様の恐ろしさは見たものでしか分からない。かぐやちゃんはツクヨミ様と繋がっているからね。その恐ろしさは身に沁みるように伝わってくるんだろう。……本来ならば来たくもなかった。ここで立っているだけでも奇跡なんだよ。かくいう僕も、震えが止まらない」

竜神様の信仰者のウラシマが言うとおり、よく見ると玉手箱をもつ腕が震えている。おそらく彼がもう片方の腕で抑えなければ玉手箱は彼の腕から零れ落ちていただろう。

目の前の結界が破ることが出来ず、仲間は恐怖で動くことが出来ない。ウラシマはその状況を簡潔にまとめて、金太郎に言い放った。

「結局さ、僕らには何もできないんだよ」

「馬鹿野郎が！」

金太郎は誰に向けたのか分からず、叫ぶ。その声も鬼丸には届かなかった。

## 第五章・第五話：これこそ凶鬼

満月、鬼にとってこれほど戦うのに適した環境はない。

人間を圧倒的に超える五感を誇っている鬼にとって闇夜の暗がりや昼同然、さらに月という無限のバックアップがある。こちらから仕掛けるのならば、満月は理想的であった。

しかし、今では少し後悔している。というのは月の微かな明かりだけでは蛇の蛇行を捉えきれないからだ。

「鬼闘術・白！」

幽鬼は左手で空を握りしめ、空間を圧縮させる。目標はもちろん、自分の故郷を奪った憎むべき相手、オロチだ。

幽鬼はあまりこの攻撃に期待していなかった。なぜならこの攻撃は敵が視認できないから意味がある必殺の一撃である。一度この技の仕組みを分かってしまった相手にはあまりに効果的ではないからだ。もちろん、獣じみた反射神経を誇るオロチには言うまでもない。

「ヒヤッハ！ 甘えぞ、幽鬼童子！」

影が蛇行し、歪む空間から抜け出す。

今まで戦ってきて一つ分かったことがあった。オロチは強いということが。

獣じみた動きで敵に忍び寄り、変幻自在の剣で敵を襲う。まさに肉食動物というべき悍ましさだった。

蛇は嗤いながら幽鬼に向かう。獲物を目にした捕食者の姿を見て幽鬼は身構える。その瞬間、獲物と捕食者の間に入る影が直行した。



「オラア！ テメエの相手はこのアタシだ、蛇野郎！」

破壊快楽者が殺人鬼に襲い掛かる。桃太郎が殴ればオロチがかわし、オロチが剣を振れば桃太郎はそれをかわす。そのやり取りが高速で行われていた。

桃太郎は幽鬼の眼から見ても“規格外”と呼ぶのにふさわしかった。鬼でも捉えきれない獣の動きと対等以上に競っている彼女は一体何なのだろうか……。少なくとも人間というレベルには収まらない。とは雖も幽鬼も黙って見ているだけではない。獣は獣の戦い方があるように、自分には自分の戦い方がある。

「幽鬼、アタシごと潰せ！」

「んなこと分かってる！」

幽鬼は言われる前に潰す。

たとえその範囲が特定されたとしても、接近戦しか出来ないバカ共にとっては“鬼闘術・白”は脅威的だ。

舌打ちしながら双方は後ろに飛び去り、距離を取る。オロチは今まで嗤っている。

「いいね。やっぱりオメエらは最高だ！ 最高の殺し合いだよ！」

「……別に。アタシはそんなに楽しくねえよ」

「おいおい。自分に嘘つくのは良くないぜ。お前は確かにこの争いを愉しんでいる。愉しんでいないんだったら、どうしてお前は嗤っているんだ？」

「っ！ 黙れ！」

桃太郎が飛ぶ。この戦い、一番キレているのは彼女かもしれない。そういう意味では幽鬼は至って冷静である。今までオロチを確実に必殺するタイミングを計っていた。そして今、桃太郎とオロチが競

り合っているこの時、それは来た。

鬼鬪術・凶鬼

この術は一度使えば止まらない。だからこそ一撃で仕留めなければならぬ。幽鬼は精神を集中させ、凶鬼を起動させようとした。

「鬼鬪術・凶鬼！」

……何も起こらない。幽鬼は目をパチパチさせた。

「ど、どうして……？」

「がら空きみっけ！」

戸惑っている幽鬼を桃太郎から抜け出したオロチが襲う。

蛇のようにうねる剣を至近距離でかわすのは至難の業。明らかにゴリ押しのパワータイプの幽鬼にとってこれほど厄介な敵はいない。

一振りで確実に皮膚を抉られ、苦痛で顔が歪む。

しかし、これは同時にチャンスだ。オロチが攻撃しているときは奴の背後はがら空き。桃太郎がすぐに攻撃に転ずることが出来る、幽鬼はそう思っていた。

しかし桃太郎は幽鬼の予想を裏切る行動を取った。

「ぐ……」

「桃太郎、何故……？」

幽鬼に突き刺さるはずの剣先が、何故か目の前に現れた桃太郎の肩に刺さっている。何故、と疑問に思っている暇はない。変幻自在の剣はすぐに自分に向かってくる。

幽鬼は全滅覚悟で空間を圧縮させ、この場から抜け出そうとした。

「はぁ……はぁ……」

「いいね〜。仲間を巻き込んでまで自分は助かるうとするなんてなんだかとっても生物っぽいぜ。見た目に似合わず残酷だな」

「っ！ 桃太郎、返事しろ！」

返事はない。ただ肩に穴が開いているボロボロの人間の形をしたものが突っ立っているだけだ。

幽鬼はそれを見て、同情だとか悲しみは湧いてこなかった。あるのは激怒だけだった。

「桃太郎！ どうして私ごと攻撃しない！？ お前ならさっきぶつた切ることぐらいできただろ！ ためらわず攻撃しろと言ったのはお前だろっが！」

「……ちっ」

「私を可哀そうだと思ってるのか？ そんな心配は要らん。早く奴をぶつ潰すためなら手段を選ばない！」

幽鬼は激昂する。

彼女は桃太郎のことを今でも許さない。しかし桃太郎の“戦いにおける積極性”だけは認めていたつもりだった。あらゆる状況において敵を倒すことだけを考え、攻撃の手を休めない。手加減など存在せず、常に全力。それが桃太郎の強さであり、彼女の証明であったはずだ。

今の桃太郎は弱い。守るということは彼女にとって不純物だ。それを覚えてしまった桃太郎はもはや桃太郎ではないのだ。今までピクリとも動かなかった桃原キョウが叫びだした。

「出来るわけねえだろうが！」

「っ！？」

「お前はアタシみたいに一人じゃねえんだ！ お前が傷ついて悲しむのはオメエだけじゃねえんだぞ！」

「おいおい。こんなところに来て仲間割れかよ。ま、三つ巴っていうのも面白いかもな」

こんな状況でも、いやだからこそオロチは嗤う。

彼にとつてみれば三つ巴など最高の戦いの場でしかない。ただ殺し合えればそれでいい。そんな彼に向けて、キョウが爆ぜた。

「言ってるんだろ！ アタシと幽鬼は仲間じゃねえ！」

桃花がオロチの剣と火花を散らす。

奴の剣は変幻自在とはいえど力ではこちらの方が上。奴のか細い剣では受け止めることなど出来まい。キョウは強引に押し切るうとした。

「ああ、そういう言い忘れてただけだよ……」

「アア？」

「これさ、ただの剣じゃないわけよ」

剣が桃花に巻きつき、獲物を絞殺さんとする蛇の如く圧迫する。

……確かに、ただの剣ではないことは分かっていた。

「これ俺の尻尾なの」

「はっ？」

「八岐大蛇って聞いたことない？ これ八本まで生やせるの」

そういつた瞬間、オロチの皮膚から七つの針のようなものが突き出てくる。それらはうにようによと不気味に動き、本体の指令を待っていた。

キョウの眼が大きく見開かれる。マズイ、と思った時にすでに遅かった。

「それじゃあ、バイバイ」

その言葉と共に、七つの針が一斉にキョウウに襲い掛かる。

抜け出そうとしても無駄だ。最初の剣が桃花を伝って、自分の腕ま  
でロックされている。

為すすべなく、全ての針がキョウウの皮膚を突き破った。血の帯が宙  
に浮かび上がる。

「も、桃太郎　　！」

力なく倒れていく彼女を目の前に、幽鬼はすぐさま彼女に駆け寄っ  
た。

「おい、桃太郎、しっかりしろ！　おい、返事を……」

返事はない。当然だ。体のあらゆる場所を突き破られ血は止まる気  
配を見せない。特に貫かれた左目の損傷がひどい。もしかしたら連  
動して右目も見えなくなっているかもしれない。こんな様子で微か  
に息をしているのだけでも奇跡と言えるだろう。

しかしこれではもう桃太郎は戦うことは出来ない。幽鬼は一人で、  
目の前で嗤っている蛇と戦わなくてはいけないのだ。

「おい、幽鬼童子。いい加減そんな木偶放っておいて俺と戦おうぜ」  
「木偶……だと？」

「だってそうだろ。戦えなくなった戦士は塵同然。そんなの死んだ  
方がましだ。あっ、今ここで殺しておいた方が感謝されるのか？」

そう言つてギャハハ、と下衆な笑い声が聞こえる。体が熱い。血が沸騰しそうなくらい、怒っているのが自分でも分かった。

「テメエ……仮にも一度戦った敵だろうが。敵には敬意を示すべきじゃないのか……」

「そんなの知らないね。言つたら、俺たちは似た者同士だつて。似た者同士の俺たちが戦つてどうして俺が勝つたかなんか言うまでもない。俺の方が残虐で、殺戮的で、外れているからだ」

オロチは歪んだ表情でそう言い放つ。狂気が彼の顔を包んでいた。

「この世界の生物全ては生の中に存在している。当然だ。生きていないものは動かないからな。しかしどうして俺らみたいな死の中だけで存在することが出来ないような異常者が現れたかつて考えるとそれはな、俺たちの方が正しいんだよ」

「外れている方が正しいだと？ 何をバカなことを言っている。私たちは生きている。だからこそ死の中でしか存在できないお前は外れているというのだろうか」

「違うね。あらゆるものは全て零に行きつく。これは世界が決めた秩序だ。俺たちはそんな零に帰ろうとする運動を体現しているに他ならないんだ」

この世界には当然終わりがある。永遠に生きるかくやでさえ、この世界が終わる時にはおそらく機能が停止するだろう。

確かにオロチの言うことには納得できるものがある。だが、こいつの言うことを素直に聞くのは癪であった。

「殺し合いの時は興奮するだろ？ それは零に帰ることが当然の運動だからだ。なあ、お前もそう思うだろ、幽鬼童子」

「思わん。私は外れてなどいない！」

「いい加減素直になれよ。……なあ、さっきから俺の周りでぶんぶん飛びまわっている犬さんよ。お前の主がこんなになっっているのに助けなくていいのか？」

オロチの呼び声と共に風が止まる。もちろん、本物の風ではなく先ほどからスサノウによって操られている駒を片付けている犬である。犬は一瞬止まると、興味なさそうに言う。

「我はキヨウ様の犬だ。キヨウ様は我に“手を出すな”とおっしやった。だから我は手を出さん」

「……つまんね。じゃあいいよ。そこで大人しく見物してな。負け犬」

それ以来興味が失せたのか、オロチは剣を構え幽鬼と向き合う。それと同時に彼の皮膚から突き出ている七本の触手も蠢き、本体の命令を待っていた。

さて、どうするべきか。一つでも捉えきれないものが一気に八本まで増えてしまった。圧倒的不利なのは決定的に明らかである。幽鬼にはあれらを止める術などない。幽鬼が冷や汗を流していると、オロチがその手を動かした。

「やれ」

短くそう言い放つと七つの触手が襲い掛かる。それと同時に幽鬼も動きだし、それをかわそうとする。

七つの触手の間を縫って移動し、時には空間を圧縮させて避ける。

しかし、完全にかわせるわけでもない。数に違いがあり過ぎるのだ。まるで弾幕のようなそれをかわそうとする度に、自分の皮膚が傷ついていた。

「ぐ……」

「ほらほら、どうしたよ、幽鬼童子？ お前の力はこんなもんじゃないだろ？ ほら、あれやってくれよ、あれ。あの……鬼闘術・凶鬼だっけ？ あれを使えばかわせるんじゃないかねえの？」

出来ることならすでにやっている、そう幽鬼が睨みつけると、オロチはニヤリと嗤った。

「ああ、そうか。お前使えないんだな。なぐんだ。じゃあどうして使えないか、俺が教えてやろうか？」

「何……？」

「それはお前が自分の本質に嘘をついているからだ。お前の本質は“爆発”。全てを巻き込む大爆発だ。俺を憎め。その存在を抹消しろ。桃太郎の時を思い出せ。お前が俺を殺したいと思えば、凶鬼はその力を発揮するだろうよ」

まるで知っているかのようなオロチの口ぶりに幽鬼は顔をしかめる。違う。凶鬼はそんな為にある技じゃない。そんな為にあるのだから、父はそもそも作らなかつたはずだ。凶鬼には別の意味がある。

……しかし残念ながら、それが思い出せない。桃太郎と戦って以来、何も思い出すことが出来ない。

明確な否定も出来ず、ただ悔しい思いをしている幽鬼に追い打ちをかけるように、オロチは言い放つ。

「鬼闘術はお前の父親、茨木童子の業だ。茨木童子は鬼の三頭の中でも残虐非道。そんな奴が作った業が、恐ろしくも残虐じゃないわけもないだろ。さあ、その父親の後を継げよ。お前がああ悍ましい童子になるんだよ」



幽鬼はただ首を横に振る。そんな幽鬼を見て、落胆したかのようにオロチは彼女を見た。酷く冷たく、気味の悪い目だった。

「……こんなけ言つてもまだ分からないか。だったらあそこに眠っている馬鹿よろしく、お前も死ねよ」

触手が再び蠢きだす。

あれをかわす術は幽鬼にはない。うねうねと蠢く触手を見て、それを受け入れるしかなかった。

「が……ふ……」

「あゝあ。つまんね。折角スサノウに連れてきてもらったのに、始めて殺し合う相手がこんな腰抜けどもだとは……。またどっかの村を乗っ取つて、退魔師が来るのを待つか。いや、それだと」

だんだんと、オロチの声が遠くなっていく。薄れ行く意識の中で、幽鬼はただ自分の死のことを自覚していた。

死ぬということになると、どうも他人事のように思えて仕方なかった。それならば、今自分が思っているのは走馬灯ということか。凶鬼によつて失われた景色まで鮮明に思い出されるのだからそれはそれで面白かった。

しかし、どうしてだろう。どうして父親の面影が“あいつ”と重なるのだろうか。優しく強かった父、そんな父を殺した憎いあいつ、何故その二人が重なるのか。

焦ることはない。この出血量ならばすぐに死ぬことはないだろう。自分がいなくなる前に、走馬灯と共に思い出していこう。

お前は何のための強さということを忘れている。

これは栄鬼の言葉だ。自分の強さとは何だったのだろうか……。

お前が傷ついて悲しむのは、お前だけじゃねえんだぞ！

先ほどの桃太郎の言葉。何故奴がそんなに言うのかは分からないが、それを言った奴の顔が何だかとても悲しそうだったのは覚えてい

る。

幽鬼は優しいからね。この技を教えておこう。

今は亡き父の言葉だ。私が優しい？ 父の言葉はいつも正しかったが、この言葉だけは賛同できなかった。

それでこそ、俺の娘だ。その力はね、仲間を助けるためにあるんだよ。

お前は自分の日常を守っていればよかったんだ。

「お？」

オロチは何か後ろで物音がしたので振り返った。

急所を外したのか、と面倒くさそうに頭を掻きながら今にも倒れそうな鬼に話かける。

「何だ、まだ立てたのか？ そのまま大人しく寝ていれば、楽に死ねたのによ」

「……思い出したぞ」

「アアン？」

不可解な幽鬼の言葉を聞いて、オロチは首をかしげた。

「凶鬼は人を傷つけるためにあるんじゃない。仲間を助けるために、日常を守るために存在しているんだ。仲間を助けようと思えば、仲間がいれば何を失っても立ち直れる。帰る場所がある。そう思ってお父さんは私に凶鬼を渡したんだ！」

「まだそんなことをほざくか！ いい加減自分の本質を認めやがれ！」

「そんな本質なんて捻り潰してやる。私は、お父さんの意志を継ぐ

鬼闘術・凶鬼！」

その瞬間、幽鬼の姿が四散したように消えた。決して比喻ではなく、まるでそこに誰もいなかったかのように、幽鬼の姿が見えない。

オロチは呆然として、先ほどまで鬼がいたところを見ていた。この俺が捉えきれないわけがない、そう思っただけで周りを見渡すもやはり幽鬼を発見することが出来ない。

しかし死は、確実に自分の背後にいた。

「鬼闘術・絶！」

オロチの左肩が抉られる。咄嗟に身をかがめなかつたら、その躰に穴が開いていただろう。

久々に感じた命の危険を感じて、オロチは幽鬼と距離を置こうとする。しかし動き出した爆ぜる鬼はそう簡単に止まらない。

「いちいち視界の外に……」

「返してもらっぞ、鬼ヶ島を！ 私の仲間を、私の日常を。鬼闘術・白！」

「ちっ……いい加減うぜえぞ、オメエ！ 鬼風情が俺に勝てると思っなよ！」

七つの触手が蠢き始める。

しかしその七つを以てしても、幽鬼の動きを止めることが出来なかった。爆ぜる鬼・幽鬼、本気で動き出した彼女を止める術など、オロチにはない。

実は使える魔術を用いても、右手に握る自分の体の一部を振るって、幽鬼は止まらない。確実に自分に死が近づいてきているのを、オロチは肌で感じていた。

これが凶鬼の力か……。

さっさと止めを刺さなかった自分を後悔した。

「当たれやあああああ！」

「お前なんか止められるか……。お前は何も無いから、私すら止められないんだ！」

幽鬼はさらに加速する。ここまでの領域に達すると、オロチはその位置ですら把握しきれなかった。

絶により地面が抉れ、戒により雲が裂ける。そして幽鬼がオロチの背後を捉えたとき、彼女の腕が勢いよく突き出された。

「ぐふ……」

ついに幽鬼の腕が蛇の心臓を貫いた。どんな生物でも、心臓を貫かれてしまえばその機能を停止する。幽鬼はそう思い、勝利を確信していた。しかし

「残念」

「なっ……？」

オロチが再び動きだし、幽鬼の左手を持って投げ飛ばした。不意と驚愕により幽鬼は対応できず、数メートルの距離を舞い岩石に当たってようやくその勢いが止まった。

何が起こったのか分からず、幽鬼は激痛よりも何が分かったのか分からない衝撃の方が大きかった。

「ハア……ハア……ちっ、面倒かけさせやがって、この女<sup>アマ</sup>。体ポロポロじゃねえか」

「な、何で？」

「ん……ああ、俺の躰は特別でな。俺の本体はこの躰じゃなくて、

あの触手たちなの。あいつらの中にいるたった一つの本物が消えない限り、俺は死なねえんだよ。悪いな」

全く悪気のなさそうな顔でオロチは謝る。そう言う蛇の胸は、周りの肉が覆うように埋められていった。それと同時に、七つの触手も再び蠢きだした。

「さて、ここまでやっついて何だが、お前にも飽きちゃった。というわけで、ここらで死んでくれや」

「ふざけるな……私はまだやれる……」

「無理だろ。もうその躰は限界だよ。　　ああ、安心しろ、苦しめないように楽に逝かしてやるから」

オロチの言うとおり体の自由が効かない。まるで鉛を背負っているかのように、重く動かなかった。

凶鬼を使った時から幽鬼の躰はすでに死にかけていた。そんな状態から酷使すれば、機能しなくなるのは日の目を見るより明らか。幽鬼はそれが分かっているからこそ、倒れている今というのが悔しくてたまらなかつた。あと一歩でたどり着けるのに、あと一歩で取り戻せるのに動かない。その一歩が絶望的に大きくて、幽鬼は泣き出しそうだった。

オロチはそれを見下し、嘲笑って剣を振りかざした。

「それじゃあ、バイバイ」

「誰を逝かしてやるって？」

声が出た。女の声だ。決してそこに突っ立っている犬の声ではない。犬はそこに立って、何故か満足そうな顔をしていた。

オロチは大きく目を見開いて振り返る。その声はもう決して聞こえるはずがないと思っていたから。あり得ない、そう思ってもその凜

とした声は確かに続く。

「花は散るからこそ美しい、とは誰が言ったかは知らないがアタシはあんまり賛同出来ないね。どんなけ踏まれたって、どんなけ刈られようが諦めずに立ち上がる姿の方がアタシは好きだ。だってそうだろ？ アタシたちはそんなに美しくもないし、静かに自分の身が死んでいくのを見るほど達観することが出来ないんだ」

「ど……どうして、お前が……」

「死んでいくのは怖いよな。だから アタシと一緒に殺してやるよ」

白い着物を身に纏う、死神が悠然とそこに佇んでいる。

## 第五章・第六話：最狂、覚醒

「おい、オロチ……」

死神が一步、踏み出す。

気怠そうなその一步だが、先ほど死にかけていた人間が踏み出すものとは思えないほど確かなものだった。

呼びかけられたオロチは未だに口を大きく開け、その在り様に呆然としていた。

「どうしてお前が立てるんだ、とかそういう三流な台詞を吐かないでくれよ。アタシはここに立っている、その現実を見るよ。オロチ」

「バカな……あり得ない。どうしてお前が生きている？ 確かにあの剣撃はお前の心臓を貫き、目を潰した。普通の人間なら、即死しているはずだぞ！」

「じゃあ答えは簡単じゃねえか。アタシが規格外に外れているからだろ」

あっけらかんと桃太郎は答える。

確かに奴は規格外ということを知っている。だが心臓をぶち抜かれてまだ立てる人間など、何千という歳を経たオロチですら見たことがない。

こいつは本当に人間なのか……？

「まあ……確かに危なくもあつた。向こうにお花畑が見えたし、婆さんにも会つた。あの時婆さんに突き返されなければとつくに向こうで楽しく笑っていたらうよ。でもさ、それだけじゃないんだ。アタシには戻つてこないといけない理由があつた」

「理由、だと……?」

「ああ……一つはお前をぶん殴ること。そしてもう一つは鬼ヶ島を返してもらおうことだ」

キヨウがオロチを睨みつける。

彼女の眼は貫かれ、血で真っ赤に染まっている。もはや見えるはずのない眼球で確かにオロチを見ていた。その赤い瞳は何とも魔的で、同じ赤い眼を持つ幽鬼でさえ息を呑んだ。

「アタシとお前は確かに似た者同士だ。アタシは物を壊すことで強さを幻視し、お前は殺すことで自己を満足させる。けどな、幽鬼は違え。幽鬼には仲間がいる、家族がいる。もしこいつが外れそうになったら取り戻してくれる奴らがいる。そんな幽鬼は外れているとは言えねえ。こいつは確かに、帰るべき場所がある」

「桃原、キヨウ……」

「今はその仲間がいねえから、止めてくれる奴がいねえ。だからアタシがお前を殺す。幽鬼を無事あいつらの下に帰れるようにアタシが代行する。似た者同士は似た者同士、一緒に地獄に落ちようぜ。そして鬼ヶ島を幽鬼に返してもらおうぞ」

桃原キヨウはまた一歩踏み出す。

ゆらりゆらりと、風になびく灯火のようにオロチに迫る。思わず後ずさりしてしまった。

「どうした、オロチ。外れた者同士戦えるなんて、お前の理想通りのシチュエーションじゃないか。……ああ、やっぱりか。お前、アタシのことが怖いんだな、オロチ?」

桃原キヨウは嗤う。愉しそうでも愉快そうでもなく、ただ口を歪ませる。自分のことを蔑んでいると分かり、ようやくオロチは叫びだ



した。

「な、何を言っている！ 俺がお前のことを怖がっている？ あり得ない。俺は怖いと思ったことは一度も」

「そりゃあ、嘘だ。じゃあなんで、お前の手は震えているんだ？」

え、という声が漏れるとともにカラン、と剣が手から零れ落ちる。震えている。尋常じゃないくらいに手の震えが止まらない。手だけじゃない。体全体だ。体の奥底からくるような震えが止まらず、才口ちは目を大きく見開いた。

「さつきお前が言ったとおりだ。あらゆるモノは零に収束する。それはこの世界の道理であり、秩序だ。それに従うことは間違っているとは思えない。でも、お前はそれがたまらなく怖いんだ。黄泉の国を見て、もう戻りたくないと思ったか？」

「っ！？」

「外れていない幽鬼ですら死を覚悟してこの戦いに臨んでいるというのに、お前は終わりというものを覚悟していない。お前は殺人鬼なんかじゃなくて他人が死ぬのを見ることで死から逃避できたと錯覚する、逃亡者だ。なあ、そろそろ現実を見る頃じゃないか、臆病者？」

「貴様　　！」

七つの触手が恐ろしい速さでキョウウに襲い掛かる。

しかしキョウウは動かない。ただ腰にある桃花に手をかけ、構えただけだ。恐れを知ってしまった獣の奇襲など、怖くとも何ともないからだ。

向かってくる触手に対して、キョウウは桃花を振るう。振るうだけで十分だった。

「え……?」  
「アタシもよく分かんねえけどさ。今日のアタシはすっごいハイだから気を付けた方がいいぜ。触ったら消えちゃうかもしれないからさ」

これは比喻ではない。文字通り、桃花に触れた触手は真っ二つとなりそれ以来動かなくなった。斬った、というよりは消えた、という表現が正しかった。

よく見ると桃花の様子も変だった。影のように真っ黒で、見る者すべてを呑み込むような、そんな黒。漆黒の刀を持った白い死神を見て、オロチは狂わずにはいられなかった。

六つの触手が一斉に飛びかかる。それらは桃花に触れた瞬間、消えた。

雷の魔術がキョウに襲い掛かる。桃花で防ぐと、なくなっ

た。  
完全に狂いだしたオロチがキョウに殴りかかる。殴ろうとした左腕を斬ると、まるで初めからそこには何もなかったかのように、消滅した。

腕のついでに足も切り裂き、キョウはオロチに馬乗りになる。目の前の“無”を消し去ろうと、必死になって喚き叫ぶオロチのを見つめる彼女の思考は別の所に跳んでいた。

「爺……まだ最強には程遠いけどさ、今のアタシはちょっと前のアタシより、確実に最強に近づいているって、感じるよ」

「  
「これでいいんだよな、爺」  
」

桃花を握る。禍々しくも美しいそれは爺が最も好んでいた漆黒。ま

だ彼を超えることなど出来ないが、いつか超えてみせると桃原キヨウは誓う。

漆黒がオロチの中心を貫く。

オロチが最後に見た光景は、自分を見つめる血のように赤い眼だった。

まるで墓標のように桃花が突き刺さっているオロチを尻目に、桃原キヨウは立ち上がる。  
見るものを魅了する圧倒的な無、それを呆然と見ていた彼女はゆっくりと立ち上がる彼女の様を見てようやく我に返った。

「さて……後はこいつの腹の中に収まってる鬼ヶ島を取り戻すだけか……犬、やっつけ」

「御意」

「さうで、アタシは眠ることにしますか。思えばここ数日まともに寝てねえじゃねえか。鬼ヶ島行った時からだから……一、二、三

」

「桃太郎！」

桃太郎、というのは自分の名前であるが幽鬼にその名を呼ばれると何故か不思議であった。それになぜか今はその名で呼ばれたくない。微妙な感情を入り混じらせながら、キヨウは振り返った。

「アア？ どうした、幽鬼？」

「あ……あのだな……。いや、何というか……えっと、その……」  
「何だ、言いたいことがあるならはっきり言えよ。お前らしくもない」

「あ、ああ……。じゃあ言うぞ。」

お、鬼ヶ島を取り戻してく

れて、あ、ありがとう」

顔を赤らめながら幽鬼はそう言った。

なるほど、そういえばそうだった。オロチを倒したことによって鬼ヶ島を取り戻したヒーロー、いや女だからヒロインになったわけだ。しかしキヨウはその礼を受けるつもりはなかった。彼女にはある思いが占めていたからだ。

……それとは別に、顔を赤らめた幽鬼を思わず抱きしめたくなくなったのは内緒である。

「は、別に礼なんか欲しくねえよ。アタシがしたのは当然のことだ。しかも、今回は私情も入り混じってる。アタシが好きにやっこうなっただんだ。礼なんか言っうな」

「でもだな！ お前は確かに命がけで」

「命かけてもお前さんの親父を殺した罪は消えねえよ」

キヨウは突き放すように言い放つ。

「アタシは重い罪を背負って生きていく。全てを抱えて最強を目指す。そう決めたんだ。だからそう簡単に礼を言わないでくれ。むしろ憎んでくれた方が、助かる」

桃太郎は幽鬼の父、茨木童子を殺した。その事実は決して捻じ曲げられないものであり、そしてこれからも消えることはない。桃原キヨウは桃太郎の犯した罪を背負って生きていくのだ。それならばいつそ、幽鬼にはその罪を一生忘れないでほしい。幽鬼には自分を恨み続けもらって、アタシのことを殺しにかかってもらった方がいい。それぐらいの罪を背負えなくて何が最強か。

全てを守る、とかそういうどこその金髪が言いそうなたれたこととは言わない。しかし今回自分の意地を守った時、遠く向こうで何

かが見えた気がした。あそこそが今まで見失っていた道に違いな  
い。根拠などない。だが自分はそういうことに関しては勘が鋭いの  
だ。

キヨウの言葉を聞いて、幽鬼は顔を埋めていた。消え入るような声  
で幽鬼は言う。

「じゃあ、一つだけ私の我俣をいいか？」

「……ああ、いいぜ」

「キヨウ、って呼んでもいいか？」

きよとん、と呆然とした。てつきり死んでくれという願いでも受け  
るつもりでいたからそのギャップに驚いた。

やはりかわいい。幽鬼には、血で染まるよりこうしている  
方が似合っている。

キヨウがその問いに答えようとした時、その問いをかき消すような  
爆音が鳴り響いた。

「  
！！！」

もはや言葉にすらなっていない、悲鳴のような唸り声が辺りに鳴り  
響く。

見ればオロチの体が宙に浮かび、彼の体が変成しているようだった。  
ぼこぼこ蠢きだす彼の体を見て嫌悪感を抱きながら、キヨウは桃  
花を手を取った。

「しづといのにも程があるだろ！ 大人しくもう死んどけよ！」

「あいつは首を斬らないと生き返るんだ。早く消さないと！」

「首って……どれ？」

え、という声を漏らす。まさかキヨウはそんなことも分からないの

か、と文句を言おうとした彼女の表情もまた固まった。  
……無理もない。何故ならオロチだったその首はたった一本には収まりきれず、植物のようにどんどんと分裂している最中だったのだから。

「ああ……こりゃ、八岐大蛇、つて奴か？」

「……ああ、そういえば自分でそう言っていたような……」

「！！！」

変身完了、とでも言わんばかりに八岐大蛇が轟き叫ぶ。なるほど、蛇つばいとは何となく感じていたが本当に蛇つばい奴だとは思わなかった。

さて、ここにきて問題が現れた。別にあいつを倒すことには変わらない。今までもそうしてきたように、あいつをぶった切るだけだ。しかし、この疲弊した体で自分の何十倍にもあろう巨体をどうやって倒せばいいのだろうか。

よし、一旦冷静になろう。この状況を乗り越える策は何かあるはずだ。

「八岐大蛇を倒す時にゃ……酒だな。酒もってこい、犬」

「ここに」

犬は何処からともなく樽一杯の酒を取り出す。

何処かで聞いたことのある話だ。確か八岐大蛇は酒が好物で、そのせいでなんやらかんやら首を斬られたはず。そんな古事が、頭の片隅に残っていた。

キョウはその樽を持ち上げると何を思ったのか、一気飲みし始めた。

「しゃー！ いいね、この酒！ 生き返る！」

「お前が呑むのか、キョウ……」

あつという間に樽の酒が消えていくのを見て、幽鬼は絶句禁じえなかった。鬼の中でも、こんな酒豪はいなかった……。全く酒に酔っていない様子で、キヨウは桃花でオロチを指した。

「よし、行くぞ！ 幽鬼。お前はあの腹めがけて突っ切れ。何があつてもよそ見るなよ。アタシが補助してやるからよ。さあ、行くぞ、幽鬼」

「キヨウ様」

「アア！？ 何だ、犬。今すっげーいいところだったんだが……？」

先ほどまで調子づいていたキヨウの顔があらさまに不機嫌なものになる。今まで犬が自分の進行を止めたことなどなかった。まして、自分に意見することなど一回もなかった。

「先ほどキヨウ様がおっしゃったお言葉……奴とキヨウ様が似た者同士という言葉ですが敢えて反論させていただきます」

「アア？」

「キヨウ様は奴と似たところなどございません。キヨウ様には、我がついております故」

もしこいつが外れそうになっても、取り戻してくれる仲間がいる。

先ほどの自分の言葉だ。まさかこいつ、それを気にしているんじゃないだろうな、と思ったがそのまさかのようだ。こいつは真面目に主人に向かってそう吼えている。

キヨウはそれを見て、挑発的な笑みを浮かべた。

「は、生意気な。いいぜ。犬。そこまで言うなら“お預け”は終わりだ。あいつの首を“取ってこい”」

「御意！」

力いっぱい犬が言う。それを見て、ほんの僅かだが体が楽になった気がした。

「行くぜ、キヨウ。鬼闘術・凶鬼！」

「ああ！」

幽鬼が爆ぜる。

今回の事件、確かに幽鬼にとって辛い物であった。しかし今回の事件がなければ、彼女は一生過去を追い続け、周りを見なかつただろう。辛い経験をして前に進むと決意するか、楽に後ろを向き続けるか、どちらが良かったかは言うまでもない。

オロチが吼える。彼の八つに増えた頭がそれぞれ彼女に襲い掛かり、彼女の何倍はあろう、大きな口を開けて食わんとする。

それでも彼女は止まらない。今の爆ぜる鬼を止めれるものなど、存在しない。

「！」

「臆病者が……アタシの邪魔をするなー！」

鬼闘術・白。もはや彼女の十八番になったこの技で向かってくる首を潰す。潰す。潰す。

風船のように破裂していくその様は、見ていて爽快感すら与えるようなものだった。

しかしオロチもただで死んでくれるというわけでもない。彼の中央にある本物を潰さない限り首は再生し続ける。そのうちの一本が一瞬の隙を突き、空さえ呑み込んでしまいそうな口を広げて襲い掛かった。

それを防いだのは、風であった。





漆黒の桃花を腰に収め、一息つく。幽鬼の方を見れば、彼女もうまくやったようだった。彼女の左手には光る球体が握られておりその右手は親指を立ててこちらに向けている。自分も親指を立ててそれに応える。

万事は解決、その思った瞬間キヨウに急激な眠気が襲ってきた。そういえばここ最近眠っていないことに気付いた。

「さあ、終わった、終わった。さてと、アタシは」

「おや、この惨劇は何だ？」

不意に声を掛けられた。この鳥がさえずるような声、忘れるわけもない。三人が振り返ると、予想通りそこには御門武が訝しむような目でこちらを見ていた。

《忘れてたー！》

「おい、その者。答えよ。どうして私の兵は皆倒れ、お前たちは血で真っ赤になっているのだ？」

貴方の兵は操られ、私たちがボコボコにしました。ついでにこいつが鬼です。

……と言えるわけがない。真実でも言っではいけないこともあるのだ。

犬は黙り込み、キヨウはどうでもよさそうな顔をしている。このどうしようもない状況を打開するために幽鬼はどうしようもない嘘をついた。

「ああ……えつと……あ、あれが鬼です。あれが全てやりました」

流石の桃原キヨウでも“その嘘はねえだろ、幽鬼”と言いたげ目で幽鬼を見ている。うん、自分でも分かるよ。無茶だったことは……。

「ほう、なるほど。あの巨体がこの惨劇を……となれば、お前たちが鬼を倒したのか？」

「は、はい。その通りでございます」

「素晴らしい！ ほめて遣わずぞ、女子よ。この礼は後で正式な場所ですることしよう！」

……あっさり信じた。思ったよりもこの国の一番偉い人はバカなのかもしれない。

「ふむ、では私がここにいる必要はあるまい。早々に立ち去ることにしよう。ではまた、な。童子殿」

そう言つて外套をはためかせながら去っていく。

途中馬に乗り、地平線の彼方に消えていった奴を見て、げんなりするよつに呟いた。

「今あいつ童子つて……」

「あいつ全て知つてアタシたちに任せたんじゃないだろうな……」

十分に考えられることだった。そんな最悪、考えたくもない……。三人は考えることを放棄した。

「ま、どうでもいいや。偉い人が考えることは分からん。というわけであタシは寝る。犬、しばらくアタシを起こすなよ。もし起こさうとする奴がいたら……全力で消せ」

「……はい」

いささか物騒な命令をされ少し絶句している犬をよそに、キヨウは岩にもたれかかると数秒も立たないうちに寝息が聞こえてきた。

その眠る速度に驚きながらも、幽鬼に門番のように立っている犬に問い詰めた。

「おい、鬼丸たちのことを追わなくていいのか？ あいつら、ヤバい奴と戦っているんだろ。だったら助けなくちゃ」

「……心配ない。あいつらは負けることはない。キョウ様は、それを知っているからこそ安心して待っているのだろっよ。あいつらは、桃太郎様をも倒す“無敵”だからな」

犬がほくそ笑む。いつも無表情のこいつがそう言つと何処か気持ち悪いところがあつたが、それは幽鬼にも納得できることであつた。あいつらは帰ってくる。ならば自分はここで待っていよう。幽鬼はキョウの隣に腰を下ろし、空を見上げた。夜が明ける前の、最も暗い幽鬼が好きな空模様であつた。

「むにゃむにゃ……お前を、いじめる奴はアタシがぶっ殺してやるからな……幽鬼」

物騒な寝言が隣から聞こえてくる。その寝言すら今はありがたく聞こえる。

幽鬼は笑って、キョウが寝ていることを良いことに今一番言いたいことを口にした。

「ありがとう、桃原キョウ」

## 第五章・第七話：敗北

鬼丸童子の強さとはあらゆる敵と戦える万能性にある。

金太郎のような力はなく、桃太郎のような狂気もなく、月光のような特別な武器すらない。しかしその突出した能力がない故に、あらゆる敵と対等以上に戦えるマルチプレイヤーとなっているのだ。あらゆる魔力を操り、あらゆる魔力を抹消する。そんな彼には弱点らしい弱点は存在しなかった。

しかし、それは自分と対等の立場の敵を仮定した場合の話だ。自分より遥かに高位の存在と戦うことなど、鬼丸でさえ想定したことがなかった。そう、例えば神のような存在とは決して関わることはないと思っていた……。

「十束！」

見えない衝撃が肌を抉る。鬼の硬い皮膚がまるで紙のように切り刻まれ、血が滲みだす。

鬼丸は戦闘開始直後からこの剣戟を見切ろうと何度も目を凝らしていた。

腰にある剣を引き抜き、振るう。たったそれだけの行為なのに見切れない。魔術ではなく純粹な剣術という意味では、とある正体不明の衝撃魔術よりも厄介である。

鬼丸の額には汗が滲みだしていた。

「おいおい、鬼丸童子。どうしたんだよ？ 人の思い通りになるのは嫌だったんじゃないのか？ 俺はまだ、鞘から抜いてすらいらないんだぜ」

「……ちっ」

そうなのだ。スサノウは未だあの重々しい剣を抜いてすらいない。それどころか、戦闘開始からスサノウは一度も動いていなかった。レベルが違いすぎる。舌打ちも空しい物に聞こえた。

「チャンスもないというわけじゃない。神とはいえど下界にいる時点で人間同然。当然、死という概念もある。一矢報いることも出来るかもしれないぞ」

「言われなくても！」

鬼丸が駆けだす。

自分の優位に立っていることはデザートイーグルによる遠距離攻撃と、敵が慢心に陥っていることだ。ならば警戒される前に一撃で倒すほかない。

なるべく速く、敵の視界から外れる。スサノウにしてみれば止まっているような速度なのだろうが、ゆっくりと振り返っている奴の視界から消えるには十分すぎる。

敵が振り返らないうちに、必殺の銃弾を撃ち込む。

「くくっ……」

それだけで終わりではない。当然、奴は剣を振るって防いでくるだろう。

銃弾より速く敵の頭上に移動し、そこでまた銃弾を放つ。圧力を纏った銃弾は、重力と共に敵に落ちていく。

「クハハハ……」

その工程を何度も繰り返す。一度でダメなら、二度。二度でダメな

ら何度も繰り返す。自分はそこまで諦めの良い鬼ではないのだ。四方八方から放たれた銃弾を一度に防ぐ術などない。全ての銃弾がスサノウに向かい、迫り行く。必殺とはならずも一矢報いることが出来た、そう思っていた。しかし、鬼丸は知らなかった。何度も何度も繰り返してようやく大成する人間もいれば、たった一回のチャンスで自分たちを凌駕する存在がいるということに。

「アハハハッ！ そんな程度で俺を倒せると思うなよ」

スサノウは鞘から抜かず、剣を振りかざす。そして地面に向けて突き刺した。

「八雲やくも！」

剣から金色の衝撃が放たれ、四方八方に展開されていた銃弾を全て蹴散らす。カランと空しい音を立てて落ちていく銃弾を見て、鬼丸は愕然とした。

次元が、違い過ぎる……。

自分の全力にも近い攻撃を軽く弾き飛ばされ、鬼丸はそう痛感した。もしスサノウが全力を出し、自分を殺しにかかったならばどうなるのか、考えずとも分かった。しかも周りには絶対の名の下に存在する注連縄が張られている。逃げることも出来ない、虚を突いて倒すことも出来ない。そんなどうしようもない状況を打開してくれるのは、そう、あいつしか……。

「坂田金太郎を待っているのか？」

「っ！？」

「凶星か。そりゃそうだよな。お前の一番とも言える相棒だもんな。

あいつとお前がそろって初めて無敵になれる、そう思っているんだもんな」

まるで心を見透かされているよう言葉に、明らかに鬼丸は動揺している。そして、それがスサノウの目的でもあった。

こんな戦い、すぐに終わらせることなど容易い。ただ鬼丸の後ろに回って首筋を叩いてもやればこんな勝負、一瞬で片が付く。しかしそうはしないスサノウには理由があった。

鬼丸童子は交じり過ぎた、と言えばそれが結論になる。鬼丸の本質は死の中にある。すなわち他の何物もなく純粹な無、何もないところが彼の原点なのだ。それなのに彼には余計なものが付きすぎた。四方院かぐやから愛を感じ、浦島竜胆からは知識を受け取り、そして坂田金太郎から仲間というものを貰った。そんなもの本質には必要なく、排除してしまわなくてはいけない。

彼に本質を理解させるための術式などとうに完成している。後は彼から無駄なものがなくなった時初めて起動するのだ。この戦いの中で、彼には自覚してもらおう。

お前には死よりも深い無を味わってもらおうぞ、鬼丸童子……。

スサノウはそのため、今にも溢れ出さんとする笑みを隠しながら話しかけた。

「でもよ、お前があいつの仲間でいい理由なんて、これっぽちもないんだぜ」

「……そんなこと、分かっています」

「いや、分かっちゃいない。何も分かっちゃいない。今でもお前はあいつらに依存している。さっきの攻撃も、俺には時間稼ぎのように見えたぞ、アアン？」

先程の全方位からの攻撃、見た目は派手に見えるが威力はそれに比



例してはいない。あんなもの、全ての弾丸が自分に向かってきているのは分かっているのだから全ての弾道を把握すれば避けることなど造作もないこと。

敵を倒そうとしない攻撃の目的は二つ、手加減しているか時間稼ぎに他ならない。奴の今すぐ脆くも崩れ去りそうな表情を見ても、後者であることは決定的であろう。

このまま奴と話をするのも面白いが、残念ながら自分はそんなに我慢強くない。直球で、鬼丸を壊す。

「お前には仲間なんていない。一人で生きて、一人で死んでいく。それがお前だ、鬼丸童子」

「……いい加減黙ってください。そんなの、そんなの貴方に言われる筋合いはありません！」

鬼丸が弾丸のように飛び出す。

十八番のデザートイーグルを使わず接近戦を持ちかけるとは、どうやら鬼丸も我慢していたようだ。普段どんな挑発にも乗らない彼がこんなに簡単にキレるとは、相当参っているように見える。

それも僥倖。全ては我が思うのまま。

スサノウは動かない。ただ腕を組み、迫りくる鬼丸を観察していた。彼が動く必要などない。神は言葉によって、全てを征服できるのだから。

『平伏せ』

その瞬間、ガン、と何かに押し潰されるように鬼丸の頭は地面に伏した。スサノウはその様子を見て嘲笑い、鬼丸は下から睨みつけていた。

神は全てのモノに対する命令権を持っている、とえば説明は早い

だろうか。万物の頂点に立つ高位が下位のモノに命令するのはそこまで不思議なことではない。それもこの国の三貴子の一柱、スサノウのモノともなればあらゆるものは彼の思惑通りとなる。彼に対抗できるとなれば、それは他の三貴子ぐらいなものか。

とにかく彼の言葉は絶対。その力を用いれば鬼丸の精神を壊すことなど容易そのもの。しかし彼はそれをあえて使わなかった。先ほど彼が動かなかったように、それこそ今回は使いまでもないからだ。

「言われる筋はあるんだよ。俺は神だから。それに俺じゃなくても、お前の事情を知ればみ〜んなそう思うぜ、お前は仲間を作る資格なんてないってことをな」

「何……？」

「だってそうだろ。お前は自分の為に仲間の親を殺して、縛り付けた。その仲間には叶えたい夢があるのを知っているのにも関わらずにな。きつと奴らはこう思っているぜ、“何で仲間ごっこなんかやっているんだろう”ってな」

命令などせずとも、事は済む。なぜなら。

「自分勝手に、残虐で、そして無様。そんな奴に仲間なんて出来ると思うのか？」

彼は自分で勝手に壊れていくのだから。

鬼丸はまるで容量いっぱいまで詰め込んだダムのような小さい小さいそれはいつも無理して詰め込んでいた。自分はそれに小さな、小さな穴を開けただけ。そんな小さな穴でさえ、この鬼は耐えきれない。

そしてその脆い壁はついに決壊の時を迎える。

「……わい」

「アア？ 何だった？」

「黙りなさいって言ったんですよ！」

地面に這いつくばる状態から必要最小限の動きで目の前の敵の足を折ろうとする。もし反応まで少し遅かったら小枝のようにポッキリ逝っていただろう。

鬼丸はその隙に立ち上がる。微妙に赤みを帯びる双眼が自分を射抜いている。

「そうです。私は自分勝手に残虐で臆病で弱くて、そして無様。だから彼らを失うことを恐れたんです。彼らがいれば自分を認めてもらえるから……。けれど、それももうお終いだ。もう彼らに別れの言葉を言ってしまったから、もう誰の邪魔をしたくないから！ 今決めました。私は一人で生きていくと」

「……へえ」

「私は鬼丸童子。他の誰でもなく、他の何物でもなく私。私を煩わしく思う仲間なんていらぬ。私は、私だけを信じて生きていきます！」

スサノウはニヤリと、内心ほくそ笑んだ。今にも唾いが外に漏れてしまいそうなのを必死に堪える。ここで唾ってしまったら雰囲気ぶち壊しだから。

彼は気付いていないかもしれないが、必要な術式はとうに彼の足もとに展開されている。後は自分が触って、最後の一言を言うだけ。たったそれだけで彼の目的は完遂される。

ようやく、ようやくこの時が来た。

スサノウは唾いを必死に隠しながら、最後の工程を完遂するために言う。

「ならばそれを証明してみろ。お前の力だけで、自由を勝ち取って

「見せる！」

「私に命令するな！」

鬼丸が段違いの速度で飛び出す。

後はこいつに触れて術を唱えるだけ。スサノウの手が今まさに触れようとした、まさにその時だった。

「やめろ、鬼丸！」

ピタリ、と鬼丸の動きが止まる。この声は聞き覚えがある。いや、忘れるわけもない。何度も聞いたことのあるその声の持ち主の名を呟いた。

「キンタ……」

「バカな！ 何処から聞こえてくる？ 注連縄は空間遮断、絶対に破れないものだぞ！ くっそ、何処か術式をミスったか？」

驚愕しているのは鬼丸だけではなかった。絶対が破られたことに相当動揺しているようだった。それも今は有難い。金太郎と会話に邪魔をされたくはなかったから。

「鬼丸、お前はそっちに行っちゃだめだ！ 戻ってこい、鬼丸！」

「……何故ですか？ 私は皆の邪魔になる。傍にいる意味などない。私にはそこにいる価値などないのです」

黒い球体に狭間れて鬼丸の気丈な声が聞こえてくる。

しかし何故だろうか、鬼丸の言葉が自分に言い聞かせるような、ひどく悲しいものに聞こえた。

「貴方には“世界を救う”という壮大な夢がある。その夢に向かっ

てただひたむきにウラシマと共に進めばいい。私は私だけの道を歩いていきます」

「だったらかぐやはどうするんだ？ かぐやを置いてきぼりにするのか、お前は？」

「……彼女はいつか必ず迎えに行きます。それまで貴方が見ていてください」

段々と滅茶苦茶な話になっていく。そして段々と、金太郎の胸の内にムカムカと何かが溜まっていく。

「そんな無責任許されると思っているのか！？ お前はそんな奴じやなかったはずだぞ！」

「私は元からこういう鬼です。自分勝手に、醜悪で無様。知っていますか？ 私が貴方と仲間になったのは桃太郎討伐の際の駒になってくれればいいと思っていたから、ですよ。そしてもうその約束は果たされた。だから貴方とは一緒にいる道理などないのです」

確かに、最初はそういう約束だった。いや、彼にとっては冷たい契約だったかもしれない。

しかし彼は重要なことを忘れていた。その契約はすでに更新されていることに。

「私は私一人で生きていく。面倒事全て抱えて生きていきます。もう、貴方は私の面倒など抱えなくていいのですよ」

その瞬間、金太郎の中で何かが切れた音がした。

「この大バカ野郎が！」

いい加減トサカに来た。今まで鬼丸に怒鳴ったことはないが、ここ

で一発ガツンと言ってやらないとこのバカは治らないらしい。  
金太郎は声を荒げて言う。姿が見えないのでこれは予測でしかないが、鬼丸は相当驚いていることだろう。こんなことで驚いていて、何が一人で生きていくだ！

「面倒事全て抱えて生きていく？ たかが十五歳の餓鬼が何を言っ  
てやがる！ 俺、言ったよな。“鬼ヶ島復興まで付き合っ  
てやる”  
って。だったらその約束最後まで果たさせろや！ 中途半端なこ  
ろで止めてんじゃねえぞ」

「し、しかし、桃太郎に壊された鬼ヶ島はもう復興し……」

「また壊れちまったじゃねえか！ だったらそこまでやらせる。乗  
りかかった船に最後まで乗せろや！ カッコつけてんじゃねえぞ、  
デメエ！」

「キンタ……なんでそこまで言えるのですか？ 私と貴方はあくま  
で他人。そこまでの道理は  
「仲間だから！」

簡潔に、そして強く答える。理性的に言えばもう少し素晴らしい言  
葉を言えただろうが、今の本心はその言葉に違いない。

「面倒上等じゃねえか！ お前の面倒事全て俺と一緒に背負ってや  
るよ。だからその代り俺の夢を手伝え。俺はお前とだったら何でも  
やれるんだ！ だから戻ってこ……鬼ま……る……」

段々と言葉が薄れていく。闇が濃くなり、彼との間を妨げる。  
自分の後ろには満足げな顔をしたスサノウが立っていた。

「ふう、ようやく術式の修復が完了したか……さあ、鬼丸。もう邪  
魔するものはいない。存分にやり合おうぜ！」

「……私、帰ります」

は、と声が漏れる。

鬼丸が一步踏み出したとき、その頭が掴まれた。まるで万力のよう  
なその手はとても痛く、すぐさまにでも振り払いたかった。  
しかし鬼丸はそれでも一步を踏み出そうとした。

「おい、テメエ。何ふざけたことを言ってるやがる。テメエには帰る  
ところなんてねえって、自分でもそう言ってたじゃねえか」  
「……確かにそう言いました。でもね……」

鬼丸は自分を掴んでいる手を睨みつける。鮮やかな紫色の両眼が、  
自分を貫いていた。

「こんな鳥肌にさせられてしまって私も我慢の限界なんです。一発  
殴らないと気が済みません！」

「……すっげーブツブツ」

「そういうわけで私、鬼丸童子はお暇させて頂きます。それでは失  
礼します」

「待て、コラ。何がそういうわけだ？ そんなこと許されると思  
っているのか、アア？」

そういうわけです、と自分は言ったはずなのに理解してもらえなか  
ったようだ。早くこのブツブツを治めるためにもここから出なけれ  
ばならないのに、こんなところで足止めを喰らうわけにもいかない。

「……では仕方ない。元からそのつもりでしたが、武力行使させて  
頂きます」

鬼丸は身を翻し、自分を掴む腕を最小限の動きでへし折る。

神とはいえど、下界に下りれば人間同然。腕を折られ、苦痛で顔が

歪んだ。

「ぐ……」

「私はあそこに帰らなければならぬ。こんなところで留まってい  
るわけにはいかないんです！」

その隙に鬼丸は距離を取る。自分にとって最も有効なその距離、先  
程まで何を恐れていたのかさっぱり分からないほど頭がスツキリし  
ている。そのお陰でこの距離が導き出せた。

さて、相手が自分より遙かに上の使い手であることは今までの戦い  
を見ても決定的に明らか。

ではやられないように最善を尽くすしかあるまい。鬼丸は自分の限  
界の速度を用いて、三次元的に動き出した。

「ちょこまかと

！」

いくら敵の感覚が鋭くても、予測不可能な動きを捉え続けることは  
難しい。鬼丸はそれを分かって、スサノウの周りに飛び回りながら  
銃弾を放つ。

もちろん、その程度でスサノウを倒せるとは思ってもいない。倒せ  
るチャンスは一度きり、それも敵が八雲を使ってきたときだけだ。

「いい加減うぜえぞ、オメエ！」

スサノウを中心に八雲が放たれる。

しかし彼はこの攻撃で鬼丸が倒れるとは思っていなかった。とある  
正体不明を倒したときと同じように、相反する魔力を用いて生き延  
びているだろう。

それでは彼が何処にいるのか。左か、右か、それとも後ろか。何か  
が変わったのか、動きがさらに鋭くなっている彼の動きを把握しき



るのはスサノウでも難しい。

さて、何処に居やがる……？

その時、上空で何かを構える音がした。

「これで、終わりさせて頂きます」

八雲の衝撃と共に舞い上がり、七色の術式を周りに展開させる。

思ったより早く気付かれてしまったが、ギリギリ仕込みは終わった。鬼丸は、自分の限界の魔力を撃ち込む。

「全門開放、放て！」

「十束！」

極太の魔力の閃が放たれる。それと同時にスサノウも飛び上がり、それに対抗するために刀を振るう。

規格外のエネルギーのぶつかり合い、鬼丸の全力を用いたその攻撃によって辺りは爆風に巻き込まれた。もしこれが結界の中でなかったのなら、大災害は免れないだろう。

その大爆発が収まり、視界が徐々に開けていく。そこに立っているのは一人、佇むその男は。

「ちっ……くだらない。仲間とか一番信じてねえのは、オメエなのよ」

赤い髪のスサノウが、鬼丸の頭を掴んで忌々しげに呟いた。

## 第五章・第七話：敗北（後書き）

一周年！

本日をもちまして“誰も知らない御伽話”は投稿一年を迎えました。ありがとうございます。ここまで続けてこれたのは一重に皆様のおかげでございます。

さて、物語もいよいよ佳境。鬼丸君はどうなるのか、金太郎あんまり目立ってない、作者の進路はどうなるのか（笑）など色々問題山積みですがどうぞ最終回までよろしくお願いいたします

## 第五章・第八話：Cross Over

「おい、鬼丸！ 鬼丸、返事をしろよ、おい！」

鬼丸の声が突然かき消された。

それが目の前の黒い球体によるものだと分かると、金太郎はその拳を打ち付けた。当然、黒い壁は依然存在している。

「くっそ、いい加減壊れるよ、この結界。邪魔くせえんだよ！」

「だから無理だつて、キンちゃん。注連縄は絶対に破れない。さっきの鬼丸君の声も、幻聴だつて」

「そんなことない！ あいつの声は確かに聞こえたんだ！」

まだ諦めない、そう言っている金太郎を見て今日何度目か分からないため息をつく。

注連縄はもはや魔術の領域ではない。魔術は所詮、この世界の枠組みで決められた常識の中で存在している。手間と労力を掛ければ、誰もが到達する領域なのだ。

しかし目の前のこれは違う。これは空間が遮断され、誰もが到達できないような領域だ。こんな“ここからは俺の領域”みたいに陣地取りごっこを真面目に、しかも絶対的に存在するのは魔術という領域から超えている。

僕ら魔術師はそれを奇跡と呼ぶ。

奇跡、そう、奇跡だ。

人間では起こしえないような、神の領域。それを奇跡と呼ばずして何と呼ぼうか。その絶対的な奇跡を目の前にしてウラシマはただそれをボウ、として見つめるだけであった。

「道はあるもんじゃない。作るものだ。だったらこじ開けてやる！」

……奇跡がもし常識外れを意味するのならば、目の前のこの男も十分奇跡だろう。

絶対的力を目の前にして、まだ諦めないような人間などウラシマの常識からすでに外れていた。

「そんなこと無駄なのに……」

「無駄かどうかはやってみて分かることだろ！ まだ間に合う。鬼丸を助けられるんだ！」

そう言つて金色の退魔師は黒い球体に手を掛け、それをこじ開けようとす。

当然のように、それはビクともしない。当たり前だ。空間が遮断されそこにあるのは無なのだから、無いモノ相手に何を動かそうとするのか。

ウラシマの口から再び息が漏れそうになった時、一筋の光がウラシマの前を横切った。

「 月光・七夜」

光は黒に当たり、呑み込まれる。さながらその黒は全てを呑み込むブラックホールのような。圧倒的力の前では、全てのモノは意味を為さない。

しかし、その小さな光は少女にとってすごく大きな意味を持っていた。金太郎とウラシマの後方、震えながら立っていた少女の周りには金色の球体が浮かんでいた。

「かぐや……」

「……正直ここで立っているのにもきついんです。今にも押し潰されそう、心臓を鷲掴みされる様な寒さに襲われて、直視するのも

怖い。でも……」

少女は俯いていた顔を上げる。その眼は、確かに見覚えのあるものだった。

「鬼丸さんを失った時の悲しみの方がもっと辛い。だから、私もやらせてもらいます」

「……ああ！」

金太郎が力いっぱい頷く。かぐやもそれに応えるかのようにほほ笑むと、月光が動き始めた。何度も見たその光る球体、幻想的な雰囲気醸し出すその中央に立ち、金太郎も再び手を掛けた。

そして 少女が姫に戻った瞬間、動かない人形は魔術師へと返り咲く。

「ふう、仕方ないね。ここでやらなくちゃ僕が悪役みたいじゃないか。全く、どうしてみんなそんなに無謀なことをやりたがるんだろうね」

「ウラシマ……」

「でも、そういうのは嫌いじゃないよ。微力ながらも協力させてもらいますか」

魔術師はニヤニヤ笑いながら、一步踏み出す。その一步が非常に頼りがいのあるものを感じられた。

「キンちゃん。その絶対は触れているだけでも危険だ。絶対に触れた瞬間、その異物を零にしようとする動きが働く。手が大変なことになっていないかい？」

…… 本当だ。ウラシマの言うとおり、自分の手は焦げたかのように

真つ黒に染まっていた。それを知覚した瞬間、金太郎は初めて痛みを感じた。なるほど、これは大変だ。

「危険だね。今から玉手箱でその運動を遅らせる。ついでにキンちゃん自身の時間も早めよう。そうすれば、まあ、何かしらの影響は起こるかもしれない」

「では私も……月光・望月を用いて結界にぶつけます。結界を消せるのは結界のみ。月光は元々ツクヨミ様の持ち物、もしかしたら効果があるかもしれません」

「おう、頼んだぜ、かぐや、ウラシマ！」

さあ、役者は揃った。舞台も万全、細工は流々。後は主役を取り戻すだけだ。

三人はその役割を果たすために動き始めた。

「うおおおおおおお！ 待ってるよ、鬼丸！」

金太郎は叫ぶ。その叫びが聞こえるか聞こえないかは彼にとっては関係のないことだった。

「ちつ……鬱陶しい。仲間なんか一番信じてねえのはオメエなのによ」

スサノウは本当に忌々しげに呟く。

今日の前にいる奴は一人だ。それなのに一人でいるのを否定する。今手の中にいる奴は孤独だ。それなのに皆がそれに集まってくる。

そんな矛盾を抱えた奴に、俺の目標を邪魔されてたまるか。俺の目標、そう、目標だ。願望と言っても差し支えない。

スサノウの願望、それはたった一つ、世界を救うことに他ならない。姉さんが残したたった一つの大事な世界。それをこんなわけの分からない奴らの為に壊させてたまるものか。

スサノウは魔術を実行するために、歩き出す。そしてあることに気が付いた。

必要な魔術の式が壊されていた。

「なるほど、派手な割に威力がねえと思ったのはそのせいか……」

月の神の使いが地上に降り立ったとき先ほどの攻撃を見たことがある。七色の綺麗な閃光、あらゆる魔力を扱える鬼丸独自の技だろう。その威力は言うに及ばず、あれから成長した鬼丸のモノなら恐ろしいモノになっているだろうと覚悟していた。

しかし、思ったより威力がないと思ったのはそのせいか、と納得した。式を壊すためにその何割かを使ったとなれば、あの威力も道理であろう。

それに加えて、生じた爆発を見事に結界の方に充てるように工夫してある。少しでも結界を殺すための努力だろう。

坂田金太郎、か……。

「でも悪いな。こんな術式、すぐに組めるんだよ」

鬼丸の下に式が瞬時に組まれる。こんな複雑な式を瞬時に組むのも流石は神というところか。スサノウは信託の如く、重く詠唱を唱えた。

これで、ようやく叶う。

「三貴子が一柱、スサノウノミコトが問う。汝が真名を答えよ」

「わ……私の、真……名……?」

「そつだ。お前の真名だ。答える」  
「私の、真名、は……」

これで俺の理想、姉さんの願望が叶う……！

「和」

時間が止まった気がした。

今こいつは何と言った。自分のことを何と言ったか。ぐるぐる  
と走馬灯の如く、思考が駆け巡った。それでも、こいつの言っ  
たことが理解できなかつた。

「私は“和”。皆を繋ぎ止める、一筋の糸……」

「な、何言つてやがる……。お前の真名はそんなもんじゃねえ！  
もう一度答えろ、お前の真名は何だ!？」

「だから和だと言っているでしょう！ 何度も言わせない  
てください」

途端、鬼丸が動きだし式から脱出する。先ほどとは打って変わって、  
自分の意志で物を言つて動いている。  
呆然としているスサにはそれを止める術などなかつた。

「ああ……。辛い。これが本質を理解させるですか。頭を無茶苦茶に  
かき回されたみたい。気持ち悪い……」

鬼丸が本当に辛そうに呟く。そしてもう二度とあんなことは御免だ、  
と言いたげにスサノウを睨みつけた。

対するスサは未だに呆然としていた。高く積んでいたおもちゃが他  
人に壊されたかのように呆然と立ちずさんでいる。今、子供のよう  
に泣きじゃくれたならばどんなに楽なことか。



そんなことも出来ないスサは思考する。どうして失敗したのか、どうして鬼丸の本質が違うものなのかと。

こいつは違う奴だった……？

違う、そんなことはあり得ない。俺は間違っはすなどないのだから間違っているのならば、そう、それはこいつの方だ。

「そうだ、俺は間違っていない。間違っているのはこいつの方だ。死という本質を理解させるためには一度死というものを体験させなければならぬ。出来れば無傷で、と思って俺が甘かったんだな。そうだ！　そうに違いない。そうでなければこいつの本質が違うわけがない！」

はあ、と鬼丸はため息をつく。

目の前の神はこんなにも愚かなモノだったのだろうか。まるでこれでは子供だ。自分の都合の悪いことは認めたがらない、ただの子供。しかしそれは同時に厄介ごとである。力を持った子供は何をしでかすか分からない。おそらく、あの剣には自分を殺すのに十分な力が堆積していることだろう。

スサは、力の限りそれを振るった。

「一遍死にさらせ！」

これまで見たどの力より強い波動が放たれる。多分あれに当たったら死ぬだろうな、と鬼丸は冷静に考えていた。

スサノウは強い。たった一人で、自分の理想を叶えようとしている。私たちはそんなこと出来ないから、彼に敵うはずもない。

でも、負けるわけにはいかない。早くみんなの元に帰らなくちゃいけないから。だから、少しだけ、ほんの少しだけ力を貸してください。

「……Cross Over」

自分は糸。皆を繋ぎ止める細く脆い糸。こんなに脆いモノだけど、それにすがって生きていくしかない。

しかし、それでもいいじゃないか、と鬼丸は思う。だって私たちは一人じゃこんなにも弱くて、一人じゃ生きていけないのだから。

「なっ……？」

衝撃を放ったスサはこれまた呆然としていた。予定では、鬼丸はすでに塵と化し自分の手によって正しく結末を迎えているはずだったが、現実はずう。あの金色の球体は何だ。あの力は何だ。あの美しいモノは何だ。

『月光・望月』

確かに姿形は鬼丸だ。間違いない。いくら自分でも、殺し合ってきた奴を見間違えるほど堕ちてはいない。しかしそれと同時にあれは鬼丸ではないと、直感がそう告げていた。

一本にまとめていた彼の髪は広がり、まるで女性のモノのように黒く長く美しい。というか女そのものだ。彼はこんなにも、女性らしくあっただろうか。

その双眼は真っ直ぐと、スサを見つめている。強く真っ直ぐに、誰にも曲げられない意志と共に。

と、ここでようやく中の人。が物事の異常性に気が付いたようだった。

『鬼丸さん？ 鬼丸さんがどうして私の中にいるんですか？』

逆です、かぐや。貴方が私の中にいるんですよ

「ええ！？ どういうことですか？」

まあ、そこんところは置いときまして……かぐや、取り敢えず目の前の赤髪を倒しますよ

鬼丸の視線の先にいる人物を見て、驚く。赤い、燃えるような髪を掻き毟っている人物、あれこそが事件の元凶にして、自分の恐怖の対象。

「あれが……スサ」

ええ、でも恐れることはありません。貴方が倒れそうならば、私が支えます。貴方の震えが止まらないのならば、私がその手を握ります。怖がらないで。私がついてますから

そう言った瞬間、今まで現実を把握しきれなかったスサノウが動き出す。動き出したのはいいが、それほど納得できていないようだった。

「くっそ、どうなってやがる！？ それは姉ちゃんがどこぞの娘にくれた宝具じゃねえか！ どうして鬼丸童子がそれを持ってんだ？」  
……煩い。そんなの、私だからに決まっていますでしょう

……そうだ。恐れることなど何もない。鬼丸がついていてくれるのだ。カナモリが地上に降り立った時、そう誓ってくれた。

恐れる必要など、何もない！

「私の名前は四方院かぐや。月のお姫様です。悉く私の前に平伏しなさい！」

「……その言い方！ やっぱりお前、ツクヨミ姉ちゃんの……。は、姉ちゃんにしては傲慢チキチキのじゃじゃ馬娘が。おしとやかさ

だけは受け取らなかったのか？」

『黙りなさい！ 月光・十六夜』

鬼丸がデザートイーグルを構えると同時に、その周りに十五個の光る球体が現れる。

その数はいつもの倍以上、一つ一つの輝きも増しているようだった。引き金を引き、放つ。十六個の直線が、悉くスサノウに向かっていった。

「は……！」

七個が十五個に増えようが、十五個が百個に増えようが関係はない。スサノウは身を翻し、その光の閃光をかわし近づいていく。ただ、目の前のあつてはならない存在を消すために。

「どうしてこうなっているのか、どうしてこんな風になっているかは分からねえ……。だがな、俺の果たすべき目標は変わらない。俺はただ修正するだけ。邪魔する奴は皆消え失せろ、十束！」

接近戦ならばこちらにも分がある、そう思いスサノウは鬼丸との間合いを詰めた。そのまま衝撃は彼の首を斬り落とすはずだった。

確かに、先程までの鬼丸ならば接近戦は苦手だろう。鬼丸も中の人も、接近戦は避けるべき間合いだからだ。しかし、この時スサノウは知らなかった。スサノウと匹敵するほどの、接近戦専門の破壊者と鬼丸が繋がっていることに。

『ちつ……言っただよな。誰もアタシを起こさなくて。言っただよな、アア！？』

剣が寸でのところで止められている。それが素手で止められている

ことに気が付くのは、そう長い時間はかからなかった。

赤い眼をしたその鬼丸はそのまま、剣と共にスサノウを放り投げる。まるで巨人の一振りのような力に抗うことも出来ず、スサノウは吹っ飛ばされた。

その鬼丸は気怠そうに首を回す。死神じみたそんな彼は、自分の体に悪態をつく。

『くっそ、体が上手く動かねえじゃねえか。まるで子供の頃に戻ったみたい……。あれ、アタシ、こんなにも小さかったっけ？』

小さいとは一言余計ですね。鬼の体がそんなに不満ですか？

『その声は……よ、鬼っ子』

軽く、この異常性を無視して中の人は鬼丸に挨拶をする。まあ、思考を共有している今、その挨拶が意味を為すかは微妙だが。

キョウ。今はどういう状況になっているかは説明を後にして……ただ一つ分かることがあります。それは貴方の安眠を阻害したのは目の前の赤髪の男です

う、嘘ついた　　とスサノウは叫びたが、それより早く中の人は納得してしまった。

『……じゃあ、あいつをどうしまつても構わないんだな？』

ええ、もちろん

『ははっ、それはいい。ちょうど行き場のないこの怒りをぶつける相手を探してたんだよ。だからさ　　全力で殺すけど別にいいよな』

その口がニタツと嗤う。そしてその腕を振るったかと思うと、その腕から黒い何かが溢れ出してきた。日本刀の形をした、しかし刀と

はかけ離れた黒い何か。  
はすぐさま理解できた。

それが無であることは、スサノウ

「消え去れえええええ

！」

「ぐ……！」

吹き飛ばされ広がった間合いが一瞬で詰められる。鬼の爪と、無の刀、おおよそ鬼丸らしくない戦い方にスサノウは防ぐのに精いっぱいだった。

血のように赤い眼をした鬼丸はさらに加速していく。

「オラ、オラ、オラ、オラ、オラ、オラオラオラオラオラオラオラアアアアアアア！」

ついに足まで加え、スサノウを攻め立てる。鬼の衝撃がスサノウのガードを超えて襲い掛かる。しかし、一番恐ろしいのはあの刀だ。存在しているだけで、この注連縄セカイを消そうとしている。圧倒的無の前では絶対も零に等しいということか。

マチガイナク、ケサレル……。

悍ましい結末を想像して、スサノウはすぐに後方に跳んで退避した。そんな間合い、今の彼ならばすぐに詰めて攻め立てるはずだった。

……中の人の睡眠が十分だったらの話だが。

「ああ、もう無理。眠い。バトンタッチだ、」

そんなこと言って、後ろに倒れこもつとする。それを受け止めたのは、他でもなく、別の鬼丸であった。

「はいはい。随分自分勝手だな、桃さんは。……ふむ、みんなと思考を共有する力、と言ったところか。今頃僕の本当の体はどうなっ

ているだろっね』

ニヤニヤ笑いながら、鬼丸はそう言う。微妙に青みかかったその長い髪を鬱陶しさそうに一つにまとめると、目の前で息を荒げている人物を見た。

……これがスサ。思ったよりも貧相だな、とそんな失礼なことを思っていた。

ウラシマ、今は何がどうなっているかの説明は後です。目の前の敵を倒すことだけに集中してください

『オツケー。僕はこういう奇跡に関しては専門外だからね。別に何の興味もないや。それよりも鬼の体に入れたということの方が興味深い。いろいろと実験たたくわさせてもらっよ。玉手箱』

鬼丸が手を合わせると、目の前に黒い漆塗りをした箱が現れる。

まずい、あの宝具はある意味一番ヤバイ……。

スサがそう思った時にはもう遅かった。ニヤニヤ笑いながら、鬼丸は詠唱する。

『鬼、ウラシマ竜胆が問う。答えよ、其は何ぞ』

【我が名は玉手箱、全てを呑みこむ大喰らい】

低く、重い言葉が聞こえたと思うと、スサノウの周りには水球が現れる。ポツリ、ポツリと雨粒のような無数のそれはいつの間にか自分を取り囲んでいる。

キラキラと輝きながら、一斉に襲い掛かった。

「！」

『あはは、これは面白い。まさか神の時間さえ操れるとは、僕としても興味が絶えないよ』

そう言つて、また何処からともなく水球が現れる。いくらスサとはいえど、予測後の後方からの攻撃はかわすことは出来ない。おかげで何発か被弾してしまった。

その様子にカラカラ笑っている鬼丸を睨みつけると、その鬼丸はすぐに逃げ出した。酷く侮蔑された、惨めな気持ちになる。

『さあ、前座は済んだ。主役の登場をお楽しみに』

大げさな身振りで振る舞うと、鬼丸の中から入っていたモノが消えてく。スサが気付いた時には鬼丸は元の鬼丸に戻っていた。

「何が……何が起こっている？ 鬼丸の本質は死の中にある。死とはすなわち虚無。全てを無くすならば合点いくが、全ての有を孕むような、そんなものは持ちえないはずだ。ならば、どうして、どうして、どうして……」

「……確かに私は無の中にいたかもしれない。どうしようもなく、暗い暗い闇の底の中で生まれたかもしれない」

……お父さん、助け……て……。

今でも鬼丸の脳裏をかすめるのはあの惨劇だ。誰にも語られない、鬼丸しか知らない惨劇。あれが始まりと言えば、そうなるかもしれない。しかし……。

「しかし、そこから私は引き上げられたんです。地獄に垂らされた一本の蜘蛛の糸のように、とても頼りなく儂いモノに。その頼りないモノをたどって私はようやくここにいます。皆と一緒にいることが出来る。皆がいるから今の私がいるんです。そして、一番初めに私に出会ってくれたあの優しい退魔師には、感謝しています」

「坂田金太郎か……。あり得ん。そんなことが許されてたまるか……」



…。許されるはずがない。俺が許すと思うなよ！」

スサノウの戦意は衰えることを知らない。はっきり言って彼の体に残るダメージなどごくわずかなのだ。流石にあの無はヤバいと感じたが、それ以外なら殴られようが蹴られようが負ける気がしない。どのみち鬼丸はこの絶対から逃げ出すことは出来ないのだ。

今度こそ殺す、そうスサノウは駆け出したのと同時に、満を持して鬼丸はその名を叫んだ。

「Cross Over                      キンタ！」

「ウオオオオオオオオ！」

パン、という破裂音と共に今までこの世界を覆っていた黒が晴れる。空を見れば、東の空が仄かに明るみを取り戻していた。そして目の前にいるのは、金色の優しい退魔師。

「退魔師坂田金太郎、ここに見参！ 遅れて悪かったな、鬼丸！」

「                      全く。遅いですよ、キンタ」

鬼丸がほほ笑んで言う。ここにようやく、無敵のコンビは揃ったのだった。

「バカな……絶対が、破られた、だと……？」

あり得ない、ただそれだけが彼の思考を支配していた。あり得ない、あり得ない、あり得ない、それ以外考えることも出来ない。

そんな木偶の坊になっている彼に向けて、金太郎はビシツと指を指す。

「やい、スサノウ。よくも俺の仲間を傷つけてくれたな。お前が世

界を修正するとかどうでもいいんだ。ただ俺の仲間を苦しめるのだけは許せねえ！ 神は神らしく、俺たちが世界を救う様を傍観してればいいんだ」

「だ、と……？ 一人じゃ何にも出来ないガキが……偉そうな口きいてんじやねえぞ！」

「はん、オメエこそ一人じゃ何にも出来ねえじゃねえか。言っとくけど今日の俺は今までの俺とは一味違うぜ。何たって俺には」

「私がついていますから」

「そういうこつた。俺たちは一人では何も出来ないが、二人揃えば無敵だ。原書オリジンにでも書き込んでけ！」

「そんなバカげたこと……許されるか ！」

スサノウが激昂する。もしも一人ならば、その叫び声だけで薙ぎ倒されていただろう。

しかし今は違う。鬼丸には金太郎がいて、金太郎には鬼丸がいる。二人揃えば怖いモノはない、無敵のコンビは同時に飛び出した。

「Second Drive Start！」

金太郎が直進する。結界の力で強化された金太郎の速さはスサノウと同等、そして力だけなら彼を上回っていた。一合、二合と金太郎とスサノウがぶつかり合う。

もちろん、それだけではスサノウは倒せない。二人合わせてようやく倒せるのだ。

「我に宿りしは滅……放て」

死角からの零距离射撃、それをかわしたところに再び紫電が振り下ろされる。それと打ち合うと銃弾が再び襲い掛かる。

まるで一心同体だ、とスサノウは舌打ちする。こんな勝負、やって

られっか！

「 八雲！」

とうとう面倒くさくなった彼は八方を吹き飛ばした。

八雲は下から衝撃を巻き上げる技だ。竜巻と言えば話は早いかもしれない。この攻撃は防いだところで意味はない。体ごと巻き上げられ、宙に浮かんでしまえば防ぐこともかわすことも出来ない。

そう言う意味では八雲は最高の防御とも、最高の崩し技とも言えた。今頃二人揃って宙を舞っているところだろう。そんな二人に止めを刺すべく、スサノウは空を見た。空には、薄れゆく月影が見えた。

いない！？

「雷鳴……」

「Cross Over……」

近くで声がする。見ると、鬼丸と金太郎が自分の懐に潜りこんでいる。そして彼らの周りには電撃が走っていた。

なるほど、と納得する。結界を張れば、確かに衝撃波さえ防げるだろう。まさか自分が結界によって負けるなど、思ってもみなかった。なんて、未熟だ……。

「 激動！」

「 Full Burst！」

二人は同時に放つ。何度も見た、彼らにとっていつも通りの決着の仕方だった。



## 最終話：誰も知らない、彼らだけの御伽話

……うるさい。

おっと、いけない。私としたことがそんな荒んだ言葉を使ってしまった。いけない、いけない。女たる者、優雅でなければ。

それにしても外が騒がしい。何かあったのかしら、と思ってみれば見知った雰囲気を感じられるではありませんか。空から来る金色の彼女、ツクヨミちゃんが地上に降りてくるなんて珍しい。

そして……赤色のこの雰囲気。あのならず者が地上に来るなんて、宝くじが当たるよりも珍しいではありませんか。

……あのならず者が“良いこと”をするのはそれよりもさらに珍しいこと。どうせ今回もろくでもないことをやっているでしょう。鬱陶しい。

……いけない。またこんな言葉を使ってしまった。それもこれもあのならず者のせいだ。さて、どうしてくれようか。

とりあえず、長年引き籠っていたこの部屋の扉に手を掛けた。

全力を出し切った彼らは同時に膝をついた。

無理もない。鬼丸は度重なる魔力の浪費によって彼の力は空っぽになっていく。金太郎は絶対にいつまでも対立していた影響か、もう全身に力が入らなかつた。

これ以上戦うのは不可能、明らかにそう思われた。

金太郎は願望を含めて、鬼丸に聞いた。

「もう、大丈夫だよな……？」

「どうでしょう……。相手は何と言っても神ですからね。この程度で倒れるかどうか……」

「マジかよ……」

金太郎はげんなりと、呟く。

これ以上戦いたくはない、もっと正確に言えばもう戦えない。空気読んでくれないかな、と金太郎は思っていた。

しかし、嫌な予感嫌な現実を引き寄せるもの、土ぼこりの中から瓦礫が吹っ飛んだ。

「……よう、鬼丸童子、坂田金太郎。また会ったな」

「ああ、もう会いたくないかったけどな」

ははっ、と互いに笑い合う。しかし状況は最悪だ。敵はまだ、傷一つついていない。

自分たちの全力を以てこの程度、となれば目の前の化け物を倒すにはどれだけの兵器を持ってこればよいのだろうか。少なくとも、自分たちだけでは明らかに不十分だ。

勝てるわけがない。

「正直、お前らには驚いているんだ。まさかたかが退魔師と鬼の二人にここまでやられるとは思ってもみなかった。でもさ、俺、正直やってられねえんだわ。これで終わりにしよう」

スサノウはため息を吐きながら、剣を構える。今まで鞘から抜かずとも鬼丸を圧倒してきたその剣、そのヤバさはそれを知らない鬼丸ですら分かる。

しかし、そのヤバさに一番に反応したのはほかでもなく、かぐやであつた。

「それは……!?!」

「やはりお前は知っているか、四方院かぐや。そうだよ、これは俺の宝具、天叢雲剣だよ」

「アマノ……」

「ムラクモノツルギ……?」

鬼丸と金太郎は口を揃えて疑問を口にする。そんな名前、二人とも聞いたことがなかったからだ。ウラシマですら、眉を顰めて腕を組んでいる。この場でその剣を知っているのはかぐやとスサノウだけだ。

スサノウはどこか誇らしげに、この分からず屋達に説明してやることにした。

「今では、“草薙の剣”と言われているか? まあ、いい。これはな、神話時代に作られた名刀だ。曰く、この剣はあらゆるモノを薙ぎ倒す力があると」

「っ!?!」

「もしかしたらこの国全部壊れちまうかもしれないねえな。ま、俺には関係ないことか」

子供じみたスサノウの笑いが、なんだかとても怖ろしい。背筋を冷たいモノに触れるらると思うと、金太郎の体は自然に動いていた。

「First Drive Set Up!」

「お前さ、そんなちっぽけな境界で止められると思う? 止めなければ注連縄ぐらい持って来い。ま、それでも足りないと思うけどな」

“絶対”ですら止められないとスサノウは言う。そんなもの、金太郎は止められるほど強くない。それでもなお、少しでも生き残ろうと結界を強めると同時に、鬼丸が一步ふみ出た。

「待つてください。貴方の目的は世界を救うこと。それならば何故自分の手で壊そうとするのですか？」

「ああ……。確かに。でも、もういいんだ。俺じゃ救えないんだ。だからリセットする。一度全てを作り直して零にする。だから、もうお別れだ」

だめだ、と鬼丸は諦めざるを得なかった。

今までのスサノウはまだ話の通じるところがあった。しかし、今のスサノウはダメだ。彼の眼からは光が消え、自分たちの死を見つめているのだから。

「薙ぎ払い零になれ。天叢雲……！」

「ねえ、貴方はこんなところで何やっているのかしら？」

振り下ろそうとした天叢雲剣が誰かに止められる。本来ならばこのような無礼、スサノウに対して許されるはずもない。

当然、スサノウは振り返り激昂しようとした。しかし、目の前に広がるのは見知った顔の満面の笑みであった。

「……へ？ ね、姉ちゃん……」

「ねえ、貴方はこんなところで何をしているのか私が聞いているのよ、スサノウ」

満面の笑みが、死を告げる宣告と化す。スサノウは確かにそう思われた。

ここから先はあまりにえぐいので、音声だけでお楽しみください。



「ちょ、姉ちゃん。これには訳が」

「言い訳は無用」

「ぐぼ、だ、だから聞いて」

「黙りなさい」

「がはっ！ ちょ、本当に」

「勸善懲悪」

「かは……」

「まだまだ終わらないわよ、私のお仕置きは」

「格ゲーみたい……」

「何がすごいつて全て笑顔でやっているのがすごい……」

「すごいハメかただ……」

「使った瞬間友達無くしそうですね……」

その一部始終を目の当りにして、鬼丸たちは固まるほかなかった。今まで自分たちの前に圧倒的強者として立っていたスサノウが、嘘のようにボコボコにされている。

それも突然現れた女の人によって。あんな華奢な体からどうやってそんな力が出るのだろうか……？ というより人間があんな風に動けるのかさえ疑問に思える。

あ、ブレンバスターだ……。

ウラシマの呟きと同時に、土煙と爆音が広がる。明らかに、決着のついた音だった。

「ふう、ま、ざっとこんなもんかしらね」

「……」

四人は絶句する。この女性はここまでやってきて汗一つしてないのだ。それどころか、その美しい髪をかきあげ、艶やかさまで見せている。

何だか今までやってきたことを否定された気分だった……。

「姉さん！」

宙から声が響く。その声が一番に反応したのは、かぐやであった。

「ツクヨミ様!？」

「あら、ツツちゃん。お久しぶり。貴方がこんなところに来るなんて珍しいわね。どうかしたのかしら？」

ツクヨミが地に下り立ち、その女性に向き合う。途中、愛しい娘同然の子から声がかかったが敢えて無視した。自分が再びこの地を踏んだのは、別の理由がある。

しかしその理由は、目の前に女性によって既に終わった後であった。

「ああ……やはり間に合いませんでしたか。こうなる前に来たかったのですが……」

「このこと？ 別に気にする必要なんてないじゃない。こんなぼる屑」

地に転がっているスサノウを持ち上げ、“これ”扱いをするその女性。それを見て、ツクヨミはため息を吐かざるを得なかった。

……確かにそれは、ぼる屑同然だ。知らない人がこれを見て、誰が三貴子の一柱だと思っただろうか。

ツクヨミは再び、大きくため息を吐いた。

「あ、あの、ツクヨミ様。この方はどちらで……?」

「ああ、かぐやちゃん。……そうだった。貴方は会ったことはなかったわね。この人は私の姉さん、天照大御神よ」  
「どうぞ、よろしく」

ヒラヒラ手を振って、その女性は親しみの籠った笑みを鬼丸たちに向ける。

……ああ、うん。状況を確認しよう。目の前にいる女性の一人はツクヨミノミコト、紛れもない三貴子の一柱だ。そして地に倒れている男、これも疑わしいが三貴子の一柱。そして目の前のこの人……いやいや、このお方は太陽神であらせられるアマテラス……。

「うわー！ ウラシマが倒れたー！」  
「かぐや……かぐや、ちよっと!？」

目の前の状況についていけなくなったウラシマは倒れ、あまりの驚きにかぐやは再びフリーズした。

だから言いたくなかったのだ、とツクヨミは人知れず後悔した。

「で、姉さんはどうして下界に？」  
「うーん。神はこの世界に深く干渉しちゃいけないじゃない？ でも私は高天原に戻りたくはない。この二つをどうやって両立するのが考えたとき、天岩戸で寝ているっていうのがベストだって気が付いたのよね」  
「……」

ツクヨミは、信じられないような目でアマテラスに訴えかけていた。

「やーね。そんな目で見ないですよ。そのお陰でスサノウのことを止められたんだから。これが世界に干渉して消されなくてよかったわ」

「もう十分干渉してますよね……」

つい、うっかり口を挟んでしまった鬼丸はすぐさま後悔した。

何しろ相手は三貴子の一柱、それも最高神である方だ。自分如きが話しかけていけないのは分かっている。分かっている、言っただけで自分が殴りつけたかった。

その声に気付き、アマテラスは振り返る。何をされてもいい、そういう覚悟はすでにできていた。

「うふふ、そうね」

予想は遥かに裏切る反応であった。アマテラスは微笑んで、鬼丸に同意した。

その母性的な笑みに、柄にもなく心臓が高鳴るのを自覚できた。

「鬼丸さん……?」

「……(ゾクッ!)」

……しかしその胸の高まりもすぐ収まった。無意識のうちにこちらを見つめるかぐやを見て、いつか彼女に殺されるのではないか、そんな有りもしない妄想を思い浮かべてしまった。

「う、うう……。だめだ、そいつらを許しちゃ……。原書オリジンのある通りに世界を運ばなくちゃ……」

「あら、まだそんな戯言を言える元気があったの、って……ん?」

アマテラスが何かに気が付く。眼を凝らし、スサノウの方をまじまじと見つめていた。

そしてようやく一つの結論を思い出した。

「あらやだ、それ私たちの日記じゃない」

『へ？』

「ああ、本当。姉さんが暇つぶしに書いてた妄想日記だわ」

「妄想日記とは失礼ね。未来日記よ、未来日記。懐かしいわ。私とツツちゃんと、それと貴方も一緒に書いたことあるじゃない。ああだ、こうだ言っつて、あの時は楽しかったわ。覚えていないの？」

「そっぴゃ、そんなこともあつたかもしれない……。スサノウの脳裏によぎるのは優しく微笑んでいる姉と、それよりも凄く深みがある嗤いを浮かべているもう一人の姉。その手に握られているのは目の前にある一冊の本。」

「そんな……じゃあなんで今までそれに書かれていたことに世界に従っていたんだ？」

「そんなの、ただの偶然でしょ」

スサノウの半ば絶望した嘆きを、端的にまとめるアマテラス。その笑みは、スサノウの記憶の中で最も優しく、綺麗であつた。

「いいじゃない、それでも。私たちが気まぐれで書いたお話と、またま同じ名前を持った主人公たちが同じ時代に現れて、偶然に彼らは出会つた。私たちが書いたこのお話はここで終わりだけれども、彼らのお話はまだまだ続く。それってすごく素敵なことじゃないかしら？」

三人は呆然と、アマテラスを見つめた。

鬼丸には信仰心なんて全くない。そもそも鬼なのだから、自分に利益になるようなツクヨミ様以外興味なかつた。

しかし、今ならわかる。こういう純粋なモノを目の当たりにして、信仰心なるものが生まれるということが。そして目の前のこの女性

は、本当に美しいということも。

「姉さん、そろそろ……」

「そうね。私も久しぶりに家に帰りたし、もうちょっとお仕置が必要だよだし」

「ひっ……！」

スサノウが再び震えだす。美しい花には棘がある、という言葉を出してしまった。

「じゃあね、鬼丸童子、坂田金太郎。縁があればまたお会いしましょう」

ヒラヒラ手を振りながら、アマテラスは何もないところに手を掛ける。

するとまるでドアのように空間が開き、三貴子達はその中の空間に入ってしまった。そのあり得ない光景を鬼丸と金太郎は最後まで見詰めていた。あの、美しい笑顔と共に。

「う、うん。今なんかすごい人が来てた気がしたんだけど……」

「あれ、ツクヨミ様は……？」

「かぐや、ウラシマ」

ようやく起き上がった二人に、鬼丸は声を掛ける。まさか自分からこんなことを言うとは思わなかった。しかし、少し綺麗になっている自分なら、こんなことを言っても神様は許してくれるだろう。

「帰りましょうか」

その提案に、三人はゆっくりと頷いた。

半年後。

「ちつ、滅茶苦茶寒いじゃねえか。誰だよ、こんな日に鬼ヶ島に行こうって言った奴は？」

「……ベタなようですが、キョウ様です」

犬が申し訳なさそうに、しかしはつきりと言う。その言葉を桃原キョウは無視していた。

毎度のことだからだ。鬼ヶ島に来る手段が“泳ぐ”という原始的な手段しかない彼らはこうして泳ぎ、そして毎回同じように寒がる。もつとも、以前はあった高波が消えただけでも僥倖といえよう。

とにかく、ここに来るまでも一苦勞なのだ。犬は素朴な疑問を口にした。

「それにしても毎日毎日来ることもないのでは？ このままでは風邪をひかれます」

「そういうわけにはいかねえよ。だって……」

「うわああああああ　　！」

その瞬間、悲鳴が辺りに響き渡る。

上を見上げると巨大な岩が、そしてその上には人影があった。その声から察するに、あの暗鬼とかいうバカだろう。

キョウはニヤリと嗤うと、ためらうことなくその岩を蹴り飛ばした。もちろん、上の鬼のことなど知ったこっちゃない。すぐに次の目標が見えていた。

「は、来たか！」

「よう、桃原キヨウ。そろそろ来る頃と思っていたぞ」

腕を組んでこちらを見下ろしているのはもちろん、幽鬼童子である。こんな仕業出来るのは彼女しかないし、何より彼女以外する理由がない。

幽鬼と桃原キヨウは互いを見て、嗤いあう。それだけで彼女たちにとっては十分だった。

「やはりアタシたちはこうじゃなくちゃな。笑顔でウフフとか、らしくねえわ。さあ、今日も殺り合おうぜ！」

「ふふっ……今日は負けねえぞ。何たって今日は栄鬼がついているんだからな！」  
「ども……」

小さい幽鬼の後ろには、今までいなかった栄鬼が立っている。なるほど、今回は二対一ということだ。……そんなの卑怯じゃないか。それならば、こっちにも考えがある。

「犬、お前も動け。全力でこいつらの相手をするぞ！」

「承知」

犬も構える。

これでようやく、準備は整ったというわけだ。

『勝負だ』

『！』

その掛け声とともに爆音が響き渡る。毎度のことだ。桃原キヨウと幽鬼が争い、戦い、互いを潰し合う。もはやそれが鬼ヶ島の日常となっている。きつとその日常はずっと続いていくのだろう。

気がすみまで、何度でも殺り合っつてやろうじゃねえか！



その爆音を傍聴しながら、鬼丸は海の見える崖に立っていた。眼前に広がるのは広大な青、鬼丸はそれを見つめていると、一人の部外者がそこに現れた。

「おい、鬼丸。こんなところでサボリかよ」

「……ええ、まあ、そんなところですよ。もう八割方の修復は幽鬼たちのおかげで終わっていますから」

……もつとも、幽鬼たちがいなければもうその作業は終わっていただろうが、という言葉で鬼丸は呑み込んだ。

「それにしても凄い音だな。またキョウたちか？」

「そうらしいですね。……なんかあの日から思考が共有されるようになってまして、繋がっている相手の居場所くらいならすぐ分かるようになってしまいました」

「なんかそれ、有難迷惑だな……」

あの奇跡の後、そういう弊害はいくつもあった。ウラシマの女性の好みが自分の頭の中に入ってきたり、キョウの破壊衝動が不意に自分に襲い掛かってきたり、一番恐ろしかったのはかぐやに自分の居場所を確実に知られてしまうことだ。プライベートなんてあったもんじゃない。

しかし、それも全て終わったことの証拠だ。それならば、全てを受け止めよう。

「終わったな……」

「ええ、終わりましたよ」

そう、もう鬼ヶ島を脅かすものはいない。全ては終わったのであつ

た。  
空は青い。澄み渡るような快晴で、こんなにも空は綺麗なモノだったのだろうか、という気持ちを鬼丸は抱いた。

「俺さ、お前に出会えて本当に良かったと思う。もしお前に出会ってなかったら、何をしたいか分からず彷徨っていたらうし、楓のこともある。お前らがいたからこそ、楓を……殺してやる事が出来た。お前のおかげで」  
「やめてください。その前に言っておかなければならないことがあります」

金太郎の続く言葉は、それ以上言わなくても分かっってしまう。分かっているからこそ、自分はその言葉を投げかけてもらう資格はない。

「……キンタ、私は貴方の父親を殺しました」

「ああ」

「何の迷いもなく、その存在を殺しました」

「ああ」

「ただ貴方を縛り付けるために、私は殺しました」

「……ああ」

金太郎はただ鬼丸の言葉に同意する。それは自分がどう思おうが、撤回し様子がない事実だからだ。

「ごめんなさい。私は大きな罪を犯した。償いきれないほどの、大きな罪を……。もちろん許してもらえとは思ってない。貴方の手で私を殺してしまっても構わない。本当に、ごめんなさい……」

鬼丸は頭を下げて、謝る。本当はこんなこと言いたくはなかった。自分の非など認めたくなかった。でも自分はそれをやらなくてはい

けない。謝って、キンタに詫びなければ。

「別にいいよ」

「え……？」

「俺さ、本当は分かってたんだ。親父が何か悪いことをやってるってこと。もしそれが楓に関わっているもんだったら、お前が殺さなくても俺が親父を殺してた。……でも、多分そうなってしまったら俺が耐えきれなかった。

だから、ありがとう。親父と俺を助けてくれて。本当に、感謝してる」

予想外の言葉に鬼丸は驚く。あまりの驚きで、自分の眼からは何故か水滴が流れ落ちてしまったではないか。みつともない。それを隠すように、俯いてなるべく気丈に振る舞った。

「……ち、父親を殺した相手を許すというんですか、貴方は……。

どれだけ、お人よしなんですか、まったく」

「おう、俺はお人よしだ。……兄さんには俺から言っておくよ。流石に帰る家をなくしてしまうのは怖いからよ」

そう言っつて金太郎はため息をつく。流石にあの優しい姉と会えないのはつらいし、鬼丸と兄がいがみ合っているのは見たくない。

そう言う金太郎の姿を見て、鬼丸の眼から流れ落ちる謎の水滴はようやく収まりを見せた。本当に、みつともない……。

「しかし貴方が許しても、私はその罪を背負います。私は、私を許しなどしない」

「鬼丸……」

「貴方の父親の役割、貴方の行く末を見守るのは親の仕事。ならば私はその役割を引き継ぎましょう。貴方の行く末を共に見守ります。

どこへ行くつもりね」

そう言っつて、鬼丸は笑う。これが自分の行く、たった一つの道。

「……ばっか！ 自分より年下のガキに見守られるほど、俺も甘くねえよ！」

「どうでしょう？ 私は貴方より年下ですが、精神年齢は劣っているとは思えませんよ」

なんだと、と金太郎は鬼丸を睨みつける。鬼丸は手を上げて降参のポーズを取った。

そうやって笑い合っていると、崖の下から子供のような声が掛けられた。

「おーい！ キンちゃん、鬼丸君。何やっているんだい？ 早く行くこつよ」

ウラシマと出会って俺は変わった。

自分には知りえないあらゆる知識をため込む奇怪な魔術師。結果をとことん突き詰める姿に、確かに自分は影響を受けたはずだ。

そして何だかんだで手を貸してくれる、この魔術師は本当にいい奴ということ俺が知っている。

「全く、何やっているんですか、二人して。私を待たせるなんて、ただじゃおきませんよ！」

かぐやと出会って私は変わった。

私は今まで一人だった。その私がたった一人、ひとめぼれをしたこの女性を決して手を放したりしない。彼女がいるから、私は限界を

超えていける。

……時には怖い、彼女の笑みにもきつと付き合っていていけるはずだ。そう、愛ゆえに。

「……行こうか、鬼丸」

「ええ、キンタ。私たちの旅は、ここからです」

二人は笑い合つて、同時に崖から飛び降りる。

私たちは私たちと出会つて変わった。

鬼丸は金太郎と、金太郎は鬼丸と交錯した時、確実に彼らの世界は変わったのだ。それは必然のような偶然で、彼らはそのお陰で今がある。二人一緒ならなんだって超えていける。だって二人は無敵だから。

見事にウラシマのボロ船に着地すると、ウラシマはニヤニヤしながら三人に問うた。

「さあ、何処に行こうか？ 童話の国？ 不思議の国？ それとも御伽の国を回るかい？」

「そんなの決まってるねえよ。まだ俺は半人前だ。取り敢えず世界のどこでもいいから見てみてえ」

「私は鬼丸さんがいるならどこでもいいですけど」

「ふふつ、みんならしい。では取り敢えず、前に向かって進みましょうか！」

これは誰も知らない、彼らだけの御伽話。

彼らは出会い、

彼らは巻き込まれ、

彼らはバラバラになつても、

まだまだ彼らの物語は終わらない。

でも、取り敢えずこの御伽話はここでおしまい。

彼らのこの後を聞いたことがあったら、きっとそれは別のお話……。

f i n

## 最終話：誰も知らない、彼らだけの御伽話（後書き）

あとがき

こんにちは。作者の Walter です。

無事、“誰も知らない御伽話”を完結させることができました。本当にありがとうございます。

この作品は自分の初めての作品でありまして、この作品の発端は一年前の文化祭の企画を考えているときの、友人とのバカ話をしてい出来ました。初めは「桃太郎が鬼を倒してしまつたようです」という、桃太郎を倒す段階で終わる予定なのですが、ここまで長くなるとは自分でも思つてもみませんでした。

初めのうちは本当に文章が拙く（今もですが）、皆様の暇つぶしにすらならなかつたと思います。それがだんだんと書いていくうちに自分が楽しくなつて、この作品を書いて本当に良かったと思います。さて、次回の作品ではこの小説の続きを書くか、はたまた別のものを書くか迷つているところですが、今はとりあえず自分の進路のことを優先させたいと思います。

すべてのことが落ちついて、また自分が成長できてたらまた小説を書かせていただきたいと思います。その時が来たら、またよろしくお願いいたします。

最後に、今までこの小説のことについて一緒に考えてくれた友人に感謝。そして皆様、ここまで読んでいただき本当にありがとうございます！





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5285i/>

---

誰も知らない御伽話

2011年1月15日19時44分発行